伯爵大隈重信主宰

新日本

世界十六大帝

再版

第参巻第壹號　東京冨山房發行

大正貳年一月一日發行（毎月一回一日發行）二十三日印刷納本
明治四十四年三月廿八日第三種郵便物認可

家庭用

として萬有の知識と[illegible]ち社交にたづさはる主人にとりては**最新知識の淵源**となり、一家の女王として家政の計算を掌どる主婦にとりては**日用技藝の顧問**となり、第二の國民となるべき子供等にとりては、隨時各種の**指導教訓**、**慰安**、**娛樂**を與ふる**教師たるべし**。もしそれ燈下此の書を繙いて、子女談話の資料に供し、子女の質問に答ふるに於いては**團欒の眞味**は滾々として竭くること無かるべし。其の軍人官吏たると、農工商たると、將た何人たるとを問はず、**幸福善良なる家庭**を作るべき要素は收めて本書に在り。

學校用

として日々**各種學科**の知識に接觸する諸學校に於いては、**敎師の參考用書**として、必ず本書一卷を準備せざる可からず。本書の一卷は優に**小圖書室標本室**の代用たるべければ也。普通の語學辭書になき一切の項目は詳しく本書に說明せられたれば也。今や社會の進步は駸々として一日も止む時なし。此の時に當りて本書の如き百科事典を備ふるは、各小學校に於いては殊に緊要の事たるべし。本書一卷の內容は數百卷の各科の書籍を集めたるに等しく、**學校の設備品**と言はんよりも、本書それ自身卽ち學校なりといふべし。

官衙會社用

として日人は萬能なる能はずして、專門以外の事項には全く無學なるを免れず。世は紛冗繁劇にして、日常熟知の事柄も、時に腦裡を脫し去るとあり。迂濶と不便とは事業の敵なり。**諸官衙**、**公衙**、**銀行**、**會社**、**商店**、**工場**等數多の人の協同して業務を營む場所にして本書を設備し置かんには、**座右の顧問**、**机上の良友**として全員一同は皆其の利便を受くべく、**時間の節約**、**業務の進捗**に於いては、知らず識らず**莫大の利益**を獲得すべし。『日本家庭百科事彙』は其の實に於いて亦社會百科事彙と稱すべきものなれば也。

旅店俱樂部用

として**旅店**、**割烹店**、**溫泉場**、**俱樂部**、**酒保**、**飛脚船**、**病院**等に百科事彙を備附くることは、歐米諸國の常習なり。單に酒食を備へ寢床を備ふるのみにては、其の設備未だ充分ならずと見倣され居るが如し。文明人に向つては**精神上の營養物**も亦必要缺く可からざるものなれば也。我國の溫泉宿、料理店等には間々講談物、小說本等一二三用意せるもの無きに非ざれども、**高等なる書籍**を備附くること尙甚だ稀なり。客人の目に觸るべき場所に本書を据置きて**隨時の便益**に供せんことは、最も進步せる待客の一方法といふべし。

要之、階級、職業、年輩の如何を問はず、個人としても團體としても、國民のある所、國旗の飜る所、『日本家庭百科事彙』は常に伴隨して、博識聰明なる友人、顧問、技師として、充分なる技能と忠告とを捧ぐべきなり。

東京神田 合資會社 富山房

（振替口座東京五〇一番）

（電話本局一〇三六、四一三〇、四四四二）

現本は全國各地各書店に有り就て御一覽を乞ふ

御注文の方は新日本廣告に據る旨御附記を乞ふ

最新式なる青年雜誌

生

新年號

本號に限 定價廿四錢

郵稅二錢五厘

有益記事如山

主筆 大町桂月

◉卷頭評論 **場末の國** 主筆 大町桂月

◉ローマ字欄 日本は世界の眞中 田丸博士

◉牛に關する雜話 芳賀矢一

◉日記の書き方 市島早大圖書館長

◉植物早咲きの新方法 柴田博士

◉樺太の珍らしき動物 川瀨博士

新年雜話

▲日章旗 松波博士

▲屠蘇 丹波博士

▲カルタの話 村上校長

▲曆 一戶博士

▲紙鳶 幸田博士

▲餅の々色 澤村博士

雜誌界未曾有 ─のサップルメント─ **世界名畫集**は ─岩村美術學校敎授の指導に成る。─ ─卅二頁の光澤紙四色刷の精美なるもの

◉**大懸賞**募集 新式書翰文

◉**健康增進法** 醫學博士 伊丹繁

◉**英文試驗最終日** 片山敎授

◉數學雜話 **兎と亀との競爭** 吉川博士

齡……八田博士

繪畫の鑑賞…岩村敎授

中央停車場の建築…辰野博士

サボナローラー…千頭淸臣

弓物語……大町主筆

◉**南洋に活動せる偉人** 文學博士 幣原坦

毎月一回一日發行一部十六錢郵稅一錢五厘三冊前金稅共五十一錢六冊同九十九錢十二冊同壹圓九十三錢海外郵稅十錢

發行所 東京神田 合資會社 富山房 振替口座（一五一番）

尚ほ本書第一版が、如何なる方面に利用せられつゝあるかを記せんに、各家庭は言ふに及ばず、官衙、銀行、會社、學校、倶樂部、商店、役場、旅店、軍艦、汽船等、全社會の各階級に亙り、實に博識聰明なる友人、顧問、技師として、常に**十分なる忠言と技能**とを捧げつゝあるを見る。殊に從來一册の備本だに無かりし各種工場に多數需用せられ、婦人に取りては、**嫁入道具**として、最も重要視せられ、鏡臺と共に第一に推さるゝに至りたる等、一般社會が書籍を尊貴するに至りたる結果なりと雖も、亦本書の眞價が、普く滿天下に認められたるに由らずんば非ず。

金錢の善用と本書の價値

一粒の麥も地に蒔けば數萬粒となる。金錢の善用亦此の如し。元旦より大晦日まで、座敷に於いても臺所に於いても、主人にも主婦にも、老人にも子供にも、常に用ひられ永久に重寶がられて、一家の控柱ともなるべき本書の爲に、些少の金錢を投ずるは實に**善用中の善用也**。愛兒の哺育は如何にすべきか、正月用料理は如何に作るべきか、感冒の手當は如何、和洋婚禮の儀式は如何、土耳古、ブルガリヤ、セルビヤ、蒙古とは如何なる國か、近く開通せんとするパナマ運河は如何、軍備は如何、國債は如何、選擧法は如何、單に是等數項目の知識を得るも、既に**本書一部の價に餘るべし**。況や大小三萬項目悉く有用なる知識と常識との結晶にして、萬家萬人の爲に最も親切なる相談相手たるをや。この尊敬すべき相談相手は、今や一夕の宴會費、一枚の肩掛代にも足らざる僅少の特價を以て、諸賢の面前に來らんとす。幸に**實物を一見**せられよ。本書の價値は、本書自身が最も能辯に説明するならんと信ず。

極彩色石版、三色版、光澤寫眞版等絢爛壯麗眼を眩しむるものあり、加ふるに一千餘個の精巧なる木版あり、圖畫のみにても宛然たる一大畫譜なり。

新日本第參巻第壹號目次

大正二年一月一日發行

新年附錄　世界十六大帝

大正二年一月一日發行

大隈重信
柳太郎
秀雄
重信

松英義
村秀松
木翼
野正剛
沼淑郎
藤篤太郎
城學人
稻里。青山霞村

御注文の方は『日本新聞』廣告に依る旨御附記を乞ふ

紳士書齋の權威

漢文學の一大寶庫

（正編十二冊完成 續刊六冊（內二冊既成）正價各金貳圓五十錢）

萬世不朽之世界的經典

校訂註釋者 文學博士星野恒先生・文學
先生・高等學校教授島田

漢文大系續刊六冊書目

第十三卷	第十四卷	第十五卷	續刊	續刊	續刊
列子・七書	墨子 間詁附戶崎允明著『墨子考』	荀子 集解附增注	易經 周易經翼通解附王注	禮記 鄭注	文章軌範 海保漁村註 古詩賞析 島田篁村補
既成三版	新刊	二月發行	紙數各編八百乃至一千頁 第十六卷以下隔月一冊ツヽ刊行		

正編十二冊

重野、三島、竹添、星野、

(一)	(二)	(三四)	(五)	(六七)
安井息軒 四書 全一冊	古文眞寶後集 三體詩、唐詩選 全一冊	八家文 全二冊	十八史略、小學、孝經、弟子職 全一冊	史記列傳 附年表 全二冊

原本十九種二
總紙數一萬

最短期間特價販賣

各冊 特價一圓八十錢
送料內地一冊十六錢 臺樺卅五錢鮮支四十錢

續刊全六冊 金拾圓

續刊購讀者に限り 正編十二冊 特價廿五圓（送料別要）

曩に**本大系**十二卷を完成するや滿天下の紳士諸君は之を備へざれば安んぜざるもの丶如く發賣部數は無慮**二十八萬**冊に達せり。今回の續刊六冊は正編に漏れたるを補ひて**五經**を完本とし、子類と兵書とを加へ詩文の粹を增し正續相俟て大系の名實を完からしむ各卷の註疏は悉く代表的原本に據り何れも容易に得難き珍本なるが上に現代五碩學の嚴密なる校訂を以てし平明親切なる國字頭註をも加へて一般人士の誦讀に適せしめたり。從來の漢籍が卷帙浩澣容積尨大のため各自の所藏に適せざりしが本大系は場所を取らず散逸もせず整然たる體形は金光燦然たる金クロースに裝はれて最も壯嚴なる書齋隨一の珍寶たるべし。

御注文の方は『日本新聞』廣告に據る旨御附記を乞ふ

壯嚴無比の金裝本

博士服部宇之吉先生・學習院教授小柳司氣太
鈞一先生・帝國大學文科大學教授岡田正之先生

內容見本 往復葉書にて御申越次第進呈す

萬戶必備の代表的典籍

服部諸碩學校訂 完成書目

(八)	(九)	(十一)	(十二)
老子 老子翼 莊子 莊子翼 全一冊	韓非子 太田全齋著韓非子翼毳 全一冊	春秋左氏會箋 全二冊	詩經、書經 全一冊

百七十餘卷
六百頁

東京神田 合資會社 **富山房** 振替口座五〇一番 電話本局一〇三六

賣捌所 全國各地書店

丸山晩霞氏筆

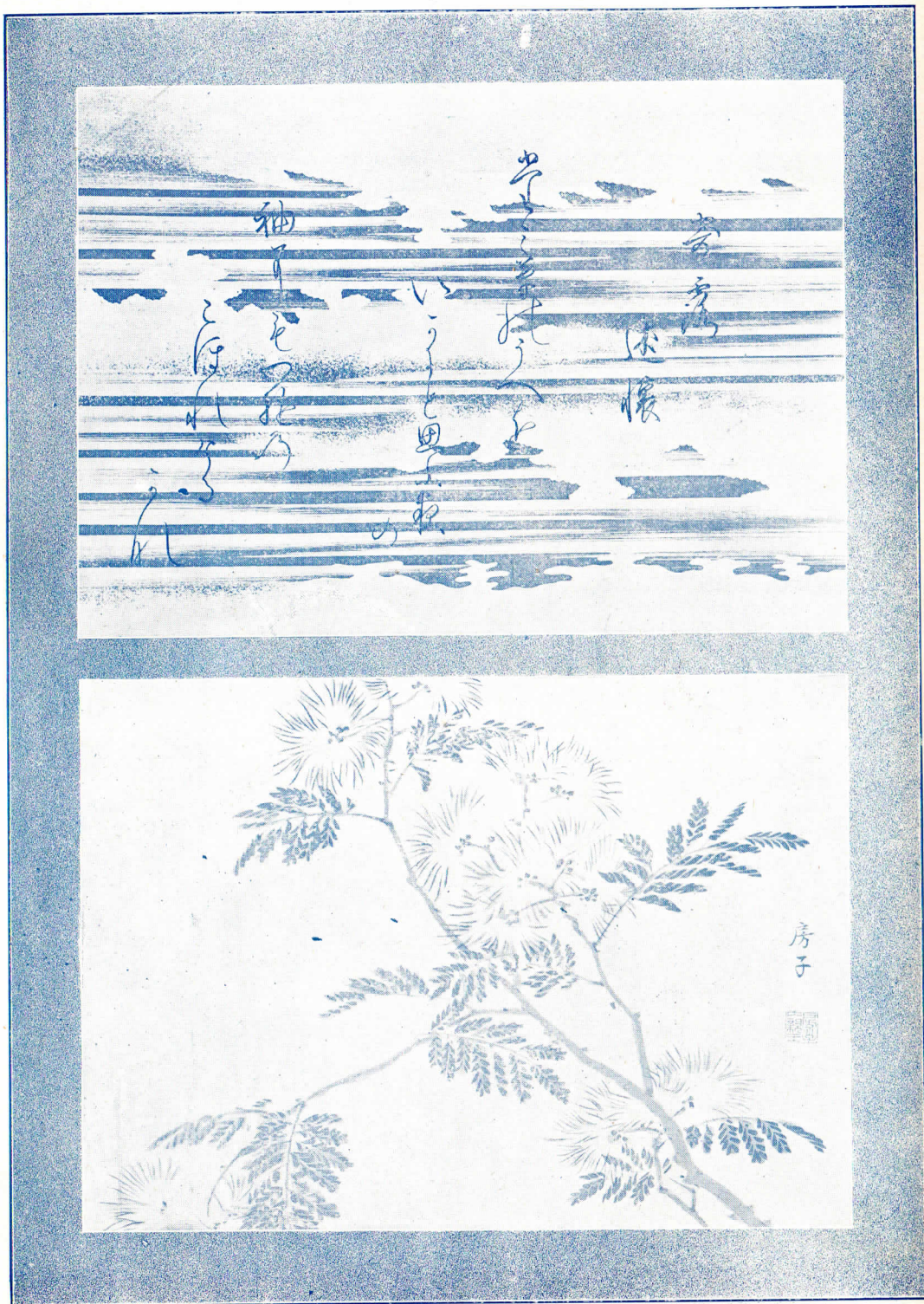
早春（テエムス河岸の風景）

野路の朝
—丑年に因みて—

(今尾掬翠氏寄)

臺灣日日新報

天皇陛下

卓絶ナル
呼吸器病新藥
專賣
レスピラチン
特許
從來結核病ニ對シ公認セラレタル「クレオソート」ヨリ一新誘導體ヲ化學的ニ集成シタル最モ嶄新卓絶ノ藥劑ニシテ各種ノ呼吸器疾患例之肺結核、格魯布性肺炎、加答兒性肺炎、慢性氣管支炎、急性氣管支炎、流行性感冒、喘息、百日咳等ニ適應シ祛痰ノ奏効確實ニシテ痼疾ノ咳嗽ニハ根治的藥劑トシテ顯著ノ効驗アリ殊ニ肺結核ノ治療藥劑トシテ卓絶ナル價値ヲ有ス
注意 容器ハ百瓦五十瓦廿瓦十瓦入ノ外特ニ膠嚢廿一個入十個入ノモノアリ
當所ハ一般化學ノ研究鑑定ノ依頼ニ應ズ
◎本劑ノ説明書ハ御申越次第無料送呈ス
◎本劑ハ全國到ル處ノ藥舗ニ取次販賣セルニ付便宜最寄ニテ御購求アリタシ
新藥
ヨーチシン
當所製品トシテ發賣スル新藥「ヨチシン」ハ「チオシナミン」ニ沃度ヲ作用セシメテ製出セル一種ノ「ヨード」ノ有機鹽基化合体ニシテ「ヨード」ノ五十二%ヲ含有ス其臨床的價値ハ大阪醫學校病院皮膚病科教授億川氏ノ實驗報告ニ示ス如ク狹窄症、筋萎縮ノ瘢痕及結締織瘢痕ニ使用シ全種族藥物ニ比較シ優秀ナル奏効ヲ證シ殊ニ第三期梅毒ニ「サルバルサン」「サリチール酸汞」、沃度カリ」等ヲ投劑シ治療シ易カラザル患者ニ「ヨチシン」ノ注射ヲ行ヒ奏効ノ顯著ナルヲ賞讃セラレシハ吾人ノ期待セル「ヨード」ノ特有ナル醫治的効價ト「チオシナミン」ノ治療的價値ト相待チ其機轉ヲ催進シ優秀ナル醫治効價ノ希望ヲ確證セラレタルモノナリ從テ本新藥ハ「チオシナミン」及「フヰブロリヂン」等ノ具有スル臨床使用上ノ缺完ヲ排除シテ良好ナラシメ治療藥劑トシテ確ニ卓絶ナル價値ヲ有ス
注意 容器ハ一瓦、五瓦、十瓦入、外用塗布劑トシテ軟膏一号入アリ
合資會社 喜多尾化学研究所
大阪市北區東堀川町 振替口座大阪六〇九八番

皇后陛下御親筆

竹田宮妃昌子内親王殿下御親筆

皇太后陛下御親筆

北白川宮妃房子内親王殿下御親筆

皇太子殿下

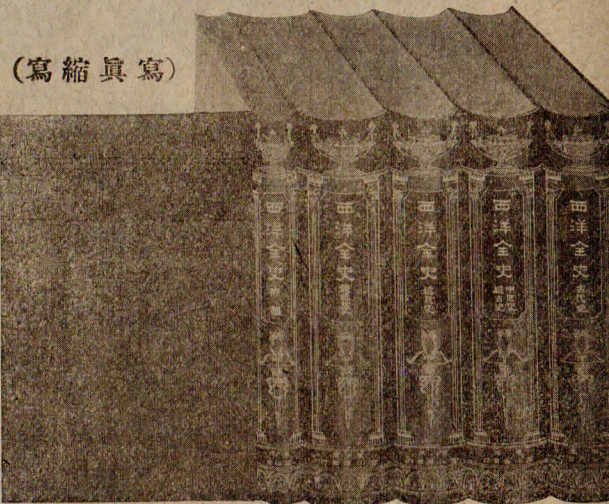
永久に尊重せらるべき

文學博士瀬川

特賣の特權は僅かに九十部限

三千部の特價部數は期間を待たずして賣切れとなり其後尙頻繁なる御申込絶へざるにより更に一千部を增刷せり

此部數も最早剩す所僅に九十部に過ぎず。『今新日本』の讀者のみに限り之を提供し特に切取票を添へて優先の御申込に應ずべし。

五千年間人類活動の總記錄は何人に向ても必要缺く可らざる活敎訓たり。叙述精透、理義明確、行るに平明暢達の文辭を以てせる本書は、邦人に適切なる事項に全力を注ぎ、特に近世史に於て詳論細説到らざるなく、如炬の史眼は上下五千年間の史乘に渉りて徹底せざるなし。實業家、官吏、軍人、敎育家及紳士諸彥の必讀書はこれ也。

紳士向絶好の贈答品!!!

秀雄先生著

(寫眞縮寫)

分本全五冊(時代別)

總紙數二千六百七十餘頁〇附圖着色石版刷鮮明頗大小百廿二圖索引六十餘頁〇挿畫三色版二色版コロタイプ光澤寫眞版等五十六枚〇精巧木版カット六百圖

特價金拾圓

送料 內地五十二錢 臺樺九十五錢 鮮支一圓十錢

東京神田 合資會社 **冨山房**
電話本局 一〇三六 四一三〇 四四四二
振替口座 五〇一番

月賦拂 五ケ月完了 特價拾壹圓

申込金貳圓 以後毎月二圓宛拂込最終壹圓拂込着金即時一冊宛送本。內地送料古代史、近世史、附圖各十二錢。中世近古史、最近世史各十六錢

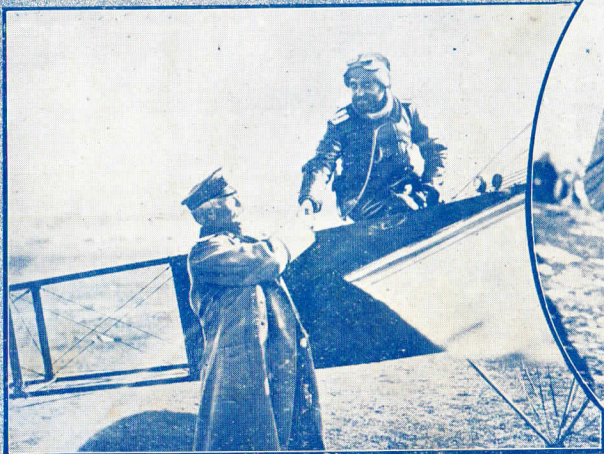
切取特待票

此票切取直接御申越の方へは十一月十日迄特價發賣

送舊迎新

桂公と西園寺侯

巴爾幹戰争

(1)勃軍飛行中尉アドリアノープル府外郊偵察、同府包圍の成功專ら之れに依る。
(2)土耳古俘虜勃兵に守護せられてスタラ・ザゴラに着く。
(3)土軍大敗、退却軍の輸送車ルル・ブルガスよりカリストン橋を渡る。
(4)勃軍前哨アドリアノープル府郊外丘上に鐵道を護る。
(5)塞耳比ヤンコキッチ將軍の第三軍アルバニア進軍の途上

(6)瑞西赤十字醫士塞兩軍の傷兵を治療す。
(7)赤十字加特力宣教師土軍俘虜と語る。
(8)土軍敗跡、クマノブ戰後野砲破裂の光景
(9)ルル、ブルガスの戰、土軍傷兵の退却。
(10)勃軍飛行中尉カクサクチエレフ敵彈の中を偵察を終へて歸りヤンコフ將軍の祝盃を受く

憲政初期の戰士

第一議會に於いて藩閥政府に肉迫して凱歌を擧げたる民黨中の最強硬派改進黨員が閉會當時に撮影したるもの、政治季節だから、古いものを探して讀者に御目にかける

中列向つて右より橋本久太郎、魚住逸次、青木匡、一人おいて高木正年、田村惟昌、次ぎの二人は不明、本山健二、淺野順平、中野武營、一人不明。後列向つて右より一人目不明、佐藤文兵衛、岡山兼吉、山中隣之助、不明、内藤利八、島田孝之、一人不明、天野爲之、田中正造、鹿島秀麿、室孝次郎

前列向つて右より、島田三郎、關口八兵衛、大津淳一郎、今村勤三、一人おいて井上彦左衛門、犬養毅、神野良、阿部興人、尾崎行雄、色川三郎兵衛、藤田茂吉

河北新報

學者、教育家、宗教家の必讀書!!!

文學博士 元良勇次郎先生校閲
在大學院 文學士 高橋讓先生譯述

最新刊 エッビングハウス 心理學

著者は獨逸國現代第一流の心理學者としてハルレ大學の教授たりし人、本書は出版後程なく第三版を重ねたる名編なり。其所説の斬新にして立論の明快なる、見解の徹底して説明の平易巧妙なる、所謂「機能主義」の蕪雜に陥らず、構成主義の迂遠に墮せざる、分析と綜合とを兼ね、理論と實際とを併せたる、更に又斯る小冊子中に於て能く最近の研究結果を網羅して廣大なる體系を立て得たる、共に既出の諸心理學書中、嶄然一頭地を抽けるもの也、殊に本書の特色として誇るべきは從來の心理學書に於て、多く等閑視せられたる精神の高等作用方面の解明に在り。宗教、藝術、道德に關する徹底せる著者の解釋は、學者、教育家、文藝家、宗教家の熟讀を乞はんとする所なり。譯者は努めて字句を平易通俗にして原文の意味を忠實に傳へんとしたれば此種の著書に往々見らるゝ難解と無味乾燥とに陥るの弊なからしめたり。加ふるに元良博士の嚴密なる校閲を經たり。新しき心理學の如何なるものなるかを知らんと欲せば必ず本書を讀まざる可らず。

菊判洋装全一冊
紙數四百三十頁
挿圖二十餘個

定價一圓卅錢

小包料内地金十二錢
鮮支臺樺郵税十八錢

文學博士 桑木嚴翼先生譯述
十二版
ミュイアヘット 倫理學
菊判二百八十六頁 定價金八拾錢 小包八錢

文學士 溝淵進馬先生著
五版
教育學講義
菊判五百頁 定價金一圓九拾錢 小包料十二錢

發兌元 東京神田 冨山房 振替口座五〇一番
賣捌所 全國書肆

御注文の方は新日本廣告に據る旨御附記を乞ふ

赤誠より迸出せる偉人の卓論(最新刊)

伯爵 大隈重信閣下著

經世論

全一冊
菊判美本 四百廿餘頁
定價一圓廿錢
送料内地十二錢
清韓等二十錢

大隈伯の達識、萬般の事情に渉らざるなく、特に其經世經國の談論は卓厲風發懦夫をして起たしめ、爲政者をして愧死せしむ。蓋、一世の興奮藥、社會の清涼劑也。本書は伯が最近一年間に於ける高論卓説を精選整序せるものにして政治、外交、財政、軍事、教育、實業、生活問題等の各方面に關し、一貫するに開國進取の精神を以てす。憲法治下の國民として何人も一讀を要す。

東京遞信管理局長 法學士 棟居喜九馬先生著

新帝勅語と修養 (最新刊)

洋装四六判全一冊
紙數四百卅頁
定價金九拾五錢
送本料内地金八錢

本書は大正の新時代に處する國民の修養に資する爲新帝陛下踐祚の後煥發せられたる朝見式勅語を謹解し、尚著者が積年蘊蓄せる修養訓并に社會問題に關する意見を編纂せるものなり。其勅語に對しては各字句毎に古書を渉獵して出典を明にし博引旁搜、所説簡明一讀して聖旨を了解する所あらしめ、其修養訓并社會觀に至りては著者が實務家として實驗より得來れる所を説破して一々肯綮に當り、到底坊間流布せる空論の比にあらず。蓋し本書は大正の機運に際會し時代の要求に先んじて産出したる一記念出版にして國民敎育の任に在る者は勿論官公吏實業家其他一般社會改良に志しあるものゝ必讀書なり。乞ふ何人も本書によりて絶大の聖訓と眞摯なる修養とを聞け。

發行所 東京神田 振替五〇一 冨山房

御注文の方は『新日本』廣告に據る旨御附記を乞ふ

新年號!!! 通常の二倍大

一月一日發行 第拾六卷 第壹號

本號に限一冊貳拾錢 郵稅貳錢五厘 半年壹圓六拾五錢 一年參圓拾錢

大懸賞募集 各人必要

壹等百圓 受賞百人

◎實に容易ならぬ歳……大隈伯爵

◎劈頭の大絶叫 強き人克つ人……增田社長

▲濱野相場將軍一代記

▲慶應義塾評判記

▲名士の人相(石龍子)

大附録 我日本國民の體力問題及增進法

▲大正の優者は強き人強き人の資本は強き體力

△大隈伯爵 △澁澤男爵 △大木伯爵
△新渡戸博士 △黑板博士 △岡村博士
△北里博士 △安部磯雄 △岸敬二郎
△横山黑頭巾 △坪野平太郎 △栗本又五郎

◎七拾萬圓を部下に分配せし主人

(舊時代の夢は破れたり利益分配主義の時代は來る)

◎好敵手三島彌太郎子……伯爵大木遠吉

◎新藏相若槻禮次郎氏(奇抜)……猿面冠者

▲最新長壽法(樫田學士)

▲店員の叫び(投書滿載)

▲名士の癖さまぐ

▲名流夫人買物振り

數十名士體量身長食量酒量養生法比較

發行所 東京南紙屋町 實業之日本社 郵便振替貯金口座東京貳參六番 賣捌全國各地書店

御註文の方は『新日本』廣告に據る旨御附記を乞ふ

創刊明治十五年

◎九州日日新聞は九州は勿論海の内外に多數の讀者を有し發行紙數九州新聞界に冠たり。

年中無休刊

九州日日新聞

◎九州日日新聞掲載の廣告は筑後新聞及鹿兒島宮崎版等にも同載す
廣告の効力偉大なり

發行所

熊本市上通町五丁目

九州日日新聞社

福岡縣久留米市莊島町 久留米支社

鹿兒島縣鹿兒島市築町 鹿兒島支社

宮崎縣宮崎町橘通 宮崎支社

同盟國皇帝及び皇后陛下

墺太利皇帝陛下

現時近東外交の中心たる墺太利匈牙利の現皇帝フランツ ヨゼフ老帝陛下は一八三〇年の御誕生一八四八年の御即位にして寶算實に八十有四歳を數へさせられ、在位またすでに六十六年に及び、現今世界各國元首中最高年に渡らせらるゝのみならず、寶祚の長久なることヴヰクトーリア女皇以外、古今に多くその儔を見ず。老帝は伊太利經畧に失敗したれど匈牙利併合に成功し、能く墺匈二國の帝冠を一身に帶ぶるを得たり。されど老帝百年の後は即ち歐洲列強の均衡に一大變動を來すの秋ならざる可らずと推測せらる。老帝の地位甚だ重しといふべく、ウヰルヘルム大帝以後又以て現時の大皇帝たるを失はざるなり。

獨逸皇帝陛下

獨逸現皇帝ウヰルヘルム二世陛下は一八五九年御誕生、一八八八年大帝ウヰルヘルム一世の後を承けて御即位ありしよりこの方、外交に内治に縱橫の機畧を振ひ給へるを普ねく人の知るところ。陛下は現今の世界元首中に在りて、近世歐洲の帝王中最偉大なる血統をつぎ、更に御親ら大帝たるの資質を帶びさせ給ふ唯一の御方といふべし。近く今年八月を以て御即位二十五年の祝典を擧げ　せらるべしといふ。

明治天皇伏見桃山御陵

家庭に讀書の娯樂を

家庭の書齋を飾る最

▲ポケットに收めて車上に繙くべく

校訂編輯擔任 饗庭篁村 上田萬年 幸田露伴 關根正直 藤岡東圃 芳賀矢一 宮崎三昧 尾崎紅葉 諸先生

袖珍名著文庫

全部五十册完成

體裁は美しく讀んで面白く、國文學の精華を容易に味ひ得るは本文庫の特色、何人にも適せざるものなく趣味と娯樂と慰籍とを兼ねたる名著集也。

第一編より

- 第一篇 芭蕉翁繪詞傳附句集
- 第二篇 近松淨瑠璃三種
- 第三篇 雨月物語
- 第四篇 假名文章娘節用
- 第五篇 今昔物語選
- 第六篇 近江縣物語
- 第七篇 狂言二十番
- 第八篇 西行山家集
- 第二十六篇 源氏物語忍草
- 第二十七篇 松の葉
- 第二十八篇 春雨物語
- 第二十九篇 世間用心記
- 第三十篇 をりく草
- 第三十一篇 和漢朗詠集
- 第三十二篇 松浦佐用媛石魂錄（前編）
- 第三十三篇 同 後編

全部五十册一時に購入せらるれば本月中は送料弊社にて負擔すべし。本文庫の總解題は往復葉書にて申込まるれば進呈

促さしむる最良手引

手頃の寸珍文庫

▲總振名附にて兒女も讀むべし

第五十編に至る本書の總目次

- 第九篇 風流志道軒傳
- 第十篇 脚本春花五大力
- 第十一篇 俳諧水滸傳
- 第十二篇 よものあか
- 第十三篇 國姓爺合戰
- 第十四篇 謠曲二十番
- 第十五篇 世間娘氣質
- 第十六篇 日本永代藏
- 第十七篇 日本新永代藏
- 第十八篇 萬載才藏集選
- 第十九篇 花月草紙
- 第二十篇 鳩翁道話
- 第二十一篇 緑手摺昔木偶
- 第二十二篇 夢想兵衛胡蝶物語（前編）
- 第二十三篇 夢想兵衛胡蝶物語（後編）
- 第二十四篇 假名手本忠臣藏
- 第二十五篇 慶長見聞集
- 第三十四篇 東遊記
- 第三十五篇 落語選
- 第三十六篇 續々鳩翁道話
- 第三十七篇 英草紙
- 第三十八篇 笑談五種
- 第三十九篇 他我身の上
- 第四十篇 保元物語
- 第四十一篇 平治物語
- 第四十二篇 太平記忠臣講釋
- 第四十三篇 芭蕉翁文集
- 第四十四篇 因果物語
- 第四十五篇 神皇正統記
- 第四十六篇 殉難前後草
- 第四十七篇 海道記廻國記
- 第四十八篇 忠臣藏皮肉論外二
- 第四十九篇 近世畸人傳
- 第五十篇 川柳選

體裁 縦五寸横三寸六分上製金文字入 並製石版刷表紙 毎編紙數二百頁 口繪寫眞版木版 等●總振假名附 全部●五號活字

定價 上製 金卅錢 中製 並製 金廿三錢

郵税一册四錢ツヽ、十册小包料十六錢 廿册同 二十八錢 卅册同 四十四錢 四十册同 五十六錢 全部同 八十四錢

全部取揃ひ缺本なし

東京神田 合資會社 冨山房 振替口座五〇一

賣捌所 全國書林

秦始皇帝遺蹟

(2)秦の瓦當(塚本靖氏藏)

(3)現時の咸陽 陝西省西安府の西北約六里に在りて渭水の北岸に位す秦の咸陽はその東二里許に當る。

別項桑原文學博士「秦始皇帝」參看

フレデリキ大王の旅行・人民の歡迎を受くる圖

（アドルフ・メンツエル畫）

書齋に於ける大隈伯爵

新日本
第參卷第壹號
大正二年一月一日發行
最近政局走馬燈上の人物
冨山房發行

新年に臨んで國民に警告す

主宰伯爵　大隈重信

一、須く惰氣を一掃すべし

先帝俄に崩御になり、新帝御踐祚後今や第一回の暦を改むるに至つた。此に於て人心一轉の時機となつたのである。大正元年は先帝俄の御登遐で、國民の驚愕と哀悼との中に終つて仕舞つた。その上內閣の交迭となつた。即ち丁度時代の變り目に內閣の更迭となつたんである。明治の時代が大正に入つて人心の一轉する處へ又新內閣の組織である。その如何なる內閣が起るかは知らぬけれど兎に角更に人心を新にするに相違ない。全體日清、日露兩度の大戰後、人心は沈滯し、その上光榮ある戰勝は却て國民をして不幸にも虛榮、奢侈、或は遊惰といふ如き弊を生じた。此に於て人心は萎靡する、萎靡すれば自然現狀に倦むといふ事が起る。凡そ人心の現狀に倦む程恐るべき事はない。さればこそ大政維新の初に賜はつた五個條の御誓文の中に、「官武一途庶民に至る迄各其志を遂げ、人心をして倦まざらしめむ事を要す」とある。是が五個條中の一個條となつて居る。人心をして倦ましむれば國の現狀に滿足せぬ事である。社會の現狀に滿足せぬが、而かもそれに反抗する力を失ふ。是が倦むといふ事である。即ち正に爲すべき務を怠るをいふんである。何處にか苦痛を感ずるが、感じた儘で居る。是が倦むといふ事である。倦むは即ち遊惰である、安逸である。今や日本は世界的競爭の中途に在るに拘らず、其途に倦むといふはあるべからざる事である。世界の競爭場裡に立つ我國の前程は甚だ遙にして遠いのである。然るに千里を行くものが早や二百里にして疲れる。是れではいかん。百里を行くものは九十里にして半にすといふ事がある如く世界の競爭場裡に立てる我國の現狀では日暮れて道遠しの感を抱かねばならぬ。乃ち夜を以て日に繼ぐといふ覺悟が當然であるんである。此際に倦む。是程世に恐るべきはないんである。この故に大政維新の劈頭に於て五個條の御誓文が現はれ「上下心を一にして盛に經綸を行ふべし」とか、「舊來の陋習を破り天地の公道に基くべし」とか「廣く智識を世界に求め大に皇基を振起すべし」とかいふてあるが、是れ皆人心をして倦まざらしめんとするものに外ならぬ。

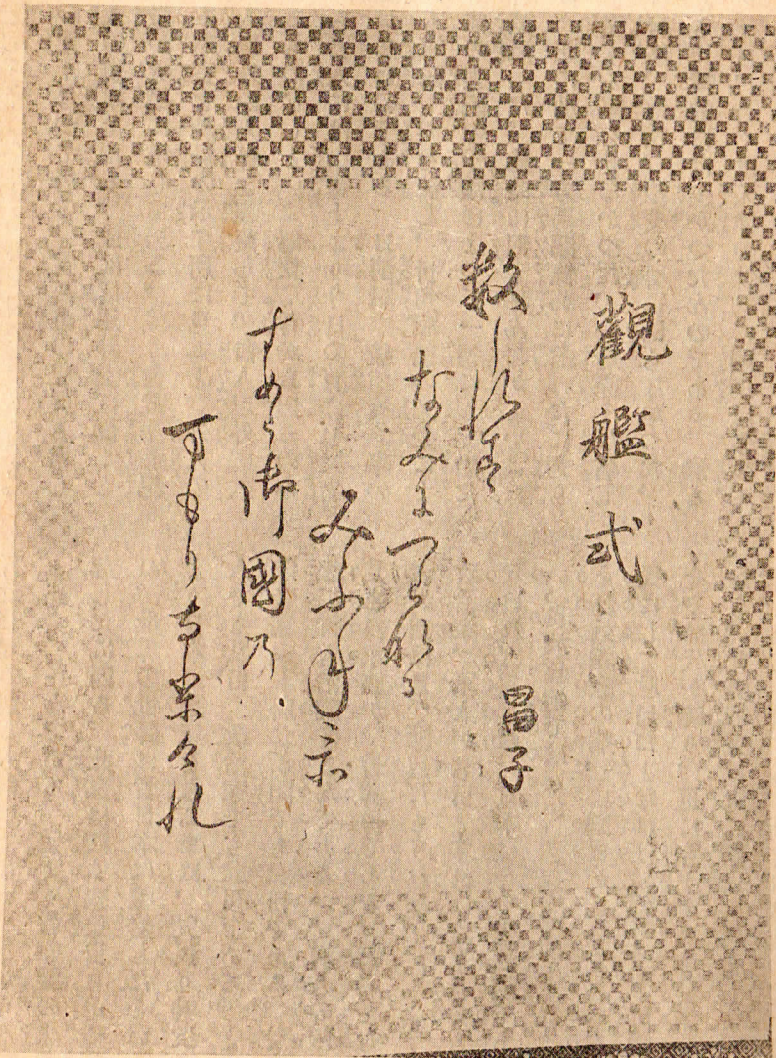
二、吾人に對する世界の批評は如何

ところが、今日續々現るる世界の批評を見るに、明治の時代には進歩した。そして日露戰役に大なる武勳を顯したが、是が日本の隆運の極度で是れから衰へはせぬかといふ。又戰勝の原因たる剛毅なる、堅忍不屈なる、勇敢なる、或は困難に堪ゆる、或は素朴にして勤儉といふ樣な偉德が、一時に困難の場合に現はれて能く强敵を破つたが、此偉德が戰勝の光榮に醉うて衰へはせぬかといふ疑が西洋に起つて居る。道德も明治時代に頂點に達したので、時代の變るに從つてそれが段々衰へはせぬか。そして此勢を制する

観艦式

昌子

竹田宮妃昌子内親王殿下御詠

（田中伯爵藏）

[illegible]樣な事が「ロンドン、タイムス」若くはグラスゴー大學に於けるカーゾン卿の演說、其他チョイ〳〵新しい著述等に見ゆる。近來世界に於ける日本の研究が多くなつて居るが何れも日本が堅實なる基礎に立つて安全なる國歩を運んで居るものだといふに就いては疑が多い樣である。それには白人以外の人種は白人に劣るといふ樣に、多少偏狹な考もあるか知れぬ。多少は無いとも言へぬが、人の批評を聞いて自ら顧るといふ事は勉むべきである。況んや近來現れた社會上、政治上、商業上其他の狀態は、遺憾乍ら外國人の批評を拒めぬ事實がある。商業上、政治上若くは社會

上にも或は堅實の風が衰へはせぬかといふ樣な觀察は、事實が之を證據立つるんである。即ち明なる統計の數字に於て、罪人が增して居る。自殺者が增して居る。傳染病が增して居る。或は徵兵檢査の結果が惡くなつて居る。官公吏の犯罪も增して居る、會社の如き人の資本を預る、或は信用の上に働くといふ處に於て犯罪の數が次第に增して居る。或は會社法違犯が增して居る。此ゝる事實を統計の示す所に見ると、外人の批評が强ち白人の白人以外の人種を輕蔑して、白人以外に歐羅巴の文明を理解するものなしといふ偏狹な考から出るのみでない事が分る。即ち吾人には事實上より今日の有樣を反省せなければならぬ點が多いのである。日淸戰爭後還遼の事の起つた時には、國民も軍隊も淚を流し、折角戰後の光榮によつて獲得した利益も他の强國の干涉によつて一朝にして拋たなければならぬ事を憤慨した。此時に何と呼んだかといふに「臥薪甞膽」である。此に於て一方馬關條約に敗れたに拘らず、堅實なる國風を損する事をせなかつた、一層深く反省して其爲往々起り易き奢侈、遊惰、浪費の弊に陷らなかつた、多少は陷つたけれども比較的には少かつたんのである。然るに日露戰後、ポーツマス、若くは天津の條約に國民は多少不滿の樣であつたけれども、それならば、此戰後に於て互に深く自ら戒め、當面の大敵は既に破つたとはいへ、更に恐るべき强敵が次いで來るんである。世界と競爭するには前途甚だ遠いとして、自ら大に勵まなければならぬに、何時しか戰勝である。[illegible]

三、一國を指導すべき人物那邊に在りや

今日眼を全社會に放ちて、一國の人心を指導する威嚴ある人物は何處に居るか。隱れて居るかは知らぬけれども、表面に現れて斯樣な人物のあるのを餘り見出さぬ。帝國議會に左樣な人物が居るかと見ても見當らぬ。一たび政治上の波瀾の洶湧するや、其眞正中に立つて、勇敢に、大膽に、終始所信を守つて健闘すること、恰も燈明臺の渺茫たる大洋の中に直立し、如

北白川宮妃房子内親王殿下御詠

財政策を過つたが爲に、此財政の壓迫が經濟界に影響し、物價騰貴して細民は生活難を訴ふる、貿易は不振になる。今日行政整理の起るも偶然でない。是からして遂に內閣の更迭ともなつたんである。元より皆戰勝の光榮の國民の惰氣を惹起したに因る。此點は深く國民自らが覺醒せなくてはいかぬ。世界の批評は皆日本は墮落したといふんである。此狀態より日本の國家を救ふ事は、矢張り其批評の言ふが如く、軍人でも駄目、政治家でも駄目である。といつて又敎育家でも宗敎家でも將た新聞でも駄目である。社會が病體だとすれば誰が抑も治療するんであるか。病人の治療は父母か、妻子か、其他の家族か、皆駄目である。醫者でなくてはいかぬ。其醫者が猶ほ且つ駄目だとすれば、次いで來るものは唯死である。政治家、軍人が駄目とすれば之を救ふものは五千萬の國民でなければならぬ。日本は今や憲法國である。寡頭政治ではない、貴族政治ではない。官僚政治でもない。立憲政治である。それ故國家の病體は國民が治療を加へなくてはいかぬ。此國民にして駄目だとなれば、國家は遂に滅亡を免れぬのである。今や時代が變り、更に今上御踐祚後第一の新年を迎うるのだから、此際我輩は大に國民に警告して、其惰氣を破り人心を新にせんと欲する、新なれば倦む事はない。其人心の時代の必要に迫られて自覺すべき時機は正に政治上に新紀元を劃する今日に於てである。特に一年の初である。新年の今日に於てである。茲に先帝の大業を繼承して徐ろに新帝の時代を望[illegible]き人物があると見るにない。更に敎育家にあるかと見るにない。宗敎家に在るかと見るに是れもない。然らば國民を指導すべき威嚴なるものは抑も何處に在るか。國民の嚮ふべき目標は何處に在るか。帝國議會の燈明臺は存在するとしても、其處に國民を指導すべき一個の燈火が點せらるるんでなくは駄目である。

一度び內閣が瓦解すれば陛下は誰と共に御相談なさるかといふに、それは帝國議會である。然るにそれに社會を指導する威嚴の蔭は甚だ薄い。けれど帝國

議會も國民の上に存在するんである。政治も國民の上に存在するんである。教育も、宗教も皆日本國民の上に存在するんである。すれば五千萬といふ大帝國の國民が正に協力して其弊を改め其功を見るの責任を双肩に負はなければならぬ。即ち君民同治である。處が平素國民を指導するものがない。それ故國民には協力して國家に盡さねばならぬといふ心が常に十分にない、如何にも其精神が散漫である。即ち今日は何等風濤の間を導く燈明臺がないんである。我國の現狀は此國歩

有栖川宮妃慰子殿下御詠

艱難の際に當り、指導し吳るる燈明臺に點燈の注意を怠り居る有樣である。全體憲法は國民の大典である。即ち國民を指導する一の教科書である。此教科書を誰が持つて國家を指導すべきかといふにそれは政治家である。政黨である。國民をリードして國家の大事に臨むには、平日から指導し訓練して置かねばならぬ。然らざれば政治上の錯綜した事柄に國民は無論慣れる事がないのである。されば憲法といふ教科書を敎

のである。國家の問題は感情の問題でない。就中外交の如きがそれだ。一たび誤れば國家を危うする。此の如きものに感情によつて取捨する事があつては一大事である。それ故政治家は平日須く國民を指導し憲法的に訓練し置くべきである。

四、今や國民の自覺を要す

今は君民同治である。上御一人と共に吾人五千萬の國民は此國家に對する責任を負擔せねばならぬ即ち憲法國の民である。

閑院宮妃智惠子殿下御詠

る。此憲法の下に貴族政治、寡頭政治といふが如き少數者の政治が現るるといふ如き事があれば殆んど航海に羅針盤を持たぬと同樣である。今や世界の競爭場裡に立ち居るに際し、猶ほ封建時代の自國以外の世界を見なかつた折の樣な、頑固な支那的思想が存在すべきでない。第一それは明治大帝より賜はつた大教訓に悖るんである。特に憲法に悖るんである。少數の當局者を聰明なりと認めて、それにより自己の生命財產を保つといふが如き、即ち少數の治者の恩惠に依賴して安

では肝要なる此政治家達が國民を指導する任務を盡して居らぬ。それ故國民は茫として自らの嚮ふ所を知らぬ、恰も大切なる燈明臺に點火せば、燈明臺は巍然として聳ゆるも中に一點の星火をも認めぬといふ有樣である。颶風、狂風が起ると航海者が航海に苦み居る時、無くてはならぬ肝腎の燈明臺に其燈が消えて闇黑であるならば、航海者は甚だ航路に難澁し動もすれば其船は沈沒に至るであらう。國家も亦此の如くである。今日の計は憲法といふ教科書を以て國民を指導し憲法的に訓練するに存せねばならぬ。そして時々に起る內治、外交有らゆる重大なる問題に關し、國民の意思を統一するに勉めなくてはならぬ。事が起つてからでは遲い。輿論々々と徒に言ふけれども輿論は指導するから起るんである。平素指導されてそれより起る輿論は健全であるが、事あるに臨んで俄に起る輿論は感情的であつて多く合理的でない。感情的であれば得て是非善惡の方針を誤る。此の如き輿論は政治的に有

[illegible]

國民は敎へざるの民である。何としても敎育の力を待たねばならぬ。特に憲法の敎育は政治家の力に待たねばならぬ、政治家は須く此處に意を留め、自ら憲法を以て國民を指導し憲法的に訓練するを要する。然るに之を怠る、是が即ち惰氣を生じたのである。根本は此處に在る。一度び人心が衰ふれば軈て道德にも其頹廢の影響を見ずしては已まぬのである。事實に於て、戰後に現れた世界の研究者をして、大に日本の將來を疑はしむるものがある以上は、最早や我國民は晏如として居る譯に行かぬのである。五千萬の健全なる國民が自覺して奮起一番すれば、能く此病的狀態から日本の國家を救ひ出す力が生じ得ると思ふ。此力がなければ我國家の前途は甚だ悲むべきである。が、是迄の歷史を見ると、此偉大なる力は我國民の間に潛むで居る。驚くべき强烈なる力が潛んで居つて必要が迫れば勃然と起るんである。けれども此力は一部少數の者だけではいけぬ。即ち之を救ふは『タイムス』の言

ふ如く、軍人では駄目である。政治家でも駄目である。元勳でも同じく駄目である。須く國民自身の力に依らなければならぬ。國民自身の力によつてのみ今日の財政の困難も、それの經濟界に於ける壓迫も、その結果として現る一般の生活難も、更に風俗の頽敗も救ひ得るのである。國民自身によつて今日の凡ての困難から免れ、更に堅實なる基礎の上に立つて國家の富力を増し、其幸福を進め、其文化を捗らし、世界をして畏敬の念を以て迎へしむる事は難くない。今や今上御踐祚後第一回の新年に當り、吾人の國民に告ぐるに此の如く種々不祥の事の臚列を以てするのは、場合に相應しからぬ樣であるけれども、過を見て仁を知るといふ、過を掩ふて將來を迎ふる美はしき詞を列ぬるともそは空想に過ぎぬ、今日過を悟るといふ事は將來を善くするといふ事である。何も徒に現在を厭世的に悲觀的に見て話すことはない、今や大正の新年に入るに及んで只過去を回想し、其非を悟るまでの事である。其處に新光明を認むるんである。[illegible]

東伏見宮妃周子殿下御詠

依頼する心を止め、自ら支配する力を出すので、軈てそれが國家の力となり、國家の富强を加へるのである。而かも此の如き力の發揮には、憲法的精神の體得を要する。敎育も是によつて救はれ、社會も、是によつて救はれ、宗敎も是れによつて救はれ、而して財政も經濟も亦是によつて救はるる、其結果此國は必ず富强になるんである。が、それは現在の過失を知つて、將來の發展を期するといふ自覺から始まる。之を思へば今此の如く色々現在の積弊を枚擧するといふは、必ずしも將來に對して不祥の事とはせぬ、況んや新帝は御英邁の資に在らせられ、鋭意治を圖らせらるる上に、先帝の偉大なる御遺靈が冥々の間に擁護し給はるのだから、將來の日本の國家は益々盛になるであろうが、此際國民も當に自覺の眼を開いて惰氣を一掃し、共に皇運を扶翼し奉るべきで、是れ先帝の御遺靈を慰め、新帝の聖旨に酬ひ奉る所以である。すれば我輩が今新年の初頭に於て此警告をするも、決して不祥の言[illegible]

如是我觀

永井柳太郎

(1) 大正維新論

一

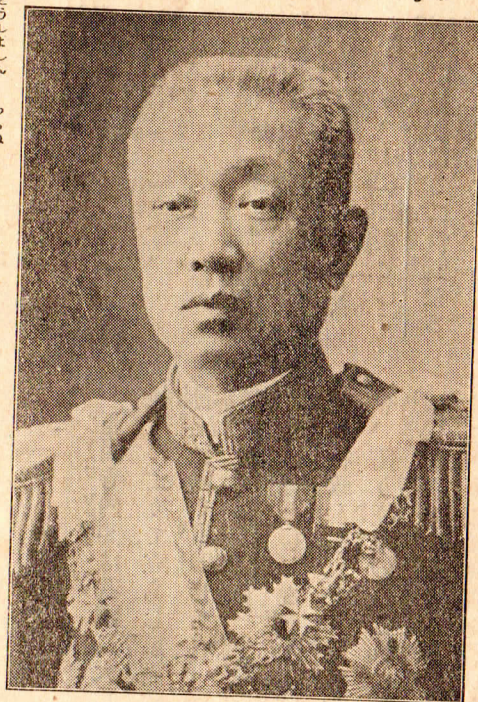
西園寺内閣の崩壊は寔に近來の一大怪事にして、また我國憲政史上の一大汚辱也。吾等は素より西園寺内閣の謳歌者にあらず、否寧ろ其爲す所吾等の所見と相容れざるもの多く、日本帝國をして世界の進運に後れざらしめ、日本民族をして健全なる發達をなさしむべく、其餘りに無能なるに慊焉たる者なり。然れどもこれ獨り責を彼等にのみ歸すべきにあらず陰に陽に彼等を掣肘し、彼等の爲す所を阻害したる所謂元老輩、幷に之れに阿附する一團の怪物あるに想到せざるべからず。且つ其西園寺内閣の僅かに一年有半に滿たざる、極めて短命なる最後を遂げたる最大の原因が、彼等一派を後援とせる陸軍々人の横暴に有りし一事は、吾等の我國憲政擁護の爲めに、將た國運發達の爲めに、大に憤慨せざる能はざる所也。

二

西園寺内閣は我國二大政黨の一たる政友會を根據とし、其後援によりて立ちし所謂政黨内閣也。歷代の内閣が多く藩閥者流を以て組織せられ、毫も民意を主とせず、民論に其心を傾けざりしに似ず、西園寺内閣は兎も角も多數を代表し、國民を基礎としたる内閣也。然るに西園寺内閣が國論の要求に基き行政を整理し、財政を整理し、以て時局を濟はんとするや、獨り陸軍のみこれに隨ふ誠意なく、所謂增師案を提げて横暴を極め、民論を無視して遮二無二我意を貫徹せんとし、遂に内閣に致命傷を負はしめ、其瓦解を餘儀なくせしめたり夫れ行政、財政の整理は、國民一般の希望にして、熱烈なる輿論の要求也。增師案は陸軍を除くの外、天下を擧げて之れに反對せる所也。而して議會に絕對多數の黨員を有する西園寺内閣は此民論の要求に隨ひ、之れを遂行せんとしたるが爲めに失脚せり。是れ豈立憲國にあるまじき不合理の甚しきものに非ずや。憲法を有し、議會を有する國家にして此の如き

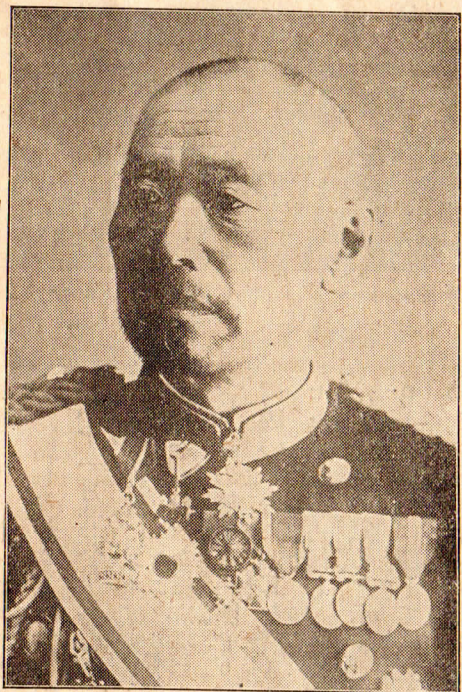
事あるは、蓋し世界の憲政史上に類例なき所にして、約言すれば我國憲政の破壞也。國民を擧りて軍人の奴隷たらしめんとする也。憎みても尙ほ餘りあらずや。

三

西園寺侯の恬淡にして執着力なき、幾んど政治家としての信用を疑はしむ。聰明餘りありて撥亂反正の力なく、大命を畏みて未だ幾許ならず、事一度び志の如くならざるの故を以て、忽ち大任を放棄す。何ぞ夫れ進退の輕率にして、主義に忠ならざるの甚しき。之れを彼の英國首相アスキス氏が、上院改革案、愛爾蘭自治案等の如き、百難紛糾、辯難攻擊、幾んど身を置くに所なからんとするまでに幾多難問題の纏綿せる間に立ちて、聊かも屈せず、奮戰健闘所信を貫かずんば止まざらんとする、勇氣、熱誠に比すれば、啻に月鼈の差あるのみならず、寧ろ人をして西園寺侯の無氣力を愍ましむ。誠に侯は國民の後援を得たること彼れが如く、幾んど擧國一致の味方を有したるに拘らず、其決心の最終に當りて、正に試むべき一快戰を回避し去れり。初め侯や、陸軍の横暴制し難く、陸相の後任選定を不能ならしめたるときに於て、何故に入りて聖明に對し奉り、具さに國民の希望と現下の政情とを奏上し、陛下に請ふに內閣の官制を改制し、文官も亦陸海軍大臣に任ずるを得ることゝするか、または少くとも陸海軍大臣を現役武官に限らざることゝするに努力せざりしか。蓋し大臣の任免は內閣總理大臣の奏薦に依り大權より發動する所なるが故、之を斷行する事決して不可能事に非ざりし也。若し樞密院の之に反對するあらば、百尺竿頭更に一步を進めて、樞密院の改造を企つべし。抑も樞密院は立法、行政二部の衝突に際して、至尊の諮詢に答へ、また條約の締結に對して翼賛し奉つるを以て其任務とする機關にして、今日の如く內閣以外に立ちて、統ての政事に容喙するの權能有ることなし。宜しく大に改むる所なかるべからざる也。此決心なく勇氣なく、千載の一遇を逸し去りたるは、憲政の發達の爲めに眞に惜みても尙ほ餘りあることにして、これ西園寺侯の內閣投げ出しが、獨り增師問題のみならず、幾多他の政治上の失敗を掩はんとする策なりしと稱せられて、一言の辭なき所以也。

內閣を放棄せる西園寺侯

四

政黨を基礎としたる西園寺內閣夭折の後を受けたるものは果然、軍人派の武斷內閣也。國論を無視し、國力を顧みず、唯私利の爲にし、私便の爲にし、國家を思はずして閥族を庇護し、國家の爲にするに非ずして、陸軍の爲にする政治の再現也。憲政上より云へばまさしく逆戻り也。國家の退步也。横暴更に其度を加ふべし。之れに對して國民は如何なる策をか採るべき、他なし、年來の懸案たる、而して西園寺內閣の將に遂行せんとしたる行政、財政の二整理の厲行を迫るべし。國家をして破產の悲境に陷らしめずんば止まざらんとする所謂增師案に絕對に反對せざるべからず。議會にして若しよく民意を代表して彼等に反對せんか、解散は蓋し數の免れざる所なるべし。此場合に於て國民は、民論に隨ひて行動したる議員を再選し、若くは三選するの義務を守るべし。斷じて節を賣り、民論に背き權勢に阿附する徒輩を再び議政壇上の人たらしむべからず、是れ即ち陛下に忠にして國家を擁護する所以也。

五

國論貫徹の爲めに國民の擧りて之れに努力すべきは、素より其分なりと雖も、彼等を代表し、彼等の爲めに政府の監督に任ずる政黨は、また當に其當然の責務として、行政整理、財政整理、增師案反對の爲めに其最善を致さゞるべからず。否憲政擁護の爲めに力戰健闘せざるべからざる也。今や我國は憲政の危機に際會せり、政黨內閣倒れて、武斷內閣現る。民論破れて閥族跋扈せり。苟も立憲國民を以て任じ、憲法政治を擁護し、其發達を希へる政黨人士にして、其政見の小異の故を以て、區々派を別ち黨を組みて、互に相排し、相嫉み、鷸蚌の爭に之れ耽れるの秋ならんや。當に大に胸襟を披いて相提携し、相激勵し以て憲政擁護の大任を成就し世界の立憲先進國に於ける如く、眞個に責任ある政黨內閣を組織し、民論の實現、貫徹に勉むべく、此の如くにして始めてよく日本は武斷政治、官僚政治の弊害より脫することを得べけん也。今や國民黨及び政友會中の健全分子は、漸く覺醒し來りて其二黨分立の毫も益する所なくして、唯徒らに閥族政治家の其間隙に乘する所となるのみなるに鑑み、這般の問題に於て端なくも其步調を一にしたるを機とし、其連衡を圖らんとしつゝありといふ。機は正に熟す。此秋に於て奮然起ちて民意を無視せる武

內閣を破壞せる上原前陸軍大臣

斷內閣、官僚政治、閥族跋扈の弊を芟除せずんば、また何れの日にか之れを能くせん。眞にこれ千載一遇の好機なり。國民よ自覺せよ。民黨よ團結せよ。吾等は吾等の祖先が明治維新を斷行したるが如く、まさに大正維新を斷行するの機運に達す。

ブルガリヤの士官トルコ兵の捕虜に煙草を與ふ

(2) 東歐の風雲

一

東歐の風雲は依然として暗澹たり。セルビヤ軍は墺、伊兩國の抗議ありしに關らず、その進軍を繼續して遂にデユラッオ港を占領し、ブルガリヤは、一方に於て土耳其と休戰條約を結締しながら、他方に於て其軍隊を十九隻の運送船に搭載し、十一月廿八日デデアガッチルに上陸せしめたり。モンテネグロも亦既にブルガリヤの首府ソフイヤに於ける平和會議に列席せしむべき媾和委員を任命したるに拘らず、同時にスクタリ港の砲擊を再開せり。玆に於て希臘も亦、同じく墺、伊兩國の警告に其耳を貸さず、アルバニヤのヴアロナ港に近きセセノ島を占領し、更に東轉してダアダネルス海峽を襲擊せんとするの氣勢を示す。加ふるに希臘と勃牙利との間にはサロニカ問題に關して衝突を惹起し、希臘は兵力を以てサロニカを占領したるが故に之を今後永久に占領せんとし、勃牙利は伯林條約により其勢力範圍となれるを以て希臘に割讓するを肯せず、其他のバルカン同盟國も亦、その戰利品分配のため衝突しつゝありといふ。翻て背後の列强を見れば亦互に其の瓜牙を磨くに忙敷く、私かに機の到るを狙ふもの〻如し。即ち墺洪國は表面に於て平和の解決を希望せるに關はらず、總理大臣は內閣議會に於て、遠からず、馬匹給與費、戰時增員支給費、軍隊輸送費に關する三個の議案を提出すべきことを聲明し、その議案の緊急なる性質を帶ぶる旨を告げて、議會が最も迅速に且つ圓滿にこれを通過せしめんことを要求したり。而して墺國コンラッド ホッツインドルフ將軍は皇帝フランツ ヨセフの親書を齎してルウマニヤの首府ブカレストに到着せる由。ルウマニヤは三國同盟の與國にして、墺露開戰に際しては、露國の南部を衝くべき地位を占むるが故、此の訪問も又バルカンの危機に處する內約を交換せんがためなりと觀察するを適當とす。伊太利も亦、之に應じ、その新聞紙はバルカン國民に對して、伊墺兩國はバルカン諸國がアルバニヤを領有するに絕對的に反對するに決したるを以てアルバニヤの獨立に對しては毫も干涉すべからざる旨の警告を發表したり。墺、伊兩國に於て已に如斯なる以上、露國たるもの豈默するを得んや。十一月末のセントピーターースブルク電報は同國が頻りに兵をコウカサス地方に集中しつゝあるを報じたり。爰に於てか十二月三日に至り獨逸宰相はその議會に於て獨立の態度を言明して曰く。『巴爾幹領土の配合を爲すに當り獨逸は局面に立つを望むものにあらざれども、近東に實現せんとする新經濟的關係に就きては、その特殊の利害を考慮せざるべからず。其他の懸案に就ても列强と交戰國との間に意見の衝突起れる場合に獨逸はその同盟國を援助するの義務あり、若し三國同盟と露國と開戰するに至らば、佛蘭西も亦、勢ひその渦中に投せざるべからず。如斯にして歐洲の風雲依然として危機を脫せざるが、知らず、その推移する所や如何。

二

歐洲外交通ヴレンタイン ウイリヤムス氏は『デリー メール』紙上に確實なる方面より傳聞したるものなりと稱して

トルコブルガリヤ國境に於けるブルガリヤの騎兵斥候

バルカン半島の處分案を發表したり。その內容を見れば左の如し。

一、アルバニヤの獨立を公認し、その領土をアドリヤチック海上のデュラッオ港よりバロナン市に至る間に接續せしめ、キルバサンを以て首府となさしむ。

二、マセドニヤの獨立を公認し、モナスチイルを以て首府となさしめ、南方サロニカを經てヱイヂアン海に出でしむ。

三、ブルガリヤの領土を南ヱイジアン海に接し、西黑海に面せしめ、ブルガリヤとセルビヤとの國境接觸線よりスツルマ川に沿ふてセレスに至る一線を劃して、これをセルビヤ及マセドニヤとの國境となす。而して東はデアガツチ港に於て土耳其に接せしむ。

四、セルビヤをして「サンジアック」ノビバザアルを通過してアドリヤチック海のサン、ギヨバネ、デ、メヂユアに出でしめ、南方その領土をキリスチナ及ウスクブに延長せしむ。

五、モンテネグロをして「サンジアック」ノビバサアルの大部分を占領せしむ。

六、バルカン半島に於ける土耳其領は、これをアドリアノープルよりボスフオラスに至る小範圍に局限す。

以上の案を一瞥すればギリシヤに對しては何等言及する處なく、ギリシヤの捷利は忘却せられたるが如し。思ふに如斯き處分案は他のバルカン同盟國側より發せられたるものならん。若し如斯き案にして卓上に現はれんか、最も反對すべきものは墺洪國也。そのアドリヤチック海に於ける勢力はセルビヤのために制限せらるべく、その「サンジアック」ノビバザアルに出でんとする宿望はモンテネグロ、マセドニヤ、ブルガリヤ等の諸國に依て沮害せらるべし。加ふるにギリシヤはその新興の意氣を何の邊にか伸ん。單にクリート島を合せたるのみを以て滿足す可きや否や。英國外相の列强に對する提議なりと稱せらるゝものゝ中にはヱイジアン海諸島占領放棄の件をも含む。然らばギリシヤの戰勝は何に依てか報ひらるべき、此點に於て過日希臘公使ランガベ氏が伯林に於て『ノイヱ フライエ プレッセ』の通信員に語れる談話は甚だ注意すべきものなり。曰く『今日バルカン半島に於て最も勢力ある强國は云ふ迄もなく墺洪國なり。而してバルカン諸邦中最も墺洪國に親善なるはギリシヤとブルガリヤ也。故に墺洪國にして此等のバルカン諸邦と同一の伍邦に入り、以て此等のバルカン諸邦に相當の利益を與ふるとゝもに、墺洪國の利益をも收めんとならば、その目的を達する事容易なり。要するに墺洪國はバルカン諸邦に向て出來得るだけ多くの報酬を與へよ。然らば吾等は亦同國の味方となり、同國に出來るだけ多くの報酬を贈るに努力す可し。然るに若し吾等を敵とする態度に出でんか、墺洪國の前途は甚だ困難ならざるを得ざるべし。バルカン諸邦人は今や勃興しつゝある國民なり、墺洪國が最も重大なる利害關係を有するバンカン半島に於て此等の新興國民を敵とするは、豈賢明なる政策と謂ふ可けんや』と。

近着の電報に依れば、土耳古國と巴爾幹諸國との媾和談判は恐らく十二月十三日を以て倫敦若くは巴里に於て開始せらるゝ由。然らばバルカン諸國の土耳其に對する要求の內容が發表せらるゝは遠きにあらざるべく、その要求の如何に依りて歐洲の天地は空前の大亂を惹起すやも料り難し。吾等は依然として歐洲の大亂を思ふ。（十二月七日稿）

(3) ノルマン エンゼル氏に與ふ

一

安部磯雄氏が、かのノルマン エンゼル氏著 "The Great Illusion" を譯出せられたるは頗る時宜に適ひたりと云はざるべからず。本書は戰爭の勝敗が商業の盛衰に何等の影響をも與へ能はざるを痛論し、かのマハン大佐等が、國際經濟の發達と外交關係の變遷とに心付かず、徒らに古き歷史的實例の列擧に依て、現代に於ける海軍と貿易との關係を說明せんとしたるを嘲笑せるもの也。曰く

「商業とは何んであるか、商業とは生產物と生產物とを交換することである若し英國の製造業者が、その競爭者よりも廉價に且つ精巧に生產することが出來れば、彼の商業は必ず繁昌すべし、若しその生產物が粗製であるか高價であるか、または顧客の趣味に適せなければ、彼は競爭者のため壓倒せらるゝに相違ない。如何に多數の軍艦を以ても、この原則を動かすことは出來ぬのである。例へば獨逸が我海軍を撲滅し得たとしても、加奈太の[illegible]如何なる影響を及ぼすことが出來やうか。勿論、獨逸は[illegible]せらるゝを防止することが出來るかも知れぬ。然かし、それが如何なる利益を生ずるであらふか。獨逸が急に生產者の人數を二倍にし、今日まで四千萬の英人が生產し來りしものを生產して、これを加奈太に供給するにあらざる以上、加奈太の麥を獨逸に奪ふことは出來まい。縱しこれを獨逸に奪ひ得たりとするも、獨逸は如何なる魔術に依て、其麥を消費せんとするか。若し獨逸にして加奈太の麥を買はなければ、加奈太も亦、決して獨逸の生產品を買ふことが出來ぬのである」

と。彼は如斯にして商業を保護するの名に依て海軍を擴張するの愚を說き、更に進んで軍備の强大なる國民の經濟的信用は、却て軍備を有せざる國民のそれに劣り、毫も軍備の大少と經濟的信用の增減とは並行せず、歐米の資本家は、かのロスチャイルドにせよ、バーリングにせよ、スターンにせよ、モルガンにせよ、事實凡て大海軍國の公債よりも、寧ろ小海軍國の公債を歡迎しつゝあるに論及し、倫敦の市場に於て、獨逸の三分利付公債が八十二磅なるに拘らず、白耳義の三分利付公債は六十九磅を上下し。露國の三分半利付公債が八十一磅なるに反して那威の三分半利付公債は百〇二磅を超ゑ、有名なる英國コンソル公債の如きも、英國が南阿を征服し、世界に有數なる大金鑛を獲得したる時代より、次第に下落し初め、英國の戰闘艦が未曾有の大多數に達したる今日に於て最も甚敷く、遂に七十七八磅となれるを指摘したり。これ實に軍備を以て產業の發達に缺くべからずとなし製艦の競爭に汲々たる現代にとりては、靑天の霹靂と云ふべく、天下

これが是非を論評するに囂々たる、洵に偶然にあらずと云ふべし。佛蘭西の『ラ　ペテイト　レブブリック』紙上に於ける一筆者が、これを以てダーウインの「原種論」に比したるは、聊か過ぎたりと雖、然かも獨逸の『ケル　ニツセ　ツアイツング』紙が云ふ如く、本書が平和運動史上に於て特筆すべき好著たるは、何人と雖ども否認する能はざらん。雖然、彼の議論は要するに半面の眞理のみ。その植民地の商業的價値に關する議論の如き、吾等の到底與する能はざる所也。

二

彼は植民地領有論に於て、かの十六七世紀時代の殖民地が主として母國の市場となり、また原料の生産地となるの利益を有したるに反し、今日の植民地は唯他の獨立國と同樣の關係に依て母國を利益するに過ざるを論じて、左の如く云へり。

「如何なる國民も英領植民地を征服したりとて何等の利益をも得ることは出來ない。植民地の喪失は英國にとりて何等の物質的損害ともならないのである。如何となれば英國の植民地は單に母國と同盟を組織せる所の獨立國であつて、外國が通商上に於て英國を利益すると同一の意味に於て英國を利益する外、別に英國に對して貢税を納めるとか、經濟的利益を與へるとか云ふことは無いのである。經濟的に論ずれば、英國は正式に植民地との關係を絶つことに依り、却て利益を受けるのである。何んとなれば英國は之に依て海防費を減ずることが出來るからである。」

と。これ植民地放棄論にあらずして何ぞ。雖然、彼は如斯き斷言を敢てする前、果して植民地と母國との商業的關係に就きて、精密なる數字的調査を試みたるや否や。試みに英國と其植民地との貿易を見よ。彼は英領植民地の中、母國の生産物に對しても、その關税を適用するものあるを指摘し、外國に異ならずと云ふと雖、然かもその母國に對する輸出入額と外國に對する輸出入額とを比較すれば、實に左の如き相違あり。

千九百七年度　英領植民地輸出額

	輸出額	總額に對する百分比例
母國へ	一七八、六六七（千磅）	四四・七七
英領植民地へ	五九、〇四七	一四・七九
諸外國へ	一六一、五五九	四〇・四四
合計	三九九、二七三	一〇〇・〇〇

千九百七年度　英領植民地輸入額

	輸入額	總額に對する百分比例
母國より	一七六、九五七（千磅）	四六・五六
英領植民地より	六四、五四九	一六・二九
諸外國より	一三六、六四九	三六・一五
合計	三七八、一五五	一〇〇・〇〇

見るべし、「英領植民地の輸出入額の約半分は母國との貿易にして、これに英領植民地相互の輸出入額を加ふれば、まさは總額の六割餘に當ることを。而してこれ唯り英領植民地のみに於て然るにあらざる也。佛領植民地若くは我植民地の如き、更に次の如く顯著なるものあり。

千九百十年度　佛領植民地輸出額

	總輸出額	母國に對する輸出額	母國に對する輸出額の總輸出額に對する百分比例
アルゼリア	一九、七三二（千磅）	一六、四一五（千磅）	八三・三二
其他の植民地	一五、三九四	六、〇九〇	三九・八〇

千九百十年度　佛領植民地輸入額

	總輸入額	母國よりの輸入額	母國よりの輸入額の總輸入額に對する百分比例
アルゼリア	二〇、二一三（千磅）	一七、五一五（千磅）	八六・八八
チュニス	四、二一九	二、三七〇	五六・四二
其他の植民地	一九、五六三	九、〇三三	四六・三二

「注意」　アルゼリア及チュニス以外の植民地の輸出入額は千九百〇五年度を以て計算す

トルコ軍總指揮官ナジム・パシヤ

千九百十年度　日本植民地輸出額

	總輸出額	母國に對する輸出額	母國に對する輸出額の總輸出額に對する百分比例
臺灣	六、一一七（千磅）	四、八九三（千磅）	八〇・〇八
朝鮮	一、九九一	一、五三七	七七・二七

故元良文學博士
—日本心理學の泰斗—

千九百十年度　日本植民地輸入額

	總輸入額	母國よりの輸入額	母國よりの輸入額の總輸入額に對する百分比例
臺灣	四、九九四（千磅）	二、九六七（千磅）	五九・四七
朝鮮	三、九八八	二、五三四	六三・六六

其他獨逸の獨領植民地に於ける、和蘭の蘭領植民地に於ける、また米國の米領植民地に於ける、何れかその輸出入額の大部分を獨占せざるものぞ。以て植民地の母國に對する商業的關係の如何に密接なるかを知るべき也。

知らず、ノルマン　エンゼル氏は、如斯き事實を如何に解釋せんとするか。

明治の文明と近代思想

樋口龍峡

明治の時代も偉大なる明治大帝の崩去と共に過去となつた。昨年も八月以來は最早や大正の世である。けれども過去の追懷は、我れ〳〵新時代の人間の形骸をも精神をも生んだ明治の御世をいかに不世出の英主の崩去と詩人的英雄夫妻の殉死と云ふ大事實に依りて劃られたからとて、直ちに過去として葬るには忍びない。而かも事實は事實である。今や大正も第二年となつた。哲學者流に時間や空間は直觀の形式に過ぎないと大觀すれば、なにも人間が勝手に定めた歲月の區分が、過去の記憶と現在の意識とを別つと云ふ譯もないが、今年は明治とは跨らない切り離された第一の年である。その新春の初頭に於て、偉大なる先帝の御代、未曾有の發展を遂げた光榮ある明治の時代の思想界を回顧するのも、せめてもの心遣りではあるまいか。

歐米の評論家の中には、明治の時代を以て新日本の最盛期であると見て、日本の將來を悲觀する人もある。日本に於ても大正の將來に就て、此に類した考を發表した人も少くない。這般悲觀論の多くは、新日本の國運の著き膨脹と共に、その財政の困難に陥つたことや、軍事上の進歩の大なるに比較し、國の富力の增進が之に伴はない事實や、人心の奢侈に流れるに伴れて不生產的な輸入の非常に超過して來た貿易上の形勢などを論據として居る。即ち主として經濟上の憂ふべき狀態を本とした議論である。併しながら、精神上の問題から同樣の悲觀的結論を下すものも少くない。其の論據は、人心が徒らに浮華に流れ奢侈に趣くことゝ、歐米から輸入された惡時代精神が民心を腐敗せしめて、危險なる思想が時代の青年の頭に漲つて、古來の純日本的精神、建國の根本的觀念を破壞せんとして居ると云ふ、二點にある樣に見える。

人心が浮華に流れたと云ふ事實は確かにある。英雄乃木將軍の生活に見られた樣な、質素なる武士道的精神が、將に地を拂つて去らうとして居ると云ふのは事實である。將軍が時勢に憤激されたのも一つは此點であつた。その壯烈な死は、國民に對してその反省を促した點に於て、無言の大教訓を遺したのは喜ばしいことである。こは決して吾人の想像ではない。吾人の知れる限りに於ても、上流社會の家庭[illegible]乃木將軍の死に刺戟されて、その華美な生活を緊縮したものが澤山ある。けれども人心の浮華に[illegible]とは、決して外來の影響のみではない。古來の史上の事實に徴するに國勢の發展、文明の進歩、平和の繼續などの事情に伴つて、いづこの國、いかなる時代にも逸がれ難い情弊がある。尤も新なる文明、輸入されたる物質的文明は、奢侈の機關と、そを煽るべき刺戟と、及びその現實の享樂を重んずる精神とを輸入して、この形勢を助長したには相違ない。併しながらかゝる傾向は、政治の手心とか、奢侈品に對する課稅とかの外部の手段に由ても、或る程度までは矯正の法がないでもない。思想問題の上から注目すべきは次の謂ゆる惡時代精神である。

惡時代精神と云ひ、危險なる思想と云はれるのは、果して何を意味するのか、普通には功利主義の道德とか、信仰理想の缺乏とか、個人主義とか、社會主義とか、自然主義とか云ふものが、先づその重なるものとして數へられて居る樣である。そして此の等の傾向は、いづれも謂ゆる近代思想の產物である。それ故一派の保守的な、精神問題に迂遠な、爲政家や、舊時代の思想に執着する人々は、近代思想を惡魔視して、專制や偵吏やサーベルの力でこれを壓迫し排除しやうとする。しかもこれ天に向つて唾すると同樣に、彈力の强い思想の反抗力に由て却て自ら禍するものではあるまいか。

吾人は現代の生活に活き、現代の思想を呼吸して居る。鎖國の昔ならばいざ知らず、既に新文明を輸入し、新制度を移植するに汲々たる今に於て、その文明の中に發達し助長された[illegible]話に、新聞に雜誌に、通信の機關の發達した結果、世界の各方面に起れる事變は一日にして吾人の耳に入り、その心を刺戟し、その精神に激動を與へ、之に由て刻々刹那吾人の觀念を變化せしめる。たとひ歷史と云ふ深い根柢を有する舊時代の思想や感情が傳說の社會的遺傳によりて吾人の胸底に深く潜んで居て、幾世紀の間觀念の生存競爭場裡に適者として殘存した强い凝集力を以て根柢を固めて居るとしても、現實の生活と云ふ眼前の强い力と、時々刻々推しよせる刺戟とは、舊思想舊感情の基礎を動搖せしめ、これを變化せしめ、遂には全然一變せしめずんば止まざらんとする。吾人の心はこゝに動搖と不安とを感ずる。不安を感じながら、新來の觀念を或は取捨し、或は舊思想に調和せしめて、新なる道を開いて進んで行くのが、吾人の心理的生活の事實である。これ最近の確實なる實驗に基いた心理學が、意識狀態の研究に由て證明した事實である。如何にもがけばとて、あせればとて、此の變化は避けることが出來ぬ。自ら新思想に侵されずと放言する守舊の徒でも、仔細の點まで顧みて反省したならば、己れも亦た此の新傾向に由て多少なりとも思想上に變化を受けたことを自覺するであらう。

今述べた所は、個人の思想が實生活の壓迫や外來

の刺戟に依りて變化する事實であるが、人には知識の深淺もあり、注意の大小もあり反應性の强弱もあるから、新に入り來る思想に動かされ變化する程度の大小は同一ではない。又た新舊の思想感情の相違の大小に依て動搖不安と混亂との程度に相違がある。時代の思想に於ても亦此點は同樣である。三千年來同一の文明を傳へて居る歐洲に於ても、近代に於ける自然科學の異常なる進步と、その結果たる生活上の大變動に基づいて、近代に至て舊時の思想とは非常に違つた種々の思想上の傾向を現はして來た。この傾向は十九世紀の後半に至て特に著しくなつて謂ゆる近代思想を生じたのである。是に於て新舊思想の衝突が起つて、思想界に前代未聞の大混亂を惹起して、懷疑の不安と煩悶とに陷つたのである。同一の文明の流を汲める人心に對しても此の如くである。況んや我國に於ては、かゝる思想が新文明と共に輸入せられて、深く根ざして居る古來の東洋的思想文明と、衝突したのであるから、その混亂動搖の更に激しいのは論を俟たぬ。さてこの大動搖大混亂に依つて舊信仰や舊理想は破壞せられ、思想界に不統一を來した爲めに舊思想の反抗的精神から見れば、その禍根を蒔いた近代思想を目して危險思想と稱するのも强ち無理な次第ではないけれども、根本の疑問は此新思想が現代の生活と現代の文明とに如何なる關係を有するかの問題である。

近代思想と云ふ言葉は、近頃は廣く用ひられて居るが、さて近代思想とは何ぞやと云へば、人によりて廣くも狹くも解せられて居る樣である。廣く解すれば文藝復興期又は宗教改革運動以後の時代、即ち史學者又は文明史家が近世と唱へる時代に於ける思想である。これに反して狹く解すれば、佛國の大革命以後即ち十九世紀に於て次第に著しくなつた思想を指すのである。然るに十九世紀の後半頃に及んで、此の近代思想の種々の傾向が特に著しく現はれて來て、その間の矛盾や舊思想との衝突に由て、こゝに思想界は混亂の極に達して、懷疑と煩悶との爲めに、一種の陰鬱な悲しい淋しい樣な氣分を一般の人心に與へる樣になつて來たのである。こゝでは此の狹い意味に解釋して說かうと思ふ。

されば、此の近代思想なるものは、單純な一つの思想ではなくて、種々な思想の集まつて出來た一團の思想である。然らばその種々なる思想の傾向とは何ぞと云ふに、悉く數へ立てることは出來ないが、その根本に橫はる主たるものを云へば、唯物觀の傾向と、個人主義と、之に對峙する社會本位の思想と、自然主義の思潮とである。此等の近代思想の根柢を形ちづくれる思想に就ては、予の近著『近代思想の解剖』と云ふ書に、上はルーッソーまで溯てその源流を明かにし、その結果たる近代の懷疑や、更に一轉して新唯心論の曙光を見るに至つた由來を詳說してあるから、詳しくは之に就て讀者の參照を煩はすことゝして茲にはこの諸傾向のみに就て大略を述べるに止めて置く。

文藝復興や宗教改革の精神が民心に與へた影響は極めて多いが、特に著しいものは自由討究の批評的精神であつた。

すなはち古來の傳說や因襲的思想をその儘には受取らないで、あくまで理智の眼で檢査しようと云ふ精神である。此精神は一方には希臘の文明の特質たりし自主自由を喜ぶ氣風に基づき、他方には宗教上の神聖な傳說でも、人間知識の理解に反するものは信ずるに及ばぬと云ふ宗教改革の思想から來たのである。之と同時に經驗的知識を本とする自然科學が次第に發達して、十七世紀末から十八世紀へかけては、著しき進步を示した爲めに、科學の知識を以てすれば何物でも根本から明かにすることが出來ると思はしむるに至つた。自然科學の進步と航海術の進步とは、地理學や人種學の知識を廣めて、生物や人類の自然の狀態に關する知識を得しめ、自然の狀態なるものを知らしめるに至つた。即ちルーッソーの如く自然の狀態を以て理想的のものとなし自然に歸れと敎へる人も出て來たのである。かゝる時勢のもとに科學は益々進み、十九世紀に入つてからはその進步は一層目立つて來てその萬人の眼に確實なる進步を實際に見せた爲めに、こゝに科學萬能の思想は起つて來た。

科學的精神は哲學の上にも影響を與へて、從來の唯心的傾向や獨斷的傾向を衰えさせて經驗的基礎、科學的知識の上に立說の根據を求めさせると同時に、物心平行論となり、遂には宇宙間には物とその運動とが存するのみであるから、精神の如きも畢竟物質の運動の現はれ方に過ぎないと云ふ樣な唯物觀的傾向を生ぜしめた。唯物觀の前には宗教に伴へる奇蹟の如きものは信ぜらるべくもない、否進んでは神や佛と云ふ樣な超自然的なものは信ぜられなくなる。又靈魂と云ふものゝ存在やその不滅も信ぜられなくなる。現に神もなく靈魂もないとすれば、未來はなくて現世があるのみである。來世に重きを置いて人間を救はうとする宗教や宗教的道德の基礎は此に至つて、破壞せられる譯になる。かくして人は唯だ現世の幸福や物質的快樂のみを求めるやうになつて來て、現實主義の基礎は此處に築かれることになつたのである。

科學の進步、特に生物學の進步は遂に生物進化論となつて、生物界に於ては生存競爭の事實が支配して居つて、此競爭に勝つた優者は適者として殘存し、敗北した劣者は不適者として優者の犧牲となつて衰滅すべきものであることを敎へた。此の理論と事實とは、來世の觀念の消滅並びに現實主義と相合して人間の利己心を强め、さらでも利己的に傾き易き人心をして、生存競爭場裡に於ける適者たらん爲めに他人を犧牲とするも已むを得ぬ事であると云ふ思想を生ぜしめ、利他的獻身的道德を不自然なる敎なりと考へしめた。その結果は道德の根柢であつた愛他の情即ち仁とか博愛とか云ふ樣な克己主義の道念を弱めしめて、功利主義や自己本位の道德のみを殘すに至つた。個人主義の道德的方面は此處にその本據を有して居る。

科學の精神から生れた唯物觀や現實主義はかうして、信仰や道德の根柢を破壞したのみならず、其他の傳說や舊思想に對して無遠慮に破壞の力を逞くした。その結果從來人心を支配した凡ての權威の基礎を破壞して了つた。詩人的批評家

はこれを呼んで偶像破壞と稱して居る。
　又た科學の進步によりて、自然力を生產に利用するに及んで、產業上に大變動を生ぜしめ、これと封建制度の瓦解と云ふ事實と相俟つて、社會組織を殆んど一變せしめた。この近代生活の激變と云ふ事實に由て、種々の結果を生じた。即ち大規模の機械工業が起つて、安價な物品を供給するに及んで農村の民は副業を奪はれて疲弊し、勞働者と爲つて都門の工場に集まつた。然かも勞働者の供給の過剩と資本の專制とは賃銀を最低に下落せしめた。農村は固より都門でも婦人は從來家內工業や家政上の勤勉な勞働者であつたのが、その業務を工場に奪はれて、餘暇を買入の外出や社交に費すに至り生產者が一變して消費者となつたのみならず、外出の必要は化裝衣服の必要を來して奢侈の原因となつた。此等の事情は相俟つて生活難の事實を生じ、その極獨身者の增加となつて婦人問題の原因ともなり、奢侈の流行ともなり、風紀の頹廢をも招ぐに至つた。又た農民と地主との歷代の服從關係は破れて勞力賣買の雇傭關係と變つたこと、幷びに男女の獨立生活は、社會的結合力を弱める原因ともなつた。一言で云へば現實の生活の壓迫が、奢侈や社會的結束力の弛緩や、農村と云ふ社會の支柱を弱めたのである。又此の生活の壓迫と物質文明の進步に基づく刺戟の增加とは、近代人の神心を疲勞せしめて、神經衰弱やヒステリー的の人間を增加せしめたのである。
文藝復興や宗教改革の氣運に依つて深く民心に植えつけられた自由の思想と、ルーソーなどに由て敎へられた各人が平等的關係に立てる自然狀態の理想と、生物天賦の權能の思想とは、相結んで自由民權の說となつて佛國の大革命の原因を爲した。此の民權說は即ち一種の個人主義である。然るに科學は舊信仰や舊道德の根柢を破壞して神を虛妄とし、未來を否定し、理想は凡て幻影となつて消滅するに至つた。是に於て近代人は憧憬すべく依賴すべき何物をも有たぬ。殘る所は現實の我れあるのみである。功利主義あるのみである。自由民權の思想と、現實主義と功利的道德とが相助けて個人にのみ絕對的價値ありと見做すに至つた强い自覺はやがて近代の個人主義である。
　近代思想の中には個人主義と反對な潮流も同時に起つて來た。即ち平等主義を重んずる共產主義及び社會主義思想である。彼の自然狀態なるものに於ては、人類は各自々由であると共に平等である。前者に重きを置いたのは個人主義であるが、反之後者に重きを置いたのは社會主義の思潮である。即ち此思想の生じた一面の理由は、近代生活の壓迫である。大工業の勃興に依りて貧富の懸隔が大となつて、少數資本家が大多數の勞働者が死命を制するやうになつて、謂ゆる資本專制を實現した爲めに、これに反抗して各人の平等なる自主の權を恢復せんとして起つた運動が是れである。資本專制は自由放任主義の經濟學の產物である。社會主義はこれに反して資本制度の跋扈を抑へて、各人の平等的自由を求めんとして、團體本位に傾いたのである。社會政策も同様の團體主義[illegible]

を取るか、社會本位を取るかの方向を異にするのである。此に同様な思想は敎育上にも倫理上にも現はれてゐる。之を總括して、社會本位の思想と名づけて置く。
　今一つの近代思想の傾向は自然主義の思潮である。此思想は敎育上にも倫理上にも現はれて居るが、近代の民衆に大なる影響を與へたのは、藝術を通じてゞあつた。藝術上の自然主義は藝術家が人生を觀照しこれを描き出す態度や方法の上に現はれたのである。けれどもその背後には唯物的人生觀や、理想を排する傾向や、强い個人主義の色彩や、權威を無視する社會主義、アナーキズムなどの傾向が潛んで居た。それ故その作物の中の人物にも此傾向が特に著しく現はれて居る。
　謂ゆる近代思想の根柢には、以上略說した樣な種々の傾向が存して居るが、かゝる傾向は我が日本の民心に如何にして浸漸し來つたか、またその諸傾向の中で、如何なるものが特に危險なりと見做されて居るのであらうか。
　明治聖帝の御宇四十有五年間に於ける日本の國勢の發展は今さら說くにも及ばない程明かに長足の進步を爲した。そして國家の統一もまづ〳〵强固になつて來た。之と同時に文運の進步も著しいものがある。けれども今後百年二百年の後に新日本の文明史を書くとしたら、恐くは明治時代は未だ舊制度舊文明の破壞と新文明の輸入、否むしろ模倣の時代に止まるとも見られやう。なる程一部の有識者先覺者は既に批評から進んで自覺に入り、更に東西人文の調和の企劃まで進んだものもあらうが、國民的意識、時代の精神から云はゞ、遺憾ながらも未だ漸く白熱に入りかけた位の程度である。その自覺も漸く端を日露戰役以後に開いた位のものである。併しながら、今こゝで明治と云ふ現在にも等しい名殘惜しい過去の文明を回顧するとしたなら、この四十五年の一小時期の間にも猶ほ多少の區別を立てゝ觀察すべき發展の段階がないでもない。
　さて明治四十五年間の、短いながら出來事の多い國勢發展の緊縮した歷史を、思想問題の見地から區別すると、大よそ五小期に分つことが出來る。第一期は維新開國の始から自由民權說勃興の時代までゞ、破壞時代とも名づくべき時代である。次は明治十年板垣伯等の民權說を主張した時から國粹保存の運動の起る前の時期で、歐化時代とも名づけやう。第三期はこの運動の著しくなつた明治二十年から日清戰役の終つた翌年頃までゞ、反動時代である。第四期は明治三十年日本主義の唱へられた當時から、自然主義の勃興せんとする迄の間で、反省時代とも稱すべきである。第五期は自然主義の勃興から明治聖天子崩去の年までゞ、懷疑時代とも呼ぶべきである。
　第一期の破壞時代は、維新の改革の精神と新開國の氣運と相合して、ひたすら封建時代の舊制度の破壞と新文物の輸入とに熱中した時代であるから、舊時代のものと云へば玉石共に焚くに至つたのは當然の餘勢であつた。そして新文物の輸入は第一の急務とせられ、學校を興して新敎育の普及を謀り物質的文明の知識を取得するに夢中となつて居た。此時代に

此方面での先覺は福澤諭吉翁や中村敬宇翁で、福澤氏の「世界國盡」「究理圖解」「西洋事情」「學問の勸め」等は當年の新人の金科玉條であつて、地理や物理の科學的知識が現世の幸福を齎らすべき新福音として迎へられ、精神的方面では「西國立志篇」の譯者たる中村氏や新島襄氏に由て僅かに傳へられたのみであつた。此時代に於て國民思想の指導者として認むべきは福翁の慶應義塾、中村氏の同人社、新島氏の同志社であつたが、英國流の功利主義と物質的文明に重きを置いた福澤氏の義塾が天下の俊秀を獨占した趣のあつたのは無理もない次第である。

かゝる事情の下に、結髪や裃は水兵服の如き洋服や帽子と變り、破風作りの輪奐の美は粗製のペンキ塗の殺風景に改められ、舊慣舊習はもとより、傳來の信仰も道德も文藝も美術も凡て時代遲れの一語の下に葬り去られ、之と同時に優秀な宗敎的古美術は寺院と共に破壞せられ、傳來の寶物は二足三文に賣り拂はれ、名工の苦心を籠めた蒔繪の菓子器よりはギヤマンの皿が珍重がられ、探幽や雪舟の名畫よりも、石版畫の洋畫が貴ばれる世の中となつた。

此時期に於て民心を支配したものは、福翁を始めとして當時の先覺に由て輸入された英國流の思想である。科學的文明の産物である。道德に於ては功利主義と現實の幸福とが理想とせられ、知識に於ては地理や理學や天文や醫學の實用的の科學が第一に重んぜられ、政治上には自主自由が尊重せられた。されば開國の始めに於て既に近代思想の自由平等の思想や唯物的傾向は我國に輸入せられたので、その唯物觀や科學の精神に伴ふ破壞の傾向か、如上の舊制度舊思想の打破となつたのである。

この傾向はなほ進んで、明治七年には既に民選議院設立の建議が、當時の自由民權思想の本尊たる板垣伯に依て提出された。又その前年には福澤翁は「文字の敎へ」の中で漢字の次第に制限すべきことを說き、これ主として文章上の議論ながら、その後翁の說いた所によれば漢學に伴ふ舊思想より解放さるべき一助ともなると云ふ考へであつた。然るにその翌年には明六雜誌の西周などに由て、羅馬字採用論さへ提出された。恰かも是れ今日の日本がなほ問題としつゝある所のもので、以て當時の破壞的精神が如何に急進的であつたかを想見するに足る。

此の如く凡て新來の物質的文明を採用して舊制を破壞したけれども、なほさすがに古來幾百年の積習は急に改め難く、この新文物と幷んで舊慣習の餘勢を保つものもあり、多少の反抗もあつて、新舊事物は混在して混沌たる狀態を保つて居た。又た宗敎の方面に於ては、物的文明の直ちに摸倣されたのと異つて、耶蘇敎は德川氏時代から國を危くせしめる樣に考へられて禁止されて居た程である上に、宗敎に固有な保守的精神の存する爲めに、佛敎などが偶像崇拜の迷信とされたに拘らず、直ちに變つて民心を支配する譯には行かなかつた。その公の禁制の除かれたのも明治六年のことであつた。されば此時代は破壞の時代で未だ混沌たる有樣で居たのであるが、その中に新しいのは唯物觀や功利的思想や自由平等の思想[illegible]のものに過ぎなかつたのである。

第一期に於ても既に多少目だつて來た自由民權の思想は、此時代に入つてから急に進展した。即ち明治十一年には自由民權說が唱へられ、翌十二年には國會開設の請願が提出された。これと同時に此思想を鼓吹する樣な書物が續々飜譯され又は著はされた。中江兆民の「民約譯解」馬場辰猪氏の「天賦人權論」等を筆頭として特にルーッソー、ボルテール、モンテスキウの如き十八世紀の佛國哲學者の政治論の飜譯又はこれを祖述せる著書が澤山出版されて、進取的の人々の大歡迎を受けた。又た兆民は「政理叢談」なる雜誌を出してかゝる思想の鼓吹に勉めたのである。

此に注意すべきは第一期に於て、主として英國流の思想が輸入されたに反して、第二期に於ては、佛國の大革命に影響を與へた學者の說が輸入されたことである。勿論此等十八世紀の佛國學者の說は、英國に入つてその古くより存した政治上の自由主義と結合して、更にミル一派の學者によりて繼承されたのではあるが、破壞時代が漸く終つて、進んで何等かの積極的旨趣を實生活に最も密接した政治思想の上で現はさうとする時期に入つて、這般近代思想の淵源たるルーッソーの思想が輸入されたと云ふことは、近代思想が日本の民心に浸漸せんとする劈頭第一の事實として興味のある事件であつた。勿論これには、ボアソナード氏を通じて佛法の精神が法律上に輸入された事實や西園寺侯一派の佛國派學者が歸朝して、その新しい[illegible]を喚起した力も大に與つて居たのであるが、此民權論時代の言論著書の貢獻はさらに大なるものがあつた。

この氣運を受けて、文學上に於てもリットンやヂスレリーなどの政治小說が流行して、當代の政治家や政論家までもその飜譯に指を染めたことは、自然の勢とは云へ注目に値する。明治十二年に織田純一郎氏がリットンの作を譯した「花柳春話」が、恐らくその嚆矢であらう。これに次で關直彥、藤田鳴鶴、尾崎學堂等の政論家も、此種の飜譯を公にし、今の文壇の耆宿坪内博士もリットンの譯「慨世士傳」等を世に出した。此風潮はひとり飜譯に止まらず、創作の上でも、政治小說は一時全盛を極めた。矢野龍溪の「經國美談」、末廣鐵腸の「花間鶯」や「雪中梅」、東海散士の「佳人の奇遇」の如き皆當時の産物であつた。これを見ても如何に民心がまづ政治上の思想に醒めたかゞわかる。

此の如く民心は政治に興味の中心を置いた樣であるが、これと幷んで科學的知識の方面に於ても泰西の新文明を輸入する熱心と事實とは著しいものがあつた。明治十年には南校東京大學と改稱され、十二年には敎育令が出る、學士會院が設けられる、十三年には「學士會院雜誌」が發刊され、同年に東京大學が第一期卒業生を出した。その翌年には「東洋學藝雜誌」が創刊されて、專ら科學の思想を鼓吹した。此等の事實はいづれも科學の精神を普及し、科學萬能の思想を形づくらしめる原因を爲して居る。政治小說と相幷んで、此の當時

「二十世紀」とか「海底旅行」とか「月世界旅行」などの樣な科學萬能を謳歌する飜譯小說が續出して大歡迎を受けたのは此の氣運を反映して居る。

敎育上に於ても、明治二年に各府縣に小學を設け、三年には府下に中學を起し、五年には學制の頒布と共に、女學校が東京に設立され、六年には外國語學校を立てた。此等は第一期のことであるが、この主運は第二期に入つて前述の如き有樣となつた。これ新代の國民の思想に科學的文明が次第に浸み込みつゝあるを示して居る。民間に於ても明治十四年には西園寺侯や宮城浩藏岸本辰雄等の諸氏が、恰かも全盛となりつゝある佛國流の法律を敎へる目的で明治大學を創立し、翌十五年には大隈伯が早稻田に專門學校を起し、十九年には明治學院が創設され、二十年には官立の音樂學校が開かれた。此等の敎育上の諸設備は、その目的とする學科には相違はあるが、いづれの學科にせよ近代の科學的文明の精神を傳ふるからは、その學術の知識と共に、近代思想の根柢を爲せる諸傾向を陰に陽に傳へずには已まないのである。

此等の事實の外に、此時代の民心に少からぬ影響を與へたものは、新聞雜誌の發達であつた。維新以後に於ては、明治元年に柳川春三氏によりて「中外新聞」、福地源一郎氏によりて「江湖新聞」等が發刊され、同年に横濱に於て岸田吟香氏が「藻鹽草」を發行したのを嚆矢とする。爾來第一期に於ては、明治四年に「横濱每日新聞」、翌五年に「東京日々新聞」及び「報知新聞」、七年には「讀賣新聞」及び「明六雜誌」が發行せられて以來、次第に發達して來て、第二期に入つては盛々盛況に向ひ、新聞では「大阪每日」「時事新報」雜誌では「學士會院雜誌」「東洋學藝雜誌」の外に「六合雜誌」「反省雜誌」及び「國民之友」「哲學雜誌」の如き有力なものが出版さるゝ機運と爲つた。「國民之友」が新日本の文壇に寄與したことは、十八年に於ける坪內博士の「小說神髓」及び紅葉一派の硯友社の結社、二十年に於ける二葉亭の「浮雲」などゝ共に第三期の氣運に關係があるからそれに讓ることゝするが、兎に角讀書の趣味のなほ幼稚であつて、書籍出版もなほ盛運を誇ることの出來なかつた時代に於ては、是等の新聞雜誌が人文の開發と新文明の傳播普及に非常な大勢力を有つて居たことは言ふまでもない事實であつた。特に當年の明六社の如きは森有禮、西周、西村茂樹、大槻文彥、加藤弘之、田中不二麿、中村正直、辻新次、津田眞道、津田仙、九鬼隆一、畠山義成、福澤諭吉、杉亭二、箕作秋坪等の當代の先覺たる碩學をその社員として居つて、此時代に於ける思想界の指導者となつて居つた。是等の學者は概ね唯物論的哲學の思想を奉じ自由を說き理學を談じ、ミルやスペンサーを祖述して居つたから、明六雜誌が近代の唯物觀や功利說を民心に傳ふる點に如何に勢力のあつたかは察することが出來る。但し當代の民心は這般唯物論の思想が重大なる結果を生ずるまでにそを理解する程進んでは居らなんだ。隨うて此等の人々の思想がその當然齎らすべき結果を實現したのは、第三期以後の時代に於てであつた。

要するに第二期に於ては、自由民權の政治的思想が中心なるカーレントであつて、その根底に於て、及び科學的知識の普及に伴れて、その精神に宿れる唯物觀の傾向と功利主義とが直接に間接に當代の民心に侵入して、一方には過去の囚はれたる思想や慣習から人心を解放せしめたと同時に、第一期に於ける破壞的思想を受けて、舊理想、舊信仰はもとより、一切の舊時代の產物に對して、善惡美醜の批判なく之を打破せんとする[illegible]心醉時代、歐化時代であつたのである。之と同時に社會上に於ても極端な歐化主義に走り、特に十八年頃に至つて井上侯の政策は華麗政策と呼ばるゝまでに極端な歐化主義に陷つた爲めに、爰に反動は勃然として起つて國粹保存の運動を呼び起した。此運動によつて明治人文史はその第三期に入るのである。

（次號完結）

新春秋

大正新春の感

樋口龍峽

○光榮ある偉大なる明治は既に過去となりぬ。しかも大正元年は明治四十四年に跨れり。こゝに新春の曙光を迎へて大正の元旦は始めて到る。諒闇の新年謹愼を要すと雖も、一年の計は元旦に始まり、新時代の覺悟はその初頭に決す。新代の民、今に於て須らく奮起一番、更に光榮ある將來を招致せざるべからず。

○明治聖天子御一代の宏業が赫々たりしが爲めに、或は將來を憂慮するものなきにしも非ず。されど妄りに悲觀するを休めよ。允文允武なる新天子の上に在ますあり。大享以レ正、天之道を以て君臨し給ひ、剛上而尚レ賢能止レ健。大正の將來は懸つて國民の意氣にあり。努めざる可けんや。

○曰く財政の膨脹、曰く輸入の超過、曰く物價の騰貴、その他曰く何曰く何。數へ來れば悲觀の種も少からざる可しと雖も、半面より觀れば、これ國勢の發展、生活の高上の結果に非ずや。ひとり民力枯渴の聲に至ては寒心すべきものありと雖、國勢進展の大勢を以てすれば、豈に救濟の途なからむや。要は緩急を按配し、有無を通ずるの經世的手腕に缺くる所あるが爲めのみ。

○國亂れて忠臣現はれ、家貧うして孝子出づ。究して而る後始めて通ずるものは勢なり。英雄は究地に陷て却て運命を開拓し、偉大なる國民は難境に在て、能く進展の活路を開く。神は自ら助くるものを扶く。運命は半ばは自已の作爲するところ。憂きことの猶ほ此上に積れかし、限りある身の力ためさん。心裡一脈の努力の熱火あらば、精神一到何事か爲らざ

らん。

○艱難は人を玉にし、天は禍を下して英雄を試練す。如今財界の究狀、政界の紛擾、いづれか天が國民を試練するものに非ずとせんや。世人臺閣目下の風雲を見て、憲政の退歩と爲し、悲觀するものありと雖も、吾人より見れば、然らず。理の正否は暫らく措き、陸軍と內閣と、各々その主張を固守して正々堂々の陣を張り、互に取つて下らず、遂に總辭職を見るに至れりと雖も、之を從來の情意投合の如き私情による非立憲的交迭に比ぶれば、タイムス紙の評せる如く、憲政史上一段の進歩を見る。吾人は唯だ今後の國民の覺悟に徵し、帝國の將來を卜せんとす。

○明治の大業はげに赫耀たりき。されどそは國土の發展、制度の改更の如き、云はゞ外面的發展に於て然りしのみ。內部の精神的方面に於ては、遺憾ながら國民的意識が漸く自覺に入りしに止まり、未だ懷疑の狀態を脫せず、むしろ悲觀と絕望との憂色を帶ぶるものありき。此の狀態を脫し、新なる光明を認めて帝國の精神的統一を謀らんことは、大正の新世代に遺されたる最も重大なる任務なるに似たり。

○蓋し別項「明治の文明史論」に述ぶるが如く、西歐に於ても先世紀の末に於て、新舊思想の衝突と新思想の唯物的人世觀の結果として、思想界は懷疑と煩悶の暗雲に包まれ、自然主義の思潮に至てその極に達せりき。我が刻下の思想界は恰かも此思想を受けて同樣の憂色に蔽はれつゝあるなり。然るに西歐に在ては、今世紀との過渡時代以來、唯物觀は愈々究して更に一轉し、人心は肉より靈に醒め、新唯心論の靈的光明の曙光を仰ぐに至り、此最新思想は今や旭日沖天の勢を以て新理想主義の道德に到達せんとす。我が大正の新世代は當に此氣運を受けてこゝに二たび進展せざるべからず。

○最新の唯心的傾向とは何ぞや。純理上の論議は姑らく措きこの傾向は實行に於ては努力主義なり精力主義なり。立脚地に於ては人生本位なり、人格主義なり。人生を以て無理想無解決なりと觀ぜずして、理想主義を取りて人生の目的を繹ねんとす。現實に立脚すと雖も、唯物觀の如く懷疑的に非ず。理想を覔むと雖もロマンチシズムの如く空想的に非ず。その道德は舊唯心論の如く消極的に非ずして積極的なり。自己の中心生命の發展の中に人生を解決せんとするなり。此思想や正に發展膨脹の途上にある、我が帝國民心の好指導者たるに庶幾し、

○江木冷灰博士に新著あり。名けて「最近思潮國家道德論」と云ふ。近代思想の諸傾向を政治的道德上に觀察して、唯物論的道德の弊を摘發し、最新思潮の新唯心論的道德を以て立憲國民の眞道德とす可きを論究す。蓋し近來會心の好著なり。その論理に於て、及び近代思想の解義やその適用に於ては、吾人と多少見解の異るものなきに非ずと雖も、その結論に於ては全然吾人とその見を同うす。

○冷灰博士は明治の前半期を以て舊唯心論の勃興期とし、その中間期を舊唯心論の頓挫せる時期とし、その後半期を唯物論の優勢を誇れる時期なりと看做す。蓋し博士は、明治の初年は、歐洲に於ては新唯心論や新ロマンチシズムの風潮[illegible]へて、唯物論と寫實派文藝に入りし時代なれども、此傾向は當時の先覺者に由て唱へられきとは云へ、一般人心はそを理解するに足らざりしが爲めに、その前代の風潮が先づ勃興して、而る後に西歐の變遷と同樣の史的發展を見たりと爲すが如し。此時期の區分に就ても議論の餘地はあれど、日本の明治思想史が歐洲の近世思想史の反覆を演じたりと看破せるは流石に烱眼なり。

○されど、此等の點よりは、近代思想の傾向を政治的法律的思想の中に覔めたる觀察の鋭利と、法律家などにありがちなる思想問題の蔑視や誤解の存せざるのみならず、大體の傾向を達觀して要點を得たること、及び法律家として文藝や哲學にまで行き涉れる博識とに於て、吾人は深く冷灰博士に推服す。但し例の上場禁止に依て邦人に有名なる『マグダ』に對する博士の見解は、少しく牽强附會の嫌なきにしも非ず。

○冷灰博士の筆は時に冷罵骨を刺して快哉を呼ばしむるものあると共に、常人の言明を憚るが如きことを、正々堂々と論破するに於て頗る大膽なるものあり。後者の一例は敎育勅語論にあり。曰く「形式的主權論の上よりすれば、陛下が國民に忠義を命じ給ふに於て、何等支障なきは勿論だが、國家道德の上よりすれば、冷灰は此君にして此臣あり、此臣にして此君あり、君臣各其道を守ると云ふのが、我が國體の精華と確信する。敎育勅語の如きも、陛下はむしろ第三者たる地位[illegible]ら國民と共に[illegible]國體の精華は煥然として其の光を放ち、此敕語に對する國民の信念は益々固く益々强きを致すのだ。然るに此敕語の內容を以て恰も陛下が陛下に對する忠義を國民に命じ給ふが如くに解し受働的道德主義の下に形式的偏狹の小理窟を附會し、單に之を演繹的解釋に局限せんとする傾向あるは、敕語の本旨でないと察しまつる」と。

○何等快心の文字ぞや。慈善は施さるゝものより請求すべきに非ざると等しく、道德的義務はそを受くべきものより要請すべきに非ず。强制されたる忠義と止むを得ず施せる慈善と道德的に見て何等の價値かある。博士の言は吾人の將に云はんとする所を道破せり。

○博士は又た米國のラインシュ敎授が、敎育敕語の曲解の罪を官僚一派の徒に歸したる評語を引用せり。曰く「敎育敕語の官僚的解釋と敕語を信仰したる觀念とは、道德的敎育に手細工的虛飾の色彩を添え、日本國民中に道德思想の自然的發展力及び刺戟を薄弱ならしめた」と。曲學阿官の徒此言に對して何の顏色かある。

○吾人は大正の劈頭に現はれたる此の書を以て、大正國民の常識讀本たらしめんことを冀ふと同時に、又たその結論をして大正の新世代の豫言たらしめんことを切望するものなり。

案頭新刊

◎故藤井宣正君の苦心の著『佛教辭林』の原稿は、未成の儘氏が世を逝つた爲め、島地大等氏が之を補つて、南條博士の校閲を經て出版された。藤井君が樗牛と同年に死んでから、恰かも十年だ。君が此書の著述に費した年月と繼承者の費した歳月とを併せても、亦十年の苦心の産物である。その苦心は此書を手にするもの、何人の目にも直ちに分らう。語數は必しも多いとは云へぬ。一切の佛語を網羅したとは云へまいが、國文學などに現はれたものは凡て收めてある。特に説明の簡潔で要を得た點とその出典を明かにした點と、異意から發音まで明かにした點とが長所の樣に見える。同君の十年の紀念としては絶好紀念である。著者の眞面目な努力に由て、何人も希望する手頃な、しかも正確な佛教辭典の得られたことは、學界の爲め喜ぶべきである。印刷、製本、體裁のよいのもうれしい。附錄の發音索引と佛典八種索引は極めて重寶である。――龍峽記
(明治書院發行特價三圓六十錢)

◎わが出版界近時の中心傾向が那邊に在るか、一寸見當が付兼れるが、安物の飜刻の流行が下火になつて、相應に骨の折れた飜譯書類の刊行が盛んならんとするは喜ぶべきことである。それもまじめな學術上の名著や和かい方面のものでも永久的の生命のあるクラシックス物の大作に追々しつかりした譯者を得んとする氣運の見えるのは大に歡迎すべき傾向と言はればならぬ。最近學術上の大飜譯としては阿部能成氏のオイケンを譯した『大思想家の人生觀』があり、高橋文學士(穰)の[illegible]

[illegible]行定價一圓三十錢)がある、殊に後者は四百五十頁のさして大册といふのでもないが、巧みに近世心理學の理論と實驗を綜説して、一系整然として亂れざる、著者の論理的頭腦の一大驚異たるを示すものである。殊に科學者藝術家宗教家等の高等精神作用の學理的解剖に於て著者が一家の卓拔なる見識は從來の天才研究以外新方面を開拓したものである。譯文はこの類の書にこれ迄ない平易な文章である。殊に篤學一世の欽仰をうけた故元良博士が周到細心の校閲に成つたものではあり故博士の遺芳をこの書に偲べば一層懷しい思ひがある

◎もう一つ軟文學方面の大飜譯は兼々評判の高かつた文藝委員會の『フアウスト』である。原著の價値は今更いふも野暮、譯者森鷗外博士の力量もとよりいふ丈野暮、殊にこの飜譯はいつもの口譯筆記ではなく博士が陸軍省で公務の余暇に筆を執られたものであつて一字一句名家の心血に成つたものである。それに從來二三杜選な譯書もないでもないが、大抵第一巻の翻譯に止つて第二巻に手をつけた者は一人もなかつた。今度はじめて第一第二兩卷共に完壁の譯文を得、その上精しい註釋解題まで備はつて地下のゲーテもはじめて自分の圓滿具足の面影の傳へられたを喜ぶであらう。

◎三好學博士の『植物生態美觀』は十年前に出て既に日本の科學界が世界に誇るべきクラシックスの一となつた。今回出た改訂增版は價格も少し昂つたが、博士が十年の蘊蓄を傾けた百頁の新訂增記事と數十葉の美麗精巧を極めたコロタイプの圖畫に依つて全然舊觀を改めてゐる。この書の出版は科學界の一奇蹟たるのみならず、また大正出版界の一大奇蹟と稱すべきものである。(富山房發行定價壹圓八十錢)

◎遞信管理局長棟居喜久馬氏は官吏社會に珍らしき篤[illegible]

[illegible]間に一味の精神味を鼓吹しつゝあるは人の知る所であるが、今回『新帝勅語と修養』の一書に依つて氏が實務家として得來れる社會觀處世觀道德觀を系統的に綜説してゐる。一部の勅語衍義として教育家が訓話の資料とすべく、常人は這裡に實生活の活教訓を學ぶべきである。(富山房發行定價九拾五錢)

◎なほ富山房が昨年掉尾の大出版として落寞たる出版界に春色を生ぜしめた『家庭百科事彙』の新版は既に一擧五千部を賣盡して再版の準備に忙殺せられてゐる時勢の要求の向ふところを知るべきである。『西洋全史』の分册出版も近東問題の勃起と共にこの方面の需要が盛んであるといふ。『維新土佐勤王史』に至つては悉く血肉の活文字讀書界の單調を破ると多大であつた

◎樋口龍峽氏が積年苦心の結晶たる『近代思想の解剖』が愈出版された。上はルソーより下はベルグソン、オイケンに至るまで西歐近代思想の變轉起伏の迹は、氏一流の社會學的見地より一系整然たる體系の下に明快な論斷批判が下されてゐる。内容の詳細は次號に讓り不取敢この方面の研究興味を有する讀書家に報告しておく。(廣文堂發行　定價壹圓五拾錢)

◎この外の新刊書目　(次號に細評する)。

○コザック　トルストイ伯作　矢口達譯(小石川新陽堂定價一圓)
○歌文新話　金子薰園著(日本橋啓成社定價七十錢)
○面影　青山霞村著(京都梅竹書屋定價五拾錢)
○聖武天皇論　上領三郎著(牛込元錄會定價五拾錢)
○エピクテタス遺訓　高橋五郎著(神田玄黃社定價一圓)
○青年の敵　野依秀一著(實業の世界社定價壹圓二十錢)
○加賀騷動記　山路愛山著(神田敬文館定價七十五錢)
○支那國債と列强　大山嘉藏著(牛込文影堂定價七十錢)

憲法は一大教科書なり

(早稻田小學校に於ける演説)

主宰伯爵　大隈重信

多分此處に御集りの小供達は近い所だから、往來で時々御目に掛つた事もあるでせう。私は全體小供が大好きで、小供を見る事を樂みにして居る。澤山の小供だから一々見覺えはないが、皆さんの方からは多分此老爺さんの顏を知つて御出でせう。今日は此處の校長さんから招待され、皆さんに逢つて何か話して呉れといふ事で、私は喜んで參りました。今此處で御目に掛るに仲々大勢の小供達である、そして前の方の小供達は小さい。中から後の方になると大分大きい。此小供達に皆に能く分る樣に話すことは六かしい。

面白い御伽話でもして皆を喜ばせてやりたいが出來ぬ。此お老爺さんも矢張り小供の時はお話を聞いたり、したりすることが好きであつた、それ故昔はお伽話も可なり知つて居たのであつたが、今は大抵忘れて御話することが六かしい。けれども三つ子の魂百まで。昔の心が殘つて居るから、今日は一つ小供心に歸つて、何か面白い御話をして見たいと思ふ。先づやつて見るんである。

全體世の中といふものは、物が皆繫つて居つて切々ではないのである。先づ小供を中心として考へると、小供には御父さんとお母さんとある。お父さんとお母さんを生んだものはお祖父さんお祖母さんである。お祖父さんお祖母さんの親は曾祖父さん曾祖母さんになる。曾祖父さん曾母さんの親、其親の又親と次第に尋ねて行く一番親の御先祖になる其又小供が成長して立派になると、御婚禮がある。すると又子を持つ、子に子が生れて孫を持つ、曾孫を持つ。それが皆一番初めの御先祖に繫がる。繫りは小供である、人間は年を取れば皆死ぬ。年寄が死ぬと小供は親爺になる、そして自分の爲に働く、市の爲に働く、府の爲に働く、國の爲に働く、家を作り、子を持つ、孫を持つ、子孫繁昌する。此樣にして、子。親。子。親と次第に進んで行くので家は繁昌し國も盛になるんである。是から御話をするのは、此長く繫り行く世の中といふものが昔如何樣であつて、それが如何樣に移り變つたかといふ事である。

此移り變る世の中に於て、我々の先祖、曾祖父さん、祖父さん、皆同じ事をして來て居る。先祖、曾祖父さん、祖父さんのした事は子も孫も曾孫もする。皆同じ事をする。只小さい子が大きくなり、子を持ち孫を持つといふ事ばかりでない、其他の事まで何でも同じ事をする。小供達は知るまいが、昔は先祖以來少しも變つた事をせぬ、何も變つて居らぬ、變らぬといふは少しも動かず、沈滯して居たといふ事である。百年前も二百年前も三百年前も今と同じ事[illegible]今まで同じものを見て居る。それ故心も昔と變つた事がない、皆古いんである。皆さんのお祖父さん、ともしたらお父さんまでが皆左樣なんである。お前さん達は知らぬが昔は電氣燈も瓦斯燈も電信も、郵便も、電車も、馬車も、蒸氣車も蒸氣船もなかつた。勉強する時には行燈である。貧乏な人はお月さんの光で勉強をした。今の書物ならお月さんでは讀めまいが、昔の書物は大きな字であつたから讀める。如何かすると支那では雪や螢の光で勉強した。それが今日は電氣燈あり、瓦斯燈あり、往來までも明るくなつて居る。全體文明といふ事は世の中が明るくなるといふ事である。此邊は暗いが、新橋や日本橋は夜中でも明るい、眞晝の樣に明るい、智惠があると世の中の事が皆分る。すると頭が明るくなる。之を文明といふ。文明は世の中の進歩に從つて段々善い事の數を増すものである、お前さん方はまた小供だから分るまいけれども、是から成長して段々世の中に働く樣になると分つて來る。只今の樣に斯ういふ結構な物のたんと出來たのは、是は獨り手に爲つたものではないんである。此事が今日のお話の一番大切な處である。此ういふ善い事を誰が教へて下さつたかといふにそれは明治天皇であらせらるる。今に其御寫眞がある。方々にある。勢ひ強い、髯の生いた、劍を杖いた、偉らい御方である。是が明治天皇である。此天皇が我々に善い事を敎へて下さつたのである。文明といふ斯ういふ結構なものを我々に與へて下さつたのである。此御恩は誠に難有い事である。日本の國民は小供でも老爺さんでも同じ事に

忘れてはならぬのである。今日は此御恩の難有いお話をするんである。

天子樣は何故に難有いかといふ。其難有い事は澤山ある。仲々左樣容易く數へ擧ぐる事は出來ないけれどもそれには源がある。根本になるものがある。東京の人は水道の水を飮む。大抵の家には水道を持つて居る。此水は何處から來るといふに、多摩川の奥に木を伐る事の出來ぬ深い山がある。大木が森欝として日の光を許さぬ山がある。昔から少しも伐らぬ山がある。此山は年中雨が降ると、それを蓄へ置く。其水が地中を潜つて流れ出て河となる、それを引いて來て我々が飮むんである。其源を探れば山川の澤山ある森林の生い茂つた所である。只今は晝である。誠に天氣が宜くて結構である。此光は何處から來たかといふと太陽からである。大陽が光を與へる。日が照ると明るくて且つ暖かい。それで米も出來る。豆も麥も御芋も出來る。お芋はお前さん方も好きであらう。薩摩薯なんど殊に結構である。只結構なばかりでない。お米の出來ない年には代りに喰べて生きる事が出來る。此難有い光と熱は何處から來るといふと、無論太陽からである。先帝の御恩は誠に此太陽の如く、又上水の水の如く、其色々の難有い事の源は何處であるかと尋ねて見るとそれは憲法である。

憲法は面倒であらう。後で先生から能くお聞きなさい。今聞いても覺えるには六かしい。少し位話した所で容易に分らない。只憲法とだけ覺えて置きなさい。明治天皇は此憲法といふ御褒美を我々に下さつたんである。爺さんにも婆さんにも、皆さんにも私にも、國民皆に同樣に下さつたんである。之を守ると家が榮え、國が榮え、身體も強くなる。大切なものを下さつた。色々の難有い事の源は此憲法から來て居る。之を持たぬ國民ほど憐れなものはない。

日本の隣に支那といふ國がある。日本の十倍もある。日本人の彼是れ十倍の人間が居る。けれども其國には明治天皇の樣な偉い天子樣がないから、支那人は憲法といふ樣な大切なものを持たぬ。支那の天子は左樣いふものを國民に與へなかつた。それ故世界のものが苛める。我々も時として苛める。東京へも澤山來て居る、其處らを通る。時としては小供達がチヤンヽヽといつて苛める。支那といふ大國が今病人となつて病院に入つて居る。死ぬか生きるか分らぬ。何故となれば世の中が暗い、そして世を明るくする法を知らぬ。その爲に今生きるか死ぬかといふ派目になつて居る。又更に印度に行くと如何であるか。印度はお釋迦さんの生れた所だが、お釋迦さんを知つて居るだらう。お釋迦さんは偉い人だが、其子孫の國が意氣地なく、矢張り支那の樣に方々の國から苛められ、遂苛め拔かれて息を引き取つて仕舞つた。大層暖かな土地で、格別耕さなくとも結構なものが澤山に出來、生活は樂である。お釋迦さんのいふ極樂淨土は何も死んでからの世界でない、現在彼處にある。それ程な善い土地が今如何なつて居るかといふに、早く文明が開けて金もあり、國も盛であつたけれども、病氣が重つて到頭死に、日本と同盟國である英吉利といふ國が今其國民の世話をして居る。此國も憲法を持たなかつた國である。此樣に憲法を持たぬ。文明を進むる事の出來ぬ國は皆亡んで仕舞つた。歐羅巴といふ國に皆亡ぼされて仕舞うんである。世界中に名高い、五千年以上の歴史を持つ國が、今や其人口十分の二は歐羅巴人であり、其土地の三分の二は歐羅巴人が住んで居る、僅か三分の一が印度人の住んで居る所である。歐羅巴人に皆亡ぼされるんである。亡ぼされれば亡國の民といつて、是れ程憐れなものはない。丸で牛か馬の樣に苛められる。左樣云ふ所の國民には皆涕垂れ小僧ばかりで、生涯ウダツが上らずに死ぬんである。處が此處に居る小供達は善い天子樣を持つたから、此うやつて好い學校へ來て美い先生に教はるんである。それを只無意味に言つてはいけぬ。是れは一體誰の力であるか、皆天子樣の力だと斯樣考へる樣にならなくては駄目である。悪者が來て小供を苛める。するとなぜ小供を苛めるか、弱いものを苛めてはならぬといつて、巡査が來て叱る。野蠻の國へ行くと弱いもの苛めをするが、日本ではそれがならぬ、是は天子樣の善い事をして下すつた御蔭である。何の爲かといふに憲法である。其御蔭なんである。此憲法は今から僅か二十年前に下さつたものだが、早く明治天皇の御頭の中には天照皇大神宮樣や神武天皇樣や、其他の御先祖達が御現れになり、日本も今迄の樣なやり方ではいかぬとて天皇を御輔佐あり、維新の大改革を遊ばした。其時代に色々な豪傑が起つた。繪草紙屋等に澤山繪姿がある。木戸とか、岩倉とか、西鄕とか大久保とかいふ人達がそれで、之を昔でいへば皆神樣である。天子樣は此日本を強い國にしやう、世界の文明の國に劣らぬ樣にしやう、支那、印度の如く意氣地なく外國のものに苛められぬ樣にしやうとて、此やうな色々の神、八百萬の神を集めて御相談あり、今日迄のやり方は悪い。五千萬の人民が何でも一所に力を協せてやるんでなくてはいけぬとなされ、皇祖皇宗、其他の色々な人と御相談になつて五個條の御誓文など下さつた

[illegible]ぜらるゝ御用意であつた。此憲法が[illegible]行はれて日比谷に帝國議會も出來、全國から代議士が集つた。皇族方、大名達、學者、其他日本の國に色々骨を折つた人、及び大金持等で衆議院の外に別に貴族院が出來、此貴、衆の兩院で國家を治めて行くといふ事になつた。明治天皇の御幼少の時に先々帝の崩御があり、天皇は直に御即位になつた。御即位になるや否や大政維新となり、大政維新となるや否や、五個條の御誓文を賜はつて國の爲に國民と共に御盡しになる思召を誓はせられた。是は皆何うかして此國を強うし此國民を樂にしてやらうとの御思想から出たのである。

すると五千萬の人民は天子樣の小供の樣なものである。天子は澤山な小供を御持ちになる。如何に小供を多く持つても天子樣に及ぶものはない。五千萬の小供である。御先祖から小供を可愛がつて御育てになり、此樣に國が盛になつたのだから、小供を可愛がつて一所になり、世界の大金持のある、偉らい學者のある、優れた文明國に負けぬ樣にしやうとなさつた。それ故小供を自身の御膝元に御招きになつた。小供を保姆や里子にやると親子の愛が薄くなる。父や母の愛する情が如何しても薄くなる。小供も亦本當の親を親と思はずに乳を呉れたものにばかり懷く樣になりたがる、處が今迄は天子樣の下に將軍があつた。皆さんには分るまいが家へ歸つてお祖父さんか、又はお父さんお母さんに聞けば分る。その將軍の下に更に年寄。若年寄。寺社奉行、町奉行などいふものがある。それが小供を可愛がればよ

憲法は一大教科書なり

いけれども[illegible]或は苛めるか知れぬ。大して聞かぬけれど少しはあろも知れぬ。が昔程ではない。此樣に親子の間に挾まるものが澤山あつたから、親子の間が隔てられていかん。そこで將軍も罷め、年寄、若年寄も罷め、寺社奉行、町奉行、與力、同心までもすつかり廢止になつた。此に於て日本の國民は一人殘らず皆天子樣の直の御家來となり、親子の間を妨げるものがなくなつた。天子樣が小供を直接にお負いになり、小供ももむづからずに穩かになつたんである。「朕の親愛する臣民」とか或は「國民は朕の赤子なり」といふ樣な御話が折々の敕書に現れる。そこで四民平等といふ事が、天子樣の御頭の中から出て來た。即ち天子御一人では政治を爲さらぬ、爾等臣民と共に此國を治むるといふ思召なのである、此小供達は誠に立派な小供だけれどもまだ小さい。前の方の小供達は特に小さい。多分十斤の重さ位は持てるか知らぬが、二十斤だつたら六かしからう。けれど二十斤でも杖に掛けて、此樣いふ鹽梅に後先になり、二人して肩に擔げば持てる、一層重かつたら其時は丁度お前さん方の普段綱引をする樣に皆んで寄つて掛れば直に持てる、國を持つも同じ道理である。即ち強い國と戰爭するには一人では駄目である、五千萬人心を一つにして必死になつて掛れば勝てる。そこで日本といふ國を皆で擔ぐんである。八幡樣とか明神樣とかいふ御祭りには皆がお神輿を擔ぐであらう。何の事はない左樣いふ鹽梅に皆で此國をワツシヨイヽヽと[illegible]お前さん方に分るまい。宜しい。君民同治といふ事だけ覺えて居つて後で先生から御聽きなさい。先づいへば國民が皆天子樣の御相談相手になるんである。難有い話である。是に就いて教科書が澤山賜はつてある。色々御宸翰なり、御誓文なり、敕語なり、敕書なりがある。特に皆さんの御存知の教育敕語がある、戊申詔書がある。此等は皆國民が一寸も忘れてはならぬ大切な教科書である。其中にも最も大切な教科書は御先祖の前にお誓ひになつて特別の御念入りで御作りになつた教科書である。教科書といへば皆さんが學校で習ふ地理とか歴史とか、物理とかいふ樣な本だが、是はそれ等の教科書以上の教科書である。即ち神武天皇から更に溯つて、天照皇大神宮に誓はせられて御作りになつた大教科書である。啻に小供にのみでない、大人も共に固く守るべき大切なものである。之を守れば身體も強くなり、金も持てる。智慧も附くんである。働くんである。働けば身上も出來る。一家が幸福になる。斯ういふ人々が集つて政治をすれば國は自然に強くなる、そこで強敵が現はれば戰爭して勝つ。此に於て世界でも日本を偉らいといふ。日本は誠に善い天子樣を持つて偉らい國になつたら何處へ行つても皆褒め敬う樣になる。斯ういふ難有いものを先帝が賜はつたのである。是は我國の寶物である。此に於て御飯喰べる時にも、朝起きる時にも夜寢る時にも、誠に難有いといつて御辭儀をするんである。此寶物は即ち憲法である。此樣

いふ難有いものを國民に下し賜はつたのである。

何事も憲法に關係せぬものはない。例へば人間の骨組と同じいんのである。國民の頭である、國民の目である。國民の耳である。又口である。是が憲法である。目が無くば見えぬ。耳が無くば聞えぬ。口が無くば言へぬ、頭が無くば考へる事が出事ぬ。此樣言ふ結構な骨組を我々に賜はつたんである。只我々ばかりにでない、軍人にも、役人にも、百姓町人にも皆同樣賜はつた。而かも其中に御示しになつた事は六かしいものでない。勉强すれば誰にも實行出來るといふ、斯樣いふ結構なものを下さつたんである。明治天皇は御隱れになり、桃山の陵に葬れて御出でだけれど天子の御魂は此處に在る。今上の上に在せらるる。五千萬人の國民の頭の上に在せらるる。如何に遺訓を守るか如何かと始終御監督なさつて居る。偉い方だから御無くなりにはならぬ、神武天皇、天照皇大神宮と同じく神樣になつて矢張り此世に止まつて御出でになる。それ故皆さんの勉强の仕方や、家でお父さんお母さんの言ふ事を聽くか聽かぬかなども、明治天皇の偉らい御魂はすつかり知つて居らるる。如何かすると恐い樣だが、難有い事なので、斯ういふ具合に御隱れになつても監督して居て下さるんである。之を守れ、此憲法を大切にせよ。すればお前等の行狀も善くなる。學問も能く出來る。人の手本になる。何かして父母の手助けをする。すればお前等の家の生活も好くなる。國も亦强くなると斯う仰せらるるのである。是ほど難有い事はないんである。皆を守護し給はる。併し「天は自ら助くるものを助く」といふ。是は少し六かしい語だから、矢張り先生から後で能く聽かなければならぬ。即ち自分自から勵み勉むる心がなくば、天の神樣は構たくも構へぬ。守護したくも守護出來ぬといふ事なのである。惰け怠り自ら守る考のなきものは明治天皇の御魂から見離されるんである。それ故守り行ふ事が大切だ、之を守り行ふ心のないものは明治天皇の御魂が如何に助けたくも助け得られぬのである。是が即ち「天は自ら助くるものを助く」の意味である。先帝は御無くなりになつて御身體は桃山に在るけれど、仲々大勢の御子持である。日本といふ大家族を御持である。後髮が引かれて彼樣して桃山にお出になつても御心配でならぬから始終御世話をなさる。して見れば我々が御恩報じをするには、最早御心配下さらずも宜い此通り御遺訓を謹み守つて居りますといふ樣に致すんである。斯うして御魂を靜め奉る事が、最も先帝に盡す忠義でもあり、又今上に忠義を勵む所以でもある。小供達は正直なものだから仲々一度聽くと能く守るが如何すると年を取つた役人とか議員とかいふものに惰けるものがある。お前さん方の處には斯ういふ不都合なお父さんお母さんは無論無かろうけれども、萬々一左樣いふ惰ける人があつたら、學校から聽いて來た先帝の御旨意と違うからといつてお父さんお母さんを御諫めなさい。すれば天子樣の御魂は御喜びになる。すれば又日本は一層强くなる。大分偉くなつた樣だけれどもまだ此位では止まぬ。もつと〳〵偉くなる、斯樣なると國に何の苦痛はない。先帝の御力で大分日本も偉らくなつて來たけれども、今上の御代でもつと偉くならなくてはいけぬ。が大勢の中は少しばかり偉らくなると最う惰けたがるものもある。それ故此惰けるものを懲らす爲に、ひよつとしたら御身體たけを御隱しになつたのかも知れぬ。日本は今惰ける時でないぞ。日本は今ちつとばかし偉くなつたといふだけで、世界にはもつと偉らい國がたんとある。亞米利加や英吉利は遙に偉い。日本などはまだ足許にもよれない。それ故遺訓を守つて勉强せよ。勉强すれば身體も强くなる、頭も好くなる。頭が明るくなるぞと仰せられて居るんである。此老爺さんが早稻田小學へ來て今此樣いふ事を皆さんに御話して居るが此一つを先帝は御喜びになつて居るであらう。嗚呼今大隈の老爺が彼樣いふ話をして子供に聽かせて居るわいと御悅びになつて居るであらう。そして又感心な小供である。喜んで聽いて居るといつて御悅びになつて居るだらう。年寄はいかん。年寄は先入主となる。昔の大名時代に支那の書物を澤山見たから頭が混雜して居る。が年寄は軈て死ぬ。左樣いふ混雜した頭がなくなると後は判然する。それから一層文明になるんである。すれは一番小供の時代の人達が樂みである、お前さん方が大きくなつて立派な人にならなくてはならぬ。此の憲法のお話である。委しい事は後でもつと先生からお聽きなさい。今少し話し度いが、只今米國へ行く人が逢ひに來て家に待つて居るといふ知らせがあるから是で止します。近いから又來う。今日は是で御仕舞にします。

世界思潮

要目

SAITO

官僚軍閥と官制

西園寺内閣は倒れた。今までのやうに譯の明らぬやうな内閣の更迭ぢやない、堂々たる主張主義あつて、玉と碎けたのである。輿論が一切に西園寺内閣の往生ぶりの見事なるを喝采したのは、怪しむに足らぬ。

さるにても、不思議なる事かな、二箇師團の增設は首相是に反對し、藏相是に反對し、閣員皆之に反對し、政友會も國民黨も、實業家も是に反對し、國民擧つて是を非難したに拘らず、首相は滿天下の同情と贊成と援助を受けつゝも尙ほ、何故に内閣を投げ出さねばならなかつたであらうか。

上原陸相は是れ西園寺内閣の一閣員に過ぎぬのに、頑としてその主張を固執して閣僚の意見を無視し、天下の輿論を無視し、内閣の統一を破壞してまで、自己の所執を貫徹せんとした。陸相は首相及他の閣員凡てを相手にして尙ほ且つ對等の角力を取るのである。實に奇怪至極の現象である。

[illegible]ば、[illegible]相を[illegible]り得ざるも、——[illegible]つたとしてもその後任を見出し得ずして、止むなく内閣を投げ出さねばならぬのも、皆、氷解されて了ふ。陸相の駄々をこねるも、それに强味があるのも、氷解される。そして官僚が、此の官制の不備を唯一の武器として、その專横を振舞ふも怪むに足らぬ、官僚の堡壘は、即ち是れ陸軍にありといふことも知られ得やう。

その官制の不備。それは陸軍大臣は現役の大中將たらざる可らずといふ規定から來る。

現行官制によれば陸海軍省の職員を明細に規定し、大臣は現役の大中將、次官は現役の中少將に限られてゐる。故に軍閥の頭目が内閣を組織する場合には、その人の意の儘に好めるものを選ばれ得るのであるが、その閥外のものが首班となつて、内閣を組織する時には、常に陸海軍大臣の選任に手古摺らぬはない。軍閥が是を極度に利用して、他を手古摺らせ、幅を利かするほど、彼等の勢力を增長す

るのである。

是が爲めには、流石の伊藤公も、幾度か山縣公の前にその膝を屈せざるを得なかつた。隈板内閣の時も、陸海軍大臣になり手がないので、陛下の大命を拜受する能はざるを奏上すると、陛下は陸海軍大臣に留任を命じ給ひて、由つて以つて僅かに内閣を組織するを得た。是れ等はその一二の例を示すに過ぎない。

茲處に當然起つて來るのは、その官制の改正である。而かも貴族院、樞密院の官僚軍閥の巣窟である以上、容易に是が改正を望み得ない。而かも望む可らずとて止むべしであらうか。といつても、今の政黨に、是を目標として決戰する勇氣があるであらうか。

東洋經濟新報は、その社説に於て、此の官制の廢止を極言し、西侯並に政友會のなさゞる可らざる職責として、彼等に決戰を望んだ。

意義ある内閣更迭

非増師論の輿論を指導するに與つて力ありし中野武營氏は、今次の内閣更迭を評して次ぎのやうにいつてゐる。

我國内閣の更迭は、從來屢行はれたが概れ妥協交讓の結果にして、更迭の理由が國民に理解せられし例を聞かぬ。然るに此度の總辭職は明かに陸軍問題に關し閥族の妨害を受け、國民喝采の裡に臺閣を去らんとするもので、從來の非立憲的行動に比し數段の憲政の進歩なりと推稱するに憚らぬ。

我等は後繼内閣に何人が立つとするも善政を布き國民の艱苦を救濟する者であれば異議はない筈であれども、然かも假りに官僚内閣が、自家の實行を迫りたる陸軍問題を放擲し、制度整理の功名を奪はんと欲せば、我等は啞然いふ處を知らず、國民も善く順逆を知るならば、必らず斯かる内閣を謳歌せぬであらう。上述の想像の如きは、餘りに傍若無人にして有り得べからざるが如きも、閥族從來の慣用手段より見れば、亦必らずしも絶無を保し難い。

我等は曩日來數次、西園寺首相とも面談したるが兩政整理は豫想以上の成績にして陸軍及び陸軍の勢力範圍たる各殖民地の特別會計を別としても尚二千萬圓を産み出し得た。而かも閥族の防害により内閣を投げ出さればならぬに至つたのは、西侯の遺憾も思ひやられるが、是によりて國民多數の同情を博し得たのはその損失を償ふに足るべく、官僚が國民の惡感を挑發したるは自滅の時期を早めたるものにして、自業自得なりと評すべきか。

軍事研究會の増師反對理由

『今や朝鮮二箇師團増設問題は、國防上に何等緊急の必要なきに拘らず、國民の輿論たる制度整理の根柢を攪亂し、我國現下の最大急務たる海軍充實及民力休養の二大政綱を無意義ならしむるものにして、實に長閥の跋扈、陸軍の專橫を遺憾なく發揮したりといふべし。吾人は國防の緩急、國家の資源に鑑み、斷々乎として是を排斥せざるべからず』

と、是は軍事研究會が、天下に檄したる増師反對の冒頭である。かくて此の檄文は八箇條の反對理由を述べてゐるが、長いから、その要點をつまんで見る。

第一　露國は、我日露戰後の軍備に聳動せられ、即ち是が對抗の爲めにこそ極東に軍備、鐵道、拓殖等あらゆる準備に着手して、以て今日に及んだものだ。故に今日我にして二個師團を增設せば彼は露國又增兵すべく、遂には我れ一壘を築けば二壘を增すの結果となり、極る處なかるべし。これは吾人が國防の根本に於て二師團增設に反對する所以の一である。

第二　露國の南侵は祖宗の遺訓宿策にて二三の挫折を以て其志を擲棄するものでない。故に我も武備を嚴にして是を待つは固より然らざる可らず、けれども一朝事あれば之と西伯利若くは滿蒙の野に進出して攻勢作戰を行はねばならぬとせば、その策たるや甚だ危險である。試みに思へ、我軍如何に精強を極め敵を滿洲に破り敵の主力を長春に擊破すればとて、敵は其主力を哈爾賓に集め、又之を破れば齊々哈爾に集中せんか、最後の解決はそれ何れの所にありや、今日の十九師團より不足なるも[illegible]師團の大陸軍も[illegible]、是れ[illegible]りも、廿五師團の前提たる二師團增設に反對する理由の二である。

第三　露國の南侵を滿洲に防禦するには今日の陸軍を用ゐて充分である。即ち滿韓の地形を利用し間島若くは北韓に防禦を張り以て南下の露軍を控制せば十箇師團若しくば六七個師團を以て綽々餘裕がある。然るに當局は兵數を加へ師團を增すを以て能事とし武器、軍需品の改良進步、戰地の地形を利用若くは輸送機關の整備に勉めず、これ吾人が誠意の上よりも陸軍今日の施設に反對せざるを得ぬ理由の三である。

第四　我國が大陸軍を備へ大陸に進出して戰ふの時は、少くも三十億の軍資を要する。戰鬪久しきに亘らば五十億六十億以上に上らう。我國の富力二百五十億といふ。此の富力は大陸作戰の軍費に堪へぬ。今後幾何の大軍を擁するも要するに木偶を飾るやうなものだ。是れ軍資の上よりも二師團增設に反對する所以である。

第五　支那の國狀に鑑みて增設を云々するものあるが、支那を敵國として大陸軍を動かす如きはあり得べからず、又論者は露國の支那呑噬を拒がんには我軍力を以てすべしといふも、露國は極東に於て我を敵とし及び列強の意志に反してまでその慾を律にするものではない。要するに對支那軍備は、陸上は露の一國なれども海上は歐米列國委く海軍の競爭たらざるはなし。是れ對支那軍備の點よりも二師團增設に反對する所以の五である。

第六　世には海軍も擴張すべしたが陸軍も擴張す[illegible]ならぬ。[illegible]ならぬ。無用不急の軍備は[illegible]ならぬ。我軍は宜しく海軍を以て軍備の標準となさればならぬ國情である。古より陸海兩軍備の二兎を追ひしものにして成功したるものは一歩もない。佛伊國運の不振は、海陸軍備の並行にある。是れは軍備標準の點より、二箇師團に反對する所以の六である。

第七　日露戰後陸軍々備の著しき擴張は、さなきだに歐米列強をして我國に對する疾視猜疑の念を深うせしめた。今對露若くは滿蒙の關係を云々して陸軍を擴張する如きは、自ら列強の共同範圍外に脫出するもので、國際上此の上の不利はない。是は外交上より、二師團增設に反對する所以の第七である。

第八　陸軍當局は二箇師團新設の經費は經費の流用若くは整理經費のやり繰り等にて一ヶ年二百八十萬圓の要求に過ぎずといふが、兵營兵器の設備は二十年目毎に改築補充せねばならぬ。而して此の費用は一箇師團二千萬圓二箇師團四千萬圓、年平均二百萬圓を要する。更らに二師團增設の爲めに新たに二萬人の兵數を增加すれば、一人平均百圓と見積りて年額二百萬圓の損失となる。即ち經常費二百八十萬圓に、補充費二百萬圓徵兵損失二百萬圓合計六百八十萬圓となる。是を海軍に投ずるものとせば、國防上の威力如何ばかりぞや、是れ又二師團增設に反對する所以の八である。

增師は詭詐的政策

[illegible]の二元老は、增師問題を以て[illegible]の成案なりとし、日露戰役後二十五師團完成の方針を決したるも、戰後財政整理の爲め荏苒今日に及べるものなり、今や一方に海軍擴張計畫實行せられんとするに當り、獨り增師問題のみを云々するは其の意を得ずと論じたる由なるも、余を以て是を見れば、是れ全く國民を欺くものである』と、かくてその理由を示して次ぎのやうにいつてゐる。

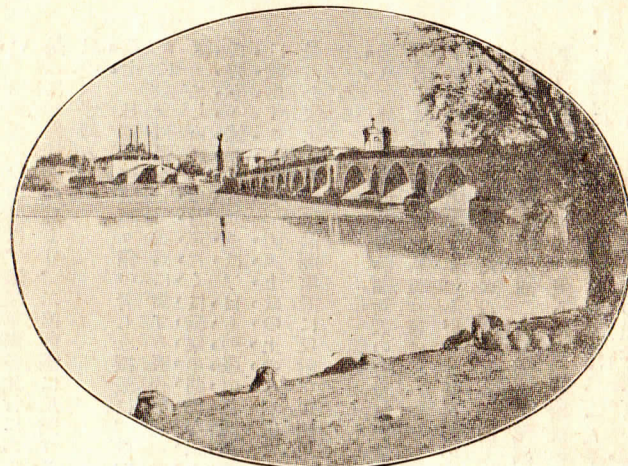
何となれば、所謂戰後の廿五師團案なるものは既に實行せられてゐる。步兵の二年兵役實行は、即ち實質上の陸軍擴張ではないか。所謂戰後の軍備擴張案即ち廿五師團案なるものは單に形態の上にのみあらで、實質上の意味なるを以て、余は二十五師團案の既に實行せられてゐるのみならず、步兵科に於ける每年の徵兵數五割を增加せる結果は、二十七箇師團を有すると同樣の擴張を遂げたるものなる事を指摘せんと欲す。加之、豫備役の年限を延長したることは、我陸軍の實質を增大したるものではないか。然るに陸軍側は此の事實を知らざる眞似して、唯形態の上に於ける擴張計畫の未だ實行せられざるを囂々するが如きは、實に無責任にして詭詐的の政策といはざるを得ない。

增師と實業家の反對運動

這般東京に開かれたる商業會所議協議會に於て、東京會議所會頭中野武營氏は、增師反對の演説を爲し、尚は是の主旨を全國の會議所に檄したる所、同意を表するもの多く、各地會議所に於ても、それぐ反對の決議を爲すもの頻々たるに至つた。中野會頭の演説の大要をつまむ。

全國商業會議所聯合會に於て決議せる事項は、正に現内閣が組織以來、行政及財政の整理を爲すことを天下に公約し熱心に調査せられ、行政及財政の病根を根本的に整理せんとすることに一致してゐる。故に該決議に於ても、其實行を希望し其目的を徹底せしむる手段方法等は、聯合會から、主催地たる東京會議所の正副會頭に依託せられてゐる。

然るに、實業家が政治に容喙するは好ましくないといふ人もあれど、是は誠に止むを得ざるに出でたるにて、實業家としては、實業の振興、産業の發達を期する結果、自然政治に口を出さねばならぬのである。これ聯合會に於て決議、その決議を臺閣諸氏に達したる所以である。

然るに昨今現内閣が既定の方針に基き鋭意財政の整理專らにして、整理の事業將に成らんとせるに際し、突如として朝鮮に二箇師團問題起つた。是が外形のみを見る時は、内閣大臣と陸軍大臣との衝突の樣であるが、然らず、國民對陸軍の問題で、吾々全國民の希望が潰ろるか容れらるるかの重大問題である。(中略)我々實業家は、膨大なる財政を整理し、民力を休養せんとせる現内閣の整理事業に對し、擧國一致して其の妨害となるべきものは、全然是を排除せねばならぬ。予等實業家にありても、今日の場合斷じて袖手傍觀を許さず、此の問題は政黨政派の問題ではない。實に國家の重大問題であるから、此の問題の爲めに現内閣が玉砕せば、吾人は擧國一致、武斷政治を倒して、西園寺内閣の主義方針を貫徹せねばならぬ。

アドリアノープル風景(一)
——エヅリアの古橋——

米國に於ける中華民國承認問題

米支正義同盟會(Chinese-American League of Justice)は去る十月書を米國政府に致して、支那の革命運動は、既に終熄を告げたるが故に、米國は、公式に共和政府を承認すべしと云つた。また、支那の共和政府設立は、神聖なる主義に準據してゐて、米國が自由平等の基礎を確立したのと何等の優劣はないと論じてゐる。

米國支那協會(Coina Society of America)の會長ルイ・リキングストン・シーマン(Lhuis Livingston Seaman)が大統領に致したる書面の意味を略言すると、承認が延びれば延ぶるほど、支那の繁榮發達を妨ぐこと多くして、領土保全をも危うするに至るべし。今春國會が全會一致を以つて、即時承認を議決したるにても、國民の輿論は、既に明かである。然るに、猶政府がこれを決行せざるは、六國借款のために、英佛露獨日のために遮阻せられたるには非ざるか。かう云ふ趣旨である。

支那協會に對して、米國外務省が答辯したる所は政府の意思を窺ふに足る。よつて、その大要を摘錄すると、政府は、國際法上、慣例の許す限り速に承認を與ふるの意思を有すと云ふに在る。從來米國政府の執り來つた方針を觀ると、新政府が被治者の一致によつて確立せられたると、新政府の國際上の義務を履行するの能力を有するに至るとの二つの事實によつて、承認を與へてゐる。一八八九年ブラジル國王退位して、共和政府が設立せられたとき、リオ・ド・ジャネーロ駐在米國公使はブラジル國民の多數が共和政府に賛同するを待ちて、正式の承認を與ふべしとの訓令を受け、この事實の精確になりたるとき、政府は事實上これを認むるに至つた。葡萄牙革命の場合にも、ブラガ(Braga)大統領の政府が議會を召集し、議會が共和政治を宣言せしとき、米國政府は、直にこれを承認した。支那に對しても、葡萄牙の先例を踏襲するならんとのことである。さすれば、支那が國會を召集して、公然共和政治を宣言し、大統領を正式に選擧したる時が、米國政府の公式承認を與ふる期であると云ふ。目下の資政院の如きは、一般國民の選擧したものでない。故に承認の時期は到達していないと云ふ。

アドリアノープル風景(二)
——十四、五世紀頃土人の都たりしセリム二世建立の回教寺院——

巴爾幹事件に關する歐洲の論調

巴爾幹事件の爆發したるとき土耳古の輿論は、[illegible]即ち[illegible]に論告したのは、かう云ふ意味である。

數百年未曾有の大事件は起りぬ。余は平和を維持せんと欲して、百方力を致したれども、隣接諸邦は我が國を挑發し戰に赴かしむ云々

と云ふのである。一般の輿論は

舊屬邦の恐喝に屈從せんより、萬難を排して戰に赴かんのみ

と云ふに在つて、巴里タン新聞の通信員によつて紹介せられた土國タンヂマト新聞記者の論説は

ブルガリアの要求中、民族の比例代表または基督教學校同權の如きは既に考案の題目となれり。余輩は統一黨の如く、他種族に對する土人の優越權を主張せず、帝國内の各國民に均等の地位を與へんとす

と云つてあるけれども、これは餘り賛成を得なかつたらしい。而かして、土國の戰爭の眞意なりとして、解釋した所は

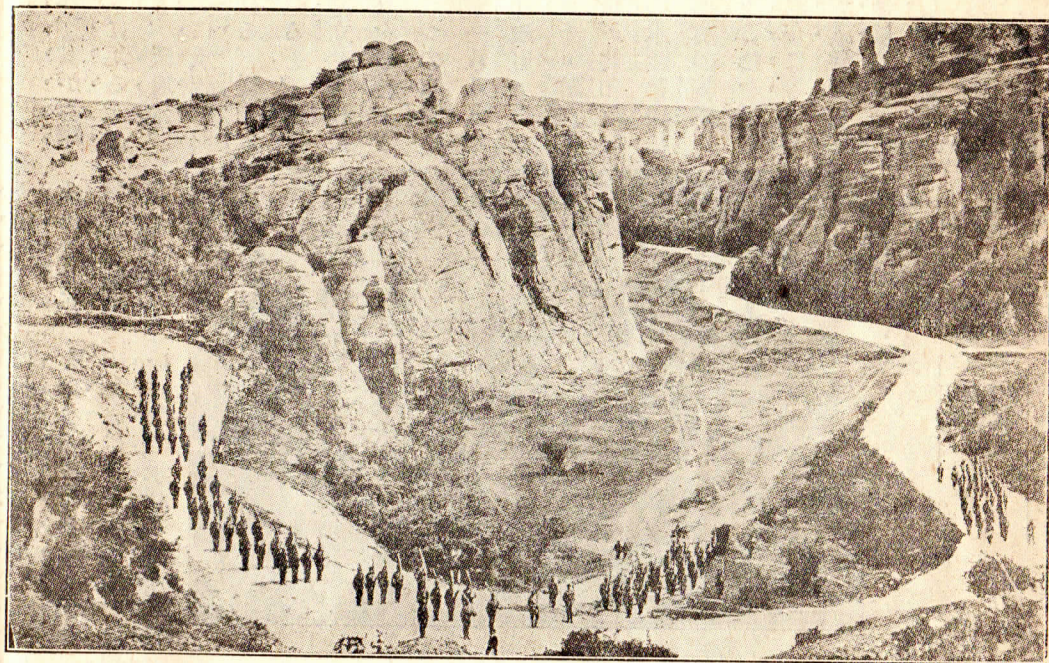
巴爾幹諸邦に對する戰爭は、その實、墺露に對するものにして、土國勝たば、墺これを利し、土國敗るれば露これを利す

と云ふに在る。これは、土國首相キアミール「パシャー」が、倫敦デーリー・メールの通信員に語つた所で明白である。倫敦デーリー・メールは社説を掲げて、

「今回の事件は墺露英の干渉なくば、解決を告げざるべけれども、由來巴爾幹諸邦は、これを統率するものなくんば、治を期すべからず。その任に當らんは、墺なるべきは明白なり。列國は墺の干渉を屑とせざるべけんも、今回の事件に關しては、墺が主要なる原動力たるべきは、瞭然たり」

と云へり。また曰へらく

「ブルガリアがサロニカに達する道路を扼して、勢力を振はんは、墺に取つて堪ふべからざることで、ブルガリアの成功は墺に達する東海路を杜塞するの恐がある。またスラヴ諸國が獨立すると、モンテネグロー・クローシア・ボスニア・ヘルシエゴフイナの人心を攪亂して、墺の勢力を挫折するの結果を生ずべし」云々

要するに、墺の態度が注目を要する最大事項であると云ふに歸着してゐる。されば、墺の論調を窺ふの必要が起る。維納のフレムデンブラット紙は時々墺國外務省の方針を洩すものであるが、その紙上に

「墺は領土變更を妨遏するとか土國を保全するとかの問題には頓着せず。唯列强と巴爾幹に於けるルーマニアの利益を維持せんと欲するのみである」

と論じた。墺の眞意果してかくの如しとすれば、歐洲の平和を維持する上に、一大進歩を來したと云はなければならぬ。これは、倫敦デーリー・ニュウスの述ぶる通である。

前にも云つた如く、土國は墺の外に露を以て戰爭の主要原素だと云つてゐる。然らば、露國の論調を知るの要がある。ノヲエ・ウレミヤは、巴爾幹諸邦の要求を支持するの義務があると同時に、かくするの意向をも有することを明言してゐて民主黨のヂエン紙もまた同一の趣意を繰返すと同時に

「國内の腐敗は國際問題を解決するの能力を萎靡せしめたり」

と云つて慨嘆してゐる。

全體、巴爾幹事件に關しては、歐洲列國は、墺露の競爭によつて、その孰れかに加擔するもので、これがため、截然二派に分るることは明かである。これは[illegible]前に述べた土國首相の言明を待たぬ。獨[illegible]政策なりと論斷せり。

巴爾幹戰地の特色

獨逸が墺を助くるは明かであつて、佛はおのづから露に同情を有するであらう。何故ならば、佛は由來露の同盟國であつて且また自由のために戰ふ所の新興國に同情を寄することは、佛の國民性であると、前の佛國首相ハノタウは、ラ・レヴェウ・ヘブドマデールに投書して論じてゐる。巴里の諸新聞紙中、佛露同盟は巴爾幹事件に關し、佛國を露の援助者たらしめざるべからざるかを疑ふものあれども、佛國が露國との同盟を棄却して、孤立の狀態に復歸せば兎に角、さもなくば露國の行動を支持するの義務ありと論じたものが多い、佛國首相ポアンカレーが戰爭開始に當つて、列國調停の案を定めたるは、注目の價値がある。

露に對する墺を助くべしと假定された獨の論調を見ると、ノルド・ドイッチェ・アルゲマイネ・ツァイツングも半官報たるケルニッシェ・ツァイツングも、獨佛間の融和を說いて、ポアンカレーの盡力を賞讃してゐる。列國を戰爭の渦中に引き入る

空上主權論

サー・エイチ・アール・リチャーヅ氏は頃日オッキスフォードに於いて一場の演說を試みた。その要左の如し。

空中は自由なりとの說は、今日に至るまで、國際法の原則となつてはならぬ。今日の處では、一般がかくありたいと希望してゐるに外ならぬ。國際法上の先例類例もなければ、國と國との間に承認された判決例もない。

空上自由の主張は唯方便として唱ふる說なりとするも、その果して實行し得らるべきや否やは問題である。今各國は自己の防衛のために必要なる手段を講ぜざるべからざるは必然のことで、空上に對しても、かくあるべきは疑を容れぬ。さるを他國がこれに向つて通航の權を爭ふに至つては、平和の保障と云ふことは殆ど得がたい。一たび戰爭が開始せられたときに、空上に自由通航權がありとすると、中立國保護の規則を適用せねばならぬこととなつて、中立國の主權者が交戰國の所業に關して、すべて空上の權利を所有せねばならぬ。しかし、これは從來の國際法上の慣例からして、出來ぬことである。

これに反して、空上に於ける國家の主權は、別に國際的條約を得て效力を生ずるが如き性質のものではない。現行國際法の自然の結果より判斷を下さねばならぬ。それは如何なる意味かと云ふと、[illegible]航通は如何なる性質のもであるかと云ふと、空上を航通する飛行船飛行機は、地球の引力によつて支配されてゐることは明確であるが故に、その下の土地とは離るべからざる關係を有してゐる。即ち飛行船飛行機の通航する空上は、その下にある各國の領土に屬する者と斷定せねばならぬ。されば、空上自由などと云ふのは、全く空中の樓閣と云ふのと同じことで根據が薄弱である。國際法から論じて見ると、空上主權と云ふことが唯一の根本原則であると云はなければならぬ。これから空中戰が陸續行はるることになると研究すべき問題である。

以上はリチャーヅ氏の說なるが、タイムスは、これに贊成の意を表して左の如く論じてゐる。

空中戰が實行せらるゝに至るべきは、明かなことであつて、空上の主權また空上の法律上の性質は、各國に取つて、必要缺くべからざる研究問題である。然るに牽强附會の說を立てゝ、穩當ならざる類例を求めたり、または國際間の禮讓と云ふことに拘へられて、空上開放の說が行はるるに至つた。然れども、これは到底行はれないことである。各國に取つてその生命に關係すると云ふ重大なものは、如何にしても、その國の主權の下に在らねばならぬ。陸上は勿論空上も然りである。空上を使用するものは、その下に在る土地の安寧利益に影響を及すこと、理の覩易き所である。

從來空上航通に關して、その性質を論じ、原則を定めたるものなるものなきに非ず。殊にフォーシーユ (Fauchille) 氏また佛國空上航通國際法委員(Comité Juridique International de l'Aviation)の功は沒すべからず。然れども、實行の出來ない公式を急遽に製造したり、餘りに理論に深入をするのは、危險なことである。法律家と云ふのは、由來、既に出來上つた事業に就いて規則を設くるのにて、功力が多い。しかしまだ落着の就いてゐない事柄に就いて、規則を立てんとするのは、却つて害がある。空中船には、まだ荷物を積んだこともない。況や、それが果して人間に利益を與ふるのであるか否かすら、まだ判斷はつかないのである。それに急遽て、法律を作つても無功である。宜しくその發達を待つて徐に議すべきである。まだ答辯の明かに出來ない問題に對し空上自由などと云ふ句を用ひて判斷を下すは適當でない。

空中飛行機また飛行船は、まづ戰時に於いて、その活動を顯すであらう。その時に、空上開放の事實があると、隨分面倒なことになるだらうと思はる。思ふに、リチャーヅ氏の說の如きが、目下の問題としては適當であらうか。空上自由說は屢耳にした所ではあるが、今日の處では、何等徹底した議論もないやうである。

婦人參政權關係の決議

婦人參政權期成男子國際同盟會（Men's International Alliance for Women's Suffrage)は去年十月倫敦に於いて會合を催し、決議をした。その決議は

組合の如き組織的機關なく政治上選擧權被選擧權なき女子が男子と同一の作業に從事するは目下の實情であつて、而して勢低廉なる賃銀に甘んぜざるべからざるは必然の趨勢である。この趨勢はやがて男子の勞働に至大なる影響を及すものであつて、看過すべからざる重大なる經濟問題である。

と云ふことを前提として、更に

歐洲北米合衆國濠洲に於いて女子に多少の參政權を與へてゐる所では、殆ど何れの場合にも、男女の賃銀を均一にするの傾向を有す

と云ひ、また

男女の經濟的均衡を得て、女子が男子を勞働より驅逐せんとするの趨勢を抑止するのは、必要なことであつて、而して、その目的を達せんには、女子に國民としての權力責任を頒つの外はない

と云つてゐる。女子の天賦權など云ふ高尚な議論に非ずして、男子の經濟的自衛を基礎とした議論である。

都會人の衛生に關する一二

倫敦市長は去る十月に衛生會議を催したが其中の專門家の說を一二紹介する。

商人に關しては、かう云ふ說がある。

都會で[illegible]ある。晝辨當は麪麭と牛酪と果物で澤山である。食事は朝夕を主として、晝は輕便にするが宜しい云々。會長席にゐたドクトル・ベンネットは、商人は夙に起きて汽車の發車に後れざらんことを必要とする。故に朝食を疎略にする恐がある。從つて晝辨當に重きを置く弊が生ずる。また食事と食事との間に酒を飲むものが多いが、この位健康に害のあるものはないと云つてゐる。ハリバートン博士もまた朝食の必要を說き、これを廢して、午餐に多量を用ふるの大害あることを說いてゐる。これによつて觀ると、倫敦市の衛生會議では、朝食を急遽てゝやつて、晝餐で腹工合を補ふと云ふ風は宜しからぬと云ふ議論に歸著してゐるやうである。ハリバートンはなほ職工に就いて、この弊を懇切に指摘してゐる。

學校卒業生は永遠に社會の勢力を占め得るか

社會で地位を有せんとすると、何でも官公私立學校の卒業生でなければならぬと云ふので、青年は如何なる手段、如何[illegible]

[illegible]てゐるのは、我が邦の[illegible]は社會の制度風潮がかくなつてゐるのであるが、故に、必然起るべき結果である。しかし、學校出の人々が、卒業證書を得るだけの目的を有して、更に實力人格に留意しないと云ふやうなことになると、反動が起らないとも云へぬ。サー・フレデリッキ・ケンヨンがオッキスフォードで演說したものゝ中に下の如きことがある。

從前國會や政治界は勿論一般社會上の事柄に於いても、上流の地位に立つて、牛耳を執つたのは、公立學校出の人である。然るに教育の普及と共に、他の階級が漸次學閥を襲擊するの形勢を呈してきた。今後公立學校出の人が、その父祖父または祖先のやつたやうに、地位を得らるるか、そは將來の問題である。青年をして、國民たらしむるの用意が肝要である云々。

日本の老偉人

──『コスモポリタン』誌十一月號所載──

現代アジアに於ける代表的人物亦尠からず。彼等は常に其國民及アジア大陸に向て動學的感化を及ぼしつゝあり。而して其一言一動は直ちに以て泰西諸國とアジア大陸との國際關係に一大變化を來さしむるを得べく、其熱烈なる雄辯は或は以て東西兩洋間に橫はれる猛烈なる爭鬪の焰に向て注がるゝ油となり、其冷靜なる外交は或は以て數世紀間の阿片昏睡より覺醒したる新アジアの侵略的熱狂を抑へて以て黄白[illegible]出したる、而して[illegible]

伯大隈は其政治的地位に於ては所謂元老の列に位す。抑も元老とは何ぞ。所謂元老とは彼の僅々五十年以前迄は封建制度の泥中に沒して何等重要視せられざりし微弱なる一小島帝國をして終に能く强大なる世界的勢力たらしめ、而して其陸海軍の成功は全世界の限りなき稱讚を恣にし其短日月に於ける產業並經濟的發達は只々驚異に堪えざるの急速の進步をなし今や巍然として復た動かすべからざる一大勢力たらしめたる維新以來の功臣を謂ふなり。而して伯大隈は實に之等元老の上位に列すべきの元勳たるなり。今伯を論ぜんとするに先ち伯が一八六九年より一八八一年迄大藏卿たり一八八八年より一八八九年迄外務大臣たり一八九六年より同七年迄農商務大臣たり一八九八年には總理大臣兼外務大臣たり而して今や早稻田大學の總長たるの事實を語らば、以て伯が如何に重要なる人物なるか而して其國民に及ぼす感化の如何に大なるものあるかは蓋し察知するに難からざるなり。然り國民の伯を見る實に伯を以て謂ゆる『日本人の日本』なる國家的信條の體現となし而して凡ての自由主義者凡ての進步主義者は伯を崇仰し畏敬し推して以て其首領として稱揚するなり。

近世的アジア人には伯大隈は更に大なる意義を有す。何ぞや。曰く彼等は伯を以て所謂『アジア人のアジア』なる新東洋的鬨聲の權化となし其日本に漫遊或は其地に在留する凡ての東洋人は爭ふて伯の一瞥を捕へんと欲し若し出來得べくんば會談の機を得ん事[illegible]り伯大隈は實に彼の新教育を受けたる所謂[illegible]頭の新しきアジア人が此の日出帝國を踏める時に第一に捜し出されたる元老中唯一の人物なればなり。切言すれば伯に新アジアの雌雄兩蕊完備せる花を代表するものと謂ふを得べく凡てのアジア的思想の中心たり。然り年若き東洋の誇、新極東の進攻、數世紀間の惰眠より覺醒しつゝある新アジアの中心なり。

若し日米戰爭の起る事ありとせんか、若し高加索人種と「異教徒大陸」の有色人種と一大衝突を惹起する事ありとせんか、恐らくは其爭鬪衝突は野心滿々たる泰西列强が彼の年々歲々自己の權利を自覺し、而して自ら之を防護せんと決意せる新東洋の自尊心の上に加へんとする所の傷害──縱令理想にせよ實行にせよ又故意にせよ故意に非ざるにせよ──よりして發生すべきを信じて疑はざるなり。斯の如き危機に際して伯大隈は最も重要なる力の人たる事は余輩が茲に斷言して憚からざる所なり。

然らば此の偉大なる老伯は斯の如き危急に當て如何なる態度を以て之に臨まんとすべきか。

平和の愛好者

大體に於て余輩は伯大隈の平和の愛好者たる事を信ずる者なり。之れには二個の理由を有す。

第一、伯大隈は最も常識の發達したる人なり斯の如き人物は吾人の間にありては極めて稀にして若し如斯人物を見出し得る時は吾人は常に吾人の首領として崇仰稱讚せざるを得ざるなり。伯大隈の如きは

實に其人たるなり伯は一面に於て非常に自尊心の强き人なり、されど其自尊心は決して彼の誇張的自己吹聽者には非ずして飽迄も大常識の偉人なり。思ふに常識の人は實に立派なるものなり侵すべからざるものなり。如斯人は決して其品位威風を傷けらるゝ事なし又決して其感受性を害せらるゝ事なし。伯の如きは即ち之れなり。伯は一個の人間に相違なし。されど伯は大學者にして又同時に一介の學生たり。而して明敏なる裁斷力を有するの人なり。伯の今日迄の活動を見るに常に東西兩洋の調和交讓に力を盡せり。之れ實に伯の人格其物が彼の多くの 文化の母なる舊アジア的冷靜と新東洋的活氣とを合せ有するの致す所に非ずして何ぞ。再言す伯は大常識の偉人なる事を。

第二、伯大隈は深大なる洞察眼を有するの人なり。古代東洋史並に東亞文學に精通せる 伯は其古代アジアが世界文明の上に貢献せる事の頗る多きを大なる誇りとなし自慢とするも、然も又同時に其中世紀に於て濃密なる暗黑がアジアの大陸を蔽ひ以て誇る べき凡ての人類的文化を埋沒し去りたる事を知れり。而して今や之の暗黑なる幕が 極東の一角に於て僅かに大陸の表面より除幕せられ而して日本人が この滿洲の野に或は對島海峽に於ける戰勝にも拘らず、然も尚漸く覺醒し初めたる東洋を以て泰西諸國――充分成切したる――に比する時は恰も小兒の如く 虛弱なる事を實認し居れり。

大日本帝國は伯の理想〇〇〇〇〇〇〇〇〇

されど其一面に於ては伯は 最も野心家的日本人なり伯は常に其自國民が更に異常なる大發展を、實現せん事を見んと欲しつゝあり。四五年前伯が神戸商業會議所になしたる演說に於て伯は溫和的に說いて曰く、

諸君は吾日出海軍旗の保護の下に何れの所にも安全に且つ愉快に行進する事を得るなり、古代より彼の印度は天然無盡の寳庫たり何故に 吾日本人は此の無盡の寳土に向て其手を擴げんとはせざるか、吾日本人は須らく印度に向て前進すべきなり

と。斯の如き宣言が伯の如き重要なる人物の 口より出でたるを以て急ち非常なる論議を惹起し 其極終には日本人が政治的に印度を支配すべしと 云へるに非ず」と否認し「余は只平和なる手段に依て對印度貿易を英人の手より奪ふべしとの理想を宣傳せんと欲したるのみ」と說明するの止むなきに至らしめたり。 されど伯の此の辯解は二三の記者に依て其虛僞なる 點を指摘せられ嘲評されたるなり。

されど年と共に伯は眞に平和論者として 立つに至れり。伯は其最近の宣言に斷言して曰く「彼の領土的膨張は夢なり、斯の如き時代は既に過ぎたり。而して今や平和の時代は吾地球に來れり、眞の平和的進歩は畢竟軍備縮少に歸着せざるべからず」と。

東洋人としては伯大隈の如き七十四才の老齡を以て尚且つ身心共に益々壯んに而して日本青年 否實に全アジア青年の崇仰の的となり 驚くべき人望を持續するの一事は殆ど不可思議と云ふの外なし。伯は今尚屢々演壇に立つ。而して伯の演壇に立つ所其帝都たると地方たるとを問はず常に 靜肅謹聽する男女の聽衆堂に溢れ伯が口を衝で出づる所の宣言に對して拍手喝采同意稱讃の意を表白するなり。伯の早稻田大學に於ける[illegible]狂的敬愛を有する早稻田六千の學生が大なる 豫期を以て喜び待ちつゝある所の一大出來事たり。

伯は學者にして同時に學生なり

伯が其國內及全世界の出來事に對して有する 趣味は寸時も休止する事なく益々大に繼續し居れり、爲めに其秘書役の一團は此の新知識に對する渴望の 飽く事を知らざる 威風凛々たる主人老伯に現下時々刻々推移しつゝある 世界的知識の大要を傳へんが爲め全世界よりのあらゆる雜誌新聞に於ける所論所說を 要略彙類しつゝ絕えず多忙を極め居れり。

今や伯は數年來其進歩黨總理たるの地位を棄てゝ復た公然指導の衝に當らずと雖 而も尚其改進主義者に及ぼす感化は更に休止する事なく縱令現今に 於ては只筆と口とを通じて 働くのみなりとは云へ依然として繼續しつゝあるを見るなり。

而して老伯の其國民に及ぼす感化は只に獨り男子にのみ限られずして婦人社會にまで 及ぼしつゝある事を思はざるべからず。伯は實に近世的アジア婦人覺醒の必要を實認したる最初の人にして其壯年時代 より今日に至るまで常に婦人解放の爲に 活動し來れり

伯は又其青年時代に在りては 常に流行を追ふの服裝を好み其爲め終に ハイカラサン――高襟紳士即豪華子――の綽名を受くるに至れり。 尚伯は其洋服たると和服たると問はず常に整然たる當世風の 風采をなせり。伯は其第一の精神的休養を園藝趣味に發見し 現に日本に於ける 個人庭園中最も美なる庭園を有せり。其園中には微小なる躑躅、椿、其他種々なる名木、珍稀なる各種の蘭を秘藏し日々の來訪客に向て最も[illegible]

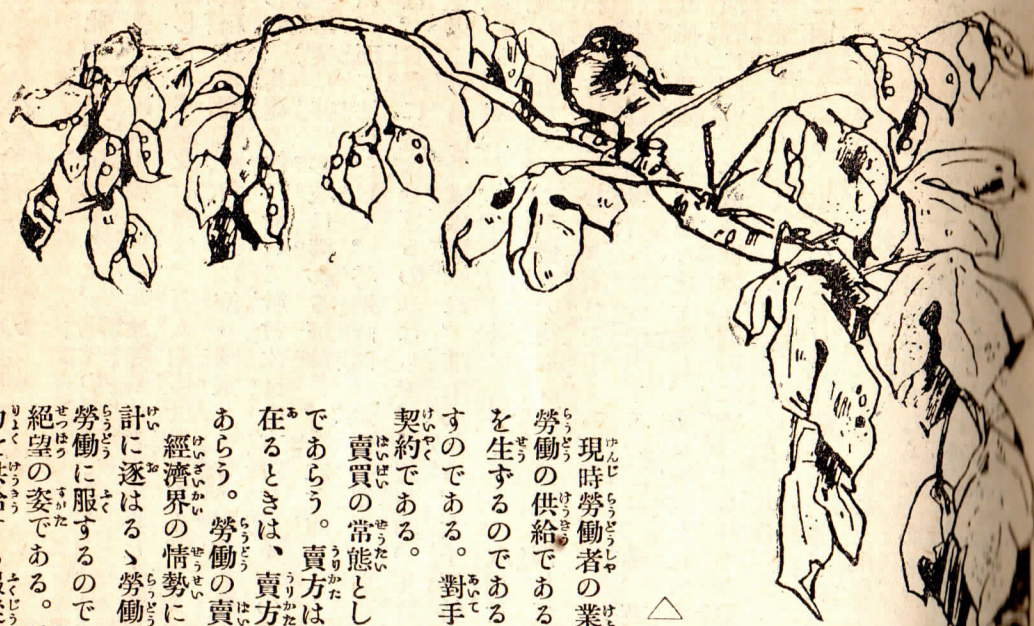
社會政策私論

前警保局長　有松英義

△勞働市場

現時勞働者の業主に對する關係は、昔時歐洲に行はれたるが如き勞働力の供給に非ずして、勞働の供給である。人身を提供して勞働力を致すは、取りも直さず奴隷となりて、服從關係を生ずるのであるけれども、勞働の供給は身體を目的物となすにあらずして、勞働を賣り渡すのである。對手と同等の地位に立ちて、自由の合意に依りて權利義務の關係を生ずる賣買契約である。

賣買の常態として、買方は廉價を望み、若し成し得べくんば實價以下に買取らんとするのであらう。賣方は高價を望み、實價以上を僥倖するであらう。買方買はざるを得ざる境遇に在るときは、賣方に暴利を貪ぼられ、賣方賣るを急ぐときは、實價より低く投賣を爲すのであらう。勞働の賣買も亦同樣であるが故に、勞働市場なる成語さへ出來たのである。

經濟界の情勢に依りては業主時ありて不利の地位に立つこともあるも、多くの場合に於て生計に逐はるゝ勞働者は、勞働條件を考慮するに遑あらずして、低廉の勞銀に甘じ、多時間の勞働に服するのである。資本及び勞働の割合に應じて生産收入が適當に分配せらるゝことは、絕望の姿である。勞働の賣買は理論と名義に於て、任意契約たるに相違なきも、實際は勞働力を供給する服從關係と大差はない。是が現代の缺點である。

△欠陷救濟の諸方法

此の缺點を匡救するは、現代の急務である。然れども共產主義、無政府主義、社會主義等其他名稱の異なりて目的の類似したる學說及行動は、吾人飽迄反對である。吾人は世間に通稱せる國家社會主義に依り國家及社會の現在の秩序を維持して、其範圍內に於いて社會改良の方策を講ずるのである。其事業は甚だ多岐に涉れるが故に、今之を說くことを敢てせぬ。而て法律を以て、勞働時間及最低勞銀を一般に規定するは、實際に適合せざるのみならず、任意契約の主旨に反するを以て容易に贊成は出來ぬ。唯未成年者、女子等特に保護を要する勞働者又は衞生上、風俗上等より特に取締を要する勞働の種類方法並に勞働者の待遇及其救濟等に關して、國家は相當の方法を定むべき責任を有するのである。

生產收益を勞働者に按分配與するの說は、佛、英、獨、米其他の諸國に於て屢々之を驗し、屢々失敗したのである。農漁等に關し、各國及我國に圓滑に實行せられて利益の認むべき實例なきにあらざるも、大工業に之を適用することは、甚だ困難である。事業の盛衰は業主經營の巧拙に由るものにして、勞働者の力之に與らざるに、之に收益を配與するは、既に不合理であり、又其計算は容易ならぬであらう。且收益を分配するの結果は、損害あるときは亦之を勞働者に分擔せしめざるべからざるの理由を生じ、到底實行は出來ぬのである。

勞銀の制、[illegible]

如何にして之を救濟せらるゝや。之を通常裁判所に出訴せんか、裁判官は勞働關係に於て特別の知識經驗を有せず、正鵠を得たる裁判を下だすこと甚だ望み難きが上に、民事訴訟の期間期日、其他煩累なる手續は日夕米噌の資に急なる勞働者の得て忍ぶ所でない。故に少金額の第一審訴訟を町村機關に裁決せしめ、又は特別裁判の機關を設くるの實例、歐洲に乏からずと雖、工業の種類に應じて特別なる鑑識を必要とし、町村機關は其任に絕えざるやうである。特別裁判所の設立は最も望む所なれども工業の盛なる區域に非ざれば、之を特置することを得ぬ。或は商業會議所に倣ふて、工業會議所を置き、或は英國の如く、國會に之を請願せしむる等、種々なる方法は之なきにあらざるも、未だ遺憾を感せざる完全の制度を見ることが出來ぬ。

△勞働者の自衞—勞働者組合の目的

此の如く國家及社會は、未だ勞働者保護の責を盡すこと能はぬのである。世間遂に勞働者の自衞を是認し、其團結同盟を以て尊重すべき權利と爲すに至つた。何となれば弱者の强者に對するや衆力を協はすの必要あるからであると。

勞働者組合の目的は組合員の權利及利益を適法に保護し及之を增進するに在るのである。故に之を細說すれば、事業頗る多端にして、且各國に於ける各種組合に依り、多少の異同あるを免れぬ。其重なる者を例示せば、左の如くであらう。

[illegible]

に定め、勞働[illegible]者を[illegible]し、勞働者に[illegible]を與へ、相當なる教育を施し、勞働時間を減少し、日曜日及夜間の勞働を制限し、女子幼年者に必要なる保護を與へ、勞働條件、即ち勞働契約は勞働者の眞正なる合意に成るの道を啓き、爭議の場合には、之を仲裁又は裁定せしむるが爲に、仲裁機關を設け、已むを得ざるに於ては同盟罷工を援助し、勞働者の主張を貫徹せしめ、且つ訴訟代理を爲して勞働者の權利を保護し、或は老廢疾病負傷の保險を爲し、或は失業を保險し、求業の旅行を扶助し、勞働の紹介を爲し、埋葬費を補給し、勞働統計を調製する等である。又組合の事業として、消費組合を設くるものあり、甚だ歡迎すべきである。

△勞働組合者の組織

其組織は同一業種、即ち同工業內に於ても分業の類に從ひ利害を共にする勞働者を合して組合を作り、其の組合を合して聯合體と爲し、之を中央部に統一し、時々委員を派して、會議を開き、更に外國の同一業者の組合と、聯絡を通ずる、會計は各支部に於て自治するあり、中央部之を統轄して支部は其分配を待つものあり、同盟罷工の場合の如き中央部より費用を支出するに非ざれば、支部の力、到底之に應じ能はぬであらう。會計は救濟の種類、又は同盟罷工の準備等に區分して基金を設け、又平日の經費を支辨する、之が爲に組合員たる勞働者は相當の分擔を爲さねばならぬ。

同一業種に依りて組合を組織することは、社會主義者の運動し[illegible]

內の各種組[illegible]を合し、一組合と爲し、又は組合[illegible]其提携を約する等、力めて一揆的行動に便ならんことを謀る傾がある。

又業主勞働者に共通の利害關係あるを根據として、兩者互に一致協力し、組合の發達を計り、萬事兩者の協定に待つものに至つては圓滿な關係を保ち得て、良成績を奏するものがある。

余は弱者自衞の手段たる勞働者組合には同情を惜まぬのである。然れども我國に於て急遽其成立を獎勵するの勇氣なきは其理由如何。余は勞働者組合の反面に於て、頗る危險の性質を有し、趨勢の轉化に依りては、其勢力を以て社會を蠹毒し、施て勞働者の不幸を來たす恐あるを思ふからである。

然して人心の趨嚮に依り、政府の政策に依り、首唱者統卒者の意見に依り、其他四圍の情況に依りて、勞働者組合の行動其揆を一にせざるは、各國の例に鑑みて分るのである。左に英、佛、獨、米四國の沿革に就て、余が憂慮に堪えざる事實を示さう。

△英國の勞働者組合と政黨

英國のトレードユニオンは摸範的勞働者組合を以て稱せられた。其初は一切政治上の行動を避け、マンチエスター主義に依り、資本經濟の組織を守り國家の干涉を斥けて、專ら自營の手段を採り、今日の所謂國家社會主義を行ふものであつ

た。固より資本制度に反對するとか、現在の經濟狀態の改革を試むるとか、不穩の意見を有しなかつたのである。然るに一八八〇年末ドック職工の大同盟罷工以後は、自營の力甚だ微なることを自覺し、國家の助力を要求し、失業者の救護其他の件に付、國家の保護あることを希望し、同志相集りてニュー・ユニオニズムの一派を生じた。隨つてトレードユニオンの政策に漸次變化を生じたることも、誠に當然である。

一八九〇年の労働者組合會議は、國家が强制保險の制を設くべきことを主張し、更に進で滿六十年に達したる労働者に、國庫より恩給を支給すべきことを請求し、一八九三年の鑛夫大同盟罷工は、労銀の原則に變更を加ふべきことを唱へ、一八九四年の労働者組合會議は、遂に進て生産機關の社會共有を提唱し、又トレードユニオンの多數は、農業問題に於て、ゲヲルゲの土地所有權、收用說を實行せんことを希望した。是に於て社會主義又は集產主義に基く階級戰爭の旗幟が判明して來た。

一八九三年、獨立労働黨（インデペンダント・レボール・パーチー）はニュー・トレード・ユニオン員のケヤ。ハルヂー、ジョン・バアース、トム・マン諸氏に依りて創立せられ、トレード、ユニオンと相呼應して、大陸に行はるゝ労働者の運動と同一の行動に出た。國會議員の選擧を爭ひ、二大政黨以外有力なる一黨派となつた。一八八一年創立のソシアル・デモクラチック・フェデレーション、一八八三年創立のフハビアンと相接近して、貧民階級を煽動した。一八九九年のトレードユニオン第三十二回會議にて社會主義者ホルメスは、労働者の利害を國會に於て代表せしむるが爲に、國會議員の委員は労働者組合に委任するに、左の權限を以てすることを提議した。曰く

労働者組合、労働者組合の系統組織（聯合にて中央部支部等を形成するもの）及社會黨員の代表者の聯合會議を召集して、國會に於ける労働者代表者の數を增加するの方法を講究討議せしむること。

此提議は坑夫及紡　織　職工の反對ありしに拘らず、多數を以て之を通過した。一九〇〇年二月二十七日聯合會議を倫敦に開き其決議に基きてレボアー・レプレセンテーション・コンミッテー（労働者代表委員）なる者創立せられたるが、是實に獨立労働黨の牙營であつた。是に於て労働者組合員にして、牙營に隸屬する者、一九〇二年に三十五萬六千五百人、一九〇三年に八十六萬千百五十八人、一九〇四年に九十六萬九千八百人に上ぼりトレードユニオン百六十五、トレード・カウンシル（組合聯合）七十六亦之に馳參じ、後遂に「レボアー・パーチー」（労働黨）として嚴然たる威力を有するに至つた。一九〇五年リバプールに開きたる聯合會議に於て社會主義の終局目的を綱領に明揭したるが如き、頗る注目に價するのである。而して一九〇六年の總選擧は労働黨員三十名、別に労働者より選出せられたる議員二十名を國會に出した。又市町村會に於ては社會民主黨（ソシアル・デモクラチック・フェデレーション）は、一九〇四年乃至一九〇七年に、十六萬六千四百四十票を以て七十六人の議員を出だし、獨立労働黨[illegible]

の議員數三百人なりしに一九〇七年には八百四十五人に增加した。是に至て労働者組合の勢力は侮るべからざるものとなり、而て同盟罷工の執行に依り、國家經濟に大損失を加へ、公衆に累を及ぼして公安秩序の維持を妨害すること少からずなつた。殊に總同盟罷工を敢てするに至ては慄然として恐れざるを得ない。

△英國の労働者組合と法律

業主は外に在ては大陸に於ける工業勃興に依り漸次工業獨占の樂夢を破られ競爭上一大奮起を要するに方り、内に在ては労働者組合の壓迫に依り年々大同盟罷工の慘毒を嘗めざるを得ざるの窮狀に陷り、國家經濟に及ぼす影響は、得て輕視すべからざるものとなつた。又社會黨が軍備に反對し、國家を無視するについては、労働者の勢力を藉るの必要を認め極力其の方面に盡力したるを以て、英國労働者組合も自然社會黨の意見に投合し、例へばクリミヤ戰爭を非議し、フハショダ事件の起るや、佛國労働者組合と相約して戰爭に及ばざらしむることを策し、又南阿戰役を評して犯罪的行爲と罵り、一昨年のモロッコ事件に際して戰爭を止むるの手段として總同盟罷工を爲すべきことを、コッペンハーゲンの社會黨大會に提起したるが如き、要するに國土を愛するの感念は、毫も之を有せざることを以て本旨として居る。英國にては──社會主義者──労働黨──労働者組合──は其名を異にして其主張を一にし、常に共同の行動を爲して居る。此くの如

労働者組合の[illegible]を感じ種々なる新判決例を見るに至つた。其二三を例示せば左の如くである。

一、組合外の業主及労働者の名簿を頒布するは違法なり。
二、組合に加入せざる者及同盟罷工の命令に從はざる者の就役を妨ぐるが爲に監視を付することは、暴行脅迫其他不當の行爲に出でたると否とを問はず違法なり。
三、組合役員にして、同盟罷工違約の労働者を雇入れざること、及其雇入れたる者を解雇すべきことを、業主に談判するは違法なり。
四、或商號、業主に對し、一定の人に品物を交付せざるべきこと、又は一定の業主より交付したる生產品を販賣せざるべきことを談判するは違法なり。
五、労働者組合に依り、前項の實行を企圖するは、一種の陰謀と看做すべき違法所爲なり。
六、自己の利害に係る労働關係の改良を計るにあらずして同盟罷工を約束するは違法なり。

以上は民事訴訟に依りて損害賠償の責に任せしむるのである。加之タフ・ベール事件の判例に依るに、組合役員の行爲に付、組合は聯帶責任を有することとなつた。思ふにトレードユニオンの弊漸く大なるを致して、之を取締るの必要愈々急なるを感じ、遂に司法の府を動かして、此の如き判決例を作らしむるに至つたのである。

△佛國の労働者組合──シンヂカリズムスの主張

英國のトレード・ユニオンと正反對の行動を爲すはシンヂカリズムスである。シンヂカリズムスは佛國に起り、伊國其

他に波及して居る。

佛國には當初勞働者組合合同（ラ・フェデラション・デ・シンヂカ）及び勞働者紹介合同ラ・フェデラション・デ、ブールス・トラベイユ）の二團結ありて、相軋轢せしが、一九〇二年互に合併して勞働者總同盟（コンフェデラション・ゼネラル・ヅ・トラベイユ）となつた。其所説を稱して吾人之をシンヂカリズムスと云ふのである。

英國トレード・ユニオニスト某、曾て言へるあり、曰く『決議の賛否を問ふや、必ず奮つて手を擧ぐる者は佛國の同志である。袖手沈默を守るべきに方つて、之を爲す能はざる者亦佛國の同志である』と。蓋し感情に驅られて突飛の行動を爲すは羅甸人種の性格である。社會黨員たる國會議員ミルラン先づ內閣に列し、尋でブリアン及ビビアニー大臣となるや、勞働者の獨立行爲を主張する徒は念へらく、彼等は同志を捨てゝ俗化せり、復た賴むに足らずと。遂に社會黨より分離し、合同してコンフェデラション・ゼネラル・ヅ・トラベイユを組織したのである。規約第二條に曰く、『本團結は政治上の問題と一切干與する所なく、私業主の制御及其勞銀關係を打破するに必要なる爭鬪を辭せざる各勞働者を統一するものなり。何人も政治上の選擧に際し、本團結員たる名義又は同盟の役員たることを利用することを得ず』と。而て常設委員三部を置き、其一は同盟機關新聞の發行、其二は同盟罷工、其三は總同盟罷工を掌らしむ。彼等は曰く『社會黨は俗化せり。革命者たる實力を失ふて社會改良者を以て自ら甘ぜり。社會黨は議會の議席を爭ふが爲に同志の多數を求めて主義の異同を問はず、議會に提案したるものを實行せんが爲に、其說を平凡にして、其敵を少くせんと欲す。其勢力を維持せんが爲に一種の權力に服從せる團結を爲し毫も下層民の利害を念とせず。寧ろ下層民の利害に反對せり、勞働者に危險を與ふるは議會政策より甚きはなし。凡そ勞働者は政治上の黨派より脫離して、自己の目的の爲に團結すべし。勞働者の團結は資本制度を急速に破壞するの機關なり。信賴すべきは下層民の革命思想と其思想を興奮せしむべき義俠心とあるのみ。夫れ義俠あり、故に一身の利害を念はず、一切の犧牲を吝まざるなり。「ヨハネ」傳の初に於て言葉ありと言ふは誤れり、初に於て行爲あるなり。其行爲は戰鬪なり、戰鬪は刄を以てすべし、戰鬪の練習は同盟罷工を以てすべし。宜く總同盟罷工を以てすべし、勞働者の團結は業種に依るを要せず、宜く工業全部に涉りて之を糾合すべし、醵金は之を要せず、富は人を懦弱にす、仲裁機關は必要なし、緩漫取るに足らず。國家の機關は之を亡ぼすべし、軍備には反對すべし』云々。是れシンヂカリズムスの主義方針である。勞働者總同盟は一九〇九年に於て組合員二十萬三千二百七十人を有し、當時佛國に於て組合を組織して勞働に從事せる者總計八十三萬六千五百二十四人の四分一は、シンヂカリズムスを奉ずる恐るべき趨勢である。

ウヰルヘルム・スチーダーが、勞働者組合は必しも同盟罷工を減少するの効果あるものにあらざることを論じて、殊に

佛國勞働者組合の[illegible]たるは、レンヂカリズムスの未だ生れざる一八九八年[illegible]た。スチーダーをして佛國の今日を許せしめば其れ之を何とか言はん。

△獨逸勞働者組合の三派

獨逸勞働者組合は初めは政治上の意味を混じ、後は稍々經濟上の問題に限局するの傾向を呈し來りたる點に於て、英國トレードユニオンの沿革と反對であり、經濟上の問題に付ては可成丈平和の解決を望む點に於て佛國シンヂカリズムスと反對である。

獨逸勞働者組合は其成立の歷史に依り大約三類に分つことが出來る。其一はシュワイチェルの創立に係る者、其二はヒルシュ・ヅンケル勞働者組合、其三は基督敎勞働者組合である。此他にもポーレン勞働者組合エフ ハンゲリッセ勞働者組合其外數種の組合ありと雖　之を略す。

一八六八年八月シュワイチェルはフリッセと協力して、ハンブルグ市の會議に於て勞働者組合說を提議して成らず、同年九月更に會議を伯林に召集して之を決定したのである。同會議に於てマッキス・ヒルシュは、組合の趣旨に關し異論を唱へたるも、少數にて破れたるを以て、同月國會議員ヅンケルを議長として別に會議を開き、是亦多數を以て可決せられた。シュワイチェル創立の組合は之をゲヴェルクシャフトと稱しヒルシュ・ヅンケル創立の組合は之をゲヴェルクフェルアインと

[illegible]するも、[illegible]も然りである。シュワイチェルは社會主義者である。彼は獨逸國勞働者全部を包括して鞏固なる團結を組織し、同盟罷工の手段に依りて社會主義的共同進步の目的を達せんとするのであることは、會議の召集文に自ら之を記して居る。之に反しヒルシュ・ヅンケルの組合は業主と勞働者との間には、自然に情誼關係の存するものたることを前提とし、勞働者の地位を改善するには、力めて平和の方法を擇び、若し兩者間に爭議あるときは仲裁機關に依り仲裁を試み、已むを得ざれば裁決を與ふるを以て主旨として居る。ヒルシュは英國に遊びトレードユニオンの實際を研究し來りて之を獨逸に實行せんと試みたのである。而て政治上の黨爭に組合を利用するは兩者相同じ。ヒルシュ・ヅンケルは進步黨の立場より社會黨に反對し、社會黨員の組合に加入することを拒絕し、シュワイチエルは社會主義實行の手段に供せんとしたのである。

兩者は共に政治上の運動を加味し、勞働者組合の性質に叶はざるの理由を以て、一八九七年、基督敎勞働者組合なるものが起つた。而て組合は政治に關與せざるを以て可なりとするのみならず、宗敎關係に於ても同樣なるを以て政治を避けて宗敎を加味せる基督敎組合も亦同じく批難を免れないのである。且基督敎組合も亦社會主義には反對にして社會黨の組合とは相容れなかつた。

△獨逸勞働者組合と社會黨

然るに三種の組合は發達するに隨ひ、漸次相接近し、業主の利害と互に背馳するの勢を致し、全く勞働者の運動機關となつた。是に於て業主は組合の發達を喜ばず、さりとて社會黨も亦甚だ之を好まぬ。社會黨の目的は其理想に基き、未來の國家、未來の社會を形成するに在る。之を換言すれば資本制度に伴ふ現時の秩序を打破して社會共營の生產機關に依り社會共有の生產を爲し、勞銀制度を廢して生產分配の方法に改むるのである。之に反して勞働者組合は遠き理想の實行を企圖せずして、寧ろ目前に於ける勞働者の利益を增進するを以て主旨として居る。勞働者にして目前の利益を得て、其地位を改善し其堵に安ずるに至らば、何人も社會黨員の爲に盡す者はないであらう。勞働者組合は漸次社會黨の政爭より遠からんとするの風潮を起せる故ありと謂ふべきである。故に一八七四年ハンノーベルに開ける勞働者組合總會に於て『勞働者運動の用に供せらるゝ組合は勞働者に對する謀反者である。黨派の勢力に依り成立せる組合は宜く解散すべし』と決議した。

之が爲、社會黨の組合は一時衰へたが、後社會黨取締法に依り、社會黨の政治結社を制壓せらるゝに及び、已むことを得ず、勞働者組合の名義を以て團結を行ひ、遂に組合の數、俄に增加して來たが社會黨取締法の廢止は再び組合の衰退を致した。一八九二年伯林に開ける社會黨會議に於て、レギインは社會黨が、組合を援護せざることに付、不平を述べた。一八九三年コェルンに開ける社會黨會議に於て、アウエルは勞働者組合に同情するの提議を爲したるも、會議の結果は、勞働者組合の機關紙は、常に勞働者の小利害に拘はり、社會改革の大案件を忘却し、遂に俗論に殉するの大危險物なりとの意を以てアウエルの提議を排斥した。一九〇五年エナの黨會は普通選擧、及び勞働者團結自由の反對論に對抗し、其他勞働者の自由を得べき根本權利を獲得するの最良手段として、總同盟罷工に依るの議を多數を以て可決し、勞働者組合の持論を擊破し、頗る得意なりしに、事實は之に反し、勞働者組合の機關紙は多く該決議を駁論し、總同盟罷工に依りて、同盟罷工基金を一擧に消費し盡すの不利を唱へ、一九〇六年マンハイム黨會亦エナ黨會と同一の決議を繰返したるも、勞働者組合を實際に動かし得なかつた。

△最近の獨逸勞働者組合

然と雖、英佛其他の諸國は既に總同盟罷工の兇焰に包まれ居るに、獨り獨逸のみ何時迄も類燒を免るゝことは出來ぬ。何となれば勞働者組合は、總同盟罷工の忽ち點火すべき燃料だからである。近來獨逸に於て、大同盟罷工の屢々經濟界を攪亂することあるは、苟も新聞紙を讀む者の能く知る所である。昨年三月ルール沿岸地方石炭坑夫大同盟罷工の如き、其一例である。同月十四日帝國議會に於ける質問討論及國務大臣[illegible]來る。[illegible]げを實行せんとしつゝあるに際し、社會黨、[illegible]ル及ボーレンの三勞働者組合は、合同して賃銀直上げを請求し、業主の多數より宜く法律に定めたる組合の委員を經由すべきことを以て答へたるに滿足せず。即ち罷工の必要なきに方りて、遂に罷工を斷行し、勞働者中多くは之に心服せざるを以て、其或は業主の爲に勞働に從事せんことを恐れ、殊に基督教組合の勞働者及勞働者組合を有せざる勞働者の罷工に參加せざるを以て、自轉車隊を編制し、馳騁出沒して此等勞働者を監視し、暴力を以て罷工の强制を試みんとし、政府は罷工を欲せざる勞働者保護の爲め、六千の警察官を派遣して警戒した。而て其動機は全く英國石炭坑夫總同盟罷工に同情して聲援を與へたのである。社會黨員たる議員サックセは、其決して英國罷工に同情したるに非ざることを辯解したるも、英國社會黨機關紙の語氣及四圍の狀況に依り、同情同盟罷工即ち(總同盟罷工の異名)たるは疑を容れぬ。佛白二國に於ても同時に英國に應援する石炭坑夫同情同盟罷工があつた故に、世間何人も、同盟罷工の理由を認むる者なく、結局何等効果を得ず。徒らに勞働者組合の資金を濫費し、勞働者の勞銀を損失せしめたるのみにて、同月十九日ボッフーム會議の決議に依りて同盟罷工を中止するの已むを得ざるに至つた。唯宜く注意すべきは、一九〇五年の黨會決議は終に實行せられた一事である。加之社會黨反對を標榜せるヒルシュ・ヅンケル組合なも、其渦中に卷込み得たるは、彼等に取りて大[illegible]である。

△北米合衆國の勞働者組合

北米合衆國勞働者組合は種々なる名稱の下に合同聯結して居る。其內有力なる者は米國勞働者合同（アメリカン・フェデレーション・オブ・レボール）である。英國トレードユニオンの今日に於けるが如く、政治上の意味を含み、第一、八時間勞働の法規設定、第二、市街鐵道、水道、瓦斯裝置及電氣裝置の國有、第三、電信電話鐵道及鑛山の國有、第四、土地所有權を廢して先占及使用權を以て之に代ふることの實行を以て政治上の目的として居る。而て社會黨は社會勞働黨（ソシアリスト・レボーア・パーチー）及社會黨（ソシアリスト・パーチー又たはソシアル・デモクラチック・パーチー）の二派に別れ、互に反目して居る。其反目の重なる理由は、勞働者組合に對する意見の相異に在る。社會勞働黨は勞働者組合を政治上の見地より黨首に從屬せしめんと欲し、社會黨は勞働者組合を黨派より脫離して獨立し、進で萬國同盟を企てんと欲するのである。米國勞働者組合に關する細目の說明は、今之を略す。米國勞働者組合の社會主義實行と相關聯し、而て業主の事業に、大なる支障を與ふるものなることは斷言するに憚らない。

△勞働者組合と同盟罷工

以上英佛獨米の實例に徵するに、勞働者組合發達の針路及現狀は、各國互に其趣を異にし一定の論斷を下す能はざれども、要するに政治上の爭に近づくものは同盟罷工の手段に依る外、社會黨の所謂議會政策に從ふのである。政治以外に獨立せんとするものは、同盟罷工を單一なる手段として、階級戰鬪の旗を揚げんとするものである。佛國シンヂカリズムス（伊國亦然り）の如きに至ては、亂暴狼籍、無政府主義者と大差はない。而て同盟罷工は、今や一工業内に於ける各業種の勞働者間のみに於てせず、一定種類の工業界全部に通じ、可成丈、廣き範圍に於て總同盟罷工の暴擧に出でんとするもの、各國の例、概ね同樣である。而て近來の社會黨萬國會議に於ける總同盟罷工の首唱者は、常に英國にして第一に之に和同する者は佛國人である。

勞働者組合あるときは或は勞働條件の協定に依り、或は仲裁機關の仲裁又は裁定に依り罷工を豫防して經濟界の平和を保ち得るが如くなれども、既往の經驗に於ては却て同盟罷工を頻繁ならしめ、且其氣焰を高め、多數勞働者を威壓し、其意に反して罷工の仲間入を爲さしむるもの、比々皆然りと云ふも、恐くは誣言でない。曾て業主の冷遇虐待に對抗して團結の自由（コアリチオンス・フライハイト）を唱ふる者が、今は却て團結の壓制（コアリチヲンス・ツワング）を愁訴し、比斯馬克の言ひし『勞働は權利なり』との語は團結に依りて蹂躙せられ、今や勞働を欲する勞働者の保護を渴望するの聲、餘程吾人の耳朶に響くに至つた。本年三月十一日[illegible]滿場一致を以てフォンプットカーメル提議の勞働者及工業者を、ボイコット及ストライキテロリズムス（同盟罷工の暴制）に對して保護するの件を可決したが、會まルール地方同盟罷工の狀況暗憺たるに際したる故、却て激昂を招ぐの虞ありしと、又提議は殆ど團結自由を否認するの極端に走れるを以て政府は之に反對し、法律の成立を見るに至らなかつた。然ども勞働者團結の暴制（テロリズムス）を壓惡するの情は到る所に之あるのである。「ベルリーネルベルゼンツアイツング」の如きは、政府がプットカーメルの議を斥けたるを時宜に適するものと論じつゝも、矢張テロリズムス・デル・オルガニジールテン（勞働者組合員の抑壓）を極力痛論して居る。余の見ざる他の新聞紙にも同樣に意見を發表したるものが定めてあるであらうと想像する。

勞働者組合及業主の双方より若干の委員を出だし、之に局外の公平なる經驗家法律家を加へて、業主勞働者間の爭議を仲裁及裁定せしむるの仕組は、之をして正當に實行せしむるに於ては必ず、不幸なる同盟罷工を少からしむるの理合なるが、而も其裁定は性質上强制執行の權力を付與する能はざるを以て、（各國の例亦然り）業主之に服せざるとき、勞働者が同盟罷工の擧に出るは、自衞上已むを得ざる所にして、國法亦之を是認せねばならぬ。然るに組合は事實に於て他の野心に利用せられ、理由なき同盟罷工を斷行し業主は又之に對抗して、勞働者の拒絕を行ひ、其結果工業界の大損害を惹起し同時に[illegible]

[illegible]和を攪亂することの流行するに於ておや、又況やシンヂカリズムスの如き、畏るべき勞働者組合あるに於ておや、彼等は軍備に反對し、暴力に渴仰し、工場に於て罷工を緩漫として機械の破毀（サボタージ）を敢てするのである。實に社會の公敵である。

△勞働者にあらざる野心家

勞働者若くは下等賤民程憐むべきものはない。法律は勞働の賣買を原則として强者富者に對し同等の私權を認むるに拘らず、動もすれば、業主の抑壓を受けて事實は勞働力の賣買即ち不對等の服從關係に立ち、又一面之が保護者と稱して、勞働黨を組織するの徒は、勞働者組合及普通選擧を、其野心を遂行するの踏臺として、實際は勞働者の利害を念とせず。加之勞働者の力を藉るには之を激昂せしめて勇氣を皷せしむるを必要とするが故に、勞働者の地位の改善せらるゝことを喜ばず。勞働者は此輩の爲に却て苦境に陷ゐれらるゝの不幸を見るのである。試に見よ、佛國のバーブース、サンシモン、フーリエー、ブラン、カベーは、孰れも勞働者ではない。現時の同國社會黨員ギューデ、ジョール等、亦同樣である。此狀態は墺伊英皆同じである。獨逸社會黨の創立者ロードベルツース、マルクス、ラサーレ、エンゲルス、リーブクネヒトは一人も勞働の經驗を有しない。ベーベルは當初ドレックスレルを業とせる手工者たりしことあるも、今は政治家にして、著[illegible]ク、レーデブール、ダビットの如き、或は資本家あり、或は辯護士あり、或は著述業者あり、此の如く擧げ來らば、勞働黨社會黨の中心は、決して直接の利害關係者たる勞働者ではなく、而して之を利用する野心家である。又は空論家である。處士橫議黠首を亂る者、實に社會黨の狀況である。

△同盟罷工の勞働者に與ふる利益幾何

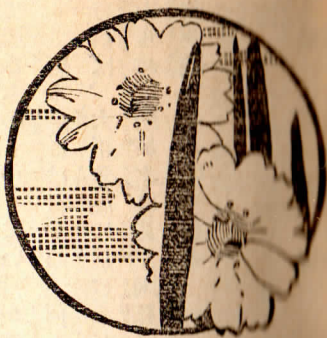
同盟罷工は勞働者組合の最終手段である。勞働者組合は、同盟罷工基金を積立て、同盟罷工をやらせる。同盟罷工は或る點より見れば、勞働者組合の產物である。其同盟罷工にして、勞働者の利益となるものなれば、假令業主の之に窘むにせよ、余は寧ろ同盟罷工の勢力を賴みとするのである。唯統計に依るに同盟罷工は其目的を達せざる場合が隨分多い。而て勞働者は非常なる損害を蒙むる。

今春ジョン・ホルト・スクリングが「デーリーテレグラーフ」新聞紙に公表したる統計は、最近二十年間に於ける英國大同盟罷工中、勞働者の勞働を失ひたる延日數五百萬日以上に涉れる者を列擧して居る。即ち一八九二年の紡績業同盟罷工六百萬日、一八九三年の鑛業同盟罷工二千百萬日、一八九四年の鑛業同盟罷工六百萬日、一八九七年の機械製造業同盟罷工

七百萬日、一八九八年の鑛業同盟罷工千三百萬日、一九一一年の鐵道同盟罷工は不明、本年の鑛業同盟罷工二千五百萬日である。本年の石炭坑夫同盟罷工の如き、若し石炭缺乏の爲、他の事業の勞働者に及ぼしたる損失を積算するに於ては、驚くべき延日數を得るであらう。該同盟罷工に依りて、勞働者の損失に歸したる勞銀は六千萬圓を超過し、勞働者組合の罷工基金の減少額及各勞働者が罷工中貯金を引出し消盡したる額は、更に二千萬圓に上ぼるであらうと云ふ。

平素勞働者組合の經費及同盟罷工基金其他の資金を貯ふるが爲に、勞働者が勞銀を貢納せしめらるゝの負擔は、決して輕くない。去りとて組合に加入せざる者は組合に敵視せられ、脅迫せられねばならぬ。業主亦組合を憚りて、組合以外の者を容易に雇入れない。勞働者組合は、勞働者をして、進退維れ谷まらしむるものである。

△我が國の事情

飜て、我國の狀態を見るに、業主勞働者の關係は未だ歐洲工業國の如く相嫉視するには至らぬ。又或種類の勞働者は往々組合を爲して居るものがある。鑛業の如きは舊幕時代よりの沿革ありて、飯場頭の下に勞働者は自ら統一せられて居る向がある。余は強ち組合の成立を不可とするものではない。然れども一般の工業に關し大聲疾呼、勞働者の團結を促がすは稍々輕卒であると思ふ。論者試に夕張炭坑に遊び、坑夫の人名を問へよ。又試に門司港に於て石炭仲仕業の正確なる人員を尋ねよ。朝來晩去、出入常ならず、到底之を取調ぶるに由なきことを發見するならん。此等勞働者を統一して組合を作り、組合資金を醵出せしむること果して出來得るや如何、蓋し不可能事であらう。英獨諸國に於ても一朝の唱和に依りて、組合が各地に蜂起した譯ではない。始めは熟練せる職工間に之を組織し之を從弟に及し、産業革命の行はれたるに至り、終に之を大工業に及ぼし、又之を婦人の勞働者に及ぼしたのである。而て其動機は業主の虐待に在る。我國は現狀に於て歐洲工業國と同一の軌轍を踐で居らぬ。而て歐洲工業國に於ける組合の利弊も之を鑑みることを得たのである。猶進で之を講究することは可なるが、急遽組合を成立せしむるは、所謂助けて長ぜしむるの感があるのみならず、頗る危險なりと思ふ。余は業主にしろ、勞働者にしろ、互に自衞策を講ぜしめて、國家が傍觀の地位に立つことは元來吾人國民が國家の保護を要求し得る立場より見ても、變則の大なるものにて、決して賀すべきことでないと信ずる。國家は宜く其責任を以て、各般社會政策を講ずると同時に、同盟罷工に對する政策、即ち適當に業主を抑壓し、又勞働者の利益を保護して、兩者の感情を緩和するの道を盡すべしと信ずるのである。其方策に至ては本論之に及ぶの餘地を有せず。本論は唯消極的に勞働者組合の奬勵に反對するのである。

日本工業の地方化

神戸高等商業學校教授　津村秀松

一

惟ふに十九世紀は分業の時代にして、二十世紀は集中の時代なること、夙に識者の道破せるところであつたが、幸か不幸か、此の豫言は一切の方面に於て悉く的中し來つて、人口の集中、富力の集中、事業の集中、勢力の集中は、今や二十世紀に於ける社會の四大現象たらんとするの概がある。此の種社會の四大現象、從て又二十世紀の四大特色たるものに就ては、私は嘗て明治四十年十二月東京帝國大學に於て開催せられたる社會政策學會第一回大會第二日目に「金の力と人の力」と題して講演したことがあるし（社會政策學會論叢第一册工場法ト勞働問題二九一頁以下參照）、又近くは昨年春五月兵庫縣明石の浦に於ける第八回全國産業組合大會の席上、「當來の經濟」と題して、其の旨を布衍して述べたこともある（産業組合第八十一號第一頁以下參照）。であるから、此の事に就ては最早や繰返して世人の注意を喚起する必要ないと思ふが、然し此の種社會の四大現象は、年と共に益々著しきを加ふる一方であるし、此の種社會の四大趨勢は明治が大正に改つても、大正元年が大正二年に代つても、用捨なく進み行きつゝあるものであることを、呉々も注意して戴きたいのである。

それも事西洋に關するのみなる時代には、それは學者の呑氣な研究の對象であるとか、それは經世家の參考の資料に止るとかいふやうな調子で、對岸の火事視することも出來やうが、今や然らずで、足許にまで火が付いてきたのである。歐米に限れる現象ではなくて、我國に於ても亦次第に顯著ならんとする四大現象なのである。そして是等四大現象の結果は、どうなるかといふに、それは言ふまでもなく、都鄙盛衰の懸隔となる、貧富勢力の懸隔となる、社會組織の不調和も是れから起つて來るし、階級戰爭の修羅場も玆から兆して來るのである。

然るに我國では未だ歐米の如く貧富の懸隔甚しきに至つて居ないから、何もそう聲を大にして、西洋の學者の受賣を

する必要ないじやないかといふ所謂日本通なる人々の議論もあるが、夫等の人々でも、現時我國に於ける都鄙の盛衰益々甚しきに至らんとする傾向だけは、否定するに由なきものと見へて、西洋の學者と同じやうに、人の集中、富の集中、事業の集中、勢力の集中の結果、到る處都會は益々繁昌する一方に、到る處農村は愈々凋落せんとしつつある傾向を切りに氣にして居るやうである。昨年のやうに米價が無比の騰貴をして、依て利益するものは、地主殊に大地主のみで、日本農民の最多數者たる中地主以下のものは、賣米の餘裕少ない丈けに利益する所も少なく、小農小作人の如きに至つては、米價の騰貴に伴ふ一般諸色の騰貴に由て、却て菜色あるといふことである。此の分では矢張り地方農村の荒廢を免れずと見るも、強ち杞憂でない。近頃政府當局者に於ても深く此の點に留意し、種々樣々なる方法を講じて以て地方の改良進歩に努むるが如くであるが、其の効果更に現はれず、中には全く見當違ひなる愚策もありて、今に世の物笑ひの種子となつて居るものも少くない。が然し之を他人のことのやうに嘲笑して居る譯には行かぬ。何としても地方開發の目的を達せなければ、大正年間に於ける日本の健實なる發展を見ることが出來ぬ。所が之は甚だ困難な問題で、解決して容易ならぬ難問題であるのである。

二

發の曙光ありといふは、近時我企業界に於ける工場設立地選定の方針一變したことである。是れまで我國の工業は紡績業を始めとして皆製品販賣に便利なる都會の附近即ち郊外の地に工場を設くるを以て常態としたのであつた。それが中頃になつて一變して原料又は燃料の吸收に便利なる場所に移ることになつたが、それでも尚ほ遠く都會を離るることを不利としたのである。然るに近頃に至り此の舊態に變化を來し、大都會よりも中都會、中都會より小都會といふが如くに、次第に都會を離れて海運若しくは水運の便さへあれば寧ろ僻遠なる田園の間に工場を設立せんとせるの傾向が著しくなつて來た。之は勿論我國のみの現象ではなくて、西洋諸國に於ても亦之を見るといふが、兎も角も我國に於ては、一つの新しい、そして又著しい現象である。此後も此の趨向が改らず、進んで止まなかつたならば、中小都會の生命を維持し得るは勿論併せて地方農村の衰頽を支持し、其の繁榮を期待する上に於て、一箇有力なる援助を得るものだと喜ぶことが出來る。

さて此の喜が永く續くかどうか。それを判斷するには、先づ以て其の是れあるに至つた原因を探ぐるが近道であるし、又適法でもある。之には大小種々の原因がある。そして其の內には、一般普通の原因もあるが、又我國特有の原因もある。曩に述べたるが如く、近年何れの國に於ても、人口集中の結果は都市の膨脹を招ぎ、都市膨脹の結果は都市の內外に於ける地價の騰貴を促したが、特に我國に於ては、此の趨勢を見

[illegible]間に、土地投機熱なるもの高まり、土地會社なるもの雨後の筍子の如く勃興したるが爲め、野も山も、郊外數里の地に至るまで、地價は驚く可き程の奔騰を見るに至つたのである。此の結果、位置としては申し分なき場所でも、從て高價なる左樣な土地に廣大なる敷地を要する工場を設立しては、地面に資本を固定せしむること多きに失するの難あるが爲め、自から地價の今尚ほ比較的に低廉なる遠隔の地方を選ぶことになつたのである。それも交通不便なる昔ならば、出來難き企であつたが、今日の如く交通機關や、又は通信機關が、一ト通り整備したるからには、原料や燃料の運搬に就ても、將又製品や副產物の販賣に就ても、遠隔の地方たりとも、場所によりては決して不便でない。殊に我國は幸に海岸線多き國であり、大小の水流少なからざる國であるから、大抵の場所は運賃割安なる海運や水運を利用し得るが上に、海運や水運では、或る程度まで距離といふことが殆んど運賃增加の問題にならぬから、製品や副產物は勿論、原料や燃料の如き大量品の輸送も、費用の點に於ては、格別の增加とはならぬ。加之、急流多き國情を利用して、動力に水力を使用する一點に眼を着くる場合には、都會よりも地方の方、却て便利多しといふこともある。

三

然し以上列擧の諸點が、外國に於ては兎に角、我國に於け

動の原因は[illegible]のである。都會に居つて地方から職工を[illegible]よりも、地方に出かけて行つて附近の勞力を吸收する方が、[illegible]に便利で、安全で、そして又割安であるといふところに、主なる原因が伏在して居るのである。それには又其の然る可き一段に深い理由がある。

元來、日本の工業の短所とする所は、兎角資本が缺乏勝ちであるといふことと、技術が今尚ほ幼稚であるといふところにあつて、そして又其の長所とする所は、勞力が豐富であつて、それが又低廉であるといふところにあるといふことに、是れまで內外多數者の意見が一致して居つた。然るに近頃になつて、能く事情を調べ、學理に照した結果、西洋の日本研究者も、日本の日本研究者も、日本の工業は、至極安い賃銀を拂つて居るが、それが爲め至極高い勞力を使つて居るものだといふことを發見してから、彼處では日本の工業の競爭恐るるに足らずと樂觀して居るし、此處では日本の工業の前途憂ふ可しと悲觀して居る。然しこれ丈けはまだ樂觀の種にならず、又悲觀の材料にもならない。日本の工業家が安い賃銀を拂つて居るから、それが高い勞力となつて居るだけが、日本の工業の缺點ではない（拙著、國民經濟學原論、下卷、第二十五章第五節「賃銀增加と勞働能力」參照）。日本の工業の一大缺陷は、日本の工業が今尚ほ多く職工即ち定職的職工を得られないといふ所にある。そしてそれが日本の工業の中樞たる紡績織布等所謂纖維工業に於て

最も甚しいのである。

四

方今我國に於ける近世的工業といへば、先づ第一に各種の紡績業、次で各種の織布業に指を屈すべきである。將來我國が工業國となつた曉にも、其の工業國としての特色は、英吉利のやうに製鐵業でもなければ、獨逸のやうに化學工業でもなく、恐くば纖緯工業であらう。之は日本人の經歷と民性とに依つて然か斷ずることが出來る。日本の工業の特色が是にあるから、現在でも日本の工場勞働者といへば、其の三分の二まで女工であるといふ特色をも持つのである。そして其の女工の十中九までが既婚者でなくて、未婚の女子であるといふ異彩をも放つて居るのである。於是乎、日本の工場に於ては勞働者は新陳代謝が激しく行はれ、熟練を重ずるに至らないといふ日本工業の一大缺點が現はれてくるのである。

それは又如何なる道理に由るのかといふに、日本の職工の多數が女工であつて、そして又其の女工の多數が未婚者であるが爲めに、多數者たる未婚女工が、年頃になれば、結婚の爲めドシ〱故郷に歸つてしまふからである。丁度其の昔田舍の小娘が嫁入仕度の爲めに一度は必ず都會に奉公に出かけて來たと同じやうに、又それと同じ氣持で以て盛に女工に雇はれてくれば、三年、永くて五年たてば、ドシ〱故郷に歸つてしまう。然し之は獨り女工のみでない。男工に於ても亦幾分其の傾がある。これは日本人には今尚ほ郷土心が強いからだといふのも一説だが、それよりも深い原因は、恐く日本固有の家族制度にあるであらう。獨娘なれば、是非養子を迎へねばならぬ、獨息なれば、是非家督を相續せねばならぬ、然らざる男女でも、永久に墳墓の地を離るるといふことは、家族制度に於て許されない場合がある、斯樣な譯であるから、本邦工業の缺點とする所は、職工の移動甚だしくして、熟練を重ずるに至らない内に、盛に新陳代謝するといふ所に存することになる。それが言ふまでもなく、職工の勞働功程の上に現はれて來る。從て製品の品質の上に現はれて來る。そこで日本の工業が對外競爭力が兎角鈍り勝ちになるのである。私が嘗て某紡績會社の工場長から聽いた話に、現今日本の紡績會社の職工といふものは、丸三年毎に全部交替する勘定になる。激しいのになると、一年で全部一新するのもある。然るに斯く交替常なき職工を田舍から雇つて來るに當つて、爲めに要する募集費なるものが、近い所で一人に付き六七圓から要る、遠い所になると二十圓三十圓若くはそれ以上もかかるのがあるといふことである。斯く多くの費用をかけて折角雇入れた職工が、二三年の内に歸つてしまう、歸らないでも他に誘拐されて行く者少なからずといふ現狀では、社會經營の中心問題が、製品の販賣方にあるのでなく、原料の買入方にあるのでなく、實に職工の足止策にあるといふ當業者の苦心談も決して僞ではないと思ふ。紡績業の如きに於ては、先物賣買であるから綿の買入に就ても、巧拙がある、絲の賣方に就ても技倆を要する、然し同じ原料を使つて、同じからさる製品を造り、品質の優秀で永遠の勝利を占むるには、熟練せる職工の力に負ふ所少なからずであるから、先見の明ある工業家が自然永久の生命ある職工を得るの道に苦心するに至つたのは、決して不思議でも何でもない。日本の工業家としては、當に然る可きであること、前述の如き日本の工業の特質と、日本の職工の實況に照して、首肯せらるるのである。

五

於是乎、近時我國の工業界に於て、新設工場の敷地を、都會の郊外よりも、田舍の海岸に選ぶといふ新傾向が現はれてきたのである。是れまでの如く、工場を都會に建設すればこそ、職工の募集費に少なからぬ金錢を要したのであるし、折角得た職工を他に誘拐せらるるといふ危險も起つたのであるし、左なくも職工の新陳代謝が激しくて製品の改良を望めないといふ遺憾も伴つたのであるし、結局、當業者の最も頭を惱す所は、職工問題にあるといふことになつたのであるが、それが地方に工場を設立することになると、勞力は豐富であり、諸色は低廉であつて、そして其の地が職工の故郷であるから、皆が皆、土着の職工で、假令ひ嫁入しやうが、婿取しやうが、家督を相續することになつても、健康其の他の事情の許す限り、永く職工たり得る者になるから、今迄よりも遙に安い勞力を容易に且つ確實に保有し得ることになる、永久の生命ある勞力を廉價に且つ多量に吸收し得ることになる。

其の上、田舍は一般に生活が容易であつて、諸色が低廉であるといふことが、獨り職工の賃銀なり、衣食住費に於てのみならず、其の他の會社の役員使用人の俸給に於ても、又工場建築の費用に於ても、節約し得る方面少なからずである。殊に纖緯工業に於ては、相當に濕氣の含む空氣を要する、用水の不良なるを忌むといふ點からも、自然田舍に吸收力を持つことになる。

以上述べたやうな大小種々の原因の綜合により、將來我國の工場なるものが、次第に地方に本據を定めて、都會には單に簡單なる販賣所を設くるに過ぎぬもの多きに至る自然の傾向あるものであるが、幸に此の新傾向にして益々進んで止まなかつたならば、是れまで續々都會に集り來れる地方の男女が、此後は坐しながら適當なる職業を求め得ることになるし、それで又それが原因となつて、將來地方繁昌の基を啓くことになるであらう。内務省の役人や、報德宗の連中や、頑迷なる農本主義者の千百の地方繁榮策よりも、此の日本の工業の性質と、日本の職工の事情が、自然に齎す可き此の地方繁榮の新機運を助長せしむることが、遙に有功で又確實であると信ずる。

斯樣な譯であるから、地方の有志家たるものは、此際思を茲に致して、工業界に於ける此の自然の趨勢を助長せしむるの勸辨をせねばならぬ。然るに近頃聞く所によると、中央の資本家が地方に工場を設立しやうとすると、其の風説を耳にした地方の有志家なるものが、先きに廻つて竊に工場の豫定地

なるものを買收し、若しくは材木其の他の建築材料を思惑買して以て、高値に賣付けやうとする不所存者が少なくないといふことである。又土地によると、大なる會社工場の新設されたのを得たり賢しとして、近年膨脹し來れる町費村費其の他の諸掛の大部分を新設會社の上に轉嫁しやうとする企をなすものもあると聞く。斯樣な壓迫が折角萌した地方開發の機運を殺ぐことは、呉々も遺憾千萬だと思ふ。地方の繁榮は主として地方人士の奮發に依らねばならぬのであるから、私利の爲めに公益を妨害したり、眼前の小利の爲めに永遠の大利を喪失したりする近眼者流の行動を愼んで、寧ろ一歩を進めて、中央に於ける企業家の地方經營の爲めに、出來得る限り諸種の便宜を供し、其の設立に助力するの覺悟がなくてはならぬ。斯樣にして都鄙資本家の一致協力が行はれたならば、將來我國工業の地方的分布が、益々盛んなるに至るであらうから、玆に初めて、地方開發の曙光を認め得らるることだと思ふ。

六

終に臨んで今一應總括的に述べたいことがある。繰り返して言ふやうだが、日本の工業の特色は、過去現在を通じて纖緯工業にある。將來日本が大なる工業國となつた曉にも、恐くは其の工業國としての特色は、纖緯工業にあると思ふ。し

あつて、そしてそれが日本固有の家族制度の影響を亨けて、未婚者として働き、既婚者として歸る爲め、新陳代謝常なしといふ特徴をも、現在の儘では永く持續する外ないことだと思ふ。然し此の二大特色が原因となつて、我國の工業は歐米諸國の工業よりも地方化す可き力――地方化せねばならぬ潜勢力――が強いのであるから、我國に於ては此の工業の地方化す可き自然の趨勢を助長することによつて、歐米諸國よりも遙に容易に都鄙盛衰の懸隔といふ二十世紀の文明の齎す可き弊害を何程か緩和することが出來る、誠に意外な幸福の地位に在るものだと思ふ。仍て政府も人民も此の幸福なる地位を利用するの勘辨が必要であるし、別して地方の役人やその他の人々が、此の趨勢を防害しない覺悟が切要であるのである。

勿論、私は是れのみで以て二十世紀の四大現象を壓し得るものだといふのでない。從て又私は是のみで以て二十世紀の文明の齎す可き諸種の弊害を豫防し得ると信ずるのでもない。唯現代文明の特徴として、都會は益々膨脹し、田舍は愈々衰微するといふ一部論者の所謂る文明病なるものに就ては何れの國に於ても昨今頭を腦して居る問題であるが、其の問題を解決するに當て、我國の工業の特色と職工の特徴とが相結びて原因となつて、特に我國に幸すべきものあるを指摘し、官民共に之が利導に怠たらないことを望むに過ぎぬのであ

政黨内閣制と官吏制度

拓殖局第一部長 法學士 江木翼

此處に『政黨内閣制と官吏制度』と題したが此の事に關して廣く議論を試みようと謂ふのではない。我國の多くの人が政黨内閣制の本家本元の樣に考へて居る所の英國の制度の事を少し計り話して見たいと思ふ。是れとても何も秩序的に學問的に網羅して報告すると謂ふのではない。唯大體の顯著なる所だけを話すことに止めたいと思ふ。

(一)

英國に於ては古くから國王の參事員なる官があつた。此の者は古くから國務に付て責任を負ふものと定まつて居つた。後に是れが所謂樞密顧問と謂ふものに爲つた。而して國の大政は國王の前に於て此の樞密顧問の間に議せらるゝのであつた。然るに此の顧問官の連中の中に特に卓越したる少數の連中は自然に聯絡相通じて行動を倶にするようになり又國王も此等少數者を選むで特に機密の事項を相談するると爲つた。

而して此等少數者は宮中に於ける樞密顧問會議室より更に奥まりたる一室(之を Cabinet「内の方に在る部屋即ち内閣の義」といふ)に於て評議をするのが常であつた。此の起源は頗る古いことで顯理三世の頃といふ話もある。兎に角顯理七世の頃には明かに此の習はしが在つたことは疑を容れない。初めは此等少數者が一應評議をして其の定めた所を更に樞密顧問全員の評議に掛けることに爲つて居つた。其後イロ〳〵の變遷があるが、之を一々御話をすれば長くなるから別の事として、此の如き少數者は後に所謂國務大臣と謂ふ者と爲り入ては内閣を組織し出ては各省の長官と爲り國務に付て責任を負ふことに定まつたのである。即ち千七百十一年の頃に於て吾々は「國王は政府の行爲に付て責任を負ふものにあらず、此の國の憲法の根本原則に從て國務大臣は凡ての責に任ずるものである」と謂ふ議論が在つたのを見るのである。此に至て國務大臣の一塊りが即ち責任者たることの法則が正式に確立せられたのである。即ち内閣なる

ものが憲法上認めらるゝことに爲つたのである。然し英國の法律中何れにも「内閣」なる文字は見當らないようである。又國務大臣會議なるものも認めてないやうである。普通「カウンシル」と謂ふのは、今日では直ぐに内閣の事のように聞えるが法律上の意義は樞密顧問會議の事である。而して内閣なるものが政府の中心と爲つて以來、樞密顧問會議なるものは有名無實のものと爲つてしまつて、今日では纔かに法律上の名義を止むるに過ぎないことゝなつた。元來「内閣」なる語は其の初め反對派から嘲弄罵責の意味を名づけたものであつたが段々常用となり我國の如きに至る迄堂々と「内閣官制」と謂ふ法律文に爲るに到つた變遷も、亦一奇と謂はねばならぬ。夫から初の程は會議は必ず國王の面前で開くのを原則としたがジョージ一世が即位してから、同王は英語を解しなかつた所から、別室で開くように爲り、遂に是れが常例と爲つたのである。又同じ内閣の組織に入つた國務大臣でも、重要なる事項に付て相談を受けるものとそうでないものと、大臣中に階段を付けたような時代も有つたが、結局今日のやうな發達を遂ぐるに至つたのである。

(二)

英國の内閣の沿革は、概略右の通りであるが、次に所謂政黨内閣は何時頃發達したかと謂ふことを簡略に述べよう。クロムウエル政府の後、國王は自己の意思に依り國務大臣を任じやうとするし、國會は左樣はさせじと爭ふと謂ふ次第で國王と國會との爭は、少時も絶へなかつたものである。アン女王は女王自身當時の「トーリー」黨に屬して居て、其の黨の者を任命することを好むで居つたが、當時の「ウヰッグ」黨が國王を助ける代償として、官を得むことを望むに當り、之を拒むことは出來なかつた。此處で下院に大勢力を有する政黨所屬の者を國務大臣に任ずるといふ政黨政治らしいものが起るのである。アンソンは千七百十三年を以て、政黨内閣制の始めと謂て居るが、當時のは眞の起源といふに過ぎないのでジョージ二世及三世を經て愈々發達し、千七百八十年代ピットの時に至つて、近世流の政黨内閣が出來ることに爲つたのである。

(三)

然るに此の制に依るときには、政府に立てる政黨に同情を寄せた所の官吏は、其の黨が政府を退くと共に退かねばならぬ、假令其の者は退く考は無くとも後に政府を承繼した政黨は、前政府に同情を寄せた者に所謂「レタリエーション」を遣ることに爲て、多く罷免せらるゝのが常であつた。從つて國務の繼續、其の効力を害殺することが頗る大であつた。そこで朝野の政治家は、大に憂慮して、殊にエドマンド・バークの如きは大に盡瘁して、終に永久的事務官の制を確立するに至つた。

又政黨内閣制なるものが樹てられてから、政黨に接近して官[illegible]

[illegible]た。

又政黨の方でも、自己の黨派に同情を寄する者に對しては官職を與ふべしと謂ふことを標榜して、黨勢擴張を企つるに至つた。所謂黨勢を張るに爲めに官職を賣つたのである。官職を以て全然黨派の具に供するに至つたのである。夫れが爲めに政府に於て官職を濫設するの弊は益々増大するに至つた。政府は自己の便宜の爲めに官職を設けては、之に自派に縁故ある人を擢用した。之を所謂 Political Patronage と謂ふので、弊は漸次に増大して無用の官職を増設すること益々甚だしくなり、千八百六十三年には官職の多きこと稍重きもので十萬五千を數ふるに至つた。夫れで此等の官を扶くる者は多くは各省の次官で、而して此の次官の處へは同派の議員から其の縁故者を推薦すると謂ふ有樣であつた。こんな有樣では、到底官職の威嚴、純潔、有能性は保たれないといふことに、段々と氣が付いて來た。其處で此等の弊を匡正するには競爭試驗の制を設けねばならぬといふことに爲り、千八百五十五年五月二十一日の勅令と爲つた。尤も是より先、印度の文官に付いてはマコーレー卿の提議に基いて、千八百三十三年に文官任用競爭試驗の制が設けられたが、實行に至らなかつた。其の後漸次文官試驗の制は各省各廳の内に施行せられ、又議院でも屢文官任用公開競爭試驗の制を實行すべしといふ建議（例へばフォーセットの提議の如き）を爲し、種々の變遷を經て千八百七十年七月四日の勅令[illegible]

[illegible]

前にも述べた通り英國の官吏制度には政務官(Parliamentary Secretary)と事務官(Permanent Staff)の區別が大分古く十八世紀の後半頃から出來た。此の歴史を詳述するのは中々興味が深いが是は他日の事として、元來此の區別は政務官といふから政務計り執り事務官だから政務の方は與り知らぬといふのではない。事務と謂ひ政務と謂ふが同じく國家の仕事であつて、事の輕重こそあれ、事項の性質上政務と事務とを區別することが出來るものではない。從つて政務官と事務官とは其の執る事物の實質上の區別ではなくて官職の區別たるに過ぎない。政務官と云ふのは政黨内の議員が官職に就き議會に出て責に立つの位地を稱し、事務官と云ふ者は國務大臣に隷屬して其の事務を輔佐する者である。始めの内は政務官が事務官の一時的指揮者と爲つて居つたが、屢々内閣が交はる其度毎に政務官其の他に交迭があるといふ所から遂に千八百四年に大藏省の永久即事務次官の制を置いたのを手始めに、前述べた文官任用試驗制と相駢行して政務官と事務官の組織が今日の如く大成するに至つたのである。

(四)

其處で現在の内閣の制度と官吏制度の大要をかい摘むで話して見ると左の通りである。

一、各省院等の大臣長官等は一團と爲りて内閣なる會議體を組織するのであ

る。尤も各省廳の長官でない内閣員も居ることもある。此の内閣なるものは下院に於て多數を占めた政黨に於て組織するのを原則とすること、世人の普ねく知る通りである。

各省廳の大臣長官の下に政務次官を置く。事務の多い所では二人以上置いてある所もある。此等の大臣、長官並に次官が、所謂政治的の官職であつて、此等は内閣の交迭と共に一所に交迭する。此等政務官は、必ず兩院の一に議席を有することを要するのである。然し議席さへ有すれば別に他の資格を必要としない。多くの官省に於て大臣が上院に席を有する場合には、次官は下院、大臣が下院のときは次官は上院といふ風に配置して居るやうである。

二、政務官以外の者は事務次官以下即ち永久補助官所謂非政務官即ち事務官である。此事務官は前申した如く文官試驗を經なければならぬことに爲つて居る。

事務官は政治に關與することを得ないのを原則として居る。從て明示の法規に依りて下院議員たることを得ないことに爲つて居る。

政治に關與することが出來ない代償として、自己の非行に基く場合の外其の職を免ぜらるゝことはない。官制を改正して官を廢することがあつても現に在官して居る者がある場合には其の在官者に限り終身其の官に在ることを許すのを原則として居る。

政務官又は政黨員に取り入りて事務官が進級の運動を爲すが如きことは嚴禁されて居る。此の事は各省大臣より、特に兩院議院に通牒を發し此の弊に注意を促しておる。

事務官が相當年限在官した場合には、恩給を受くることが出來る。然し病氣か何かの理由で官を罷めて後に、他の職に就きて十分に働き得ることを發見した場合には、政府は其者に更に就官せしめ、政府の職務を執るべきことを要求することが出來る。

即ち事務官には、公平無私に忠實に國務に鞅掌するの義務があるのは勿論であるが、一方に於て制度上其の政治的野心を全然抑壓して居る代償として、其の者の名譽及位地を保障して居ることは完全であると謂ふてよい。

た様に種々の變遷がある。即ち幾多の經驗を積み弊害に鑑みて、今日の制度に到著したのである。夫れで此の制度では内閣の更迭と共に退職する政務官なるものは、僅かに大臣、政務次官位に過ぎないので、他の永久官職即ち事務次官以下其の他諸多の官は、總て内閣更迭と何等關係ないのみならず、文官任用試驗制に依りて拘束せられて居るのである。此の如くにして始めて英國憲法論者の所謂「行政官職の恒性威嚴純潔及有効力」なるものが確保されて行つて居るのである。

或は政務官は事務に精通しないから議會で説明をするのに不便であると憂ふる者があるが、之に就てアンソンは、事務官は事務に精通し過ぎておるが故に、議員の愚なる質問を嘲弄を以て逆へ、其の感情を激することがあるが、政務官は事務に通せずして、時に妙な應答を遣ることもあるが、政務官たり且つ議員の同輩たるの故を以て、多く寛恕せらるゝので、却て此方が良いと謂て居る。

（五）

亞米利加合衆國でも、官吏制度の問題では長い間、苦い經驗を嘗めて居る。ズット始め華盛頓やジャックソンの時には、大體當時の英國風に倣ふて政務官と事務官との區別を樹てゝ居つた。即ち「政治の干渉及立法部の管理より分離獨立したる永久的行政官職の制」なるものが存しておつたのであるが、段々官吏任命の實權が、大統領から元老院及代議院に

[illegible]「行政官職の恒久性、威嚴、純潔、有効性」なるものは、全然官界を掃ふて空ふするに至つたのである。

殊に亞米利加では、英國の弊害より一層甚しいものがあつた。或は官職の交代私約なるものあり、或は賄賂公行あり或は官吏の責任を感ずることは全く空しといふ風で、其の弊害は實に著しかつた。蓋し大統領の更迭毎に異派の人が出る場合には、上は國務卿より下は四級郵便局長に至る迄更迭するのが常であつて、在職中に利を漁らなければ亦好機なしと謂ふ鹽梅で、是れ利是れ求めたのであつた。兩院も此の有様を見て、此の儘にして置いては、弊の及ぶ所、到底測り知られないと謂ふことに爲つて、遂に千八百七十一年グランド大統領の教書に基て「行政官組織」の調査を進行することに爲つた。其調査の結果は千八百七十四年公にせられた概略左の通り。

一、官吏の選叙には、資格を定め選擇を嚴にすべし。
二、官吏の職に在ることを得るには、其の非行を爲さゞることを條件とす。
三、進級を得るには忠實恪勤と特別才能とを條件とす。
四、相當年限在勤の者には、恩給を給するの制を設く。

處が滔々たる惡弊、所謂疾膏盲に入つて、到底癒するに由がない。此んな規則が制定實施せらるゝとなると、我利我利盲者共は、何千人職を得ることが出來ないといふことに爲る。グランド將軍の折角の美擧も實行せらるゝに至らなかつた。其の後千八百七十七年に、ヘイヱス大統領も調査に著手したが、是れ亦好果を得なかつたが、終に千八百八十三年に至つて。文官任用法の制定を見るに至つた、此の法律と共に特

[illegible]して此の法律で[illegible]定め、到る處で試驗を實行することにした。此の法律の條文を見ても、時弊の存した點が判かると思ふ。第何條かに、こういふ條文が在る。「總て官吏は政黨の經費を仕拂はず、又は政黨に勞務を供せざるの理由を以て、其の職を免せらるゝことなし」といふのがある。

然し此の法律もまだ十分に政務官事務官の區別をすることもなく、又事務官に對する保障も十分でなく、從て英國の樣な確乎とした制を樹立することは出來ないで、滔々たる米國政界の弊害を一掃すると謂ふ譯には行かないが、兎に角政治家が制度の缺陷に對する匡濟を常に念として居る點は、認めらるゝのである。然し或る時の大統領選擧に於ても、大統領は自己に投票せざる者は、悉く罷免すべしと迄威迫したと傳へらるゝ狀態であるから、果して何れの日に行政官職の恒久と純潔とが確保せらるゝが、洵に逆睹し難いのである。

（六）

復機會を得たら官僚内閣制と其の官吏制度の話をして見たいと思ふが、此回は先づ是れで止めて置くとしよう。各其の發達沿革消長得失を比較研究するのは、頗る興味があらうと思ふ。我國でも、おり〳〵文官任用令の改正の議をよく聞くから、多少參考にもならうかと思ふて、英米の官吏制度の沿革及現制の概略を述ぶることゝしたのである。

安達謙藏論

中野正剛

一

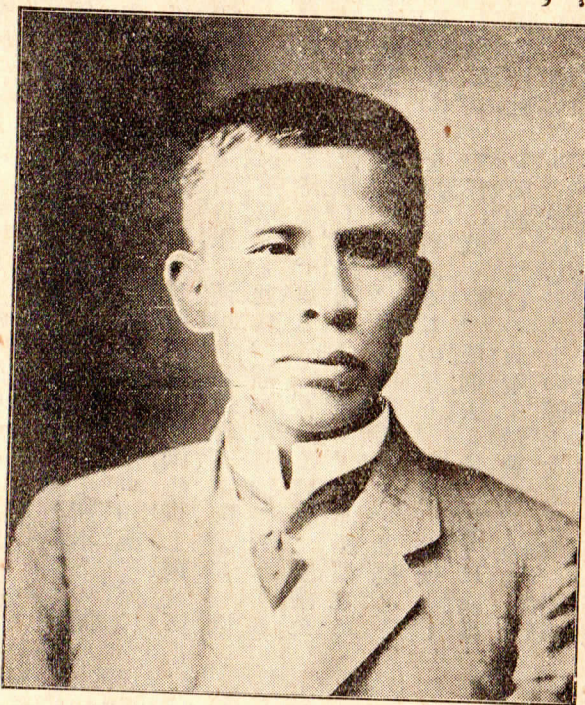
我政界に一部落あり、中央俱樂部と曰ふ。三十餘人の代議士を糾合して衆議院内に一團體をなす、總理あり、政務調査機關あり、領袖あり、幹部あり、其の進退に節度あり、其の立論に由來あり、事實上整々たる一個の政黨たるに係らず、猶前時代の陳套語帝室內閣主義を奉じ、誰に憚りてか公然政黨を標榜する能はず常に俱樂部組織の名に隱れて、政界の裏面に蠢動す。其狀恰も陰類惡物が赫々たる日光を恐れて、糞土塵泥の下に潜むに異らず。世人之を目して政界の穢多村と曰ふ。

然れども凡そ一團體の存する所、必ず[illegible]がる穢多を糾合して、能く其の村落內の秩序を維持し、敢て亂に至らしめざる人物なかるべからざるなり。吾人は篤行の人を求むるに際し、單に其の閭里の穢多村たるの故を以て、棄てゝ之を顧みざるが如き輕擧なからんことを要す。況んや混濁せる今日の政界、若し嚴密に各政黨の內容を檢せば、孰れか穢多村ならざるをや。吾人夙に政界の紛々たるを厭ふと雖、猶全然之を棄てずして、聊か之を叱正するを以て任となし、常に政界の人物を論評する以上、決して穢多村をのみ度外視すべからざるなり。現中央派の首領安達謙藏君の如きは、身穢多村に在りと雖、啻に穢多村の統一を謀るのみならず、且つ其の風敎を厚くして穢多村の改[illegible]立脚地を察し、君が衷心の苦痛を憐むの雅量なかるべからざるなり。

吾人は衆議院に絶對多數を提げて、常に官僚の鼻息を覗ふ政友會と、毎年議會の開會と共に所謂非政友派なる軟分子に惱まさるゝ國民黨とが、官僚の直參たる中央派に向て、彼は穢多村たりと罵倒するを見て、甚だ其の當を失へるものなるを感ぜずんばあらず。中央派員の大多數は固より金錢利福の爲に繫がるゝ者ならん、然れども他の少數者は何等の利權を得るに非ず、何等の名聲を博するに非ず、否御用黨なり、穢多村なりとの汚命を忍びても、猶其の主義に殉ぜんとするなり。政友會と國民黨とを以て、全然官僚の走狗なりと評する能はずとせば、中央派をも亦全然醜類の集合なりと侮蔑する能はざるなり。

嗚呼々々中央派員中にも、猶主義を奉じて之に殉ぜんとする少數の眞面目漢あり、主義か其の主義を稱して帝室內閣主義と謂ひ或は國權主義と謂ふ。而して此の國權主義なるものは實に囚はれたる國[illegible]

[illegible]るなり。然れども此の迷信の信[illegible]猶は滔々たる懷疑者流には勝れり。現時の中央派を解剖すれば、明かに此の少數の迷信者と、此の迷信者の主義に迎合して濁肉に饜かんとする所謂純然たる醜類との兩派あるを發見すべし。

二

迷信者流に屬する者は、熊本國權黨の後裔也、濁肉者流に屬する者は立憲帝政黨の殘黨なり、其他中央派內には此等に關係なき幾多の外來分子ありと雖、其の人物の色彩を分類すれば大概此の兩派に包容し得べきなり。其の迷信分子を形成する國權黨の起源は、明治十四年熊本に於て組織せられし紫溟會にあり。當時板垣退助一派によりて唱道せられし自由民權論は、忽ちにして天下を風靡し、自由黨の膨脹は實に燎原の勢止まる所を知らざるの概あり、勢の激する所、言論行動往々にして矯激に流れ漸くにして眞率の態度を失するの感ありき。是に於てか熊本の碩儒井上毅、主として斡旋の勞を取り、是に其の成立を見たるものは國權黨の前身紫溟會なり、立黨の由來固より當局者の爲に其の與黨を作ら[illegible]て、『自由[illegible]ず』と說きて、擧國一致國權の發揚を期すると共に『若し夫れ官權を弄し私利を營み、苟且偸安以て公議を雍塞し內亂を釀製するものは、則ち、我黨に非ざるなり』と斷じて、內政の改革を主張し、且又決して營利偸安の官僚者流に迎合せざるの意氣を示せり。安達君は實に斯の如き紫溟會に養はれし國權黨に投じて其青年時代を經たる者なり。而して國權黨內の先輩として君が親炙せし人物兩名あり。一を津田靜一と曰ひ、一を佐々友房となす。津田は矯々とし[illegible]利鈍を以て眼中に置くべからず、[illegible]自由黨輩畢竟是れ何する者ぞ。吾人は決して少數黨たるを恐れざるなり、如何となれば自己一人より少數となるの理なければなり、而して自己一身、隻手を以て頽瀾を支ふるは是れ男兒の面目なりと。彼れは斯の如き一個の傑士なりと雖、政界の折衝應答には、甚だ初心にして狷介に過ぐるを免れざりき。之に反して佐々友房は合從連衡の策を講ずるを能とし、能く情實を利用して、黨勢の發展と地盤の開拓とに努めたり。安達君は此の兩個の先輩に指導せられて國權黨に居り、竊かに津田の爲人に敬服せしも、佐々の黨を左右するに及びて大に之に信任を得たり。故に君は不知不識の間、此の兩先輩の感化を被れり、君は必ずや權變の士なりと稱せらるゝを喜ばざるべし、然れども君は稜々たる氣骨を津田靜一に受けたると共に縱橫の奇策を佐々友房に受けたるを辭む能はざるなり。若し夫れ君には君自らの個性あり、決して津田と佐々とに負ふ所なしと言はゞ、君は其の感化を國權黨に受けたるなり、熊本の山川風俗に受けたるなり。

安達謙藏氏

三

明治二十二年に至るまで、安達君は常に郷關に留りて濟々黌の生長となり漢籍に親むの傍ら、稍飜譯の西洋政治學を修めたり。二十二年東都に出で專ら獨逸學を修めて、暫らく政界に翼をひそめんとせり。然るに明治二十二年大隈條約の反對運動起るや、君は年少の身を以て佐々の隻腕となり九州に馳せ下りて有志を歷訪し、遂に非條約改正九州大會の糾合に任じたり。而して君が敏速にして機略ある奔走振りは、先輩をして君が國權黨の寧馨兒たるを認識せしめたり。

明治二十三年より二十五年迄、君は常に熊本に留りて佐々の留守居役となり、殆んど擅斷を以て黨勢の擴張に任ぜり。是より曩き佐々を助けて安達に莅む者に熊谷直亮あり、豪放にして意氣を以て立ち、非條約改正運動に際し、福岡玄洋社との連衡には大に盡す所ありしも、漸く理義に精しくして、素行を修むる安達君に凌駕せられ、其の佐々の左右を去りてよりは、安達君主として佐々を助け、常に其の帷幄に參せり。

明治二十五年吏黨の主力たりし國權黨[illegible]爪牙となれり。君は古庄嘉門に從ひ大分縣に入り、箕浦勝人の地盤を脅かせしが、古庄急用を帶びて去るの後、既に去たる古庄の影を擁して大に奮鬪し、臼杵の壯士の襲擊に會ふや、熊本の壯士を率ゐて之と格鬪し、壯士間に於ても名聲を辱かしめざるを得たり。

明治二十六七年君は東京と熊本との間を往來して、院外者として御用黨の爲に盡せしが、日清戰役後韓國に推し渡りて釜山時報、漢城新報等を創立經營し、國友重章等と共に、靜かに時機の到來するを待てり。居ること暫らくにして全權公使井上馨歸國の命を被り、三浦梧樓之に更りて來る、井上は世話好きと老婆心とを以て名あるものなり、三浦の公使として任に就くや、低徊去らず、頻りに萬事を斡旋して己の政策を踏襲せしめんとせり、既にして井上の韓土を去るや、船未だ馬關に着するに暇あらず、三浦は安達を召して曰く、咄井上の老婆奴、余を骨抜にせんとするも得んや、彼既に去る、我徒須らく宮城の狐狩りを催すべしと。謂は王妃を斬りて對韓政策を便にせんと[illegible]態度を擧めて曰く。

王妃斬りの事、星亨以下屢々之を企てしものなり。然ろに秘密漏泄して果されず、是に及びしなり。三浦將軍余を召し徐ろに酒を薦めて曰く、狐狩りの擧、之を果すの壯士ありや如何、乃ち答へて曰く今不肖の率ゐる所ば、皆新聞經營の任に當れる文筆の士なり、若し夫れ眞の勇者を得んと欲せば、乞ふ秘電を發して召致せんと。將軍曰く、文筆の士にて澤山なり、有る丈の強の者を用ひん、然れども今此の大事を企てんとするに際し、嚴守すべきは秘密なり、抑々秘密なるもの、一人の胸に藏する間のみ眞の秘密なり。若し他の一人に向て語り、之に秘密なるを強いたりとて、既に秘密たる所以を失ふなり。今日の事必要止むを得ざる者を除きては斷然之を口外せざるべし、之を口外するの時は即刻之を實行するの時なりと。余は實に將軍の言に感服せり、事を行ふに必要なる者の外決して之を語らざるべしと、此一言實に將軍の王妃斬りに成功せし所以なり。余は是を以て當時兄事せし國友にさへ之を語らざりき、岡本柳之助氏の如きは遙か後になりて之を與り知りしなりと。

安達君は實に三浦將軍が秘密を守りて快刀亂麻を斷つに感服せり、而して君も亦斯の如く秘密を守るの人に、肝膽を披瀝せしめたる者、君自らが將軍の目よりして秘密を嚴守するの人たりしや疑なき。安達君が中央倶樂部に居て神出鬼沒する[illegible]

四

明治三十年以來、君は代議士として議會に現れ、常に御用黨内に重きをなせり。而して佐々友房の歿後、大同倶樂部より中央倶樂部と變遷するの間、佐々に代りて其の主力を握り來りし者は君なり。君は居常勤儉尚武を以て箴となし、卿黨に施し、學生を愛し、身は貧困に甘んじて毫も憂色なき所、今日御用黨内の珍とすべきものあり、否啻に御用黨に於てのみならず、政界に於て美とするに足るものあり。君の先輩佐々も亦貧を標榜し、後輩を撫するに勉めしも、案外徹底せざる所あり、其の嘗て放埒に費せし金錢の如き、其の出處を疑はしむるものありしも、安達君に至りては眞に貪らざるものと謂ふべし、此點に於て君は先輩佐々に肖らずして、先輩津田の衣鉢を受けしなり。君の居常を愼むこと斯の如く、君の後輩を愛すること斯の如し、故に君が郷黨に於ける聲望は漸々加はりて、今日熊本に於ける國權黨の地盤は、我國に於て最も鞏固なるものとして知らるゝに至れり。君の政界に於て勉むる所斯の如く、其[illegible]の如し。然れども君は單に中央倶樂部の柱石となり、國權黨の守護神となりし外、政界の表舞臺に於て遂に何をかなせし。曩に僅かに吾人の視聽を惹きしもの、一の非政友大合同あり。君は定めて其の破れしを遺憾とすべし、然れども斯の如き根據なき妄動のなるなきは必然のみ。曩に桂公の政界に於けるや、恰も海山千年を經たる妖妓の如きものありき。政友會に向ては曰く、余不肖にして總理大臣を辱うす、然れども此の難局に處して國務を斷じ、幸にして施設を誤らざらんと欲せば、秩序あり節制ある大政黨の力に俟つに非ざれば能はず、而して總裁西園寺侯は、伊藤公なきの後、不肖と共に天下の重に任ずる好侶伴なりと。更に飜つて中央派及び國民黨內の御用分子に向つては曰く、中央派が終始一貫して余が內閣を助くることは、余の眞に感謝に堪へざる所なり、今政友會多數の力を利用して、一時國政を斷ずと雖、眞の好侶伴は中央派及び國民黨內の同主義者なり、他日諸君と共に政友會內より其半數を拉し來りて一丸となり、或は政友會の橫暴[illegible]合同を企つるに至らんことを恐れ、中央派及び國民黨中の軟分子は、桂公が政友會と斷ちて己等の首領となるべきを賴むなり。然れども桂公は固より閥族の兒、決して政黨に深入りするものに非ず、此の政友非政友の兩天秤を利用して、久しく超然の安きに居らんとせしなり。之を悟らず、賴まれぬ妖妓の心を賴みて、漫に妄動を企てしは安達君平生の慧眼に似ざりしなり。且つや安達君等が非政友運動の相棒とせし者、翻々たる木下謙次郎及び言に信なき大石正巳なりしをや。木下は士人の共に齡するを恥づる人、大石は形勢と外聞とにより躊躇する人也、忽世論の攻擊に遇ひ趑趄逡巡遂に安達君等との誓約を反古にせる偶然ならざる也。

五

非政友合同は安達君等中央派員及び、國民黨軟分子が懷きたる唯一の希望なりき。然れども其の運動は、桂公に誑られたる愚人の喜劇たるに止りき。而して彼等の賴みに賴みし桂公は、情意投合の尻

を西園寺侯に譲りて、宮中雲深く隠れ去れり。是に於てか非政友の前途は益々悲觀せらるゝに至れり。

安達君に使用せらるゝ忠良なる老代議士に肥田景之あり、時々山本權兵衛伯を叩きて桂公に更へんとすと傳へらるれど、聰明なる山本伯が傍らに大政黨を置きて此の中央派なるボロ船に乘らざるや必せり。而して內閣の後繼者として目せらるゝ寺內伯の如き、夙に政友會幹部と欵を通ずる以上、是れ亦決して中央派を中心とする非政友の頭目たるの理なきなり。然らば彼等は長へに大浦子を奉じて、政界の一局部に穢多村を作る外なからん。

大浦子は如何なる人ぞ、子も亦政治に熱心にして部下に厚しと稱せらる、謹直にして儉約なりと稱せらる、然れども斯の如き熱心、斯の如き私恩、斯の如き謹直、斯の如き儉約、之を助くるに安達君を以てして集り來る者は畢竟幾何ぞや。凡そ政黨の發達を見んと欲せば、前途に大希望を示して、多數有爲の士を集めざるべからず。然るに中央派なるもの藩閥よりは臣妾として遇せられ、政界に於ては穢多村として指彈せられ、[illegible]質素や謹直や、規模極めて小なる涙金を以て、大勢力を作らんとするは難い哉。是を以て現時の中央派には、國權黨の愚直なる半面を受け、些の當年の氣骨を有せざる老廢者と、帝政黨福地等の流を汲みし、陋劣なる醜漢の外、何者も集らざるなり。否醜類と雖其の規模稍々大なる者は、姑息なる中央派に跼蹐せずして、寧ろ大政黨の濶天地に活躍せんとするなり。然らば中央派は骨董政治家と小醜類との休養所たるに過ぎざるなり。

六

安達君も嘗て中央派の不振を觀て、自己の勉強の徒勞に屬するを嘆ぜりと云ふ。若し果して眞に黨の發展を期せんと欲せば、何ぞ其の懷抱する所の主義の小なるを改めざるや。

君は熊本出身の名士なり。熊本藩は加藤清正に續ぎて細川幽齋の所領に屬せり、是を以て偶々加藤の遺風を存する素樸の士なきに非ずと雖、多くは幽齋の家風に化せられて洞ケ峯的態度を執る狡猾なる者多し、而して天下に活躍して、大規模の企圖をなす能はざるに至りては、加藤風・細川風を通じて一なり。熊本の隣縣佐賀には武士の信條とする『葉隱れ一名佐賀論語』なるものあり、中に曰く、士は『七息思案』ならざるべからず、衆の面前にて[illegible]すべし、其場は我慢して他日に恨を晴らさんなど思ふは卑怯の行にして且つ必ずや機を失ふものなりと。然るに熊本の朱子學より出でし武士道によれば、武士は容易に刀を拔くべからず、止むを得ずんば一禮して三足下り、而して拔佩刀に手を掛くべしと。佐賀論語七息思案の標本は江藤新平なり、大隈伯の如きも稍々此風あり。熊本武士道の弊を受けて、卑怯狡猾となれる者の標本は佐々友房なり。德富猪一郎等皆同病なり。彼等は皆苦心して枝振りを正し、謙讓を裝ひ、質素を示すも、要するに加藤の外面を以て細川の內心を行ふ者のみ。

安達君の如きは恐らく加藤風の熊本武士にして、幽齋風の卑怯者に非ざるべし。然れども君が中央派に居りて行ふ所は、常に甚だ小規模にして熊本流を脱する能はず。君が居る所の中央派なるもの、元來帝政黨以來の根性に加味するに、熊本風の小廉曲謹を以てするものなり。君若し熊本に生れず、國權黨に長ぜずして、覊束なき大天地に人となりせば、君の氣骨、君の奇策、君の廉潔を以て贏ち得たる君の名聲及び勢力は、決して中央派に於ける君が今日の聲力名聲の比に非ざるべし。然るに不幸熊本に生れて國權黨に囚へられ、流れて中央派の守護神たるの惡運に際會せり。而して大規模の策戰企てんとするも得ず、可惜熊本風の質素謹儉のみを以て、僅かに政界の一隅に屛息するに至りては、君の眞に慨嘆に堪へざる所ならん。然りと雖熊本出身の君の先輩、悉く節操を誤りてより、殆んど士人の之に齒する者なし、勉めよや安達君。

藝妓亡國論

早稻田大學教授 平沼淑郎

一

東京市の統計年表は、藝妓の數を示す。左の如し。

年度	東京市內	接續町村
明治三十一年	二、六四六	—
同 三十二年	二、九三二	—
同 三十三年	三、〇〇二	—
同 三十四年	三、一二二	—
同 三十五年	二、八八四	—
同 三十六年	二、八八九	九九
同 三十七年	二、六一五	一二三
同 三十八年	二、八二六	一二六
同 三十九年	三、三一五	一四九
同 四十年	三、九五三	一九九
同 四十一年	四、一四〇	二〇八
同 四十二年	三、九三八	一九四

これによつて、これを觀るに、市內藝妓の數は、明治三十一年に於いて貳千六百四拾六人にして、明治四十二年には參千九百三拾八人となれり。故に十一年間に五割許を增加せり。接續町村に於いては、明治三十六年より同四十二年に至る七年間に貳拾割許を增加せり。少からざる增加と謂ふべし。

藝妓は何者ぞ。杯盤の間に周旋し、座興を幇助するを本職とす。然れども、これ表面のみ。實は私娼なり。數千の藝妓中然らざるものありと雖も、落々晨星の觀ありと云ふ。德川氏元和の初、遊廓設置を許可せしが、娼妓は淫を賣るのみならず、絲竹管絃の技に通じ、文藝に堪能なるもの、またこれありき。而して、正德の頃より、遊藝を主とする踊子、廓外に現出し、遊藝賣淫を兼業とせり。これより藝者と稱するもののありて、以て明治に至りぬ。維新以前の藝者は、業の賤劣なる論を俟たざれども、氣慨の稱揚すべきもの、往々にしてこれありしが、社會の變革と共に、田舍武士や、由緒の詳かならざる所謂成上りもの、出でて上流の地位を占むるに至り、藝妓は、ますます跋扈すると同時に、甚しく氣品を下落したり。奔流滔々として抑止すべからず、以て今日の形勢を馴致し、藝妓は私娼の別名たるに至りぬ。

二

待合茶屋と藝妓との數を比較し、推斷を下さば、この間の消息を明かにすることを得ん。また東京市の統計年表によつて、これを示さんに、待合茶屋の數は實に左の如し。

年度	東京市内	接續町村
明治三十一年	四二二	—
同 三十二年	四六三	—
同 三十三年	四八〇	—
同 三十四年	五一一	—
同 三十五年	五二〇	—
同 三十六年	五六三	一
同 三十七年	五八四	二
同 三十八年	六三六	三
同 三十九年	六八七	三
同 四十年	七八四	六
同 四十一年	八二六	六
同 四十二年	八八三	一〇

市内の待合茶屋は、十一年間に二倍餘の增加をなし、市外に在るものは、六年間に十倍せり。これ果して何の意味を示すか。嫖客の待合に出入するもの、ます〳〵多きを加へたるを證す。また前に述べたる藝妓率を取つて、これと對照するに、待合茶屋增加の率は、非常に多きを發見し得べし。尚は藝妓を包容せる藝妓屋の數を見るに、

年度	東京市内	接續町村
明治三十一年	一、二三八	—
同 三十二年	一、二九四	—
同 三十三年	一、三一五	—
同 三十四年	一、三二四	—
同 三十五年	一、三四九	—
同 三十六年	一、三四五	五九
同 三十七年	一、三七三	六六
同 三十八年	一、四九〇	七二
同 三十九年	一、五八五	八二
同 四十年	一、五三四	九六
同 四十一年	一、六二五	九七
同 四十二年	一、六一八	一〇一

增加は爭ふべからざれども、その率、待合茶屋に及ばず。

藝妓及藝妓屋の增加率、待合茶屋に匹敵せざるは、藝妓が待合茶屋に於いて業務に從事するの、ます〳〵多きを示すものたらずんばあらず。待合に於ける業務とは何ぞ。けだし推測に難からざらん。

三

飜つて藝妓と公娼との關係を見るに、左の數字あり。

（第一）東京市内

年度	貸座敷	引手茶屋	娼妓
明治三十一年	二七八	一四二	四、五五五
同 三十二年	二九七	一三九	四、七二二
同 三十三年	二九九	一四〇	三、九〇六
同 三十四年	二八九	一三六	三、五九五
同 三十五年	二八一	一三四	三、九四四
同 三十六年	二八四	一二七	三、五九〇
同 三十七年	二九五	一二三	三、九四〇
同 三十八年	三一二	一一六	四、〇九八
同 三十九年	三四五	一一三	四、五四三
同 四十年	三七三	一一〇	四、八七〇
同 四十一年	三八一	一〇七	五、〇七〇
同 四十二年	三八九	一〇九	五、一〇二

（第二）接續町村

年度	貸座敷	引手茶屋	娼妓
明治三十六年	一五八	二九	一、四二四
同 三十七年	一五八	二六	一、四八四
同 三十八年	一五七	二五	一、五四四
同 三十九年	一五七	二五	一、六五六
同 四十年	一五七	二四	一、六五一
同 四十一年	一九一	二三	一、六四〇
同 四十二年	一五六	二三	一、六三二

貸座敷の增加は、市内に於いて四割許を示したれども、接續町村に在つては、却つて減少を示せり。娼妓の數に至つては、市内は三割四分許、接續町村は壹割四分許の增加に過ぎず。これを藝妓及待合茶屋の增加率に比せば、その差大なり。これ公娼減じて、私娼跋扈するに非ずして何ぞや。公娼は上流の弄ばざる所となつて、藝妓その隙に乘じたるなり。引手茶屋の減少は、確實にこの事實を證明せり。

今や私娼全盛の時代なり。德川時代、踊子湯女あつて、遊廓の隆盛に對抗せしも、遂に逐はれて、或は廓内に入り、或は消滅せり。今の私娼の盛なる、その匹儔に非ず。或る人、東京は待合の都なりと云へり。外人我が邦を稱して藝者國（Land of Geisha）となす。近代の字書は白地にゲイシャの語を挿入せり。實に旭日昇天の勢ありと謂ふべし。

四

私娼は藝妓に止らず。然れども、藝妓は社會の中流以上を對手とせる私娼なり。國家社會の元氣に至大なる關係を有するものたり。況や、その年に月に跋扈するに至つては、國民道德上輕々看過すべからずと信ず。余は私娼としての藝妓の跋扈は、亡國の兆に非ざるなきかを疑ふなり。これ兩面の觀察を要す。一は藝妓そのものよりするもの、一は藝妓以外の方面よりするものこれなり。請ふ第一より論ぜん。

私娼たる藝妓の光輝は赫々たり。然れども、光强ければ、その影暗し。藝妓の內情を暴露せるものを觀るに、ます〳〵その感を深うす。就いて思ひ起すは、希臘のヘテーレーなり。[illegible]の如き、ライス・フリネ・[illegible]の如き、當時の名流と交りて、文に詩にその名を傳へたり。その他、才媛美姬乏しからざりきと雖も、十中八九は、外面の美以て內面の醜を蔽ふに足らず。凋落して、苦艱の裡に身を終れりと云ふ。向レ誰將レ唱竹枝詞。老去如今粉懶レ施。酌レ酒弄レ絃辛遣レ興。爭レ嬌競レ艷巳愆レ期。靑樓夢冷擁レ衾處。紅閣香消對レ鏡時。最是平常腸斷者。窓間小照昔年姿の憾は、彼我共通の事に屬す。

聞說らく、年收參千圓は東京に於ける第一流藝妓の所得なりと云ふ。而して、支出は活計費、交際費、稅金、その他の雜費を合せて貳千四百圓、衣服費六百圓、車代參百圓、贈答費五百圓合計參千八百圓たり。その外、年始に新衣の調製を要す。收入の支出を償はざるかくの如し。他に補塡の策を講せざるべからざるや必せり。これ第一流に於いて然り。その他に至つては、推して知るべきのみ。これに加ふるに、華美を競ひ、輕薄を專とするの社會に在つては、壓迫誘惑兩ながら到り、天眞爛漫の人格は去つて、害毒の侵蝕いよ〳〵甚しきに至る。藝妓の內情を暴露せるの書、みなその辛苦の情を詳悉せり。こゝに於いてか、仁人豈一掬同情の淚なかんや。然れども、一旦この魔窟に沒頭せしものは遂に奴隸たるを免れざるなり。

五

藝妓もまた人なり。同じくこれ　陛下の臣民なり。而して家情已むを得ざるものあるか、虚榮心の驅使する所となるか、またはその他種々なる事情のために、身を魔窟に投せるなり。紫は遂に朱を奪ふ。色界の濁浪は、これを驅つて、不倫の邪路に入るゝなり。奴隷化せざらんと欲すと雖も、得べからざるなり。

凡、一國の盛なる、國民各心身の自由を發揮するに在るなり。羅馬の隆興せる、民みな戈を執つて戰へり。戎事一旦一階級の專掌に歸するや、民文弱に流れて、色魔金錢の奴隷となれり。こゝに於いてか、蠻族の侵寇に對峙することを得ざりき。國民屈辱の地位に在つて、天眞の氣象を發揮し得ざるときは衰ふ。衰ふるは亡ぶるの端なり。藝妓節操を賣る。既に奴隷たり。外間の壓迫誘惑に倒さる。また奴隷たり。何を以てか天賦の能力を實現し得ん。

人或は云はん。天下この種の壓迫誘惑に遭遇せざるものあらざらん。豈唯藝妓のみならんやと。然り。然るが故に、社會改良論者は苦心焦慮下流社會の覺醒を促し、人の人たるべき道を履ましめんとしつゝあるなり。これ國家衰亡の緒は國民の醉生無死より開かるべきを以てなり。見よや、支那と云ひ、土耳古と云ひ、波斯と云ひ、廟堂人傑なしとは云はざれども、概みな小人闒茸にして、國民は自覺せざるなり。醉生夢死せるなり。これ亡國の兆に非ずと謂ふべきか。社會改良論者は既にこゝに着目せり。何ぞ進んで心身を奴隷にせる藝妓に及ばざる。貧困無識罪惡の裡に呻吟せる下流社會救はざるべからずんば、嬌態艶姿を以て隱蔽せる貧困無識罪惡を矯正せざるの理あらんや。彼れ衰亡の端緒たらば、此れまた衰亡の媒たり。況や節操を賣るの奴隷が、年に月に驚くべき增加率を以て增加しつゝあるをや。また況やこの職業を幇助する所の待合茶屋が更に驚くべき進歩をなしつゝあるをや。宗教家や社會改良論者は、憂國の念深しと信ず。盍ぞ進んでこの方面に一大斧鉞を加へざる。

人ありまた曰へらく。子の論は公娼に適するものたり。上流社會慰安の要具たる藝妓にこれを用ふべけんと。公娼のこと別に論あり。然れども、問題外に屬するが故に姑くこれを置く。然れども、余を以てこれを考ふるに、藝妓も公娼も、奴隷たるに於いては一なり。「憂キ川竹ノ流」と云ふ語は、均しく適用し得べしと信ずるのみならず、古人も今人も、しかく適用せるに非ずや。上流を對手とすると、下流に接觸するとの差異あるのみ。憂き川竹たるに於いて、何の相違かある。

六

第二の點を論ぜんに、公娼は、下流社會の玩弄物たるの傾向を有するが故に、おのづから淫賣を專業とし、肉慾の充足を以て、目的を終了するなり。こゝを以て、少くとも表面上社會の擯斥する所となつて、肉慾の充足と榮譽の維持と兩立せざるに至る。仙臺侯の高尾に於けるが如き關係は、その跡を絶てり。然るに、藝妓は、同じく奴隷にして、而かも上流社會を顧客とするが故に、公娼に比して幾分の榮譽を有す。法を犯すも、當該吏を輕んずるの風あり。これ社會風紀問題の上に於いて看過すべからざることゝす。この事實は、藝妓をして、同僚なる公娼を凌駕せしむる所以にして、また社會として、その間に輕重上下の差別を立たしむる所以なり。

凡、財力の關係は世事を輕重上下するの最大勢力たり。その實質の如何は第二の問題たるを俗界の常とす。上流の人、俳優を輕侮せば、世みなこれを輕侮す。侯伯これを招聘せば、その位地忽にして顚倒す。而かもその眞價は一朝にして轉變すべきに非ざるなり。呉王劍客を好んで百姓瘡瘢多く、楚王細腰を好んで客中餓死多し。上流の嗜好は、忽にして、天下の好尚となる。世、物の實を究めずして、趨向を定むる概みな然り。仙臺侯娼婦を寵するが如きあらば、娼婦の價忽然として上騰す。公娼藝妓共に賣淫業を營まば、均しくこれ娼婦なり。而かも一は下流を對手とし、一は上流に接觸するの故を以て上下の別を生ず。これ藝妓が幾分の榮譽を有するの觀ある所以にして、その他に、差等を立つべき顯著の事由はあらず。

上流の好む所は榮譽ありとの觀念は、やがて社會萬般の現象に影響を及すなり。國家の隆興衰亡は一に係りてこゝに在り。文學藝術の隆興もとより惡事に非ずと雖も、社會の中堅文弱淫靡に流るゝの時と、その期を同じうするもの多きは何ぞ。希臘の文藝極盛の期は、ヘテーレーが跋扈を極めたる時なり。アレキサンダー第六世またはレオ第十世時代の羅馬は、繪畫彫刻の盛且美を以て稱せらる。而して、道德上より判斷せば、[illegible]にカルデロン●サーヴンテス●[illegible]●ムーリリオ出でゝ、文藝繪畫を世界に誇示せし時代は如何。政治上、經濟上また道德上その衰頽に瀕せし時に非ずや。我が邦王朝時代の美術は、世界に誇るに足ると云ふ。これ藤原氏全盛の餘響都人士を華奢の裡に醉生夢死せしめつゝありし時代なり。近代工藝の極美を唱ふるものは、みな元祿時代を推す。これ慶長元和に鍛錬したる士道の頽廢と、その期を同じうす。文藝美術は、勢力家の嗜好に適應して、太平を裝飾するの花と謂ふべし。花、艶美を競へる時は、蟲その蘂を侵蝕す。凋落は既にその兆を呈す。この事實は、取つて以て藝妓に適用すべし。今の日本國は藝者國にして、その首都は待合の府なり。藝妓は、一見國寶の觀あるなり。また盛なりと謂ふべし。而かもこれ財力の趨勢に追隨して、國土を飾るの花に過ぎず。社會の根幹枝葉には、害蟲蔓延せるの證左とせざるべからず。この花ます〳〵繁殖するは、害蟲の蔓延いよ〳〵大なるを思はしむるなり。藝妓の跋扈は、一面奴隷を增加して、健全なる分子を減殺し、以て國家衰亡の端を開けると同時に、他の一面に於いて、その跋扈を助長すべき不健全なる好尚の流行せるを知るなり。これまた國家の元氣を消磨する一大害蟲に非ずして何ぞや。況や公娼と私娼との別なきを知らずして、財力の好尚に迎合するを榮譽とするの氣風を養成するに於てをや。

七

人余を以て沒曉漢となす。曰く、今や宴を張り客を饗するに、これなくしてよくし得べきかと。余またこれを知る。男女交際の狀態、希臘時代の如き時代に在つては、ヘテーレーに酷似するものなくんば、不便を免れざるべし。然れども、奴隷に陷るべき魔窟の狀態を以て滿足すべきか。これを助長する社會の趨勢を坐視すべきか。余は奴隷の全盛を慨嘆するなり。藝妓にして、座興を助け、絲竹管絃を弄する何の妨ぐる所かある。文藝美術を愛玩し、演劇を觀覽して、積日の勞を醫すると同一般なり。何の害かあらん。然れども、藝術にして不健全なるか、演劇にして不健全なるか、または藝術家俳優にして、奴隷の境遇に沈淪せんか、余は藝術家俳優そのものと、これを奴隷に陷るる社會とに對して、亡國者の名を呈するに躊躇せざるべし。

人また曰へらく。我が邦新領土を開拓し、または海外に商業關係を擴張する、かならず醜業婦を先登とす。その功や沒すべからず。むしろ興國の媒と謂はんのみと。昔時雅典文藝を以て寰宇に鳴る。みづから以て坤輿を壓せりとなす。西曆紀元後二六七年ゴス人種雅典を陷る。時に書籍都市に充積す。衆、鄴架を火中に投じて、烟に化せんとせしに、その將これを止め、書は雅典人を文弱に流したり。宜しくこれを存して以て、我が武を輝かしめよと曰へり。余をして外國人たらしめば、書籍に代ふるに藝妓の語を以てして、この言をなさん。

移して以て、論者の頭上に加ふるの鐵鎚となす。

或る人また曰へらく。子は人情の機微を解せず。人は性慾の要求あり。ストイック一流の修身學を以て、これを律せんは、益なくして害ありと。余また木石にあらず。天下の人をして、木石ならめんとするの勇氣なし。藝妓も人なり。その夫を選ぶまた何をか妨げん。然れども、余の云はんと欲する所は、これを奴隷の狀態より救出せんとするに在るなり。奴隷の跋扈全盛は、國家衰亡の兆たりと思へるなり。人情の機微の如きは、根本の問題に非ず。

客あり論じて曰く。子は聖人君子なるかなと。否、余は凡人なり。釋迦や、孔子や、基督の見地よりして、藝妓を論評するの資格なきを信ず。然れども、一國の安危に關する問題は、その研究を怠らざるの覺悟を有す。前文に論述せし所、固より高尙なる哲理より演繹せしに非ず。平凡なる社會觀を以てせしのみ。敢て僞善者流の行爲を摸倣せず。

八

要するに、私娼としての藝妓が、社會の壓迫誘惑を受けて、墮落の上に墮落を重ね、而かも、その數が旭日昇天の勢を以て增加するは、社會に不健全なる種子を播くに均し。しかのみならず、財力がこれを歡迎して、ます〳〵その跋扈を助長するに至つては、衰亡を表徵するものと謂つて不可なし。

抑人間の性慾は、これを抑制すべからず。然れども、その滿足を求むるは、おのづからその道あり。性慾の滿足と[illegible]

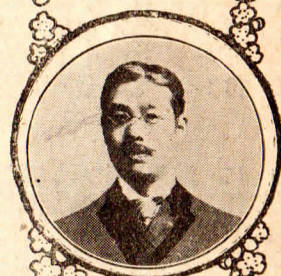
の維持とは、別問題に屬して、混同すべきに非ず。然るに、藝妓を弄するに至つては、全然これを一にせるは何ぞや。これ士道の頽廢と謂はざるべからず。藝妓たゞ座興を助け、絲竹管絃を弄まるに止らば、何をか論ぜん。その私娼として、奴隷たるが故に亡國を云々す。また奴隷の跋扈を助長するもののあるが故に、亡國を提唱す。

演劇は人の好む所なり。文藝美術を好むもまた人の性なり。性の好む所、これを絕滅するの要なし。藝妓また交際の上に必要なりとせば、これを存置するまた妨なし。然れども、演劇文藝美術にして、人心を痲痺せしめ、卑劣なる心情を誘發せしむるものたらば、その流行は亡國の端緒たり。藝妓またこの理を免れず。

世の藝妓を論ずるもの、この理を知らざるに非ず。而してその流行は財力の嗜好に投ずるものたることを論ぜるものあらず。財力の嗜好健全ならば、藝妓もまた健全なるを得べし。社會の上流に立つもの、藝妓を健全ならしむるの途を講ずるものなく、徒に私娼としての藝妓を鼓舞し、ます〳〵風紀を紊亂し、亡國の分子を蔓延せしむるは何事ぞや。財力のなす所、天下の凡人をして、羨望措く能はざらしめ、視て以て榮譽のこと丶なさしむ。榮譽の事となさぬまでも、不名譽のこと丶思はしめざるに至る。これぞ亡國の兆なる。

藝妓として節操を辱められざるの程度に居らしめよ。社會の上流に立つもの丶行動如何によつてなし得られざることに[illegible]非ず。[illegible]力者流また女優としてこれを[illegible]る。[illegible]こそあれ、人の興を助くるに於いては藝妓と一なり。然るに、一は天眞の人格を發揮し得て、一は奴隷の境遇に沈淪す。何ぞその徑庭の大なるや。罪は自己の無識に在らんも、また社會の壓迫誘惑に由るもの決して少しとせず。世これを救正して、眞の人間に復歸せしむる志士仁人なきか。

德川氏の衰亡は何によれりや。原因もとより一にして足らずと雖も、士人の遊惰、天下の大事に處するの心なかりしは、確にその一なり。その遊惰は何によれるか。妓輩と相親しんで、無識者の氣風に感染せしに非ざるか。恐るべきなり。世の世道人心を說くもの、艱澁なる理窟を說く。而して財力者流が亡國の端緒たる奴隷の養成に勉めつ丶あるを知らず。決して盡せりと謂ふべからず。凡百の事、この道を誤らば、亡國の種子となる。軍國の事、もとより必要なれども、武人の跋扈は羅馬の人心を萎靡せしめたり。韓國の軍隊は、却つて騷亂を釀成するの具となれり。藝妓また改良を施さば、或は社會の便益ともならん。然れども、今日の趨勢を以て進むときは、亡國の分子たらざらんと欲すと雖も、能はざるなり。演劇文藝美術に對して苦心焦慮するもの盍ぞ眼を藝妓の方面に轉ぜざる。國防の必要を論議說述するもの盍ぞ內科的害毒の防遏に勉めざる。

神聖なる白松

理學博士　伊藤篤太郎

世界に於ける松の分布

樹木の中、最も長壽であり、且つ霜雪に逢ふもその色を變せぬといふ理由を以て、昔から松の木は吾々人間に尊ばれ、また之を道德化して『節操』や『堅忍』やの象徵ともせられて居る。松はその種類極めて多く、北半球全體に廣く之を產するが、その中溫帶と寒帶とには殊に多い。東亞細亞の松は、大陸にあるものと、日本にあるものと、同じのもあれば又異つてゐるのもある。例せばアカマツ・クロマツの如きは、支那と日本と兩方にあり、ヒメコマツ・ゴエフマツの如きは、日本にはあるが、支那では見當らぬ。またその反對に、支那に有つて日本にないものも六種ばかりある、白松(支那音 Peh-sung)の如きは即ちその一つである。更に眼を轉じて歐米の方面を觀ると、歐羅巴のものは東洋のものとその種を異にし、亞米利加のものは歐羅巴のものと槪ねその種を異にしてゐる。それ故等しく『松』とは云ふものゝ、日本の松と他國の松とは必ずしも同一でない。玆に云ふ『松』は、單に屬名を現はすに過ぎない。英語の『PINE』といふ語も、廣く松屬といふ意味に用ゐれば差支ないが、狹義に用ゐると飛んでもない誤謬を來す。普通英國では自國に產する松の事を SCOTCH FIR と呼んでゐる。

日本の松

斯くの如く、松には色々種類があるが、今日までに分つてゐる世界の松類は、松柏科に就いて深い研究を積んだマスタアス(Masters)といふ英國の植物學者の調査によると、總て七十三種ある。其後支那・日本等に於て新に發見せられたるものも尠くないが、現今我が帝國に產する既知ものは、凡そ十二種だと云はれてゐる。其中臺灣の山地には特殊の松が大分ある。例へば新高山にあるタカネゴエフ及び、廣く同島に產するタイワンマツ、タイワンヒメコマツ、(一名タイワンアカマツ)、その外もう一種ランタイ山に產するものがある。さて松の最も早く本邦の文獻に載つてゐるのは尾張の國の尾津島に生えてゐた一つ松で、東征し給へる日本武尊は之を見そなはして『人にありせば太刀佩けましを』と詠ませ給ふたも『古事記』に書いてある。斯く松は、古くから吾が國人に知れてゐた名木であるのみならず、本邦特有の種類も少くないから、名木中の名木といふことが出來る。

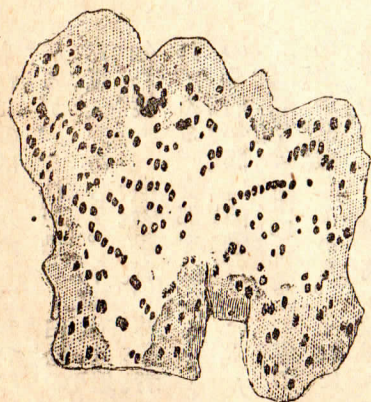
支那の白松

前述の如く松の種類は極めて多いか、その中東洋で珍らしいと云はれてゐるのは、支那に產する白松である。白松は支那では有名であるが、日本には知られてゐなかつた。で、往時我が國の專門學者は、支那の書に『白松』とあるのを見て、我が邦の園藝的變種で、葉に白斑あるものをその種類と見傚し、之をシモフリマツに引き當てたものもある。併し支那の白松は、葉の白いものではなく、幹の白いものを指して云ひ、白松といふ名もそれが爲めに得たのである。此れは全く支那特有の松で、世界中何處にも產しない。此松の支那に於ける自然の產地は、北部支那から中央支那に亘る一帶であるが、中でも一番多いのは湖北省から陝西省へかけてである。白松とは少し異ふが、それに稍々近いものは、雲南に產するウンナンマツ(Pinus Yunnanesis)と、ヒラマヤの北部に產する[illegible]る。白松は北京に於いては、[illegible]寺院の境內、墳墓の周邊などに多く栽ゑられて居る。この點から見ると、清淨な場所を特に選んで栽ゑるものであるらしい。

白松の生態(チーシントン・スミス畫)

白松の生態

白松は餘り丈が高くないけれど、八丈乃至十丈にはなる。皮は灰褐色を呈し、恰度近頃日比谷邊の道路に栽ゑられたスズカケノキに似てゐる。然るに成長するに從ひ、此の皮が剝離してその後が白くなり、老樹に成れば成る程木の皮膚が美くしくなる。幹の太さは直徑二尺位、

上は白松の皮下は葉の縱斷面を擴大したもの

根本から四五尺の處までは眞直で少しも曲らず、五六尺の處で枝を分つて、盛んに横に廣がる。若い枝は灰色を帶んだ緑色で、表面は滑らかである。葉はアカマツやクロマツに於けるが如く二出をなさずして、三出をなし、長さは二寸乃至三寸半あり、質硬くして淡綠色を帶んでゐる。松毬は長さ一寸半乃至二寸半、直徑約一寸、長橢圓狀、卵圓形で先端は鈍形を呈し、その鱗片は倒卵形で、先端が少し尖つてゐる。鱗片毎にその内面に種子が附著して居る、種子の數は大方二つであるが、稀には一つしかないものもある。種には皆翅があるが、本邦の松に比べると少し短かい。

始めて學界へ紹介せし人

此の松を始めて支那で發見したのは、露西亞の植物學者ブンゲ(BUNGE)である。ブンゲは一八三一年に北京の寺院に於いて之を發見し、その標本を歐洲へ齎らし歸つた。此の標本を見て學名をつけたのは、和蘭陀の植物學者ツッカリニ(ZUCCARINII)である。氏は之を見て新種と認め、ピヌス・ブンゲアナ(Pinus Bungeana)と名附けた。此學名は其後一八四七年に至り世に發表せられた。之が學術界に紹介せられた始めである。後一八六一年の秋、有名な支那旅行家ロバート・フォーチユーン(ROBERT FORTUNE)もまた、北京西方の山中に於いて之を認めたが、その幹は非常に太く、地上三四尺の處から八本乃至十本ばかりの枝が出て四方に擴がつてゐた。而して樹の高さは八丈以上もあつたが、枝は他の種類と異なり、曲らず枉らず、眞直に上方に向つて伸びてゐた。殊に不思議なのは、その樹幹が普通の松とは違ひ、乳白色を呈してゐることである。實は多く生つてゐた。これは珍らしいと云つて、氏はその苗を上海近傍で求め、本國なる英吉利に送つた。これが白松の生木の歐洲に輸入せられた始である。後此の苗木は成長して立派な白い幹を見せた。一八八〇年、倫敦に於て發行の園藝雜誌『ガーヅナース、クロニクル』には、その畫が載せてあるが、これはマスタア氏の研究したものである。露西亞人ブリツトシユナイダー(BRETSCHEIDER)に據れば、白松の始めて歐羅巴で栽培せられたのは、一八六二年であるが、その雪白色の樹皮は幼樹に於ては見られないから、長い間、歐洲の植物學者や、園藝家には知られるに至ら無かつたと云ふことである。

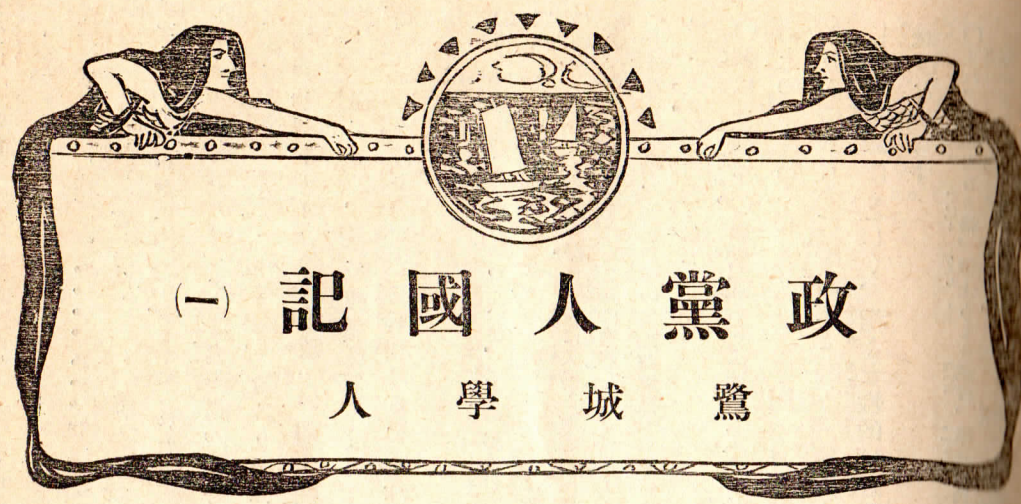
日本に於ける研究の第一人

本邦に於いても、白松は夙に專門家の注意するところとなつたが、私の祖父(伊藤圭介翁)はその實物を見度いと云ふので、當時北京の公使であつた大鳥男爵に依賴して、その實物を送つて貰つた。送られたのは多分苗木であつたかと覺えて居るが、これが恐らく白松の本邦へ渡つた嚆矢であらう。今日では追々と世間に知れ渡り、植物學者、林學者の間に知られてゐる。支那では何うかと云ふに、明の萬曆年間に愼懋官といふ人の上梓した『華夷花木鳥獸珍玩考』の卷の三に、白松の事が記載してある。それには『白松如傅粉。一本三幹。高十數仞本大四抱餘』。云々と記し、且つ古い傳說を附見して此の木と塚との關係を示してゐる。又淸の吳其濬の『植物名實圖考』卷の三十三、木類の松の條にも之に就いて記載し、『有白松。直幹盤枝。上短下長。望如浮圖。質體獨輕。非木公之別族。則因地而果其形性矣。』と云つてゐる。

叡聖文武に在はしませし明治天皇神あがりまして、帝國の臣民皆謹愼の意を表せる諒闇の新年に際して、支那に於いて主として禁苑、寺院、墳墓等に栽ゑられる白松のことを『新日本』新年號誌上に掲げるのは私の甚だ光榮とするところである。

政黨人國記(一)

鷺城學人

[illegible]んとせば、議會の人、政黨の人を知らざるべからず。政黨人國記一篇之を『政黨の略地圖』と見るも可、『政界の人物分布概觀』と見るも可。

一　東京市

○定員十一名、殆ど其半數を國民黨に收めたるは大成功なるが如きも、飜つて市政の實狀如何と看るに、久しく政友會の獨占に歸し、市長も市會も市參事會もタマニー的勢力の傀儡にして、他は手も足も出でず、空しく一隅に咆哮するのみ。されど政友會とても初めより然るにはあらず、嘗て或勢力の下に雌伏せし時代なきにあらざりき。國に興亡あり、人に盛衰あり、政黨も亦此理より免るゝ能はず。

○明治十二年より二十四五年の交に至るまで東京市の實權は國民黨の前身たる改進黨の手に握られ、犬養毅・大石正己・鳩山和夫・角田眞平・肥塚龍等は議員の錚々たる者にして、之が中心勢力は沼間守一・須藤時一郎なりき。

○沼間は府會議長にして四十番の議席を占め、府會の形勢は宛然四十番の府會の[illegible]歴次醜聞の傳はり、又た實際腐敗の事實なきにあらざりき。

○既にして沼間は館を捐て、改進黨の勢力歳と共に陵夷するや、自由黨の勢力之に代りて恰も前に改進黨の爲したる所を行ひ、更に星の力大に政界に伸ぶるや、市の總ての機關を奪ひ、沼間の轍に倣ひて傍若無人に活動し始めたり。今のタマニー的團體は即ち此時に始まる。知らず奪ふ者の非なるか、奪はるゝ者の非なるか。

○嘗て東京市より出でたる楠本正隆・芳野世經・須藤時一郎・福知源一郎・田口卯吉・鳩山和夫等は既に現世の人にあらず、生存するも何の狀なるかを知る者なし。最近に至て全く新陳代謝したり。

○善く代謝したるか、惡く代謝したるか、勿論人に依て各々觀る處を異にせんも、一國の首都の選良としては少しく品質の落つる嫌ひなきか。

○關直彥は啻に東京の名士なるのみならず、日本の名士なり。第二・第六回選擧の時には郷國和歌山より出で、第九回(三十七年)より東京市に河岸を轉じ、議員としても辯護士としても古顏に屬し、古

顏だけに議會に於ても國民黨に於ても何程か重んぜらる。

○彼は本來學閥の出なり。陸奥宗光・岡崎邦輔と鄕を同うし、一時陸奥の知遇を受け、又た二代目の日報社長にして、山縣・伊藤・井上・黑田等にも知られたり。

○最初の系統よりいへば當然藩閥の味方たるべき筈。實際一身の得失論よりいふも三崎龜之助の如く、石渡敏一の如く閥族に攀緣するの、身を政黨に置くよりも利なるに係らず、却て其不利なるを選びたるは何ぞや。

○或は閥族に棄てられし爲めといひ、不平の爲め自ら閥族を見限りしともいひ、理由の不明なるも、正反對の方向に轉じたる以來の關は、常に犬養と親善の關係を結べり。前年彼を全院委員長に推薦したるは主として犬養なりし如く、大正初頭の衆議院副議長に擧げられしも犬養派の同情を得たるに因る。

○彼は法律上の新智識あるにあらず、政治上の卓見あるにあらず、手腕の見るべきあるにあらず。辯護士としても黨人としても精彩に乏しく、稍〻女性的に近き嫌ひなからず。

○されど圓滿なる人格、紳士らしき態度、境遇の爲めに變ぜざる操守、是れ彼の周圍に一人の敵なく、常に第二流の位置を黨中に占むる所以。

○高木益太郎は關の人格なきも、手腕は何程か勝る。されど辯護士としても議員としても評判好き方にあらず。然るに前回の時にも過る選擧にも高點を占たるは何ぞや。一種の人氣取術に長ずればなり。

○關の無精なるに反し彼は勉强家なり。國民黨の如何なる會にも彼を見出さゞるなく、議會の開期中一日も缺席せしなく、一議會に演説を試むる三四回を下らず。

○彼は二千圓の歳費を日本橋區に寄附して常に選擧民の心を收攬し、選擧に際しても莫大なる運動費を投ずるを以て、彼の選擧運動は頗る高價なるものとなる。

○黄金散布と精勤とは唯一の武器にして又た最も誇とする處。彼が選擧民に配布したる宣言書を讀むに、過ぐる四年間議會に於ける一切の行動を皇張し、中には新聞紙が冷笑的に筆せるものまでも掲げたる、滑稽も亦甚だし。

○日本橋區の存する限り將來とても彼の當選は保險附なり。されど國民黨には新參者だけに未だ重きをなすに至らず。

○理想代議士を標榜する者に藏原惟郭(熊本)・古島一雄(但馬)あり。理想の意味の明瞭ならざるも、金力よりも言論の力を以て江戸ッ兒の人氣に投じたるは共に一。

○藏原は曾て教育家なりき、耶蘇教の牧師なりき。教壇に立ちて聖書を讀み、讃美歌を唄ひ、祈禱を捧げたる靈的生活より、藝者を相手にし、酒を飮み、毆り合ひをなす肉的生活に轉ずるを以て人間の墮落とせば、藏原は確に墮落者なり。

○彼は選擧界の苦勞人だけに人情哲學を解せり。敵を射んとせば馬を射るの筆法に基き、有權者を訪ふて一票を乞ふに當り、先づ夫人の面前に兒女を賞め、夫人を手懷け、下女にまでお世辭を振蒔き、斯くして主人に及ぼす。

○彼の選擧演説は其説に敬服せしむるよりも其熱心に感服せしめ、泣くが如く訴ふるが如くして憐憫の情を起さしむ。此點に於ては一種の藝人なり。

○古島は操觚界の先輩なり。曾て陸羯南・三宅雪嶺と共に舊日本新聞に筆陣を張るや、編輯長として驚くべき能力を發揮したり。日本新聞の全盛時代は彼の油の乘りたる時なり。

○其後福陵新報(九州日報の前身)の筆政を宰せる、近く萬朝報に筆を執れる、共に新聞記者としての盛時を過ぎ、人物の上に一變化を來せるも、其文章の辛辣にして觀察の奇警なるは、依然として當年の古一念たるを失はず。

○從來表面に立つを避け寧ろ裏面に籌畫したるを以て、一部の者より策士の如く誤解されざるにあらざるも、惡しき意味[illegible]の策士と類型を異にし、其智と才とを全方面に用ゐ、而も其分量に至ては眞に測るべからざるあり。

○一昨秋浪人に推されて鳩山沒後の補缺戰に立つや、世人は滑稽に感じ、推薦者も心私に危ぶみたり。而も事の結果は意想外なりき。殊に過ぐる選擧の結果は言論の力の金力に勝るを教へ、流石に東京市民の尚未だ腐敗し了せざるを示しき。

○藏原の愛嬌タップリなるに反し、古島は無愛嬌家にして皮肉屋なり。一は貧乏を看板とし、一は貧乏なれども、有權者に憐れみを乞ふが如き卑屈に陷らざりき。蓋し古島は初めより氣節を以て立つの士なればなり。

○貧乏を賣物にしたる藏原は洋行もし、時世粧もし、自用車に乘り、時として待合入りをなす。近者臺灣の遊を試み、後藤より金轡を銜められし如きは陋といはざるべからず。

○松下軍治(信州)は人格ある紳士にあらざるも、世人の誤解するが如き惡黨にあらず、寧ろ情に脆き善人なり。唯だ彼の情は普遍的にあらずして局限的なり。分り好くいへば彼を中心として圓く一線を畫き、其線內にある者に對しては一枚の[illegible]外の者は踏むも蹴るも唾を吐懸くるも敢すも差支なしと信ぜり。

○往年鄕國に於て人を傷け戸隱山に潜伏して眞言秘密の法を習得したりといふが、彼の人に接する巧言令色するにあらず、威嚇するにあらず、而も心を攬るに巧みなる、而して彼に致されたる者も深く怨み且つ憤らざる、眞言の秘法を用ゆるにあらざるかと思はしむ。一種の怪傑なり。

○鈴木梅四郎・星野錫・中島行孝・三輪信次郎・稻毛登三郎は財界の人として何程か成功し、又た一部市民の間に人望あらんも特色ある人物にあらず。殊に中島の如きは黄泉の土產として議員を爭ひしに外ならず。

二　東京郡部

○國民黨は高木正年(武州)一人にして他は四人とも政友會に屬す。蓋し故星の勢力郡部に伸び殊に三多摩の首領には前に石塚昌孝あり、後には森久保作藏・村野常右衞門あり。現に森久保は多くの子分を率ゐ兼て市政を左右す。

○彼は星の學識膽略なきも、天稟の鬼才爲腕を有し、表面に於て一黨一派を代表するに堪へざるも、裏面に

○三十七年議會に入りて[illegible]發言を求めしを聞かず。されど彼の四疊半的私話は演壇上の雄辯宏辭に勝るの効力あり。蓋し彼の舌は恰もコロ、ホルムの如く、催眠術の如く、一たび其口說く處となれば何人も守を失するに及ぶ。彼をして春秋戰國時代に生れしむれば、城を拔き將を斫るの戰士にあらず、三寸の舌を劍に代へて合縱連衡を說くの縱橫家たらん。

○村野も元と壯士の親分にして爆裂彈時代の活動家なり。嘗て贄を横濱の益田晩菘の門に執り、相模の耕餘義塾に學びし丈けに、森久保に比すれば何程か文字を解す。されど其手腕舌力に至ては脚下にも及ばず。唯だ生拔きの自由黨なるが故に重んぜられざるも、存在を認めらる。森久保の弟分と看れば可。

○望月右內(紀州)も星門の一人にして、久しく同類相黨して惡を爲し、現に私財を積むこと尠からず。東京電燈會社重役にして佐竹作太郎の參謀たり。

○痘痕を以て衆議院に鳴るもの彼の外に井上角五郎あり。角五の面貌は幾分の愛嬌あるも、右內のは獰惡に近く、お茶水事件の松平紀義に似たり。

○第五議會の頃、鐵道同志會なるものを

設け之が會頭たり。第一期・第二期線時代は各府縣の運動激甚なりしを以て、彼は議員の職を利用し大に囊中を肥せり。

〇前年電氣法案の議會に提出さるゝや、彼は極力案の通過を妨害したり。後ち佐竹の全院委員長に擧げられしは、當時右内の仲介を以て電燈會社より十五萬金を政友會に獻じたる報酬に外ならず。

〇高木は曾て木村芥舟の門に學ぶ。初期以來の議員なり。失明後は見る影もなく窶れ、國民黨の厄介物となれるも、改進黨時代の名士にして黨中の美貌家なりき。其居郡には今も尙信仰家を有し政友會の勢力を以てするも彼を落す能はず。

〇改進黨時代には、人の都合にて壇上に立つを得ざる場合、脫黨を申出で幹部を威嚇したりといふが、今日も議會に於て頻々發言を求め、盲人の出づべからざる處に出で盲、蛇に怯ぢざるの觀なからず。殊に彼の演說は亡國の音を帶び聽者に好感を與へず。

三　京都・大阪

〇神鞭知常・小松喜平治逝き、石原半右衞門政界を去て以來京都の進步黨は甚だ振はず、僅に淸水仁三郎一人を出し、他は政友會及び官僚黨臭味の者のみなるも、曾て一時に四人を出したる地盤は今尙ほ少くも二三人を出すに堪ふ。

〇濱岡光哲は十數年前各種の事業に關係し、京都の澁澤と稱せられしが、關西貿易會社破綻以來、殆んど赤裸々の運命に陷り事業界より遠かれり。數年來何程か順境に嚮へるらしきも、往年の勢力なし。人と爲り應揚にして其形貌口吻の殿樣らしきより濱岡男爵の綽名あり。彼も亦全盛時代には家人をして御前樣と呼ばしめにき。

〇曾て京都に茶話會と稱する保守的團體あり、前代議士雨森菊太郎・中村榮助・西村治兵衞・大澤善助(前府會議長)及び濱岡等之が中心となり、市政及び事業界に不良勢力を張り、時人をして毒茶會と呼ばしめたり。今日別名を冠せるも、政治上に於ては官僚臭味の團體なり。故に濱岡といひ平井熊三郎といひ名は無所屬といふも、實は中央黨の親類筋と見て差支なし。

〇公然中央黨の看版を掲ぐる中安信三郎は元と神鞭の子分にして進步黨支部の幹事たり。或は大智なきも小才の利くより小策士と稱せられ、一時保守派より一敵國を以て目せられしが、品性汚劣なる爲め漸次信用を墮して總ての名譽職を失び、豫戒令を執行されし時代もありき。

〇されど世間を瞞著するに巧みなる彼はいつの間にか代議士に選ばれ、二三の名譽職さへ恢復し、中央に於て存在を認[illegible]られざるも、京都に在ては、チヤキ〳〵の政治家なり。

〇京都の政友會は奧繁三郎あるが爲めに地盤を維持し隨て彼の勢力大に張る。彼の風袋を一觀せば茫洋として愚なるが如きも、案外總身に智慧の廻り、相場に手を出し、賭博を好み會社運動を試み、精力旺盛にして面皮厚く、現代的黨人の資格を具ふ。

〇近者政友會幹事長として相當に活動し、選擧の際は買收費を入れたる手鞄を携へて屢次競爭地に密行するを看たり。

〇岡田泰藏は翩々たる田舍ハイカラのみ。淸水仁三郎は工學士にして、敏腕家と稱せられ、近頃川上貞奴の援助者となれるが、贅六臭味を脫せず。

〇大阪の政黨勢力は政友會を第一とし中央黨之に次ぎ、國民黨最も劣る。無所屬の中には政友會と行動を一にするあり、或は中央黨に近きあり。國民黨とても人物に乏しといふにあらず。現に砂川雄峻・柿崎欽吾・日野國明の如きあり。卒先して黨勢を張るに努むれば二三人を出し得ざるにあらず。然らば國民黨の振はざるは不熱心なるに出づ。

〇岩下は人格下卑の俗物なるも、權門勢家の歡心を釣るに妙を得たり。曩に桂・後藤の歐行に加はりしは、[illegible]

[illegible]り日本に引還し、彼れ一人後に殘りしは折角の椋鳥を逸したると同樣・失望察するに餘あり。

〇菊池侃二(加賀)は大阪政友會の耆宿なるも、代議士としては一箇の大陣笠に過ぎず。曾て自由黨の戰士として初期議會に鳴らし、菊池諤二と今日の菊池とは殆んど別人の觀なからず。

〇中橋は曾て官界より大阪に天降りたる人材派の一人にして、大阪商船會社長といふ結構なる肩書を有し、一方市會議長の名譽職にあるを以て、贅六より『偉き人』と尊敬せられ、彼れ自身も掃溜に鶴の下立ちたる如く己惚れつゝ大言壯語して白痴を脅せるが、近者何故か一部人士の間に人望を失ひ議長排斥運動すら行はるゝに至れり。

〇最近代議士の職を辭したる表面の理由は、大小十數の會社に關係し充分に其職責を全ふする能はざるを自覺せりといふにあるも、內面の理由は別にあるらし。其理由の何たるにせよ意外の儲物をなしたるは次點者石橋爲之助とす。

〇石橋は愚劣なる演說を試みて自ら偉しとするも、何人にも鼻を摘まれ、ダメノ助の綽名あり。木崎某が不成功に終るべきを覺悟しつゝ候補に立ちしは、石橋を

〇[illegible]ひ、一錢たりとも歲費に手を著けず。前年渡米實業團に加はりて觀光の客となるや、汽車中に起臥して旅費を剩したりといふに徵するも其人と爲を察すべし。

〇七里淸介(鳥取)・三谷軌秀(土佐)・秋岡義一は小天地に手腕を振ひ得る名士に相違なきも、檜舞臺に出づれば、馬の脚に過ぎず。

四　神奈川・兵庫

〇島田三郎の地盤の牢として拔くべからざるは、國民黨の勢力といふよりも島田箇人の勢力に因る。初期以來連續して議席を占むるは橫濱の誇なると共に又た彼の誇なり。

〇彼は日本の名士なり。世の彼を衆議院の第一人とする如く、彼も亦爾く任ぜるらし。されど彼の盛名ありしは遠き過去のこと、近年著しく箔の剝げ、議會に於てさまで重んぜられず、國民黨に於ても歸り新參だけに些子兒の勢力なし。

〇改進黨の前に二箇の分派あり、一を嚶鳴社といひ、一を東洋議政會と稱す。前者は沼間守一を以て頭目とし、後者は矢野文雄牛耳を秉る。島田も嚶鳴社の錚々

[illegible]金錢に縁遠きも、嚶鳴社派は金權に縁ありしを以て、多く財界に走れり。島田も曾て地主派・商人派と款を通じ、神奈川に於ける金錢問題の代表者たらんとするの意あり。現に平沼專藏を時の有力者に紹介したる者は彼なりき。

〇然るに星亨と井上角五郎との爲めに之を奪はれ、京濱銀行設立の如きも全く無關係の位置にあり。彼が星攻擊に全力を傾けし原因の大部分は嫉妬心にありといふものあり。蓋し彼は角五の智術、星の膽略なきが故に勢ひ敗北せざる能はず。

〇島田の雄辯も近頃は議會の惱みの一となり、自家の專有物の如く振舞へる三稅廢止論も格別反響なきが如し。好く泳ぐ者は溺れ好く諜る者は輕んぜらる。是れ古今の通理なり。

〇十年前三菱の金力を以てせる加藤高明を一蹴したる島田も過般の選擧には惡戰苦鬪したりといふが、當時俠骨を謳はれし橫濱市民も歲と共に時代の惡風潮に化せられしか。

〇郡部には品藻の價値ある者一人もなきが、唯だ日糖事件に醜名を流したる長谷川豐吉の再出は、神奈川縣の名譽に八斗の汚泥を塗りたるもの、選ばれし者の非なるか、選びし者の非なるか。

○兵庫縣は流石に改進黨の盛んなりしだけ、今も尚國民黨の勢力遙に政友會の上に出で、全體を通じて三分の二強を占む。無所屬は神戸の松方幸次郎一人なれど政友會系と看て可。

○松方は大學を出で、直に川崎造船所に入り現に其社長たり。彼の今日ある乃父の勢力大に與るも、概して名士の子には不肖なるの多きに、彼が如きは出來の好き方にして財界の新人たる名を冠するに堪ふ。されど政治家として何程の働をなし得べきや。

○再昨年櫻井一久の補缺戰に野添宗三と爭ふて脆くも敗れしは、神戸市民の櫻井に對する崇敬心の大なりしにも因らんが一は小寺謙吉が川崎の勢力に反抗して極力應援せし結果とす。

○野添は松方の財力門地なく、私立學校出身の一辯護士に過ぎず。而も其人格は故櫻井の後繼者たるに恥ぢずと稱せられ、其聲望は櫻井の如く全體に及ばざるも少くも或部分に存す。一言以て之を蔽へば、松方の勢力は物質的なるも、野添のは精神的なり。

○肥塚龍の黨人生活を營む亦久しからずとせじ。初め播州揖保郡某貧寺の僧たりしが、明治五年を以て還俗し、故中村敬宇の同人社に學ぶ。資繼がざる爲め退學して都下に流寓すること兩三年、適ゝ沼間守一の知る處となりて横濱毎日新聞に筆を執り、後ち嚶鳴社創立に與る。是れ島田と舊交ある所以。

○嘗ては松・隈内閣の鑛山局長、憲政黨内閣の東京府知事たり。今は國民黨領袖の一人にして前議會の副議長たり。されど彼は已に半ば耄碌し、黨界に活動するの氣魄なし。彼が如き舊人のいつまでも議席を占むるは後俊の進路を塞ぐ所以、選擧者も内心引を望まざるにあらざるも、名士なるが故に落選せしむるに忍びざるのみ。

○肥塚に亞ぐの名士にして兵庫縣政友會を率ゆる者は改野耕三なり。愛國公黨時代より政黨に關係し、代議士としては肥塚より先輩なれども、其前身が戸長なりし丈けに肥塚の如く學問なく、唯だ自由黨の古顏といふに過ぎず。

○政友會人なきの證據には彼が如きに對しても第二流の待遇を與へ、再三幹事に擧げられ、嘗て農商務省官房長たり。されど肥塚程に耄せざるが如し。

○小寺謙吉は今日兵庫國民黨を左右するの力ありと稱せらる。神戸の富豪にして中將中牟田倉之助の女を室とし、『バチエラ、オブ、ロース』・『マスター、オブ、ロース』・『ユーリス、ドクトル』の肩書を有す。單に是れのみを以てするも世間よりチヤホヤさるゝ筈。而も案外人に喜ばれざるは何ぞや。

○人には財力以外に貴ぶべきあるを知らず、萬事を金力に依て支配し得べしとするは富豪なる者の通有性なるが、小寺も金力を誇るの風あり。然らば故平岡浩太郎の如く、阪本金彌の如く大に散じて物質的勢力を扶植する丈けの豪快趣味あるかといふに、彼の吐月峯黨たるは何人も知らざるなし。

○蓋し小寺の吝嗇は遺傳性にあらざるか。我輩は彼の先考泰次郎が何樣の手段を以て鉅富を致しゝかを説明すまじ、唯だ彼の爲めに一言せん、政治家として大に名を成すと成さゞるとは豐富なる富を利用し、此父にして此子ありとの誚より免るゝと否とにあり。

○我輩の桑梓たる姫路市が高利貸の大森與三次を代表者とせざるべからざる程に墮落せしを思へは轉た慨嘆に耐へず。大森に比すればオイチ二の横田孝史は何程か勝らん。政友會の安藤新太郎、國民黨の齋藤隆夫は未だ名を成さゞるも幾分か代議士らし。

五　長崎・新潟

○長崎も政友會全盛の地なれば、縣下を通じて八人中六人まで純政友會員とし、無所屬の[illegible]に政友會の客員と看るべし。

○天下の豪傑鈴木天眼の敗れたるは、其聲天下に渡り一市一縣には太きに過ぎ、却てバアーとして聞え難きに因るか。而して天眼を一蹴し退けたる永見寛二は蓄音器式音聲を以て選擧民の耳を喜ばしむるに因るか。前者は筆と口の人、後者は銀行頭取、即ち金力を以て言論の力を壓伏せし結果のみ。言ひ換ふれば武士が素町人に負けたるのみ。

○中倉萬次郎は銀髮長鬚の好老爺、帆足準太郎は銀行家、則元由庸は裁判官の古手、横山寅一郎は前市長にして長崎政友會の首領たる位置にあり。

○長崎縣を代表して二箇の大人物の議會に入れるを忘るべからず。一は早川鐵冶にして一を田川大吉郎とす。此二人者は一バッテン國の名士たるに甘んぜず、夙に天下の大政治家を以て任ず。

○早川は初め北海道より立たんといひ、中頃は郷國岡山より出と稱せられしが、終に對州に遠征して福本日南と旗鼓相當れり。

○對州は絶海の一孤島なり。倶に天下の名士なり。世人は二人者の政戰を以て双龍玉を爭ふの奇觀なりとしき。

○早川は札幌農學校を出でゝ直に衙門の人となり、松・隈内閣の時、内閣書記官を[illegible]事に與りて手腕の凡ならざるを示す。[illegible]政黨内閣の時、辨理公使に進み、伯の罷むると同時野に下り、爾來幾多のボロ會社に頭を突込みしが、財界の人としては未だ曾て成功せしあるを聞かず。

○其系統よりいへば當然國民黨に入るべきに、然らずして政友會に投ぜしは、大隈伯に對して不義理の嫌ひなからず。されど犬養も大石も武富も未だ曾て彼を顧みざるに反し、原敬は或は彼を病褥に訪ひ、或は旗亭に招待して入會を勸奬し待つに賓禮を以てしき。早川の之に靡くは自然の人情なり。

○雲突く許りの容體、鬼瓦の如き面貌、四隣に響き渡る音聲、而して能く談じ能く笑ひ、時として大法螺を吹き、眼中人なきの概あり。

○彼は豪放磊落を衒へるか、或は眞に然るか。世には彼を僞物なりと貶するあり。何程か裝ふ所なきにあらざるも、愉快なる人物に相違なし。黨人として大に爲すを得るか、それとも影辨慶にして一箇の大陣笠たるに終るか。

○田川は何人よりも氣障がられ、時として人格を疑はる。彼が反身になり少しく首を傾けてドス黝き顔を上方に向けつゝ[illegible]者に快感を與へず。

○又新會より國民黨に入り半年ならずして脱しゝは、民黨にあるの選擧に便ならざる爲めか、東京市助役たるより政友會に氣兼ねしたる爲めか、親分尾崎學堂に義理立せんが爲めか。恐らく三者の中にあらん。

○嘗て新潟縣の政黨地圖は改進黨六分、自由黨三分、國權黨一分の彩りにして、改進黨には室孝次郎・波多野傳三郎あり、自由黨には鈴木昌司・山際七司あり、國權黨は大竹貫一其首領たり。

○舊改進黨の地盤は其後政友會に蠶食され、往年に比すべくもあらねど、而も尚勢力相若き、縣會に於ては國民黨多數を制せり。今日新潟國民黨の首領は阪口仁一郎にして、河合直次・田野貫一・目黑孝平・增田義一・川上淳一郎等は郷里に於ても議會に於ても阪口の意志に背きて何事をも爲す能はず。

○彼は代議士として左程古顏にあらざるも、黨人としては久し。縣下到る處親戚緣者あらざるなく、隨て彼の勢力は頗る廣範圍に亘れり。傍ら新潟新聞を宰し、又た五峰の詩名縣下に著はる。

○前後三十年間縣會議長の職にありしを以て、議場整理の手際は流石に老練なり。前年進歩黨の内に相爭ふ

や、代議士副會長として紛亂喧囂の間に處し、キビキビせる宣告と機宜に適せる採決法とは屢次改革派を惱ませり。

○彼は辭令拙なるに加へ口吃るを以て彼の談論は怒るが如く叱咤する如く聞え、態度頗る不遜なるに見ゆるも、天性正直にして守る處も亦嚴なり。强て彼の缺點を求むれば、餘に無愛嬌なると、頑固にして人の言を容れざるにあり。

○增田は成功宗の皷吹者にして、同時に雜誌界の成功者なり。未だ洋行せざるに洋行したる如くいはれ、從來代議士運動を試みざるに代議士の如く惟はれたる程の大人物なれば、嘸かし議會に異彩を放ち、又た彼の演說の爲めに惱まさるゝ者も少からざらん。

○大竹は嘗て民黨の名士なりき。今日も尙名士には相違なきも鼠色に變せる名士なり。家產は竭き、地盤は政友會・國民黨の爲めに削弱せられ、纔に惰力を以て政治的生命を繫げるに過ぎず。

○政友會には山本悌二郎・高橋光威あり。山本は新智識もあり、現に臺灣製糖取締役にして相當の財力あるらしきも、其勢力は佐渡一島の外に出でず。高橋は原敬の腰巾着といふに止まり秋毫も勢力なし。然らば今日阪口に拮抗し得る者は皆無といひて可なり。

京の北

金子薫園

京をいでゝ女院の墓に泣きに來ぬわが淋しさを思ひたまはじ（寂光院にて）

ひとしづく佐の局のちひさなるしるしの石をぬらせる涙

藁草履苔路のつゆをふみきたる大原の里のかなしきみ寺

秋のをはり御幸の路のあとたどり大原の奥にさまよひて來ぬ

八瀬の橋紅葉をいでゝゆるやかに音たてゝくる牛ぐるまかな

水一すぢさむく流れぬ見あぐれば山の紅葉の日のかげになれり

＊　＊　＊

あたゝかきコヽアを啜りかたりつぐ夜話の半に鷗のなける（以下竹内栖鳳氏を訪ひて）

鷗なく夜ふけの京のしづかなるあたりひびかせ鳥屋に啼くこゑ

霜月の長夜を寒み鷗なく一羽がなけばまた一羽啼く

冬の夜はふけぬましろく霜おかむ鷗のなける鳥屋のまはりに

飼はれたる二羽のかもめのしたしまず背

時事日抄

○十一月十六日（土曜）

▲陸軍大演習　南北兩軍は入間川を挾んで對戰し北軍利あらず、陛下には稻荷山の御野立所にて御統監あり、飛行機飛行船の偵察大成功を告ぐ

▲御救恤金御下賜　七月中旬以來の暴風雨被害につき天皇皇后兩陛下より群馬縣以下各縣へそれぞれ御下賜金ありたり

▲陸軍當局の遊說　二箇師團問題に關し、陸軍當局者は此程來元老准元老及び實業家を遊說しつゝありといふ

▲岡山醫專の紛擾　同校桂田博士免職を不當とし同校四百名の生徒は一切に同盟休業したるが總代二名は文部省に陳狀の爲め上京せり

▲蓄犬稅　東京市にては蓄犬稅を十倍にせんとするの議あり非難の聲高し。

○十一月十七日（日曜）

▲大演習第三日　前日來南軍の壓迫によりて退却せる北軍は新たに增援隊を得て形勢茲に一變し南軍の退却は所澤飛行場に於て白兵戰を見たり、陛下には所澤飛行場に飛行船飛行機の操縱を御覽あらせらる

▲君府危し　倫敦來電に曰く、君府前面の勃軍は愈々進軍して君府に入らんとしつゝあるが、其陷落は一兩日中なるべしと豫想せらる

▲新奉天都督　張錫鑾新たに奉天都督となる

▲米國臨時議會　來春四月十五日を以て開くといふ

▲文展閉會　第六回文部省美術展覽會閉づ。入場者十六萬一千七百九十六人

▲眞正興正寺管長　華園澤稱男逝く

○十一月十八日（月曜）

▲大演習終了　大元帥陛下には午前六時大本營御出門豐多摩郡谷保村字青柳川岸の御野立所に行幸ありて兩[illegible]

中止の後、立川中學校に參加將校の會同を命ぜられ[illegible]長谷川參謀長をして講評を爲さしめられ同時に左の勅語を賜ひたり

演習の經過に關しては參謀總長に命じて講評せしめたり、朕始めて朕が陸軍特別大演習を統監し其の成績の良好なるを嘉す、今や宇内の軍事は日新止まず汝將卒益す研鑽努力し以て干城の重任を全うせん事を期せよ

▲進水式行幸仰出　來る廿一日橫須賀海軍工廠に於ける比叡の進水式に行幸相成る旨仰出さる

▲君府總攻擊　土京來電に曰く今（十八日）早朝より全市を通じて轟々たる砲聲聞え總攻擊開始せられたるが如しと。又曰く虎列剌は戰爭の苦痛よりも激烈となり日々一千名の新患者ありて五割以上は死亡しつゝありと

▲勃牙利講和條件　勃牙利の講和條件は土軍のチヤタルヂヤ、アドリヤノーブス、ヤニス及びモナスチル撤退、勃軍の君府入城其占領地の讓與、君府の萬國共有、ダーダネルス海峽の各國軍艦自由通航及び軍費の賠償なりと歐電は傳ふ

▲西班牙の新首相　下院議長ロマノネス新に就任

▲米大使辭任　賜暇歸國中なりし米國大使ブライアン氏は辭任せし旨外務省に通知ありしと

▲日進の椿事　淸水港碇泊中の軍艦日進の火藥爆發し重傷十一名輕傷八名を出す、原因不明

○十一月十九日（火曜）

▲所澤にて賜饗　天皇陛下には午前十一時十五分川越停車場より所澤飛行場に行幸大演習陪觀又は參加の各元帥以下三千名に酒饗を賜ひたり

▲黎等の征蒙主張　漢口來電によれば露蒙協約に關する武昌の都督府會議は主戰派の勝利に歸し各省都督と聯盟して獨立せる蒙古を征伐すべきことを決議し北京に向け四個條の建議を爲せりと

▲預金利子引上　躊躇しつゝありし銀行業者も金融の趨向に餘義なくせられ三井、三菱、第一、第十五、第[illegible]

（定期預金六個月以上年六分[illegible]（二厘上）[illegible]厘（三厘上）▲特別當座一錢三厘（三厘上）

▲贈位追陞の恩典　川越地方の勤王家其他に對し左の如く位階追陞及び贈位の御沙汰ありたり

贈從三位　舊川越藩主故從四位上　松平齋典

同上　舊川越藩主故從四位下　柳澤吉保

同上　舊川越藩主故從四位下　秋元喬知

贈從四位　舊江戶町奉行故從五位下　大岡忠相

贈正五位　舊關東郡代職故從五位下　伊奈忠次

贈從四位　舊幕臣故　川路聖謨

贈正五位　埼玉縣大里郡八基村故　桃井儀八

同上　同　北埼玉郡水深村故　小田熊太郞

贈從五位　同　入間郡入西村故　竹内啓

同上　同　三芳野村故　櫻國輔

同上　同　飯能村故　小川香魚

同上　同　川越町故　西川練造

同上　同　大里郡大寄村故　今井國之丞

同上　同　吉見村故　根岸伴七

同上　同　兒玉郡丹庄村故　鹽川廣平

▲伊藤重介氏　帝室林野局主事の同氏逝く

○十一月廿日（水曜）

▲大元帥陛下還幸　大演習の御統裁を終へさせられたる大元帥陛下には十一時五分新宿着の列車にて還幸相成りたり

▲勃土講和の序幕　勃牙利政府は土耳古と講和を議せしむる爲め講和全權委員を任命したりと（倫敦來電）

○十一月廿一日（木曜）

▲新艦比叡進水式　昨年十一月工を起したる新巡洋艦比叡は午後二時橫須賀海軍工廠に進水す、總噸數二萬七千五百、備砲十四吋八門、六吋十六門、三吋以下十六門。此の日天皇陛下には十時新橋發列車にて橫須賀に行幸あり、進水目出度く結了と共に三時半御還幸の途につかせられたり

▲對蒙輿論　北京電報に曰く地方官制諮詢の爲上京中

なりし各省代表は蒙古問題危急に瀕せる爲め歸國して軍費を調達すべしと袁大總統に報告して夫々歸省せり

▲胡維德氏　は佛國公使に當選したりと

▲政局進展　西園寺首相は上原陸相と一時間餘の密議を凝せり、增師問題に關する世論漸く囂しく政局將來觀區々たり

○十一月廿二日(金曜)

▲定例閣議　午前首相官邸に開かる、「整理閣議の序幕と見らる

▲代議士辭任　大阪市選出中橋德五郎氏は業務多端の故を以て代議士の辭職を公表せるが次任者は石橋爲之助氏なり

▲下水案可決　東京市下水委員會は一部の中止論を排して該案を通過可決す

▲橘家圓喬　逝く

○十一月廿三日(土曜)

▲陛下御出御　「新嘗祭にて祭日にも拘らず天皇陛下には青山離宮より宮城に出御、政務を御親裁相成りたり

▲土耳古再開戰　一旦交戰中止を承諾したる土耳古は再び開戰を爲すに至りたりと

▲一葉女史の法會　樋口一葉女史の十七回忌築地本願寺に於て催さる

▲開戰滿十七年　日本に入りてより滿十七年に當る救世軍は大森八景園に紀念會を催す

▲淸國前皇帝　本年七歲にならせられしが、去廿二日より惱膜炎にかゝられしと

○十一月廿四日(日曜)

▲土耳古振ふ　チャタルヂヤに於ける土耳古軍は其後益す勢力を挽回し、勃牙軍に對し全然攻擊を取りつゝありと

○十一月廿五日(月曜)

▲陸軍大學校行幸　天皇陛下には午前九時陸軍大學の卒業式に行幸相成りたり

▲實業家と增師　增師問題につき全國の商業會議所より委托を受けたる東京會議所の正副會長は本日首相を訪問し增師反對の意見を述べて引取りたり

▲休戰不調　ウヰンナ發電によれば、土國對巴爾幹同盟國の休戰談判は、後者の要求大なりし爲め、遂に不調に終り土國は戰鬪を續行するに決せりと、又曰く亞細亞よりの援軍到着したる爲め土軍の士氣大に振ひ、ルーレブルガスの敗戰以來、紊亂せる秩序を恢復しつゝありて、全領土を占頭して飽くまで之を保持せんとしたる勃牙利軍は、今や土耳古の爲めに機先を制せられつゝありと

▲學習院長任命　右の如く任命あり、同時に白鳥庫吉氏は學習院長事務取扱を免ぜられたり
　任學習院長　陸軍大將子爵　大迫尚敏

▲林野局長任命　桂內閣當時の警保局長たりし有松英義氏は帝室林野管理局長に任命せられ、同時に貴族院議員を辭したり

▲學校存置運動　地方財政の整理の爲め中學程度の各種學校を廢せんとするもの地方府縣に多く各地方民は當該地方長官に對する陳情を以て滿足せず、新潟、青森、群馬外數縣の委員は昨日文部省に面陳しつゝあり

▲英國の觀光團　百十八名の英國紳士及淑女より成る觀光團橫濱に着く陸軍中將オリパント氏、歷史家ギボンの子孫ロイストン子爵令孃とその夫ハアトウヰク伯などもあり

○十一月廿六日(火曜)

▲砲工學校行幸　天皇陛下には陸軍砲工學校の卒業式に行幸相成りたり

▲定例閣議　午前十一時首相官邸に開催、上原陸相は砲工學校卒業式參列の爲め出席せず、却つて寺內總督と財部海軍次官の出席を見たり

▲日伊條約　日本伊太利間の新通商航海條約は二十五ローマに於て調印を終りたり

▲阪谷市長　施政方針廿六ヶ條を發表す

○十一月廿七日(水曜)

▲白皇母堂薨去　白耳義國皇帝アルベルト陛下の御生母マリー、ド、ホーヘンゾルレン、シグマリンゲン陛下は廿六日突如國都ブッセルに於て薨去御年六十九

▲墺露關係　露國の有力なる位置に於ては墺露間の國際關係を險惡ならしむるが如き開戰の企圖なきを保證せり(伯林電報)

▲增師反對熱　東京商業會議所の增師反對實行委員會は午前十一時半開會、中野會頭より首相訪問の顚末を報告したるが、各地商業會議所の增師反對熱は益す高まり關西聯合會は博多に、東北聯合會は仙臺に開會の筈

▲師團長更迭　左の通り更迭せり
　近衞師團長陸軍中將　閑院宮載仁親王
任陸軍大將補軍事參議官
　第十二師團長同上男爵　山根武亮
補近衞師團長
　第十五師團長陸軍中將　內山小二郎
補第十二師團長
　陸軍大學校長同上　井口省吾
補第十五師團長

▲旅團長其他更迭　左の通り更迭せり
　第九師團參謀長步兵大佐　白水淡
任陸軍少將補步兵第十二旅團長(小倉)
　步兵第四十四聯隊長同　山田良水
同上補步兵第三十五旅團長(福岡)
　近衞第二旅團長少將　大井菊太郎
免本職補陸軍大學校長
　步兵第三十五旅團長同　栗田直八郎
免本職補近衞步兵第二旅團長(東京)
　陸軍士官學校長同　野口坤之
免本職待命被仰付
　獨立守備隊司令官同　橋本勝太郎
免本職補陸軍士官學校長
　步兵第十二旅團長同　小池安之
免本職獨立守備隊司令官
　步兵第四十聯隊長步兵大佐　宮田爲之
免本職補第九師團參謀長
　步兵第十二聯隊附步兵中佐　石[illegible]

休職被仰付
　東宮武官步兵中佐　大內義一
免本職補步兵第五十聯隊附
　待從武官步兵大佐　上田兵吉
免本職補步兵第四十四聯隊長
　東宮武官砲兵少佐　西義一
免本職補待從武官

▲侍醫新任　舊長崎醫學專門學校長たりし醫學博士大谷周庵氏は今回侍醫を拜命したり

▲櫻井少將　後備海軍少將櫻井規矩之左右氏逝く

○十一月廿八日(木曜)

▲臨時閣議　開かれ上原陸相の增師不可避論について原山本氏等の質問急なるものありしと、尙ほ廿九日も引續いて開會の筈

▲政友會と增師　午後一時より政務調査總會を開き尾崎委員長より首相と會見せる結果として左の如き報告を爲せり
一、行政整理及財政整理は第廿八議會に於て言明したる趣旨に副ふことを期し進行しつゝあり
二、師團增設は未定の問題なり
三、特別會計は是亦同樣未定なり
四、豫算編制の方針は既に定まれるも、未だ公表する時機にあらず

▲大隈伯の演說　午後精養軒に開かれたる日本經濟協會の席上、大隈伯は現時の財政狀態につき演說を爲し世間の注目をひきたり

▲國家醫學會　第廿六次總會は帝國醫科大學法醫學教室に開かる

○十一月廿九日(金曜)

▲閣議　前日に引續き整理問題增師問題につき協議を重ねたるも兩主張者の意志未だ合致するに至らずといふ

▲土勃講和　土勃兩國の講和談判委員は廿七日夜更まで會見を傾け、廿八日も早朝より再び會見を續げつゝありと倫敦電報は傳ふ。

▲胡英氏來朝　革命の爲めに盡瘁する處あり共和政府[illegible]京したるが、[illegible]の爲めなりといへるも、その眞意は我政府の對支那態度を內偵するにあるものの如しと

○十一月卅日(土曜)

▲急遽閣議開かる　上原陸相は午前十一時西園寺首相を訪れて會見する處ありたるが、陸相退邸後首相は他の各相を召集し暮夜密議する處あり

▲山縣公歸京　山縣老公は午後二時十分小田原より新橋に着し直ちに目白邸に入りたるが、是れ廿九日の閣議の形勢面白からず岡陸軍次官の小田原急行となりし結果なるべしと、而して山縣公は大山元帥大島參謀次長、田中軍務局長等多數人側の訪問をうけたりと

▲英外相の提議　英國外相グレー氏は列强の意志の交換に依り、近東事件の決解を協議せんことを列國に提議したり、而て其意見交換の方法は從前の如く各國政府の覺書を以て行ふにあらずして一定の地に於て各國の大使會議を開くにあり、而してその開會地の選擇には敢て重きを措かざるものにして、その議題は列强が共同してアルバニヤの獨立に承諾を與ふるの可否、列强が多島海嶼の領有を斷念する事及び各國軍艦に對するダルダネル海峽の開放等なりとす(伯林電報)

○十二月一日(月曜)

▲椿山莊の凝議　官僚軍閥の策源地とも目さるる目白の山縣公邸には大浦子、桂公、上原陸相、田中軍務局長等の訪問ありたるが、山桂兩公の密議は三時間に至りしと

▲海軍大異動　海軍將佐官大異動及進級發表せらる、中重もなるもの如左
　旅順鎭守府司令長官海軍中將　山田彥八
補橫須賀鎭守府司令長官、兼補海軍將官會議々員
　橫須賀工廠長同　阪本一
補旅順鎭守府司令長官
　吳工廠長同　伊地知季珍
補第二艦隊司令長官
　海軍造兵廠所長海軍造兵總監　澤鑑之丞
[illegible]
待命被仰付
同上　海軍教育本部長海軍中將　阪本俊篤
　第二艦隊司令長官同　吉松茂太郎
補海軍教育本部長
　佐世保工廠長海軍少將　加藤定吉
任海軍中將、補橫須賀工廠長
　艦政本部第一部長同　村上格一
任海軍中將、補吳工廠長
　海軍大學校長同　山下源太郎
任海軍中將
　馬公要港部司令官同　小泉鑅太郎
同
　大湊要港部司令官同　土屋保
同
　第三艦隊司令官同　名和又八郎
同
　海軍軍令部參謀同　有馬良橘
補第一艦隊司令官

▲海軍將佐官豫備　大異動中豫備仰付けられたるもの如左
海軍中將中尾雄、海軍少將高木助一、同井手麟六、同木村浩吉、同奧宮衞、海軍機關少將下條於菟丸、同伊東茂治、海軍々醫總監齋藤有記、海軍大佐山澄太郎吉、同荒川規志、同藤田定市、海軍中佐下村亮太郎、同香月輝彥、同大立龜吉、同大石士郎

○十二月二日(月曜)

▲陸相辭表提出　上原陸相は午前十時首相を訪問し遂に辭職の止むなきを述べて辭表を提出しそれより青山離宮に參內せり

▲臨時閣議　上原陸相退去するや首相官邸には各相參集し首相より陸相辭任の報告ありたる後其後任選定について種々協議する處ありたりと傳へらる、尙閣議中首相は桂公の訪問をうけたり

▲解決の途絕ゆ　時局は今や圓滿なる解決の道全く絕えたりと目せらる

▲院外者氣勢を添ふ　政友會院外者は午後五時より新橋松本樓に大會を開き增師反對の決議を爲し數番の演說ありたり

世界十六大帝

新日本第参巻第壹號附錄

- [illegible]
- 【アッシリア】サルダナパルス王　前[illegible]
- 【バビロニア】ナボポラッツサル王　前[illegible]—

【希臘】アレクサンドル大王　紀元前　三三六—三二三
- 【日本】孝安天皇　前三九二—二九一
- 【支那】周顯王　前三六八—三二一
- 【波斯】ダリウス三世　前三三六

【支那】秦始皇帝　紀元前　二四六—二一〇
- 【日本】孝明天皇　前二九〇—二一五
- 【羅馬】ハンニバル對羅馬抗爭　前二二一—二〇二

【羅馬】大ケーザル　紀元前　六〇—四四
- 【日本】崇神天皇　前九七—三〇
- 【支那】漢宣帝　前七三—四九

【阿拉比亞】マホメット　紀元　六二二—六三二
- 【日本】推古天皇　五九三—六二八
- 【支那】唐高祖・太宗　六一八—六四九

【佛蘭克】カルロ大帝　七七一—八一四

【日本】桓武天皇　七八二—八〇五
- 【支那】唐代宗・德宗　七六三—八〇四
- 【阿拉比亞】教王カリフ・ハルン・アルラシッド　七八六

【中央亞細亞】帖木兒大王　一三六九—一四〇五
- 【日本】後小松天皇　一三八三—一四一二(足利義滿)
- 【支那】明太祖　一三六八—一三九八
- 【土耳古】バジヤシッド一世　一三九〇—一四〇二

【英吉利】エリザベス女皇　一五五八—一六〇三
- 【日本】正親町天皇　一五五八—一五八六(信長・秀吉)
- 【支那】明神宗　一五七三—一六一九

- [illegible]

【露西亞】ペテル大帝　[illegible]
- 【日本】靈元・東山天皇　[illegible]
- 【佛蘭西】ルイ十四世　[illegible]
- 【瑞典】カルロ十二世　一六九七—一七一八

【普魯西】フレデリキ大王　一七四〇—一七八六
- 【日本】櫻町・桃園天皇　一七三九—一七六二(吉宗・家重)
- 【支那】清高宗乾隆帝　一七三六—一七九五
- 【墺太利】マリア・テレサ女皇　一七四〇—一七八〇
- 【佛蘭西】ルイ十五世　一七一五—一七七三
- 【露西亞】エリザベタ女帝・カタリナ二世女帝　一七四一—一七九四

【合衆國】ウオシントン　一七八九—一七九六
- 【日本】光格天皇　一七八〇—一八一六(家齊)
- 【支那】清仁宗　一七九六—一八二〇
- 【英吉利】ジョージ三世　一七六〇—一八二〇

【佛蘭西】ナポレオン一世　一八〇二—一八一五
- 【露西亞】アレクサンドル一世　一八〇一—一八二五

【英吉利】ヴヰクトーリア女皇　一八三七—一九〇二
- 【日本】孝明天皇　一八四七—一八六六
- 【墺太利】フランシス・ヨゼフ帝　一八四八—

【獨逸】ウヰルヘルム一世　一八六一—一八八八

【日本】明治天皇　一八六七—一九一二
- 【支那】光緒帝　一八七五—一九〇八
- 【佛蘭西】ナポレオン三世　一八五一—一八七〇
- 【露西亞】アレクサンドル二世　一八五五—一八八〇
- 【伊太利】ヴヰクトリオ・エマヌエロ二世　一八六一—一八七八
- 【合衆國】リンカン　一八六〇—一八六五

▲列國會議　グレー外相の提出にかゝる巴爾幹問題列國會議は先づ墺國の賛成を得たるが獨伊も賛成すべしと又同く列國會議は倫敦に開かるべし(伯林電報)

▲期米兩度廿二圓　客月下旬一旦下り阪に向ひたる期米相場は三期とも再び廿二圓以上に吹出したり

▲メビー博士來る　米國アウトルック誌文藝主筆ハミルトン、ライト、メビー博士は夫人令孃同伴來朝せるが氏は交換講演者としてカーネギー財團より特派せられたるにて、本邦にての講演は主として米國國民發達の歴史及國民性、生活狀態、活動の精神に關し、米國文學、米國教育若くは米國の理想を說くにありと

▲ウツト氏逝く　氏は米人にして明治廿五年我大學に招聘せられて來朝し最近は東京高師の教授たりき

▲對城久吉氏逝く　相場記者として「商機」の著者として有名なりき

▲虎疫　未だ容易に終熄せず日々新患者あり代議士渡邊修氏罹病す

○十二月三日(火曜)

▲西園寺首相參內　午前十時自働車を驅つて青山離宮に參內す

▲首相山公を訪ふ　青山離宮より一旦歸邸せる西園寺侯は數多の訪問を受けたる後山縣公を目白臺の邸に訪問せり

▲閣議又閣議　西園寺首相は午後二時四十分山縣邸より歸邸三時各相の出揃を待ちて臨時閣議を開く

▲巴爾幹休戰　巴爾幹戰爭は休戰せりと傳へられたるが、希臘國委員がダーダネルス海峽封鎖を中止するの訓令を有せざるが爲め調印延期となれりと

▲川崎正藏氏　川崎造船所主の同氏逝く

▲千阪高雅　貴族院議員の同氏逝く

○十二月四日(水曜)

▲名殘りの閣議　午前十一時より正式に開會さる、各大臣の辭表は首相の手許に差出され更に殘務の整理及び引繼に關して協議を凝らし一時半退散

▲兩總裁の辭表　原鐵道院總裁及び元田拓殖局總裁の辭表は首相の手許に差出されたり

▲大阪の拓殖博　過般東京に開會したる拓植博覽會は明年四月大阪に開會せらるべしといふ

▲遂に廿三圓　東京期米は本場當限は遂に廿三圓十錢の高値を表はせり

○十二月五日(木曜)

▲正式の辭表棒呈　西園寺首相は、午前十時青山離宮に參內政局に關し委曲の奏聞を遂げ、閣臣一同の辭表を棒呈せり

▲元老會議　政局の前途に關し桂內府は御沙汰を奉じて山縣大山井上松方四氏に參內を促したり

▲寺內總督へ長電　後繼內閣の物色盛なる時、山縣公は四日夜寺內總督へ向け長文の電報を發したりと取沙汰せらる

▲勅選議員任命　政府は左の五氏を貴族員議員に薦奏し五日その任命ありたり

內閣書記官長	南　弘
內務省警保局長	古賀廉造
同　土木局長	水野錬太郎
大藏次官	橋本圭三郎
前司法次官	河村讓三郎

▲總辭職通諜　西園寺首相は野田政友會幹事長に野田氏より同國各支部に西園寺內閣總辭職の通諜を發したり

▲增師反對大會　青年會館に開かる

○十二月六日

▲元老會議　天皇陛下には六日午前九時青山離宮御出門宮城に出御あり是れより先きに參內し居たる各元老に對し拜謁仰付られたる上十時より牡丹の間に於て元老會議を開催、桂侍從長より聖慮の程を傳へて後繼內閣につき充分配慮ありたき旨を述べ、先づ後任首相の人選に關し熟議する處あり、十二時各元老再び表御所に於て拜謁を仰付けられ、桂侍從長より會議の模樣を奏上し、了つて各元老は別室にて晩饗を賜はり天皇陛下の御還幸を奉送して後再び凝議する所ありたるが、松方侯は病氣の故を以て不參したり

▲松方侯に急使　元老會議終了するや河村宮內次官は午後七時廿五分新橋發列車にて鎌倉なる松方侯を訪問したり

▲寺內內閣か　元老會議に於て井上侯は多少西園寺內閣の留任につき意見を述べたりと傳へらる。但し結局は寺內伯を奏請するに決し桂侍從長より電報を發したりとも傳へられたり

▲整理局と整理局員　制度整理局は既報の如く廢止の旨六日の官報を以て發表せられたるが、同日制度整理局委員に對し夫々に報賞ありたり

▲內田耕作氏　日本銀行監事の同氏逝く七十三

世界の大勝利者

——ピエル・フライテル畫——

帖木兒大王

アレクサンドル大王　ナポレオン大帝　ケーザル　アッチラ　ラムゼス二世

明治大帝と世界十六大帝

主宰　伯爵　大隈重信

一、天才の傳記は多々益々可也

茲に收むる十六大帝は、何れも世界に優れた天才を發揮した大帝に相違ない、一世の人心に驚くべき感動を與へて何等かの影響を世界の文明に及ぼし、凡ての人類に永き印象を止めた事跡は今日に至るも沒すべからざるものがある。斯かる天才を現はした人々には歷史家達に自ら說ある事であらう。兎に角幾十百年、幾百千年の後にも猶ほ其傳記は出來るんである。如何となれば其人の優れた歷史は到底吾人の研究の力の能く及ばぬ處があるからである。計るべからざるそれが天才である。それ故傳記は幾度著はされても其天才は十分に現はし切れぬのである。猶ほ現はれぬ處があるんである。譬へば深淵を望むが如し、望むに從つて隱れたるものが段々に現はるゝ。それ故に偉大なる人物の傳記は千歲の後にも尚ほ著はさるゝ。そして其處に尚ほ先人未發の其人物に就いての觀察が現はれて來る、偉人なる人物の現はした盛德鴻業は、必ず何處かにまだ隱れた點の殘るが爲に、同一人の傳記が幾世幾代何百部の多きに至るか知れぬ。此の如きが即ち天才である。天才の天才たる所である。一度び傳記を作れば最早や書く所なしといふが如きは天才でない。左樣な人の才は直ぐ現はれて隱す所がない。何人にも直に窺ひ得る。それ故一部の傳記が出來れば其人の全面が盡く露出して又一辭の補ふべきものがなくなるんである。眞の天才を有するものは決して此樣なものでない。後になればなるほど、觀察の點、研究の點が種々のものから出て來る。それに從つて隱れた所のものが彌增しに現はれる。それ故偉大な人物であれば、幾ら傳記に傳記が次いで現はれても、その傳記のその人物を現はす力は限りなく生じて來る。即ち偉大なる人物には電氣的力が潛んで居つて物に觸れて現はるゝ、電氣その物は之を受くる力の度に應じて現はるゝんである。例へば無線電信の如き、此方に百ヺルトの受くる力があれば直に千哩の距離だけ電氣の力が現はるゝ、が二千哩の電氣の力は現はれて來ぬ。其處で千ヺルトの受くる力があれば、更に千五百哩二千哩といふ長距離に電氣の力が現はれて來るんである。丁度其如くで、傳記に筆を執る史家其ものゝ力次第で偉大なる人物の體内に含まるゝ電氣的力が感應し發露する。英雄は英雄を知り、天才は天才を解する、それ故後に前よりも優れた識見や天才ある史家が次々に現れて來れば、其人物の隱れたる眞面目が又次々に現れて來るんである。人間の力なるものは元と計るべからざるものである。それが偉大な人物であれば、愈よ計るべからざる大なるものが潛み居るので、物に觸るゝと天理人力に非る卓拔なる作用を示すんである。此樣な點を研究すれば吾人に大なる希望を與へ時勢を振起する所のものであろう。勿論當時の事を調ぶれば左樣宜い事ばかりもない、人を殺すとか、人を欺くとかいふ樣な種々な事があるでもあろうが、それにも拘らず尚且つ長く今日の人類の上に一の崇高なる偉大なる、敬虔の念を惹起すのは偶然でないと思ふ。如何かすると此處に收むる十六大帝といふが如きには、一個の共通點が見出し得るも知れぬ、即ち只其天才の働く方面が違う丈かも知れぬ、が現はるゝ處では各々色彩を異にして居る。所謂、氣候とか、人種とか、宗教とか、風俗とか、又は政治の狀態等で、自ら東洋の豪傑、西洋の豪傑と違ふ處があるも知れぬ。同じ人間であるから左樣な違はない譯だけれど、事實各々其境遇によつて相違が生ずる。即ち始皇でも、帖木兒でも、康熙帝でも、アレクサンドルも、マホメットも、ケーザルも、シャーレマンでも、將たペテロでも、ナポレオンでも、若くはフレデリツキ大王でも、皆其時代皆其境遇によつて違う、が其働の根本に溯つて見れば、何等人力の及ばぬものが潛在し、それが物に觸れて發露するを見出すんである。

明治大帝

二、西洋文明の壓迫と日本

そこで、此點からいへば、明治大帝は等しく偉大なる天才であらせられたとはいふものゝ、其御境遇からして自ら他より出色のものがあるんである。即ち我建國以來の歷史が突然世界の文明に觸れて一變化を來した、其處に現はれた御天才が、中央亞細亞に興つた帖木兒なり、阿拉比亞に興つたマホメットなり或は歐羅巴に興つた諸英雄なり、或は支那に、若くは蒙古に興つた諸英雄と著しく違つて居る。我明治大帝の御功業は初りから世界的に現れて居る。即ち世界的文明と何等の交涉なき東洋の一小島國に、安全に平和を樂んで居られた君主が一度び世界の文明に觸れられたのである。幾萬ヴルトといふ强力なる電氣が外より直に惰眠を貪れる日本の國民に觸れたのである。就中其帝室に與へた感動は强烈であつた。その爲に非常に動搖した。種々の困難を生じた。觸るゝ器械の力が微弱であれば到底外より襲來する電氣の力に堪へ得ぬのであるが、幸にもそれに觸れた我器械は破壞されずに能くそれに應ずる事が出來た。何等世界とは交涉のなかつた日本が、十九世紀半ばの其最も進步したる歐羅巴の文明に觸れて、直に應ずる事が出來たんである。そして俄に同化を勉め、大改革を遂げて今日に至つて居る。他國の例を見るに文明の度の低い國が其度の高い國に接觸すると皆倒るゝんである。即ち十六世紀十七世紀といふ頃に、歐羅巴以外の國々で其歐羅巴文明に觸れた處は、恰も石を以て卵に投ずるが如く火の原野を燒くが如くに譯もなく亡んで仕舞つたんである。南亞米利加土人の墨西其大帝國、インカ大帝國等が存在したのであつたが、それが皆亡された、今日南亞米利加に左る大帝國が昔し存在したとは殆んど夢の樣である、想像の出來ぬ程である。が事實存在して居たのを、西班牙若くは葡萄牙が往つて併合して仕舞つた。又葡萄牙が喜望峰を廻つて印度に往くや、それに接觸した印度は亡び、更に南洋諸島までも皆亡んで仕舞つた。歐羅巴勢力の壓迫は此の如くして東漸し、漸く支那に止まつたのである。日本に迄も及んだが其處で喰ひ止められて仕舞つた。それが十六世紀から十七世紀その頃であつた。その時分には歐羅巴に左したる亂はなかつたのだが、その以後に至つて內亂は蜂起し、盛なる王權は衰へて强國が諸方に競ひ起つて來た。爲に東洋の壓迫は一時中止になつたが、其間に西洋文明は非常なる發展をした。蒸氣力、印刷術が進み、石炭が採掘さるゝ、遂に蒸汽船が出來、通商貿易に一大革新を遂げた。日本はまだ古い文明を樂んで太平の夢を見て居る時に此新しい文明の光と接觸したんであるから若し國家が斯る文明の壓迫に堪ふる力を持たなければ破るゝんである、强力なる電氣に對して堪ふる力がなくば破るゝ、即ち千ポンドの受け堪ふる力に對して一萬ポンドの外から來る壓力があれば必ず破るゝんである、が幸にも日本には此力があつた、國運を維持して遂に今日に至つて居る、即ち今日の日本の新文明の源は初から世界的に現はれたんである。

三、明治大帝とウイルヘルム大帝との比較

此の如きは時勢が後れて居る丈に、必ずしも明治大帝を以て他の大帝以上だとはいはぬ。幾分時勢の然らしめた所もあるが才力は元と尺度を以て測るべからざるものである。けれども結果の上からいふと、我明治大帝は世界の十六大帝中最も好く顯はれたウイルヘルム一世帝以上である。日耳曼は古國である。其成立は頗る久しい、既に文明國であつた。そしてその文明を以て更に新文明を發揮したんである。其治むる日耳曼人は元の日耳曼人である。ウイルヘルム帝は此の日耳曼人を統一して能く日耳曼帝國を建設した迄である。そして歐羅巴の霸者として立ち威を一世に擅にしたんであるから、優れた天才には相違ないけれども元々其國は文明の國なんである。法律は何處からかといへば羅馬から來て居る。即ち[illegible]いへば矢張り希臘、羅馬のそれを傳へて來たんである。單に日耳曼帝國に於てのみでない。フレデリッキ大王時代は幼稚だとするも、當時の文明は既に佛蘭西から入つて居る。フレデリッキ自身が實に佛蘭西崇拜であつた。其淵源する所淺くはない。即ち日耳曼文明は一部は佛蘭西より、一部は英吉利より來て居る。更に其文明の源を究むれば遠く希臘、羅馬からして承け繼いで居るんである。決して忽然と起つたものでない。只それ等を能く統一した迄であるが、其處に又有らゆる學問、藝術が蔚然として新に競ひ起つた。一方には國力が非常に發展し、頻に强大なる陸海軍を作ると共に、又產業に大なる進步を見た。此の如くして新興の日耳曼文明の力は世界に利益を與へた點に於て實に偉大なりと謂つべきであるが由來する處は久しいのである。之に反して日本には左樣いふものがない。支那、朝鮮の文明が傳はつた丈の國、高々

ウイルヘルム一世の旅行・國民の歡迎なうくメーンツエル畫・伯林國民畫堂藏一

印度あたりの文明をいれた位の國である。斯樣いふ國が直に歐羅巴の文明に觸れてそれを吸收し、能く同化したのである。日本はそれ迄は封建政治の時代であつた。階級政治の時代であつた。是が忽焉として外國文明に接したのである。王權の統一からして更に立憲政治となるには、大抵二三世紀の年月を要するが普通であるのに、日本は僅に先帝御一代に於て、封建政治、階級政治から一躍立憲政治に移つたんである。短時日の間に此樣な事が出來たんである。產業に於ても左樣である。就中商業の如き諸强國を建つるの初に當つては、少數のものにのみ特典が與へられ、專賣が盛に行はれたもので、歐羅巴では種々の困難を經て漸く今日の產業組織が出來たんである。即ち專賣特許や其他の產業上の諸特權が廢れて、競爭の上に自由となつたのであるが、日本には政治の改革と共に又產業の改革が起り、等しく大なる發展を見た。即ち進步したる先進諸國と比較しては甚しき徑庭はあるけれど、幼稚ながらも、之を其三十年前の產業狀態と比べては、今日は殆んど隔世の感がある。

又敎育その者の如きも、歐羅巴と、殆んど同一である。縱しや國によつて多少の違があつても、何も日耳曼の敎育はウイルヘルム大帝から起つたといふのでなく、まだナポレオン戰爭の止まぬ中、日耳曼が猶ほ其馬蹄に蹂躪されて居る中に端を開いたんである。その元からあるものとは大なる違がないのである。之に反して日本では先帝が初めて開かせられたものだ、敎育は元より有つたけれども、儒敎的封建的であつた。その儒敎的封建的が一番宜いとされ居る處に、新に歐羅巴文明を輸入し、其制度文物を採用すると共に、直に其敎育をも亦入るゝ事としたんである。此樣な事が決して一朝一夕に出來るものでない。歐羅巴では最初からあつたものを改良したんである。日本では全然無いものを新に入れたんである。日本に無いものを歐羅巴から移植したんである。改良は比較的容易いが移植は六かしい。人は漸次に改良するといふ性質を持つて居るから改良は必然に出來る。が移植は六かしい、有るものを棄るといふ事は六かしい。是迄は原野である。雜草に掩はれた原野である。それを燒いて盡く雜草の種を除き其處へ新に好い植物を移植するんである。が兎角其植物は或は氣候の爲に、或は風雨の爲に、或は害蟲の爲に、若くは耕作其宜しきを得ざるが爲に生育は六かしい、移植した植物が能く其氣候の變化に應じ、風雨の襲來に堪え、蟲害其他の種々なる障碍をも排するといふ事は容易ならぬ事である。然るに日本では歐羅巴の希臘、羅馬から導き入れて改良を加へた文明を新に移植したんである。けれども此土地が膏腴で、耕し育てるに力を用ふるや十分に効果を現はし、能く長養する事が出來たんである。啻に敎育のみではない、產業の上にも軍隊の上にも、政治の上にも、將た法律の上にも皆左樣であつた。此の如く他の諸國の例を見れば普通二三世紀を要して纔に達し得た所のものを先帝御一代に於て爲し遂げられた、其事業の出來榮からいへば、世界の大天才を發揮した英主にも是れ以上のものは無いんである。何も我輩の偏見ではない。

公平なる觀察の上から、即ち偉大なる人物の傳記、史傳の上から比較していふも、斯る偉大なる功業を爲し遂げたものは無い。

四、明治大帝は無比の天才にあらせらる

此の如きは殆んど人力でない、人力でなければ即ち天才である。それには勿論日本の建國以來の歷史的要素が存在して居らうけれども、併し大帝の天授の御天才でなくては能く光を致すことは六かしい。又大帝を助け奉つた優れた政治家、軍人、學者もあつたであらう。即ち翼賛者に其人を得たでもあろうけれども、而かも大帝の御天才がなくば如何なる英雄も豪傑も能く力を用ふる事が出來ない。力あるも用ふる所がない、恰もウイルヘルム大帝があり、ビスマークもモルトケも力を伸べ得たと同じである。すれば我明治大帝は茲に數へらるゝ十六大帝と共に列して、先づ世界の傳記のレコードを破つた卓越した大天才と言はなくてはならぬ。是れ全く其御恩に浴し、多少左右に昵近し居たが爲に、感情的に、故らに誇張して、大帝の御盛德を稱贊するんではない。大體世界の傳記と比較研究をして見ると斯うなんである。此に於てか明治大帝の御傳記は幾ら出來ても出來足りんのである。大帝の御天才は書けば書く程書く可き事が多く發見さるゝんである。それ故千載の後に至つて其御傳記は彌增し多く現はるゝ事と思ふ。如何となれば僅か半世紀立たぬ中に大帝國の基礎を世界的に確立し、[illegible]益々其光輝を發揮し、大なる功業を事實の上に御現はしになつた方だからである。されば今、大帝は現し世を神去りましたとはいつても、其御盛德は、今後益々發展し行くべき大なる御遺業の上に存して千秋萬古炳焉たるものがある。他に此の如きの帝王が幾干あるであろうか、特に或る大帝の如き、世には大帝と稱せらるゝに拘らず、其盛業は多く烟の如く消えて居る。夫の秦の始皇は如何であるか、春秋諸國を併呑して威望一世を壓したに拘らず、僅に長城を殘したに止まる。ケーザルの遺業も、何處に在るか、亞歷山の遺業も何處に在るか、茫として尋ぬべき處がない。帖木兒の如きも亦左樣である。斯う見て來ると獨り我大帝の御盛德は此日本帝國の上に、將た廣く全世界の上に、年とともに光輝を生ずるんである。

大帝の御盛德は實に世界的に働くんである。此を以て決して日本人が普通の自尊心から、大帝を殆んど人間でない神樣であるといふ如く誇張して、世界の大帝に優れた方だと稱贊し奉るんでない。事實が存在し居るんである。而かも其存在や一時的でない。永久である。又單に東洋に屛息するんではない、進んで世界の文明を調和すべき大使命を持つて居るんである。すれば先帝の御盛德は其御遺業の上に年を經るに從つて益々現はるゝんである。此に於て先帝の御傳記は將來の史家に取つて甚だ興味ある事である。即ち千載の後に至るも史家に取つて最も興味の多いものと信ずる。

神武天皇

文學博士　久米邦武

一　總論

神武天皇は日本の天基創造の始祖にておはします。其御事跡は西僻薩摩の高千穗宮から筑紫に幸し、舟師を整へて海路から安藝、吉備、浪速を經て熊野に迂回し、是より險阻を跋渉し、大和の東南に進み入り、弟猾、磯城彥兩縣主を討滅ぼされ、此に饒速日命が歸順したにより、磐余縣に皇都、靈時を定めて磐余彥天皇と申し奉り、國民は肇國天皇と號け奉つた。是が帝紀のあらましの大綱である。併し是だけの事を只詳細に話したとて神武の神武たる偉大なる帝業の規模は迚も分らぬ。之を見出すには、當時に於ける日本全國の大勢から觀察を下して此事の遠因近因を研究し、而後の結果迄を綜合的に批評せなければならぬ。其れには名例律として日本といふ國號の意義を定むる事が先決問題である。

二　日本國號の意義

余は去る明治廿二年、史學會創立の初の、其雜誌の劈頭、第一號より『日本幅員沿革』といふ題で論じおいた。其發端に、人海の波動は常に靜定するものでない。日本の版圖は、初期には日本と支那海沿岸の土地とを聯合して居たが、次期に日本海對岸地の聯合となり、三期に至つて今の如くになつたと冒頭し、其初期の事は『古事記』の神代の終りに、神武天皇の御兄御毛沼命は常世國に座し、稻氷命は妣國の海原に座すとあるのが其證跡で、稻氷命は新良基《新羅》姓の祖と爲らせられた。常世國は日沒處といふ義で、日高見國の反對である云々と論じ置いた。神代を證引しなかつたのは、其頃まで余はまだ、神代を歴史としては考究しないで、神代の人皇に移る過渡の文のみを捉へたのである。此論は當時大學の諸先輩に破天荒といはれたが、其後學界の思想が進んで『かみなる語は凡て上に在ものを稱する、故に神代は上代を意味する』などゝの說をも爲すに至り、今は歴史を神代に及ぼし神話と

[illegible]

天皇の創業が日本國號の上に關係あることを仄かしたであらう。

日本といふ國號の起りに付ては、猶ほ迷雲が漂つて居る。日本の古名には色々あつて、大八洲ともいひ、豐葦原中國又は瑞穗國ともいひ或は和とも書き、倭とも書く。公式令には通常に大八洲と書き、外國に對してのみ日本と書く樣に定められて居る。是が從來迷の種になつてゐる。大八洲といふ義は『書記』『古事記』何れも諾冉二尊の生み給ひし八個の大洲から起るといつてあるけれども大國主命の歌に、「やしまくにとあるな」どを見れば「や」とは數多の意義にて、彌洲國といふは今の聯島といふが如く、韓郷の島も亦其中に含むと見ねばならぬ。全體紀、記の作者は皆天武天皇時代の人で、日本は既に新羅

神武天皇木像

[illegible]

る批評的の語も實を失つた事が多い。さりながら是れ迄の[illegible]は上古に近い時代の傳へとて一も二もなく信じた所から、往々に迷誤を生じ易いことを覺悟して見ねばならぬ。斯る譯で、日本なる名稱も國語で日の本といつたか、漢音で日本と讀んだか、或は大和の替字か古來より迷つて居る。舊き師說には「日本之號雖レ見二晉惠之時一、義理不レ明」とある、是は勿論日本と訓んだ說である。近代の言靈學者荷田東麿を始め本居宣長などは、「日本といふこと上古になし、後に外國に對する時の稱」との說を主張したのが、今日に至る迄國學者の思想を支配して居る。但し伴信友は神功皇后の時に新羅王が「東有二神國一謂二日本一」とあるを韓人の實錄として、日出に近い本國の意

と言たれど、猶は頑として動かない。先年『史學雜誌』に於て木村博士は舊説を確執し、星野博士は伴氏の説を申べ論戰の花が咲いたが、日本を言靈の國と誇りて古書の解釋を畢生の事業としてゐる人々は、國號に關しての議論は中々八釜しいけれど、遂に神武天皇の天基創造を政治思想を以て國家統治の局面より觀察し批評を下すには無益で、別に眼識を用ひなくてはならぬ。因て爰に余が曩に『日本幅員沿革』に於て論じた事に付て更に證明しやう。

日本を神國と言た新羅王よりも遙か以前に日本に歸化した新羅王子天日槍も「日本有二聖后一」と言たれば其考證は十分である。是以上の上古に證據はないかと迷へば際限ない。日韓はもと一國であつたといふ事丈は、最早や今は世間に信ぜられて居るであろう。日本といふ名を日高見國、常世國、海原と相並べて見よ、日高見とは日の高く見ゆる國との義で東國をいふたのである。常世は常夜とも書いて日沒處をいひ西の大陸である。海原は妣國の海原ともいひ、新羅國のこと、素戔烏命の妣伊弉冉尊の國をば斯く宣もふたので、出雲より北へ海原を渡り行く北の韓半島である。此の如く日高見、常世。海原。即ち東。西。北。三土の飾り語であつて、其中央を日本といふのである。東が日高見なれば中央の日本は、「日の下」といふ意義に解釋し、爰に三國聯合の日本が抽象されたであろふ。之を一に豐葦原中國ともいひ、其國より神に新嘗する稲を出したによつて瑞穗國ともいつた。此葦原の瑞穗國は出雲國に敵對して、[illegible]

[illegible]の御子孫を主權者に奉じ、高神皇産靈系統の神族達が輔相となつて、各縣邑の主長を統治されたに相違ない。而も出雲に於ては神皇産靈を御祖神といひ、常世の少彥名命を神皇産靈の少子といふ所などから推考すると、常世と海原とは神皇産靈の勢力が稍强かつたのでもあらふ。又國境のことは、當時は縣邑に凡て國君、縣主と道速振、荒夷と雜居して割據した時代であつたから、日本の內部と雖も猶且つ國縣の境は不定であつた。此を理解するには上代の政治は祭政一致であつたことを知らなくてはならぬ。

祭政一致といふは、國語にて政の字を「まつりごと」と讀むのが古き遺風を語るもので、上代では神を祭る事が政の大綱であつた。夫れは神を祭り其廣前に於て神慮を伺ひ、それによつて諸事を決斷したもので、之を稱して神宮、皇居の別なき時代といつた。神武天皇の時も其通であつたが、崇神天皇の變革にて神宮と皇居が分れたのである。故に上古に「みかど」と奉じた天神の御子は大祭主であつて、初めは一人を奉じて獨神といふたが、軈て男女の耦神を立つる例となつて諸冉二尊に至つたのである。耦神とは夫婦のことではない、兩元首を立てたので、幽冥の神を祭るを天上の事といひ、顯露の人事を裁決するを天下の事といつたが就中祭事を重んじたによつてまつりごとといふ語が稱へられたのである。此の如くみかどを、大祭主に奉じ、兩産靈家より民事と軍事とを分掌したるが輔相と將帥との職任であり、最高の神族は其職に當

謂高天原といふ天京は山陽の西部に在た歟と思ふ。其他に和とは大和の略字である。然るに記紀は倭を替字に用ひてあれど、倭韓とは支那から我西國と韓地とに與へた名稱で、和とは音も違ひ大和に關係は全然無いのである。山陰山陽の西部が葦原の中國であつた時代には大和をば日高見國と稱し諸尊以來此處から漸次に東國を經營あり、國境の發展した後は常陸を日高見と稱し、終には陸奧を日高見と稱した。此の如く我國勢が次第に東國に發展した天基は、神武天皇が諸尊の後を繼で大和に都を奠められてから後の事なるを、深く腦裡に印象して國史を觀ねばならぬ。

三　上代に於ける日本の統治

神武天皇の御兄二人は常世國と韓國とに君臨し、天皇は長兄五瀨命と東征の途に上つて大和に遷都あつたといへば、其處に上代から三國聯合の國勢が益々發展する形の自然に現るのであらふけれど、常世國は爾後に左して傳へもなき汎然たる國名であるから、是迄の學者には一寸も見當が附かず、本居などは只、常世は遼遠の義と說いた程であれば、余が茲に三國聯合の事をいふとも聽者はたとへ新知識ある人にても、さる痕跡が幽に書かれてある丈で、其統治の樣は如何ん、國境は如何とも、知ぬ空漠たる話として經意せぬかも知れぬ。勿論上代の書に其等の事が傳へられぬとしいへば和韓とても同樣である。故に今の進化した形式を以て二千年以前の上代

外國交通の事は初から別に世襲の家があつて、[illegible]は無關係であつた。其家を海神、山祇といひ、日本に於て最も強大なる藩國をなし、海神國は筑紫に在つて向ひ津の韓地へ往來する船舶を監督したに因て之を渡津見といひ、漢より大倭王として待遇しゐた山祇國は、日向の吾田にあつて對岸の吳越、及び常世國等へ往來する船舶を監督したに因て之を山津見といつた。其起りは餘程古いことゝ思はれ、或は大八洲に天神達を迎へて推奉したるものは是等の國主ではないかと疑はる。彼等が勢力範圍中に各地方の國君、縣主等、或は梟帥、土蜘などが酋長部落を爲して割據し其中に天神の直隷地も交り、天御中主の御裔も世を追うて蕃息したれば、之を各地の小祭主に派遣して祭事を統べたのを「わけ」といふ、「別」又は「和氣」と書くは皆これを指すのである。勿論韓地も亦同樣で、後漢書に、「縣邑立二一人一主レ祭二天神一謂二之天君一」とある、天君は即ち我國語の天神に當る、即ち「和氣」である。是にて上代に於ける三國聯合の統治及び國境のあらましは要領を得たであらふ。

四　神武天皇東征の遠因

是より神武天皇の東征となる其遠因を話そう。諸冉二尊の時に葦原中國に螢蠅の亂といつて騷亂の起つたのが先づ遠因を爲してゐる。是についても亦國史思想に迷の雲を掃はねばならぬ。其は諸冉二尊の夫婦婚媾(みとのまぐはひ)して大

八洲を生むとの神話は單に譬喩を設けた華語であるのを由來眞に受けて今にも猶ほ日本は冉尊の胎生國で、これを元始と思ふて居る人も多いけれど、元來胎生の國土の有らふ筈はない。土地成立の順序は今は地質學の地層世紀を標準である。昔しとても國土の胎生をいふたものは漢籍にもない。『法華經』にも四生を卵生、胎生、濕生、化生と說いてある。物理學の興らぬ時代にも胎生といへば生物のこと位は知て居た。さて諸冉二尊が國土產みとは、恰も大國主の國作りと同意味と文例を擧て迷雲の幕を撤すれば、諸冉二尊の舞臺は元始どころか、祭政一致の統治も千盤破(殘暴)荒振神代となり、既に變化を生じたるにより、二尊媾合して八洲を循行し「別」の小祭主を各地に据ゑられたのである。

然るに其後冉尊は本國の出雲に騷亂が發生して耦神を避るの已むを得ざるに至り、遂に絕妻の誓(ことどわたす)の餘儀なくせられ、是より螢火耀き蠅聲し岩根草木も言語と形容されてある如く諸處の山谿に草賊の騷擾が始まつたのである。冉尊の耦神を避る時に契約の辭とて、鎭火祭の祝詞にあるは「我夫の尊は上つ國を知ろしめせ、我は下つ國を知らむ」とありよつて冉尊は中國の主權を離れたが其治する下つ國とは出雲を本國として新羅並せて紀伊國あたりであつた。故に素戔烏尊は新羅を妣國といひ、冉尊は紀州熊野の有馬に葬られてある。更に其以前より、北越地方も出雲から拓かれて居れば亦下つ國に屬すると見るべきである。此絕妻誓より諸尊は獨神とならせられ、其後筑紫の[illegible][illegible]命を派遣された。因て畿內の大和から、河內、攝津、山背、近江等を鎭撫し終に伊勢の多度山に祭られ其子孫は四畿內及び近江の國造となり、其子の天御影命は三上山に祭られてゐる。東國は此時より拓植を進められたのであらう。其次の猶子一人は名を熊野櫲日命といへば紀國方面に向つたもので他の一人活津彥命は名のみ傳はつて居るが九州若しくは韓地の方面へ向つたものであらう。斯かる配置で大祭主の下に各方面の祭主が出來て、和氣の小祭主を統べた姿は猶ほ今の大元帥の下に元帥の如く、當時に於て最重大な者は祭事で之に各方面の祭主を配置されたのである。然るに出雲方面のみは初め冉尊、素尊より繼で大國主命と三代威德の優れた君主が出られたので、不可分の主權が自然に二つに行はるゝ形を現じた。それとて從來國家統治の組織は上國、下國の地互に錯綜して全然分離獨立するを許さぬ。各地には產靈家の部民もあり、海神、山祇の屬地や外交權の關係もある事にて、到底分立は出來ぬ事で、只時運の變化によつて、國家統一の政治をするに折合の甚だ困難な事情があり、諸冉二尊以來種々に

大和橿原神宮

の誓約にて天照大神と出雲の素盞烏尊を耦神に立られたれど、出雲には猶事情の許さぬものがあつて、素尊は耦神を辭し、妣國の海原を專ら治めんと請ふて、新羅王と成給うた。因て中國は天照大神の獨神を奉じ、高皇產靈尊之を輔佐して天下の事を治した。是が耦神の廢れて元首一人の主權に復した初である。諸尊は是より幽宮を路に作りて住せられ、大和國を浦安國、細戈千足國と號けて彼地より東國を經營せられ、終に近江の少宮に崩じた、今の多賀神社はそれである。思ふに此等の地をば上つ國と稱したものであらふ。此く諸尊が大和國の便要なるを相じて東國經營を始め給ひたるが、抑も日高見國の名の東に移る端にして、後に神武天皇東征の遠因を爲したのである。

扨て中國には高皇產靈尊が天照大神を相け、螢蠅の亂を鎭めて國家統一の業を圖り、其以前に天照大神と素尊と誓約にて定まつた五人の猶子より首位の忍穗耳尊を葦原中國の主に定め、進發せられたけれど、彼地の騷亂は俄に平定すべくもないので引返された。時に出雲には素尊の子大巳貴命が非常な聰明の智德を備へた英主にて、漸次に附近の騷亂を平定して神功を著はし、國作り大國主命と稱へられ、是が爲めに螢蠅は漸々に鎭定したが、然るに中國に於いては國家統一のため各方面に祭主を派遣することになし、彼の誓約の猶子より次位の天穗日命を出雲の方面に遣はされたけれども大國主の名望威德がまさに盛んであつた爲、天穗日は是[illegible]なり[illegible]甕槌命といふ智勇の偉人を選擧して使節となし、出雲に往て大國主命と談判をなさしめたれば、流石は大國主命で、今の形式を持續けては國家統一に宜しくない事を諒知した。是に於て凡て顯露の政務に關せる事は天穗日命に避渡して、大國主自分は專ら祭りに關する神事のみを掌る事となし、此に數代苦心を重ねたる國家統一の問題が全く解決するに至つたのである。是を高皇產靈尊が草木言語の時に天地を鎔造した神功といひ、出雲に於ては大國主命の國土避渡しといひ、共に千古の美談となつて居る。此統一の好果を見たる後、中國に於ては忍穗耳命の御子瓊々杵尊を元首に定めて、然るべき地に天京を定めて降臨ある事となつたが、大國主命も亦日本の將來に發展を圖るべきは東國に在るを識破し、子の事代主命を大和國に遣はして、建國の幸魂奇魂を三諸山に鎭め祭らせ大和を玉牆內國と號けた。是が神武天皇奠都の端緒となつたのである。

五 東征の近因

進んで神武天皇東征の近因を説かう。中國に於て既に天地鎔造の功を遂げられ、天孫瓊々杵尊を降臨せしむる天京の地を相定する事となり、其時猿田彦といふ策士の建言を用ひ、大山祇の本國なる吾田國と定まりて瓊々杵尊は彼地に降り給ふたから、山祇より地を獻じ、其處に高千穗宮を立て、此を中央政府と定められた。後の思想から見れば、高千穗宮は邊鄙である。九州に於てすら僻隅の地であるを適當と擇まれたのは何故歟とは、其時、瓊々杵尊の笠狹岬(今の加世田)、高千穗宮の港の形勝を見て、「此地は韓國に向ひ、朝日の直刺國、夕日の日照國にて、甚吉し」と詔せられた、此語にて明了する。韓國は海原の新羅をいひ、夕日の日照國とは此地の海を隔てた對岸の支那の東南海岸で常世國に當る。そして朝日の直刺國は東國である。此三國聯合の時代は海上を航すること意外に剛健にて、薩摩から西大陸へ船舶の交通頻繁であつたは勿論、內地に向つても土州、紀州、遠州の海を直航して往來しゐた。其氣象から自然に此詩的の華語を發せられたのである。近代の鎖國にて土州海を乘ることを禁ぜられ、海上を活動する勇氣の萎縮した中に、此等の文を解釋する言靈學者には迚も理解され樣はないけれど、海上に慣れた者は決して怪むまい。

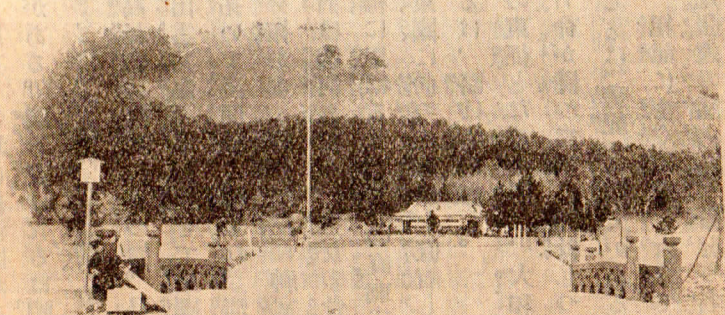
[illegible]海神が信濃を拓いた跡の地名のあること已に本居などの學者にも唱へられて居れど、却て高千穗宮のある山祇の事には是迄考及したものはないけれど、まさしく伊豆の三島社には大山祇が祭られ、淺間社は駿河にも甲斐にもあるが、大山祇と木花開邪姫が祭られてあり、共に大社である。又遠江國造は出雲の天穗日の子武夷鳥の子孫で夷鳥神社あるなどを綜合して考へれば、山祇家も出雲と共に東海地方を拓植した跡と見ねばならぬ。是のみならず、更に推究すべきは東國に於ける關跡である。是には是迄の學者に注意が脫てゐる。伊勢の鈴鹿關、美濃の不破關、越前の愛發關は大和京の時代には三關と稱して重要なる關であつたが其初建の時代は明でない。歷史的推究を用ふれば必ず伊弉諾尊の近江少宮に續いて天津彦根命が不破の南にある伊勢桑名郡の多度山に祭られあるより考ふれば、神代諸尊以前から己に此三關を設けて蝦夷を防がれたものであらう。蝦夷は其後までも伊賀より大和の南熊野山あたり迄も、酋長等が入込居ることは神武天皇に誅伐された事で明である。山陰、吉備にも荒夷が多く、其後漸然征服された程であれば、早く日高見の蝦夷境に是等の關所が設けられたものと判決するのである。次に駿河國の清見關は薩陀峠の險に據つて東を防いだもので、俗說に桓武天皇の時、蝦夷を防ぐ爲に設けられたといふは歷史材料としては採るに足らぬ。是も早い時代に蝦夷を防いだ處と思はるゝ。又

りて其腹に彦火々出見尊は生れ給ひ、彦火々出見命は又筑紫の海神宮に往いて豐玉彦が女豐玉姬を娶り其腹に鸕鷀草葺不合尊は生れ給うたが、葺不合尊も亦母の妹玉依姬を娶つて其腹に神武天皇の御兄弟四人生れ給ひ、そして神武天皇も亦吾田君の女吾平津姬を娶り給うた。此高千穗宮に於ける三四代の間は、海神、山祇が迭に外戚家となつて統治の稜威を助け奉つた。此間に年數約百餘年を經過したであらう。最初に此地の韓國に向ひ朝日直刺し夕日の日照ると詔し、奠都の地を相せられた實功の如何は、紀記には見えぬけれども、海神は筑紫に大津を開き、其東には出雲の宗像港もあり、常に津島より對岸なる新羅其他の諸韓國に向ふて發展を力めて居た。國際の事は外國史を年代の比較を以て究めなければならぬ。書紀の紀年に敷衍のあるを控除して之を漢韓の歷史に比較すれば、神武天皇は漢成帝の頃に當る。すれば漢武帝が平壤に樂浪郡を置いてから、倭より彼に通ずるもの三十餘國あり、大倭王といふが海神に適當する、彼樂浪に亭館を設けて我各縣よりの交通を管轄し、韓地には政務にも干涉し居た樣である。韓國に向ふの語は略ぼ是にて其歷史を推想されば、夕日の日照る常世國、及び吳越各地への交通は山祇の初から監督する勢圈內で今は天孫を迎へたれば、南島から琉球を傳へて常世國の方面に向つて往復し、盛んに交通活動をなしたと判定せねばならぬ。

[illegible]元は清見關に次で建たものと認むるのである。其後更に東に進み、陸奧と關東との境に白河關があり、更に進んでは菊多關(勿來關)がある。關を設けたるは蝦夷の防禦と認められてゐる。斯くなるには帝畿內の三關か駿河相模に進み、遂に磐城に至つて日高見國は陸奧に移つた。是を按ずれば高千穗時代から山祇が出雲其他と手を合せて東國の經營をし、遠江から駿河甲斐を拓いて淺間社は建られ、清見關を撤して足柄關になり、關東を拓かるゝ時分が正に神武天皇の時代と信ずるのである。今猶ほ駿河あたりの男女の骨相氣質等が九州人に似た所のある樣に思はるゝ。朝日の直刺す國との詔意を承けて、高千穗三代東國に向つて舟船を直航し、經營發展を力められた跡と認むるは、略ぼ右の如し。

神武天皇の東征となる主因は、大和國は青山の四周する美地にて饒速日命が降つて正に經營しつゝあるにより、彼地に赴き都を遷すべしとは『書紀』に明文があるが饒速日命の彼地に赴かれた事は、紀記に全く徵迹を失つて、只『舊事記』に瓊々杵尊の同母兄尾張連の祖火明命を一名饒速日とあるは從來の學者も僞書として信用を置ずにあれど或は是のみは何か據のある說かと思ふ。迚も角も火明命は瓊々杵尊の兄とも彥火々出見尊の兄とも兩說あれど、前說がより多く信ぜられて居る。其子の天香語山命が尾張連の祖であることは疑ひない

此人が尾張國に降つて東國を經營したるは高千穗宮と同時代であつて、東國に向ひ、鈴鹿關より尾張に宮を構へ、更に東に向つて發展されたといふ事も疑もない。然るに又天神の表物を持て饒速日命が河內國に現れ、それを大和國で登美の長髓彥が順奉して妹なる鳥見屋姬を娶せたるは、恰も瓊々杵尊の降臨に吾田君長狹が女を娶はせたると同樣の事で、饒速日命は東國經營の爲に向けられる天神の子に相違なし。其子孫は物部氏となり大勢力を得た名家なれど、父祖の名の少しも傳はらぬのは、之を言ふこと嫌つたものと考へらるゝ。『舊事記』に在る如く尾張連と同じく火明命の子孫なれど、彼の家の分家といふを書き消したものであらう。若し饒速日を火明命の子とすれば長髓彥の妹を娶つて、產んだ可美眞手が神武天皇に歸順した時代が甚しく齟齬すれど、此頃の名は家名を稱する事もある故に左して拘るに足らぬ。今述べた如く、吾田君長狹は瓊々杵尊の舅で、一名鹽土翁といひ頗る有爲の計略ある人で、外孫の彥火々出見尊が海神を本國に紹介したるも此人の計ひである。其後東國の遠江、駿河邊を開いたのも亦此人の經略と思はるゝ。其活動の際に大和へ饒速日命は降つた。因て鹽土翁は近き將來に日本の首府たるべき處は大和と、豫て葺不合尊に遺言し置た。其意志を遂行する時期と成つたによつて、五瀨命と共に神武天皇の東征となる。これが最も近い原因である。

——次號完結——

大和三笠山

年中無休刊

北日本の要衝に起ち二百萬縣民を土臺とし信越、岩羽を勢圏に控え不斷の活動を以て四方の信用を集中し優に輿論の先驅たる任務を果し新式の輪轉機に依て實益と趣味を供給するは即ち本紙

每號六頁

發行所 新潟市東仲通壹番町 新潟每日新聞社

電話五壹〇番・八参八番・振替貯金口座東京八〇四〇番

天下獨步の作文自修書

文學博士 芳賀矢一先生
代水 杉谷虎藏先生 合編

作文講話及文範

の五大特色

新聞雜誌の好評は全天下に響鳴し讀書界作文界の讃辭は最高潮に達せり、本書が斯界に濶歩して此の如く無限に歡迎せらる、は何故ぞ。文は社交の要具にしてその巧拙は處世の利害。生活の幸不幸を左右す。現代必要を感ぜらる、一般の自覺に投じ最も剴切に編纂せられたる其一也。

純文學并教育界及一般社會を合一し美文普通文の境界を撤去し普通人士の常識を本位として說を立てたること其二也。

生きたる實用文と强く美しき時文とを作るの腹を養ひ立案結構の呼吸を會得し死活細大の技術に熟達せしむるに嶄新快直の方法を用ひたると其三也。

古今東西の作文法、修辭、雄辯術、文則及び大家の實地經驗よりその精髓を抽きて原則を示し、古文今文のあらゆる寶庫を開きて代表的各樣各變化の模範文を陳列詳釋せることその四なり。

苦心獨創の考案を以て字書文法書よりも遙に簡捷多用なる七種の作文便覧を添へ以て實地の用に資したること其五也。

此の五大特色は在來のあらゆる作文書に比類を絶したる所作文自習書中天下獨步の名實亦此に在り、今や訂正十版を賣盡さんとして優先の注文を待つ

好評忽十版

菊版全二冊千四百頁
定價金參圓
送料内地廿錢 臺樺四十錢

發兌元 合資會社 冨山房
東京神田 (振替口座五〇一一番)

最も壯烈無比なる維新史の魁

瑞山會編纂

維新土佐勤王史

二十年間經營の大編纂・營利を目的とせざる國家的大出版

菊判美本 千四百餘頁 正價金五圓

挿圖 志士眞蹟遺影等天下の珍品五十葉五十七圖

瑞山會は土佐勤王黨の首領武市瑞山、坂本龍馬以下八十四人の殉難志士記念の爲、遺友土方田中兩伯を始め、樞密顧問官、貴族院議員等四十氏の組織に成り、既に三十餘年間毎月相會して當時の壯圖を談論し、史實の確否を研鑽するの會也。維新史といへば前半は薩長の軋轢が主となり、中間は所謂公武合體説にて幕府小康を得、後半は薩長連合して幕府を倒すの二大時期に分る。而して此維新土佐勤王史は名の示すが如くなれども、決して一地方一藩の歷史に非ず、土佐を脱藩したる勤王志士の經歷を骨子とし、薩長連合の第一期第二期に互りて周圍の事情を詳述したる活歷史にして長の久坂、高杉、木戸、薩の西郷、大久保を始め各藩志士の人物事蹟卷中に躍動す。夫の吉村寅太郎が大和義擧の首唱たり坂本龍馬等が薩長連合を企圖したる顚末を明にし、勤王黨の首領瑞山が脱藩を肯せず、獄に投ぜられて割腹したる事より、今の板垣伯、故後藤伯等が當時土藩の大監察として瑞山を糺問したる始末等を瑞山の日記、秘密通信書類意外なる人の加入せる血判の盟約狀名簿等に由りて編述せるものにて是實に本書獨特の史料なりとす。而もそを忌憚なく暴露直筆せるを以て、從來世に知られざる薩長の裏面まで鏡に懸けて見るが如し。此書一たび公にせられなば必ずや天下を嚓驚せしめ、史家をして後へに瞠若たらしむる所あるべし。蓋し大正初年の一大快著也

實費特價 金參圓五拾錢

送料 內地二十四錢 臺灣、樺太、四十五錢 朝鮮支那五十五錢

東京神田 冨山房（振替五一〇）

國民擧つて精讀せよ

支那は世界の大寶庫也

▲遽かに需要を喚起し來れる

陸軍大尉 山縣初男先生著

大島大將 福島都督 內田子爵 後藤男爵 星野少將閣下題序

最新支那通志

▲菊判全一册六百餘頁 定價金貳圓 送料 內地十二錢、朝鮮、支那三十五錢、臺灣、樺太、卅錢

支那問題の解決は現代支那に精通するにあり。東洋の富源。世界の大市場。

隣邦なる邦人の最も注目研究の必要ある今日より急なるはなし。素より四千年來の古國、文献乏しからざれども、多くは漢學者流の迂遠に非ざれば十數年前の記述若くは一地方誌のみ。活きたる支那の研究は本書實に其の嚆矢たらずんばあらず。著者在留前後十年其間力を支那研究に委ね、精確なる實地踏査を積み、全支那の疆土を網羅して首尾貫通中外照覈地文地理上の記述明快彰著、藩鎮邊境を包括して厖然たる支那全史を構成せり。而して偏精偏略の嫌なく冷静に布置安排の妙を極む。本書出でて始めて此老大國は科學的に解析剖判せられたりと謂ふべし。中華民國の前途に着眼する士は實業、政事、軍事の各方面に亙りて、本書の精讀は必ず無限の資益を齎すを疑はざる也。

發行所 東京神田（振替五〇一番） 合資會社 冨山房 賣捌所 全國書林

フィリップ王及アレクサンドル大王を刻せる貨幣
(1)金貨(2)銀貨フィリップ王を刻す(3)金貨(4)銀貨アレクサンドル
大王を刻す(5)アレクサンドル大王を刻せるリシマコスの貨幣

アレクサンドル大王

文科大學助教授　村川堅固

一　千古の疑問

人間一生の事、棺を覆ふて論始めて定まるといふ。然も千古の英傑アレクサンドル大王バビロンに瞑して茲に二千二百有餘年。其性格は縱橫に論ぜられ、其功業は幾多史家の評隲を經たれども、今に至つて猶歸著する所を見ず。借問す。大王は畢竟何人ぞや。

希臘史を以て鳴れるグロートは大王の軍人として不世出の天才たるを許せり。軍人としては彼の出現は實に歷史上に一新時代を劃するものにして、唯に邁進冒險の勇氣、不撓不折の活動、困難、疲憊の忍耐等兵士的資質に於て、彼は卓出するのみにあらず。其將才に於て遙に時人の水平線を拔けり。其軍略的の統合、其征戰に關する遠大の計畫、其新困難に對する不斷の先見、其如何なる險惡の地方をも問はざる神速なる行動の如き古代史に其比を見ざる所。是れ實にグロートが、大王の軍才を稱するの言也。然れども彼は統治者としての大王は尊敬に價せざるものとして曰く『軍人としてのアレクサンドルの超絕せる價値以外に、往々帝國統治上より大に之を推賞し人類の進步に最も有益なる企圖を有せりとなすものあ

り。然れども予は之に贊成すべき理由を見ざるなり。予をして、大王の將來を敢て推測せしめば、想ふに侵略又侵略征服又征服、人類の棲息する限り之を侵略征服せずんば止まざらんのみ。世界の征服は即ち彼の精神を支配する慾望にして、當時地理的智識の幼稚なるが爲め其事は一層容易なりと信ぜられしなり。彼は其死する時、南方アラビヤを征せんとせり。其西方、阿弗利加、歐羅巴の民族を征して、ヘラクレスの柱(ジブラルタル海峽)に至るの計を抱きしことは、そのクラテルスに與へたる覺書によりて明なり。(中略)彼は畢生土地を征服し、知事を任命し、貢物を集めしめ遠隔の地に起るべき叛亂を鎭壓するに忙しくして、假りに其志望ありとするも、平和安泰に適する改善をなすの遑は到底之なかりしならん』と。

同じく希臘史を以て知られたるサールウォールは、記して大王の死に至りて則ち曰く『かくて地球の生める最も偉大なる子は地球より去れり。其偉大なるは就中其身に存するものの爲にして其功業の大なるが爲にあらず。其希望の大規模にして、刻苦之を遂行するに熱心なるのみならず、其大望の取れる經路に於て、又其大望を高尙ならしめ純潔ならしめたる間接の目的に於て偉大なり。かくて彼の大望は殆んど人類の抱き得る最も高尙なるものと一致し來れり。即ち智識の要求及善の愛是なり。……實に彼の帝國は亞細亞に於て建設せられたる大帝國中其臣民に進步的改善の望を開きたる最初の者にして、亦實に道德上、智力上の進步の要素を包含せる最初のものなりしなり』と。

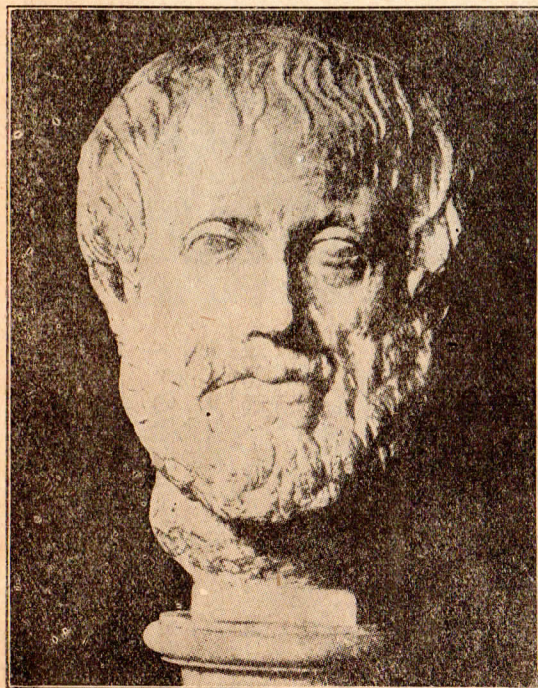
其他大王の事業を極力賞讃するものに、ミットフォードあり、ウィリヤムスあり、ドロイゼンあり。之を比較的輕視し、若くは其動機を貶するものにニーブールあり、セント・クロアあり。紛々擾々吾人は一々之を擧ぐるの煩に堪へず。あゝ千古の疑問アレクサンドル大王、吾人はまさに如何にか大王を觀んとする。

アレクサンドル大王胸像
——巴里ルーヴル宮美術館藏——

二　即位當時の大王の活動

大王畢生の事業中、最も赫々として青史を照すもの、其亞細亞大遠征及大帝國建設に若くはなし。然れども吾人は寧ろ即位當時の大王に於て、其英資を觀んと欲するものなり。

即位當時の大王を觀んとせば、即ち當時のマケドニヤと希臘との關係を觀ざるべからず。大王の父フィリップ英邁の資を以て、大に富國强兵の實を擧げ、希臘の文物を輸入して鋭意國家の開明を圖り、當時希臘諸國の攻爭呑噬を是事として其國力相次いで疲弊するに乘じ、遂にアンフィリチオニヤに關する所謂神聖戰役に於て希臘の內事に干涉するの端緒を得漸次地步を希臘に占め、ケーロネヤの戰、アテネ、テーベの聯合軍を擊破し、遂にコリントスの會盟を以て、希臘諸市をして、自己を推して征波斯軍の大元帥たらしめ、之が實行の準備に鞅掌せるとき不幸にして、一朝刺客の兇手に斃る。時に紀元前三百三十六年にして、大王年甫めて二十。

マケドニヤは希臘の北方に在りて、希臘人は常に視て蕃族の國となしたる所、フィリップの時に至りて、俄に隆興し、其武力を以て遂に希臘の霸權を掌握せり。希臘は已むを得ず之に屈服するも其之を惡むの念甚だ强きは寧ろ當然のみ。當時希臘の士氣は其盛時に比すれば衰へたりと雖も、猶スパルタは彼のコリントス會盟に使節を出すを肯んせず。アテネには有名なるデモステネス得意の雄辯を揮つて、激越なるマケドニヤ攻擊の演說をなし、以て國民の敵愾心を鼓舞するあり、[illegible]に於て、フィリップ一朝刺客の手に斃る。希臘諸市の歡喜知るべきのみ。況んや王の嗣子アレクサンドルは二十歳の弱冠なるをや。此際に於ける大王の困難なる位置は、實に其將來を卜すべき試金石たりしと謂ふべし。

然れども大王の困難は其對希臘策に於てのみにあらず。飜つて、マケドニヤの朝廷を見るときは、其內訌によりて、大王の地位は頗る不安なりき。大王の母をオリンピヤスといへり。エピルス王の妹なり。父王フィリップ此を娶りて、大王と其妹クレオパトラとを生めり。然れどもオリンピヤス性殺伐にして嫉妬心深きを以て、後フィリップは之を疎んじ、別にクレオパトラを娶ん。其結婚の饗宴方に酣なるときクレオ

アレクサンドル大王の師アリストートル頭像

アレクサンドル大王の戰爭（ポムペイ市發堀のモザイク畫）

パトラの伯父アッタルス杯を擧げて、新婚を祝し、且フィリップと其新妃との間に早くマケドニヤの繼嗣の生れんことを祈る、時に大王席上に在りて之を聽き激怒起つて叫ぶらく、『咄、惡漢、爾敢て予を以て私生兒となすか』と。酒盃を取つて、之をアッタルスに投げ付く。父王之を見て其暴行を怒り、劍を拔いて、大王を斬らんとせしも醉步蹣跚として、床上に倒れ、大王僅に斬らるゝことを免かる。此事ありて後、父王とオリンピヤスとの間益冷かに、大王と父王との間亦常に相和せず。大王母を擁して難をエピルスに避く。後コリント人ダマッス、フィリップに告ぐるに早く家庭の內訌を修むるの必要を以てせしかば、フィリップ之に從ひ、大王を喚び迎へて、一時之と和せり。然れども其平和は幾くもなく破れ

フィリップは大王の[illegible]

—ナポリ博物館藏—

[illegible]

[illegible]レオパトラが男子を擧ぐるに及び、アッタルス大にフィリップに寵せられ、其一族皆重用せられたり。之に於てマケドニヤの朝廷にはオリンピヤス黨とクレオパトラ黨と相反目軋轢し然して後者の勢力は優に前者を凌ぐに至れり。此間に於てフィリップ一朝刺客の手に斃る。大王固より繼承の權ありと雖も、其玉座を覆さんとする者、多く宮廷の內に潛めり。其地位の不安亦甚しと謂ふべし。則ち內憂の此の如きに加ふるに、外は南希臘諸市の離反と、北トラキヤ方面の蠻族の崛起とを以てす。二十歲の大王は此內憂と外患とを一時に艾除するの手腕を要せり。

大王天禀の英資と、當時希臘第一の大哲學者アリストートルより受けたる訓育と、皇儲として從事せる數回の實戰の閱歷と

は、一個の青年新王をして、優にフィリップの後繼者たるに恥ぢざるの行動に出でしめたり。大王の此難局に處せし迅雷耳を掩ふに遑あらざる神速の活動は、實に大王の大王たる所以にして、各方面に一時に起れる反對黨の聯絡未だ成らざるに乘じ、先づ大軍を以て希臘に出動し、テッサリヤとの同盟を溫め、テルモピレに至りて、アンフィクチオニヤをして、自ら征波斯軍の元帥たるを承認せしめ、コリントスに至りて、父王が希臘諸國と締結せる盟約を新にして、先づ南方を抑へ、尋で北方蠻族に對する帝國の位置を確定せん爲、トラキヤ民族と戰ひつゝ、バルカン山脈を超えて、ドナウ河畔に至り、蠻族をして盡く平和を請はしめたり。

大王の深く北地に侵入するや、其北方に戰敗せりとの訛傳は希臘各地に流傳せり。中には大王既に蠻地に敗死せりとさへ傳へられたるを以て、一旦大王の威に異服せる希臘諸市は、元氣を回復して反抗を試みんとす。波斯は之を利用して、希臘諸市に贈賄して大王を牽制せんとせり。テーベ市は既に起つて、市を守備せるマケドニヤ兵を圍めり。南希臘の諸市、亦援をテーベに出せり。當時既に北方を平定せる大王は急遽鋒を南に轉じて、テーベに向ひ、之を膺懲すること甚だ苛酷なりき。

ペルシア戰爭の浮影（コンスタンチノープル府所在アレクサンドル大王石棺？の側面）

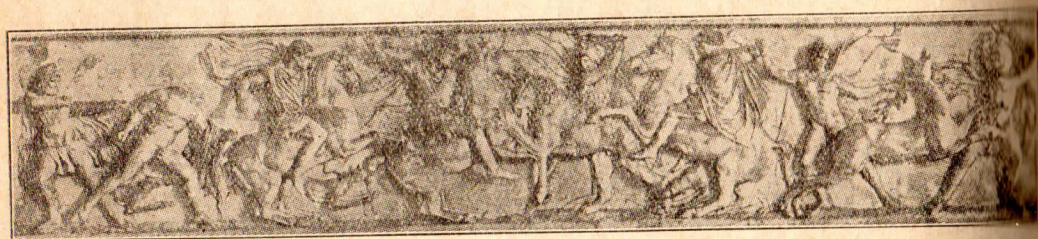
然れども自餘の諸市に對しては、則ち勉めて寬典を施し、以て諸市の敵愾心を減殺せり。かくて一齊に燃え立てる希臘の反抗の焰は忽ち揉み消されて、諸市は征波斯大元帥たる大王の爲に義勇兵を供給するに至れり。此間に於ける大王の處置何ぞ夫れ老巧なる。彼の千古史乘を照らす大王の亞細亞遠征を以てせざるも、吾人は、大王の不世出の英傑たることを其即位當時に於て既に認めんとするは、是が爲也。

三　亞細亞遠征―其動機―其成功の原因―其世界史上の意義

紀元前三百三十四年大王愈〻波斯遠征の途に上る。其率ゆる所の軍歩兵三萬、騎兵約四千五百に過ぎず。然して其將さに征せんとする所の波斯は、其面積マケドニヤに五十倍せり。大王の此擧一見無謀に似ずや。然も一たびグラニクス河畔に勝つや、小亞細亞は殆んど大王に風靡し、イッススに勝つやシリヤ埃及の諸市概ね城門を開きて大王を歡迎し、ガウガメラの一戰即ち波斯大帝國滅びて莫し。夫れ小國を以て大國を伐つの例史上に乏しからざるも、大王の此遠征の如く、其成功の快速

なるもの[illegible]何かある。借問す。大王遠征の動機[illegible]邊に存せし。遠征成功の原因將た那邊に在りし。波斯大遠征の計畫は言ふまでもなく大王の創むる所にあらずして、父王フィリップ之を起し、其實行準備中不幸にして暗殺せられたるを以て、其遺圖を繼紹するものゝ也。大王は則ち父王の遺圖を繼紹せるもの也。然らば父王は何の爲に此大事業を起したるや。吾人は之を以て、彼が希臘に對する霸權を維持するの政策となさんとす。夫れ波斯は希臘歷世の仇敵にして、水火相容れざるの國也。希臘の爲に能く讎を波斯に復するものあらば、希臘人の之を德として懷柔せんこと明なり。マケドニヤ原より波斯に深怨あるに非ずして、フィリップが此遠征を企てたる所以は、畢竟此一擧によりて希臘人の復讎心を滿足せしめ、彼等をして永くマケドニヤ王朝の威德を仰がしめ、マケドニヤの希臘に於ける勢力の基礎を確立するに在りし也。大王の父王の遺圖を繼紹するに及んでは、即ち其亞細亞遠征は如上對希臘政策以外更に極めて重大なる新意義を加へたり。他なし、大王は當時の世界―希臘、マケドニヤに知られたる―に於て最大の版圖を有し、巨人の如く四圍の諸國に雄視せる波斯老大帝國を仆して、世界の統治權を掌握し、兼て東西の民族を渾一し、東西の文化を融合せる

大王獅子獵の浮影（大王石棺の側面）

世界[illegible]的の大事業を以て、其[illegible]希臘神話中の半神的英雄と等しからしめんと欲せし也。其事の可能不可能は今暫く之を措く。其着眼の高遠にして、其企畫の雄大なる、天下復此の如きものあらんや。大王遠征の效果如何に至りては、史家の所見區々たりと雖も、既に其企畫其者に於て、吾人は大王が所謂大王中の大王たる所以を見ずんばあらず。

大王の遠征は一見無謀に似て、實は無謀にあらず。蓋し紀元前四世紀の波斯は復ダリウス一世當時の波斯にあらずして、其形骸こそ巨人のそれの如く大なれ。幾多の病毒は既に膏肓に浸潤して之を腐蝕せしめたり。其宮廷は陰謀の府となり、宦官婦女權を弄して、恣に皇帝を廢立し、ダリウスが嘗て其征服せる諸國を統御せんが爲に設けたる中央集權の制度は崩壞して、地方官は其地位を子孫に世襲せしめ、宛然たる封建諸侯の如く、常に機を見て獨立せんとし、被征服諸民族も亦宮廷の内訌に乘じて、其獨立を回復せんとし、叛亂相次ぎ中央政府は之が鎭壓に惟れ日も足らざる也。之を譬ふれば、波斯は害蟲の爲に精髓既に腐朽せる巨樹の如し。一陣の颶風は、忽ち之を倒すを得べけん也。這般波斯の弱點は夙に希臘人、マケドニヤ人に知られたり。特に紀元前第五世紀の劈頭、波

斯王弟キルス叛し、希臘傭兵壹萬を隨へてメソポタミヤに入るや、希臘史家クセノフォン亦部將として從軍す。キルス、クナクサの一戰に歿するや、希臘軍萬難を凌ぎ、アルメニヤの山地を經て歸國す。所謂『一萬の退軍』是也。是行希臘人は親しく波斯の國情を其核心に至りて目擊するの機會を得、クセノフォンは名著『アナバシス』を以て、之を國民に傳へたり。即ち波斯の弱點歷々として眼中にあり。英傑アレクサンドルの胸中、一擧之を打破するの成算ありしは疑ふを須ゐず、即ち其亞細亞遠征は決して之を無謀と謂ふべからざる也。

大王の成功を容易ならしめたる有力なる他の一原因は、ヘレニズムの東漸是なり。波斯國力の漸く陵夷するや。其民衆の多きを以てして、自國の存立を確保する能はず。多く希臘人を招いて國防に當らしめたり。第四世紀の波斯の諸戰役に於て、軍の指揮者は多くは希臘の兵略家なりし也。例へばアテネの軍略家イフィクラテスの如き、チモフォスの如き、又アレクサンドル大王の時に於ては、ローヅスより出でたるメントル、メムノス兄弟の如き其錚々たる者也。是等希臘の兵略家は啻に波斯の中央政府に雇聘せられたるのみならず、中央政府より離叛せんとする地方の豪族も亦無上の便宜として之を用ゐたる也。されば希臘人の波斯特に其西方小亞細亞に於ける、恰も衰弱後の西羅馬帝國に於けるゲルマニに類するものありき。かくの如く希臘傭兵及軍略家の多く東方波斯領内に入ると共に、希臘文明が之と共に東方に流入するは自然の勢なりき。故に大王の東征に先ちて、希臘の文明は既に小亞細亞地方を征服せり。則ち知る將來東西洋を包含する大帝國の地盤は既に大王以前に成れることを。既に四世紀の初に方りて、キプルスの王エウアゴラスの半開の土人とフェニキヤ人希臘人とを混じて之に希臘の文物を輸入し、以て自己の勢力を伸張せるあり。小亞細亞のカリヤの王マウソルスも亦新に首府をハリカルナスに建て、盛に希臘文物を輸入せり。されば東西文化融合の企畫は大王以前全く是なきにあらず、唯規模の大小に至りては、到底大王のそれと日を同うして語るに足らざるのみ。大王の大帝國建設を以て奇蹟に類すとなすものは、大王が此地盤を巧に利用せしことを想はざるものなり。大王以前東西洋の文明は、既に政治上の國境を踰えて互に融和せんとせり。但し太古より成立せる東西洋の分界を打破して、一大國家を建設する豈容易の業ならんや。然して大王は則ち其活眼を以て能く當時の大勢潮流を達觀し・善く之に掉して、其目的を成すの道を求めたり。大王の事業は東西文明の融合的傾向を前提して、始めて之を理解するを得べきも、之が爲に大王の大王たる所以に於て少しも減損する所なかるべき也。

波斯最後の王ダリウス三世は暗庸怯懦にして、大國君主の器に非ず。當時波斯の國力衰へたりと雖も、其君主にして英明勇武善く其臣民を利用するときは、大王如何に天稟の武略を以て之に臨むも、老大帝國を仆すこと、豈彼が如く容易なるを得んや。恨むらくはダリウスの暗愚なる、大王小亞細亞に侵入するの初めに方りて、[illegible]ゲー海の海上權を制することを爲さず、グラニクスの一戰に忽ち小亞細亞を失ひ、イッススの一戰には、王先づ戰場より遁れて全軍崩壞す、ガウガメラの戰場に於ても、遁走の例を示したるはダリウスなりき。ダリウス遂に國都を棄てゝ東に走り、叛臣ベススの爲に弑せられ、波斯大帝國を擧げて、大王の有に歸せしむ。之を大王の側より見るときは、かくの如き暗主が老朽せる波斯に君臨せしは、其遠征の成功を速かならしむる、天與の好運と謂ふべき也。

波斯既に滅びて、大王が出師の名としたる希臘人の爲めの復讐の目的は達せられたり。然れども大王は啻に希臘人の代表者たるを以て滿足せず、自らダリウスの後繼者を以て任じ波斯の『大王』として、其臣民に臨めるのみならず。更に一步を進めて印度の遠征を起せり。此遠征たるや、其新領土の保全の爲に何等の必要あるに非ず。即ち波斯遠征と、印度遠征とは、其性質全く異れるものなり。其動機は蓋し、印度の地に關しては、其眞相從來希臘人の間に明ならず、種々の荒唐不稽の說行はれ、一個の不可思議國と思惟せられたるを以て大王は此遠征を以て、希臘神話中のヘルクレスの冒險に比し是に由つて其名を不朽にせんと欲せしならむ。グロートの論ずるが如く大王の征服慾の無限にして、東方征服の後は更に轉じて、西方阿弗利加、歐羅巴兩大陸をも征するの目的なりしやは、今日より之を斷言すること難し。然れども印度は當時希臘人の信ずる所に據れば即ち地球最東に位せる國なるを以て、之を極むるときは、即ち亞細亞の東境を極むる所以なり、若し[illegible]んせざることなくんば、大王は固より進んで恒河畔に侵入せしならむ。若し此事あらんか大王の遠征は、世界文化史上一層重大の意識を有するに至りしこと疑を容れざる也。

大王東方遠征の世界文化史上に於ける意義如何に至りては多く史家の論議を經たり。吾人は今一々之を紹介するの遑を有せず。唯大王の遠征が希臘文化の東漸の爲に、大道を開通せるの一事に至りては、蔽ふべからざる事實なり、近時東洋古代文物の研鑽精緻を加ふるに從ひ、希臘文化、特に其美術科學が東洋諸國に與へたる影響の大なること愈〻顯著也。史家グロートの如き希臘文化の東方に普及せしは、則ち大王の歿後にして、其功は之を所謂ヂャドキ（大王の諸將）及其子孫に歸せざるべからずと論ずるも、大王が其遠征によりて波斯大帝國を仆すことなくんば、希臘文物東漸の大通路は如何にして開くべき。大王の世界文化史上に於ける大勳績遂に沒すべからざる也。

四　大王の成功と失敗

紀元前三百二十三年大王熱を病んでバビロンに瞑す。歲三十三。二十にしてマケドニヤ王位に登りてより茲に至る僅に十三ケ年。其間に大王の成せる驚天動地の偉業を回顧すれば大王は實に史上稀覯の大成功者たるに似たり。然り戰ひて必ず勝ち、攻めて必ず取れる大王は實に大成功者たりき。然れども大王の理想が如何なる程度まで其短き生涯の間に實現せ

られしかを靜かに觀察すれば、大王の一生には失敗の一面あることを見ずんばあらず。

大王既に波斯を滅ぼして、深く其北境に侵入し、猶己れに反抗する諸族を征服し、マラカンダに駐まり、一夕盛宴を張る。大王の股肱クリッスを始め、諸將皆席に連る。皆痛飮して氣頗る昂る。諸將の中大王に媚ぶる者口を極めて、大王の成功を賞讃し、或は其超人的偉業は即ち大王が神人たるの證なりと言ひ、或は大王を半神的英雄ヘラクレスの上に置かんとす。大王得意の極、傲然として自己の功業を誇り、父王晩年の勝利も以て比するに足らずとなす。父王以來の老將等之を聽いて甚だ快からず。然も大王を憚りて、一人の之に反抗するものなかりしが、クリッス遂に忍ぶ能はず、起つて曰く『今や諸君アレクサンドルを揚げんが爲に、太古の英雄を貶するは何たる不敬ぞや。フィリップの功業を以て、アレクサンドルの下に置かんとするは不當也。現王の功業如何に赫奕たるも、是れ決して彼一人の事業にあらず。實に彼が父王より讓られたるマケドニャ軍隊の力によりて成せるものならずや。フィリップに至りては、自ら國家を整理し、軍隊を編成せり。彼の勝利は實に彼自身の勝利なりき。今アレクサンドルはフィリップの老鍊なる兵士を以て其勝利を得たるに、動もすれば之を輕蔑せんとするは何事ぞや』と。大王此言を聽きて赫怒し、諸將頻りにクリッスの說を抑ふ。然れどもクリッスの氣焰は益々昂り、遂に大王の前に進みて、其右手を伸して曰く『王想起せよ。予は王の命の親ならずや。グラニクスの戰に王の一命を繼ぎたるは予が此手ならずや』と。蓋しグラニクスの戰に波斯の一兵將に背後より王を斬らんとせしとき、クリッス敵の右手を斬り落して、王を免れしめしを謂ふ也。是に至りて大王の激怒は絕頂に達せり。乃ち起つて短劍をクリッスに投げ付けしも、遮られて中らず。乃ち衞兵の槍を奪つてクリッスを刺し殺す。かくて大王は一朝の怒に乘じて、其股肱の臣を失へり。クリッス鮮血に染みて、床上に倒るゝや、大王の極端なる憤怒は忽ち極端なる悔恨となれり。急遽宴席を出でゝ寢室に入り、悲哀痛恨の極に沈みて、飮食を絕つこと三日、屢々クリッスの名を呼びて落淚し、自ら我狂行を責め、復た此世に生くるの意なし。諸將驚き百方大王を慰藉し、僅かに其元氣を回復せしむるを得たり。

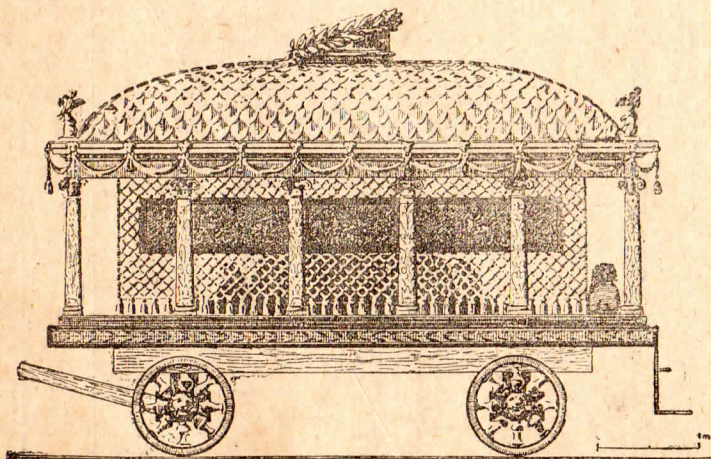
あゝ是れ何等の悲慘事ぞ。然して是れ唯一例のみ。大王は是より先き既に其重臣フィロタス及パルメニオ父子をも殺せり。此後亦哲學者カリステネスを殺せり。特にパルメニオ父子の處刑は大王の畢生の惡事として、自ら深く悔恨せる所なり。大王はかくの如く自ら其手足を絕ちて、後には則ち煩悶の極に陷る。是れ大王が激烈の性、一時の感情に驅られて事を誤るにも由ると雖も、大王をして玆に至らしむるには別に深き理由の在るあり。

大王既に波斯を滅ぼして、アケメネス朝の後繼者となり、波斯國民の上に君臨す。由來東方諸國に於ては、君主は即ち神孫なり。王は即ち現神なり。埃及のファラオー然り。波斯の『大王』亦然り。大王亦神[illegible]

[illegible]由る。故に大王は新被征服國民を威服せしめんが爲に、希臘[illegible]マケドニャ風の質朴簡易なる生活を廢し、代ゆるに東方專制君主の尊嚴を以てし、身に波斯大王の衣冠を著け、宮中の儀容典禮一に波斯風を採れり。自由主義の希臘、マケドニャ人が之を快しとせざるは固より其處のみ。希臘は、嘗て一世紀の久しき波斯の專制政治と戰へり。故に大王にして東方の專制政治を以て希臘人に臨まんとするは全く希臘の國民史を無視する所以なり。故に紀元前三百二十四年大王が己を神として尊敬せんことを希臘諸市に要求するや、之を承諾する者多かりしも、是只形式に過ぎずして、大王が一たび其權を行使せんとするや諸市は頑固なる抵抗を敢てせり。大王昵近の諸將が、大王に對して不快の念を抱くに至りしも、畢竟王が倨傲尊大なる波斯の『大王』を學び、且つマケドニアの將士を波斯人と同一視し、波斯人を用ゐて、本國人と伍せしめたるを屑しとせざるに由る。彼のマラカンダ饗宴の夕、大王の面を冒して直言したるクリッスは、即ちマケドニャ將卒の不平の裂口となりて、一身を犧牲にせるものに外ならず。大王の身邊常に不平の氣磅礴たるあり。大王の心中危惧の念なき能はず。其間陰謀の風說起れば、動もすれば無辜の臣を殺して悔を後日に貽せり。大史家ランケが大王を評して『同時に東方の專制君主たり、西方の國王たるは不可能事』たりとなすもの、至言と謂ふべし。

[illegible]を想ひては悔恨の[illegible]て、深く帝國統治の困難を感じたることもあらむ。猛烈なる熱の病魔は血氣方に燃ゆるが如き大王の生命を奪ひて、其建設せる大帝國を、デアドキの分奪に委ねたり。帝國統治者としての大王の手腕を判斷するには、王の生涯は餘りに短かゝりき。（完）

アレクサンドル大王の柩車

附錄

秦始皇帝年譜

西曆前	始皇帝 年齡	始皇帝 在位	事蹟
二五九	一		始皇帝生る
二四七	一三		始皇帝位に即き國政を大臣に委ぬ
二三八	二二	九	嫪毐亂を作す
二三七	二三	一〇	相國呂不韋罷み始皇帝政を親らす〇茅焦の諫を納る〇逐客の令を下す〇李斯の諫を聽く
二三〇	三〇	一七	韓を滅ぼす
二二八	三二	一九	趙を滅ぼす
二二七	三三	二〇	荊軻始皇帝を刺さんとして失敗す
二二六	三四	二一	秦將李信楚を伐つて失敗す
二二五	三五	二二	魏を滅ぼす
二二四	三六	二三	始皇帝王翦の言を納れ六十萬の大軍を發して楚を伐つ
二二三	三七	二四	楚を滅ぼす
二二二	三八	二五	燕を滅ぼす
二二一	三九	二六	齊を滅ぼして天下を一統す〇皇帝專有の名稱を定む〇諡法を除く〇郡縣の治を敷む〇天下の兵器を沒收す〇劃一の制を布き天下の文字を同くす〇天下の富豪を國都咸陽に徙す
二二〇	四〇	二七	西北方を巡行す
二一九	四一	二八	東方を巡行す〇泰山に登つて石を立つ〇鄒嶧山、泰山、琅邪臺等の碑を刻す〇南方を巡行す
二一八	四二	二九	東方を巡行す〇張良始皇帝を狙擊して失敗す〇之罘の碑を刻す
二一五	四五	三二	東北方を巡行し碣石門に刻す〇秦將蒙恬匈奴を伐つ
二一四	四六	三三	越人を征す〇長城を築く
二一三	四七	三四	焚書の令を下す
二一二	四八	三五	阿房宮を營む〇始皇帝その左右の密事を泄しゝ者を案問す〇諸生を坑殺す
二一一	四九	三六	東郡の隕石事件起る

秦始皇帝

文學博士　桑原隲藏

一

「支那四千年の史乘、始皇の前に始皇なく、始皇の後に始皇なし。曠々者察せず、漫に惡聲を放ち、耳食の徒隨つて之に和し、終に千古の偉人をして、枉げて桀紂と伍せしむ。豈に哀からずや。」

こは吾が輩が去る明治四十年十月十日、始皇の驪山の陵(口繪參照)を訪ふた當時の紀行の一節である。五年後の今日、復た始皇の傳を作つて、彼の爲に氣を吐くとは、淺からぬ因緣といはねばならぬ。

從來始皇帝の評判は餘り馨くない。彼を世界の大帝の伍伴に加へることに就いては、多少の反對あるべきことゝ思ふ。所謂漢初政略的に使用した暴秦とか、無道秦とかいふ語が、先入主と爲り、吾人の腦裏に拔くべからさる印象を存して居て、始皇帝といへば直に破壞壓制を連想する程である。いかにも始皇帝に幾多の缺點短處があらう。シカシ之が爲に彼の美點長處まで全然沒了するのは偏頗である。過酷である。虚心にして考へると、始皇帝が支那歷代の君主中、稀有の大政治家であることは到底否定し得ぬ事實と思ふ。この批評の當否は彼が一生の事績を根據として判定するより外はない。事實が最後の裁決者である。

二

始皇帝は秦の莊襄王の子で、年十三の時、父の後を承けて秦王となつた。その最初の十年間は政を大臣殊に相國の呂不韋に委ね、二十三歲の時から萬機を親しくした。彼は爾後十六年間に天下を統一した。即ち西曆前二百三十年に韓を滅ぼしたを手始に、趙、魏、楚、燕といふ順序に列國を併せ、西曆前二百二十一年に最後の齊を滅ぼして天下を統一した。始皇帝五世の祖に當る孝公がかの商鞅を任用して富國强兵の大政策を建てゝから、天下の大勢は已に秦に歸して居たが始皇帝の親政時代、僅々十數年の間に、首尾よく一統の實を擧げ得たに就いては、彼の功績も亦尋常ならずといはねばならぬ。

天下統一後に實行した始皇帝の事業は中々多端であるが、

要するに內政と外交とに區別することが出來る。內政では君權の擴張、外交では漢族の發展が主眼となつて居る。從つて彼一代の政策は尊王攘夷の實現に在るとも解釋し得るのである。先づ內政の主要なるものを列擧すると下の如くである。

君主專有の名稱撰定　始皇帝は法家の說を奉じて居る。君主の位置は無上絕對有る點に於て下民と儼然たる區別がなければならぬといふ信條から、彼は六國統一の年に君主のみに限り使用し得べき名稱を制定した。其四五の實例を示すと

（イ）皇帝　始皇帝以前の君主は皆王と稱した。夏殷周三代の君主は何れも王と稱して居る。所が春秋時代となつて周の王室が衰微すると楚、呉、越等南蠻の國君が王號を僭し初め、最後に降つて戰國時代となると中國の諸侯達も亦之に倣ひ、最後には陪臣より諸侯となつた韓、魏、趙の三晉の君すら王と稱して、王號の價値は甚だ低落して來た。ソコデ國富み兵强き大諸侯は最早王號では滿足出來ず、別に他の美號を稱したものもある。始皇帝の曾祖父に當る昭襄王が齊の湣王と約して、一時相並んで、西帝東帝と稱したのもこの理由に本づく。六國を討平し海內を混一した始皇帝が今更王號や帝號を襲ぐを潔とせず、新に一層の美號を採用せんとするのは必然の要求といはねばならぬ。かくて彼は群臣の意見を參酌し、その功德は古の三皇五帝を兼ねたりとて、皇帝と稱することゝなつた。

（ロ）朕　先秦時代には朕は一人稱として上下の區別なく使用された。楚の屈原の『離騷』にもその父のことを朕皇考と書い[illegible]

[illegible]人といはねばならぬ。漢以後、陽に秦を非難しつゝ、陰に秦に倣つて、是等の名稱を採用して居るのは、始皇の政策が時代の要求に適した證據とも言へる。

諡法の廢除　諡は周より剏つたもので、『逸周書』に「諡法解」あり。周公旦の定めた所と傳へられて居る。其「諡法解」に諡者行之迹也（中略）是以大行受大名、細行受細名とある通り、身分ある人の生前の行に應じて死後の諡を定めて、勸善懲惡の意を寓したものである。諡法の起原のことは姑く措き、兎も角も諡法が周時代に盛に實行されて居つたことは事實である。當時の規定によると、身分ある臣下が死すると君上より諡を賜はる例で、天子崩御の時は大臣會議して、その行に相當せる諡を定め且つ君に佞して、天を欺かざる主意とて、京師の南郊に於て、之を披露することゝなつて居る。列國の諸侯達は天子より諡を賜はる筈であるが周の王室の衰へると共に、天子同樣、その國の大夫達が詮議して、その諡を定めることゝなつた。さてかく天子崩じ諸侯薨じた場合に、その人に相當せる諡を議定せんには、勢ひ臣子としてその君父生前の行爲を批評せねばならぬ。こは甚だ君父の尊嚴を損する譯である。故に始皇は爾後諡法を除くことゝした。漢は多くの點に於て秦の制度を採用したに拘らず、諡法のみは復興した。復興はしたが、漢以後の諡法は骨拔となつてこの本義を沒了した。臣下はたゞ君上に佞して、美諡のみを呈することゝなり、全く勸善懲惡の主意を失つたからである。

（ハ）陛下　臣民が天子を呼ぶに陛下と稱するのは始皇以後のことで、秦以前には見當らぬ。『史記』の「始皇本紀」がこの字面の出處であらう。

（ニ）詔　詔は告知の義である。秦以前には上下ともにこの字を通用した。『左傳』に晉の將欒書が鞌の役に齊軍を打ち破つて國に凱旋の日、功を同僚の士燮に讓つて、今回の戰勝は士燮の軍令宜しきを得、部下よくその命を聽きし故なりといへるを記して　燮之詔也、士用命也とある。始皇の時から天子の命令に限つて詔と稱することゝなつた。

（ホ）璽　玉にて作つた印を璽といふ。秦以前は上下の區別なく之を使用した。『韓非子』に秦の甘茂といふ人が太僕といふ官に就き、兼ねて行人の職を執つたことを、佩僕璽而爲行事と記してある。僕璽とは太僕の官印のことである。始皇の時に天子の印に限つて玉を用ゐ、之を璽と稱することゝなつた。

これらの規程は要するに始皇帝が金科玉條と奉じて居る尊君抑臣主義の一端を發揮したに過ぎぬ。先秦の歷史を通覽すると代一代と君權漸長の痕を認めることが出來る。周禮の作者たる周公旦の如きは君權擴張の棟梁である。天子は七廟、諸侯は五廟、大夫は三廟、士は一廟とか、天子の堂は高さ九尺、諸侯は七尺、大夫は五尺、士は三尺とか、天子に崩といひ、諸侯に薨といひ、大夫は卒、士は不祿、庶民は死といふとか、天子の壙には松を樹ゑ、諸侯は柏、大夫は欒、士は槐、庶民は楊柳を樹うるとか、あらゆる方面に於て、[illegible]

[illegible]ある。また[illegible]る。諡法中に見える躁とか荒とか厲とか醜とかいふ惡諡は遂に使用された例がない。加之周時代には一字の諡を普通としたに、世の降ると共に字數を增して多きを誇り、淸の太祖の如きは承天廣運聖德神功肇紀立極仁孝睿武端毅欽安宏文定業高皇帝と三十字近く累ねて居る。かくて諡は行の迹といふ本義を失ひ、たゞ崩後飾終の追讃に過ぎなくなつた。

郡縣の治　秦以前の支那は封建であつて、幾多の諸侯が各々土地人民を私有して居つた。夏の初には天下の諸侯の數、一萬、殷の時には三千、周の初には千八百と傳へられて居る。長い年月の間には攻爭併呑の結果、是等の諸侯は次第にその數を減じ、春秋時代には百六七十國、戰國時代には十國內外となり、最後に秦の一統となつた。天下一家といふことは始皇帝の時に始めて現實となり、その以前に未曾有の事である。

さて一統した天下を如何に處分するかは當時の一大問題であつた。丞相王綰を始め群臣多數の意見は周の舊に倣つて封建の制を行ひ、遠隔の地に同姓子弟を分封して諸侯王となし、皇室の藩屏たらしむるに在つたが、始皇帝は李斯の言を聽き、天下を擧げて皇帝の直領とし、郡縣の治を布くことゝなした。『左傳』や『史記』に明記してあるが如く、春秋の末期から戰國時代にかけて、諸侯の數の減少すると反比例に、郡縣の數は增加して居るが、始皇帝は全天下を郡縣にしたのである。即ち天下を三十六郡に分ち、各郡に守、尉、監を置

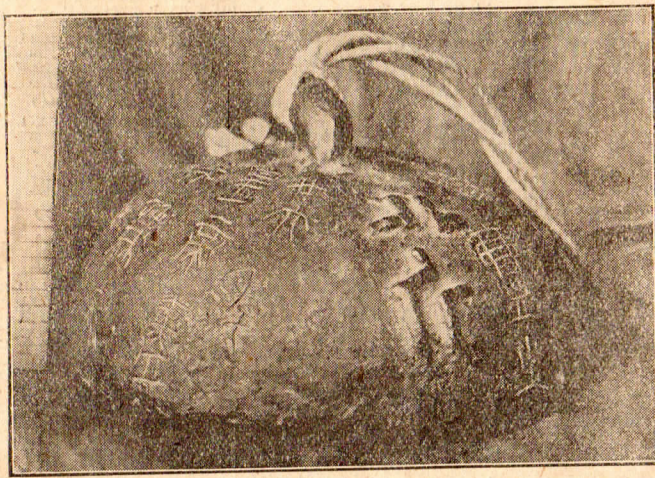
いた。守は文治を、尉は兵事を掌どり、監はその監察をする。郡の下には更に縣を置き、令が之を治むるのである。これら郡縣の官吏は皆天子の代理として民に臨み、その進退任免は一に皇帝の命を奉ずるのであるから、君權頗る強大となり、一統の政治も亦完全に行はれる譯である。『史記』に群臣の言を載せて

「昔者五帝、地方千里。其外侯服、夷服。諸侯或朝、或否。天子不レ能レ制。今陛下（中畧）平二定天下一。海内爲二郡縣一。法令由二一統一。自二上古一以來、未二曾有一。」

とあるのは必ずしも誇張の言ではない。

劃一の制　夏殷周三代の間、諸侯は各々その國に便宜の政を行ひ、天下の制度は區々として頗る劃一を缺いて居つた。尤も君權の擴張した周時代すら、夏の後の杞、殷の後の宋は各その先代の政を繼承せしを始め、其他の列國でも悉くは中央政府の制度を循奉して居らぬ。『中庸』に今天下車同レ軌書同レ文といひ、『詩經』に溥天之下莫レ非二王土一、率土之濱莫レ非二王臣一といへるが如きは、畢竟一種の希望若くは理想を述べたるものに過ぎぬ。眞に天下劃一の政を見るを得るのは始皇以後のことである。[illegible]

秦の權

秦始皇帝の二十六年に天下の權衡を一にせし時制定せしもの、重さ八斤なり。（京都羅振玉氏藏）

尺、車軌、律暦、衣冠、文字まで、すべて劃一主義を厲行した。彼が四方に立てた碑文に或は器械一レ量同二書文字一と勒し、或は遠邇同レ度と刻し、この點に關して得意滿面の態を示して居るのも無理ならぬ次第である。中にも吾人の注意に値するのは始皇帝が文字の整理に熱心なりしことである。彼は文字を統一したのみならず、又之を改良した。複雜不便なる古文を省略して所謂秦篆を作り、更に之を平易にして隷書を作つた。これら文字の整理によつて當時の社會が如何に大なる便益を受け得たかは設想に難からずである。始皇が所在に碑を立てた目的の一半も或は文字の統一を促すに在つたかも知れぬ。

天下巡游　始皇帝は天下併一の翌年、即ち彼の在位二十七年から以後、殆ど毎歳四方を巡行した。

二十七年　今の陝西の西部及び甘肅方面
二十八年　今の河南、山東、安徽、湖北、湖南方面
二十九年　今の河南、山東、山西方面
三十二年　今の直隷、山西方面及び陝西の北部
三十七年　今の湖北、湖南、江蘇、浙江、山東方面

彼はかく四方を巡行しつゝ、到る處に秦の頌德碑を立てた。[illegible]

の碑等は皆この時に立てられたもので、何れも秦が四海を一した功德を勒してある。秦は六國を併合したものゝ、六國の遺臣遺民は決して一朝に心服するものでない。そこで天下の耳目を新にする必要が起る。始皇帝が頻年四方を巡游する目的も畢竟六國割據の餘風を打破して、彼自身が決して秦一國の君でなく、四海の共主であることを天下萬民に會得せしめん爲で、極めて時宜に適當した政略といはねばならぬ。清の康熙乾隆二帝が屢天下を巡行したのも全く同樣で、近くはわが明治天皇が維新以來或は東海、或は奥羽、或は北陸と巡幸せられたのも、或は同一の理由に本づくことゝ拜察されるのである。

三

焚書　始皇帝の施政中尤も後世の不評を招いたのは所謂焚書坑儒の二點である。世の學者は多く之によつて彼を人道の敵、文教の仇と信じて居る。如何にも焚書坑儒は多少亂暴かも知れぬ。しかし之にも幾分の理由がある。一概に始皇帝のみを非難し去る譯にはいかぬ。學者の羨稱措かざる夏殷周の三代も專制時代である。決し

嶧山の碑文

始皇帝の二十八年、東巡の時刻せしもの、傳へて李斯の書する所となす。原碑已に佚し世に傳ふる所は皆その模刻なり

[illegible]か亂民の刑とか、若くは左道の辟とか稱して、すべて[illegible]危の言を弄して民心を蠱惑する者は容赦なく國憲に處して居る。然るに周室衰へ、春秋より戰國と、世の降る儘に、實力競爭時代となつて、諸侯は何れも天下の人材を羅致して國の富強を圖ることとなつた。かく人材登庸の途の開けると共に處士横議の弊が釀し初めた。戰國時代に於ける處士の跋扈は隨分厄介な問題であつた。孔子すら不レ在二其位一不レ謀二其政一といふて居るに、彼等は皆無責任不謹愼なる政治論を敢てして、治安を害し、民心を惑はすのである。溫良なる孔子すら衆を聚めて奇を衒つた少正卯を誅殺したではないか、當時の政治家にとつて處士の横議は到底其儘に看過し難い程であつた。心ある政治家は早く之を抑壓するに腐心し初めた。或者は更に進んでその檢束に着手し、且つ又處士横議の源泉となるべき書籍即ち當時の政治に反對せる思想を載せた書籍の處分さへ實行したものもある。秦の如きはその一例で、已に孝公の時から民間の政治論を禁じ、犯す者は國境外に放逐し、治安に害ありと認めた『詩

經』『書經』等の古典を焚いたことがある。

戰國の末に出た韓の韓非は、その著『韓非子』のうちに、國を治むるには法律と、その法律を執行する官吏とあれば十分である。この以外に先王の道とか、聖人の書とかの必要はない、然るに今天下到る所に儒者と稱する者あつて古聖の書を引いて當世の政を誹り、上下の心を惑はしむるは甚だ不都合千萬である。先づこの儒者を除き去るが刻下の急務であると主張して居る。韓非と同時の秦の呂不韋も亦その著『呂氏春秋』のうちに略同樣の意見を述べて居る。

始皇帝はかねて韓非を崇拜し居つた。寡人得下見二此人一與レ之游上、死不レ恨矣とさへいふた程である。呂不韋は始皇即位の初に國政を委ねた大臣で、然も始皇の實父とさへ傳へられて居る。この韓非、この呂不韋、何れも處士を抑へ古書を除くべしと主唱する以上、始皇は當初より處士と古書の處分に心を傾けて居たのは、勿論のことと思はれる。かゝる事情の下に、彼の尤も信任せる丞相の李斯が思想統一の爲め、君權擁護の爲め、異端邪說に關係ある古書を禁止せんことを上書したから、始皇は直に之を納れ、遂に所謂挾書の禁、焚書の令が發布されたのである。

秦の焚書は文運の大厄であつたことは申す迄もない。しかし世人は多くその書厄を過大視して居るやうである。現に『舊唐書』などにも、三代之書、經レ秦殆盡と記してあるが、これは誇張の言、事實を誣ふるものといはねばならぬ。始皇の典籍を銷燬した記事は詳に『史記』に載せてあるが、之を熟讀すると左の事實を否定することが出來ぬ。

(イ)秦の史料は焚かぬ。

(ロ)醫藥、卜筮、農業に關係ある書籍は民間に使用して差支ない。

(ハ)上記以外の書籍殊に『詩經』『書經』及び諸子百家の書は一切民間に所藏することを禁じ必ず禁令發布後三十日以内に官省に差出さしめて之を燒棄した。

(二)朝廷の博士は如何なる書籍を所藏しても差支ない。

泰山絕頂の無字碑

高さ約二間半一字を刻せず、故に無字碑と稱す。傳へて秦時建つる所と云ふ

故に民間一般の書籍を燒棄したのは事實であるが、煩雜なる古文を竹簡に漆で書いて書籍を作つた當時のことゝて、書籍の價も甚だ不廉で、且は携帶にも頗る不便であつたから、民間の藏書の案外貧弱であつたことは申す迄もない。當時の學者は多く書籍を諳誦したのである。戰國時代に紙が發明され、寫書やゝ容易となつた頃にも、民間では依然諳誦の風を繼續して居つた。また當時『公羊傳』『穀梁傳』等の如く、専ら口傳により、未だ竹簡に載せられなんだ書籍も多かつたから、天下の書を焚くといふ條、世人の想像する程、大なる損害はなかつたものと察せられる。殊に秦の朝廷には七十人の博士あつて、その藏書は無難の筈であるから、秦火災厄の程度は愈小といはねばならぬ。その後ち楚の項羽が關中に入つて、咸陽の宮殿を一炬に焚き盡した時、官府所藏の典籍多く灰燼に歸したので、古書佚亡の責は始皇よりも、咸陽を焚いた項羽、若くば項羽に先つて關に入りながら、官府の藏書の保護を怠つた劉邦蕭何等が負ふべき筈である。

思想統一の爲め、君權擁護の爲めとはいへ、天下の書籍を焚くなどは、勿論賛むべきことでないが、たゞ世人は焚書事件のみを知つて、その事情と實際とを察せぬ者が多いから、聊か始皇の爲に辯じたのである。

坑儒　始皇帝は挾書の禁發布の翌年に、諸生四百六十人を咸陽に坑殺した。世に所謂坑儒事件である。この事件も根本史料の『史記』を調査すると、後世の所傳は事實を誣ふるもの尠からざることが發見された。

戰國の頃から不死の靈藥を求むることを專門とする方士といふ者が出來、燕、齊、楚等の諸國王は何れも方士を信任した。始皇帝も亦當時の風潮に從ひ、幾多の方士を寵用したがその方士の中で侯生盧生の二人は始皇を詐き、不死の藥を求早晩詐僞暴露して、罪に處せられんことを恐れ、相伴ひの駄賃に散々始皇を誹謗して逃亡した。始皇は金を騙られし上に惡口されしことゝて大に怒り、侯盧二生と日夕往來して、朝廷皇帝を誹謗した在咸陽の諸生を驗問さした。所がこれら諸生は徒に一身を免れんが爲に、甲は乙に、乙は丙にと互に罪を他人に嫁したから、拘引の範圍は次第に廣まり、遂に四百六十餘人の檢擧となつたが、眞の犯罪者は發見出來ぬ。始皇も處置に窮して、嫌疑者全體を坑殺することゝした。これが所謂坑儒事件の大略である。

右の事實に由つて觀ると坑殺された諸生は多く方士である其うち幾分儒生も混じて居つたやうであるけれど、此等の儒生とても咎を人に嫁して平然たるが如き破廉恥漢で、儒生の名あつて儒生の實なきものである。殊に彼等は何れも誹謗妖言の犯罪嫌疑者である。無辜の儒者を何等の理由なくして殺戮したものと同一視することは出來ぬ。

犯罪嫌疑者を擧げて無差別に坑殺したのは、やゝ亂暴の譏を免れぬが、當時の事情を斟酌すると多少恕すべき點もある。罪は輕きに從ひ賞は重きに從ふとは儒家の意見で、法家はその反對に、罪は重きに從ひ、賞は輕きに從ふを原則として居る。法家の說を信奉する始皇帝が罪の疑はしき者に對して、嚴に從つて處罰したのは、その所信に忠實なる結果である。彼は終始この主義を一貫して居る。坑儒事件に就いてのみ無情であつた譯ではない。

始皇は一日丞相李斯の途中行列が餘りに堂々たるのを見て甚だ不平であつた。下尅上の漸とならんことを恐れてゞある。然るにその翌日から、李斯は打て變つてその前騎從車の數を減じた。始皇は之を見て、我が語を李斯に内通した者がある、とて大に怒り、左右の者を案問したが、遂にその人を認め得なんだから、當日左右に侍した者一同を捕へて死罪に處したことがある。又その後、東郡地方で石に始皇帝死而地分の七字を刻した者がある。始皇は官吏を派遣して、その犯罪者を搜索したが、目的を達し得ずして、遂に附近の住民一同を死罪に處したこともある。此等の事件を坑儒事件と對比すると始皇の主義も自から了解することが出來る。

若し坑儒事件の當時、四百六十餘人の諸生中、一人でも男兒らしい者があつて、自からその犯罪を名乘り出で、一同の犧牲となつたらば、決して彼が如き大事を惹き起さなんだに相違ない。坑儒事件に就いては、始皇の暴戾を責めんより、寧ろ諸生の卑怯を憫むべきことゝ思ふ。

吾が輩は上二章に涉つて始皇の内政の重なる點を紹介したが、之によると彼の政策は多少非難すべき所があつても、大體に於いて時勢に適切であつたことは、否定すべからざる事實である。その他始皇は天下の武器を沒收したこともある。天下の富豪十二萬戶を國都咸陽に移住さしたこともある。何れも割據の餘風を破つて、一統の實効を擧げ、地方を彈壓して、中央を鞏固にするには必要なる政策といはねばならぬ。

四

眼を轉じて始皇帝の外交策を見ると彼は徹頭徹尾對外硬であつた。彼は南北に向つて異族征伐を實行し、帝國主義を發揮して居る。この異族征伐にはかの歷山王の亞細亞征伐の如く、豐太閤の朝鮮征伐の如く、一種の政略を含んで居るのは勿論である。六國を討平した彼は、異族征伐が外國侵略によつて國民の注意を外に嚮け、國内の安全を圖るを得策と考へたものと見える。

越人征伐　始皇は先づ南に向つて越人征伐に着手した。越人は今の浙江、福建、廣東、廣西四省から安南地方にかけて蔓延して居つた種族で、幾多の部落に分裂したから百越と呼ばれて居つた。春秋の末期より次第に中國の舞臺に活動して來た。有名なる越王勾踐の如き、その君主こそ夏の後で、漢族と稱して居るけれども、國民は皆この越種族であつた。始皇は六國を統一すると間もなく、江を越えて次第に越人を征服し、その地を閩中（福建）桂林（廣西）南海（廣東）象郡（安南）の四郡に分ちて中國に加へ、又斯に漢族五十萬人を移住さした。漢族の南方殖民はこの時から始めて代一代と發展した。近く佛蘭西が後印度方面に勢力を扶植するまで、二千年の間、南海諸國は常に支那を宗主と仰いだ由來もこゝに起源するのである。

殊に始皇の南方經略によつて、海上交通の門戶が開けた。南海の番禺、象郡の交趾――[illegible]した三都會――が始めて中國民族の手に歸したからである。是より象牙、犀角、瑇瑁、珠璣等殊域の異產の輸入が日に多きを加へる。やがて中國の市舶、大秦の賈船の往來が始まるといふ風に、東西交通の序幕が斯に開けることゝなつた。

匈奴征伐　始皇は更に北の方匈奴を驅逐した。支那の歷史に據ると、匈奴の祖先は淳維といひ、夏の桀王の後と稱して居る。夏の後などは固より信憑するに足らぬが、その祖先の淳維といふ名が訛つて、匈奴といふ種族の名となつたものであらう。始祖の名を其儘種族の名とすることは北狄に普通の慣習である。匈奴の文字は戰國時代から始めて使用されて居る。その以前は或は玁狁、或は獫狁或は葷粥、薰育、獯鬻等區々一定して居らぬ。しかし何れもフンニの音譯で、たゞその文字を異にしたのみである。即ち西曆四世紀の頃から西洋史上に現はれ來るフン種族のことである。この種族は上古から絕えず漢族を劫掠して尠からざる迷惑を加へて居る。周の祖先の古公亶父が岐山へ避難したのも獯鬻の爲である。西周末の詩人が靡室靡家と嗟嘆したのも獫狁の爲めである。始皇は天下一統の後ち、蒙恬を將として兵三十萬を率ゐて匈奴を征伐せしめて、悉く之を黃河以北に驅逐した。攘ひ斥いた地面に四十四縣を置き、こゝに漢族數萬家を移住せしめ、所謂萬里の長城を築きて華夷の界を嚴重にした。

北狄の侵入に對して長城を築くことは必しも始皇の時に創まつたのではない。『詩經』に據ると西周の末頃から朔方に城きて玁狁を防いで居る。降つて春秋戰國の交から秦、魏、趙[illegible]の諸國は相繼いで[illegible]とがある。始皇は幾分これら以前の長城を利用して萬里の長城を作つたものと見える。その萬里の長城は今の甘肅省鞏昌府附近から起つて、黃河の外を廻り、今の山西、直隸二省の北邊を縫うて、盛京省の東部に達したのであるから、勿論今日現存の長城とは大に相違して居る。今日の長城は秦以後西漢、後魏、北齊、北周、隋、明時代に涉つて幾度となく增築又は改築されたものである。（口繪天下雄關碑參照）

領土の膨脹　かく南に北に異族を攘うて土地を拓いた結果始皇時代に於ける漢族の版圖は空前に擴大された。儒者は唐虞三代を黃金時代と稱揚するけれども、その時代の漢族の勢力圈は甚だ狹隘であつた。周時代でも漢族の根據地の所謂中國は黃河の左右に限られ、今の地理にていへば大略河南省の全部と陝西、山西、直隸、山東、湖北の一部に過ぎぬ。殊に白狄、赤狄を始め大戎、小戎、驪戎等の異族その間に雜居するもの多く、齊、秦、楚、吳、越等邊裔の國となると言語風俗など隨分漢族と相違して居つたのである。秦の始皇が四圍の異族を攘うてから、漢族の勢力範圍は周の初に幾倍し、その四十郡――もとの三十六郡の後に拓いた四郡を加へて――の廣袤は殆ど今の支那本部と大差なくなつた。

始皇の力によつて空前の一大帝國が建設されると共に、秦の威名は遠く海外に振ひ渡つた。兩漢から三國時代にかけて北狄でも西域でも、中國人を呼んで常に秦人といふて居る。南海方面でも同樣であつたに相違ない。西曆一世紀頃の希臘

の地理書には、世界の極東の國をシナと記載してあるが、恐くは當時南海方面で中國を秦と呼んだのを極東來航の西商達が訛り傳へたものであらう。シナといふ國號の起源に就いては學者間に、異說があつて、或は之を雲南地方の滇國と結合せしめ、或は之を安南地方の日南郡に還原せしめて說明する人もあるが、皆採るに足らぬ。シナは必ず秦と關係せしめて解釋すべきものである。

シナ又はシニスタン（秦人の國の義）といふ名稱は印度から中央亞細亞、西亞細亞へかけ、更に歐洲まで尤も廣く使用されて居る。支那又は至那等はシナの音譯、震旦又は振旦等はシニスタンの音譯である。漢や唐も國威四方に張つた結果、中國の代名として外域に使用されたことがあるけれども、到底支那の如く世界的でない。秦の天下に君臨した年月は短かつたに拘らず、その名は中國の國號として不朽に傳へらるゝことゝなつた。

五

如上の事實によつて考察すると始皇は實に中國民族の爲に氣を吐いた者といはねばならぬ。外敵に對しては一意和親偸安を事とする支那歷代の君主の間に在つて彼は確に一異彩を放つて居る。支那四千年の外交史――屈辱的失敗的外交史――は彼によつてその面目の一年を維持し得たといふても甚しき誇張の言でない。

試に秦以後の支那の外交史を達觀すると、漢の高祖は群雄平定の餘威を藉り、三十萬の大軍を率ゐて匈奴を親征したが、白登の一敗に意氣銷沈し、或は宗女を與へ、或は金帛を遺り、ひたすら彼が歡心を買ふた。高祖の崩後、漢の君臣は專心この政策を襲踏して、如何なる匈奴の慢辱をも神妙に我慢して居る。その間武帝の如き一二豪傑の君主が出て、北狄征伐を行ふたけれど、要するに九失一得、功、勞に酬ひずといふ有樣であつた。支那の史家は歷代の對異族策を評して、周は上策を得、秦は中策、漢は下策を得たと評して居る。周は果して上策を得たか否かは疑問であるが、漢一代の對異族策は始皇のそれに比すると、費は多くして功は尠いといふ事實を否定することが出來ぬ。

三國西晉以降は五胡跋扈の時代で、無頓著な支那人すら、神州陸沈、華胄左衽と憤慨して居る位故、斯に贅する必要がない。唐の太宗は古今の英主である。天下併合の後ち、異族に對しては武斷主義を實施する素志もあつたが、當時の大臣の兵凶戰危の說に動かされて、遂に懷柔和親策を執ることゝなつた。唐一代の間、四裔の君長に、請ふが儘に所謂和蕃公主を下嫁せしめたのは、この政策の結果である。美人天上落と詠はれた永樂公主も、國家事重、死且無ㇾ恨と壯語した寧國公主も、皆この政策の犧牲となつた和蕃公主である。しかし貪婪饜くなき夷狄は通婚のみで羈縻されるものではない。朝に公主を送ると夕に金帛を求むといふ有樣であつた。結婚と贈遺とによつて異族を綏和して、その劫掠を免るゝといふのが、漢唐――漢族の國威の尤も揚たと稱せらるゝ――を通じて對異族策の大方針であつたが、結果はやはり不首尾で、羽檄の飛ぶことも烽火の擧がることも依然として減少することがなかつた。

宋に於ける契丹、西夏、女眞、明に於ける北虜南倭の事蹟は斯に絮說を要せぬ。元淸二代は天下を擧げて異族の臣妾となつた時代固より言ふべき限りでない。過去二千年の積弱累辱此の如しとすれば、この間に在つて、南越人を服し、北匈奴を攘つて、盛に殖民政策を實行した始皇は、確に中國民族の一大恩人といふべきである。殊に種族革命の成功した中華民國の今日、始皇こそ百代に尸祝さるべき人であるまい歟。

六

吾が輩は已に始皇帝の內政の事業を敍述したから、斯に彼の人物に就いて一言いたさう。始皇は細心にして放胆なる政治家であつた。更に又よく己を虛くして人に聽き、衆に謀つて善く斷ずる政治家であつた。『史記』に始皇帝の政治振りを載せて、天下の事大小となく皆自身で裁決して、臣下に委任せぬ。その日所定の裁決を終らぬと、夜中になつても休息せぬと記してある。或は之を以て彼が權勢を貪る故と非難するのは間違である。主權を人に假さぬのは法家の極意で、刑名學を好んだ蜀漢の諸葛亮が細事を親裁したと同樣、寧ろ始皇の勤勉細心なる證據とすべきである。

始皇は細心であると同時に大膽であつた。六國を滅ぼした彼が、如何にその遺族舊臣の怨府となつて居るかは、彼自身は萬承知して居る。前には荊軻の匕首閃き、後には張良の鐵椎が投げられた。尋常一樣の君主であつたら、必ず警戒して出游せぬ筈であるが、彼は何等顧慮する所なく連年巡幸を繼續した。支那流に膽斗の如しと讃しても差支なからう。

始皇は又世人の設想とは反對によく人の諫を容れた。二三の實例を示すと、第一が嫪毒事件である。嫪毒は太后の寵を負ひ、亂を起して失敗し、その黨與は皆重きに從つて處分せられ、太后もこの關係から雍の離宮に移された。この母后の處置につき、齊人の茅焦死を冒して苦諫した時、始皇は殿を下り、手から茅焦を扶け起し、その諫を聽き、母を咸陽に迎へて、舊の如く厚遇したことがある。第二は逐客事件である。始皇は宗室大臣の意見により、他國の產で秦に來り仕へ居る者は信用し難いといふ理由から、一切之を放逐することにした。この時楚人の李斯は上書して、逐客の利少く害多きを述べ、泰山不ㇾ讓㆓土壤㆒、故能成㆓其大㆒。河海不ㇾ擇㆓細流㆒、故能就㆓其深㆒の名句を陳ねたから、始皇は之に動かされ、已に歸國の途中に在つた李斯を召還して、逐客の令を撤回したことがある。第三は伐楚事件である。始皇楚を伐たんとて之に要すべき兵數の多寡を諸將に尋ねた時、李信は二十萬にて可なりといひ、王翦は六十萬を要すと答へた。始皇は李信に聽き、之に二十萬の兵を授けて出征さしたが、却つて大敗した。そこで始皇は不面目を忍び、態々當時不滿を懷いて故山に歸臥せる王翦の宅を訪うて、再三その出征を懇願し、遂に楚を滅ぼしたことがある。此等の實例を見ても明白なる通り、始皇

は縦令諫に從ふこと流るゝが如しと迄の雅量はなくとも、過を飾り非を遂ぐる程狹量の人ではない。始皇の評に必ず引用される暴戾自用といふ語は、もと侯生盧生が始皇を誹謗せし時に用ひたもの、之によつて始皇を評し去るのは酷といはねばならぬ。

始皇が果斷の人であることは故らに斯に申し添へる必要がない。天下統一後、群臣の多數は封建再興を主張したに拘らず、彼は郡縣の治を行ふた。文字の整理といひ、古典の處分といひ尋常の政治家では到底一朝に實行し得ぬ大問題を、彼は何等遲疑する所なく斷行した。始皇が天下の共主となつたのは僅々十年餘に過ぎぬ。この短年月の間に比較的多大の事業を實行し得たのは、全く彼の果斷の賜である。

多くの偉人に普通であるが如く、始皇も亦豪華を喜ぶ性質を具へて居る。驪山の陵の如き、司馬遷の記する所、劉向の傳ふる所は勿論幾多の誇張を加へてあるけれども、その規模構造が、厚葬の風の盛な當時にあつても、人の視聽を聳かしたのは事實に違いない。爾後幾度の破壞發掘の厄を累ねて頗る原形を損した現在の陵――見る影もなく荒廢して居るが――でも猶ほ方二百間、高さ十八間許の宛然たる一阜丘で、當年の榮華を髣髴の間に認めることが出來る。其他、咸陽の國都といひ阿房の宮殿といひ、萬里の長城といひ、彼の計畫したものには那裡にか雄大の面影を存して居る。或はこの間に幾分、不レ觀二皇居壯一、安知二天子尊一といふ一種の政略も含まれて居るかも知れぬ。

（口繪「阿房宮瓦」參照）

二世皇帝の陵

陝西省西安府の南二里許に在り。

或は始皇帝の專ら刑法に依賴して、仁義を蔑視するのを非難する者がある。何如にも始皇には刻薄少恩の憾ないではない。しかし彼は法家の信者である。法家には仁義が禁物である。かく考へると、始皇か孔孟仁義の道を忽にしたのも、誠に已を得ざる次第といはねばならぬ。一體春秋から戰國にかけては、亂臣賊子輩出の時代で、君主の位置は甚だ不安であつた。そこで成るべく君主に多大の權力を與へて、油斷ならぬ臣民――人性を惡と觀ずるのが法家の說である――を威壓して國家の安全を保つといふのが法家の主張で、この主張は孔孟の學說よりは確に時代の要求に適して居つた。等しく儒學の正統と自稱せるに拘らず、孔子の主張した仁は孟子になると義と變じ、荀子に至ると更に禮に變ずるといふ風に、儒家の敎義が次第次第に具體的となり又消極的となつて來たのは、全く當時の外界の狀況に促された變化である。老子はその『道德經』のうちに

失レ道而後德。
失レ德而後仁。
失レ仁而後義。
失レ義而後禮。

と述べて、この順序で世間が段々と末になるといふのであるが、不思議にもこの豫言が事實となつて現はれて居る。即ち老子自身は道と德とを說き、次に出た孔子は第三の仁を說き、孟子は第四の義を、荀子は第五の禮を說いた。この次に今一歩進めて具體的消極的となるには法律より外ない。この事情がやがて法家の起源を說明し、併せて始皇が法術に依賴して天下を治めた理由を說明し得ることゝ思ふ。

七

一體支那人は保守主義に囚はれて居る。述而不レ作、信而好レ古とか率二由舊章一とか彼等は一切の革新を罪惡視して居る。西晋時代に嘗て黃河に橋を架せんと計畫した時、堯舜すら實行せなんだといふ理由で朝臣の多數が反對した。かゝる國民の間に始皇の如き革新的色彩を帶びた政治が、不レ師レ古底の暴政として排斥されるのは已を得ぬ次第である。

支那人は又平和主義に囚はれて居る。天子守在二四夷一とか、王者不レ治二夷狄一とか彼等は消極退守を以て、無上の安全策と信じて居る。昔舜が干羽を舞はして三苗を來服せしめたのが彼等の理想である。七德の舞には首を俛し、九功の舞には顏を抗げるのは魏徵一人に限らぬ。かゝる國民が始皇の攘夷拓地を以て兵を窮め武を潰すものとして、贊成せぬのも無理ならぬことである。

八

秦の榮華は一朝であつた。始皇がその三十七年に東南巡游中に病に罹つて崩御すると、その後を承けた少子の胡亥はやがて宦者の趙高に弑せられ、孫の子嬰は間もなく劉邦（漢の高祖）に降つて秦は亡びた。萬世までもと豫期した始皇の望は絕えて、彼の崩後三年の間に社稷覆るとは誠に悲慘な末路であるが、之が爲に始皇を輕重することは出來ぬ。帝政は約十年にして倒れても拿破崙の豪傑たることは否定出來ぬではないか。豐臣家は二世で滅しても、太閤の英雄たることは否定出來ぬではないか。人間の眞價は年月に在らずして事業に存するのである。始皇は年五十、長生とはいへぬ。四海統一後の在位僅に十二年、較ろ短祚といはねばならぬ。しかし大なる事業をなした。驪山の陵が夷げらるゝことがあつても、長城の礎が動くことがあつても、支那史乘に於ける始皇の位置は確固不拔であらう。

――十二月七日稿――

大ケーザル

文學博士　箕作元八

一、偉人とは何ぞ

ドイツの史家ランケは、その有名な世界歷史にアレクサンドル大王のことを論じた中に、古來個人の傳記そのものが直ちに世界歷史の一部を形つてゐる人物がある、アレクサンドル大王のごときは正にその人であつてその傳記を世界史から離すことはできぬといふ意味のことを言つてゐる。かやうな人物は即ち謂はゆる偉人である。偉人とは何んぞやといへば、凡そ一國、一國民、乃至國民の集團にしても、ある固定した生活狀態に馴れると、必らず內部に弊害が起こつて、少し變つた外來の刺戟にもはやこれに抵抗する力がなくなる。早く大變革を行つて國民の生活を一新しなければその國民は亡ぶのである。かやうな際に、自ら進んで一大變革を斷行する明察と手腕とを持つてゐる人、即ち偉人たるに外ならぬのである。而してひとり一國の運命のみではない、人類全體の發展の前途に橫はる大問題を解決するものは偉人の使命である。かやうな偉人の中でも殊に古今東西に亘つて最大なるものを擧ぐれば四人あり。即ちアレクサンドル、ケーザル、ナポレオン一世、而して明治天皇である。こゝにはケーザルの人物と事業の概括を說く。

二、ケーザルを生みたる時勢

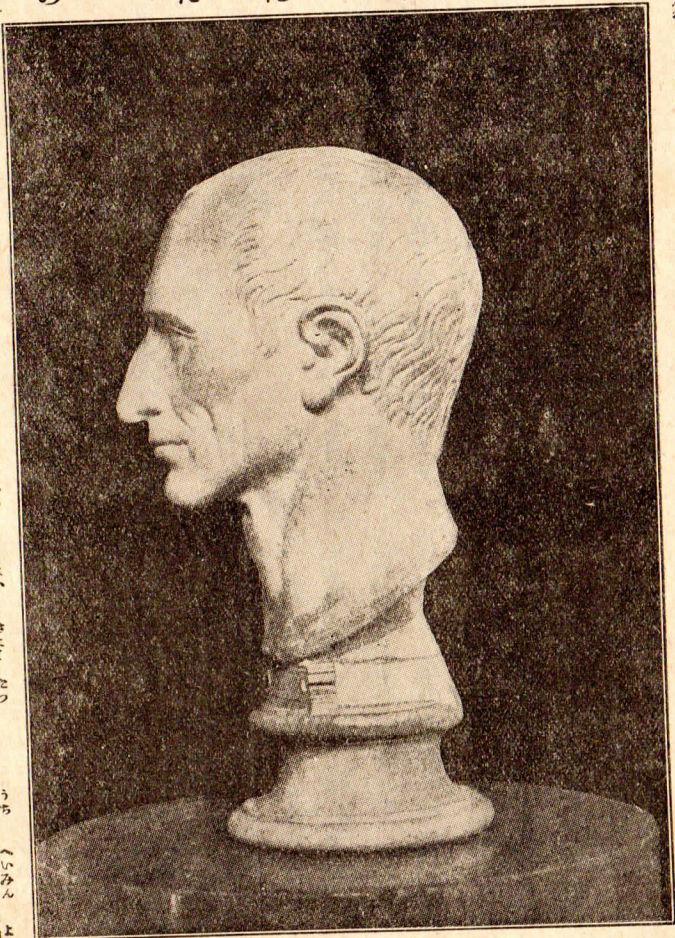
ケーザルのことを論ずれば、必らず先づケーザルを生んだローマ當時の時勢を說かねばならぬ。

抑もローマはイタリヤの一市より起り、その近隣には多くの勇猛なる種族あり、始めよりしてその存立のためには隨分劇しい奮鬪をしなければならなかつた。

建國の始めは王政であつたが、それが廢せられて共和政となり、その中少數の家族が閥族を組織して高等官元老院議員等の位置を獨占した。この閥族も始めは剛健の氣象に富み、愛國奉公の念強く、近隣を克服してイタリヤ全國を一統し、なほ進んで地中海沿岸諸國を悉く包括する大版圖を作つた。

即ちローマは始め市府的で、次にイタリヤ的となり、最後に世界的となつたのである。併し乍ら市府的のローマからイタリヤ的のローマへ、イタリヤ的のローマから世界的のローマへと次第に境遇の變化するに從ひ、自らこれに伴ふ組織の變革が必要であつた。然るに閥族は昔日の剛健の氣を失ひ、たゞ權勢利欲をのみ貪つて內部には始終平民との爭絶えず、同時に外部にはローマ府以外のイタリヤ人が、首府の住民と權力の懸隔餘りに甚だしきに不平を起して、ここにも紛爭が絶えなかつた。これはイタリヤ的に發展したローマに當然起るべき現象である。

かくの如き時勢の變化に眼を著けて、まづ平民の爲めに權利を主張したのは、紀元前一三三年護民官となつたチベリウス　グラックスで、彼は閥族抑壓、平民權振張のために力を盡したが時到らずして敗れた。次いでその弟カユス　グラックスも紀元前一二三年護民官となり、兄の志を繼いで、イタリヤ人全體に對し、首府の人民と同等の權利を與へんとしたが、やはりこれも志成らずして反對黨の毒刃に倒れた。

爰に於てイタリヤ人は不平に耐えず、前九一年終にイタリヤ諸種族の大反亂となり、ローマ共和國は根底から崩解せられんとする形勢を呈した。今はローマ人も詮方なく、前九〇年終にイタリヤ全國の人民に悉く首府と同樣の權利を與へることにしてこの問題は解決した。

併し乍らイタリヤ的ローマの問題はこれで解決したが、更に進んで世界的ローマとなつては、もはやいかにしても閥族だけの力では脊負ひきれぬ。のみならず閥族政治は既に腐敗の極に達して、內は平民を抑壓し、外は屬領諸國に對して惡政を行つてゐる。中央の政治は腐敗し、地方には反亂頻りに起つて、一旦從屬した國も追々獨立の氣勢を示し、世界的ローマ共和國は未だ根基を固むる遑なくして土崩瓦解せんと

ユリウス　ケーザル胸像
（大英博物館藏）

する狀態であつた。爰に於いて今やこの紛々たる形勢の中に生まれて、前途の難問題を解決し、世界的大ローマ共和國の基礎の上に、統一的文明を弘め、統一的制度を布くには、少數閥族の寡頭政治より一歩中央集權的君主制に轉ずる外はないと考へたのがケーザルであつた。當時ケーザルの爲殘した事業は、ローマの帝政時代に及んで益々發展し、其の影響の及ぶところ、中世を通じて更に近世にまで及んだ。ある意味に於いてケーザルは、ヨーロッパ文明の父であるといつても差支へはないのである。

三、ケーザルの壯年時代

カユス ユリウス ケーザルは、西暦紀元前一〇二年七月十二日に生る。(我開化天皇己卯五六年、漢武帝太初三年に當る)彼の家系は閥族中の名家、その高祖はローマ建國の王ロムルスのその又遠祖で昔のトロヤの勇士エネイアスであると傳へられてゐる。それゆゑケーザルの一族は多く閥族黨であるが彼は伯母の夫のマリウスが平民黨の首領たる縁で早くから平民黨に入つてゐた。マリウスもいたくケーザルの才を愛し、その盡力により、ケーザルは十五歳のときユピテルの神祀の僧に選任せられ、十九歳のとき過激平民黨キンナの娘コルネリヤを娶つた。閥族黨の首領スルラ平民黨を壓して權力を握るに及び、平民黨中より芟除すべき人物を物色して表を作つた中にケーザルの名もあつたが、ケーザルは閥族中に近親が多いので彼等皆ケーザルのために助命をスルラに乞ふた。スルラはその前ケーザルに迫つて、妻を離別すれば一命を釋さんと言つたのであるが、ケーザルは傲然として之れを斥けた。今またケーザルの近親等の哀願にあひ、スルラは彼等に向つて、『卿等折角の乞ゆゑ彼をゆるさしても得させんが、しかしあの小僧の内にはマリウス以上のものが入つてゐる』と評したといふ。然しこの時ケーザルはスルラの手から宥免を受くるを屑とせず、前八一年、自らイタリヤを去つて小アジアに逃れた。これは當時ローマの法律として、市民權あるものは、刑の執行前本國を去れば咎めなしといふ定めであつたからである。

小アジアに赴いてのちケーザルは、ローマに反いたミレッス市を攻むる軍に加はつて功があり、前七一年スルラ死するに及びローマへ歸つて、小アジヤで目睹したマケドニアの知事ドラベラの不法を彈劾した。更に前七七年にケーザルはロードス島に赴き、當時有名であつた辯論術の大家アポロニオスモロンを訪ねて、此術を學んだ。その途中海賊に囚へられて二千タレント(四萬二千圓)の償金を要求されたが、ケーザルは『自分の命はそれ計りの金で買はれるやうな安いものではない』と言つて、自分から進んで五千タレント(十萬五千圓)を拂ふ約束をした。そして囚禁の中に在り乍ら傲然として、夜などは寢室の傍で海賊どものやかましい話ごゑなどがすると、『靜かにしろ』といつて叱り付けたといふ。それで海賊等に向つて、『償金を望どほりやつたあとでは、今度は俺が貴樣達をのこらず磔にしてやる』といつてゐたが、彼等は冗談な大言として聞き流してゐた。然るにケーザルは友人より償金を得て、無事に自由を得るや、直樣、また自費を以て有志の人を集め、船にのつて海賊の立籠つた島に赴き、彼等を片端から捕へて磔にしたのである。とにかくケーザル再度の東方旅行は、彼にローマの地方行政腐敗の實況を聞見する機會を與へて、後日の改革事業を實行せしむる機縁となつたのである。

四、ケーザルの出世

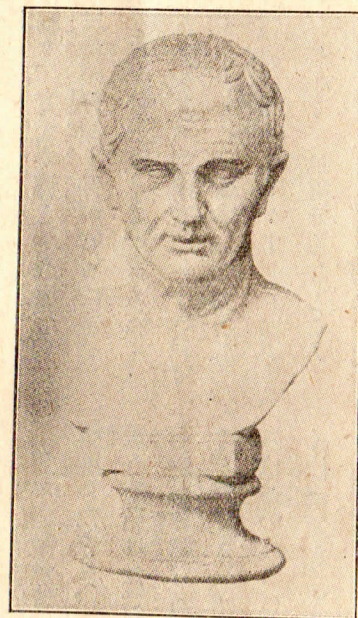
前七〇年ケーザルはローマに歸り、寛宏の德と、大膽の勇氣とを以て大に人心を收め、平民黨の首領と仰がるゝに至つた。併し彼は未だ他の援助を求むる必要を感じて、ポムペイウスをその人に選んだ。當時ポムペイウスは前七二年イスパニヤに赴けるマリウスの餘黨セルトリウスを征伐して勳功あり、聲望隆々たる有樣であつたのである。それでケーザルはそのころちやうど妻のコルネリヤが死んで、無妻でゐたところであるから、ポムペイウスの一族の女ポムペイアを納れて第二の妻とした。かくてケーザルは民主黨首領たる勢力を利用して、翌年はポムペイウスを推擧して、海賊征討の大將たらしめ、前六六年にはポントスの叛王ミトリダーテス征伐軍の指揮官に選擧せしめた。一方には益々金錢を散じて盛んに人望を收攬することにつとめ、新たに土地分配法を定めて貧民を利せんと計つたが、これは閥族黨の反對にあつて成功しなかつた。前六〇年にはケーザルはポンチフイクス・マクシムス(大長老)の位置を爭つて、その運動のため千一百タレント(二十七萬三千圓)の借金を背負ふに至つた。反對黨は金を贈つてケーザルに手を引かせようと試みたが彼は拒絶した。しかし借金は益々殖ゑるばかりで彼は二進も三進も行かぬ窮境に陷つた。かくて愈々選擧の當日には、ケーザルは涙をたたへて母に訣別し、『自分は今日、大長老となつて歸るか、それとも逃亡者となるか、二つに一つの道あるのみ』といつた。しかし彼は遂に首尾よく成功して大長老となつたのであつた。

翌年過激黨首領カチリナ政府顚覆の陰謀を運らしたことが露顯したとき、ケーザルも事に座して嫌疑を蒙らんとしたが危うく免れた。前六七年にはイスパニヤの知事に任ぜられた。しかし非常な負債のため、債主に迫められて任地に出發することができぬ。そこで彼は富豪クラッススに結び、クラッススは彼のために負債の三分の一を連帶として引負けたので漸く出發することができた。

五、第一三頭政治

さてイスパニヤに於いてケーザルは未だ從はざる土人を征伐して大功があり、前六〇年ローマに歸國した。ポムペイウスは、その前年アジヤ各地を平定して大功を立てたが、その當時ローマは、彼のカチリナの謀反事件以來閥族の元老院が大に勢力を恢復したので、ポムペイウスの武力をも恐れず、彼がアジヤに於ける諸國の獨斷的處分に認定を與へなかつた。

ケーザルはこの狀勢を見てポムペイウスと元來仲の惡かつたクラッススとポンペイウスとの仲に立つて二人を結ばしめ、三人聯合、閥族に當る計を立てゝ爰に、一の三頭政治は成立した。この結果として前五九年ケーザルはコンスル（行政の長たる統領にて二人あり）に選任せられ、その同僚のコンスル・ビブルスを威嚇して、何事をも爲すを得ざらしめ、ポムペイウスの東方に於ける處置を悉く認め、又土地分配法を制定して、無産者に土地を分配して生産の道を講ぜしめ、一方富豪等と閥族との間を離間せしむるなど、よろづ心のまゝに振舞ふことができた。翌年ケーザルはガリヤ・キスアルピナ（イタリヤの北部）及びイリリクム（今のオーストラリヤのダルマチヤ）の知事となつたが、元老院は更に彼をガリヤ・トランスアルピナ（即ち凡そ今日のフランス）の知事に兼任せしめた。これは彼をわざとこの方面に向け慓悍なガリヤ人と惡闘させて苦しめようと考へたためである。しかしケーザルは少しもこれにひるまず、着々ガリヤ征討の事業を完成した。

　これより先きケーザルの妻ポムペイアはケーザルの留守中クロヂウスといふ男と密通し、或祭日に、女服に人目を眩ました奸夫クロヂウスを家に引入れたところをケーザルの母アウレリヤに發見せられてこの事が評判になり、殊にクロヂウスは神聖なる神事の當日さやうな不都合を働いたといふので不敬罪にとはれて裁判事件となつた。ケーザルは直ちにポムペイアを離別したが、法廷では妻の不義を否定した。それで裁判官がその離婚の理由を問ふに對して、彼は『ケーザルの妻は、人よりさやうな疑念を受く可からざる者でなくてはならぬ』と答へた。ケーザルのこの證言に依り、クロヂウスは許されたが、ポムペイウスとの姻緣は切れたので、ケーザルはなほポムペイウスとの緣を繋がんため、自分の前妻コルネリヤの娘ユリヤをポムペイウスに嫁せしめた。而してクロヂウスを護民官として自分の手足とし、事に托して閥族黨の首領カトー及びキケロを遠ざけしめた。

キケロ石像
―マードリツト博物館藏―

　ケーザルは前五八年ガリヤ征伐に向つて後、前五六年イタリヤ北部のルッカに於て、再びポムペイウス及びクラッススと會合して三頭政治を固定して勢力を揮ひ、ケーザルは今後五年間ガリヤ知事の任を續くることし五年間クラッススをシリヤ知事に、ポムペイウスをイスパニヤ知事に任ずること、而して前四九年十二月ケーザル任期滿つるとき、不在のままコンスルとなる約束を定めて再びガリヤに歸任した。かくてクラッススは五三年シリヤで大敗して戰死し、甚だしく東方に於けるローマの國威を落したが、

ケーザルは前後八年ガリヤ征討の業に從つて、遂に首尾よくこれを平定した。爰に於いてケーザルの威名赫々として擧つた。閥族のキケロすらも『マリウスはガリヤ人のイタリヤ侵入を防ぎしのみ、未だ直ちに彼等の本土を衝くに至らなかつた。ケーザル出でゝ始めて彼等の巢窟を覆へし、アルプスより大洋（大西洋）に至るまでまたローマのため一の恐るべき敵を見ざるに至つた。』と稱贊した。しかし吾人が今日の眼を以て見れば、ケーザルのガリヤ征討の事業は、たゞにローマ共和國を安んじたばかりではない、彼がガリヤ人を屈服せしめ、これを同化してローマの文明に浴せしめたのは、世界の文明を擴張促進する上に於いて非常な功績であつたのである。

六、ケーザルとポムペイウス

　然るに一方ポムペイウスは、ケーザルの名聲が日に昂るに連れ、漸く嫉妬を起し始め、前五四年妻ユリヤ死してケーザルと姻緣の絕ゆるに及び、閥族の元老院と結托して彼を倒さんと謀つた。しかしこのポムペイウス對ケーザルの爭は、ケーザルの方行動の巧なる爲め、いつもポムペイウスの方が非理に落ちるやうなはめになつた。例へば閥族及びポムペイウスは、ケーザルの任期が前四九年十二月になつて始めて滿了するに拘はらず、その滿期以前にケーザルに召命を發して、速やかに軍隊をすてゝ歸國せよ、應せざれば國敵と見做すべしといつたが、これは明かに法律を無視した事である。それゆゑケーザルの部下の護民官アントニウス等は、元老院に對してその中止權を用ゐようとしたが、ポムペイウスは部下の兵士をして白刄を以て彼等を脅迫した。それで護民官等は奴隷の服を被て夜中ローマを脫し、ケーザルの許に逃げて行つて事情を訴へた。兵力を以つて人民の公安を保護する役目として、その身體は神聖不可犯と定つて居る護民官を威嚇するなどといふことは益々違憲の所爲である。これは偶々ケーザルのために閥族に最後の打擊を加へる絕好機會を與へたにすぎぬ。

ポンペイウス胸像

　當時遠方から歸つて來たキケロはこの狀勢を目擊して、これはケーザル、ポムペイウスの何れをして勝たしむるも、閥族のための不利益であると考へて、兩人の間に調停を試みた。ケーザルは之に對し『よし余は單身ローマに歸る可し、然しそれとゝもに、ポムペイウスも直ちにその任地イスパニヤに往かざるべからず』と答へた。ポムペイスは、それでは自分の立脚地がなくなるので、これを拒絕し、こゝに調停に應せざるの責任

を負はねばならぬ事となつた。その後ケーザル征討の軍を募つたがはか〴〵しく集まらぬ。その中にケーザルは大擧南下してローマ府に逼つたので、準備のとゝのはぬポムペイウス及び閥族の元老院議官等は、倉皇迯れてギリシャに走つた。ケーザルは進んでこれを追擊して、翌年ファルサルスの一戰大にポムペイウスを破り更に追ふてエジプトに入つたが、エジプト人はポムペイウスを殺してその首をケーザルの陣に獻じた。

七、ケーザル天下を掌握す

今は天下にケーザルに敵するものは一人もない。彼は破竹の勢で更に前四七年長驅して小アジア、シリヤに向ひ、ポムペイウスに與したミトリダーテスの子ファルナクスをゼラの會戰に破つた。この時の勝報を有名なるVini Vidi Vici（我來り、我見、我勝つ）の三語に約して、本國に報じたのである。同年末ケーザルはガリヤに赴き、翌四六年春閥族黨の首領スキピオ及びカトーをダプススに破つてローマに歸り、十年間のデクタートル（總統）に任ぜられた。更に翌年ケーザルはポムペイウスの二子、クネイウス及びセクスツスをムンダに破り、ローマに歸つて盛んなる凱旋式を擧げ、終身のデクタートルとなつた。今やケーザルの威望は極度に達した。しかし前四四年マルクス　アントニウスが彼に王冠を捧げたが、ケーザルは受けなかつた。これは人民のこれを喜ばぬことを慮かつたからであるといふが、實際に於いて彼は既に帝王の事を行つてゐたのである。そこで一部の誤解と嫉妬は次第に甚だしくなつて彼に對する陰謀企てられ、ケーザルがパルチャ征伐に赴く前に臨みて彼を刺さんとする計劃成り、前四四年三月十五日イデスの日を以てケーザルがパルチャ征伐の事を議すべく議事堂に向つたところを、多勢相集つて彼を暗殺したのである。時に歳五十八歳であつた。

八、ケーザルの功業

さてケーザルに就いては、十八世紀の頃ヨーロッパに民主主義の思想が極端であつた時代には、彼の人物事業の價は甚だしく下落して、その野心を責め自由の發達を阻害する敵であるやうに考へられてゐたが、近世の史論は却つて彼の境遇と行爲の間に必至の關係を認め、益彼の偉大を證するに至つた。

今ケーザルの功業の特に大なるものを擧ぐれば、第一に、彼は人民の上下貧富の懸隔を除くことに盡力し、行政と財政の整理の上に心血を濺いだ。殊に地方行政に對しては、壯年より地方に在つて深く弊害のある所を聞睹してゐたのでこの方面の改革には最も心を苦しめ、いかにせば大ローマ國屬領内の人民が平等に平和幸福を享樂して、統一的文明の光に浴することを得べきかと考へた。その結果地方官及び各都市の官吏に對して嚴重な監督を試みて、彼等の惡政を防いだ。彼は、又地方の繁榮發達を謀り、處々に植民市を造つて都市の人口過剰の弊を滅却する爲めに、無產者をこの植民市に移して有產者たらしむる道を啓いた。それがためには嘗てローマ人が產業上の敵として破壞したコリント市やカルタゴ市をも再興した。ケーザルの時代には海陸軍は勿論警察事業等も大に整頓して秩序を回復し、また奢侈の弊を憂ひては法律を以てこれを禁制した。其他高利貸の跋扈を抑ふるため、貸借の利率を制限し、刑法の改正を行ひ、暦法を改定して謂はゆるユリヤン暦を布いたが、これは今日もロシャに行はれてゐる。なほケーザルは文藝美術をも奬勵し、盛に大建築を起してローマ府の面目を一新した。尚ほ彼の計畫中には、ローマに二大圖書館及び博物館を起すこと、コリントの地峽を開鑿して東西の交通に便にすること、チベルス河を改修してローマの衞生上實業上の便益を增進すること、及び最後に自らパルチャを征伐して、東方にローマ文明を擴めんとしたこと等、何も實れに彼の大手腕を要する事業で、その完成に先ちて、刺客の毒刄に倒れたのは、惜みても惜む可きことであつた。

ケーザルが始めより、あれだけの地位を得んとを志してゐたた否か、それは分からぬ。彼が始終權力に渇してゐたのは事實であるが、果すて史家モムゼンのいふやうに、始めから獨裁君主たらんとする志を抱いてゐたであらうが、或は騎虎の勢次第に權力を得ると共に志も大きくなつて遂にあれだけの事業を殘すに至つたのではないか、どちらかといへば、まづわが豐臣秀吉が始め織田信長に依つて志をなさんとした時に、まだ天下を望むまでの野心はなかつた、これが次第に時勢の力で作り上げられて行つたと同樣であると、見るべきである。若し夫れケーザルに實際名目まで王者たらんとする希望があつたかどうかに至つては、到底千古の疑問と云はねばならぬが、しかし事實に於いて彼の晩年はローマ帝國の皇帝であつて、彼が統一的ローマ建設の理想から言つても到底いつまで共和政治の形式を守るにたえなかつたであらうと思はれる。

九、ケーザルの人物

ケーザルが本來寛大な德を備へた人物であつたことは、敵味方共に許すところである。彼に反抗したものと雖も大抵は宥した。ただ政略上時に征伏の土人などに對して殘酷な所爲を敢てするのは、やむを得ぬからである。彼が敵に對しても情の厚かつたことは、ポムペイウスの首を實檢に入れた時涙にくれて面を背けたといふので分る。彼の統一的大ローマ建設の理想の上には區々たる敵味方とか、ローマ人とか地方人といふやうな區別はない、一樣適材と信じたものを擧げ適て所に用ゐた。蕃族の酋長などにもずん〴〵市民權を與へた。

ケーザルの志の大きかつた例證は、彼がイスパニア征伐に赴く途中、ある寒村をすぎたとき、部下の者が『かやうな村では位置の上下を爭ふ必要もあるまい』と言つたのを聞いて『余はローマに於いて第二者たらんよりは、むしろこの村に於いて第一者たらん』と言つたといふ話や、それからイス

パニアの陣中に、アレクサンドル大王傳記を人に讀ませて聞き乍ら、はら〳〵と涙を落した。部下のものが怪しんで問ふと、『アレクサンドルは自分の年には既に大帝國を作つてゐる然るに自分は今にして顧りみて何の爲すところもなかつたのを悲しむのである』といつたといふ。

ケーザルは將軍としてその部下の人心を收むる力の非常であつたばかりでなく、彼等の間に義に依つて命を輕んずる立派な武士的精神を鼓吹した。その例は、彼の部下の一將が敵の捕虜となり、敵は彼の地位を重んじて釋さんとしたとき彼は昂然として、『ケーザルの部下は人をゆるすことはあつても人にゆるされることはない』と言つて、立派に自殺したといふ話がある。ケーザルの感化力の偉大なるを見るべきである。

彼はまた部下と難苦を共にした。あるとき進軍の際十分の宿舍を得ることができなくつて、ひどい百姓家に假の宿營を求めた。このときケーザルは自分の爲めに設けられた上段の床を拒んで、『名譽のことに於て上下はあれ必要の前には上下はない』と言つて、傷病の兵士をそこに伏せしめ、自らは戸口の際の土間に寢たといふやうな話もある。

家庭の人としてのケーザルは、母に孝行妻に慈愛が深かつた。その當時のとゆゑ品行の方正如何は保證せぬが、特に惡かつたといふ證據もないのである。身體はあまり丈夫でなく、始終瘦せて病ひ勝であつたが、いざ出陣となると元氣平日に百倍していかなる困難にも耐えた。最後に彼は辯論にも仲々巧みであつて、文章も立派に書いた。彼の遺著『内亂記』『ガリヤア征討紀』などを見ても、華美を避けた質實簡明の文章に一種の味ひがある。彼はまたラテン語の研究に興味を寄せて、これに關する著書もあつたが、惜いかな今は傳はらぬ。

生涯ケーザルの敵であつたキケロも彼を評して『天才、頓智、文才、記憶、愼重、劃策、勉强、これ等の特質はすべて彼の一身に集めたり』と言ひ、史家ドルーマンも『ケーザルは、將軍、政治家、立法家、法律家、辯論家、歷史家、詩人、文章家、數學家、建築技師として、その何れにも絶倫なり』と言つてゐる。彼が百般の武藝に熟し、戰術に於ては卓越した技倆のあつたことは、世既に定論あり、今更喋々する必要はない。實にケーザルは古來稀有の天才的偉傑である。

ケーザルの繼承者羅馬最初の皇帝（ケーザル）オーグスツス

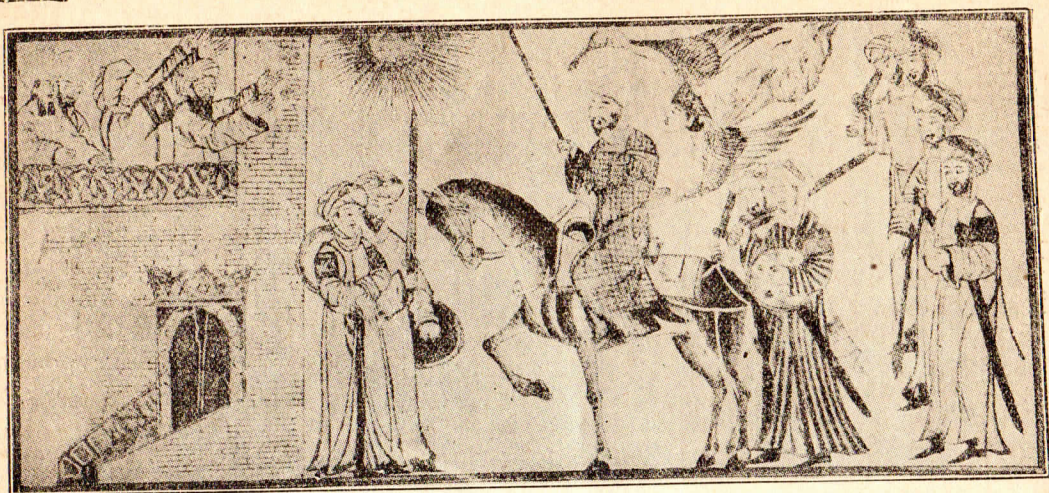
マホメット敵城を攻圍する圖

一三一四・五年のアラビア彫畫マホメットの像は最珍重すべし・倫敦皇立亞細亞協會文庫所藏

回教大教祖マホメット

早稻田大學教授　文學士　煙山專太郎

一　世界の回教徒

二十世紀の今日世界の回教國として其獨立を保持しつゝあるものはペルシアとトルコとの二國に過ぎず。しかもペルシアはロシヤ、イギリスの南北兩强國の競爭によりて僅に其存在を持續するのみ。トルコに至りては今なほ歐羅巴の一隅を占めつゝはあれども、近くイタリヤとの戰爭によりて既にトリポリを失ひ、次で刻下の變、バルカン諸國の侵襲を被りてやがては全く歐羅巴よりして驅除せられんとす。回教國の現代の國家的競爭場裡に立つの能力なきこと此の如しとせば其運命知るべきのみ。さはれ、彼等は其氣力衰へたりとは云へなほ世界人口の一割五分餘を占めつゝある一勢力なり。一九〇六年の統計によれば其數二億三千三百萬と概算せられ其中亞細亞にあるものは全體の過半を占めて一億六千九百萬に達し、阿弗利加にあるものは四分の一以上にして、即ち約五千九百萬、歐羅巴にあるもの五百萬、亞米利加五萬大洋洲二萬なり。その歐羅巴にあるものは次第に減ずるの傾あれども、アジア方面に於ては回教徒は其出生によりて自然に增長し、阿弗利加方面にては又蠻野未開の黑人間にひろまりて著しく其勢力を擴張しつゝあり。回教にもともと布教と云ふことなきにあらざ

れども、彼等の布教は何れかと云へば、各派間の布教にして異教徒に對するの布教にあらず。一派のものが他の派のものを引き入れて自派の勢力をおし弘めんとするだけに止まる。近代に至りて回教の阿弗利加黑人の間に傳播したるは平和なる回教商人及移民の無意識的行動の結果のみ。即ち此の如くにして回教徒が其の亞細亞、阿弗利加に於て略し得たりし彼等の領土はその一度彼等に歸服するや、よし他日基督教國の之を奪略するのことあらんとも、かつて回教を拋棄するが如きことあらざるに、獨り歐羅巴にありては然らず、イスパニアに、シチリアに、マルタに希臘に彼等の昔、有したりし領土も今は悉く他手に歸し、回教の大本山たるコンスタンチノープルに於てすら、希臘教の大司教の此程、己の教權の至高最上なるを敢言するも、土耳古は之を如何ともすること能はざるの體たらくなり。土耳古の歐羅巴にあるは實に列強權力の均衡が促せる政治的必要に起るのみ。さればかゝる人工的の彌縫手段にしてこれなからんか、回教はなほ遙に東方に追ひやられたらんは必定なり。

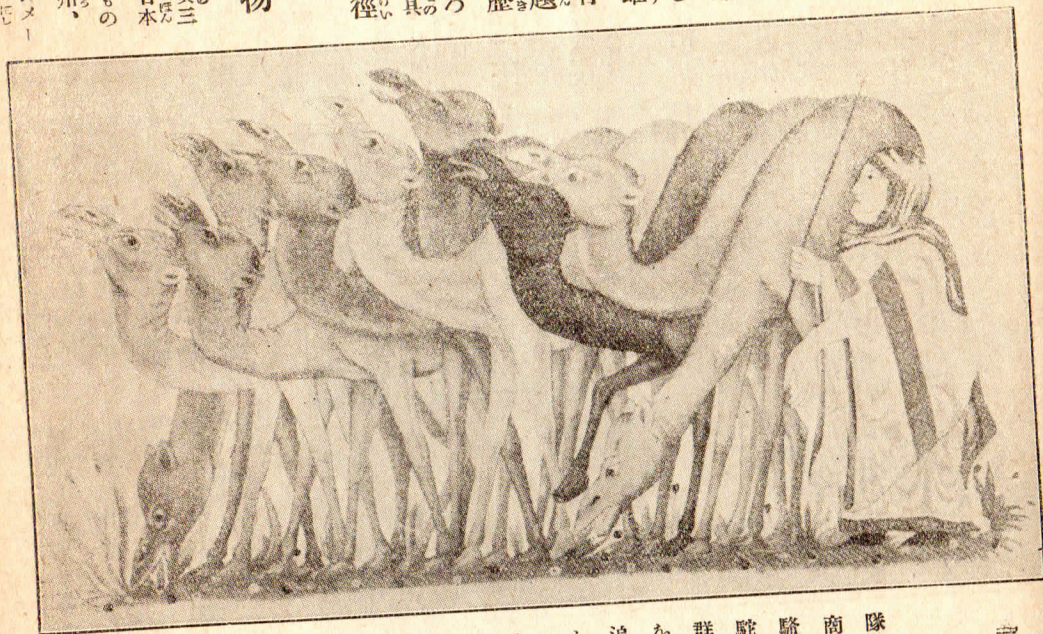
現在、回教徒の基督教徒の管轄保護の下にあるもの約一億六千一百萬にして、その中八千一百五十萬は英吉利に屬し、約二千九百二十五萬は和蘭陀に、約二千九百二十五萬は佛蘭西に、一千六百萬は露西亞に屬す。獨逸の阿弗利加殖民地には回教徒の數二百五十萬あり、伊太利、葡萄牙、西班牙の三國も亦同大陸に於て總計七十五萬を有し合衆國の非律賓群島には三十萬あり。之を要するに回教は本來、熱帶圈の宗教なり。北緯三十度と南緯三十度との間、即、溫度の平均華氏の六十八度を示すなる地帶の宗教たるなり。

二　今日の無力は如何

回教は熱帶の宗教なれども其文化の最燦爛たりしは、これが熱帶圈より北漸して北緯四十一、二度にまでも膨脹したりし時にあり。回教徒は北に進取して始めて其著しき天才を闡發したるなり。實にアラビアの文明はセム人種がこれまで作りたりし文明中の最高度を極めたるものなり。假令其盛時のしばしの間に過ぎざりしとは云へ、アラビアの文明はすべての點に於て其先進同族を凌駕したり。アラビア人にはヘブライ人の如くに國民的自信あり、又高き大理想を説唱するの力ありたるのみならず、その力はヘブライ人のそれよりも一層に確實たるものなりき。彼等は又フェニキア人及カルタゴ人の如くに、戰士にして且商人を兼ぬるものなれども、其事業の規模の雄大にして且其歴史に及ぼしたる影響の永續的なるの點に於てはフェニキア人カルタゴ人の到底、及びもなき所なり。彼等は過去の民族的遺傳を保ちながら、なほ之を一層に擴延し、恰も各セム人種の優勝なる民族的特質を融化して一丸とし、以て一大國民性をなすに至りしものゝ如し。カーライルは之を評して云ふ『アラビア民族マホメット及其一世紀、これさながら一點の花火の黑きつまらぬ砂土に落ちたらんが如し。されど見よ、其つまらぬ砂土は爆發力を有してデーリよりグラナダまで殆ど天に冲するの火炎を揚ぐるに至りたるならずや』と。古代の文化を保存して之を近代に傳へたるは彼等なりき。中代世界の最大文明國として文教宣傳の任に當りしは彼等なりき。將た支那、印度の優絶なる文物を輸入して之を西洋に傳達したるも亦彼等なりき。彼等なかりせば歐羅巴の進歩は數百年の停滯を見るの止むを得ざるものありしならん。然るに一時此の如くに雄大を極めたりし此民族教徒の今日の墮落無力はいかん。吾人此問題を解明するに當りては永々しき歴史物語に耳を傾けんよりも、寧ろ一躍、教祖其人の時代に溯りて其閱歷言動を一瞥するを以て最捷徑なりと信ずるものなり。

三　アラビヤの風物

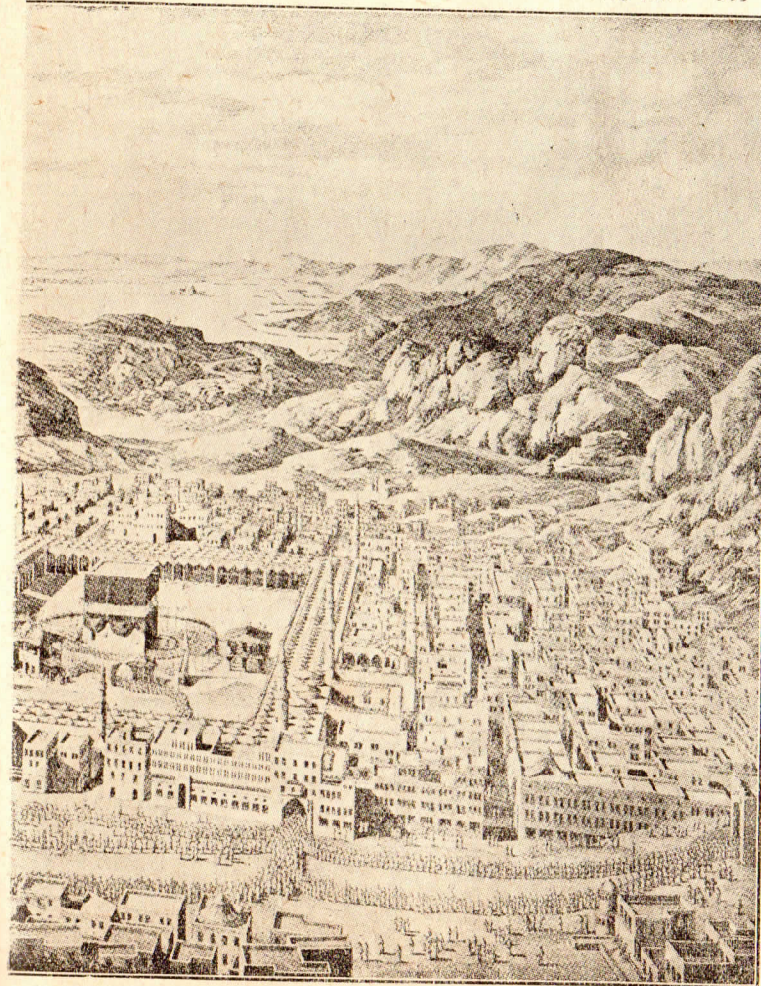
アラビア半島は居然たる一大陸なり。其三分の一は砂漠の荒原なれども廣袤は我日本現在の領土租借地の全部を合計したるものの三倍よりも、なほ大なること四國、九州、北海道三島の面積なり。土地は平均三百メートルの高さを有し概して東方に低くして西に

（一）隊商駱駝群を追ふ——アラビア古審畫——

趣くに從つて高し。西紅海岸の山脈をサラートと云ふ。蓋しアルメニア、シリアの山脈の餘派ならん。この海岸にチハーマと稱する狹き平地あり。全陸土はサハラ地方やイラン高原の如くに、雨量少く非常に乾燥し氣候苛烈なるも、南方は他よりも人間の居住に適するものあり。從つて人口も多く都會も繁昌せり。住民の大部分は氣候と地質との關係上遊牧生活を營み、從て各地方は互に相孤立隔絶し、エーメン地方は寧ろ紅海を隔てたるアビシニアと近く、ヘジヤスは其南アラビアに對するよりも北方なるシリア地方と親密の關係を有し、オーマン地方は却てペルシア灣によりてペルシアと交通し、之等のすべてを統合せんこと頗る困難なりき。上世には南アラビア殊にエーメン地方は農商業隆昌にして其都會其都城の大なるは住民の勤勉なるを示し、又其神殿の壯麗は彼等の敬獻的證左たりしかど、此地方殷富の抑々の源たりし印度貿易のヘレネス時代に至りて衰へしより、住民の活動は又古の如くならざりき。されどアラビアはローマ帝國の武威の最も振張したりしアウグスツスの時代にありても、なほ且その腕力を被らざるを得、かくて中古の初に至りては其の政治上の重心は次第に北漸してヘジヤスに移れり。

マホメットが誕生の地たるメッカはヘジヤス地方の一都會たり。北より南に走れる低地に位し、その市街の中央にカーバの神殿あり。これもとは月神フバルの靈場たりしものなり。場内に有名なるセムセムの靈泉あり。メッカの繁昌は蓋し此カ

ーパを中心とする商賣によるなりき。當時アラビア種族の生活狀態を點檢するに宗敎上に於ては多神崇拜あり、迷信的の儀式行はれ、其儀式の中には無害なるものあり、馬鹿々々しきもありたれども、その醜汚に堪へざるものも亦尠からざりき。多神は多くは女性にして其本尊として祭らるゝものは偶像なりき。社會上にも割據孤立的の弊風行はれたり。アラビアの社會の基礎とする所は各種族に屬する全員の連帶責任と云ふことにあり。種族の一員に關する私怨も私情もやがて擧げて其同族全員の公事たるを以て目せられたれば、一人の傷害のために兩種族の血鬪の結んで釋けざるもの久しきにわたるの有樣なりき。かくて鬪爭の双方の勝敗を決採するに至らず、敵も味方も疲勞し果てぬれば、彼等は互に此戰に倒れたる同族勇士の數を合算比較し、其多かりしものは それだけに對する償金を要請して初めて和を媾じたり。人を害するの故意に出づると無意に出づる との見別は一向に彼等の認めざる所なり。道德上に於ても言ふ[illegible]に忍びざるの惡習ありたるが、中にも慘の慘たりしは小兒殺しの俗風にてありき。主として殺害せ らるゝは女兒なりき。かゝる時に當りて豫言者現れ出でたり。

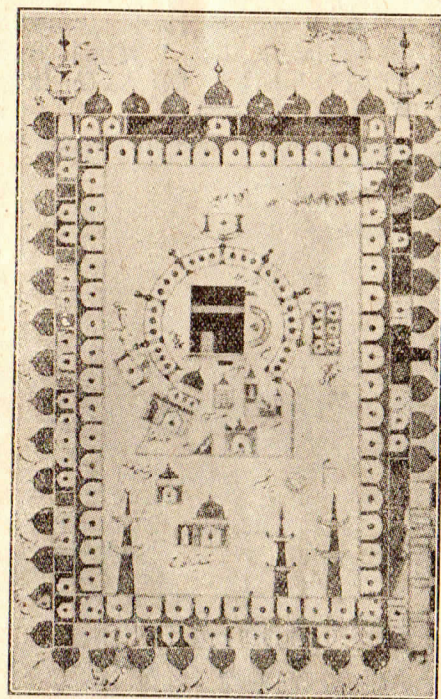
四　マホメットの人格

豫言者とは何ぞ。ユダヤの昔にては宗敎思想其身心に充溢し、之を俗世界に披瀝せんことを以て其畢生の目的とするなる熱狂者に名くるに豫言者の名を以てしたりき。之によりて之を見れば豫言者には二個の重要なる性質あり。一は他人の未だ得て洞看するを得ざる宗敎上の眞理を看破することなり。二は勇猛心を以て外に向て此宗敎的眞理を披陳し宣傳することなり。而して彼の之を言明し、唱說するは實に止まんとして止むこと能はざる內的動機の動かす所となる。彼は己の衷にある者は絕對の自信を以て神の意志に發源すとなし、己を動かせる大思想を以てこれ神的眞理なりとす。此等の點に於てマホメットがユダヤの最も勇壯なる豫言者と毫も異る所なきを以て之を見れば彼を豫言者と稱せんこと

毫も僭越なりとせざるべし。彼の其眞理をかざしてアラビアの荒原に馳驅するや彼はいかなる迫害にも屈せざりき。自ら云ふ、假令日が右手に、月が左手に逆行せんとも、余は斷じて余の目的を棄つること能はずと。安房の眇たる漁夫の子として生れし日蓮が法然や親鸞の如くに權門勢家の後援あるにあらず、唯其拔くべからざるの信仰を持して天下と鬪ひ、淨土や禪宗の跋扈せる鎌倉の地に突入して罪を得て幾度か流罪に處せられ、幾度か無知の頑民の襲擊する所となりしも屈せず撓まず、二十二年にして終に一宗開山の大目的を貫徹するを得たりしは、これ、此大自信による。蓮門敎會の敎祖島村みつは山口縣の一匹婦のみ。彼其家貧幼にして小倉に出で、下女奉公し、漂浪數年に及びしが、一旦神託を得て自ら神となれりと大覺し、爾來其所謂神命なるものを近親知己に說きたりしに、何人も彼を以て狂者として、之に其耳を傾くるはあらざりき。されど神を後楯となせりと確信したるのみつは、世人の冷笑にも嘲罵にも更に頓着せずして其道を弘め、終に一部の歸依者を得て明治四年蓮門敎會を興すに至りたり。その淫祠を以て識者の排斥唾棄する所となれるにせよ、之が創業のこと豈にそれ輕薄者流の企て及ぶ所ならんや。みつは文盲狡譎の一老婆ならんも知るべからざれども、彼はともかくも大なる性格を有せるの女性たるを失はざりしなり。田舍農家の一少女たるジャン・ダルクが神命によりて起つと稱して、意氣沮喪せる堂々たる有髯の諸將軍を鼓勵し、イギリス軍を追ひてフランスの急を拯ひたるも、これ此大自覺大靈感の賜なり。洪秀全は讀書人にてはありたれども、其鄕黨の間には賭博ずき、

メッカ市全景
―一七九〇年巴里出版ドウスンノ著「ツトマン帝國繪圖」より―

酒ずきを以て聞へたる外、何等の注意をもひきしことなきものなりき。然るに一旦、太平天國の旗幟を飜して天下に呼號するや、四百餘洲は爲に震撼したり。これ亦彼が大なる自信力によるものたらずんばあらず。性格の威力は學問によりて得られたるものにあらず。而して其能く大事業をなすや實に此の如きものあり。マホメットは亦實に偉大なる性格を有せし人にてありき。

歴史的の人格には其性行習癖の尋常を以て律すべからざるもの多し。吾人は又マホメットに於ても之を見る。彼が宗敎的興奮の絶頂に達したりし時には彼は往々にして幻影を見たり。ルーテルが惡魔を見てインキ壺を之に投げつけたりてふは有名なる話なるが、マホメットの精神的發作はなほ之に數倍したるものなりき。

彼はナポレオンの如くに幼時よりして癲癇病を有したり、これは年を經るに從ひて增長して彼をして屢々、危險の狀態に陷らしめたり。かゝる發作の起る際には彼は第一に重き感情に襲はれ、四肢冷却し恰も熱病を有するものゝ如くにふるへ、次に耳鳴りし、目はすわりて動かずなり、頭も痙攣的に動く。大汗が顔面に流れ出づる樣になれば、これ發作の終りを生げたるを示したり。彼は此外、又突然發病して地に倒るゝこともありたり。かゝる際には人々助けて人事不省の彼の顔に頻に冷水を注ぐこと霎時にして之を蘇活せしめたり。彼が色々の幻影を見たりしと云ふは思ふに此のヒステリーの發作の折にあるべく、彼は時に何人も居らぬ空室を見て天使その中に群居し坐すべきの地なしなど云ふこともありたり。モルモン宗の敎祖ジョセフ・スミスは一八四四年その心に靈覺を感じ、人なき山林にさまよひ入りて突如、夢か夢にあらず、現か現にもあらざる恍惚の境に入り、ガーレン及スウェデンボルグと邂逅して二人者の激勵する所となれり。彼の著『天則』は亦實に彼の此無我の境にありし時にものせられしものなりと云ふ。此書や回敎經典ほどの成功をば收め得ざれどもなほ三十年の間に三十四版を重ぬるを得たるものなり。マホメットも亦神と相通ずるの大能力を自覺することに於てはスミスと揆を一にする者なりき。

メッカ市のモスク及カーバ神殿
——一五七六年波斯の巡禮記所載——

五　時勢に投ず

凡そ事の成ると敗るゝとは當事者の之に對する熱誠の度と彼の才略の有無とによるべきこともとより論なけれども、時

勢のいかんも亦甚しく、之に關係するものなるを忘るべからず。フースやウィクリフの宗敎改革運動の失敗に了りてルーテルをして獨り改革者たる名聲を專にせしむるも、山縣大貳、竹内式部の勤王運動の果敢なくして木戸、大久保、西鄉等の薩長青年をして新日本の建設者たるに至らしめたるも、多くはこれ時勢なり。マホメットの功業も亦決して之に除外例たる能はざるなり。彼はその時勢に於て少くとも内外二重の惠みを受けたり。そは外に於ては第七世紀の初數十年にわたれる二大雄邦東ローマと波斯との爭鬪が結局互に双方の國力を糜費し以て第三國をして西方亞細亞に崛起せしむるの餘地を作るに至りたることにして、内に於てはアラビアの一般狀勢が自ら改革の氣運を促進するに至りしことこれなり。吾人は既にマホメット出現前に於けるアラビア文化の有樣を一瞥したり。此狀態は心あるものをして之を見しめたらんには、到底之に滿足すべくもあらざりしなり。果してアラビアの所在にはハニフと稱する宗敎者の起るありて罪惡を脱離せんと骨折れり。彼等は宗派と名くべきほどのものをなせるに非ず。又整然たる一定の見解の上に立ちたる譯にも非ず、相互に交通をばなしたりしも、別段に親密なる團體をなせるには非ざりき。彼等の求むる所は己一身の解脱にあり、其說を社會に弘布すると云ふが如きは其目的とする所には非ざりしなり。彼等は多神偶像を斥けて唯一神を尊奉せんことを欲するものなりしも、この希望や信仰的にして智的にあらず、彼等は隱者にして議論の士には非ざりき。

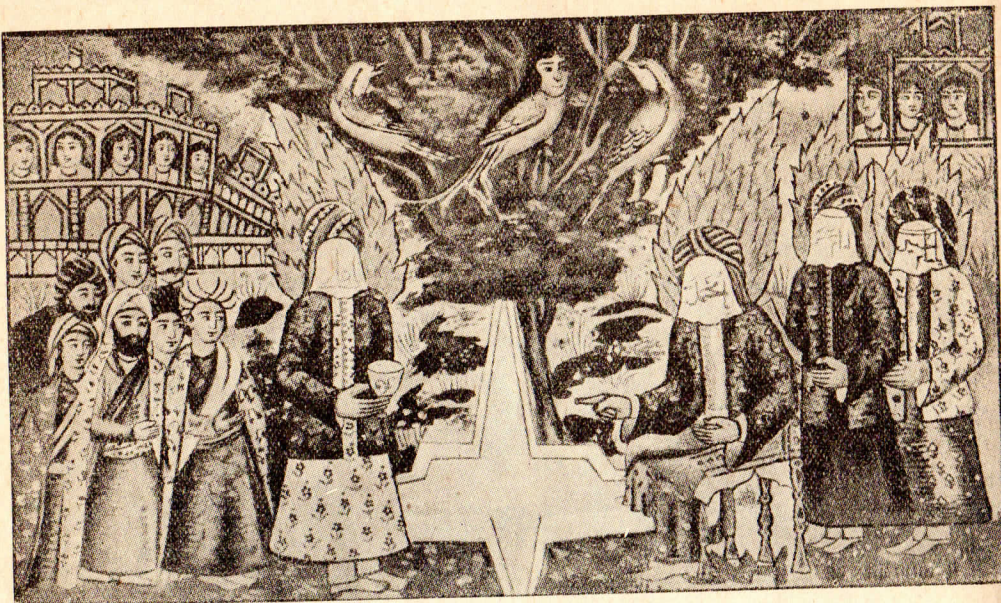
富豪の寡婦に入夫となりて商賣に從事し、年不惑に至るまで極めて平凡なる生活を營みつゝありしマホメットは、これ等のハニフの一人を其姻戚に有し、かゝる關係よりして自ら其頭を宗敎問題に沒入するの機會を有して彼自もハニフとなりて屢、メッカ附近の山中に入り、冥想に耽りたり。精神病的發作を有せる彼はかくて神冥と相感通するの大自在境に達し、これまでのハニフの消極的獨善主義をやめて己の闡明し得たる眞理の宣布のために邁往せんとの大決心を惹起するに至れり、思ふに彼の此の如くに珍しくもハニフの舊態を捨てゝ斷然たる處置に出でたる所以のものは、ユダヤの豫言者の壯烈なる事蹟に感憤せられたるべく、而して又彼のユダヤ敎に關する知識は其シリアの商用旅行の際及ヘジャス地方在留のユダヤ人との交際によりて得たるものたりしならむ。

六　簡明卑俗の敎說

時を得たるマホメットの勃興して其新なる福音をば驚くべき短時日の間に諸方に宣傳するを得たりし所以は一には彼の敎說のいかにも簡明卑俗にして俚耳に入り易かりしにも因らずんばあらず。第一に回敎には殆んど創始の見るべきなく其敎說の大部分はユダヤ敎基督敎其他の舊信仰の燒き直しに過ぎず。彼自とても亦敢て新奇の宗敎を創むるものなりとは强言せず、單にアラビアの舊信仰にかへらんと欲するものなるを告白したり。されば彼はユダヤ敎よりして其全能の神を採れり。「活き働き、語り、世をしろしめすなる神の啓示を得た

り。彼は又最後の審判を說き、地獄天國の物語をばアラビア人の心理に適合する樣巧に造りなほせり。彼の所謂アラーとイブリスとはそのゾロアストル敎のアフラマズダ、アングロマイニユーの變形なり。天使と惡魔、天堂と地獄の說、天堂と地獄との間に橋ありて正者のみが之を渡りて彼常に達し得べしと云ふの說は皆これペルシア敎のまゝなり。彼はアラビア同胞のこれまで拜せし偶像を破壞したれども、己の新福音に於ては人と神との間に天使と共に浮揚交通しつゝあるのジン、リヴ、ペリの諸精あることを說けり。見るべし、彼の宗敎のハニフの改革說及アラビアの舊信仰に加味するにモーセ、ゾロアストル、イエス等の敎の幾分を以てしたるものに過ぎざるを。彼は只此の舊き傳說を繼襲してエルサレムに向けてなさるべき祈禱をメッカに向けしめ、チスリの斷食をラマダンの一個月間に換へ土曜の代りに金曜を主なる禮拜日となし、なほ又己を以て唯一神の眞宗敎を宣傳する最後の豫言者なりと大呼せしのみなりき。曰、『アダム以來の眞正の宗敎は已に此世に存立せり。こは唯一眞神を信じ預言者に傳へし命令に服從することこれなり。ノア、アブラハム、モーセ、イエスは皆豫言者なり。さればユダヤ敎基督敎に全然誤れるものとは云ふを得ざれども、未だ必しも眞諦に徹底せざるなり。余が永遠不朽の眞宗敎を傳へんがために遣はされたる所以なり。正に余は預言者の最後のものにして且又其最大なるものなり』と。

マホメットは深邃の思想家には非ざりき。彼の才はその時人の水準を甚しく懸絕すること能はざる程度なりき。從て回敎經典には幽玄の大思想の求めらるべきなく、美妙なる詩的言辭の人を動すものあるなし。極めて平凡なり。單調なり。卑俗なり。これ說敎の對手たるべきアラビア人の心理に適應するの實際的必要上、蓋し止むを得ざるものありしならん。イエスの神は余が聖なる如く汝等亦聖なれ。天に於ける汝等の父の完全なるが如くに完全なるを云ひたるがマホメットの神はかゝる大なる要求を提することなし。彼の說ける天堂地獄は飽くまでも肉感的なり。之を以てウォルテールは回敎の成功するが信徒の心意を肉慾の方面に引きつけ得たるに職因すと云ひたるが寔に然り。

マホメットは又多くの豫言者の如くに奇蹟に付て云々せざりき。只『余は人間のみ。宗敎に付て汝等に何事かを命ずるはこれ余が其使命を他に受けたるに因る。余は人事に關して色々の命令をなすと雖、もと一介の人間に過ぎざるなり』と。此の如くに彼の敎說は獨創を缺きて言々卑調を帶びたるは會之をして却て明晰ならしめたる所以にして、其禮拜の形式の簡易なるも、其道德の飽くまでも實際的にして人間の弱點に投合するものありしも、皆々が勢力の一部に外ならず、無學朦昧の異敎人の忽ちにて靡然として彼に趨歸し、回敎が基督敎國以外の民族の間に古今未曾有の急激突飛なる傳播をなすに至りしは、實に之にこれ原因したり。彼はかくて至難の一政治問題に初めて之が解決を與へたり。そはアラビアの民族を以て一の國家一の帝國を建成するの事業即是なり。彼の唯一

――フリの聖族（マホメット・アリ・ブサン・ザイン）極樂の井のほとり――ツウバの樹の下に集る・樹の上にはホーマ鳥棲む
アムステルダム美術館藏波斯古寶石篋

神教の靈場をエルサレムよりメッカに移し、先づ之を國民化したり。由來血族は、アラビアに於ける政治上社會上の關係の基礎をなせしものにして、かゝるを基礎とせん限り孤立的割據的なる各部族を糾合して無政府の狀態より、永續的の大なる政治系統を築きなさんこと到底及びもなき所たりしが、今や彼の國民的宗敎は此蟠根を決裁し、其目的を貫徹することを得たり。

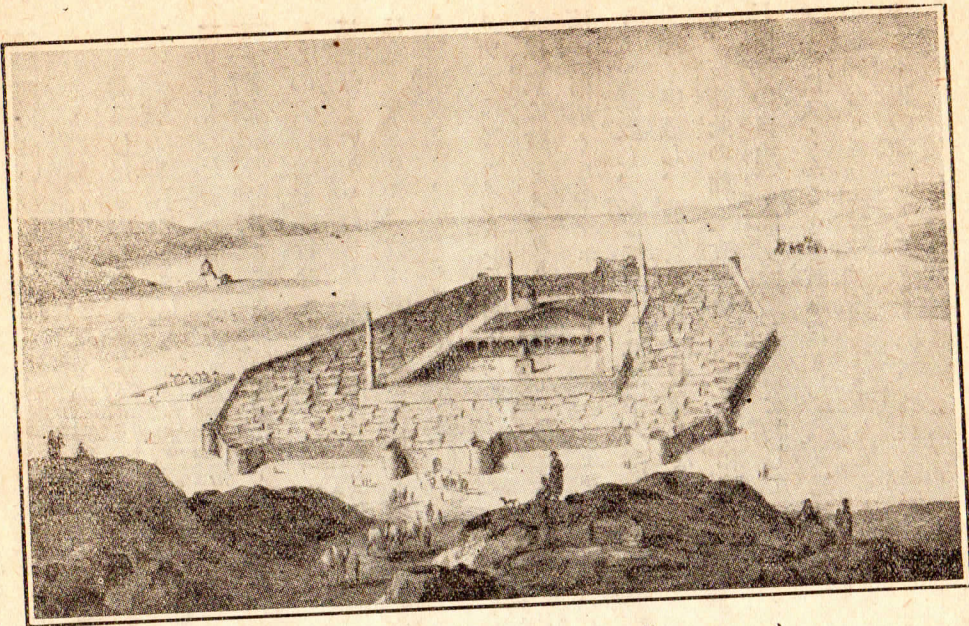
七　成功の主因―戰鬪主義

回敎の成功の大原因は其劍を用ゐたるの點にあり。マホメットが布敎と土地侵略との二つのものを結合せしめたるにあり。かゝる侵略の動機の中には眞理を弘め眞宗敎を宣布せんてふ單一なる希望の外になほ數多の俗的動機のありたらんこともとより否認すべからざる所なり。夫れアラビアは不毛の砂國のみ。ブルクハルトの槪算によればマホメットの時代に於て此大陸に住せし人民の數一千四百萬に上りたるべしと云ふ。八百萬五千方哩の尨大なる陸土なりとは云ひながら、かゝる磽确の荒原に此人口を支持せんこと困難なりしと云なざるべからず、女兒殺しの惡風は生活難の已むを得ざる結果なりしとのみ。然るにマホメットの麾下に統一せられたるアラビア人は今や北にシリア、メソポタミアの沃地を見、西にエジプトの古文明國の存在せるに氣付きたり。物質的缺乏と富を慾求する彼等自然の要望とが此英氣潑剌たる天性の武族をして侵略を發意せしむるに至れる所以のもの奇むに足らざるなり。思ふに回敎にして勃興するのことあらざりせば、アラビア人は終に世界的帝國を建設すること能はざりしならんと雖、戰爭なかりせば回敎それ自も亦なかりしならん。實に回敎は攻擊的宗敎なり。唯一眞

神アラーの外、世界に神なしてふ其旗幟は已にこれ宣戰の榜示なり。回教徒が之によりて活動し侵略するの時彼等の榮華あれども、彼は干戈を軾めて平和に安んずるに至りては忽にして停滯墮落せり。戰爭は回教徒をして回教徒たらしむる所以の生命なりき。マホメット宣言して曰『不信者を見たらんには容赦なく之を殺せよ』と、又曰『余は不信者をしてアラーの外神なしと言はしむるまで彼等と戰ふの任命を負へり。されど彼等にして一度此語を口にするに至らんか彼等の生命財產は直ちに救はるゝを得べし』と。彼によれば世界はモスリム(回教徒)と信者との二大部に分れ、從てイスラムの部と戰爭の部との二つのものが截然として分れつゝあるなり。彼曰、『汝等の仕事を完うせよ。イスラムの部を全地球に弘めよ。神は我等をして戰はしむ。死するまで戰へ。汝等の中、戰死するものあらんも、死せるものに向つては天國あり。生き殘れる者に向ては勝利あり』と。

されど、マホメットは初よりしてかゝる暴力手段を考へたるには非ざるなり。彼のアラーの使命を受けて大覺してより三年の間は竊に其新福音を家庭近親にのみ傳へたれば歸依するもの、もとより幾何もなく三年の間に四十に足らざる信者を得たるに過ぎざりき。されど其數の寡小は、一同の新宗教に對する熱烈の情を以て之を購ひ得てあまりありき。彼等は秘密の結社を爲し、決死、新福音に執着すべきを誓ひ、若し一度、其門を去ることあれば、これ當然死刑の處分を免れざるものとせり。秘密結社のことなれば、同志はフリーメースンの徒の如くに同志互に相認識するの方便として一定の挨拶を用ゆるか、さなくば其頭巾を悉く頭に卷くこと時人の如くせず、其一端をわざと肩の上に放下することとしたり。既にしてマホメットの公然其教說をメッカの市人に布唱するや、忽にして市民を擧げての攻擊排擠起り、彼が布教に出かけ、飛石に襲はれて傷つけることあり、反對派のためにボイコットせられ、商取引の交通も一切杜絕せられて一歩も己の門外に踏み出すこと能はざりしことあり。彼が新約の預言者を眞似て恐ろしき責罰の日は近づけりと云ひ、愚民を脅喝せんとするも却て狂人のよまひごとを以て冷嘲の中に葬り去られて、何の効驗もなく、其間の辛苦、言語に絕したり。されど彼のメッカ人に對する奮鬪は八年乃至十年の間は全然言論の爭に止まりたりき。蓋し彼がメッカの貴族に出身したる事情は反對黨をして思ひ切たる處置を彼に加ふること能はざらしめたる所以にして、これ彼自にとりては又もつけの幸なりき。

アラビアの騎士
――十世紀の古巻物――

然るに此間に於てマホメットにとりて悲むべき事こそ出來したり。そは彼が第一の慰藉者たり、協同者たる妻ハヂジャの死せしことにてありき。而して此一事は、回教今後の發展の一轉機となれり。鄉士に愛着してそを脫離するを欲せざるは東洋婦人の常情なり。ハヂジャは多少の財產を有する名族の人なりければ如何なる迫害の下にありてもメッカを去らんなど思ひ及びず、從つて彼の夫も非常の自制と堅忍とを以てあらゆる壓迫に耐へ來りたりしが、今や愛妻の死するに遭遇す、彼はこゝに翻然メッカ以外に其根據を樹立するの大計を決するに至り、かくて終に其信徒を擧げてメヂナに逃亡したり。これ彼の平和手段を棄てゝ主戰主義に轉向したるの宣旨にてありき。彼の一大宗教の開祖となりしは此擧による。回教徒のヘジラを以て其紀元となすは洵に故ありと云ふべし。

メヂナ全景

八　彼が性格に見る缺點弱點

最後に明にせられざるべからざるは、マホメットの性格にあり。而してこれ恐らくは又最重要なるものならん。彼は從來西洋にては寧ろ反情を以て見らるゝが常なりき。これ彼の東洋に生れて其性行の稍基督教民と異なるものあると、その異教を鼓吹せしとに由るなりき。冷靜に彼が一代を觀察すとも、彼が布教の二十餘年間に於て初と後とに殆んど矛盾せりとも思はるべき性行の相違の存するは何人も怪みて止まざる所たるべし。メッカ時代に於ては彼は實にユダヤの豫言者を其まゝの熱烈なる精神家なりき。其信仰の牢として拔くべからざる一切の窘逐に試みられて志益々固く、彼自がモーセの妹イエスの母及己の一女フアチマと共に世界の四賢女なりと推稱したりし良妻ハヂジャの內助のみに、彼の品行もアラビア人には稀有なるほどに方正謹嚴なりき。然るにヘヂラ以後の彼の

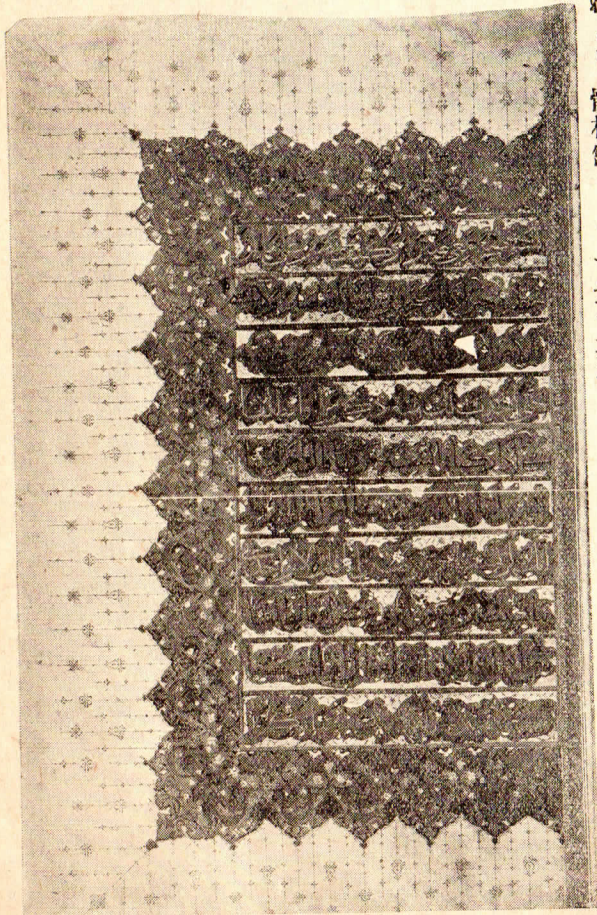
性格は一變して此眞摯と謹直とを失ひ了りたるものゝ如し。彼が内行はいつしか紊れて其好色の性癖は殆んど之が迸發するがまゝに放任せられ、部下の信徒に向ては其妻女の數を四人に制限したるにも拘らず亦同時に奴婢の身體を自由にすること主人の勝手たるべしと言ひたる彼はかつて己が養子の妻たりしものを初め少からざる妻妾を蓄へたり。メヂナ時代の彼は權謀術數を事とするの外交家なりき。全アラビアを平定するの大目的を逐行せんがためには、彼は隨分といかゞわしき手段を採るをも更に意とせざりき。彼は屢刺客を放ちて敵人を暗殺させたり。メッカ人の大擧してメヂナにマホメットを包圍せし時、ユダヤ人は竊に欵をメッカ人に通ぜんとせしかば圍の解くるやマホメットは欺いてユダヤ人を誘致し、約に背きて其男子六百人を悉く屠戮し、其の女子をば奴隷となせり。反覆此の如し。彼が後メッカ人と和睦し信仰の自由、入門改宗の自由を約してメッカに入らんことを試みたりしも、其無効に了りしは寧ろ事の當然なりき。彼は己の利益なりと見るときは掠奪をも厭はず。不正の掠奪をなせりとの不名譽を被るが如き虞ある際には卑劣にも極めて曖昧なる訓令を其麾下に下して其非望を遂げたり。實戰に臨みて卑怯なる彼は又かつて衆に卒先して危險を冒すと云ふが如きことなく常に敗戰の場合を遠慮して、一身を完うするを得べきの逃げ道を豫め準備したり。

回教徒の禮拜

いかにもマホメットは人間の色々の弱點を超絶すること能はざるものありき。然れども、彼を評せん者は之を文化の今日の程度に於て見ずして須く標準を彼の同時代に置かざるべからざるを忘るべからず。マホメットの色を好むことの尋常ならざりしは彼の若き妻アエシャがマホメットの三大好物として漁色と香水と食物との三つを擧げたるにても之を知るべく實際彼はその第一の妻を戀ひたる後に於て十五人乃至十七人の婦人を娶りたりき。しかもこれ等の中の十一人は皆寡婦にして、マホメットの之と關係したるは必しも己の劣慾を充足せしむるの一點張りにあらず、多くは政治的性質を有して、彼の福音を宣傳するの政略に供せしものなりき。今一の動機は彼の男子が皆夭折して彼をして己の後繼者を欲求せしめたることにてありき。傳説によればソロモンは七百の妻と三百の妾とを有したりしと云ふ。カール大帝はフランク諸王中最も基督教に熱心なる者なりし、しかも其内行は放縱度なしと傳へられたり。吾人のマホメットを評する、カール大帝に對する以上の嚴格を以てするは誤れりと云はざるべからず。又マホメットがアラビアの武器たる譎詐を事として怪しまざりしも事實なれ共、彼人のユダヤ人に對する處分とても一點の容赦を容れずとするは非なり。由來ユダヤ人は利益のためには食言詐僞いかなる手段をも意とせざるもの、かゝる輩に向ては必しも常道を以て臨むべからざりしなり。長髮賊亂に李鴻章の蘇州城を陷るゝやゴルドンとの約を無視して悉く降將四人を切らしめたる、スコベレフ將軍のゲオク、テペを占領するや麾下の將士をして大虐殺を行はしめたる皆これと同一轍に出づ。マホメットの缺點弱點は彼に特異なるものにあらずして又彼の同族に共有するものたりしなり。

九　彼の風采

マホメットの風采を描出せんか。彼は中背なれとも、體格健強、大なる廣き肩を有し手足も頭も大に、其黑き頭髮は硬直にも捲曲にもあらずして長く兩肩の上に垂れ、顏面は卵圓形をなして、濃き髯あり。額は廣く鼻は長くして彼の同族の特徵たる屈折を有し、口は大きく、齒は不揃なれども良く、眼は黑くして異彩を放ちたり。彼は直立なれば、少しく前方に屈するの氣味あり、步行するや、其步は急迫して恰も山を下るが如し。アリーは記してマホメットの擧止の輕快なりしを云へり。總じて彼に近づくものは恰も春風の一座の間に吹きわたるが如きを感ぜざるはなく、何人も立ち去りがたきを覺へたり。マホメットも時によりて恐ることあり。かゝる場合には彼の高き前額には血管膨脹し、傍人をして其恐ろしさに戰慄せしめたり。彼は己の命に從はざる者をば容赦なく刑罰に處したり。嚴なること此の如しと雖、彼は亦仁慈の情篤く、哀を乞ふものあれば之を賑恤するを怠らず、常にたよりとすべきの保護者たり、信者を正道に導き苟も之をして邪路に迷逸することならしめんと骨折れり。快活にして其風貌の溫乎たるに加へて威望あり、禮節あり、病者あれば自ら之を訪ひて慰め、道、葬式に遇へばその何人たるに拘らず、之に隨行し、喜で卑賤なる者の訪問をも受けたり。アラビア記者の傳ふる所によれば握手するの時、彼は先方にして先づ其手を引くにあらずば己の手を込き込ませず、先方

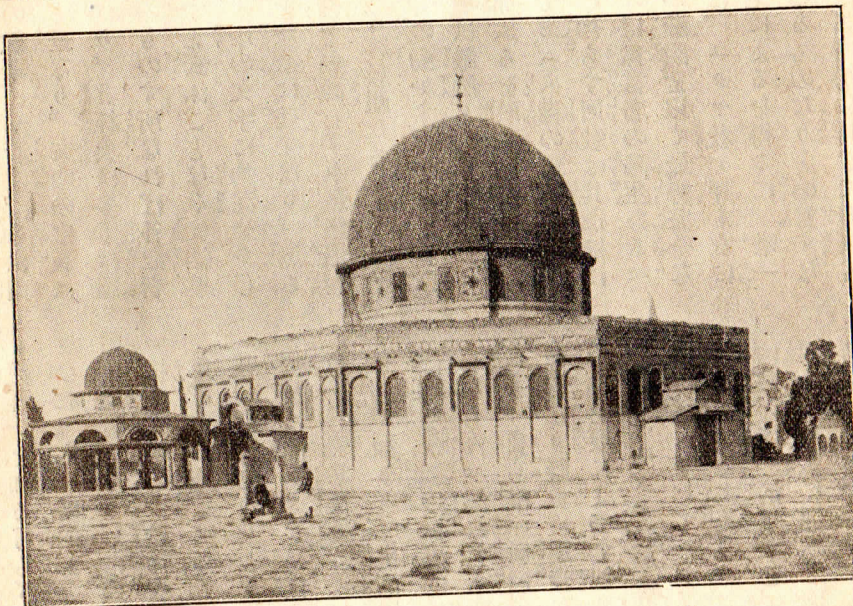
回教聖典(コーラン)第十八章
——十六世紀の華裝聖典伯林帝室文庫藏——

にして先づ其面を他に向くるにあらずんば自ら先んじて之を敢てすることなかりしと云ふ。彼又寡言沈默、必要なくむば其口を開くことなかりき。

彼の今一の美點はその事業を成し遂げて威權飛ぶ鳥も落さんばかり、何一つ不自由なき身となりたる晩年に於てさへ、かつて帝王振らず、濫りに邊幅を修飾せず、昔ながらの質素簡易の生活に滿足したりし事にありき。彼の衣食住は相變らず貧乏にして其食する所とし云へば、大麥の麵麭と水とのみ其厨房の炊煙を揚げざるもの數月にわけることさへありき。祈禱や斷食の常行に於ては彼は衆に卒先して厲行したり。彼の更に氣取らざる、彼は其のメジナを圍むの時、丸裸となりて衆庶と共に穴掘りに從事したり。當時彼の體格は最も美はしく、その皮膚の白皙は殊に他よりも目立ちて見へたりしと云ふ。彼は一身の處理は一切他人の手を藉ることなく、衣破綻すれば自之を縫ひ靴破れぬれば手づから之を修繕し、自ら山羊の亂を絞りたれば彼には實際に於て奴隸の用なく從て悉く解放したりき。天眞なる彼は又己の女とも思はるべきほどの若き妻アエシャと戲れ、彼女と競走し、色々の競技を試み面白く話して互に笑ひ興ずること、小兒の如かりき。彼は又居常被衣を被れり。アエジャは此老翁を評して處女の如くに內氣なりしと云へり。

マホメットはアラビア簡古の俗を喜びたれども、不潔は彼の最も嫌惡する所なりき。彼は一身の衞生に於ては注意至らざるなく、一日の中幾度となく沐浴し、その頭髮や鬚髯には香水の香を絕たしむることなく、信者にして頭髮に手入れせず汚れたる衣服を著けたるあれば之を叱責し、又齒牙の黃なるを惡みて掃除せしめたり。彼が玉葱蒜等惡臭を放つ野菜を厭ひて之を用ゐざりしも蓋し此用意に出でしなり。生活の多くの事情に無頓着なる彼も流石に、風彩を修むるの一事だけはかつて忽にしたることなく、常に若やがんと努め、その長き頭髮にして少しにても灰白色を帶ぶるに至らんか、大狼狽して之を黑染したり。

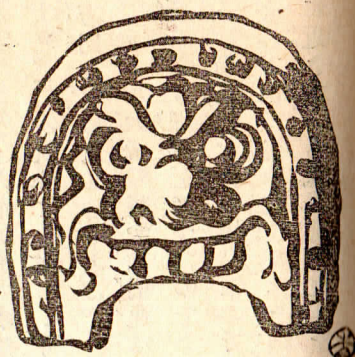
一〇　回教文明の永續せざりし所以

回教が第七世紀のアラビヤにとつていかに有用なるものなりしやは吶々するを須ゐず。アラビヤの民族は之によつて民族的自覺を發起し腕力の勃興についで智力の大發展をなし、以て文明の進步を助け、其內容を豐富ならしめたるの功は多大なるものなり。彼等はかくしてユダヤ教と基督教とが共に求めて終に失敗したりし所のものを首尾能く遂行し得たり。されど回教徒の文明は一時的のものに過ぎず、其盛なるの時に當りては優に西洋先進の諸民族を凌ぎたりし彼等の進步は永續せざりき。蓋し思ふにマホメットの教說には三つの弱點あり。一はその說く所の幸福なるもの、あまりに物質的なることなり。彼の所謂天國は此世の生活の繼續にして、肉慾に飽かんとするの徒には好個の理想鄕なり。こゝにては其陸土は麝香を以て馥郁たり。淸き流は紅玉及び碧玉の砂上を走る新鮮なる綠林なり。寶玉を鏤めたる亭あり。絹の敷物あり。花

あり。山海の珍味あり。嚠喨たる音樂あり。美人あり。あらゆる不淨は一拭せられてあらず。こゝにては何人も極樂に嫌厭することなく、又病み煩ふものなし。これ正しきもの善さ者の報酬として受くる所なり。此應報說は教徒として甚しく報酬を望むの劣情を惹き起さしめ其の宏遠の理想を憧憬するの途を塞ぐに至らしめたり。二には多妻及奴隸制度にあり。マホメットは其信仰に歸依せし者を待つに對等の待遇を以てし、其公平の政治を以て彼の新宗教の發展を助くること一方ならざりしと雖、彼が平等主義は一定の範圍に局限せられて婦人及奴隸の社會に及ぶまでには至らざりしなり。マホメットは法律によりて婦人の財產を所有し又之を相續するの權利をば認めたれども、夫が妻を打擲することと離別することは殆んど何等の制限をも置かざりき。彼は生鳥を的に射あてゝ殺すことや、駱駝を主人の墓に殉死せしむるの惡俗をやめ、馬を打ち又其鬣を刈り尾を切り取ることを禁じ、生きながら少女を葬るの殘酷を差し止め、其德澤禽獸にまでも及びたりしにも拘らず、殆んど婦人の人格を認めず、多妻の俗を公行し、離婚の極めて容易に行はれたりしがために可憐なる女性をして其戸外する必らず被ひを用ゆるの止むなきに至らしめたり。アーリア人種の間に行はるるなる一夫一婦の制は賣淫の俗を釀したれども、其弊や婦人社會の一部に止まるにアラビヤ風の多妻制度は滔々たる濁波を社會の全局に及ぼさんとす。此の如くに民族の半數をして壓虐の下に泣かしむるの社會組織は決して健全なる發達を遂げ得べきにあらざるなり。奴隸制度も亦廢止せられざりき。捕虜となれる母子を引き離すの事は許されざりしも、夫婦を強制離別せしめ而して其婦を妾となさんこと主人の意のまゝなりき。

在ゼルサレム　オマールの回教寺院

第三には彼の宿命說なり。アラビヤの種族は、各人の運命が星によりて支配され、其誕生と共に一定して微々たる人間の力のいかんともする能はざる所なるを信ずるものなりければ、マホメットの宿命說は直に彼等の信仰する所となり、彼等は神に任すと稱し、其教をイスラム教と呼べり、何事も運命なりとし相應の氣力と骨折りとを

以て回避せらるべき悪弊をも身に被りて平然として諦むるなる彼等の病患はこゝに因縁したり。

これ等回教の悪弊も詮じ來ればこの數語に歸着す。そは回教が歴史的の宗教にあらずと云ふこと是なり。文明の宗教は何れも徐々其發展を遂げて今日に至れり。其經典は多くは祖師の著述する所に非ずしてその門人のものす所なれば各記者の個性は經典上に多少の印象を殘さずと云ふことなく其結果自然に經典の齊一を破り、かくして書中の文字に拘泥せずして直にその骨髓に徹し得べきの餘地を將來に殘すなり。然るに回教の場合に於ては然らず。新信仰を創説し、其教儀慣習を始め其法律を制定したるは、すべてこれ教祖たるマホメット一人にしてコーランは其産物なり。神の動かすべからざる意志その中に啓示せられ、教の各條各項は嚴然として變移すべくもあらず、誰か亦之に向て批評を加ふるを敢てし得べけんや。さればマホメットが其回教を以てセム人種の豫言者と關連する歴史的宗教なりと誇揚するに拘らず回教は其根柢に於て非歴史的なり。モーセと雖他日なほ豫言者の降生あるべきを説きて希望を後の世にかけ、己の教説を以て最終完全なるものなりとまでは潛越せざりければ、ユダヤ教を評するに當ても一時的地方的宗教としての見地によるを得るに、唯一神教の最後のものにして且又其完全なるものなりと極言する回教には這般の屈伸性なし。變化する時勢に伴ひて發展する餘裕なし。例へば彼の順禮の教儀を見よ。地方的宗教を一の中心に綜合するの目的としてはかゝる手段も亦必要ならざるに非ず、少くとも當時に於て無害なりとせらるべしと雖も世界的の宗教としては、かゝるは却て無用の煩累なりと云ふべく多妻制も永久的の制度としては其世運の進歩を害する如何程かを知る可らざる也。されば史家フリーマンは回教の行ひたりし一時的部分的の改革は、其上の恒久的改革を行ふの邪魔物となりしに過ぎず。回教民は畢竟するに眞理の一部を採り文明の少量を收め寛容の幾分を行へるのみ。而もこれ等半可通の施設は却て進歩の防害物となれりと云へり。之を世界の宗教史の上よりして觀せんには回教は寧ろ多神教より基督教に向ふべき進化の中間に其位を占むべき者なり。故に回教にして基督教に先ちて起り、尚又最終完全の眞宗教なりとせしが如き非歴史的標榜を掲出するが如きことなかりしならば、基督教の世界的傳播のためにはそれ或は最も好都合なりしならん。然れども事實は之に反して回教は基督教に後れて起り、自ら唯一神教の眞諦を得たりと唱道せり。これ進化の逆行なり歴史の退歩なりと云ふべし。さはれ史上の事實はすべて必要によつて起る。マホメットの勃興も時運の促す所に外ならず、ユダヤ教の弊竆まりてイエス出でカトリック教會の專横に堪へずしてルーテル起り婆羅門の形式宗教に反抗して釋迦、其平等主義の一宗を開きたり。マホメット時代のアラビヤは彼の統一的宗教を創始するを要として回教起りたれども、回教の形式に泥みて進歩的ならざる到底世界の進運に伴ふの活動社會を形成するに堪へず。外部の壓迫はその内的改革をして一刻も猶豫せしめざらんとするの現況にあれども、今日の回教民に果して此宗教革命の大事業を遂行するに堪ゆる第二世マホメットの出現すべきやは頗る疑問なりと云ふべし。

カール大帝（シャーレマン）

—(Carols Magnus; Karl der Grosse; Charlemagne.)—

高等師範學校教授　磯田良

一、世界史上に於ける大帝の地位

西羅馬帝國が滅びてからその領地は野蠻民族に刧掠せられ、その文明は破壊せられ、人民はその暴力に屈服した。併し内部に於ては征服者と被征服者との間に嫉妬があり、殊に宗教が異つてゐる、即ち一方はローマンカソリックで一方はアリウス派であつたから從てその思想が違つて居つて相和することができなかつた。

カール大帝騎馬銅像

—パリー・エルニー博物館所藏—

勿論ゲルマン人の建てた國の中で東ゴートではテオドリック王が出て、成るべく獨逸の風習とローマの舊文明との調和を計り、自分の率ゐてゐる武人を方々の抑へに使ひ、舊ローマの人民を政治の方面に使つて强き國家とか新なる文明とかを作らんとつとめた。これが唯一の例外であつたがテオドリックの歿後は此事業も忽ち滅びてしまつた。その他ゲルマニの建てたる國々も大抵久しからずして衰へた。それは征服者の方の人數が少なく、或は仲間で分裂

したり、或は新領土に來てから昔の勇悍なる氣風を失つたりなどで滅びてしまつたのである。而してフランクのみが獨り壓制で人民を抑へ付け、始めから中央集權の盛んな國であつた。併しこの國も相續法などの關係で數人の子があれば皆其領土を分け、始め統一して居つたフランクの國も忽ち分裂してしまつて、それと共に國王の權力は權勢ある役人に奪はれ、終にピピン・ゼ・ショルトの代に所謂無能の王が廢せられて、始めてカロリンギの王國になつたので、それは七五一年であつた。

西羅馬が滅びてからこゝまで凡そ三百年の歳月を經過して居るから、多少は文明が發達して居るべき筈であるが、その實少しも發達して居らぬ。多くの人民は方々で混合してその折合が未だ付かず、まして風習なども固まつて居らぬ。昔持つてゐた羅馬の文明は壞れて新形式が出來て居らず、總て如何なる方面でも未成品であつて、秩序が立つて居らなかつた。かゝる時代にピピン・ゼ・ショルトの子シャーレマン 即ちカール(又カルロ)大帝が出て來たのである。彼れは實に此の西ヨーロッパの狀勢を一變して將來の歐洲文明の基礎、若しくは方向を定めたものである。

カール大帝の時から獨逸は新紀元を作つたのである。即ち新らしき理想を作つたのである。社會の秩序を定めたのである。新文化を作り出したのである。先づ歐洲の眠れる目を醒まして總て後世發達すべき種子を蒔いたのである。既に腐敗に近き古い希臘羅馬の文明を元氣よき若き獨逸民族の中に植ゑ付ける仕事をしたのである。勿論これは充分に出來上りはしなかつたが、カールがこれを目的とし又斯る傾きを生ぜしめたと言はねばならぬ。これ彼れが大帝と呼ばるる所以であつて、それで彼れが世界史上に重要なる地位を占むるやうになつたのである。

二、政教統一の大帝國建設の理想

カール一代の仕事を述べる前に國家に關する彼れの理想を豫め言つて置かねばならぬ。これは彼れ自ら獨創的に考へ出したものとはいはれず、主として高僧アウグスチンの考を採用したといふべきだ。即ち此の世界に於て、現世に於てシピタスデイ(神の國)を作らんとするにあつた。即ち昔の羅馬は浮世の國家であつたが、カールの建てんとする國は浮世に於て神の教が實現さるゝ國家、耶蘇教を奉ずる國民の大帝國である。そしてカールは實に此の考を實現せしむる腕と劍とを持つて居るものであつた。

以上の理想が主眼であつたからして、萬事カールの方針は總てこれに憑つたのである。そしてこれを爲すには、たゞこれ迄のフランクだけではいかぬ。出來るだけの土地を自分の帝國の中に入れ其人民を敎化せねばならぬと言ふので、國內が平ぐと彼は直ちに四方の征伐を始めたのである。北伊太利を征伐してロンバルド王の鐵冠を被むり、或は西班牙に行つてこれを攻めてモハメット教徒と戰ひ、獨逸民族は皆己れが配下に置かんとしてサクソン、バワリア人等を征伐した。此

の中で最も激しかつたのはサクソンの征伐であつた。サクソンは人數も多く、且つ頑固に抵抗した。勿論戰術は劣つて居つたからカールが行つて征すれば一たまりもないが併しカールの兵が去れば再び叛く。幾度となくカールはサクソンに行つて戰はなければならなかつた。かくして容易にサクソンが從はなかつたからして、或時はヴェルデンの虐殺となり、四千五百の生靈を葬つた。猶耶蘇教を廣めんとするのが主なる考であつたから彼れはサクソン人の崇拜して居つた木像を壞した。又オーヂンの社を壞してしまつた。終にサクソンも力盡きてカールに降參し、サクソンの有名なる英雄のウヰッチキンドも洗禮を受くることになつたのであつた。そしてカールはその跡に多くの僧正領を作り、會堂を建てゝ耶蘇教の弘まらんことに努めた。

その他四方の蠻族でカールの國をなやましたものを征伐した。その中にはスラーブ種族あり、アワール種族あり、ノルマンなどがあつた。彼れは皆此等の蠻族を伐つて抑へ付けてしまつた。そして此等の蠻族に對して皆夫々マルク(即ち國境の土地)を作つてこれを防禦した。例へばノルマン(デーネン)に對してはデーネマルクを作つたのが今日のデンマルクの起りである。此外海の方面にも注意して水師を置き、或は海岸の見張りを置いた。

斯くして出來上つたカールの領地はアイデンからシヽリーまで、タイスからエブロまでの廣大な土地を包んだ。而してこの野蠻民族と戰つて獲た國土からカールは新しき世界の基礎を拓いたのである。

三、中央集權制度の確立

內國に於てはまづ國家の秩序を作らなければならぬ。これまでフランク國と言ふ者があつたけれども、其國內の諸州にはチュークといふ者が居て殆んど君主と同じ樣な權力を握つて居つた。平たく言へばこれまでのフランク國は貴族の集まつた共和政體の如きものであつた。カールはこれを改めて本統の世襲の中央集權にしやうとしたので、それにはチュークの制度を廢してグラーフを國王の選擇に依つて任命する。如何なる事があつても國王に反せざる忠誠の人を見拔いて言付ける。そしてそれ等の者は何れも皆カールに向つて誓を立てカールのヷッサル(臣下)となつたのである。それと共にカールは僧正の行政上の權利を認めて、國會等に於て普通の貴族等と列席して意見を言はせ、これに依つて普通の貴族の跋扈を抑へる積りであつた。彼れは總ての土地は王土であつて國王が土地の最高所有者であり、貴族の如きは封土を國王から得てゐるにすぎぬといふことを主張したのであつた。

カールの始めて置いたグラーフの職掌は主として司法官であつた。國王を代表して人民の訴訟を決する役であつた。そして此のグラーフの下にセンテナリウスと言ふ者が下役となつて裁判を手傳ふ仕組であつた。その他に猶地方の政治を視察せしむる爲めにミッシ即ち使者を各地に派遣した。それ等の使者は國王の耳目となつて司法、行政、軍政、及び教會な

どの狀況を視察して廻つた。そしてその行先で必要があれば會を開いてその土地の人民を出席せしめ、土地の利害を聽くとか又は人民の忠言なども聞くことにした。此の使者は普通の貴族と僧正一人とが一所に行つたのである。かくの如くにして地方割據の勢を殺ぎ中央集權の制度に進ましめんとしたのであつた。これは我が國維新の廢藩置縣に多少似てゐる。獨逸民族の中には昔から國民の集會なるものがあつた。それには總て自由民が出席したものである。これをカールは保存して置いた。自分は專制君主であつたけれども此の制度だけは殘して置いたのである。そして一年に二度集會を開いた。殊に著名なるは五月野の大會であつた。此の會で國家の重要なる問題を決し、併せて法律をも定めたのである。併し人民の會と言つても實は貴族の會であつて普通の人民は殆んど出て來なかつた。此の會で定めた法律を發布する、これをカピッラリーと稱した。これがカールの國の法律であつた、茲に附け加へて言つて置くが、カールは法律編纂と言ふことはしなかつた。つまりカールの國では法典は出來得なかつたのである。これは領土內に各人民が混同して居つて種々の法律習慣が國中にあつた爲めである。從て同一事件に就て人民の訴訟を裁判するに、各々その當事者に適用する法律が違つて居つたと言ふ、奇妙な現象も生じたのであつた。

カール大帝の印璽

四、民政の刷新

人民に對する政治のことを少し述べて見れば、當時は戰爭の世の中であつたから人民は常に戰爭に出なければならなかつた。そして此の時分の兵は總て自由民が出て行く義務があつたので、而かもその兵に出て行くには人民は各自被服、武器（弓、矢、楯、槍等）が入用であつた。それから三ヶ月分の兵糧を携帶せねばならず、騎兵はその他に劍を持つて行き、金持の者は鎧を着なければならなかつた。故に戰爭をすると言つても中央政府は金が要らぬ、只馬糧と焚木さへ用意すればそれでよかつたのである。併し人民は上述の通りであるから非常なる負擔であつた。若しこれを怠ると實に恐ろしい罰金を取られたものである。それをカールの代になつてから少しく輕減したのであつて、組に依つて此の團體は何人の兵を出せと言ふ風に定めて置いて貧富の程度に應じて數人寄つて一人の兵を出せばよいことにしたのである。

又裁判の時にも人民にとつて厄介なことがあつた。それはこれまでの定まりは裁判の時は人民がそこへ出て罪の有無を決するのであつた。これは人民のため厄介なこと非常なものであつた。夫故カールは人民の中から終身の陪審官を撰任して置いて判決をこれに任せた。それで人民は裁判のある度每に引き出される厄介を免れることが出來たのである。

次ぎに教會に對するカールの仕方を述べて見やう。カールの建國の主意は自分の帝國は耶蘇教を以て治めると言ふのであつたから、彼れは意を充分此處に用ゐた。即ち耶蘇教を布教する僧侶を充分に監督して、無學の僧侶はこれを排斥してしまつた。或は僧侶を集めて問題を提出し、それを解決せしめて能力の試驗をした。猶カールは教會の儀式や僧侶仲間の訓練などにまで干涉した。そして純潔なる耶蘇の教を廣めることに努力したものであつた。

五、羅馬皇帝の帝冠

カールはこれだけの廣き範圍で國を作つて立派なる政治をしたのであるから或一國の仕事と言ふよりはもつと大なるものになる。即ち彼れはフランクの國王であつたが、而かし王よりも大なる者であると言ふことを何人でも考へた。それで彼れは八百年に伊太利へ行つてセント・ペテロ寺でキリスト降誕祭に臨んだ時法王のレオ第三世から冠を授けられた。その以後カールはインペラトル・アウグスッスと稱した。此の冠を授けた事には議論のある所で、史家は種々の見解を立て丶ゐる。或はカールが自ら望んでしたことであると言ひ、或は法王が突然冠を授けたのであるとか言つてゐて、確かなことは分らぬ。傳にはカールは法王から冠を授けらる丶までは知らなかつたのであると書いてある。カールは自分が偉い仕事をしたのに何も法王から冠を授けらる丶に及ばぬと言ふ考であつたらしい。併し自分の家は昔羅馬法王のお蔭でフランクの王になつたこともあり、且又羅馬帝國と言ふことはやはり當時の人間の間にも威嚴あるやうに思はれてゐたのであつたから、カールは法王から冠を授けられたならばそれなりに引き受けたものらしく思はれる。既に昔からフランクの王は羅馬法王の領地を保護すると言ふ理由でパトリチウスと言ふ稱號をもらひ、その時から羅馬法王から加冠せらる丶式があつたのである。カールも既にパトリチウスと言つて居つた。故に今法王が彼れを皇帝としたのもか丶る來歷があつたのであるから格別新らしいことでもなかつた。皇帝となつてからは勿論世の中にカールの威望は高くなつて、コンスタンチン大帝以來廢れたる羅馬の勢が又復活して、西方に東羅馬帝國或はハリファ政廳と對峙する立派なる國が出來た譯である。但し法王が加冠してもカールは法王が皇帝より以上の位を持つて居るとは認めなかつた。否法王すら自分の最高顧問官と見做して居つたに過ぎなかつたのである。（法王は後世に至つて皇帝と對等若しくはそれ以上になつたのである）。

カール大帝の法令文書
——パリー國民文庫所藏——

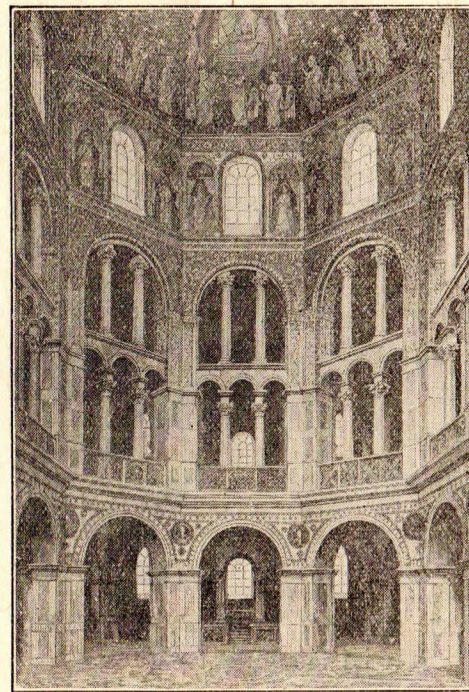
六、殖産興業の發達

當時の文明は程度の低いものであつた。勿論羅馬人の澤山住んで居る地方では他の處よりも程度が高かつた。併し一般から見て昔の文明は衰へて居つた。生活の程度も大分低かつた。かのメロビンギの王でも頭髮を長く垂れ鬚髯を蓄へ外に出るときには二疋の牛に曳かせた車に乗り、それから宮殿なども木造であつて室も少なかつた。カール時代になつてから追々石を以て家を造ることを始めて、王が家を石で造つたから諸侯もこれを眞似て、石の家が段々多くなつたといふことであつた。

又當時は農業商業製造なども甚だ振はなかつた。カールは別して農業に於ては注意をしたのであつた。カールは王室領に於て總ての設備を爲してこれを全國の模範とする考であつた。それから森林開拓、田地の耕し方、牧場、果樹園、家畜養蜂、狩獵、漁業等のことまでも細かく規定を作つたものである。又手工のことまで世話を燒いて、鍛冶屋、機織などの仕事も奬勵した。

商業は極めて幼稚であつて、商業と言へば重にダニューブ河やライン河の沿岸地に行はれたので伊太利人とかユデヤ人とかが之に従事したに過ぎなかつた。しかしカールは市場には意を用ひ、役人を入れて市場の靜肅安全を計つた。此の頃の交易は皆幼稚であつたからして物品の交換で、貨幣は極めて少なかつた。總て現物取引であつた。

七、學藝教育の奬勵

カール大帝の住めるアーヘン宮城の禮拜堂

その他ゲルマンの美術などになればまるで談ずるに足るものがなかつた。かゝるものは皆カールがこれから進歩させんと努めたものである。彼れは伊太利人を呼びて建築を始めその地の美術を自國に入れたのである。ミニアツールといふ色彩ある微細なる繪畫には頗る見るべきものもあつたが先づカール時代の美術と言ふものは猶生硬であつて後世にいふ心理的の深さと言ふものなどは勿論なかつた。

カールの別して重んじたのは學問であつた。學校を作らねばならなかつたが、所で自分の國の中には學問ある者がない。それで廣く當時の世界に學者を求めた。即ちアングロサクソンのアルクインとか伊太利人のペター・オブ・ピザとか、ロンバルド人のパウルス・デアマヌスなどを呼んで、先づ宮中に學校を作つたのである。此學校にはカールの子供達や貴族の子弟が入つた。併し當時の人間は殺伐で亂暴であつたからしてかゝる文學を學ぶことを皆嫌つたものである。それでカール自らが宮中の學校に入つて數學、天文、羅甸語などを學び、以て自ら子弟の模範となつたり、又身分の比較的卑しい者でも學問の上達した者は特別に任用して學問を奬勵したのであつた。それでカール時代に於てはテオドゥルフ、アンギルベルトなどの詩人も顯はれ、カールの傳記を書いたアインハルドなどゝ言ふ人も出た。勿論これ等の人は皆羅甸語を以て書き、しかも多くは古のローマ文學者を眞似ることをつとめた、故カール以前の羅甸語よりは古式に大分適ふやうになつて來た。カールは斯く學問でも外國の物をとつたが彼れの心は本統のフランク人であつた。羅馬の古文明を入れながらその文明に屈服するのではなかつた。フランクの人間の上に古文明を利用して國民の文化を發達せしめやうとしたのである。夫故羅甸語を學ばしむるもそれが最終の目的ではなくて未だ發達せざる獨逸語を、羅甸語と同樣の程度にまで發達せしめやうと言ふ考を持つてゐたのであつて、文章でも、詩でも獨逸語を以て書けるやうにしやうといふ積であつた。それ故カール自らは獨逸語の文法を作らうと工夫をしたと言ひ傳へられてゐる。それから、當時未だ殘つてあつた獨逸の詩歌、古傳等を採集して獨逸の文學の基礎を作らうと言ふ考もあつた。

カール大帝銅像頭部

尙宗教を弘通し又文化を高くするには音樂唱歌を奬勵しなければならぬと思つて其發達を圖つた。

八、カール大帝の人物

今日まで殘つてゐる彫刻で見ると古傳の通りカールは普通の人よりも長大なる軀幹をもつてゐた。大なる活氣ある目が輝き、強大なる鼻を持つてゐた。その顏付きは氣力あり理解力に富み、そして決心固く、時には隨分殘酷なることをも忍ぶやうな樣子をして居る。そして如何に精神上に骨を折つても疲勞を覺えず、種々の計畫、思付きなど殆んど盡きる所なく、最大なる計畫を有すると共に極めて細きことにも注意深い人であつた。意思強固であつて一度決斷したることは何處までも遂げると共に又人情の厚い所があつた。それで彼れの平生の生活は至つて質素であつた。即ち此の王は優美でなく上品でなく極めて仕事をするに適した容貌をして居つた。着物は平生は農民の着るやうな着物を著て居つた。大禮の時には東羅馬皇帝が著たやうな著物を著たけれども平常は普通のフランクの人間の著物を著てゐた。貴族などは却て美麗な著物を著、贅澤なる飾物を付けて居つた。カールは只地質のよききれ地を珍重して見掛のよい物はとらなかつた。きれいな著物を著てゐる貴族などを、態々雨天の日に狩獵に呼び出して困らせた。それから飲食も決して奢つてはゐなかつた。

カールはフランクの王になつてから七十二歳で紀元八一四年に死ぬまで在位四十六年、その間に於て一個のフランク國から、新らしき羅馬帝國を作り出して、中世の間に歐洲人の爲すべき種々の仕事の計畫を作り上げたのであつた。

中祖 桓武天皇

文學博士 三浦周行

一 緒論

神武天皇皇基を橿原に創め給ひし後、天智天皇唐制を斟酌して百度を興し給ひしかば、中宗の御名あり。桓武天皇は其曾孫を以て中興の偉業を大成し給ひ、日本の文化は玆に新生面を開きて平安朝時代なる一時期を劃せり。爾來帝都は千載革まることなく、明治天皇の時、東京に遷御し給へるも尙京都の名を改められず、近く今上天皇御即位の大禮を此地に行はせられんとす。明治天皇の大喪に會ひて其聖德鴻業を追讃するもの遡て桓武天皇の宏謨に想到するは、亦臣子の微衷なり。

二 御即位

天皇御諱は山部、光仁天皇の長子に在します、御母は高野氏、乙繼の女なり。寶龜四年正月皇太子に立てられ給ふ。是より先き、皇太子他戸王廢せられ皇儲未だ定まらず。群臣の中、或は天皇の御母賤しきが故を以て稗田親王を擁し奉るものあり。光仁天皇亦酒人内親王に傾き給ひしが先に光仁天皇擁立の功ありし藤原百川は天皇の英明にして輿望あるを以て百方力諫し奉り天皇遂に皇儲に定まり給へりと云ふ。時に天皇御齡三十七、光仁天皇は六十五歳に在しませり。爾來天皇東宮に在しますこと八年餘、光仁天皇益々頽齡に傾き給へるを以て、天皇は自ら機務に參與し給へるなるべく、明治天皇が御年少にして大位を踐み給へると異なり、早くも萬機親裁の御經驗を積ませ給へりと察せらる。

斯くて天應元年四月、光仁天皇御不豫を以て位を天皇に讓らせ給ひ、皇弟早良親王を其皇太子となし給へり。天皇寶算四十五、二十五年間の光輝ある延暦の治將に之より始まらんとす。然るに説をなすもの曰く、天皇は御登極の初遊幸に耽り給ひ、皇太子專ら事を用ゐられしが、一朝臣の任官に就きて端なく權臣藤原種繼と爭はれ、密に之を殺さしめられしも尋で事覺はれて廢せられ給へりと。之を國史に徵するに、天皇頗る種繼を信任して中外の事皆決を之に取り給へりといへば、皇太子と種繼との間自ら軋轢を生ずるを免かれざりしならん。然るに天皇は却て種繼に聽き給ひ、親王對種繼の反感は更に天皇對親王の反感となれるものゝ如し。惟ふに天皇は天應元年十二月、光仁天皇崩御遊ばされしより、御哀慟の餘りに、初は三年の諒闇に服し給はんとしたりしも、公卿等萬機の一日も廢すべからざるを奏するに及び、大喪期を六月に定め給ひ、幾くもなくして更に一年に延期し給ひ、後復た公卿の奏請に由りて、漸く人民の凶服を釋かしめ給ひし程なれば、其間政務に勤しみ給ふ大御心の弛み給ひし爲め自ら御委任の態ともなりつらむ。之を御遊幸に託するは天皇を誣ひ奉るの甚しきものなり。且や天皇には、已に皇子あらせられし(皇長子安殿親王即ち後の平城天皇は寶龜五年の御降誕にして天皇御即位の時八歳に在します)。光仁天皇は之を措きて皇弟早良親王を皇儲に立て給へり。天皇の御初政の大御心に添はざりしもの蓋し多かりしならむ。されば親王の御反感も單に種繼と區々任叙に就きての御爭に據ると解すべからざると共に、種繼の御信任亦天皇の御爲に心力を盡すこと多大なりしに依ると察せざるを得ず。

桓武天皇御像

天皇の大位に備はり給ひし翌年(延暦元年)、早くも氷上川繼の謀反あり。尋で又三方王弓削女王等の乘輿を厭魅するあり。天皇の御初世は決して泰平無事なりしと云ふべからず。明治天皇は孝明天皇の唯一皇子として御鍾愛を受けられ、皇位に即き給ひし後、直に戊辰の戰役に會ひ給ひ、明治七八年より十年に至るの間内亂各地に發生せしも、そは舊政改革の際に免かるべからざる自然の成行にして、毫も上御一人に對し奉りて不軌を圖れるものあるなし之を桓武天皇御即位前後の情勢に比較し奉れば、蓋し同日の談にあらざるなり。而も此等の障害は前後全く排除せられて皇子安殿親王さへ皇太子に立てられ給ひしより、天皇の御親政は頓に活氣を帶び來り、驚天動地の諸改革は着々として實現せらるに至れり。

三 輔弼の臣

天皇御即位の日、大中臣清麿已に右大臣たり、藤原魚名左大臣となりしも、清麿は齡古者を過ぎて、間もなく冠を掛け、魚名は延暦元年、事に坐して流され藤原田麿代つて右大臣に任ぜられ、皇太子傅を兼ね、同二年左大臣に轉ぜしも、其人

性恭謙にして物に競ふことなく、一時佛典に心を潜めて、淸僧的生活をさへ送りしことあり。然るに同年彼の薨去の後は復た左大臣を置かれず。菅原是公右大臣として獨り台鼎の職に居れり。彼は武智麻呂の孫にして名門の出なりとはいへ、單に一事務家たりしに過ぎず。同九年藤原繼繩右大臣となりて皇太子傅を兼ねたり。彼は亦謙恭自ら守りて政迹聞えず、才識なしと雖世の譏を免かるるを得たりと稱せらる。以て其人と爲りを概見すべし。彼に代つて右大臣に任ぜられし神王の如き亦性恭謹文少く、物に接すること淡若にして顯貴に居ると雖、終を克くすと謂はる。天皇の御治世中多く左大臣を置き給はず、其君側に在りて獻替の任に當れる、諸大臣の揃ひも揃うて溫厚の君子人なりしは注意すべきことならずや。彼等の外、民部卿たりし和氣淸麻呂、近衞中將・征夷大將軍たりし坂上田村麿あるも唯各文武の職務に忠實なりしのみ。惟ふに英邁にして百政大御心より出でざるはなき聖天子の輔弼の臣たるもの、必ず斯の如き恭謹恪勤の士を要したりしならむ。

四　遷都

赫々たる天皇の御偉蹟中、首めに數ふべきもの何ぞやと云はゞ、何人も遷都の一事を擧ぐるに躊躇せず。神武天皇御東遷以來歷朝屢々遷都の事あり。上代簡朴の世に於ては、此事甚だ行ひ易かりしならむも、世を逐うて社會人事の複雜を加ふると共に、都城制も支那に模倣することゝなりしかば、遷都の業容易に行はれざるの趨勢とはなれり。元明天皇の時、平城に都を定められてより七十餘年間の皇都となりしは實に之が爲めなり。然るを桓武天皇は此長き歷史を有せる皇都を見捨て給ひて從來無名の地たりし山城長岡村に新京を營み給ひ、後復た宇太村に遷り給へり。是れ非常の大英斷なりといはざるべからず。遷都の理由として宣示せられしものを見れば以上の兩地は並に水陸の便ありて四方より來集するに宜しきが爲めなりと宣はせらる。平城の地が所謂靑垣山の中にありて運輸交通の便を缺きたりしとは何人も最も見易き所、天皇が新政の初め其不便を感じ給ふこと彌々切なりし爲め大和の高原より山城の平野に出まさんとの大御心を決し給ひしは寧ろ自然の徑路なりとす。されば延曆三年藤原種繼の議を用ゐて、長岡に都城を經始し給ふと共に阿波・讚岐・伊豫の三國に命じて山崎橋を造らしめられ、次で平城より長岡の新宮に遷御あらせられしが、其翌年には攝津の島・梓江・鰺生野を掘りて三國川に通ぜしめ、淀川の水を導きて今の神崎川より海に注がしめられたり。新都と西國との運送交通は之に依りて多大の便益を得たりしなり。而て平安京は所謂山河襟帶自然の城郭をなせる外、相坂を越ふれば琵琶湖に近く、東海・東山・北陸の諸國との交通の要衝に當れり。然かも其東方の要塞たる相坂關をさへ徹せられ又伊勢・美濃・越前諸國に令して關塞を廢せられたり。是れ其要塞の實なくして徒らに交通の煩累たりしが爲めなり。其他南海道に新道を通ぜしめしが如き或は足柄路を廢して箱根路を開かれしが如き、縱へ後者は一時的必要に由れるものにて、後舊路を復せられしとはいへ、

天皇の交通政策に重きを置き給ひしは掩ふべからざる事實なりと云はざるべからず。此の如く天皇が退嬰に便なる平城の地を棄てゝ進取に利なる山城の平野を擇び給ひし一事を以てするも、其遠大なる雄略を想見するに餘あらむ。

而かも此表面の御宣示以外、絕えて遷都の理由なしといふべからず。故に古來揣摩臆測を逞うするもの往々之れ有り、延曆元年四月、天皇が公私の凋弊を憂へ給ひ、宮室居るに堪へたりと宣ひて、造宮省を罷められながら、近々二年の後なる三年五月、早くも遷都の御沙汰あらせられ、十一月には其竣成をも待ち給はずして、倉皇遷御ありしを怪み、さては自家の勢力を張るべく野心を有せる種繼が、藩別として社會に沈淪しつゝありし秦忌寸等の向上心を利用して造宮の資を献ぜしむると同時に此に其發表を見たりしとの觀測もなきにあらず。然るに政策の變更は古今の免かれざる所、試に當時にありて他の例證を求めんに、延曆元年二月に中臣朝臣鷹主を鑄錢長官に任ぜられながら、其翌三月には錢價已に賤しとて造宮省の廢止と共に鑄錢司をも廢せられたり。長官任命の日豈に一月の後鑄錢司の廢止を豫期せられんや。造宮省の存廢も亦此類のみ。

之を既往に於ける遷都の場合に徵するに、此種の計畫は動もすれば守舊家の怨望を招き實行を待たずして中止せられもあれば、又一旦遷都の後舊都に復せられしもあり。聖武天皇の時、朝野の山城恭仁京の遷都を望めるに拘はらず、難波に遷り給はんとせるも、終に復た南都四大寺の、輿論を無視せる奏議を容れ給ひて、平城の舊都に復し給ひしが如き、其一例なり。明治天皇の京都より東京に遷御し給ひし時の如きも初は遷都の形式に依り給はずして、東西兩京の間を御往復遊ばされしが如き、宸衷の程深厚なりと申すべし。平城京は七十餘年の舊都たりしだけに、其遷都より生ずべき人心動搖の危惧は一層深刻ならざるを得ず。天皇が秘密の間に遷都の大計を決し給ふと共に、突然御發表遊ばされ、直に工作に着手せしめ、當年の調庸及び、造營工夫の用度をも長岡宮に進めしむるの令を發し給へり。次で宮室の備はるを待ち給はずして中宮皇后を舊都に殘し給ひながら、急速に遷御あらせられしは、恐らく中外に向つて叡慮の動かすべからざるを示し守舊家をして乘ずべきの機會を逸せしめんとし給ふものならむ。當時百事草創に際し、太政官院の工成りて、百官の朝位に就きしは是れより二年の後にあり。遷都に就きての此種の御英斷が其必成を期せらるべき御確信に伴ふ事なるや云ふ迄もなきことなり。

奈良朝には大佛寺院の造營等に多くの國帑を糜し財政豐ならざりしも、光仁天皇銳意德政を行ひ給ひしかば稍々蓄積する所ありしと覺ゆ。然るに天應元年、年穀稔らず、加ふるに疫疾さへ起りたれば、天皇は深く御軫念あらせられて天下に大赦し給へり。延曆元年四月の詔に公私凋弊と宣ひしは之を指し給へるなるべし。されど其年は年穀豐稔にして瑞祥荐りに臻り改元をさへ行はれたり。惟ふに是れ遷都御斷行の有力なる一動機となりしものならむ。同三年、造宮の工を創め給

ひし間もなく、新京の宅を造らしむる爲め、諸國の正稅十八萬束を內親王・夫人・尚侍及び公卿等に、又其私宅の新京の宮內に入るべき人民に山城の正稅四萬三千餘束を賜ひ、さては山崎橋の架設、東西兩京の御賑給、河內茨田の築堤等國費を要する事業の前後相繼ぎ、剩へ朔旦冬至に當りたればとて京畿田租を蠲き、役夫を進めたればとて諸國の田租を免せられしが如き、必ずや大に恃む所在しまさずはあるべからず。秦氏が地方の豪族にして、造宮の勞他に超えたりしは之を認むるも、其奉公の成果を餘りに、過大視するの說は首肯し難し。同年葛野郡の人秦足長が造宮に功あるを以て外正八位下より外從五位下に陞せられしは越階に相違なきも、錢を入るゝもの、五位に叙せらるゝの例なるは、延曆二十九年の詔にも見え、同四年、近江の人勝首益麻呂が二月より十月の間に於て役夫三萬六千餘人を進めて之に私糧を給せるを以て外從五位下を授けられしも亦此例のみ。然かも其七月造宮の爲に諸國に命じて和雇せしめられたる役夫は三十一萬四千人なりとあり。蕃別の諸氏如何に富めりとも、都城の經營に要する多額の經費を負擔し得んこと思ひも寄らず。

平安京
尾竹竹坡氏筆

然るに先きには興作を屏けて儉約に遵はんと宣ひし天皇の一朝にして此御方針を改め給ふべくもあらず。唯天皇は遷都より享けらるべき利益の爲に高價を拂ふの、寧ろ國家永遠の長計なりと思召されしなり。さればこそ當時の勅に造宮の務は事已むを得ずと宣へるなれ。奈良朝時代は支那の文物制度を模倣して皮相的文華の光彩陸離たりし時代なり。而も文明の餘毒永く朝野に浸潤して浮華に流れ遊惰に傾き、法制は完備するも概ね徒設に畢り、綱紀の頽廢云ふに忍びざるものあり。光仁天皇在位十年餘、藤原百川等の輔弼に依りて、仁政を施し給ひしも、南都の宿弊は尙ほ改まらず。桓武天皇英邁の質を以て大斧鉞を下し給はんとするに當り情弊の纏綿せる舊都を去て人心を一新するの要を感じ給ひしは、明治天皇の東京遷御と大差あるべくもあらず。當時平城の地は已に權門勢家の蟠據に任せ、就中佛敎保護の結果として諸大寺の跋扈を極め、先には聖武天皇すら大佛の造立に此地を避けて近江甲賀を擇ばせられんとし、又南都四大寺の主張が難波京の遷都を阻みしことさへありて、其勢力實に侮るべからず。桓武天皇延曆二年六月の詔に京畿の間猥りに寺院を建立し田園を寄附するの弊を指摘せられ、若し年代を經ば、地として寺ならざるはなからむと宣へり。況や平城の舊都元來寺多しと宣へる平城其地なるをや。天皇が此等の權門社寺領を避け給ふを以て遷都の一因なりとするの觀測は蓋し正鵠を誤まらざるべし。

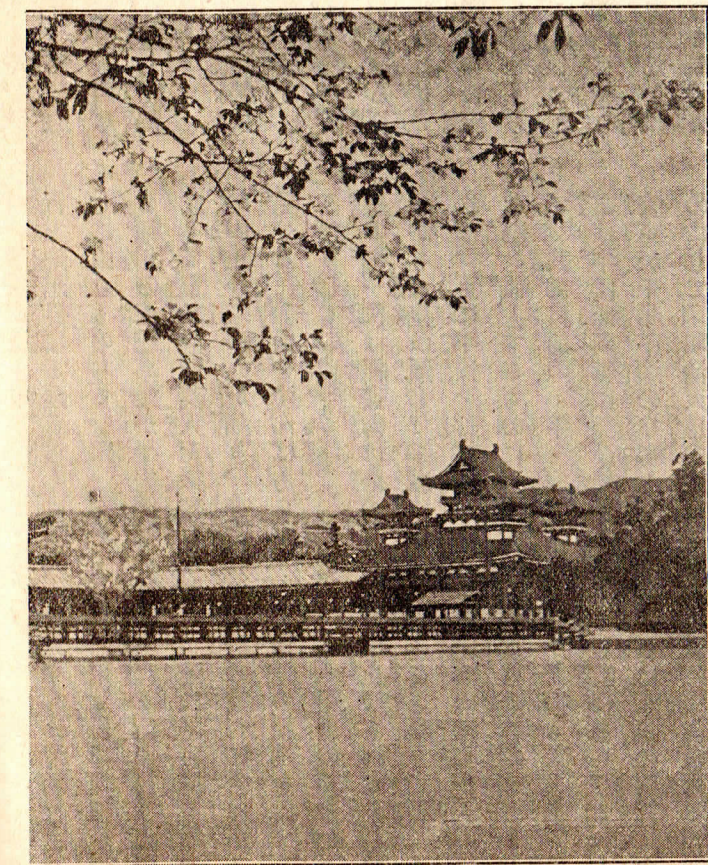
風俗
『水』

然るに長岡の郷は經營久しきに彌るも其功を竣るに至らず、論者或は種繼の橫死を以て其頓挫を來せる原因なりと看做すものあり。國史に據るに種繼は死に至るまで親しく工を董せりと見え、其熱誠實に驚くべきものあり。是れ彼が天皇の知遇に感じて一意報効を期しつゝありしものにて、決して私榮を期せるものと認むべからず。彼の遭難が遷都の事業に多少の影響を及ぼせるは事實ならむも、彼の背後には一層御熱心なりし天皇の在ましゝことを忘るべからず。されば長岡京の經營は種繼の死後尙ほ八年の後までも繼續せられ、大極殿・太政官院・猪隈院等を始め左右京・東西京等の區劃も略ぼ定まれり。故に天皇が延曆十二年和氣淸麻呂の密奏を容れて平安京に遷り給ひしは、更に他の原因なかるべからず。國史の之に關する記載は詳ならずと雖、余は工事の進行上豫想外なる違算若くは障碍の發見せられて功程遲々たりしに由るものなるを信ぜんとす。當時河內・攝津の國境に於ける河川の開鑿事業が平安遷都の建議者たる淸麻呂其人の議に成りて單功數十萬人を徵發しながら、遂に其目的を達せずして中止せられしが如き、亦當初の設計の實行に伴はざるを發見せるに職由せずんばあらず。而て豫期の竣功を見ずして止みたりしもの、獨り長岡の京のみならず、平安の京の如きも天皇の御一代は經畫尙ほ全からずして中止せられたりしなり。而かも天皇は斷じて平城に復歸し給ふことなく、長岡不可なれば、更に平安を擇び給へり。是れ當時の遷都が人心の一新を第一義とするものにして、平城の地に離れ給ふことだけにて、其御目的の一半を達し給へるなり。從て天皇御一代の大業は半ば此新都に負ひ給ふも恐らく誣言にあらざるべし。平安京が千年不遷の皇都として儼存するは天皇の明鑑に由るものにして、明治天皇の東京に遷御ありし後尙ほ永く京都を以て別都となし給へるは、決して偶然にあらざるなり。

五　延曆の治

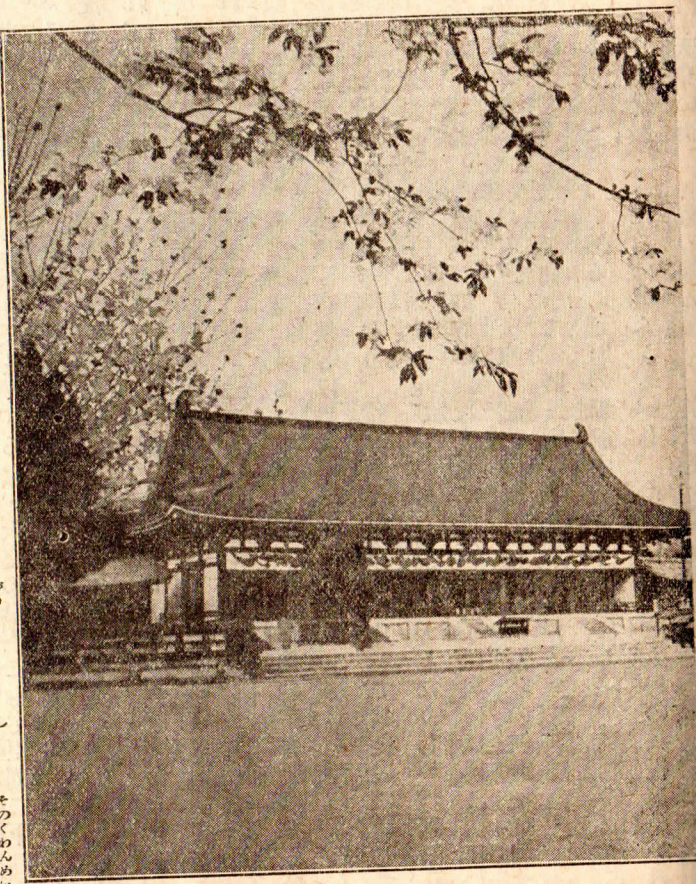
天皇の御在位二十五年間に斷行し給へる諸般の改革事業は多途に亘りて限ある紙上に叙述すべくもあらず。故に今は只其最も較著なるものを擧げて、所謂延曆政治の一斑を窺ふに便せんとす。

奈良朝時代の政治は、形式に流れて情弊百出し、官吏に剩

任多く官紀の紊亂殆ど言語に絶せり。就中國司の如きは、在職數年の間種々の不正手段に由りて官物を掠め、地利を貪り任期滿ちて後も尚ほ永く其他に留まりて豪强に誇り暴戾の行多かりき。此を以て天皇は官規を振肅して行政を整理せられ、殊に地方制度を刷新せらるゝを以て政綱の第一に置かれ、天應元年御即位御一詔に於て、奈良期官制の宿弊たりし員外官を停廢せられ、地方官の法規を犯して。收斂を事とするを戒飭し、其成績によりて黜陟すべきを論じて秋毫も假借せられざるべき大御心を示し給へり。天皇は國司の任重く祿厚きに拘はらず、公廨を貪るを以て能事となすもの多きを歎かせられ、延曆元年諸司の官人の國司を兼帶するを停め、解由狀進否の制を嚴にし、勘解由使を置いて、解由狀の審査に當らしめられたり。又奈良朝時代に於ける極端なる墾田奬勵の結果地方の富豪は、權門勢家乃至國郡司と結托して土地を兼併し庄園諸國に蔓延せり、此を以て浮宕の徒之に隱れて調庸を免がれ、其弊堪ゆべからざりしかば、天皇は之に向つても、亦屢峻嚴なる禁令を下し給へり。

人才登庸を原則とせる令制に於ても郡司の如きは、尚ほ譜代を取るの規定を存せしが、天皇は其弊を察して譜代の撰を止めて才を取らしむることゝし給へり。之れ天皇が人才の登庸を急務とし給ひしが爲めにして、當時一般に賤劣視せられし歸化民の子孫さへ、才用の取るべきものあれば之を捨て給はず。就中百濟王の如きは、天皇外家の親ありしに由るとはいへ、頻りに擢用を蒙むり、征夷副使を以て陸奥鎭守府將軍を兼ねし俊哲の其人の如きもあり、延曆十五年百濟氏の子孫を以て參議に任ぜられし和家麿は、實に蕃人の相府に入れる第一人にてありしなり。名將軍坂上田村麿其人も亦歸化民の後にてありき。明治天皇が智識を世界に求め給へる盛意と

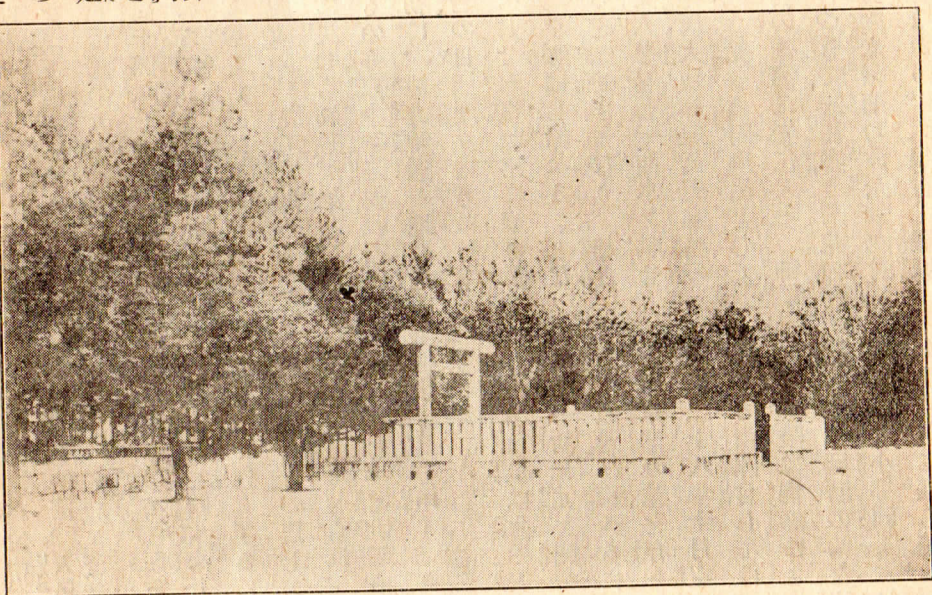
京都平安神
—平安奠都

思合せて天皇の器宇の宏濶に在しましゝを仰ぐべし。

延曆政治の第二の政綱は蝦夷の征服と綏撫となるべし。蝦夷は我先住民にして、皇化の普及と共に、次第に東北に驅逐せられしも、尚ほ猖獗を逞し叛亂絶ゆることなかりき。明治天皇紀の初頁が東北諸藩の討伐に始まりしが如く、天皇も亦登極の初より蝦夷征討の事あり。爾來屢征夷の師を出して蕩平を圖られ、親しく軍情を察して將軍を督勵し成功を責め給へり。延曆七年、征東大將軍の命を奉じて陛辭せる紀古佐美に節刀を賜うて、閫外の任を委ねられ、坂東の安危此一擧にあり將軍之を力めよと宣へるが如き、當時其稱なかりしも、天皇大元帥の實を具へ給へるは云ふ迄も無し。後坂上田村麿を用ゐて征夷の任を授け給ふに及んで、驚くべき威力は全く蝦夷を屛息せしめ東北初めて平定を告げたりき。奥羽の確實に我版圖に入れるは、實に天皇の御宇に始まると謂つべし。天皇は又歸順の俘囚に向つて姓を賜ひ位に叙して忠節を勵まさしめられ、幾多の煩費を忍びて彼等の内地移住を奬勵し、蝦夷の地には、又内地人を移殖せしめ、野俗を改めて華俗に化せしめんと圖り給へり。殊に注意すべきは、伊勢・三河等の女子を陸奥に遣はして、彼等を敎育せしめられしことにて、其如何に彼等の同化に大御心を勞し給へるかを想ふべし。然かも其頑冥不靈にして累を内地人に及ぼすものある時は、嚴罰を以て之に臨まれたり。余は國史を讀んで此に至る毎に、臺灣に於ける討蕃の事業を聯想せざる能はず。而て天皇の恩威兼ね到り、征夷の業殆ど完成せられて、日本の版圖の東北に擴張せられたりし史實は、又明治天皇の御宇に於ける新領土の増殖と相似て殖民政策上稗補する處なきにしもあらざるを覺ゆ。

天皇は又奈良朝時代に於て制定せられし律令の修正を試み

宮大極殿
千百年紀念—

られ、延暦十年には先に吉備眞備の刪定せる律令二十四條を同十六年には神王等の奏進せる刪定令格四十五條を有司に下して遵用せしめられたり。而て同十二年には彈例を制定して彈正臺に賜はり、又勘解由使の進めし交替式を諸司に下して準據せしめられたり。嵯峨天皇の弘仁格式の撰も亦天皇の遺意に據りしものなり。奈良朝時代の法制が支那法を模倣せしもの多く、我國情と支梧する處あるを以て、天皇の修正は主として此點に顧慮し給ひしものゝ如し。神事に關する犯罪に向つて、普通の刑法以外固有の慣習法たる祓除を採用することゝせられしが如き、其一例なり。天皇は夙に學を好み給ひ龍潜の日、大學頭の任に就き給ひしが、登極の後も敎育に重きを置かれ、明經生をして漢音を讀習せしめられ、平安遷都の初、先づ勸學田を置いて經學の不振を興さんとし給へり。奈良朝時代の寺院は、朝廷の保護の厚きに狃れて、國法を蹂躙し、その富を利用し人民に出擧して高利を貪り、僧侶は戒行を愼まず、私に檀越を結びて市井に出入し、佛驗と稱して愚民を誑惑し、人民も亦猥りに寺を造り地を寄せて課役を免かれんとし、其弊殆ど頂點に達せりと見えしかば、天皇は嚴制を施きて、寺院の數を制限し、僧侶の資格を定め、素行を正さしめられたり。こは素より明治の初年に於ける廢佛毀釋に同じからずと雖ども、多少の類似點なしと云ふべからず。而かも最澄・空海の二人を擇んで唐に赴き法を求めしめ給へり。彼等が顯密二敎を弘通し、鎭護國家の義を唱へて舊佛敎を風靡するの概ありしは稍後年の事なりとはいへ、天皇の御明識は掩ふべくもあらず。されど天皇は南都佛敎中の法相・三論二宗の如きを保護して其併立を得しめ給へり。社會政策は又延暦政治の有力なる政綱の一たりしなり。奈良朝時代には貴賤の差漸く著しく、社會の弊竇たるに至りしかば天皇は大に之が矯正を圖り給へり、延暦六年、皇弟諸勝に廣根朝臣、皇子岡成に長岡朝臣の姓を賜ひしを初め、皇族に姓を賜ひて臣下に編せられ、五世の王に皇族の待遇を授けられし現制を改めて令制に復し皇族の列より除かしめ給へり。後世桓武平氏と稱するは、天皇の皇系にして臣列に下れるものを云ふ。此改革は彼等をして一般臣民の義務に服せしむるを主なる目的とするものなり。天皇は又王臣家・諸司寺家・國郡司の豪民と與に山林を占め、口分田を交換するを禁じ、出擧稻即ち稻貸付の利率を低くして、彼等の貧民を惱ますを戒め其兼併を防ぎ給へり。而て之と共に風俗の矯正を畫せられ其奢侈淫逸に流るゝを制し給へり。葬禮の華奢を事とし公私の集會、夜祭等に男女の混淆して淫風を煽ぐを停められしが如き其一例なり。從來賤民は畜産に比して其良民に通じて生める子は情を知らざるものゝ外賤民としたりしが、延暦八年に至りて奴婢の良民と通じて生める子は與に良民に編せしめられたり。天皇が蝦夷の征討に當りて常陸の神賤を徵發せられしが如きも、賤民制度に於て注目すべき要件とす。然るに延暦の新制中、最も重要なるは、兵制の改革に過ぎたるはあらざるべし。令制に據れば人民の兵役を免かるべきもの頗る多く、其徵發を蒙むるものは、概ね貧弱の徒戰に耐

えざるものどもなりしかば、軍團の設あれども無きが如く、兵士は概ね國司軍毅の使役に供せられしのみ。征夷の軍屢々起れる當時に於て、此缺陷をみそなはせる天皇は兵制の刷新を望み給ふに切ならざるを得ざりしなり。されば延暦二年、已に散位の子、郡司の子弟及び浪人の從軍に堪へたるものを國の大小に從つて徵募し、之に軍事上の智識を與へて、不時の變に備へしめられ、官吏の資格ある者は登庸に便にし、一般人民には徭を免ぜしめられしことありしが、同十二年には少數の邊要地方を除くの外、兵士を全廢するの大英斷に出で給ひ、之に代ふるに地方郡司の子弟等を健兒として召集せられたり。全國皆兵の根本義によりて徵兵令を布き給ひしは、明治天皇の御治世中にありて特筆大書すべき要綱なり。今此二者を對照して制度の得失を論ずるは必ずしも穩當なりといふべからず。延暦の改革後の兩京の如き、長門の如きは健兒を廢して舊の如く兵士を置かるゝこととなり、所謂武門武士の發達は亦此新兵制の之を助長せるが如き嫌なきにあらざるも、そは自然の成行にして固より制度の豫期せし所にあらず。尫弱無能の兵士を存せんよりは、寧ろ之を全廢して實力ある健兒に代はらしむること、當時にありて蓋し機宜に適せることなりしならむ。少くとも寛仁中刀伊の來寇を斥け得たりしものは間接に此制度の賜物なりしと謂つて可なるべし。

伏見柏原桓武天皇山陵

六　御性格

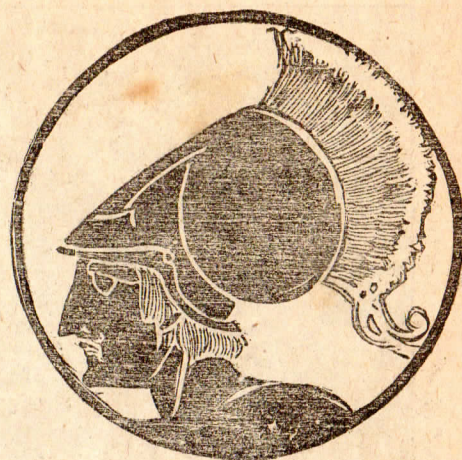
如上の政治は一として非常の改革にあらざるは無し。然るに其蹉跌を生ぜざることを得たりしは、天皇の御一身を以て儀表となし給ひたればなり。天皇は敬神の御思召厚く、龍潜の日親く伊勢太神宮に詣でゝ御奉賽遊ばされしことありしが、平安遷都の初には賀茂神社に行幸あらせられ、又平野社を造られたり。天皇は甚く常識の判斷に富み給ひ、嘗て紀古佐美が蝦夷の軍中より捷報を上りて大兵一たび擧つて忽ち荒墟となる云々天兵加ふるところ前に敵なし云々と奏せるを見そなはし、其浮辭を弄して成敗を轉倒し一時

を糊塗せんとするの陋を洞見し給へるが如き、天皇の御觀察の精透にして如何なる手段も其御聰明を蔽ひ奉るの不可能なるを知るべし。而かも徒らに難きを臣下に責め給ふものにあらざるは延暦九年國司の交替に際して國の大小に依り調庸進物の缺員未納を補塡せしめられ、同十四年又未進の高に應じて國司の公廨を割くの制を立て給へるにても知られたり。天皇は又御本性勇武におはして最も畋獵を好み給へり。然るに御巡幸の際には親ら民情を視察し施政の資となし給へること少からず。新京の撰定は夙に此際に決せられしが如し。四徒の苦役を憐んで恩典に處し給へるもの亦京中御巡視の際に於てせられたり。明治天皇御治世の初に、地方僻陬の地に巡幸して具に民情を尋ね給ひ、又大演習の日、屢々地方に行幸ありしと思合して叡慮の忝きを偲ぶべし。天皇が常に鰥寡孤獨高年廢疾の民を恤まれ凶歳には飢民を賑はし給へることなど亦直に明治天皇の御鴻恩に想到するを禁ぜざるなり。加之天皇は文藻に巧に屢々島院に御して文人を召し、曲水を賦せしめ給へり。又國風をよくし給ひて遣唐大使藤原葛野麻呂の陛辭せるに當り、和歌を詠じて之を餞し給ひ葛野麻呂をして感涙に咽ばしめられしことあり。天長の佳節は光仁天皇の御宇に始まりしが、明治天皇の天長節につきて思出多き菊花の和歌は實に天皇の己乃己呂乃志具禮乃阿米爾菊乃波奈知利曾之奴倍岐阿多羅蘇乃香乎との御製に始まれり。天皇嘗て羅城門をみそなはし、一尺を低くせざれば風に倒れなんと宣ひしに、果して大風に遭つて轉倒せりと云ふ。其何事に附けても御精透の眼識ありしこと申すも畏こし。

天皇の御在位中、征東の軍屢起り、新都の工作日も尚足らざりしかば、人民漸く軍旅に倦み、徭役に疲るゝに至れり。延暦二十四年、天皇德政を議し給ひしに、百川の子參議藤原緒繼天下の苦む所軍事と造作とにありとて此兩事を停めて人心を安んじ給ふべしと奏せしが、天皇これを嘉納し給ひて、造營未だ成らざるに、造宮職を廢し給ひ、更に第二の革新を行はれんとの思召ありしやに拜せられしに、翌二十五年、御不豫に渡らせられ、三月十七日といふに終に崩御し給へり、寶算七十。紀伊郡柏原山陵に奉葬し、諡して日本根子皇統彌照尊と申す。御陵は十陵の一に列せられ曾祖天智天皇の例に准じ、國家大事毎に、勅使派遣奉告せらるゝを例とせり。

明治天皇は此平安の京に御降誕あらせられ、其御治世が歴史上一新紀元を開かれしこと桓武天皇の如く又其御性格さへ多く似通ひ給へるに平安轉都後の遷都を斷行し給ひながら、尚ほ京都の號を存し、長く國家大禮の擧行地と定め給へり。明治二十八年十月京都市民胥謀つて平安奠都千百年紀念祭を擧ぐる由聞食しては、特に御嘉賞の勅語を降し給へり。然るに其御陵は偶然にも桓武天皇の柏原陵に近く桃山に定められ給へり。延暦の治を以て明治の聖代に比すれば版圖の廣狹、其規模の大小等固より日を同くして語るべからずとはいへ、向上の氣に滿ち純熟の域に達せるの一事略ぼ相似たり。大正の新時代は果して過去の何れの時代にか相似るべき。古今を商較して感興の更に新たなるを覺ゆ。(完)

蒙古族の印度統一者アクバル大帝(一五四二——一六〇五)の大鹵簿

——印度古畫——

帖木兒大王

京都文科大學助教授　羽田亨

一、序言

亞細亞大陸の中でも露領中央亞細亞の地方は、吾々日本人にとつては最も緣遠いものゝ一つであらう、此の地方に崛起した英雄帖木兒の傳を極めて手短かに叙するといふことは、筆者には左程容易の業ではない、それは簡單なる叙述によつて甚だ緣遠い事柄を、成るべく明らかにしたいとするからである。かゝる目的の爲には、勿論事細かしい考證などに入ることは出來ぬ。またその一生を通じての長々しい年代記やうのものも避けねばならぬ。割合に耳新らしいと思ふことを拾ひ集めて普通に知れ亘つて居ることを補ひ、それで此の英雄の一面を少しでも多く寫すことが出來たならば滿足しなければならぬ。始めに此れ丈けのことを斷つておいて叙述に入らうと思ふ。

二、帖木兒の家系

帖木兒の生れたのは西洋紀元の千三百三十三年、日本では丁度新田義貞が鎌倉に撃ち入つて、高時に詰腹を切らせた年である。父の名はツラカイと傳へられて居る。中亞に名高いサマルカンドの町の南の方、ケシユといふ町で生れたのであつた。今は綠の町なる意味でシャリ・サブズと呼ばるゝ所である。曾ては蒙古族として傳へられて居つたが、しかし實はその系統はベルラスと云ふて、古くから土耳其に名高い部族に屬するので、蒙古の成吉思汗が勢力を得た時には、彼の五代の祖先に當るカラシヤールといふ人は、父とともにその部下に馳せ參じ、ベルラス族の名は逸早く蒙古の記錄に見えて居る。

此のカラシヤールといふ人は成吉思汗の第二子なる察合臺、即ち中央亞細亞の地方を領して、察合臺汗國の基を作つた人の宰相として、父の成吉思汗からつけた人で、千二百七十年に沒して居る。ケシユの地方は實に此の人の時からベルラス家の所領となつたのである。それでは何故に帖木兒が蒙古族として傳へられたのであるかといふに、これは彼自身がその基を作つて居るのである。彼の自傳と稱せらるゝ『ツザキ・チムーリ』といふ書物に察合臺の宰相カラシヤールが自分の祖先であると書き、また彼の父から聞いたとして成吉思汗と自分の家とは同一の系統であるとのことを記して居るのである。此の傳說のあてにならぬことは今一々論證する要はあるまいが、それにしても折角の自分の系圖を僞つて、何の必要があつて蒙古族といはなければならなかつたのであるかとは、人の疑問とする處であらうと思ふ。しかしその理由は極めて簡單である。後に彼の出た當時の此の地方の有樣を說けば判然することではあるが、要するに當時は例令有名無實にしても、察合臺系統の君主が引き續いて此處を支配して居たのだから、彼が新たにこれを統御するに當つては、その血統に屬するものであると稱するのは甚だ利益のあつたことでもあり、よしまた利益の問題は別としても、少くとも名門を誇るに足つたであらうと思はれる。尤も彼が此の蒙古系の家からその妃を迎へたことは明らかであるが、それはもとより彼自身の系統に關係するものではない。

帖木兒肖像

三、帖木兒の生まれし國

さて今進むで彼の事業などを叙する前に、少しくその本國の有樣を記して置く必要があらう。トルキスタンとか中央亞細亞とかいへば、一般に不毛の砂ッ原位により考へられて居ないかも知れないが、しかし事實は決してそんなものではない。今日の地理學上の言葉では彼の根據地方は露領土耳其斯坦の名で呼ばれて居る。生れた場所はケシユの町ではあるが、後に都と定めたのはサマルカンドの町である。此等のケシユ、サマルカンドなどを中心にした地方は、大體二つ

の河によつて包むことの出來る一區域である。北なるをシル河、南なるをアム河といひ、ともにアラル湖に注ぐのである。古くはソグト、希臘人がトランスオキジアナといふた地方で、更に此の中央を流るゝツアル・アフシヤンの流域の如きは、古くから或は「世界の樂地」、或は「世界の沃地」などゝ呼ばれた處で土地肥え草木繁茂せる樂天地である。歷山大王の東征を知るものは、またマラカンダなる町の名を記憶するであらう。今のサマルカンドの町は即ちその名の今日に殘れるもので、此の時以來でも既に悠々二千二百餘年の生命を保つて居つた。例令ばそれが尙ほ否難すべき餘地があるにしても、古くから高尙な文明を持つたイラン人種が、此處に據つたものであることは、もとより明白な事實である。其の後東方から追々トルコ人種が侵入してこゝに土着するやうになつてからも、またモハメット教國の勢が東に進んで、「其の聖典が讀誦せられ、寺院が建てられるやうになつてからも、なほイラン文明即ち波斯系統の文明は此の地に昌へて居つたものと思はれる。成吉思汗の侵入は實に此の地方にとつては一大打擊であつた、此の時以來は所在に榮えた町も俄かに衰微し、或は居民の全體を失つた所も少くなかつた。サマルカンドの如きも其の住民は十分の一程になつたとも記され、或は殆んど全く滅絕したとも記されて居る。さて此の後漸々と復興はしたが、新たに現はれて來たものには、もはや全くイラン風の色彩は失はれて、純回教的即ちセミチックの文明が蔽ひかゝつて居たのである。帖木兒の出たのは即ちかゝる時であつて、劍をかざして異敎徒を征するといふことが極樂に行くべき方法であると一般に說き敎へられ、また信ぜられて居つた時であつた。

此の頃政治上から見た一般の形勢をのべると、成吉思汗の後なる察合臺汗國の運命既に衰へて、彼の生れる三年前即ち千三百三十年に位に即いたカザン汗といふのが、眞實の王としては殆んどその最後ともいふべき人で、この王が暴虐の爲に臣下の爲に殺されてからは、蒙古系統のものが撰立されこそしたが、それは只だ一箇の傀儡で、何等の權威もなかつたやうである。從がつて政權はたゞ其の下の貴族の手に歸して、然も互に軋轢し、殆んど無政府の有樣に陷つてしまつた。此の際漸次頭角を顯はして來たのが即ち ケシュを根據地としたベルラス家即ち帖木兒の一族で、彼の叔父(或は兄とも記さる)ハジ・ベルラスなるものが之を統御して、種々の機會に乘じて漸やく權勢を張つて、附近の諸地を從がへることになつた。一體察合臺汗國といふのは、初めから露領土耳其斯坦ばかりでなく、葱嶺を東に越えた淸領土耳其斯坦及び此の兩地の北方一帶即ち 今日の伊犂からその西方に亘つて迄も、悉く領有して居たのであるが、後に之が東と西とに別れて、東はカシュガルを都とせる淸領土耳其斯坦、西は露領土耳其斯坦と別れることになつた、然るに今西の察合臺汗國がかゝる有樣になつたからして、東部の王トグルク・チムールといふのが、自家一族の此の頹勢を挽回する爲に、千三百六十年に軍を指揮して西に向つて進發した。帖木兒がその大事業の端緒を開くのはまさに此の時からのことである。

四、飛躍の第一步

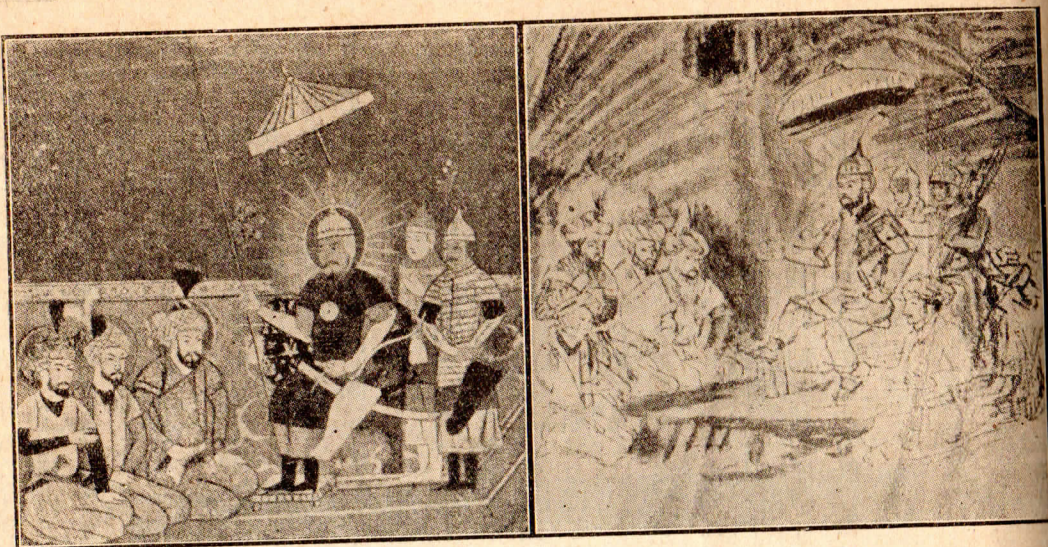
當時彼の年齒は二十五歲に當つて居る。尤もこれより以前即ち二十三歲の時に、彼の妃の父で其の頃サマルカンドに權力を擅にして居つたクルガンといふ人の命によつて、千騎ばかりに將として、波斯の東方コラッサンを征伐して成効し、此の時早くもその地を自分のものにしやうといふ野心を抱いて居つたが、それはクルガンが殺されたが爲に、目的を達せず、本國に歸つて來た。しかし此の征伐はとにかく人に命ぜられて行つたことでもあるから、暫らく彼の事業の第一步には數へまい。さてハジ・ベルラスは東部察合臺國王の侵入を聞いて一度は之に對抗の準備もしたが、半にして軍を散じて南に向つて逃げてしまつた。無論帖木兒も叔父と行動を共にしたが、途中彼の才略はみす〳〵無爲に落ち行くことの愚を悟つたものと見えて、アム河の邊で叔父に別れて引き返し、必然悲酸の運命に陷るべき本國の人間を援はうと決心した。

そうしてその方法は軍を募つて敵を逆へる普通手段ではなく自から身を挺して敵軍に投じ、三寸の舌鋒をふるつて大敵の侵入を喰ひ止める策略であつた。或る著者によると頻りに彼の雄辯を推奬して居るが、果してその爲か或は人を動かす熱誠のあつた爲でもあらうか、見事に彼の計畫は成就して、彼は敵の大將からケシュの支配を托せらるゝことになつた。これが抑も彼の活動の第一の事件と目すべきものであらう。しかしながら此のケシュ支配のことはまだ直接王から任命せられたものではなかつた。千三百六十一年にトグルク・チムール王が再びサマルカンドに擊ち入つた時に、帖木兒は王の侍臣で非常に權力のあつたハミッドといふ親友から推薦せられて、始めて王の知る處となり、其の召しに應じて謁見して、忽ち王の信用を得、茲に始めてケシュ及びその附近の領主に任命せられたのであつた。かく王に親近して居る人に親友を持つて居つたことは、此の際帖木兒の爲には甚だ利益であつたことゝ思はれるが、此の翌千三百六十二年に、王がその子息のイリアス・クワージヤをサマルカンドに殘してトランスオキジアナのことを統べしめ、自分は東の本國に歸つた時には、實に帖木兒は王の命によつて、サマルカンド朝庭の民政總理の任に當つたのであつた。僅かに二十八歲ばかりの青年に、此の大事が托せられたことから考へて見ても、彼の手腕の早くからぬきんでゝ居たことが解るであらう。

五、流離困頓の時代

されど彼の生涯にもしかく得意の時ばかりがあつた譯ではない。かくて彼が王子クワージヤの下に父王寄命の任務に服して居る間に、一方軍事總管の役目をうけて居つた人は、反つて王に對して叛逆を企てたので、彼は終にあきらめをつけて都サマルカンドを後にして、落人の境涯に入らねばならぬことになつた。但しこのことは彼の沒後二十年許りにしてアリといふ人が編纂した『ザファル・ナーマ』即ち『戰勝記』なる書物に據つたのであるが、また他の書物によれば、却つて帖木兒が王の軍を逐ひ返す計畫を立て、それが發覺して殺されやうとしたので逃げ出すことになつたのだとも傳へられて居る。前後の事情を考がへ合せると、これの方が正しいかも知れない。此の後暫らくの彼の境涯は實に慘憺たる光景を極めたもので、悲酸の運命を嘗め盡したものといひ得るであらう。元來回敎徒のことだから、その妃は數多かつた中にも、殊に寵幸したのはかのクガンの娘ツルカン・アガといふのであつた。アガの兄フサインと帖木兒との關係は、永く彼を不幸の中に陷らしめたものであつたが、當時フサインも既に王と戰つて敗北した結果、行方も分かぬ落人であつた。帖木兒は先づ之れを尋ね出して計を共にしやうとした。アラル湖の南邊、アム河の下流域をその頃カレズム國といひ、其の附近に橫はる沙漠をカレズムの沙漠といふた。近くは基華汗國の名で露西亞の中亞侵略史に名高い地である。帖木兒は此の沙漠の中で義兄フサインに邂り逢ふたが、今此の兩人に從がへるものは僅かに六十人にすぎなかつた。然るに此の僅かの人數を以

て大膽にもカレズムの都ウルケンジを襲擊して、こゝに一種小說的な戰が開かれた。彼等の一隊は終に僅かに十二人迄に打ちなされ、フサインの馬は傷を受けて斃れてしまふ。彼の妻は直ちに自分の馬に夫を乘せて、自からは帖木兒の妻と相乘りし、あたりの小高き丘上に退いて防いだものゝ、數ふれば殘るは主從男女を合せてたゞの七騎、それでも一方の血路を開いて逃れはしたが、そこは名にし負ふカレズムの沙漠とて、一掬の水も見當らない。飢と渇とは容捨もなしに一同の身に迫つて來る。やつとのことで或る羊飼の男に出會つて、その惠みによれる一片の羊肉を炙つて食ふことが出來た。「吾等の喜びは名狀することが出來なかつた」とは此の際における彼の告白である。されど非運はまだ彼等に紮つた。數日糧なしに沙漠をさまよふて、漸やく見出した一寒村に此の後の一ヶ月をすごしたが、終には剽掠を業とせるトルコ人等の手に落ちて、帖木兒夫妻は無殘にも牛小屋の中に押し込められ、毒蟲の責苦に遭ひながら六十二日を此の中にすごさねばならなかつた。「刑罰の爲め、自衞の爲めに、例令人を殺さねばならぬにしても、牢屋と鎖とでは苦しめまい」と彼が神に誓つたといふて居るのを見ても、如何に此の幽閉が苦痛であつたかを想像することが出來る。

しかし彼の逆境は先づ之を以て終りを告げたものと見てよからう。其の不屈の精神は終に此の牢獄を脱け出す機會を作つて、フサインと共にアム河の上流地方に逃れ、此處に再び勢を養つて追捕に向つた王軍を敗り、漸次故郷ケシュの町に近寄つて來た。あらゆる艱難を嘗め盡して今漸やく再び故郷の空を眺み得るには至つたものゝ、町は勿論王家の治めて居ることであるから、直ぐにはそこに入つて懷舊の情を遣ることも出來ぬのである。此の際ケシュ乘り取り策として彼の用ゐた軍略は、彼の得意の騎兵であつた。僅か二百騎ばかりの兵を四つに別て、數人の大將に之を率ゐさせ、各兵には馬の兩側に澤山葉のついた木の枝を引きずらせて驀進させた。城中からはその爲に煽り立てらるゝ烟塵を見て大軍の襲來と曉り、逸早く陣を撤して退き、こゝに帖木兒は再びやす〱その祖先の地に入ることが出來た。此の時王子イリアスはケシュから程遠からぬ所に陣どつて、帖木兒との間に一大決戰が行はれる筈であつたが、偶々父王トグルク・チムールがカシュガールで沒したとの報知を得て、軍を收めて歸つたので帖木兒は之を進擊して北上し、屢々之を敗つて終にサマルカンドをも占領することになつた。尤もこれは彼一人の事業ではなく、他の多くの領袖等と連合して收め得た結果であつたが、今かくの如くにして王を追ひ拂つてからは、彼等は皆自己の權力を掣肘せらるゝことを恐れて、皆各々獨立の行動を執らうとしたが、彼の機略は此の時の危機を見て取つて、直ちに領袖會議を催ほし、此の際王を擁立しなければ自衞の道なき旨を論じて、遂にやはり成吉思汗の後裔なるカビル・シヤー・オグランといふのを立てゝ、其の位に据えることにした。しかし實權は勿論帖木兒と、彼の義兄フサインとの掌中に歸したのである。此の後は姻戚の關係あるにも係はらず、しふねく彼に反抗するフサインと對抗し、時には之が爲に敗られてボカラ、メルブと逃げまはつて、往年遁竄の有樣を繰り返したこともあつたが、更にまた一方では東部の新王イリアスとも絶えず戰を續け、然もその間に、全く士心を歸服させることが出來た。千三百六十九年には唯一人の敵手たるフサインをも攻め滅ぼして、玆に彼は全くトランス・オキジアナの地を統一してしまふことになつたのである。

帖木兒大王肖像二種

巴里ルーヴル宮美術館藏レムブラント筆ペン畫

伯林王室國民博物館藏印度イラム密畫

六、帖木兒の創業

自分は帖木兒が後年大事業を成すに至つた地盤を固めた次第を語らうとしたのである。今フサインを亡ぼして軍はまだ其の戰場なるアム河の南方、ヒンドクシュ山脈の北バルクの都に滯在して居る中に、彼は莊嚴なる儀式によつてマヴラ・ウン・ナール侯の位に上つた。正に千三百六十九年四月八日のことである。マヴラ・ウン・ナールといふのは回教徒がトランスオ・キジアナの地を呼んだ名で、侯といふのはアミールといふ言葉の翻譯の積りである。彼は終生決して王即ちトルコ語、蒙古語などで汗といふ號をとらなかつた。最も此の儀式の際に部下からサヒブ・イ・キランといふ尊號を奉つたことが傳へられ、『戰勝記』などには始終此の名が見えて居る。サヒブは王、イは「の」、キランは星の交會（Conjunction）のことで、即ち星の交會の際世に出づる王といふ意味の波斯語である。波斯地方ではアブラハムでもモーゼスでも、其の他ゾロアスター、クリスト、モハメツトなどゝいふ偉い人は、皆星の交會の際に世に出でた人と信ぜられて居る。則ち帖木兒をもまた此の名によつて尊んだものである。しかしこれは決して彼自身の用ゐた名ではなく、彼はたゞアミールなる稱

を用ゐ、またベク即ち首領と稱するにすぎなかつたのである。

序だから述べて置くが、帖木兒といふのは鐵といふトルコ語で元より彼の本名である。蒙古人や土耳其人に甚だ多い名である。又た彼をタメルランともいふのはチムール、レンクといふ二語を約めて且つ訛つたもので、レンクといふのは跛者の意、即ち跛者帖木兒といふ言葉である。實際彼はシスタンの戰で足を傷つけて跛になつたが、しかしチムールレンクと云ふ貶稱は千四百四十年ロシアのアラブ・シヤーといふ人が、彼の傳記を書いた迄は、決して用ゐられなかつた名である。此の著者の故郷の地が、帖木兒の爲に蹂躙せられたのを恨みとして、思ひ切つて惡く彼の一生を傳したもので、從がつてかゝる好ましからぬ名を用ゐ出したのを歐羅巴にも傳へて、然もそれが轉訛されたものである。

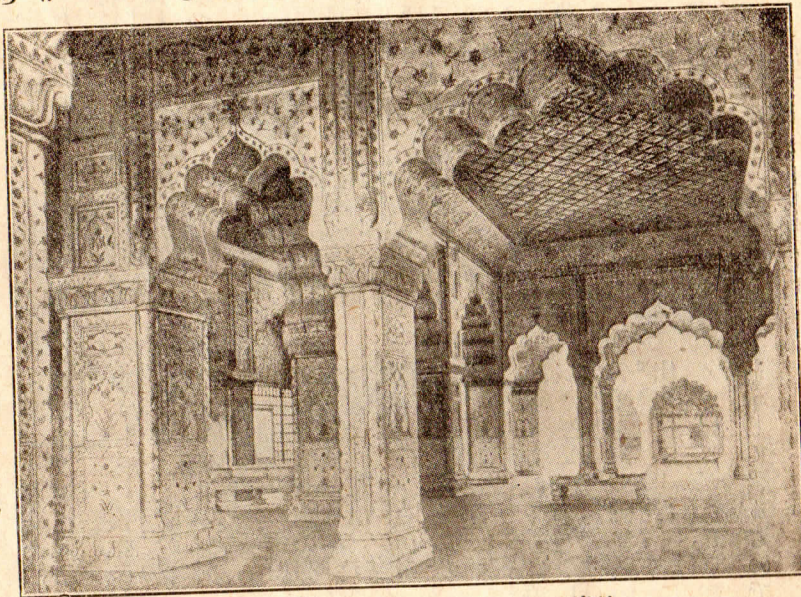
此の年サマルカンドに引き返すや、彼は都を此の地に定めて新たに城砦を築き、寺院を建て宮殿を作りなどして、王都の美觀を添えることに力を用ゐた。當時回敎國の都といへば先づ指をカイロ、バグダッドに屈せねばならぬ。しかも此等の都の人がサマルカンドに來て見ては、その繁盛な有樣に羨望を禁じなかつたとのことである。從がつて諸方から此處に移住するものも多く、サマルカンドの名はまた世界に轟くやうになつた。尤も此の都の修飾は彼が一生涯の間常に意を注いだ事業の一つで、後には回敎徒の所謂「世界の中心」と迄なるのであるが、とにかく此の頃から既に繁昌を仕出したものである。

七、最後の飛躍

帝王の事業既に就り、殷肆なる都は日にその盛大を遂ひ、今は安逸の天地を貪ぼれば貪ぼり得る境涯に達したのである。されど休止することを知らないのは英雄の不運とでもいふのであらうが、彼の志は決して此の小天地に限ることは出來なかつた。即ち此の事業を土臺にして世界の四方八方に雄飛を試み、終にペルシア、シリア、小亞細亞から南は印度の恒河地方に及び、東は天山の南北、北は歐羅巴の東に亘つてその威武を奮ふことになつた。實に彼の生涯に得た大勝利は三十五回と數へられて居る、今は彼の此等の飛躍について一々煩らはしい筆を運ぶ要はあるまい。ギボンの才筆が我等に敎ふるが如く、彼の生涯の終りには、トランス・オキジアナの王冠は、彼が戴いた二十七個の中の一つであつたことを知れば充分であらう。たゞこゝに簡單な記述を省くことの出來ないのは、彼の畢生の目的であつた支那征伐の一條である。

彼は千四百五年四月一日の夜、支那征伐の途中シル河畔の訛打剌といふ地で病の爲に沒したのである。この事は極めて普通に知られて居るが、しかしその支那征伐の事業は晩年諸國を討伐し終つて始めて彼の考へ出したものであるかのやうに記してある書物もないではない。けれども少しく細かに研究して見ると彼の此事業は夙くから企てられたとであつて、實に千三百九十七年にはその爲に兵を集めたこともあつた。されど西方諸國の事情は如何にしてて彼が遠く支那に向つて征途に就くことを許さなかつたので、終に遷延して此の時に及んだ次第であるが、とにかく支那の富貴と領土の廣大とは

早くから彼の垂涎した處であつたことを知らねばならぬ。支那は當時明の世で、彼の千四百三年に位に即いた永樂帝は、僅か二年餘りの歲月ながら帖木兒の治世と同じふした譯である、此の不世出の兩雄が互ひに其の治の初めと終りとに於て相接し、そうして將に干戈の間に相見ようとしたのであつて、もし今數年の壽命を帖木兒にかしたならば、東洋史の上に極めて面白い大波瀾が畫かれたかも知れないのである。もし帖木兒の軍が支那の境上に現はれて、その得意の鋒先を振りまはしたならばといふやうな假定の下に、今種々の想像を回らさうとは思はないが、それにしても帖木兒最後の思ひ出としての此の軍容が、どんな有樣であつたかといふことを記して置くのは必らずしも無用のことではあるまい。

先づ集まつた軍隊の數を見ると、當時彼の勢力範圍であつた各地方から二十萬の兵を徴集して、これならば「如何なる事業も成就することが出來る」と期したのであつた。さて此の二十萬の軍を支那に送るといふことは、その道筋のことを考がへて見ると實に困難な仕事である。道には

印度デルヒなる莫臥兒皇帝の宮殿謁見室

勿論天山の險が横はり、不毛の沙漠が擴がつて居る。即ち諸將に諭して騎者各一人について十人宛の人を伴はしめたが、勿論之は武器兵糧の運搬などに用ふるものであつたであらう。そうして穀物數千荷は軍用の車によつて運ばれたが、之は道すがら種を蒔いて、軍の歸路に於て兵糧の用に供しやうとしたのである。尚はまた七年間を支ゆべき乾草の飼料を用意し、其の他乳牛二頭、乳羊十頭宛を各人に携さへさせて途中糧の缺乏に備へしめたと書いてある書物もある。其の數量の上に於ては一々あてにもなるまいが、とにかく此の種類の用意のあつたことは確實である。昔から支那や蒙古の軍隊が、西域を征伐したことは度々あるが、此の地方を通過するに當つて、かほどの用意のあつた例はない、從がつて糧食の缺乏から、或は沙漠の間に生命を失ひ、或は荒野の住人と化した樣な始末は度々演出せられたことである。今帖木兒のかゝる軍旅の有樣を見ては、如何に彼の用意の周到で、從つて此の征伐に重き望を置いて居つたかが知られるであらう。不幸にして此の計畫は彼の病によつて畫餅に

歸し、乾坤一擲の大活劇は終に幕を開くの機會を失つたのであつた。

八、帖木兒の人物

古來、事業を成就した人々には、どこかに常人と異つた所がある。かゝる立場から帖木兒の特に他人に傑出して居つた點を求めると、既に人も論じて居る樣に、堅忍不拔の精神と出精止むことを知らざる熱心との二つを擧げることが出來ると思ふ。其の一度思ひ定めたことは、如何なる障碍に出逢つても貫き通さねば措かない氣象は、後世の學者が認めて居るばかりではなく、彼の事業を親しく見聞したアリもその『戰勝記』に明記して居ることである。「凡そ一度企てたことには自分の全力を傾注し、必らず終局の目的を達しなければ之を止めなかつた」とは、彼自身に記して子孫に殘して居る訓言の一つである。勿論かゝる主義精神は、彼の事業を成功せしむるには大なる原因を成したものには違ないが、しかしまた一方では、極端に此の精神を發揮して、爲めにあまり感心しない結果に陷つて居ることもある。曾てケライと云ふ民族を討つた時に、その討伐を委ねられた大將が、戰勝の後に平和を締結したが、後に帖木兒はそのことを知つて、飽く迄初志を貫くが爲に、亂暴にも約束を無視して自身またもや討伐したことがあつた。即ち此の性質の爲に殘酷といふ樣な譏りを買ふ場合を作つたことも少くないのである。また彼の出精であつたといふことも有名なことで、これはその歷史を一讀すればは何人も直ちに看取する處である。假令ばかの壯麗な都サマルカンドに、彼が生涯の間果してどれ丈けの安逸の時間を貪つたかを考へて見ても、之を了解することが出來る。實に一年間とまとまつて此處に居つたことは稀で、東西の經略に遑なく、偶々都に入つても、その善美を盡した宮殿の中では、直ちに次に執るべき行動の計畫に忙はしかつた有樣である。「國家といふ衣物を纏ふた時に、初めて我が眼を安んじて閉ぢ安眠の床に入ることが出來た」といふのもまた其の訓言の一つである。

かく迄意志の強い人であつたに係はらず、一面にはまた甚だ感情に脆かつた點もうかゞはれる。その母を喪つた時、或は愛子ジハンギールを喪つた時などの嘆き方といへば、實に非常なものである。「王は其の子の死の爲に喪心して、國家の政務を見ることをも全く廢止してしまつた」ので、臣下のものは打ち連れて彼に迫り、「神は人民保護の爲に君主を置いたのに、之れが政を見なければ天下は暗である」といふやうな言葉を以て諫めたので、辛ふじてその元氣を恢復することが出來たと『戰勝記』に見えて居る。其の他孫に當るシヤー・ルフ、妃アガに對する愛戀の態度なども、よく彼の感情の方面を示して居るものである。

九、帖木兒に對する評論

凡そ世の毀譽褒貶は如何なる人に向つても一樣でない。その觀察の仕方の相違に因るもので、もとより止むを得ないであらう。帖木兒の如き[illegible]非

難との兩方面から、殆んど擧げ切れない程の評論をうけた人である。善くいふものは先づ偉大なる戰術家と稱し、勇猛の士といひ、寬大の君主といひ、民苦を救ふた王者といひ、惡くいふものは野心家と呼び、殘虐人といひ、壓制家といひ、其の他千種萬樣である。もし公平にいふならば此等のどの批評も皆な當つて居つて、從がつて此等の何れの方面も持つて居た人と云ふべきであらう。今一々その例證を擧げる遑はないが、或時にはいまはしい殘酷な行爲もあつたが、他の時には愛敬すべき寬容な態度もあつた。彼に最も近く彼を傳した『戰勝記』は「虛僞を惡みて赤裸々の誠を愛し、大膽勇猛にして他人に畏敬せらるゝ人であつた」といふて居るのは、最も當つた批評であらう。

さて今特に此處に書き加へて置くべきことは、彼が立派に修養のある君主であつたことである。荒猪子の如く狂ひまはるのみの王であつたと思つては甚だしい誤解である。彼には『ツザキ・チムーリ』といふ自傳がある。東方トルコ語でかいたもので、之が波斯語に飜譯せられて今日に殘つて居る。また別にその法制ともいふべき『ツゞカツト』なるものがある。政治の方針より始めて、宗教に對する考、軍隊の組織などを仔細に叙述したものである。これ等の彼自身の著述によつても、如何に彼が文明的君主であつたかを想像することが出來る。そうして征戰の間には、どこの國でもやることではあるが、藝能ある士は決して之を殺さず、捕虜として都サマルカンドに送り、そこで各々の藝能をふるはしめ、學者を保護し、學校を建て、自からもトルコ語の外にペルシア語の智識も持つて、その詩歌をも好んだとのことである。聖典を讀誦したのは幼時からのことで、彼の自傳にも少年の時多くの時間を之に費したとかいてある。當時秩序のなかつた時代が、彼の熱心と精力とを征伐の方面に向けて、終に有名な征服者たらしめたものであらうか、もし靜平な世の中であつたならば、彼は必らず他方面に於てその天才を發揮し、名を史上に殘した人であらうといふのは、英のマルカムといふ人の彼に對する批評である。

帖木兒墳墓の內部
——中央黑色の石棺に遺骸を收む——

一〇、帖木兒と成吉思汗

史家の中には彼に大王の稱を捧げたものもある。もしその經略の跡から見て歷山が大王であり、また彼の後なるバベルが大王であるならば、勿論此の榮譽は彼の荷ふべきものである。しかも茲に常に彼が理想の人と認めた英雄があつた。云はゞ大王の認めて大王とした人があつた。彼に先き立つこと一世紀にして、隻手世界の形勢を變造した蒙古の成吉思汗がそれである。彼の生涯は或は成吉思汗崇拜の跡であつたかも知れない。回教國、基督教國の歷史家は彼を目して人道の敵となし、頻りに攻擊の筆鋒を向けるものもあるが、しかし征略者として彼等の間に驚嘆せられ、英雄として崇拜せらるゝことも格

別であつた。况んやその人の後は相別れて亞細亞の各地に君臨し、帖木兒の家の如きもその臣下としての一族長にすぎなかつたのである。此の際四方經略の志を抱いた帖木兒が先づ其の範を此の英雄に取つたことは、誠に自然の勢であらう。彼の所爲についてはその消息を知り得べきことが澤山にある。例令ば回教國では勿論回教經典程神聖なものはない。然るに帖木兒は成吉思汗崇拜の結果、此の英雄の法典として古から此の地方に傳へらるゝ札撒と稱するものを極端に尊重して、之を聖典と同視し、萬般のことを之に據りて定めやうとした。その結果終に回教僧侶の感情を損ねて、人爲の法を聖典と同樣に見るが如きは異端者の所爲であるとの激烈な非難を受けたこともある。彼が蒙古族と稱し、末年の支那征伐の際にも蒙古恢復といふ名を立てたのも、此の成吉思汗崇拜と關係する處少くあるまい。

二一、帖木兒と宗教

最後に彼と宗教との關係を述べて此の叙述を終ることにする。彼が果して眞正の回教徒であつたか否かといふことは、常に彼の傳記を草するものゝ論ずる所である。そうしてかゝる議論の多くは、その所爲が經典の規定する處と合するとか合せぬとかいふことを標準にして居る樣である。かゝる方法によつてこんな問題を論ずるのは寧ろ愚な沙汰ではあるまいか。どの道彼の如き英雄は一種窮屈な型の中に收め得べきものではない。從がつて其の行爲によつて信仰の正異などを論じ得るものではない。時には變通自在の方針も採れば行爲にも出でなければならぬ、それが正しい信仰に悖るものだとすれば頭からかゝる英雄の信仰の正否などを論ずるのが誤りである。されどもしその事業などを放れて帖木兒一個人として回教の信仰を持つて居たかと云へば勿論何人も然りと答へることを躊躇しないであらう。少くとも彼の法制、自傳を初めとして彼の傳記を書いたものによれば純然たる回教信仰者であつたことは爭ふ可き問題ではない。しかし彼の信仰の如何は思ふに其の傳記に於て甚だ重要なる位置を占めるものではあるまい。自分は寧ろ此の英雄がその生涯を通じて回教なるものを如何に利用したかといふことに注意して見たいのである。回教國民を統御する爲に回教の信仰を持ち、また之を保護奬勵する要のあることは勿論で、此の點に於て彼は充分の注意を怠つて居ない。そうして一旦異教徒に對する時には此の宗教の利用なることは彼にとつては甚だ重要なものであつたと思はれる、異教徒を改宗せしむるのは回教徒の任務で、此の爲に死すれば彼等は皆極樂淨土に行ける譯である。それで他國の征略に當つてはその征略者にこれ程都合の好い敎はないのである。經典の文句を一度唱ふれば直ちに士心を纏めることが出來る。彼はこれが爲にその征伐の際には必らず聖典の說く所を種にするのであつた。例令ば支那を征伐する時に彼は部下を諭して次の如くいふて居る「神明の冥助により、吾等は亞細亞を平らげ、世界の大なる諸王を屈服させた、古來かゝる大なる領土、權勢、軍隊及び命令を司るものは稀れである。しかし今日に至る迄に我等の侵した罪は決して少々でないから、その罪亡ぼしの爲に善行を爲し、異教徒を撃つて其の國を倒さればならぬ。故に今支那の偶像教徒を征伐し……從來罪を犯す道具であつた軍隊を以て、贖罪の器としやうと思ふ。吾等は支那に攻め入つて神聖戰爭に從事し、偶像教の寺院を燒き拂つて、回教の殿堂を建てればならぬ。かくて我等は罪を亡ぼし神明の宥しを得るであらう。聖典は善行により過去の罪惡の消滅を敎へて居る」と、如何なる辭柄を工夫しても、かく巧みに士心を糾合し得る手段はなからう。則ち彼が遺憾なくこの宗教を利用し、また充分にその功果を擧げ得た所以である。しかし同宗徒の征伐の理由としてはかゝる言葉は用ゐ得るものではない。「何れの國を問はず、暴政、壓制、罪惡が行はるれば、之を討つてその害毒を除くのは君主の義務である」と云ふ位のことで、波斯征伐の時にもかく諭したことが彼の法制に見えて居る。印度を征伐する時に、また露西亞の東即ち欽察を征伐する時に、如何に此の宗教が彼に與へた便宜が多かつたか、また居常人心を收攬するのに、如何に之を利用する必要があつたかは、容易に想像し得る處であらう。

二二、土耳古族の盛衰

帖木兒が土耳其族に屬することは前に述べて置いた。由來此の民族は屢々大飛躍を試みて、世界の史上に大波瀾を描いたものである。古くは歐洲を蹂躪したフン種族の如きも、大きく見て此の一族の中に數へられやう。名高い突厥といふのはトルコなる言葉を漢字で書いた丈けのことである。東羅馬帝國を倒して今日迄コンスタンチノープルに據つて居るものに彼等の最近の代表者である。かく數へて見れば此の民族の過去は甚だ長いもので、そうして武勇の點に於て實に光輝ある歴史を有するものである。中でも帖木兒の如き人を出したのは、彼等の誇とし得ることゝ思ふ。近く其の齢漸く傾いて何れの地でも他の民族の主權の下に、憫れな生活を續けて居るにすぎないのに、今また唯一つの頼みであつたオスマン土耳其の國も、無殘な最後に走りつゝあるやうである。異教徒を倒せの叫び聲も、けふの世の中では思ひ切つて振ふことが出來ない。此の際サマルカンドの地下の一室濃き碧玉の棺の中に、靜かな眠りに入つて居るといふ昔の英雄を想ふものは、自分一人ではあるまい。

（完）

宮城苑内貴女の習學（帖木兒時代の彩色筐の蓋）

エリザベス女王

法學博士　浮田和民

一、エリザベス女王の時代と我が明治時代

英國の女王エリザベスは、一千五百五十八年より一千六百三年までの在位である。日本の歷史にては、織田信長桶狹間の戰に先つこと三年にして即位し、關ケ原の戰より三年の後に死んだのである。當時我日本の歷史が大事の時期、興味ある時代であつたのはいふまでもないが、殊に英國は、將來の發展上、最大の危機に際會してゐたので、國運の別るゝ岐路に立つてゐた時代であつた。中世以來、英國は歐洲の大陸に領土を有し、大陸に覇權を振はんとしたことは、百年戰爭の失敗で全く畫餅に歸し、止むなく、海外に着眼せねばならぬ時代となつた。

然るに、エリザベスの父ヘンリー八世は、宗敎改革を斷行して、英國を羅馬敎會より分離するに至つた。ヘンリー八世の後を承けたるエリザベスの弟エドワード六世は、盛んに新敎を勵行したけれども、姉のメーリーがその後を繼いでからは、國敎をまた舊敎に復せしめ、次いで位に即きたるエリザベスの治世は、國內は新舊宗敎上の軋轢にて、何時內亂の突發を見るやも知れざる狀態にあつた。國內斯く多事なりし他方に、英國の領土を見れば、今日のイングランド及び愛蘭土だけに止り、而かもその愛蘭土と雖も、單に英國王を戴くといふに過ぎないので、憲法及び議會を異にし、全く獨立の行政の下に立つてゐた。而して蘇格蘭土は當時獨立の一王國を爲してゐたのである。是の三王國を合併しても其の面積は日本の內地に及ばざる上に、當時英國は海外に尺寸の領土を有してゐなかつた。縱令ひ英國は當時歐洲の强國ではあつたにせよ、前述の如き國內の紛擾に打勝ち、後に述ぶる如き外部の壓力を打破つて、將來今日の如き、世界的大帝國となるであらうとは、

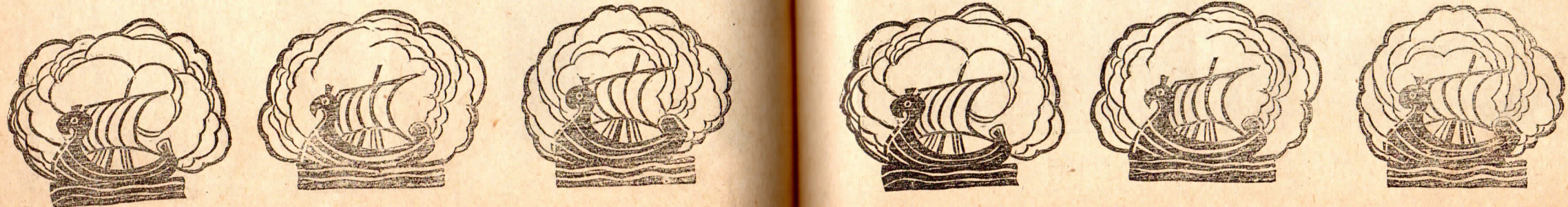
何人の腦裡にも浮ばなかつた事柄であつた。

是の內外危急の場合に、女王として英國に君臨し、將來の大發展を爲すべき基を開いたのは、實にエリザベス女王及び彼女を輔佐したる政治家並に軍人の偉大なる功蹟である。實に是れ我が明治時代の歷史に比較すべき事蹟であるのである。

二、最强國の西班牙英國を敵として立つ

當時世界に於ける歐洲の最大强國は西班牙であつた。

元來英國は、中世の末期百年の間、佛蘭西と葛藤を生じてゐた爲め、エリザベスの祖父ヘンリー七世は、西班牙と親交を結び、その子ヘンリーの爲めに、西班牙の皇女を娶つたのである。然るに西班牙はコロンブスが新世界發見の結果、南北兩亞米利加を殆んど獨占の領土となし、且つ東洋にも版圖を有して第十六世紀の前半期以來歐洲の最大强國となつたのである。されば英の

エリザベス女王

ヘンリー八世

ヘンリー八世は歐洲の勢力平均を保つの必要上、是迄は反對の地位に立つたる佛蘭西と相提携するの利なるを思ひ、茲に西班牙との關係を絶つの政策を決し西班牙皇女たる其の妻カザリンを離婚するに至つた。是れ一つには、カザリンに男子生れずして、將來、英國の王位を繼承せしむる時、女子では非常の困難あるべきを豫想したからである。

ヘンリー八世は、カザリンを離婚し、宮女アーンボレーンを娶つた。不幸にして彼女の腹に生れたるもまた女子、即ちエリザベスであつた爲めに、何時しかその寵衰へ、彼女は遂に姦淫罪の名の下に死刑に處せられた。その後屢々結婚を爲し、エドワード六世生れて、ヘンリー八世の後を相續したけれども早世し、その後はカザリンの娘メーリー位をつぎ、一時新教を廢して舊教を復興せしめた。メーリー死して茲にエリザベスが位に即くに至つたのであるが、舊教徒の眼より見れば彼女は正當なる結婚の下に生れた皇女ではなかつたので英國の舊教徒は、エリザベスを國王に戴く事を不本意と爲し蘇格蘭土の女王メーリーが英國王ヘンリー七世の曾孫たるものから、寧ろメーリーを擁立し、並せて英國の女王たらしめん事を希望するものが多かつた。

然るに此のメーリーは、才色兼備の婦人で、素行修らず、蘇格蘭土に內亂起るや、脱奔して英國に遁れたが、英國女王エリザベスの爲めに捕はれて、獄に監禁せらるゝこと實に十八年に至つた。その間蘇格蘭土にては、メーリーの子ゼームス六世幼君として位に立つたが、一方英國では往々獄中のメーリーを救ひ出して女王に押し立てんとする舊教徒の企圖を見るので、エリザベス女王は遂に獄中のメーリーを死刑に處するに至つた。

此のメーリーは舊教の熱心なる信仰者であつたから、死するに臨み、エリザベス及び英國に對する深甚なる復讐の遺言を爲し、此の遺言の執行者として萬事を、當時歐洲大陸の最大强國であり、且つは舊教國の盟主である西班牙の國王フイリップ二世に托したのである。

三、英國の危機、女王の膽略

フイリップ二世は、歐洲大陸に於ける當時の覇王にして、新教諸國を壓服し、西班牙の國威を全世界に示さん事を其の理想としてゐた。且つは、英國人が、往々冒險的遠征を企てて、新世界に於ける西班牙の領土を冒さんとするの時機なり

メーリー女王

し故、直ちに英國を征服するの決心を爲した。即ち一千五百八十八年、西班牙の全力を擧げて新調『無敵艦隊』を組織し、當時西班牙の領土たりし白耳義より、數萬の陸兵を搭載し、是を英國に上陸せしむるの計畫を立てた。

此時英國が危險の地に陷りし事は、後世ナポレオン大帝が歐洲に覇權を振ひ、歐洲大陸を征服して、將に英國に侵入せんとした時と同一であつた。否、或意味に於ては、その時よりも、尚ほ危險の地にあつたのである。何となれば、ナポレオン大帝の時には、英國は既に、海外に大なる殖民地を持つてゐたれども、エリザベス女王の時代には、歐洲以外に尺寸の領土をも有しなかつたから、萬一西班牙の爲めに征服せられたらば、英國は全然獨立を失ひ、且つ將來發展の機會を失ふべきは、想像に難からぬ事だからである。

然れども、如何に新舊宗教上の爭に、兄弟內に鬩いでゐても、一度び外敵の侵入を受けてその國危しといふ時に至れば、英國人は直ちに一致團結したのである。宛かも先年、我が國民が、擧國一致、露西亞の海陸大軍を擊破した如く、敵の前に、今は新教徒もなかつた、舊教徒もなかつた。

英國の海軍には、舊教徒のハワード卿元師となり、我東鄉大將に比すべきフランシス・ドレーキ艦隊を指揮し、一千五百八十八年七月下旬、ドーバー海峽に於て、西班牙の艦隊を邀擊し、遂に彼が英國侵入の目的を達するを得ざらしめたのである。此の海上の戰捷は、我が對島海戰の如くに花々しき勝利ではなかつたれども、西班牙の艦隊は、大戰鬪艦百三十隻以上、大砲三千、水兵八千より成り、威風堂々、三日月形を爲し、七哩の間に亘つてドーバー海峽に侵入したる有樣は日本の艦隊に對するバルチック艦隊以上の勢力であつた。即ち西班牙の軍艦は、小なるも三百噸、大なるものは一千二百噸であつたが、英國の戰艦は多くは四百噸以下の商船を武裝したる急拵への海軍に過ぎなかつた。

フイリツプ二世

英國艦隊の指揮官フランシス・ドレーキが西班牙の無敵艦隊來るの報に接した時、彼は象棋の遊戲に餘念なかつたが、悠々として勝負を終るや、出陣したのである。その度胸は最初より西班牙の艦隊を呑んでゐた。

同時に、民兵は各地より倫敦附近に召集された。舊教の信者なる貴族モンテーギューの如きは、父と子と孫と一所に倫敦附近のチルベリーに出陣した。女王エリザベスは、茲に於て召集せられたる軍隊を檢閱し、馬上に跨り、一大演說を爲し、世上の專制君主等を恐怖せしむるに足るの勅語を下した。

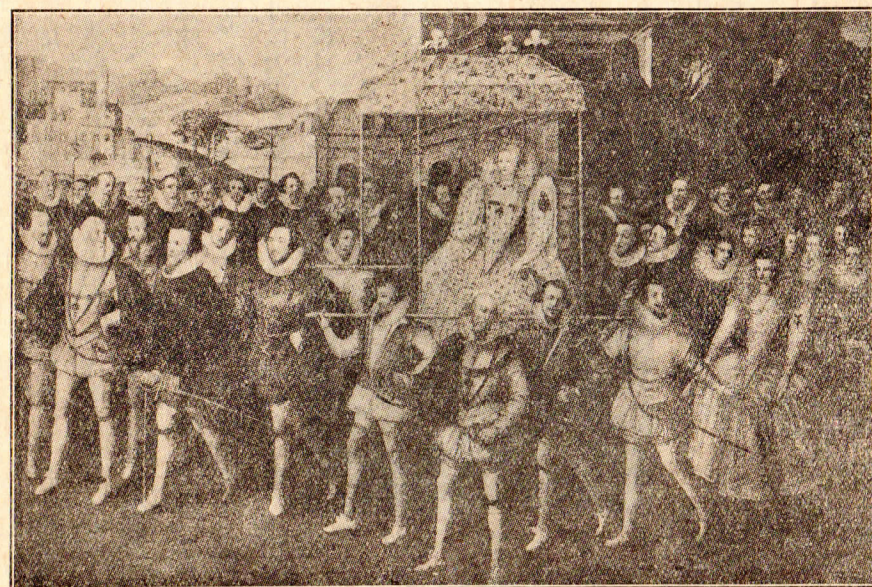
朕は汝等と共に、戰場に於て死生を共にし、我が神の爲め、我王國の爲め、我人民の爲めに、我が名譽も我が生血も、塵土に委するの覺悟を有する。朕は知る、朕が身は纖弱なる女に外ならざることを。然れども、朕は英國

王の心臓と胃腑を有するものである。

斯くの如き宣告を爲したのは、エリザベス女王が如何に男勝りの婦人であつたかを、想像するに餘りある。彼女は或意味に於て、實に英國婦人の模範であつたのである。

四、英國運の大發展此の時代に基す

英國今は最强國西班牙に打ち勝つて、內外に於けるその聲望は確立した。それと同時に英國人は、その天職の、海上にある事を自覺し、爾後大陸の方は、單に列國の勢力平均を保つ事を、その政策として、漸次歐洲以外に發展するに至つた。

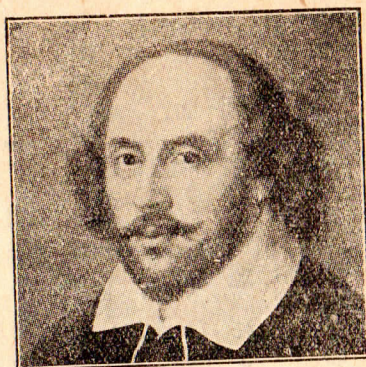
而してエリザベス女王は遂に終身結婚せず、後繼者を、死に至るまで定めなかつた。其の底意は、ヘンリー七世以來の希望であつた蘇格蘭土併合を目的とし、英國と蘇格蘭土とを、同一君主の下に立たしむる事にあつたのである。即ち、彼女王の死後、蘇格蘭土王ゼームス六世入つて英國の王となり、英國にてはゼームス一世と稱し、茲に英國と蘇國との結合成就した次第である。是れ偏にエリザベス女王及びその輔佐の臣が、能く國家永遠の大計を過らなかつたのに基くといふべしである。

エリザベス女王無敵艦隊克伏報賽のため寺院に幸する圖

英國は、是の後、君主と議會との衝突生じ、內亂を釀したこともあるけれども、國運は常に外に向つて發展し膨脹して來た。

五、幸運なる英國と不幸なる日本

斯くの如く、當時の英國は、宛かも明治年間の日本と、稍々その趣を同じうする時代であつた。只日本と異るところ二ツある。

一ツは英國が、今日に比すると少國ではあつたれども、既に歐洲の一等國であり、又その國民中には、個人として、世界的大人物を、政治家にも軍人にも、またその以外にも多く持つて居つたことである。無敵艦隊侵入の頃よりして、世界の大文豪たるウイリアム・シェーキスピア世に現はれ、次で又フランシス・ベーコンも政治家兼學者として、著述を爲し、歐洲に比例なき英國文學の黄金時代を作つた。

シエーキスピア

今一ツは、英國は此の時より自由に歐洲の天地以外に發展することを得た。日本は對島海戰の結果、益々亞細亞大陸に勢力を有する事となつたが、その前途の何處まで發展すべきやは問題である。殊に海上にも發展するにあらざれば、その運命・開拓するの機會を得る事困難であるが、世界の各地は既に歐米人の占領する處となつて、今や日本人が、殖民地を開拓するの餘地はない、移民を送るさへ困難である。

即ち日本が、鎖國して二百五十年の大平の夢を貪りし間に英國は歐洲の大陸に於ける政策を放棄し、偶然にも西班牙、葡萄牙の衰微に乘じ、新世界及び印度、濠洲にその根を植えつけた。そして日本が深き夢より目を醒した頃には、『英國の領土は、太陽の沒する時なし』と言はるゝ程廣がつて居つた。

若し日本が、關ケ原の戰爭後、秀吉及び家康の規模を以て內外に發展したならば、今日は如何であつたらうか。不幸にして三代將軍家光の時、あまりに保守的の政策に偏し、西班牙や葡萄牙の衰微しつゝあるを知らず、鎖國するを以て國家の獨立を保つ唯一の政策となしたのは、國家の爲めには、救ふべからざる大失策であつた。尤も德川氏の爲めには、兎に角二百五十年間、其政權を保つの機會を與へたに相違ないけれども、日本國民として、世界に發展するの好機會を失ふたるは、此の間の政策の然らしむる處である。

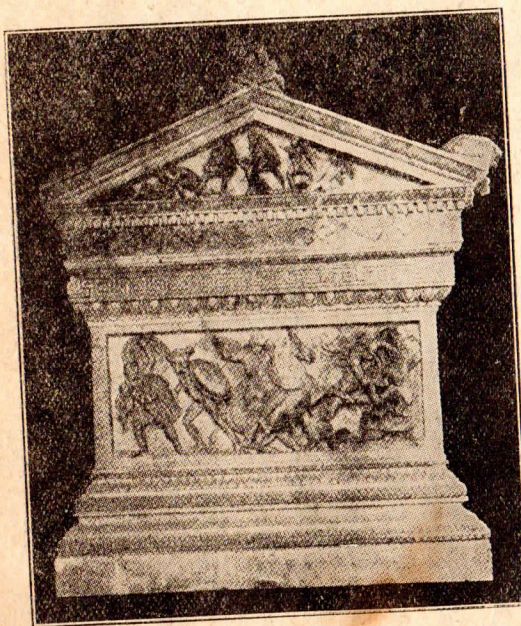
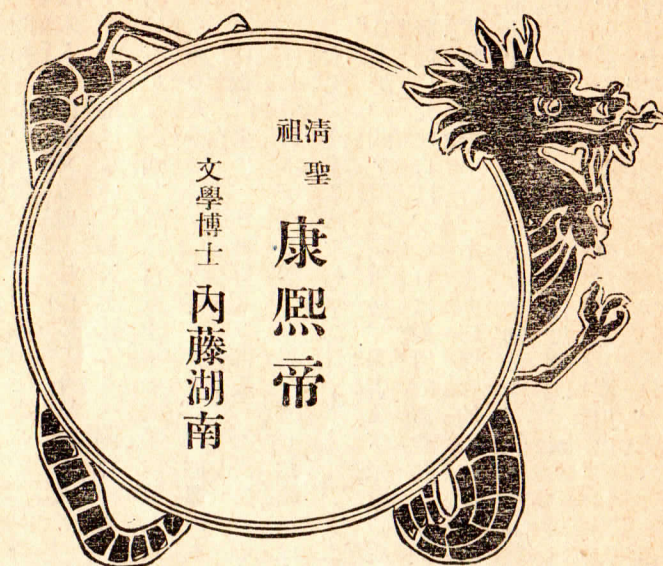
日清日露二大役の結果として、僅かに臺灣及び朝鮮を領土となすに止り、日本民族として、亞米利加及び濠洲方面に、一切の發展を阻絶せられ、未だ一等文明國としての待遇を受くる事能はざるは、一に德川氏の政策の誤りしに基く。

吾人は、英國に於けるエリザベス女王の時代を回顧する毎に、同盟國の幸運を祝賀すると共に、我が國民が好機會を失つたる事を遺憾とする。

只、今後、我國民の決心と努力の如何によりて更らに新たなる運命を造る事の、不可能でない事丈けは我輩の確信する處である。

アレクサンドル大王石棺の側面

清聖祖　康熙帝

文學博士　内藤湖南

一　幼時の機略

清朝は支那の歷代に於いて元に亞いで最も大なる版圖を領し、その文化に於いても亦出色の發達をなした時代である。斯くの如く大きな且盛んな國を立て得たのは、その創業の主たる太祖弩爾哈齊の遺謀によるとはいへ、實際清朝としての基礎をおし擴めて大帝國統一の大業を成就したものは、前に在つては世祖、即ち順治帝の攝政睿親王で、後に在つては聖祖、即ち康熙帝であつたのである。

清朝大帝國の統一は其の初め睿親王によつて畫策されたので、聖祖康熙帝は之を受け繼いで遂によく大業を完成するに至つたのである。聖祖は父帝世祖が二十四歲にして夭折した後を襲いて僅かに幼冲八歲にして帝位に即いたのであるが、性穎悟、長ずるに從ひて益々天禀の英邁を發揮するに至り、且他人に優れた强健な體質をも具へてゐた。即位の初め幼少の身を以て非常な才能を現はした例證がある、それは彼の權臣鰲拜の誅戮一件であつて鰲拜は當時攝政の地位を利用して朝の內外に權力を擅まゝにし、幼冲の康熙帝は殆んど有れども無きが如しと云ふ程に我儘勝手に振舞つた。聰敏なる帝は早くも此の權臣の橫暴を認めて、之を除くにあらずんば到底帝業を成就することが出來ないと考へ、隙もあらば誅戮せんとの決心を固めたのである。帝の十三四歲の時であつた、帝はその謀計の暴露せないやうに日頃大勢の子供等を宮中に集めて何事もなげに遊び戲れながら、密かに其中から强力の者を選拔して置て萬一の場合に備へてゐた。鰲拜は斯かる事とも露知らず、或日例の如く肩で風切る勢ひで入朝し、帝に謁したのであつたが、手筈の全く整へる帝の方では時分は善いと見て取り、兼ねて內命の傳へてあつた大勢の子供等に命じて早速捕縛せしめたのであつた。流石の鰲拜も不意を喰つて如何とも成し難く、其の儘縛に就いたのである。斯くの如くにして非常に權勢を專らにした權臣をも容易く除さ去ることが出來たのである。

二　三藩平定の大業

帝は又二十歲の時に三藩剿討の大業に着手した。此の事は帝の即位後最ッ先きに遭遇した大困難であつたが、而し是れによつて清朝の內部に於ける眞の統一が完成せられた譯であつて、帝の功業中忘るべからざる一大事實である。三藩とは吳三桂、尙可喜、耿精忠の三人を云ふので、吳は清朝が滿洲から起つて北京に入つた時、其の軍の手引きをしたので功を立て、尙と耿との二人は清朝が未だ滿洲に居る時分から之に附屬してゐて屢々軍功を立てた經歷を有つてゐるのである。そこで吳は雲南に封せられ、尙は廣西に封せられ、耿は福建に封せられて、何れも王爵を授けらるゝと云ふ高き地位に成り上つたのである。畢竟するに此の三藩は清朝が明の殘黨を平げるに際して少なからぬ功勞があつたので、斯くの如き異常の優遇を受くるに至つたのも決して無理はないのである。然るに此の三藩設置のために一ケ年の軍費は二千餘萬兩に及んだので、其の頃における清朝全國財政の半ばを占むると云ふ有樣であつた。詰り三藩の設置は將來必ず中央政府の財政上の危害を及ぼすものであると云ふことは、初めから分り切つてゐたのであるけれども、其處には又種々の困難が蟠かまつて居つて、容易に廢藩すると云ふ機運に立至らなかつたのである。然る處ろ三藩の中の尙可喜は漸次老境に達し、不肖の子が家に跋扈して家庭の紛亂を來し世の指彈を受くるに至り、此の時よりして廢藩の聲は勃然として其の勢焰を高めて來つたので、英邁なる康熙帝は此の機會に於いて廢藩を斷行しやうとの考へを定めた。帝の此の計策は何時しか彼れ等の知る所となり、三藩は遂に兵を擧げて帝に叛逆を企つるに至つたのである。中にも吳三桂は明朝以來幾多の戰陣に臨み、戰術にかけては一廉の熟練を積んだ老將で勢望赫々たる豪傑であつたから、朝廷の方では素より彼れに比すべき宿將はなく殊に帝は未た若年であると云ふので、吳は十分に中央政府を見縊つて廢藩のことなどは到底行はるべきものでないと高を括つてゐたのであつた。然るに急に廢藩の事が定まつたと云ふことを聞き、不平滿々として遂に兵を擧ぐるに至つたので、他の二藩も是れに應じて兵を起し、各地の官民蜂起して應援するに至り、遂には南方全部に亘る大騷亂となる。此の叛亂に對して最初朝廷から征討の爲めに派遣せられた諸將は多くは吳の勇名を恐れて進み得ず、士氣徒らに沮喪して常に失敗を重ぬることが多かつた。此の騷亂は其の後七年間の長きに亘つて繼續し、遂に朝廷の勝利に歸して三藩は全く廢せらるゝに至つたが、此の三藩敗戰の原因は吳が老いて場數を踏み過ぎた爲め餘りに大事を採り過ぎて湖南地方にのみ立て籠り、其れ以上一歩も北進しなかつたと云ふ軍略の拙なりしにも基くのであらうが、更により大なる原因は康熙帝の軍略の優秀であつたと云ふことに存するのである。帝は其の部下には寧ろ敵の吳に劣る程の强からざる軍兵を使ひながら、一に軍略によつて其の短所を補なひ、弱以て强を挫くの功を奏したのである。即ち前進部隊の後ちには直ちに之に續いて出る所の後續部隊を置き、前が敗るれば後ので支へると云ふやうになし、而も極めて軍情の報道を迅速にし、二千六七百里

乃至三千三四百里の所でも僅かに四日乃至五日位ゐで情報が到達するやうの仕組となし、其れ以上五千餘里もある遠方の所でも九日以内に音信が得られるやうに盛んに驛馬を利用して戰況の報道に努めたのである。而して帝は自ら常に此の戰報を聽き、或は手づから筆を執つて批答をも書き、或は大臣に命じて返事を書かせなどし、非常に迅速機敏の手段を以て多くの出征軍に指揮命令を傳へ得るの方法を講じた。斯くの如くにして堅忍持久次第に最初の失敗を盛り返して遂に最後の勝利を博し、全く平定の實を擧ぐることが出來たのである。帝の此の働きは二十歳前後の若年の君主としては、寔とに非凡の成効と云ふべく、之に因て全く廢藩を斷行し、支那の本土を擧げて長く清朝の直接支配の下に置くことが出來る基を開いたことは、清朝勃興史の上に特筆すべき一大事績と云はねばならぬ。

帝は其後三藩平定の威力の餘によつて、其の時まで清朝を敵として服從しなかつた臺灣の鄭氏をも服從せしむるに至つた。鄭成功の臺灣に據つて以來、海上航路の難關を恃んで容易に清朝に降らず、明の正朔を奉じて宛然たる獨立の姿をなしてゐた。然るに帝は苦もなく之を屈伏し、地方官を置いて政治を掌どらしめ、全く清朝の版圖に歸せしめたのである。

三　對露折衝の成効

斯くして支那内部統一の大業を完成した康熙帝は、更に進んで外部に向つて發展を試みた。其の最初の活動は露西亞に對してゞある。露國は以前の順治帝の頃よりして、西比利亞を經略し、清朝の東北境なる滿洲の領土と互ひに其の境を相接するに至つた。それで屢々衝突を惹起して長い間治まる時がなかつた。露國でも此の頃恰度彼の有名な彼得大帝の勃興した時であるから、互ひに外部に向つて發展せんとする世界二英傑の遠謀雄圖は、茲に端なくも地を接せる滿洲の國境に於いて、相衝突するの止むを得ざるに至つたのである。而して此の衝突は結局康熙帝の成功に歸した、帝は一面に於いては多數の軍隊を出陣せしめて黑龍江の地方、即ちネルチンスク、アルバジン方面に於ける露兵と戰はしめ、更に一方に於いては徐ろに媾和の計策を運らしたのである。當時歐洲から來てゐたジエスイット派の宣敎師たるジエルビョン及びペーレーラの二人を媾和談判の參謀に任じ、之を遣はして巧みに露國との媾和談判に成効した。此時露國との國境に建てた紀念碑は從來にない珍らしいもので、碑面の文は滿洲字、漢字蒙古字、羅甸語、露西亞語の五體を以て書し、其の條約も兩國語の外羅甸文の一通を作り、兩國語で疑團の生ずるやうな點は羅甸語を以て解決することに定めた。是れ所謂ネルチンスク條約なるものである。斯くして全く平和に歸したのは帝の即位後二十八年であつた。

四　外寇征討の雄圖

次に行つた帝の偉業は準噶爾の大征伐である。準噶爾は蒙古地方に居た一團の種族であつて、明末以來漸次に發展をなし來り、そして遂には青海地方に侵入し、或時は崑崙山を越へて非常な大遠征を企て、其の極西藏にまで侵略の手を進むるに至つた却々の强族である。斯くして其の版圖の最も大なりし時は天山南路北路、科布多、青海、喀爾喀即ち外蒙古一帶の邊までも兼ね領するに至つた位である。帝は之に對して遠征軍を派遣し、遂に康熙三十五年に於いては親征を試み、其の種族の中の重なる酋長噶爾丹を破つて、爲めに其の酋長は自殺するの止むなきまでの窮境に陷らしむるに至つた。其の後又噶耳丹に代つて策妄阿拉布坦が起つて西藏に侵入するに及び、兵を起して之を征討せしめた。その初めに派遣した遠征軍は不幸にして失敗に了つたが、更に續いて派遣した大軍によつて見ん事勝を制して全く之を平定し、後年長く西藏から天山南北路、外蒙古等一帶の地を清朝の版圖に入るゝの基礎を定めたのである。其の後の遠征軍は帝の晩年五十五六年から八九年に亘つて起したものを以て最終とするのである。

是れ等の大征伐の結果として清朝の版圖は非常に擴大を來した。其の後乾隆帝の時代に更に幾分の增加を來したけれども、其の塞外の征服の根柢は矢張り康熙帝の時よりして初められたのである。

五　内治文教の大成

帝は外征に於いて斯くの如き偉大な成効を遂げたのみならず、内政に於いても亦一代の大方針を立てたのである。其の中でも特に學問の奬勵が重なるものであつた。明の遺臣等が清廷に對して兎角反抗心を絶たない時に當つて、早くも博學宏詞と云ふ一種特別なる人材推擧の法を設け、民間の學者を網羅し之を官途に用ゐなどして非常に優待した。暗に抱いてゐる學者の不平を消滅せしめ、盡く清朝に忠勤を抽んずるやうに仕向け、彼れ等をして一生不平の聲を出すの隙さへもないやうに取計らつたのである。帝の學問は主として宋學であつて朱子の著述などを出版せしめて人民に學ばしめ、自らも修養して一代の學風を樹立すべく心掛けた。此の遣り口は後の乾隆帝が漢學や詩文やらを尊び之を以て學問の要諦とせられたのと事變り、頗る實用的のものゝみであつた。此の外に外國の學問の長所を採ることにも努めたものである。其の頃盛んに歐洲から入つて來たジエスイット派の宣敎師連を優待したので、一時は幾十人の外人が北京に居留するやうになり、其の傳へた學問によつて利益を得たことは決して少なくなかつた。中にも天文學は最も著大の利益を齎らしたやうである。明末以來暦法の計算には、屢々間違ひを生じて非常に困つたのであつたが、其の時分から既に西洋人の説を用ゐては何うかと云ふ議論が起つてゐた。而し、其處に又種々の疑團が挾まれ學派の關係などもあつて容易に決せなかつた。最初の傳來者は利瑪竇即ちマテオ・リッチであるが、明末清初には湯若望即ちアダム・シャールが、天文臺長に任せられて勢力を得、又は之が斥ぞけらるゝこともあつて、西洋の暦法と支那の暦法との爭ひが絶へず、如何に解決がつくか分ら

ぬと云ふ紛議の最中であつた。而し帝は、此の間に立つて固く西洋の暦學の優れたことを確信して其の長所を採用するに努め、南懷仁即ちフエルジナンドス・フエルビーストを天文臺長に任じ、精密の機械の製造をせしめ之より以後は全く洋法によつて觀測することとなつた。從つて之が基礎たる數學に於いても西洋法を採用したので、此時よりして支那の數學は長足の進歩を來した。此の外地圖を作ることについても大改正を施こし、從來用ゐて來た支那の粗雜な地圖では不可ないと云つて、其の以後洋風の地圖に經緯度を記入することを初めた。數年間引續き宣教師を各地に派遣して天度を測量させ、之に基いて精密な地圖を製作せしめたのである。今日支那に精密な地圖の傳はつてゐるのは皆帝の時に出來たのである。前にも言つた如く外交にさへ宣教師を利用したが、國內の信教には自分の信ずることを許した外傳教は一切許さなかつた。此の方法によつて宣教師を遇し、內地の文運開發の爲めに利用したのであつた。又西洋の畫法をも傳へて、耕織圖と云ふものを焦秉貞と云ふ人に命じて書かした時は全く洋畫法を採用した。そして遠近法によつて描寫する透視畫をも研究せしめ、之が飜譯書も刊行された。

帝の學問好きは天性であつて、其の十七八歲の時餘りに學問に凝つて咯血するまでに至つたが、而も尙ほ容易に學問を止めなかつた。斯くて齡をとつても一生學問を續けのたで、帝の晚年は實に一廉の學者として立つ丈けの素養を積んだのである。それのみならず滿洲人の長所たる武藝を習ひ、騎射に長じ、天文、暦法、音樂は言ふに及ばず、進んでは外國の語學までも稽古した。其の欽定書としては『佩文韻府』『淵鑑類函』以下大部のもの多く、更らに最も驚くべきの大著は『古今圖書集成』であつて、是れは實に一萬餘卷の大部のものである。帝の學問の仕方は學問を實際に活用するにあつたので、殊に一國に君臨する大帝として之を常に政治の上に應用することに心掛けてゐたのである。從つて政治上には頗る見るべきことが少くないが、何れかと云へば帝の政治經濟の考へは寧ろ消極主義に出づるのを適當と信じてゐたやうである。即ち成るべく租税を減少して國家の富は民自らに藏せしむると云ふ主義を以て當つたのである。此の時代の特別の税制に壯丁税があつたのを、帝の時に之を地租の中に加へ、將來增加した人口には全く税を課さない大方針を立てたことで、是れ實に清朝に於ける大なる仁政の一つである。帝の時代には政府の收入は雍正以後とは遙かに少くして、加ふるに各地の征討に軍費を使つたことが非常に多く、朝廷の財政は寔に豊ならざる有樣であつた。而し帝は之を課税によつて徵收せず、徹頭徹尾節儉によつて補ふことに努めた。故に明の時代に較べると宮廷の費用は何十分の一と云ふ少額にて事足りるの有樣であつた。而して一方に費用の多く要する役所の如きはドシ／＼廢して了ひ、平常の生活も亦極めて質素を旨として過ごしてゐた。即ち斯くの如くにして清朝の基礎を固め、後年隆昌の端緒を開くに至つたのである。

六　立太子の秘密主義

最後に帝の時世に於いて今一つ記憶すべき新例が開かれてゐる。それは代々皇太子を立てないと云ふことである。是れは初め帝が理密親王を以て皇太子としてゐたのに、故あつて途中之を廢さねばならぬこととなつた。此の時非常に親王を失望させ、自らも大に宸襟を惱まされたので、此の事あつて以來は全く皇太子冊立を廢すると云ふことに取り定められたのである。其れから以後は天子の御心に副つた親王の御名前を帝自ら宮中なる正大光明殿の額の裏に秘密に入れて置くと云ふ例になつたので、若し天子立太子の遺言なくして崩御になつた時は、其の額の裏を開けば直ちに分ると云ふ方式をとることになつてゐた。即ち皇統相續者の選定は秘密主義によつて行ふの新例を開かれたものである。是れは懿親間の暗鬪の多い當時にあつては、寧ろ成效した遺口であつたので、澤山の子を有つた天子は、立太子をなすに當つて、其の何男なるを問はず一番學問才能の優れた子を自由に選定して、自己の帝統を襲がせることが出來ると云ふ自由が得られることになつた。故に帝は自分の信じた者を此の主義によつて選定し臣僚の上奏等は一切用ゐられなかつたのである。

＊　＊　＊　＊

帝在位六十一年古今の天子の中で最も長い年數を保ちて、清朝大帝國の基礎を確立し、六十九歲にして崩御せられたのである。是れ支那歷代の天子中、氣宇の最も雄大なると同時に內政に對して綿密の注意を拂ひ、英明の雄略と秀拔の智能とを兼ね備へた理想的の天子であると讃へられてゐる康熙帝の一生である。其の滿洲種族から身を起して漢人以上の大成效を收め、赫々の鴻業を殘された英明の君主の生涯こそ、長き支那歷史中に於いて最も光彩ある一節と見るべきものであらう。（完）

清聖祖康熙帝

ペテロ大帝時代ロシア農民の生活
—露國聖彼得堡市所在—

ペテロ大帝

文學博士　坪井九馬三

一　序言

ロシア歷代の天子は、普通にツアールと申すことになつてゐる。いかにも昔はさう言ふたものであるが、今日ではひとりロシアばかりではない、スラヴ種族の國々では大抵その國君をツアールと申上げることになつてゐて、現にブルガリアの國王などもツアールと稱してゐる。ツアールといふ語はいふまでもなく、ローマのケーザルの轉訛であるから、之れを尊號に用ゐて一向差支はないが、一般にかやうな稱號の例として、後世になるほど輕くなるものであるから、ロシアではペテロ大帝のとき初めてイムペラートルといふ尊號を奉ることにした。これはラテン語で本來は「大元帥」の意味であるが、ロシアでもその意味に用ゐてツアールより數段重い尊號としたのである。

さてペテロ大帝は一六七二年七月十一日（露暦に依る。以下做之）。の降誕であつて、一七二五年一月二十八日の崩御、寶算わづかに五十有四、惜しむべき早世であつたと言はねばならぬ。大帝は實に清朝の康熙帝又本邦の德川綱吉將軍と同時代の君であつた。以下大帝の事績を語るに當り、そのロシア帝國建設の偉業に就いては、世間普通に知られたことであるから、ここには特にその壯年時代創業當初の事績を主として大帝の人物の一班を髣髴しやうと思ふ。

二　大帝踐祚當時の事

ペテロ大帝踐祚の當時は、ロシア皇室に御家騷動の最も劇しい時であつた。當時先帝アレクセイには前後御二方の皇后あり、前皇后はミロスラフスキー家の出、後皇后はナリシュキン家の出であつた。前后の御腹には二男一女在はし、後后の御腹にはペテロ大帝御一方がお生まれであつた。それでまづ長兄のフェオドル三世が立たれたが、一六八二年崩御になつて、御世繼の皇子が無い。ここに於て面倒が起こつたのである。フェオドル三世と御同腹の皇子はイワンと申して體質も弱し、精神も健全でない方であつたが、妹君（大帝には十五歳の姉君）のソフィア内親王といふ人が頗るの女丈夫で、萬事を切り廻したがる性質であつたから、そこで面倒が起こつたのである。そのわけは、フェオドル三世御在位の間は、つながる緣でソフィア内親王はじめ、ミロスラフスキー家の一族が宮廷の中に羽をのして威福を檀にすることができたが、さて崩御となつて見ると、差し詰め長幼の順でイワン親王が立てばそれまでであるが、當時、ロシアにはまだ皇室典範も極つてをらず、從來は大抵長幼の順で繼承して來たとはいふものゝ、必らずそれにも拘はらぬ事情もあつて、いはゞ典範も備はらねば慣例も極つてゐない有樣であつた。ところで當時ペテロ大帝は年僅かに十一歲、世上の事も宮室の事も、よくはお分かりにならぬ小供ではあつたが、聰明の天資は爭はれず、兄君の尫弱暗愚に比べて民心は早くこの君に傾いてゐた。從つてイワンを位に即ける望は甚だ少ない。と言つて大人しく引込んでゐて、弟のペテロに位をとられてしまつては、イワン自身はともかく、イワンを擁してゐるソフィアはじめ前后一門の連中は見す〲後后ナリシュキンの一門のため宮中から蹴落されてしまふのみか、事に依るとソフィアは一生を尼寺に押しこめられて淋しき月日を送らねばならぬことになる。これは虛榮を愛し權勢に憧るるソフィア内親王の死すとも忍び難いことである。そこで騷ぎになつた。

ペテロ大帝肖像

當時ソフィアの考では、幸にしてペテロの御生母の後皇后はどちらかと言へばお人好しの意志のあまり強くない人である。これを丸めるのは何んでもないが、しかし肝腎の自分の

傀儡に押立てようとするイワン親王は御自分でも自分に帝王の器量のなく國民にも信望のないことを知つてをられるので自ら進んで相續の權を弟のペテロに讓られた。イワンに引かれてしまつては、自分がその攝政として實權を握る機會を失つてしまふのであるから、ソフィアはこの際何んとしてもペテロ及びその母后の一門を斥けてしまはなくてはならぬことになつて、ここに自身自ら謀主となつて一大陰謀を企つるに至つた。その陰謀とは何んであるかといふに、當時ロシアにはストレルツィ隊(狙擊隊)と稱して近衞兵の一團があつた。兵數は四萬人、恰かもトルコにあつたエニチェリ隊、又は淸朝に於ける八旗兵のやうな組織のもので、代々世襲して天子の近衞を勤めた。しかし言ふまでもなく世襲の軍隊などと言ふものは、規律も何にもあつたものでなく、放逸遊惰の生活に馴れて、物の用に立つものではない、その適例は舊幕府の時代の旗本八萬騎を見ても分かる。彼等は平生只自分等の特權を笠に着て威張るばかりで實戰には何の役にも立たず、政府にとつても始末に終へぬ厄介ものであつた。この厄介もののストレルツィ隊にソフィアは目を著けた。彼等はただ金を呉れて、その上ロシア人のことであるから、燒酎を澤山飮ませてやれば愛國も勤王も何にもない、何んでもやる。そこでソフィアは一門の者と密謀して、このストレルツィ隊の仲間に流言を放たしめた。その流言といふのは、當時ロシアには澤山外國から人を雇つて政府の重要な役目を勤めさせてゐたときであるから、そこでこの外國の官吏が毒を以て先帝フェオドルを弑害したのみならず、今やイワン親王に對して同一の毒手を加へんとしつつあるといふことを言ひふらしたのである。この流言を聞いて近衞隊の者共は非常に激昂した。そこへソフィアの計らひで盛に彼等に燒酎を馳走したので、彼等は醉つ拂つた勢に任せて何にを始めるか分らぬやうな不穩の形勢になつて來た。ここに於いて時分はよしと、ソフィア內親王は要路の大官を召し集へ、事情かくの如き有樣になつて來たのであるから、早くイワン親王即位の事を定めて、人心を鎭靜すべしと說いた。しかし今日尫弱のイワン親王を立てるといふことは、とりも直さずソフィアを位に即けると同じといふ考は誰にもあるので、ソフィアのこの議を贊したのは腹心のもの計り、他は一同袂を聯ねて席を退き、この策略はまんまと不成功に終つたのである。

しかしソフィアはこの位の失敗でひるむ女ではない。一六八二年五月十五日のことであつた。俄に世間が騷がしくナリシュキン家即ち後后の一門の者イワン親王を弑逆したといふ風聞が立つた。次いで間もなくイワン親王の讎を報ゆるためモスクワはクレムルの宮城に向つて進擊せよといふ命令が近衞兵に下つた。そしてソフィア內親王に反對の重なる人々の名を表にして司令官に下げられ、悉く彼等を誅戮すべしといふことであつた。そこで軍隊はモスクワの宮城指して犇々と押し寄せ、ナリシュキン一族の者を軍隊に引渡さるべしと强請した。そのとき後后ナタリアは左右にイワン、ペテロ二皇子の手を引いて、しづかに宮城のお車寄に出でさせられ、

軍隊に向つて皇子の健在なることを實證せられた。そこで軍隊は眼前活きたる證據に返す詞もなく、すごすごと退却しやうとしたが、ソフィア內親王これではならぬと見て、益々盛に燒酎を飮ませ、今日彼等を殺さざれば明日彼等却つて汝等を殺すべしと言つて煽り立てた。ここに於いて軍隊はまた〳〵宮城に詰めよせて、皇太后の兄弟たるイワンといふ大官の引渡しを再度强請に及んだ。しかし太后お聞き入れがない。そこで軍隊は宮中に亂中して、表に上つた人々のみか、見當り次第に殺戮を働いて流血二日に亘つた。この結果イワンとペテロ二親王は同時に擁立せられてロシア皇帝となり、ソフィア內親王とナタリア太后とは相ともに攝政の位に就くこととなり、一時に二帝二攝政を見る奇妙な現象を生じたしかしこれは形式の上のこと丈で事實ソフィア內親王は首尾よくロシア帝國の萬機を一身に收めることになつた。しかし、燃ゆるが如き野心はなかなかこれでは納まらず、更に二年の後には自ら全ロシア女帝の尊號を稱ふるに至つたのである。

ストレルツイ隊死刑の圖（當時の圖畫）

上圖は大將ルフォールの住みし邸宅なり。

三　大帝韜晦の事

當時ペテロ大帝は何樣御幼少のこともあり、萬事母后の御考に任せられ、暫く敵黨の銳鋒を避け、母后とも〳〵モスクワの都に近き、プレオブラジェンスクといふ小村に籠居せらるゝこととなつた。父帝並に兄帝の御代に於いて多數の外國人は宮廷に召聘せられてゐたが、ペテロはこれら外國軍人と深く交を結ばれて、熱心に兵學を研鑽せられた。當時大帝に親侍したものにはドイツの砲兵將校チムメルマン、スウヰスの參謀將校ルフォール、スコットランド將校ゴルドン等であつて、チムメルマンは數學と築城術を、ルフォールは參謀學を御敎授申上げた。また數多き御學友を二小隊に分ちて、これにドイツ風の軍服を著せしめ、御居住の村及び隣村に分ちて屯營させ、自身これを指揮して平生軍隊風の生活をせられた。それこれする中にラプチン家といふロシアの舊門閥の家より皇后エウドキシアを納れられた。これよりして舊門閥の者どもは何れもこの君のお味方を仕る覺悟を極めたのであつた。

四　大帝親政の事

さてまたソフィア內親王に於いては、全くのロシア女帝に成りすまし、ワシリイ・ガリツィン公爵といふ有力の人物を重用して、萬機を切り廻してゐたが、

その中一六八七年より一六八九年に亘つてクリム半島のトルコ人征伐の師を興された。この遠征軍は一向效績も擧らずして歸つたが、ソフィアは構はず、從軍したストレルツィ隊の將校下士卒に對し悉く凱旋の將士を嗃ふごとき厚賞を行つた。その頃大帝にはすでに十八歳にならせられ、もはや攝政などの必要はないと考へてをらるゝところへ、今度のことがあつたので姉君に對し嚴しくその濫賞を詰られた。しかるに姉君一向きき入れるやうすもないので、大帝はそのまゝプレオブラシェンスクの村へ歸られた。

茲に至つてソフィアはこの際更に進んで正當の女帝の位に即くか、退いて尼寺に押籠めらるゝのを待つか二つに一つの道があるのみとなつた。しかし勿論この女のとる道は極つてゐる。ソフィア内親王は遂にガリツィン公爵の諫をもきかずシャクロビトイといふ將軍に命じて大擧軍を率ゐてプレオブラシェンスク村に向ひ、ペテロ母子を弑害すべしいふことになつた。即ち將軍は六百の近衞兵をクレムル宮城内に集めて内親王の命を傳へて、曰く、「ツアール・ペテロはドイツの風俗を輸入し、神聖なる宗旨に背き、忠實なる國家の子弟を賊ふものなり。依つてその黨派一同と共に速に誅滅すべきものなり。」と言ふことであつた。然るにその時進擊の命をうけた六百名の隊中に在つた二名の者、密にプレオブラシェンスク村に走せて、大帝に危險の迫れることを告げた。そこで大帝は腹心の者をモスクワに遣はされて事情を偵察せしめられたが、この者共は途中で進擊隊の來るに逢ひ、匆皇踵を返して大帝に報じたので、大帝は直樣母后及び左右の者を從へてややかけ離れたある寺院に身を隱された。進擊隊の大將シャクロビトイ、來は來たがもはや大帝の姿は見えぬ、手を空うして引返した。

愈事件は終局に近づいた。大帝は爰に於いてソフィア内親王及びシャクロビトイ將軍等を國事犯を以て論ぜられ、速やかに手配を定めて、附近に居住する貴族外國出身の軍人、御親ら養成せられた御學友の二小隊等をはじめ、兼ねて御信任のあつた部隊を召集して一週間の中にやや纏つた兵數を集められた。而してスコットランド出身の將軍ゴルドンを以て總指揮官に擧げられ、兵威大に揚つた。事爰に至りてはソフィアはもはや、自ら局面に立つことを避け、イワン帝の名を以てモスクワの宮廷にストレルツィ隊を召集した。しかしシャクロビトイに從つてプレオブラシェンスク村に進擊した者の外は一人として召に應ずる者はなかつた。ソフィア今は形勢日に非なるを見てせめては尼寺に幽囚の憂目だけも免がれんものと思ひ、何にも事に與らぬ婦人三名に僧官を添えて大帝の許に遣はした。しかし使の婦人等は親しく大帝より事情を承はるに及び、何れもソフィアの權謀に呆れてそのまゝ止まりて歸らなかつた。そこでこの度はソフィア自身大帝居住の寺に出向はるることになつたが、途中勅使が立つて速やかにモスクワへ引返すべしといふ命であつた。かくて大帝は直その跡より三百の兵をモスクワに遣はし、シャクロビトイはじめ一味の首謀者を引渡さしめ、笞を以て嚴しく拷問して謀叛の一伍一什を白狀させ、遂に一同を死刑に處した。しかしソフィア内親王に對しては案外寬大で、モスクワ附近の寺に籠めて番兵をして監視せしむるにすぎなかつたが、とにかくこれでお家騷動の片は一まづ付いた形になつた。

五　大帝旅行の事

さてペテロ大帝は姉君を斥けて愈萬機御親裁のことになつたが、なほ兄イワン帝と帝位を分かたれ、一六九六年イワン崩御まで共同の皇帝として變らなかつたか、しかし實權はペテロに在つたことはいふまでもないことである。

ペテロ親政の始めに當り、最先に御注意になつたことは陸軍の大刷新である。次に海軍の創設である、運河の開鑿である、それからアゾフ海方面のトルコ人征伐である。とにかく當時大帝の御考ではロシアはヨーロッパ大陸内の大國であるには拘はらず、風俗習慣はロシア風である。到底他のヨーロッパ諸國と伍する資格はない。この資格を得るには第一に海に出る工夫を運らさねばならぬ。當時ロシアはまだロシア帝國といはぬ、モスクワ國と云つて、領土も狹く、國中の海に臨んだところはただ北氷洋の方面だけであつた。北氷洋といへば一年中殆んど氷の海で、海岸は一面の苔原(ツンドラ)である。舟のこゝに出入し得るのは一年中僅に七八の兩月、五月末にそろ〳〵氷が解けはじめて、九月に入れば海岸よりして漸次に氷りはじめる。しかしこの氷海にもただ一のアルハンゲルスクの港があり、イギリスの航海者がこの方面に印度へ廻る新航路を發見してから、イギリス、オランダ等外國商船の帆影をこの港にだけは認めることができた。大帝は屢この港へ行幸せられ、親しく商船を訪ふて帆の操縦方から梶の扱ひ方などを研究せられたのであつた。

大帝はまた國内の川筋にいろ〳〵の船を造りて浮べられ、これに艦隊といふ名を付けて、ルフォールを艦隊司令官に任ぜられた。しかし素よりいふに足らぬもので、こんなことで滿足のできるものでない、愈西ヨーロッパの文明の事情を聞けば聞くほど、御自分の知識が淺薄でとても要領を得ることが六づかしい、これは是非ともイギリス、オランダ等の西ヨーロッパ諸國に自身遊學して實地に研究を積まねばならぬといふ考を決められたのは一六九六年末のことであつた。

しかし乍ら當時周圍の境遇はなかなか大帝の外遊をゆるさなかつた。といふのは何分國内に保守派の勢強く、大帝の革新に贊成するものは極々少數の外國人位のものであつて、皇后のエウドキシアはじめ、大の國粹主義者で傳來の風俗習慣を破壞して西ヨーロッパの新空氣を入れることを非常に厭はれた。のみならず一方には例のソフィア内親王といふ厄介なものはあり、暫らく蟄伏してゐるが、心中不平滿々たる貴族等は折もあらばこの人を擁して再び天下を回復せんと窺つてゐる。ところへ大帝外遊の計畫ありといふことを聞きこむと、さらでだに近頃は目に餘ることの多いところへ外國の旅行でもして歸つたなら、どんな大改革を始めて、長い歷史のあるこの國を滅茶滅茶に破壞してしまうか知れぬ、早く今の中

に大帝を亡きものにして、皇太子アレクセイを位に即け、ソフィア内親王をして再び攝政たらしめんといふ大逆謀が計畫された。即ちその計畫に從へば一六九七年二月二日の晩を以て、モスクワの町に火を放たう、さすれば大帝はいつも火事の折には自身出馬して消防隊を指揮せらるゝ例であるから、その夜も必らず出馬せらるべく、火事の混雜にまぎれてこれを弑害し奉り、親近の外國人等共も同時にのこらず誅滅してさてのちソフィア内親王を尼寺より救ひ出さうといふのであつた。それで當夜は密謀者一同樞密顧問官ソコフニンの家に集まり、時刻の至るを待つこととした。然るに一方大帝は恰もその晩ルフォール海軍大將の邸に宴會があつて、それに親臨せられた。さて賓客一同食卓に就かうといふ際に、給仕の者が大帝に耳語して、誰でございますか、至急秘密に拜謁を願ひ出たものがあるといふ。大帝そこを立つて別室に赴かれると、二人のストレルツィ隊の者、いふまでもなく裏切で、今夜ソコフニンの邸に行はれてゐる密謀の一伍一什を言上したのである。爰に於いて大帝は、近衛の大尉トルベツコイを急に召され、今後十一時を期し、その率ゆる一中隊の兵を以てソコフニンの邸を圍むべしといふ命令書を下された。ところでそれまではよかつたが、大帝このとき逆鱗のあまり命令書を忘れてしまつた。一體ペテロといふ人は生來非常な癇癖の強い御方であつた上に癲癇の病があつた（これは姉のソフィアが大帝の幼時に毒を進めたためだといふ説もあるが當てにはならぬ）。とにかく短氣急性怒ると前後を忘却する、この癖は大帝自身も氣がついて、これがためには一生苦しまれたのである。この時も例の癇癖で、命令書をかいた十一時といふ時刻を忘れてしまはれ、早くも十一時すぎに事に託して宴席を外し、恰かも冬の寒い盛りのこと、僅か一名の從者を從た儘橇に乘つてソコフニンの邸に向はれた。ところが一向近衛隊の者の來てゐる樣子がない、不審と思はれたが、或はもう既に來て逆徒共の處分をしてしまつたのではないかとも考へられ、そのまゝ橇を乘りすてゝ、邸内に入り込まれた。入つて見るとなるほど大勢集まつてゐる、しかし近衛隊のものは一人も居らぬ。はつと思はれたが、そこは豪傑のことである、忽ち覺悟を定められ、何氣ない樣子で一同に向ひ今夜偶然こゝを通りかゝると、邸内に燈火が賑かに點いて、大勢の面白さうな話しごゑがするので寄つて見たと言はれた。すると相手の者共も素知らぬ顏で、大帝の親臨を大層喜ぶやうにもてなし、盛んに酒をすゝめて歡待した。しかし大帝彼等の樣子に眼を着けると、何やら互に私語き合つてゐる、そ

ペテロ大帝と皇太子アレクセイ

——グエ筆・聖彼保堡アレクサンドル帝美術館藏——

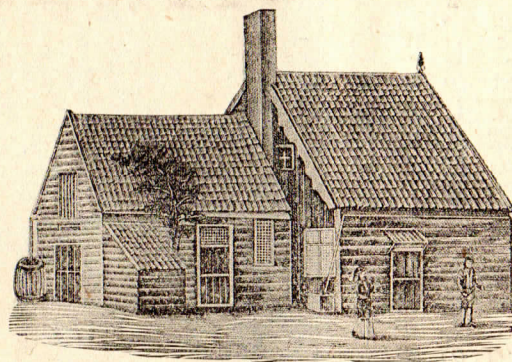
れこれする中、客中の一人が主人のソコフニンに向つて、「今が時刻だ！」と言ふ一聲に次いでソコフニンが「まだ、まだ」といつたこゑが手にとるやうに聞こえた。すると大帝は忽ちつと立ち上つて滿座の者に向ひ百雷の一時に落つるがごとき大音に、「その方共に時刻でないならば、自分に於いて時刻であるぞ！」と仰せられたと見る中に、いきなり鐵拳を固めてソコフニンの面をしたたかに毆られた。ソコフニン思はずそこに倒れる。と同時に大帝は再び外に向つて大音に、「近衛兵の者ども、犬どもを縛れ！」といはれた。これは實に危機一髮の冒險で大帝は勿論外に近衛兵がゐるかゐないかご存じはない、出たらめにいつたのである、が、ちやうど偶然その時が夜の十一時、トルベツコイ大尉の率ゆる一中隊の近衛兵はこの聲をきくとともに室内に亂入した。一同蒼くなつて膝いて宥免を願つた。大帝は大尉の顏を見るやいきなりその横面を毆られて、今ごろまで何して居ると怒鳴られた。大尉は愼んで命令書を差出した。大帝さてはと肯いて厚く大尉に御賞美の言葉を賜はつたといふことである。

さて逆徒一同は皆縛に就いて、こゝにまた例の嚴しい拷問がはじまつた。このとき大帝は憤激のあまり例の癲癇を起こして病床に就かれたが、病を推して自身糺彈に當られた。左

右よりはこの際何卒寛大の御處分を仰ぎたく、さすれば彼等も御恩に感じて、專心聖體の御回復を祈り申すべしと、すゝめたが、大帝頭を振つて、彼等如き不埒至極の奴輩の祈を神容れさせ給ふべきやと答へられて、一同嚴罰を申し渡された。

かくて逆徒の審判濟みて後四日、一六九七年三月九日、大帝は西歐遊學の途に上られた。隨從の一行の人數は五六十人ルフォールをロシア皇帝の使節と稱して、大帝自身は一個のペテロ ミハイロフとして從者の仲間に加はつて出發した。

六 大帝歸朝の事

大帝の一行はドイツを通つてまづオランダへ赴かれ、今は大阪のやうな商業都市といふだけであるが、その頃は首都でもあつて殷賑を極めたアムステルダムの町に着いた。聞きしに優る賑はしさ、運河は縱橫に通じ、水門、堤防の設備備はり、いろ〳〵の形をした風車到るところに廻る。港には船舶浮び、工場の煙空を蔽ふ。一通り觀光する丈でも骨が折れる。大帝は朝早くから夜晩くまで市中を巡覽した。さて一通り觀光がすんで後大帝はアムステルダムの近傍のザーンダムといふ造船所の在る地方に赴かれ、素性を包んで或る名もなきロシアの若い職人として、ある造船技師の家に弟子入し實地に船大工の技を學んだ。當時大帝の勵精は非常なものであつた。朝は誰よりも早く出勤し、夜は最後まで工場に居殘つた。そして當時大帝が日夕他の職人等と共に起臥した粗末な長屋は今日も大切に保存せられてある。

ペテロ大帝が職工と共に住める家

しかしさすがにいつまでも素性が分からぬわけはなく、いつか現はれてしまつたが、大帝はかまはず職人の生活を續けられ、他の職工等は「ペテロ親方」と呼んで尊敬した。かやうにして出來上つた船は和蘭政府より大帝へ獻納した。舟大工の修業がすむと大帝は更に數學、博物學などを學ばれ、また外科の講義を聞いて、自ら刀を執つて外科手術の手傳ひをもせられた。かくして技術學問共に上達せられたのち、イギリスに渡つて海軍工場その他を視察せられ、數多の學者、技術家、美術家醫師、陸海軍將校、各種の職工等を傭入れて二年の後愈本國へ歸朝せられることになつた。

歸途大帝はオーストリアをすぎてこゝよりも將校數名を雇はれ、更にイタリアのベネチアの商業視察に赴かるゝ筈であつたが、このとき本國に例の保守派の暴動が起こりかけた噂をきかれてこれは見合せとなり、ポーランドをすぎて直ちに本國へ歸られた。その時ポーランド王アウグスト二世はラワ村に大帝を出迎へて、盛な饗宴を張つた、そのときの座興に、一頭の大牛を引出して王自ら大刀を揮つてその牛の頭を切落し、大に膂力のほどを示した。大帝大にこれを感賞せられ、紀念のためその大刀を乞ひうけて、歸朝ののちはこれを以て罪人の首だめしを仕らんと言はれた。

さて歸國して見ると、逆徒等はすでに留守のゴルドン將軍の働きで一同獄につながれてゐた。例に依つて嚴しい栲問が行はれ、罪跡殘らず分明となつたので、大帝この度は彼等の根絕を期する考へから、一同を死刑または遠流に處した。例のポーランド王の大刀はこの時大分役に立つたことであつた。

七 カタリナ皇后の事

外國旅行より歸つたとき、大帝年二十八歳壯年時代の創業の第一期はほぼこれでつきる。これより大帝は國內一統の志を果して鋭意內は殖產興業を盛にして國力の充實を謀り、外は盛に軍備を修めて南にトルコを征してアゾフ海を開き、北にスウエーデンのカロロ十二世と戰つて一勝一敗はあつたが、遂に終局の勝利を收めて、バルト海岸にまで領土を擴めロシア帝國がヨーロッパ大陸の政局に直接交涉を持つ機會を作つた。これらは世人の熟知するとであるから、ここには省いて、ただペテロ大帝一生の大厄難、兼ねて有名なる賢后カタリナが功名の物語を述べてこの談を終ることにしたいと思ふ。

抑もペテロ大帝初めの皇后エウドキシアは前にも述べたとほり、保守的の婦人であつて、革新を好む大帝とは意氣の合はぬのみか、生來我儘の性質で、その上品行も正しからず、大帝留守中の逆謀事件にも多少の關係があつた。旁大帝は我慢がしきれず離緣して尼寺に入れてしまつた。そこで改めて第二の皇后カタリナを納れたわけであるが。それまでの行立が面白い。このカタリナといふ婦人はもと、バルト海に臨むリウオニアの百姓の娘であつた。リウオニアといふ國には上下二種の階級の人民があつて、上流は主にドイツ人であるが、一般の人民は「レツト」と稱してフインの一種に屬するものであつた。カタリナはこのレツト族に屬する百姓の娘で夫はつまらぬスウエーデンの兵士であつたが、戰爭で行衞不明になり、妻はロシア軍の捕虜になつてメンシコフといふ將校の許に拘禁されてゐた。當時芳紀二十一で容貌も相應によかつたらしい。この女にふと大帝が目をつけた。そして何にが氣に入つたか、メンシコフにあの女を呉れいと言はれた。女の名はまだマルタといつた、素より無學で讀み書きもできぬ上、ロシア語は皆暮解らぬ。それでも大帝强ゐて求めて御傍に置いたところが、この女天性の賢婦人で、ことに機に應じて智畧縱橫、ロシア語などは間もなく覺え込んでしまつた。大帝益御氣に入つた。そればかりではない、大帝の例の癇癖は大帝自身にすら鎭めることができない厄介な病であつたが、この女は不思議にこれを和げる秘術を心得てゐた。それこれ、この女が露軍の捕虜になつたのは一七〇二年のことであるが、翌年にはもう大帝を手中に丸めて、つひに事實上に皇后にまでなつたのである。

さてこの皇后が、ペテロ大帝一生の大厄難に當つて、機才よく夫を窮境に救つた話がある。それは一七〇九年ポルタワの戰に大帝はスウエーデンのカロロ十二世を敗り、その勢で翌々年トルコ領に侵入したときのことであるが、この時はあまり深入をしすぎて糧食はなし水はなし、ロシアの全軍非常な困難に陷つた。そこで大帝も萬一の覺悟を極められて、本國の留守たりし元老院に宛てゝ使を出され、自分萬一捕虜となつた時はたとへ親書を下すとも之に遵ふな、又大故の時は、その方共の間に最も然るべしと思はるゝ人物を人選して跡を繼がせよといふ勅書を御自身に書かれた。勿論この時はアレクセイと申す二十一にもなる立派な太子もあつたのではあるが、そのことは何にも仰せられなかつたのは大帝の偉い所である。とにかくかういふやうなわけで、一同今は討死か、降參の外はないことになつたが、そのとき從軍してあられたカタリナは、トルコの大將に一番賄賂を使つて見やう、したら案外に活路が開けるかもしれぬといふやうな考を起こしカタリナ先達となつて、身のまはりの金銀珠玉殘らず投出した、之れに倣つて將軍等各所持の金銀を醵出してどうにか二十萬ルーブルの金が集つたので、これをトルコの將軍に贈つて和議を求めた。するとそこはトルコ人のことである、見す〳〵敵をここまで追ひつめて置き乍ら、陣中に在つたスウエーデンの使節の諫止をもきかばこそ、眼前二十萬ルーブルの金のためにくるりと氣が變つて、わづか、ロシア軍の占領したアゾフ海の地方を返すと、そこに築いたロシアの要塞を毀つこと位の條件で和議を修め、しかもロシア軍は十分の糧食まで贈られ、大手を振つて歸國したのであつた。是に於て大帝は改めてカタリナを皇后に册立せられたのである。（をはり）

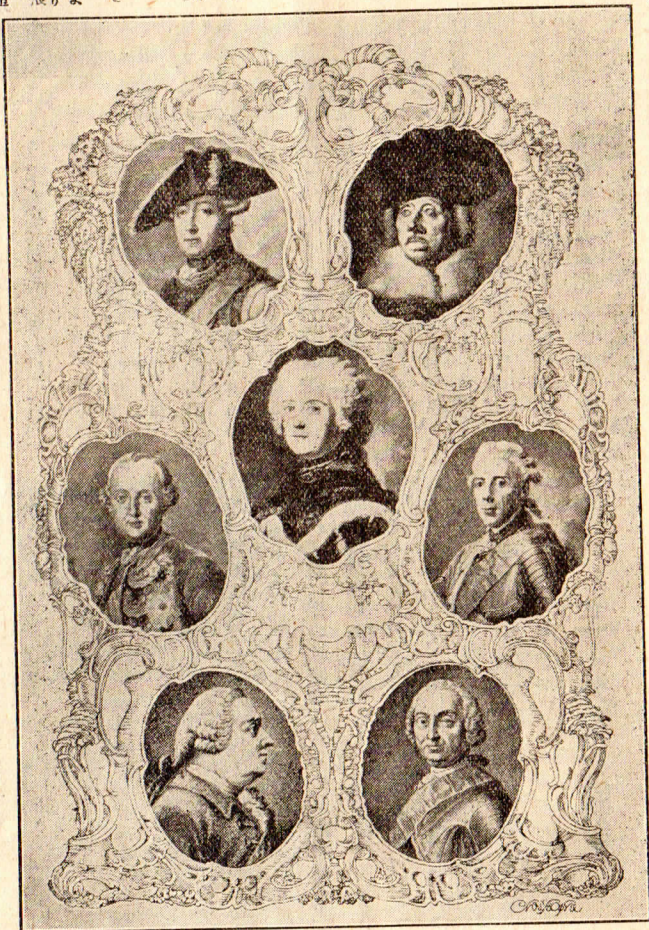
フレデリキ大王

第三高等學校教授　中村善太郎

一　序說

中世から近世の初にかけて、ヨーロッパは宗教中心の時代で、この間に起つた事件で宗教的色彩を帶びてゐないものはない。然るに文藝の復興、宗教改革以後は、宗教熱は次第に醒めはて〻、國家とか國民とかいふ事が、すべての事件の基礎となつて現れて居る。これを政治中心の時代といつても差支がない。而してか〻る新風潮の勃興につれ、國家の發展とか中央集權とかいふ名のもとに發達したのは、君主權であつた。イギリス、フランス、イスパニアの如きは好き例で、所謂專制政治の時代が現はれ出ることゝなつた。此專制政治には二種あつて、第一は君主が自己の權力の樹立に重きを置き國家國民といふ考を第二に置く場合で、イギリスのゼームス一世、カロロ一世、フランスのルイス十四世の如きは王權神授論といふ都合のよい政治論の下に隱れて、盛に君主權の絕對を稱へ、これを實現しやうとつとめた。第二は君主は國民の爲めに存すといふ主義に基き、國民の利害を第一に置き、國王私人の利害などは顧みない、而し主權は君主にあるので、君主は絕對の權力を握つて國政を執り、國民のこれに携はることを斥けたものである。これは十七八紀のイギリス、フランスの政治論を加味し、啓蒙思想の影響を受けた專制主義で、プロシアのフレデリキ二世、ロシアのカタリナ二世の如きがその實行者である。要するにフレデリキ二世即ち大王は、當時の專制君主の中では、最も頭の進んだ人といはねばならぬ。またフレデリキ以前のプロシアはドイツ國内の一小國で、ヨーロッパ列強よりは齡せられなかつたが、大王の力によつてその地位俄に高まり、ドイツではオーストリと覇を爭ひ、ヨーロッパでは列强の仲間入りが出來たのである。次に世間で大王とかいはれる人の多くは、たゞ内外の政治軍事に頭を沒して、學問文藝などには殆ど趣味のない人が多い。たとへこれを保護奬勵しても國家の經營からわりだしたもので、中には自家の偉大尊嚴を示すために利用しやうといふ極めて實際的な目的さへ含まれて居るのもある。然るにフレデリキは文藝の趣味が豐で、自分の趣味から學問文藝を保護し、偉大な人格の中に複雜な性格を具へた點は、他の大王とは違つたところだと思はれる。

二　大王父子

大王の事蹟を述べる前に、父フレデリキ・ウィルレム一世のごとを少しく述べ置く必要がある。元來プロシアはドイツの小國で、同じドイツ内のバロリアやサクソニアなどよりは表面は勢力のない國であつたが、歴代の君主の努力で、次第に領土を擴め、國運の發展を致し、特にフレデリキ・ウルレム一世は非常な節儉で、國庫を充實し、軍備を擴張し、他日フレデリキ大王の雄飛のもとを築いて置いた。ランケが、マケドニアのフィリポス、アレクサンドル父子を、フレデリキ父子に比較してゐるのは道理とうなづかれるところがある。父王は言語動作の粗野な人で、フランス風の華美なことを嫌ひ、常に太い杖を携へて市中を歩き、怠惰者をたゝきまわつたのである。また意志の頑固な、實用一點張の人で、敎育の如きも、普通敎育は奬勵したが、高等の敎育は無用のものとして斥け、文藝學術の如きは全く顧みなかつた。また非常な節儉家で、節儉といふよりは吝嗇に近いので、他國の物笑の種となつてゐた。たゞ軍隊のみは例外で、軍隊の改善、軍備擴張を實行し、常備軍を八萬三千とし、稍浪費の傾があつた。中にも大男の兵士を集めることに病的な程興味を持ち非常な高給を拂うて傭ひ入れ、ポツダム軍隊には七尺以上の者が尠くなかつた。而してこの大男募集に就て奇談が尠くない。或は觀世物の大男を軍隊に傭ひ入れたり、外國公使と知らずに軍隊に入れやうとしたり、或は大きな大工を箱に入れて盜み出したり、そういふ例が尠くない。また當時ドイツで喫烟會といふものが流行し、煙草をふかしながら雜談に耽けるのであつた。ベルリン朝廷ではこれを政治機關に利用し、政治家外交家などが集つて政治上の意見を交換し、または諸國を歷遊した文學者などが列席して雜誌をよみ經歷談などを試みた。かういふ風でフレデリキ・ウィルレム一世は一方から論ずれば偏狹な融通の利ない人であつたが、實は勤儉尙武主義の實著な人であつた。その晩年にベルリン駐在のフランス公使バロリの批評に、その一つ一つの行動をとりたてて見ると、眞に奇妙な沒常識な人のやうであるが全體として見ると大いに賞讃すべき人であるといつたのは、正鵠を穿つた批評であらう。フレデリキ大王は一七一二年斯る父王の子として生れた。大王は煙草狩獵兵士の外に何等の趣味を持たない父王とは全々性格を異にした。父王は皇太子を教育するにフランス風とドイツ風の教育をあはせ授けた。此時はルイス十四世全盛の後を受け、諸國はすべてのことにフランス風をまね、上流社會の言語の如きは全々フランス語となり、モリエール以上の文學者を有するダンテ、シエクスピアの國もフランスに壓倒せられ、ドイツのやうな國民文學のない所は全然フランス風となつた。いかに頑固な父王も時代の風潮に敵しかね、フランス人を家庭敎師とし子供の

フレデリキ大王肖像
（中央の人物が大王・その他は麾下の將軍なり）

フレデリキ・ウィルレルム一世

教養を托し、フランス語を授けしめた。初め主として教養の任に當つたのはオルコール夫人といつて、ノルマンヂー生れの溫厚な婦人であつた。太子がフランス文學に趣味を持ち、溫雅な性格を造り得たのは、此婦人の賜物であらう。七歳後は婦人の手をはなれ、ヂウアン・ド・ジャンドンといふフランス人の教育を受け、フランス語が書けるやうになつた。また一方では、レオポルト・フォン・デッサウ、グラフ・フィンケンスタインなぞの軍人肌の人が、ドイツ風の教育を施し、軍事上の知識を授け、大王十四歳の時にはポッダムの軍隊の士官となつた。元來父王の太子教養の方針は新教徒として敬虔の念を養ふ事、ラテン語のやうな死語は授けず、專らフランス語ドイツ語を教へ、また經濟數學の如き有用の學問を授くる事、歷史は最近を重んじ、特に國史に重きを置く事、戰術を研究せしむる事であつた。しかし太子は何よりもフランス文學に趣味を有し、ラテン語の如きも父の眼をぬすんで學び、また音樂がすきで、笛は堪能であつた。かやうに太子は文學者藝術家肌の人であつたから、實用主義の父王との間にたえず衝突があつた。太子の姉の記錄に見ゆるとほりに、太子はその父のために文學書を取上げられたり、杖の折れるまでに折檻せられたことが度々あつた。遂に太子は結婚問題や父王の虐待にたえかねて、イギリスへ逃亡しやうとしたが發覺し、父王は太子が軍職にあるかどでこれを軍法會議に付し死刑を求めたが、オーストリアの公使ゼッケンドルフの願で死を免れ、十五ケ月間キュストリンに幽囚の身となつた。太子は此幽囚の間よく謹愼し、父王の命によつて政治上の實地の經驗を積み、將來國王としての素養を造るにつとめた。三一年父王が太子を訪れたときには、太子の性格は一變し、父王も大に意を安んじ兩者の感情もうちとけるやうになつたといふことである。次で三三年には父王はドイツ皇帝の勸でブラウンスウィクのエリザベト・クリスチネを皇太子妃と定めた。この結婚が太子の意志でなかつたとは其頃の太子の手紙によつて明である。太子は同年ルッピンの聯隊長となり、ラインスベルグ城を再興し、三六年八月より此に移り、凡そ四年の間は平和な生涯を送つた。然し太子はかゝる平凡な生活を以て滿足の出來る人でない。彼はライスベルグ城へ文藝の士を招き、三六年八月には當時ヨーロッパの文壇に盛名をはせたボルテールに書を送つて會見を求めた。彼はこの手紙でその崇拜せる大文豪と會見の情切なることを述べ、『アンリアード』、『シェザール』を推賛し、未だ公にせざる作物を求めた。ボルテールはこれに對して巧妙な文辭をつられて此平民的哲學的君主をたゝへ、止むを得ぬ事情のためにフランスの地をはなるゝを得ざることを答へた。これよりフレデリキとボルテールとの間には文通絕えず、親交を結んだとは後に述べることとする。またフレデリキはマキアベルリの君主論を讀み、その法律道德を無視した極端な議論に驚かされ、『ランチマキアベル』(マキアベルリ駁論)を公にした。この論文はボルテールの世話で、四〇年の秋、太子が王位に即いた時公にせられ、理想の君主は生れながら國家の僕で、臣民の幸福を政治の第一目的とし、隣國に對しても信誼を守らねばならぬことを述べたものであつた。これはフエネロンの『テレマック』の影響を受けたものと思はれる。かやうに太子は暫くは謹愼の意を表して居たが、また〳〵文藝に耽けるやうになつたから父子の關係も再び面白くなくなつたが、一七四〇五月三十一日父王が病死したので太子はプロシアの王位に即くこととなつた。

三　外交と戰爭

大王の即位と同時に、ベルリンはスパルタからアテネと一變するだらうといふのが一般の評であつた。然し新國王はかゝる愚人ではなかつた。國家の元主としてのフレデリキは以前とは全く異れる人間となつて現はれた。內には穩やかな專制政治を行ひ、外に向つてはマキアベルリ以上の辣腕を振ひ、諸國の虛に乘じて領土の擴張を計つた。青年時代に生命とした文藝は、その多忙な政治的生涯を通じての慰藉として殘つた。王は即位の初穀物庫を開いて窮民を救ひ、拷問を廢し、宗教の自由を令し、文武官に對する訓諭にも人民の利益を第一に置くべきことを命じた。また即位式を虛禮としてやめ、主なる地方を巡視し、此巡視中に有名な科學者のモーペルチウイとウエーゼルで會見し、ベルリンへ連れ歸り、また九月十一日にはモイランドでボルテールとも會見した。かやうに王は內政の改革に忙殺せられたが、これと同時に外に對しても機敏な行動をとつて列强を驚かした。シレジア問題がそれである。

元來プロシアがドイツ內部で相續權を主張し得る地方が二つある。一はシレジアで、他はユーリッヒ、ベルグである。シレジアは昔ポーランド領であつたが、十四世紀に無政府の有樣となり、その諸君主はボヘミアの臣下となつた。然るに一五三七年シレジアの中で、最も有力なる諸侯のリーグニッツ公フレデリキ二世は、ブランデンブルグ選擧侯ヨアヒム二世と約束を結び、若しリーグニッツ公の血統が絕ゆる時は、リーグニッツ・ブリーグ・ウォーラウはブランデンブルグ選擧侯これを相續し、ブランデンブルグ選擧侯の方が絕ゆる時は、ブランデンブルグがボヘミアの封土として持つて居るクロッセンその他の地方はリーグニッツ公が相續することゝ定め、なほ兩家の間に姻戚の關係を結ぶことゝなつた。然しボヘミア王フェルヂナンドは此約束をばボヘミアの主權を犯せるものと解釋し、一五四六年五月リーグニッツ公をして此約束を取消さしめ、ブランデンブルグ選擧侯にも同樣取消を命じたが、ヨアヒムはこれを聽きいれなかつた。一六七五年リーグニッツ公が死し、男子がない。そこでブランデンブルグ選擧侯フレデリキ・ウィルレムは一五三七年の約束に基いてシレジアの三國の相續權を主張したが、皇帝レオポールドはこれをボヘミアの領土とし、ハプスブルグ家の所領に移した。之がブランデンブルグ、プロシアの合併よりなるプロシア王國のシレジアを要求する理由である。次にユーリッヒ、ベルグ、クレーフェの地方は、十七世紀の初に王家が絕たので、一六二四年の條約

フレデリキ大王幼時妹ウヰルヘルミナと嬉戯す
——アントワン・ペーネ筆——

でユーリッヒ、ベルグはファルツ・ノイブルグ家相續し、クレーフェはブランデンブルグが相續した。然るに十八世紀に至り、ファルツ・ノイブルグ家に男子の相續者なく、ズルツバッハ家がファルツのみならずユーリッヒ、ベルグをも相續する事と定まつた。プロシアのフレデリキ・ウィルレム一世は頑强にユーリッヒ、ベルグの相續權を主張し、オーストリア、フランスもこれに同意をした。然るに最近に至りオーストリア、フランス、ズルツバッハ家の間に密約が結ばれたといふ風說が傳はつたので、フレデリキ大王は即位の報告をかねて使をウィーン、パリー、ロンドンに遣つてその意向を探らしめた。此時列國の形勢はイギリス、フランスの一擧一動によつて流轉し行く有樣であつたが、イギリスのワルポール、フランスのフリウリーの二人は孰れも消極主義平和主義の人であつたから、外交界は極めて平穩無事であつた。この平靜な外交界はフレデリキのシレジア占領によつて攪亂された。

これよりさき一七一三年オーストリアのカロロ六世はプラグマチックサンクションといふ家憲即ち相續令を造り、皇女マリア・テレサの領土相續權を確定し、諸國の承認を求め、カロロの兄ヨセフ一世の女を娶れるサクソニアのアウグスト三世、バワリアのカロロ・アルベルトの二人も領土相續の要求を捨てた。一七四〇年十月二十日カロロ六世死し同月二十六日その報知がラインスベルグのフレデリキの許に達した。詩文音樂に耽つて居た王は俄にベルリンなる將軍シュウェリンと外務のポデウィルスを招いて秘密に議を凝した。王は此際領土相續爭の起ることを豫期し、此機會に乘じて、祖先の志であるシレジア占領を企てたのである。三人相談の結果、先づ事を擧げ、然る後徐ろにオーストリアと談判を開かうといふ事にきまつた。王は依然音樂や舞踏に耽り、何氣なき樣子を裝うて居たが、列强は次第にプロシア軍隊の活動に目をつけるやうになつた。プロシア軍は一方はシレジア他方はクレーフェの方面に集中せらるゝ模樣で、王の目的はその孰れにあるか曖昧に見えたが、間もなくシレジア方面にある事が明となつた。そこでオーストリア公使は本國に注意し、フランスでも、フリウリーは王の意向をさぐるために、王の親友のボルテールを利用し、王の許に使せしめた。ボルテールは文學者などによくある政治的虛榮心にかられ、政府の內命を受けて、十一月二十日ラインスベルグにフレデリキを訪問した。表面は例の『アンチマキアベル』出版の用であつたが、明敏な王ははやくもボルテールの眞意を察し、一言も軍事外交にわたつた事をもらさなかつたから、ボルテールは全く馬鹿をみて歸つたのである。十一月三十日王はラインスベルグを去つてベルリンに移り、十二月十二日最後の舞踏會を開き、翌日は軍隊を指揮するためにベルリンを發し、十六日にはプロシア軍はシレジアに侵入した。他方では同十八日にプロシア王の使節ゴッタはウィーン朝廷にプロシア、オーストリアの同盟を提議し、プロシア王は兵力金錢を以て女王を助け女王の夫をドイツ皇帝に選立する事に盡力し、その代りに女王がシレジアをプロシアへ割讓する事を要求した。女王は直にこの提議を

はねつけたから、ゴッタは更に四十年一月シレジアの一部割讓を求めた。女王は領土相續の紛議の起つたのは、プロシアの動員によるものである、また、皇帝選擧は公平を要する、自分は治世の初に領土割讓のやうな不吉な事を好まない、プロシアが平和を希望するなら先づ撤兵せよと答へた。而して此一件に關係の書類を世に發表した。フレキデリキは大いに怒り、初はオーストリアの爲めにシレジアを防禦するというて居たが、今は學者をしてブランデンブルグのシレジアに對して有する權利を考證せしめ、シレジア占領の正當なる事を稱へ、後世の歷史家もシレジア占領を辯護して居る。然し此シレジア占領が果して正當の理由があるか、また國際の道德から見て是認すべきかといふやうなやかましい問題になると、フレデリキの行動は到底世の批難を免れないのである。殊に列國が平和を希望して居る時であるから、マコーレーのやうな論者が、フレデリキを單にオーストリアに對するばかりでなく、ヨーロッパ全體の平和を攪亂した罪人とまで極論しても已むを得ない次第である。此時列國の外交關係を見るに、フランスでは當局者のフリウリーが平和論者であつたが、何分オーストリアとは二百年來の仇敵であり、またベレールといふ辣腕家がフリウリーの下に活動したから、遂に對オーストリア同盟を組織するに至つた。初めフリウリーの考ではマリア・テレサのボヘミア、ホンガリア女王たることを認め、皇帝の位はその夫に與へずバワリア選擧侯に與へやうといふのであつた。而してベレールはその使命を奉じて各選擧侯を遊說してまわつた。またフランスは初からプロシアに對して秋波を送つたが、フレデリキは表面はフランスと結ぶやうに見せて、實はイギリスとの提携を希望した。かゝる間にフレデリキは四〇年十二月の末ブレスラウを攻め、翌四一年一月三日市民と妥協し、中立の義務を守らせることとした。同二十九日王はベルリンに歸り、イギリス公使と會見してジョルジ二世に同盟の意を傳へしめた。然るに二月十九年フレデリキがシレジアへ來て見ると、オーストリア、オランダ、イギリス、ロシアの諸國がプロシア分割の密約を結んだといふ風說が傳はつたから、フレデリキはフランスとの同盟の必要を認めることとなつた。またオーストリアは平和の解決を斷念し、兵をシレジアに向はしめたが、四月十日にオーストリア、プロシア兩軍はモルウィッツに會戰し、プロシア軍は苦戰の後勝利を得た。此戰によりプロシア軍の實力が始めて試驗せられたのである。この時ベレールはモルウィッツでフレデリキと會見し、フランス、プロシアの同盟を勸めたが、王は未だイギリスに未練があつて確答しない。五月七日イギリスの新任公使ヒンドフォード到着し、プロシ

フレデリキ大王后エリザベト

ア、オーストリア和議の條件として、女王は下シレジアをプロシアに讓り、その代りにプロシア王は兵力金錢を以て女王を補助する事と定め、先づフレデリキの承諾を經、次でこれをウィーン朝廷に提出した。然るにイギリス、オランダ兩政府のフレデリキのシレジア占領に對する抗議が間もなく、ヒンドフオードの許に達し、ヒンドフオードの平和條件もウィーンから拒絶の通知が來た。フレデリキは已むを得ずフランスと握手しなければならぬ事となり、五月十四日にプロシア、フランスの間に秘密條約が結ばれ、プロシアはズルツバハ家のユーリヒ、ベルグ相續、バワリア選擧侯を皇帝に選ぶ事を認め、フランスはプロシアのシレジア占領を認めた。またベレールはフレデリキ訪問後、サクソニアに至つたが要領を得ず、次でバワリアに赴き、カロロ●アルベルトと會見し、フランスはバワリアに兵力金錢の補助を約し、四萬の援兵を送る事とした。ベレールは急ぎパリーに歸り出師の準備を急がしめ、こゝにバワリ軍はフランス軍と連合してオーストリアに向ふ事となつた。九月フランス、バワリア連合軍はリンツの町をとつたから、ウィーンへの道は開かれることとなつた。またフランスの別軍はウェストファリアに侵入して、オランダハンノフエルに備へたが、イギリス王は本國ハンノフエルを心配し、ハンノフエル中立を稱へたから、フランスの第二軍は自由に他の方面に活動する事が出來た。またサクソニアもオーストリアが己の要求を容れないから九月對オーストリア同盟に加入した。このシレジアでは、オーストア、プロシア兩軍は相持して戰はず、オーストリア軍はナイセを固守したが、フレデリキは早くシレジアを手に入れやうとあせり、オーストリアプロシア同盟をウィーン朝廷に提議し、十月二日に兩國の間に秘密條約が成立し、オーストリア軍はナイセを明渡し、プロシアは下シレジアを割讓せらるゝ事となつた。フレデリキは一方バワリア、フランスと結びながら、他方ではその敵と秘密に握手したのである。かやうにフレデリキはオーストリア軍をシレジアからウィーンの防禦に轉せしめ、これと同時にフランス、バワリア軍に對してはウィーンへ進軍を勸めたのは、實に狡猾な手段であつた。從つて十月末にはシレジア方面の戰爭は全く止んだから、列强は早くもオーストリア、プロシアの間に秘密の約束が結ばれた事を悟つた。此時フランス、バワリア軍は十月初ボヘミアに入り、サクソニアの援兵を合せ、十一月廿七日にはプラーグを占領した。フレデリキは女王の窮地に陥れるを見、下シレジアのみでは滿足が出來ず、秘密條約のもれたるを口實として、オーストリア軍のウィーンに向へる隙に乘じモラビアに入り十二月オルミユツを占領した。然しこの時オーストリア軍も大いに活動し、四二年一月の末にはリンツを陥れ、バワリアに侵入せんとした。それより間もなく二月十二日にバワリアのカロロ●アルブレヒトはフランクフルトで皇帝に選立せられ、カロロ七世と稱した。フレデリキはバワリアの急を救ひ、同時にモラビアを己の手に入れんとし、サクソニアの援兵を合せ、モラビア方面に活動をはじめた。然しサクソニアは自國の防衞上、隣國の

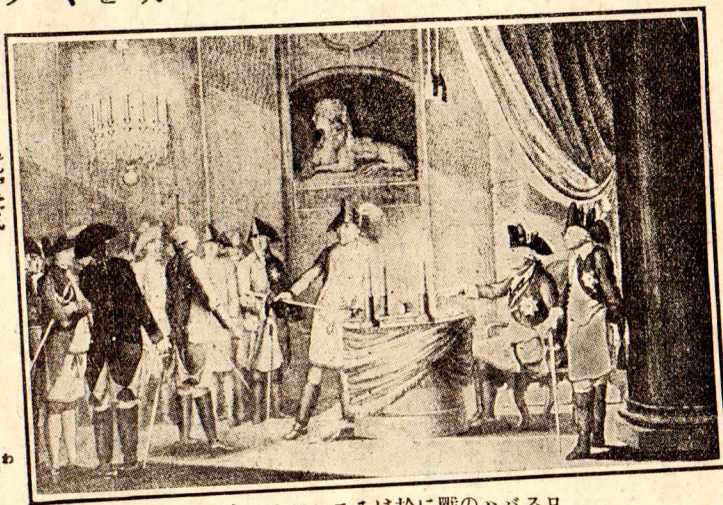
ボヘミアでオーストリ軍に對抗しやうといふ意見であつたから、甚だ曖昧の態度をとつた。その内にオーストリア軍は大擧してボヘミアのプラーグを圍むといふ報知が來たから、サクソニア軍は大いに動搖し、フレデリキも已むを得ずサクソニア軍をボヘミアに陣せるフランス軍に合併せしめた。フレデリキは單獨にモラビアを守ることが出來ず、プロシア軍は上シレジアとボヘミアとへ別れ退いた。かやうにフレデリキのモラビア占領の企は失敗に歸した。その上にオーストリア軍はバワリアの都ミユンヘンを占領し、同盟軍の勢振はず、殊にイギリスではワルポール内閣倒れ、對外硬派のカルテレト内閣に入り、積極的にオーストリアを助くるやうになつた。さればフレデリキは三月より五月にかけて、講和の條件をウィーン朝廷に提議したけれども、女王は容易にうけつけなかつたが、イギリスの仲裁により六月十三日にブレスラウに假條約が結ばれ、女王はシレジアの大部とグラッツをプロシアに讓り、プロシア軍はボヘミアを退く事と定まつた。然し分割すべき領土の範圍とシレジアの負債に就いて紛議が起つたが、プロシアの讓歩によつて圓くをさまり七月廿八日に本條約がベルリンで結ばれた。これを第一回のシレジア戰爭といひフレデリキはフランス、バワリア、サクソニアの同盟を利用して、自己の目的を達したのである。

マリア・テレサ女皇
——マルチン・ヴン・マイテンス筆——

フレデリキが對オーストリア同盟を脱したのは一つは、オーストリが全く蹂躙せられるのを望まないのであるが、さりとてシレジア恢復の野心を起すほど強大となる事を望まない。さればプロシアより捨てられたフランスバワリア軍が次第に窮境に陥るに反して、オーストリア軍がイギリス、ハンノフエルの援兵を得益々振ふのを見ては、到底默視する事が出來ない。この時フラン

スでは、フリゥリー死しルイス十五世自ら外交の局に當つたが、ボルテールを密使としてフレデリキの態度を窺はしめ、プロシアとの同盟を復活させやうと試みた。然しフレデリキは、成るべく、フランスとの同盟を避けたから、ボルテールは使命を全うする事が出來なかつたが、此間にイギリス、オーストリア、サクソニア、サルデニアなどがプロシア分割の密約を結んだといふ風說が傳はり、四四年の春には事實と認めらるゝに至つた。フレデリキも再びフランスと結ぶことゝなり兩國の同盟成立し、フランスは公然オーストリアに宣戰し、ドイツの內亂はハプスブルグ、ブルボン兩家の霸權の爭となつた。フランス軍はネーデルランド方面に、プロシア軍はボヘミア方面に活動したが、サクソニアはオーストリアに味方し、ロシアをもその仲間に引入れ、大いにフレデリキを苦めた。然るに四五年一月に皇帝カロロ七世死し、形勢一變する事となつた。フランスは皇帝の子の新バワリア選擧侯は幼少でありその臣下はマリア●テレサに內通する模樣が見えたから、改めてサクソニアのアウグスト三世を皇帝とし、サクソニアをオーストリアより分離せしめんことをフレデリキに相談した。フレデリキは、皇帝の死去によつて案外よき條件で平和を復するを得ることと考へ、フランスへは確答を與へず、イギリスに依賴してオーストリアと和を講ぜんとしたが拒絕せられた。九月十三日に女王の夫はフランツ一世として帝位に上り、オーストリアサクソニアの連合軍の勢は中々盛であつた。フレデリキは、ボヘミア方面に於てオーストリアサクソニア連合軍に當り、十一月にはラウジッツでオーストリア軍を破り、十二月には連合軍をケッセルスドルフに破つた。これより先フレデリキは密にサクソニアと講和を議し、十八日にはその都ドレスデンに入つた。女王はサクソニア講和のことを聞き遂に廿五日ドレスデンにて平和條約を結び、女王はシレジア、グラッツ恢復の要求を捨てフレデリキはフランツ一世の皇帝たる事を承認した。これを第二シレジア戰爭といふ。フランスはなほ戰爭を繼續したが四八年十月十八日にアーヘンで列强の間に平和條約が結ばれた。

　マリア●テレサはシレジア恢復の決心固く內には軍制を改革し、財政を整理し、外には已に四六年にロシアと防禦同盟を結び、次いでフランスと提携してプロシアに當り、プロシアもイギリスと結び、こゝに世界の大戰爭を惹起すに至つた。初めイギリスとプロシアとは親密でなかつたが、フランスとの同盟が依賴するに足らざる事を經驗したから、五五年頃より切りにイギリスと結ばうとした。またイギリスは常にオーストリアを保護したが、平和の協議などに就いて專橫の態度が見えたので、兩者の關係は昔日の如き密接なるものがなく、またハンノフエル防禦の爲には、プロシアと結ぶを便宜と考へ、五六年一月に防禦同盟が結ばはれた。またオーストリアとフランスとは二百年來の仇敵であつたが、此時オーストリアにカウニッといふ辣腕家が居て、その間を斡旋し、五六年五月にベルサイユで防禦同盟が結ばれた。これはイギリス、オーストリアの關係の變遷と、プロシア●イギリスの同盟の影

響としてあらはれた現象で、ヨーロッパ外交界の一大異變であつた。五六年フレデリキはロシア、オーストリアのプロシア攻撃の企を耳にし、間もなく動員の模樣が見えたから、七月ウィーン朝廷にその說明を求め、八月オーストリア側のサキソニーに侵入し、ドレスデンを占領し、十月にはロボシッツでオーストリア軍を破つた。オーストリアは翌五七年一月ロシアと、同五月にフランスと攻撃の同盟を結び、その他ドイツ諸國は多くオーストリアを助けたから、フレデリキは殆ど列强を敵として戰ふ事となつた。殊に同盟國のイギリスはアメリカ、インドでフランスと戰爭中で專らフレデリキを助ける事が出來ない。かゝる危機に臨み、フレデリキが自若としてその綿密な頭腦で大膽な計畫を着々遂行した事は、ナポレオンも嘆賞してゐる。フレデリキは五月六日プラーグの近傍でオーストリア軍を破つたが、六月十八日コーリンで大敗し、一端ラウジッツに退き間もなくチゥリングンに入り、十一月五日ロスバハでフランス、ドイツ連合軍に對して奇勝を博し、十二月五日にはロイテンでオーストリア軍を破つた。此時イギリスの首相ピットは四百萬ターレルの軍資をプロシアに送り、大いに輿論を喚起し、フレデリキを助けたが、プロシアの內狀は實に憐むべきもので、軍資缺乏し、兵士武器は最早戰にたえざる程となつた。その上に、ロシア軍も、大いに活動し、オーストリア軍と連合してフレデリキを苦め、五九年八月十二日には連合軍はフレデリキをクネルスドルフに破り、フレデリキは一時自殺の決心までするに至つた。翌六〇年八月プロシア軍はリーニグニッツでオーストリア軍を破つたが、プロシアは到底是等列强に對抗する事は出來ない。此形勢で進む時は當然女王の軍門に降伏しなければならぬ事となつた。然るに六〇年以後、列强の形勢を一變せしむる事件が起つた。イギリス、ロシアの政變である。同年イギリスでは主戰派のピット內閣倒れ、平和論者のビュート內閣を組織し、プロシアに送る軍費支給を停止した。フレデリキは進退窮まつたが、幸運は他の方面から運り來つた。六二年一月ロシアのエリザベタが死亡し、フレデリキ崇拜者のペテロ三世が帝位に即き、五月にプロシアと和を講じ、フレデリキは北方の患を斷つ事を得た。またイギリス、フランスの平和の協商も次第に進行し、十二月に假條約が結ばれ、その條件としてフランスはオーストリアの同盟から脫した。女王はその有力なるロシアフランスの

ロスバッハの戰に於けるフレデリキ大王

同盟を失ひ、今は單獨にフレデリキに對抗する事の難きを知り、六三年二月十五日にフベルツスブルグでプロシアと和議を結び、すべて戰前の狀態に復歸し、フレデリキはシレジアに對する權利を確認せられた。これを第三シレジア戰爭または七年戰爭といふ。

七年戰爭後は、フレデリキは專ら疲弊せる國力の恢復と新領土の經營につとめたが、その晚年に至りポーランド問題と、バワリア問題が起つた。この時ロシアのカタリナ二世はポーランドの內治に干涉し、これを己の勢力範圍に置き、遂にはこれに君臨する希望を有した。フレデリキは女帝の野心を看破し、一七七二年オーストリアを誘うて、女帝に迫り、ポーランド分割を提議し、その結果、プロシアは西プロシアの地を獲た。また一七七七年バワリアの選擧侯死し、ウイッテルスバハ家の正統絶え、その支流のズルッバハ家のカロロ●テオドロこれを相續したが、マリア●テレサの子ドイツ皇帝ヨセフ二世は、バワリア相續の權利を主張し、これを占領した。フレデリキは、オーストリアの擴大を恐れ、帝國議會をして反對の態度をとらしめ、遂にオーストリア、プロシアの間に戰がはじまつたが、マリア●テレサはその子に向ひ、怪物の相手になるなと諫め、ロシアの女帝もオーストリアの要求を根據なきものと斥けたから、七九年五月テッシェンの條約で、オーストリアはバワリアの一小部を獲るに止めた。その後ヨセフは更にオーストリア領ネーデルランドとバワリアの交換を企てたが、フレデリキは諸侯同盟を結んでその野心を挫いた。

要するにフレデリキの最も活動したのはシレジア戰爭時代でその危地に陷りながら、巧に關を切り拔けたのは、巧妙なる戰略と機敏なる外交の力であつた。彼の戰略が常に機變に應ずる種類のものであつたと同樣、その外交もワルポールやフリウリーのやうな、一つの主義のもとに貫かれる着實なものでなかつた。彼の外交には德義といふものが見えなかつた。唯自國の利害のみを標準として、その時々に變化し行つた。殊にシレジア戰爭の時に二度までもフランスを出し拔き單獨にオーストリアと和議を講じたのは機敏とはいへ、惡辣なやりかたと思はれるのである。然しこの戰略と外交とがプロシアをして一躍列强の伍班に入らしめたのである。

四　內政

大王の政治上の主義は初めに述べた通り進化せる專制主義で、その治世の間には種々の方面に改良が企てられ、プロシアの國家、社會は面目を一新するに至つた。先づ軍隊に就いて見ると、父王の時代には常備軍は凡そ八萬であつたが、大王は即位の初に十萬に增加し、一七五〇年には十三萬五千、五五年には十五萬二千に增加し、七年戰爭後には益々增加し、遂に二十萬に增加した。而してこれ等の兵士は傭兵が多く、デンマルク、ポーランド、ヘッセンの人が多く雇はれた。王の考では自國民は成るだけ產業に從事せしめて、國家の富强を計る積であつたが、此制度は後に弊害を及ぼす事となつた。また從來プロシアでは貴族を士官に命じたが、王も貴族が自尊の念強く人を指揮するに適當と考へ、多く貴族より採用した。また王は種々の軍規を造り、撿閱の制度を立て、年に一回各地の軍隊を觀察した。財政の方面をみると、父王が貯蓄した金は第一シレジア戰爭に費され、その後の貯蓄は第二シレジア戰爭に費し、殊に王が引けたシレジアの負債を償還するために、一七四五年ブランデンブルグの貴族より公債を募つた。然し

王の主義として借金主義を好まぬので、成るべく產業の發達と節約とによつて財政整理を行ひ、七年戰爭の初の如きは千六百萬ターレル程の貯蓄があつた。また國家をして鹽の專賣を行はしめ、一は國庫の收入を增加し、一は外國鹽の輸入を防いだ。次に產業の事を見るに農業はプロシア、ブランデンブルグの地味が惡く非常に困つたが、馬鈴薯や果樹の栽培を奬勵し、またオーデルの沼地を乾して、五三年には二百五十平方哩の立派な耕地を造つた。王は諸國よりも移住民を招き此地方を十五年間無稅の地としたから、忽ち十五萬人の植民が集つた。また牧畜業を奬勵し、イスパニアから緬羊を輸入して、本國種の改良をはかつた。工業は王の最も奬勵したところで、羊毛、綿花の如き粗製品は法律にて輸出を禁じ、諸種の織物製造を盛にし、或種の外國品は輸入を禁じ、または重稅を課した。この外サクソニアの職人を招ぎ、磁器製造紡績業を盛にした。かやうに王は輸入品に制限を加へる主義であるから、商業はあまり發展しなかつた。王の意見によると輸入超過は個人の場合と同じく國家にも危險である。これを脫するには、國內の原料は悉く國內の製造業に用ひ、外國輸入の原料をも國內で工業品とし、外國の市場へ競爭させやうといふ保護政策の主義である。從つてプロシアの商業は常に輸出超過であつた。また王は多く運河を造り、交通の便を計つた。次に司法制度を見るに從來プロシアの裁判官は薄給であるから、種々の內職を行ひ、手數料の幾分が收入となるから、事件を長びかす惡風があつた。一七四六年法律家のコッチェーイーは訴訟法改正を王に建議し、その結果裁判官を淘汰し、訴訟の手續を簡單にし、四七年一月までポメラニアに實施したところ、四八年一月には二千四百の古い訴訟事件が落着したといふ事がある。此時プロシアにはローマ法、ゲルマニア法、寺院法が幷び行はれ不便が少くない。そこで王はコッチェーイーに命じて法典を編纂せしめた。コッチェーイーは五五年に死んだが王は更に七六年に第二回の改正を行ひ、その法典は一七九四年即ち王の死後に公にせられた。これがフレデリキ法典である。此法律改正により、人民は非常の便宜を得、訴訟の手續簡單となり、裁判は公正となり、法律の前には萬民平等となつた。次に政府の組織を見るに、一言にていへば封建社會の材料で造られた中央集權の制度が行はれて居たので、封建的性質を帶びた地方の代官や、自治團體の公吏や、政府の官吏などが相交つて奇妙な組織である。而して王は萬機獨裁主義の人であつたから、大臣などもその言が殆ど用ひられない、眞に王の書記に過ぎなかつた。ポデウイルスの如きでさへ、屢王に罵倒せられて居たのである。かやうな專制獨裁主義は王の健在である間は國家も安泰であるが、一朝王がたほれると同時に國家も衰頽に傾くのである。即ち王には補弼の臣がないのである。プロシアが王の死後俄に振はなくなつたのは戰後の疲弊その他諸種の原因もあらうが、王の極端な獨裁政治も一因であらう。

フレデリキ大王時代の兵士

サクソニアの擲彈兵

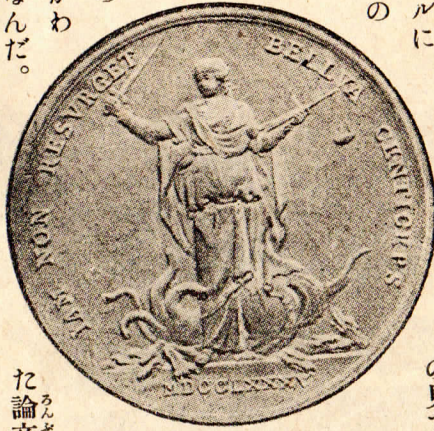
プロシア黒裝擲彈兵

プロシア擲彈兵

五　無憂殿の生活

次に大王の私生活を述べやうと思ふ。其容貌は肖像でも見るとほりな目の大きく輝いた髪の美しいドイツ人式の顔立で身長は非常に低い方であつた。七年戰爭までは一體にドコとなくつやのある快活な樣子の人であつたが、いたましい經驗を嘗めてからは陰氣な注意深い樣子の人となつて、深い皺が刻みこまれたのであつた。常にフランス語を使ひ、フランス語を知らない人だけにドイツ語を用ゐたといふことである。日々の生活は眞に規則正しいもので、朝は五時に起き、午前は政務を執り、閲兵謁見をすませ、午後は讀書作詩などにあて、夜はすきな笛を弄び、音樂會を開き、文學者などを集めて、清談に耽るのであつた。彼は父に似て中々節儉家であつたが、一面には派手な所があつて、土木を盛にし、シャルロッテンブルクやポッダムの舊城を修理し、またオペラハウスや劇場を建て、文學者や藝人で年金を受ける者が尠くなかつた。中でもポッダム郊外の無憂殿は王の最も氣にいりの離宮で、一七四五年四月十五日に起工し、四七年の五月一日に落成式をあげ、二百人の客を招いた。王はこゝに文學者哲學者などを招き、夜の會にはラメトリー、ダルヂァン、ダルゼー、ボルテール、モーペルチュイのやうな當時有名な文學者や哲學者科學者などが集つた。これらの人は孰れも十八世紀時代の懷疑的の思想家で、ボルテールとモーペルチュイはこの中での大立者であつた。モーペルチュイは前に一寸述べた通り有名な科學者で、フレデリキの尊崇を受け、學士會院長となり、上流社會の人と往來したが、人物が偏狹であつて、議論學說も尊大な非常識なところが尠くなかつたから、一般の評判はよくなかつた。ボルテールは大王から屢禮を厚うして招かれたが、シァトレー夫人との關係上、シレーを離れることが出來ず、其上フランス王ルイ十五世より非常の寵遇を受け、一七四六年には學士會院に入り、フランスに於ける地位が强固であつたから、容易に動かなかつた。ところが一七四九年にシァトレー夫人が死し、クレビロンといふ競爭者が宮廷で寵を爭ひ、面白く思はぬところへ、大王が手をかへ品をかへて招いたから、遂に動かされ、フランス王の許を受け、一七五〇年七月大王の客となつてベルリンへ來た。大王は彼を侍從とし勳章を授け、無憂殿に特別に部屋を與へ非常に好遇した。無憂殿の夜の會は一種の無禮講で言論の自由が許され、眞に哲學文學の世界の如く思はれた。然しその間にはたえず暗鬪が行はれた。互にかはす論爭の中には、皮肉な痛罵や、毒舌が交つて、ボルテールの如きは烈しい毒舌家であつた。而してその常に嘲笑の的になつたのはモーペルチュイで、學者的な傲慢な態度や、非常識なところが

フレデリキ大王立法功績記念牌

一々ボルテールの皮肉の材料となつた。フレデリキは初はボルテールを崇拜し、その間が極めて親密であつたが、ボルテールの毒舌の激烈なのと、金錢にかけて穢いことが感情を害し、遂に別れるやうなことになつた。この時ボルテールとユダヤ人ヒルシュとの間に金錢上の事から爭が起り、一七五〇年十二月から翌年二月へかけて訴訟がもちあがり、ボルテールの貪慾陋劣な心事が暴露した。大王はこれよりボルテールを卑み、王が自分には不相應な金をボルテールに貢いで居るのに、かゝるさもしいことをするのをなさけなく思つた。また文士間の暗鬪も次第に激しく、互に中傷して他を陷れんとした。ラメトリーがボルテールにいふには王が文士を喜ぶのは幇間を買ふのと同じ氣持で居るのだ、王の話にボルテールもあと一年だ、香橙のやうに汁を吸へば皮は捨てるのだと噂したことを話した。王の言葉であるかわからぬが、ボルテールも餘りよい心持はせなんだ。またフレデリキの方でも、ボルテールの陰口をきいて居ることを不快に思つた。王がたえず詩文の添削をボルテールに求めることを、汚れた襯衣を洗濯させるのだと皮肉をいふたことが王の耳にはいつた。ボルテールはこれをモーペルチュイの中傷だといつて居る。ともかく王とボルテールの間は次第に疎遠になつて、王が詩文の添削を乞ふことも次第に尠くなつた。かゝる時にモーペルチウイの事件が起つた。モーペルチウイは一七四四年四月パリの學士會院で、自然はすべての運動の爲めに作用の最少の量を以て滿足するといふ講演をなし(De la moindre quantité d'action)四九年七月にこれをベルリン學士會院の雜誌に公にした。これに就いて五一年三月ベルリンの學士會院のケーニッヒといふ人が、ライブニッツの手紙を引いて、モーペルチュイの說を批評した。モーペルチュイはこの批評が自分の說をライブニッツの受賣で、彼自身の獨創の見でないことを證明するものと考へ、ライブニッツの手紙なと僞作とし、大いにケーニッヒを責め、ケーニッヒは五二年六月學士會員を辭した。ボルテールは深遠な學理を批評する力はないけれど、たゞモーペルチュイの我儘を惡むあまり、五二年九月にモーペルチュイを嘲笑せる論文を匿名で雜誌に載せ、王もモーペルチュイを辯護するために匿名でケーニッヒ及び批評家を攻撃した論文を公にした。而してこの二人の匿名者がボルテールとフレデリキであることは、彼等の間ばかりでなく、世間一般からも認められた。また同じく五二年にモーペルチュイの科學論が公にせられたが、その學說は彼自身の考では、眞に眞面目な積であるが、實は非常識的なものであつたからボルテールはドクトル●アカキア論を公にし、極めて皮肉に一々この愚說を嘲笑した。而して此書は王が他の書物の出版に就きボルテールに許した權利を利用しベルリンの印刷所で出

同　裏面

版せられ、無憂殿の人々は皆これを讀んだ。王は大いに怒つて、ボルテールを譴責し、此書の殘部を王の目前で燒かしめ、以後は決してモーペルチュイを誹らないといふ誓書を差出さした。ところが此書は更にドレスデンで公にせられ、ペテルブルグからパリーまで弘まり、パリーだけでも三萬部も賣れた。王は五二年十二月廿四日此書を首切に命じて燒かしめた。ボルテールも王の所業を怨み、遂に決心するところがあつて、五三年正月侍從の職を辭し、病氣保養の名で三月廿六日にポツダムを去つた。王はボルテールの所業を惡んだけれど、此二人の關係はボルテールが「自然はフレデリキのために予を造れり」といつたやうに、いざとなると容易に別れにくいのであつた。ボルテールは最後の一週間をポツダムの皇居で樂しく暮し、互に別れを惜み、再會を期した。然しこれが二人の永き別れとなつた。ボルテールはライプチヒに着いた時四月にモーペルチュイから彼に宛てゝ過激な文辭をつらねた威嚇的な手紙が來た。ボルテールは例の病が出てまた〳〵ライプチヒの新聞でモーペルチュイを嘲笑した。王は大いにボルテールの所業を惡み、且はボルテールに添削を乞ふた自分の詩集を公にせられるのを恐れ、ボルテールを捕へやうとした。五月三十一日ボルテールがフランクフルトに着いた時、此地の駐在のプロシアの官吏フライタハはボルテールを拘留し、詩集取戻のことでいろ〳〵行違が出來て七月六日まで留められ、散々な目に合つたのであつた。このボルテールとフレデリキとの關係は、その時代の思想界の大立物と政治界の指導者との取組で、これによつて時代思想の一端を窺ひ得られ兩者の性格も遺憾なくあらはれて居る。デノアルテールの名著『ボルテールと十八世紀のフランスの社會』(Desnoiresterres, Voltaire et société française au XVIIIsiécle)とカーライルの『フリデリック傳』には面白く描き出されてある。ボルテール退去後の無憂殿は眞に寂寥なるものとなつた。モーペルチュイは五二年重き肺病に罹り、五六年に旅行に出かけ五九年に死んだ。その外ローテンブルグ、ラメトリーは死亡しダルゼー、アルガロッチー、ダルノーは去り、モーペルチュイの代りに、ダランベールが招かれたが、辭して來ない。一時哲學や文藝の批

ポツダム郊外無憂殿

評に花をさかせた無憂殿の夜會は王の老後の追懷となつた。王はかやうに文藝に携はる人を喜びこれを保護したばかりでなく、彼自身も少年時代から好んでフランスの詩文や喜劇などを作り、其他哲學、美術、歷史、戰術に關する者も書き殘して居る。然し其中でも見るべきものは歷史であらう。その第一第二シレジア戰爭の記錄は後に『現代史』(Histoire de mon temps)として公にせられ、古代からフレデリキ・ウィリアム一世までの國史を書き、これはブランデルグ史(Memoires pour servir à l'histoire de Branbedurg)としてあらはれて居る。

六　晩年

晩年のフレデリキは寂しい生涯を送つた。皇后は貞淑の人で、評判もよく、初は大王との間も睦じいやうであつたが、もと〳〵押付女房であり、子供がなく、夫婦なかも次第に圓滿を缺くやうになり、遂には言葉もかはさないやうになつた。また或書によると王は皇后ばかりでなく、婦人を近づけなかつたので、種々の臆說が傳はつて居る。また大王は子供がすきでよく甥の子の相手をして遊んだ。或日子供が王の部屋で球を投げて邪魔をした。二度目までは王はほりかへしてやつたが、三度目には返へさない。小供は歎願したが王は聞かぬふりで書きものを續けて居た。小供は斷然王に詰めよつた。王は御前のやうな者が居れば、シレジアを返すやうなことがあるまいと譽めたといふことである。此小供は若くて死んだ。王は寄る年浪にかてず、次第に老衰に陥り、戰陣の間にも手をはなさなかつた笛も、指が自由に動かず、前齒もなくなるといふ風で、七九年後は全く手にせなんだ。八五年シレジア巡視の時に、六時間も大雨の中で演習を見てゐたのがもとで發熱し、次第に衰弱し、十一月には夏の離宮の無憂殿からポツダム宮城へ歸つた。彼は醫學そのものに興味を持て居たが、商賣人の醫者を嫌つた。然し喘息がはげしく、手足の腫もひどいので、八六年一月にベルリンのセルレを招いだ。此人は王の病志を殘して居る。病氣は惡くなる一方であつたが、王は無憂殿を戀ひ慕ひ、四月十七日にまたこゝへ移つた。これよりさきフランスのミラボーがポツダムで王に謁した時の模樣を記して王は死に瀕して居るその肉體はすでに現世の人でないが、精神の力で生きて居るのだといつて居る。王はかやうに衰弱して居ても政治や軍務を廢せなかつた。六月四日にセルレは一旦傭を解かれ、チンメルマンはハノーバーから招かれた。八月十六日は早朝から昏睡の狀態は依然續いた。十七日午前二時二十分に王は遂に此世の人でなかつた。七十四歳であつた。

大王は君主として充分にその職責を盡した。縱橫の才を振つてプロシアを列強に伍せしめた。またよく時代の風潮を汲み、君主は國家の僕であるといふ主義を通した。施政の目的は人民の幸福であつて、行政、司法を革新せられ、産業も大いに發達した。教育の進步も著しく、一般文明の程度は非常に高まつた。野蠻國を以て目せられたプロシアは一躍文明國の列に加はつた。武を以て立つ國には無智

無憂殿音樂室

た國の柱と考へて居るなどといふ評は中たらなかつた。また一私人としての王は極めて嚴格な規律正しい人であつた。これは父王の氣質を受けたので、その一轍なところも似てゐた。また極めて常識の發達した人で公私を混同しなかつたことは無憂殿の製粉者の話でもわかるのである。彼はまた非常な節儉家であつたが、文藝學問に趣味が深く、當時のプロシアには過ぎた程財を散じた。これがため國民からは批難を受け、父王が非常な骨折で貯めたものを無益に浪費するやうに罵られた。しかし王はその職責と趣味とを混じなかつた。文學や哲學は彼にとつて荒浪をくぐり行く船の宿り場のやうなものであつた。國家の主權者としては充分にその職責を盡し、己の欲するまゝに政治界に活動し、花々しき生涯を送ると同時に、文藝の趣味も豊に、他の一方に樂天地を求めることが出來たのは彼の偉大なるところであらうと思ふ。

フレデリキ大王銅像

ベルリン市ウンテル・デン・リンデンの街頭に聳ゆ・作者は近代彫刻界の巨匠ラウホなり・像の臺をめぐれる群像は大王の部下の將軍なり

合衆國大統領ウオシントン

島田三郎

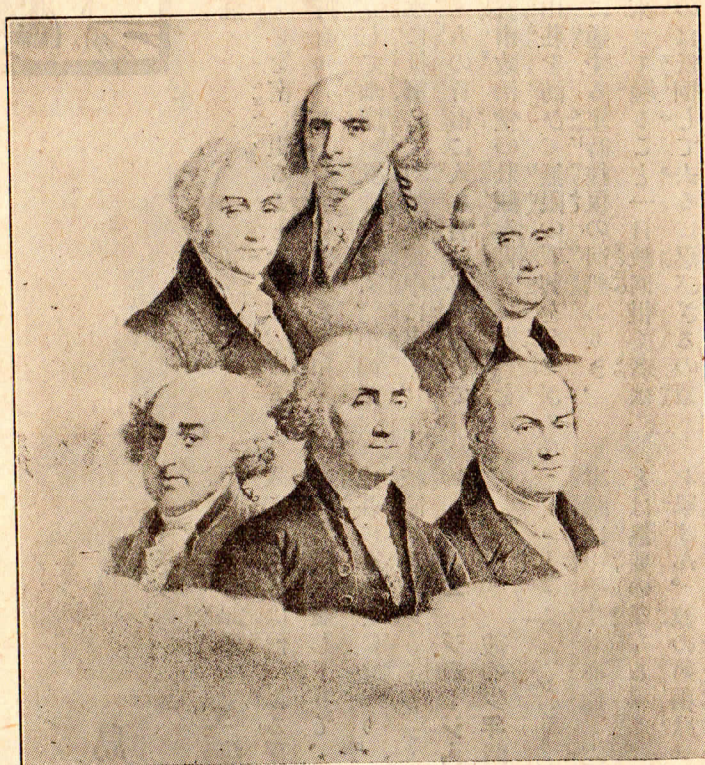
一　ヴアーノン山莊

米合衆國の首市ウオシントンを南に距ること十六哩、ポトマック河に沿ふて一帶の郊野あり、牛羊青草を喰みて平和の天地を樂み、農家樹間に隱見して幽邃の風趣を添ふ。小崗起伏して清流に映じ、樹影河水に投影して幻景を鏡中に畫く。宛然是れ塵外の仙鄕なり。米人の首市に入る者は必ず南して此地に遊び、世界の旅客は首市政治堂の壯觀を仰ぎて遊意を滿足せざるも、ヴアーノン山莊を訪ひて無限の感興を發せざる無し、嘗て首市より此地に通ずる定時往復の河船ありき、今は一線の軌道觀光の客を乘せて馳ること一日數回徂く者は瞻望して神先づ馳せ歸るものは低徊して去るに忍びざるの感あり、莊內に館あり墓あり其館は木造の質朴なる二層樓屋にして、ヴエルサイユ宮殿の華麗あるにあらず、墓は二十尺四方の煉瓦屋內に數尺の石棺を安置するのみにして、絕えてナポレオン柩堂の壯觀に似ず　而して世界の人皆ヴアーノン山莊の名を記憶して、訪客常に絕えず、殆ど聖地の如き感を人に與ふるは何による乎。純潔清操の人傑此地に生れ、出でゝ其天職を盡し了りて、此館に棲息し、永眠の後其遺骸を此山莊に葬りしによれり。其人を誰と爲す、米合衆國第一の大統領ジョージ・ウオシントン即ち是なり。

二　ジョージ・ウオシントンの家系

彼の少年時代

ジョージ・ウオシントンの姓名は兒童走卒皆記憶せり。其事蹟は中學生も亦能く之を知れり。今更めて之を詳記せんことは無要の業なるべし。此には唯評論の基礎に供すべき梗概を擧げん。彼の通稱はジョージ、ウオシントンは其姓なり、將軍の號又は大統領の稱と連呼して世に知らる、彼は四代以前英國より移住したる者の後裔なり。千六百九十七年（明曆三年）の頃、ジョン・ウオシントン英國ノーサムプトンより移り來りて、米國ヴオージニア州に占居し、ポトマック河上に地主と

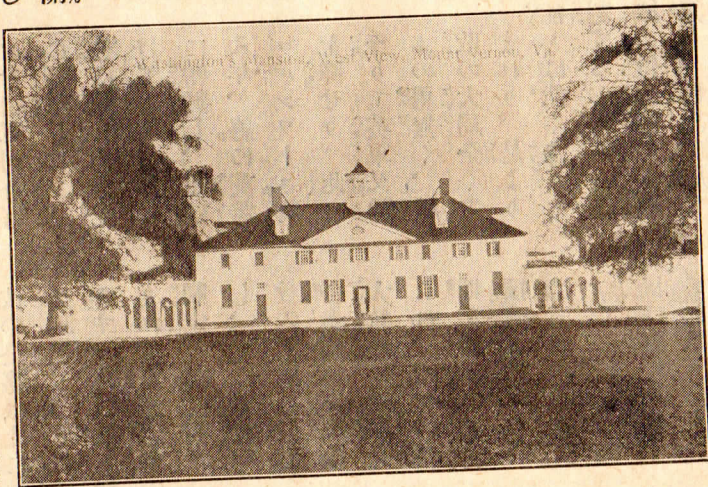
なれり、其孫オーガスチンの先妻數子を生みて逝き、後妻マリーボール、ジョージを生む。ジョージ十二歳にして父オーガスチン死せり。ジョージは新開殖地の僻邑に人と爲りて、僅に普通の教育を受るのみ　然れども彼が十三歳の時、品行に關する箴言百餘條を手書して自省の訓に供へたりといへば　其徳性涵養の志、夙く此に現はれしを想ふべし。彼の異母兄ローレンス英國海軍提督ヴァーノンの下に一艦長となれり。其邸地をヴァーノン山莊と名づけたるは、此提督の名譽を記念するに起れり。兩者の間此の如く親善なりければ、弟のジョージを見習海軍士官にせんと提督より好意の推擧ありしかば、ジオージも亦之に應ぜんとせしも、母の不同意によつて此事止みにき、是れ一少年の進退と一家私事の關係とに過ぎざりしかど、之が爲めに他日ジオージの經歷と米國の運命とに一大變化を生ぜんとす、神ならぬ身の彼は之を知らざりき。後年米國獨立の戰起りし時、ジオージの蹶起は米軍勝利の一大要件となれり。抑彼の成功は陸軍の成功にして、此戰役には殆ど海軍活動の舞臺あらざりき。ジオージをして海軍の名將となりしと假定せしめよ、彼は米軍總司令官たる可からず。隨つて彼が偉勳を建つるの機會も亦無かる可し。且對英の役に於て彼が各地の陸戰に成功せしは、彼が久く陸地の測量を事とし地理に精通せしが大なる助となりたりとは、根據ある觀察にして、其戰術に長じたるは、彼が佛國及び土人の聯合軍に對抗し、之によりて陸戰に訓練したるによれりとは、史家の評する所なり。是によつて推考するに、後來米國の幸運は、ジオージが海軍に赴かずして陸戰に習へしによれり。而して此事は彼が母の冀望に謹遵して自己の志願を中止せしに起因せり。彼は自ら知らざるの間に、孝順の徳によりて、他日開運の機會を準備したるなり。

ジオージ・ワォシントンと初期の米國大統領

上段右より——トマス・ジエフアースン（一八〇一——九）ジエームス・マジスン（一八〇九——一七）ジエームス、モンロー（一八一七——二五）下段右より——クヰンシイ・アダムス（一八二五——二九）ワォシントン，ジヨンアダムス（一八〇一——一九）

三　測地技手のジョージ
殖民地の戰爭

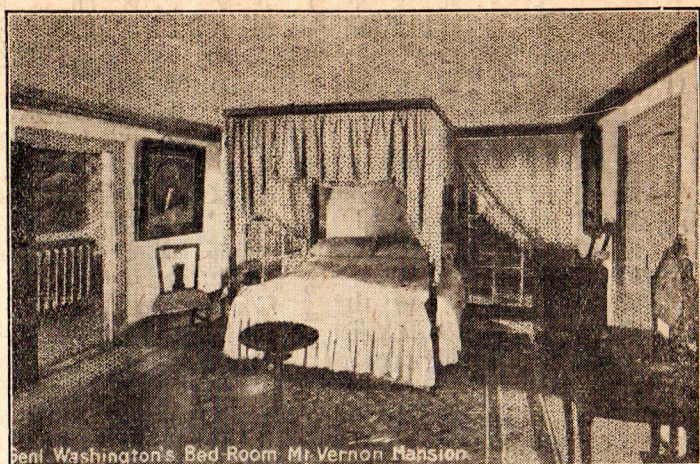
ジョージは其兄ローレンスの紹介によりてフエイアファックス卿の友となれり。卿は州内の低地に廣大の傾地を有する人にして、其未開地の測量をジョージに囑せしかば、彼は給料を受けて荒野を跋渉し露宿數月、屢次土人又は猛獸に襲はるゝの危難に遭へり。既ににし英佛二國の間に釁隙を生じ、史上に名高き七年戰爭起りしかば、其餘勢延きて米洲に及び、兩國殖民の間に戰あり。ジョージは擧られてヴァージニア州民兵の少佐となれり、時に年十九。是より佛兵及び之と聯合せし土人と戰ひて屢次功ありしかば、部下の信用益々厚く、其率ふる兵數も亦愈々多なりき。千七百五十年富有の寡婦マルサ・カスチスと婚し、軍職を辭してヴァーノン山莊に歸耕せしが幾ばくもなく擧られて州會議員となれり。此時に當り英國と殖民地との間に課税に關する憲法の争論を生じ、兩者互に讓らずして平和の冀望漸く絶えんとするに至れり。

四　英國對殖民の爭論
米國獨立の戰爭

千四百九十二年（明應元年）コロンブスが米洲を發見してより以來、歐洲諸國の人相續で此新大陸に航し來り、其土を分領して殖民地を建てしが、中に就て英佛の二國最強く、年を逐ふて他國の殖民を驅逐し、漸次の其土地を蠶食併合し、歐洲に於て二國が互角の戰を爲せるが如く、米洲に於ても亦劇く競爭して、終に英國の捷利となりしが、此本國及び殖民地の戰爭に於て、英國は過多の負債を生じ、政費も亦大に膨脹せしかば、本國政府は殖民に課税して、以て國庫の收入を補はんと企てたり。是れ本殖二地が爭端を發するの原因なりき。不承諾の租税は課すべからず。議會の議決ありて初めて課税せらるべしと、此主義は英人が世襲の權利として深く尊重する所なるに、ウエストミンスターの英國國會は大英議員の集會にして殖民地は之に與からざるなり。此議會の議決を以て米洲の殖民に課税せんとするは、是れ不承諾者に賦課するものにして民權を蹂躙するの行爲なりと。殖民は此論理を執りて課税を否認せり。本國に於ても之に同意する論者なきにあらざりしかども、多數は此要義を容るゝの雅量なく、殖民鎭壓の方針を取りしかば、此に米洲の反抗を激生して、千七百七十五年（安永四年）砲火をレキシントンに交換し、此に米國獨立の旗を

Washington's Mansion, West View, Mount Vernon, Va.

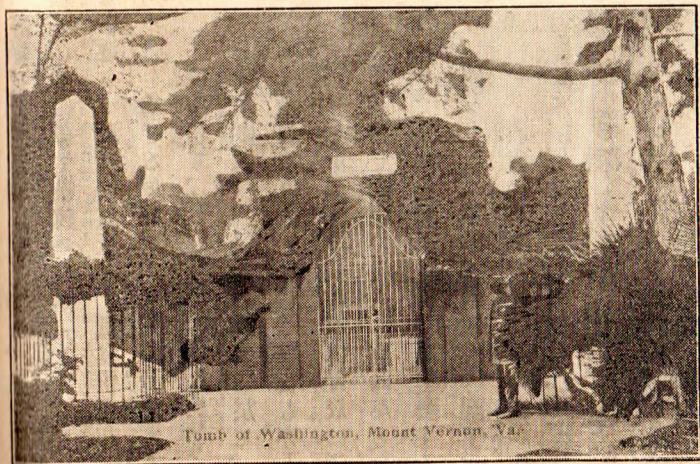
ヴアーノン山のワォシントン住居

Genl. Washington's Bed-Room Mt Vernon Mansion.

ヴアーノン山ウオシントン寢室

飜へし、殖民聯合議會は滿場一致を以てジョージ・ウオシントンを總軍司令官に撰擧したり。彼は此大任を受けてより、各地に轉鬪し、連戰八年、終に英將コルンワース卿を降せり。此に至りて英軍又鬪ふの勇無く、勝敗の大局全く定まれり。是より先フランクリン佛國に使して、其聲望と才能とは能く佛人を心醉せしめ、又佛の英に對する敵意は米に對するの同情となり、佛國首として米國の獨立を見認め、米國の位地動かす能はざるに至りしかば、英國も亦其獨立に同意し、巴里に於て平和條約を訂結せしは千七百八十三年(天明三年)九月三日にして、ボストン市民が蜂起して輸入の茶を海中に投じ、課稅の不法を實地に否認したるより、此に至りて十年、レキシントンに戰端を開き、總督の印綬をジョージに授けて全軍を指揮せしめしより八年、干戈全く收まりて彼れの任務此に終を告げしかば、彼は謹みて其辭職を議會に報告し、再び山莊に歸來して、自由の天地に逍遙する農園主人となりたり。

國家事なく國務閑にして、ジョージの出廬を要せざりせば、彼の公務は此に終了し、閑適高臥の棲居に其一生を送りしなるべし。然るに國務多難の時期は、彼に此安易の生活を容るさず、再び彼を徵して重任を其双肩に負はしめたり。彼は撰まれて憲法議會の議員となり、尋で其議長に擧られて、憲法制定の事に鞅掌し、更に全會一致の議決を以て合衆國第一期の大統領に撰擧せられ、四年の任期を終りて又再撰せられたり。第三回の改撰近づくに際し、國民は更にジョージを擧げんと欲せしかば、彼れは斷然之を拒絶し、告別の演說に於て政策の大

Tomb of Washington, Mount Vernon, Va.

ヴアーノン山ウオシントン墳墓

綱と國家の長計とを國民に告白し、千七百九十七年(寛政九年)三月任期盡きて三たび山莊に引退したり。時に英佛の間に荒れつゝありし戰爭は、累を中立の合衆國に及ぼして、佛艦が米船を捕獲するの變起りしかば、米佛開戰の危機此に迫り、米國は新兵を募集して軍隊を編制し、ジョージを起して其總將たらしめんと乞へり。彼既に老たりと雖も、國家の職務辭すべきにあらずとて、ハミルトンを副將に任ずるを條件として受任を承諾せり。然るに和戰の決未定の秋に際し、千七百九十九年劇に疾起り、十二月四日死せり。年六十七。

五　彼は尊貴の家系を有せざりき

英雄の現出を名家の裔に求めんとするは尋常史家の往々爲す所或る操觚者は此例を遂ひてジョージの遠祖を神話の軍神オヂンに尋ねんとす。其附會妄誕笑ふべし。ジョージの家系を其曾祖ジョン・ウオシントンより以上に遡りて知るべからず。ジョンは英國より移住せし一平民に過ぎずして、赤手ヴオージニアの平原を開拓し、是より三代相續せる農園主人オーガスチンはジョージの父にしてジョージは其第四男なり。

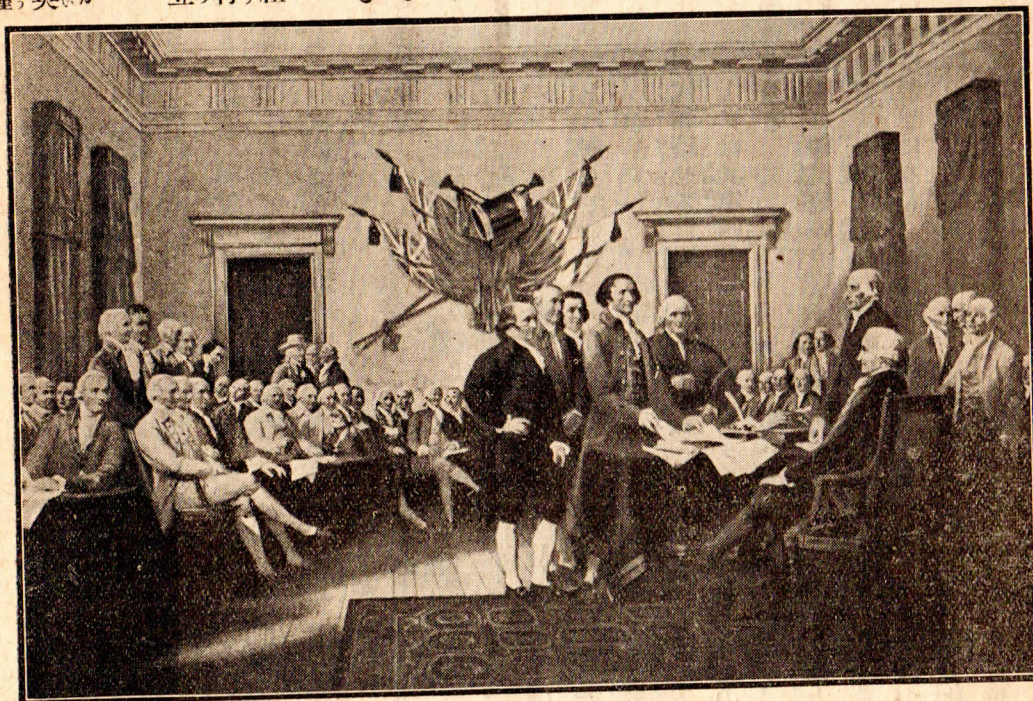
六　彼は高等の教育を受けざりき

ジョージは千七百三十二年(享保十七年)に生れ殖民地の瞭原に人となれり、百八十年前殖民地僻邑の教育は一般に極めて低かりき。彼は讀書習字算術薄記を小學に習ひたるも、外國語は一も之を學はず、又專門的教育を何れの所にも受けざりき。彼が小學時代に手寫せるものにて今に傳へたる帳薄を見るに字畫分明なり。彼は深く數學を修めざりしかど、計算は達者にて又測地の技に得意なりしといふ。彼の所謂教育は此の如きに止まれり。身體强健にして體操を好み、又馬術に長せりと。之を外にして他に異なる特長ありしを聞かず。然れども其德性は天授以外明敏篤行なる母の感化を受けたりといふ。彼嘗て曰く『手簡は字々正確分明なるべし、讀み難きの文字を急忙に走書し、之が爲めに讀者を困めんとは、自己の時を省かんが爲めに他人の時を奪ふものにして、紳士の行爲にあらず』と、亦以て彼の謹厚の一端を見るに足らん、彼は父の遺產を受けて中等の地主となり、更に兄の遺產と夫人の所有地とを併せ受けて、大地主となりたり。彼は農業を好み耕稼に慣れて、又農產の賣出しに巧なりき。若し殖民地に英佛勢力の競爭無からしめば、彼は軍人とならず、而して善良の農夫として終りしなるべし。

七　彼は其才能を實際の修養に得たり

品性の高潔身體の强健は彼の天禀なりしと雖、彼は修養を積みて怠らず、其身を置く所に隨て心身を大成したるは疑ふべきにあらず。自己の勤勞によりて土地を改良したり、農產を市場に出すに於て、用意周到帳薄精確一絲紊れざりき。此慣習は大に執務の能力を煉磨し得て、後年兵站整理の助となれり。人に雇はれて荒野を測量し、天幕に起臥すること三ケ年、民兵の士官となつて山河を跋涉し、崎嶇を經歷したることは、其心膽を煉り身體を强くし、又精く地理を曉りて軍事を解することを得たり。彼が其將才を公認せられて、一躍總軍司令官に登るの素地は、皆此時代に養成せられたり。

八　將軍ウオシントン

ジョージ・ウオシントンを語る者は必之に冠するに將軍の號を以てす。彼は軍人を以て獨立運動の中心なり、又義軍の首惱となりて、以て史上無比の功績を建てたり。烏合の群衆を化して精神的軍隊を造れり、不熟の民兵を變じて百煉の鐵騎と爲せり。腐銹の武器を執りて精鋭の英軍を撃破したり、殖民の意氣一齊に奮ひて之を致せりといふを得べきも、當時ジョージ其人ありて之を統率し之を指導して其分裂を防ぎ其方向を示すにあらざりせば　其功を奏すること彼の如く速且大なるを得ざるべし。各州相倚りて聯合議會を組織したりと雖も、其議決を實行するの中心力を缺きたり。新立の政府に强固の基礎なくして、號令に牴牾の患あり、財源繼がず兵站齊はず、前面に强鋭の英軍と對峙して、米兵の背後兵糧に乏きの困難あり、千七百七十七年フォルジの谿間に各籠を爲したる時、軍兵の靴は破れて徒跣し衣は裂けて體を寒天に曝せり。進退維谷まりて慘狀記するにたへず。唯ウオシントン將軍の忍耐意氣能く全軍を皷舞して、以て其精神を維持したり。彼が客將の援を德として之を禮待するや、其意を解せずして殖民軍中不平を鳴らすの將士あり。兵站の繼かざるを怒りて供給を議會に迫るの軍隊あり。ジョージの威望を妬み黨を結びて彼の印綬を奪ひ、之をゲート將軍に與へんとする隱謀あり。困阨艱難他人の耐ゆる能はざる所、彼能く之を忍びて悉く其反對に克ちたり。議會の力弱きが故に、一切の政務彼の一身に集中し、彼は實際に全權の元首となれり。一言之を評するに、新建民國の成功は

一七七六年七月十四日費府獨立館に於ける獨立宣言書批准
——ウオシントン議事堂壁畫——

即ち彼の成功なりしなり。

ウオシントンの名は將軍の號と分離すべからず、彼は眞に成功の大軍人として史上に屹立せり。然らば彼は世界古今の軍人中如何の地位を占むべき乎。曰くアレキサンダー。シーザー。ナポレオンは神將として其名世界の戰史に輝けり。其戰術は戰記を覆案せしめて、後人研究の題目を遺せり。ウオシントン名將なりと雖も未だ此域に達せざるなり。彼が馳驅せし戰場の地盤は千哩の間に過ぎず。其統率したる軍兵は三萬の數に上らず、戰鬪に相互の勝敗ありて、戰術に新機軸を出すこと無し。將略の一事を取り來りて彼等を批評せば、ジョージウオシントンは遠くアレキサンダー。シーザー。ナポレオンに及ばざるなり。然れども其才能人格を總合して、此數人を比較品評せば、彼等はウオシントンに及ばざるなり。予は此に史家アルバート・ブシネル・ハート教授の評言を借りて、以て斷案を下さん。曰く『ウオシントンは戰史を覆案せしむべきの軍人にあらず、然れども人類の愛護者として光榮を擔へり。彼の功績は年を逐ふて益々其炫耀を加へり、彼に比較せば、アレキサンダー。シーザー。ナポレオンは其光彩を減ぜんとす、見よアレキサンダーは混沌の帝國を其身後に遺したり。シーザーは其友人に暗殺せられて、之と共に羅馬共和國の終焉を報告せしめたり。ナポレオンは其受續ぎたる領土を小にして佛人に讓遺したり。ナポレオンを出現せしめたる共和政府はナポレオンの爲めに廢絶せられたり。ウオシントンは即ち然らず、北米共和國はウオシントンの成功と理想、其建設を助けて彼は最大多量の助力を之に寄與したるなり』と。

九　大統領就職前のウオシントン

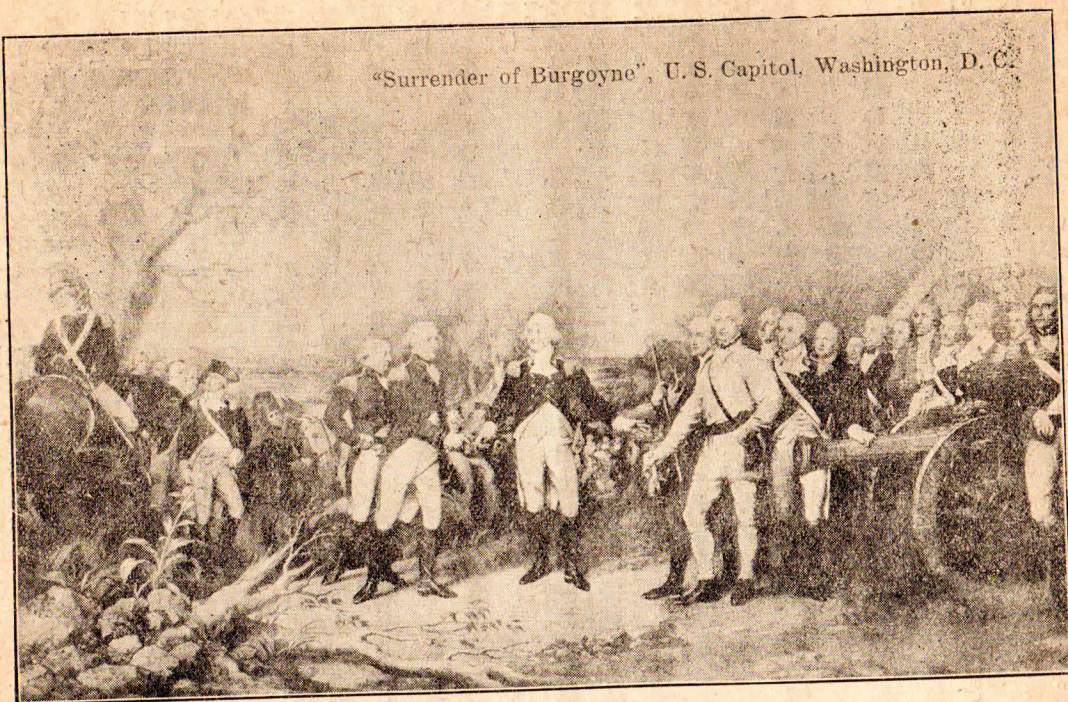
北米合衆國は共和國の模範にして、ウオシントンは大統領の典型なり。ジョージ・ウオシントンの姓名は大統領の稱號と聯結せらる、二者を分離して彼を呼ぶべからず。彼が此職の最大成功者たることは何人も異論なき所なり。抑も彼の就職の動機果して如何。蓋し彼は好みて此顯職に就きたるにあらず。彼をして其自由の職を選ましめ、其嗜好の業を執らしめなば、彼はヴアーノン山莊の主人として、田園を耕し牛羊を牧し、閑雅の生活を娯まんとす、然れども彼は天職の辭す可からざるを感じて國家の職務に服したり。彼が議會の議決を以て獨立軍の總司令官に擧られたる時、答辭を爲して曰く『予は此職に適任なりと信ぜずと雖も、滿場一致の決議避くべきにあらず。故に義務に服するの心を以て謹で命を受く諸君願くは卑意を諒として此告白を記憶せられんことを乞ふ』と。史家評して曰く『彼は大統領の職を受くるに至りては、亦同一の疑懼を懷きしが、唯職分自覺の感念に勵まされて、他の命に服したることは、一點の疑を容れざるなり』と。

彼が將軍の印綬を解き、多年劍光砲火の間に艱難を共にせる軍隊に告別して山莊に退きたるは、千七百八十二年の冬に在り彼は昨日全權の元首なりき。今は田園の一農夫となれり。然れども彼の位地は他に比類無き政治的一元素となりたるな

り。國民の崇拜は其の將軍たりし時よりも加はりたり、當時國內の通信不便にして、四方の事情阻隔したりしかば、各州の知事は彼を中心として互に文書を交換し、又彼の意見を叩き其指導を乞ひたり。彼は軍職を去るに臨みて、他人の爲す能はざる大事を決定したり。彼は各州の知事に意見書を贈りて、國家成立の必要條件を通告せり。彼は其將軍たりし時、其俸給を辭したり。他人にして之を爲さば、僞善術氣の所爲なりと評せられんも、彼に於ては自然の處行と見認められたり。此の如くにして彼の聲望は絶頂に達したり。之より先彼が將軍の職權を議會に還すに當り、軍隊は議會の待遇に對して不平を懷きたり。或る士官はニューボローに同志を會し、西方に進行して原野を占領し、國會に對して談判を開かんと協議したり。軍隊なくして孤立せる國會を脅從せしめんと企てたり。彼等はウォシントンを擁して國王と仰ぎ、君主國を建設せんと計畫して、其意を密に彼に告げたり。彼等謂へらく『共和政治が薄弱なることは經驗之を明示せり、故に君民同治の立憲政府を建てゝ王冠をウォシントンに献せん、王の稱號は少數の論者之を不快に感ぜんも、多數の人民は之を歡迎せん』と。群議百出人心恟々たりしが、ウォシントンの答書は極めて簡短極めて明白、憤怒の語調を以て彼等の請求を峻拒したり。彼は彼等の過擧を尤めて其非行を叱し、且聽かざれば其隱謀を公けにせんと脅して之を鎭壓したり。彼は此威力を有せり。國中彼獨り之を有せしのみ。彼は之によりて首尾よく軍隊を解散し、此に戰後の大事を解決し、而る後に山莊に引退したるなり。

引退の後五年、各州聯合の憲法議會フヰラデルフヰア市に開かれ、ウォシントンはヴォージニア州を代表して之を列し、滿場一致を以て其議長に選擧せられ、憲法確定したる必然の結果として、彼は大統領となりたり。史家曰く『憲法を制定するは大業なり、難事なり。然れども新定の憲法を實行して歷史なき新政府の基礎を確立するは、更に大業にして又更に難事なり。此際若しウォシントンの如き人物無からしめなば合衆國の創建彼が如きを得ざるべし。米人の氣象之を致せしといふこと勿れ。英雄の輩出之を成せりといふこと勿れ。此間一人のウォシントンを缺く可からず』と。然れども彼が八年間の在職は決して平坦の大路を緩歩せしにあらず、彼の聲望勢力を以てするも、尙種々の非難を受け、劇烈の反對に遭へることは、彼も亦他の政治家に異ならざりしなり。

十　大統領ウオシントン。創業の困難に克つ

ジョージは無比の民望を負ふて大統領の職に就きたりと雖も、建國の創業は實に多難の歷史なりき。共和政體古來歐洲に之なきにあらざりしと雖も、土狹く民少きの小國に之を試驗したるのみ。其廣土衆民を擁し、且獨立諸州を聯合して、新に統一の大國を建つるは、米合衆國を以て嚆矢と爲す。而してジョージは此難題の受驗者となりたり。普王フレデリッキは米人の同情者なりき。而かも彼は米合衆國共和政治の前途を悲觀して曰く『メイン州よりジョージア州に達するの廣土は、前途唯二あるべきのみ。分立歟、君主政治歟。此の如き大國は共和政治の存立を容るさず。羅馬は領土の擴張によりて共和國より君主國に推移したり。ヴェニス。スウイツルランド等の諸小國にして、共和政治初めて行はるべきのみ』と。米合衆國は聯合の大共和國にして、之を集成する各州は皆同等の權力を有せり、其英國を共同の敵として戰ふに當りては、外壓の爲めに一致の運動を爲したりと雖も、一旦其羈絆を脫して外患既に除かるゝや、各州其固有の自由權を主張して分裂の憂を招かんとせり。之を憲法に結束して一致の基礎を建てんこと、豈容易の業ならんや、交戰八年負債山積して國力窮乏し、商工業未だ興らざるなり。財政振はず、信用缺乏して國庫殆ど支へざらんとす。是れ內治の難事にして更に政治思想の二大潮流は全國を漂し人心を蕩かせり。一は英國より入り來りて秩序を重ずるの主張となり一は佛國の感化を受けて自由を愛するの精神となれり、其秩序を重ずる者は中央集權論者となり、自由を愛する者は各州分權論者となり、內外の政治此二主義の影響を受けて二黨其信條を異にせり。而して兩者を代表するの大才ジェファーソン。ハミルトンの二人共に內閣に入りて對立し、ウォシントンは之を統べて大統領の椅子に坐せり。其調和の困難は獨立軍の統率よりも太甚きものありき。彼の威望德量を以て群雄を駕御し、四年の任期に創業の大綱を擧げたりしが、第二期就職の後に至りて、內閣破裂し、ジェファーソンの辭職となり、引續きてハミルトンも亦辭職せり。此時に當り佛國革命の變起り、延きて歐洲の騷亂となり、英佛爭鬪の餘波は太西洋を超え來り

"Surrender of Burgoyne", U. S. Capitol, Washington, D. C.

ブルゴユニの降伏(中央の人物はウオシントン)
——ウオシントン議事堂所藏——

て劇く米洲の岸を打ち、合衆國も亦此怒濤の間に立たんとせり、此に於てかジエファーソン等は分權黨を率ひて佛國の思想を鼓吹し、ハミルトン等は集權黨を統べて英國の主義を主張し、ウオシントンは歐洲の禍亂が米洲を襲ひて、爲めに新建共和國の平和破れんことを恐れ、千七百九十三年中立を布告して局外に立ちしかば、ジエファーソンの黨は劇く之を非難し、佛人は彼等が米國を援けて英國を控きたる恩義を忘却するの擧なりと爲して、痛く米國を攻擊せしかば、米佛國際の交義殆ど斷絶せんとせり。此際又英艦が米船を捜索して米國の中立を犯さんとせしかば、ジエファーソン黨の反英の氣焔益々高まれり。米國が歐洲戰亂の渦中に入らざりしは、僅に一髮の間に在りき。ウオシントン乃ちジエーを以て遣英大使と爲し、往きて英國政府と折衝せしめ、二國の間に横はれる諸問題を互讓の談判に解決して、此の英米條約を訂結したり。此時に當り獨立戰爭の熱度未だ冷へず、米人の英國を仇視する者甚多く、此等の徒は大にジエー條約を非難して、大統領攻擊の聲四方に起れり。彼等の或る者はウオシントン竊に君主政治を慕ふといへり。或る者は彼が專制主義を懷くといへり。其尤甚きは獨立戰爭中彼が戰爭中止の意思を懷きしと誣ゐ、彼の手翰を僞造して之を證せんと試るに至れり。彼は此狂瀾怒濤の中に屹立して自信を確持し、中立堅守の國是を實例に明示したり。史家曰く『彼は大統領として大政治家の性格を發揮したり。其政治家として合衆國に致したる功績は、軍人として盡したるものよりも豐富なり』と。

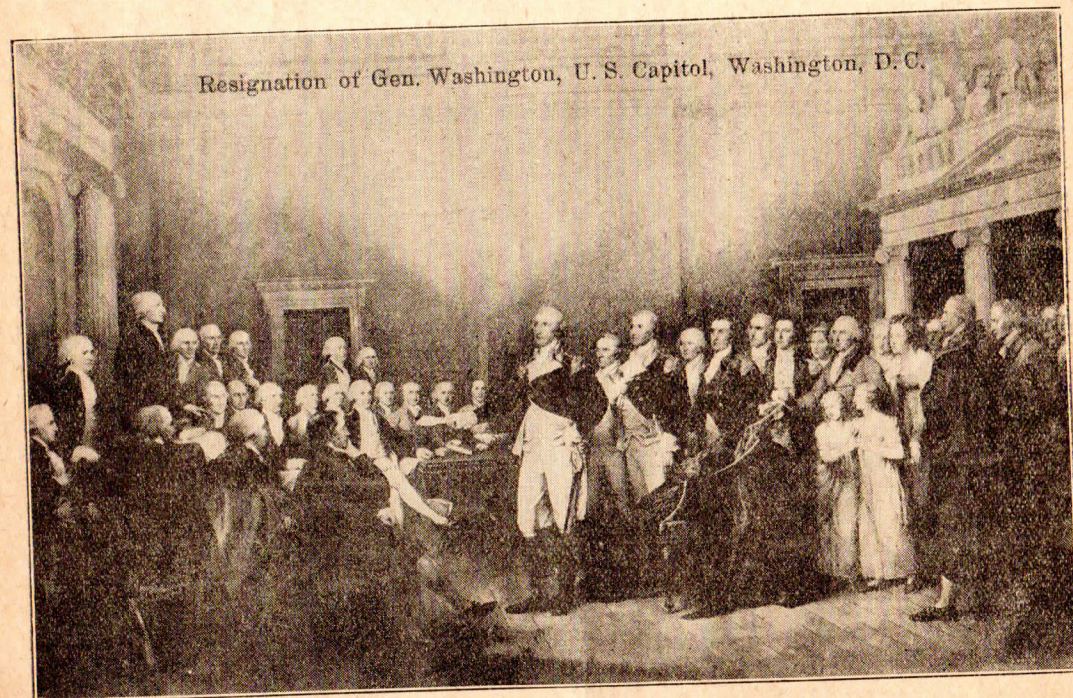
十一　遠識の人。德量の人

ジョージの青年時代大に人に過ぐるの徵候を顯はさず。唯謹恪勤勉規律の人として知られたるのみ。彼は高等の教育を受けず又專門の訓練なし。而かも能く文武の功業を建てゝ遺訓を後代に垂るゝの偉材を成せり。抑其智識才能は之を何の處に修め得て此に至りし乎。蓋し其責任の觀念純潔の思想と相結び、融合化醇して其智能を大成したるものなり。後代の大統領リンコーンは此點に於て相類するが如し。二人同く高等教育を學校の講堂に受けざりしも、責任の加重に隨て之に應ずる必要の能力を發揮し、其地位高きに隨て其智識愈々大を致せり。想ふに其公心は明を生じて其無私は聰を致し、其勤苦克己の努力能く自個の缺點を補ひ得て其天性を玉成したるなり。ジエファーソン曰く『ウオシントンは憤怒し易く、又高壓的態度の人なりしが、自警修養の結果此缺點を去るを得て、其短所を見ざるに至れり』と。彼の才能が年と共に長じたるも亦此の如き乎。彼は大小の疑問を即決して快刀亂麻を斷つ體の敏才にあらざりしも、能く全局を達觀して百年の大計を定むる達識を有せり。彼は人を識りて能く之に任じ、恭謙己を空くして他の才能を尊重し、其をして其長所を盡さしめたり。彼の辯はヘンリーに如かず、彼の文はジエファーソンに如かず、彼の理財的智識はハミルトンに如かず、彼の法律的學力はアダムス、ジエー等に如かず、其外交應酬の才はフランクリンに如かず、而かも是等の諸豪を適所に任用して、彼等の能くせざる大業を成就したり。彼が特殊の天才を一方に有せずして、絶倫の偉人と仰がるゝ所以のものは人性各種の能力を併有して、善く其均衡を保ち、勤苦修練以て圓滿の成熟を遂げたるによれり。約言するに彼は才の人にあらずして識の人なり。能力の人にあらずして品格の人なり。學藝の人にあらずして德器の人なりしなり。

十二　慈愛の人

亞弗利加の黑人を米州に輸入し來り、農奴となして此に年あり。ジョージの住せしヴオージニア州は其多數を有せり。彼も亦當時の通習により、黑奴を使役して耕作の用に供したり。夫人の嫁し來りし時、其所有地にも附屬の農奴ありき。ジョージは早くも心を此問題に動かして曰く『我死せば遺產を處分する前に農奴を解放せよ。遺產を分與して地所の分割と共に地附の奴隷を分割し、之が爲めに彼等の夫婦親子を分離せしむるは憫むべし』と。千七百八十六年友人モリスに與へたる書に曰く『廢奴法の制定を切望するの熱心、誰か予の如く甚だしき者あらんや』と、識者彼が國務多端の間に老ひ此問題の解決に盡力するの暇なくして逝けるを惜めり。

十三　恭謙の人。信神の人

ジョージは中心常に自己の不能を感じたる人なりき。千七百五十八年州會議員に撰まれて議場に入りたり。議長は歡迎の辭を陳べて、彼が州軍指令官として顯はせし功績を讃したるに、彼は答辭を陳べんとして起立せしも、他の稱讃に對して慚愧にたへざるもの〻如く、面赤く口吃り體顫ひて一言を

ワシントンの退職
——ワシントン議事堂所藏——

出すこと能はざりければ、議長は再び發言して曰く、『ウオシントン君、請ふ椅子に就かれよ、君の謙讓は君の武勇に匹敵せり。且如何なる雄辯も君が謙讓の力に及ばざるなり』と。

此人にして戰場に政界に大膽の決斷を爲せしは、其力を何者より得來りたる乎。彼が獨立軍總司令官に撰任せられたる時書を夫人に贈りて其哀情を陳べて曰く、『予は我才能の此大任に適せざるべきを自覺し、此撰任を避けんと盡力せしも、其事協はず、唯是まで諸種の職任を受けて無事を保ち、予をして今日に至らしめたる天意に一任し、此に任命を受くるに決せり』と。其大統領就職の演說にも亦曰く、『予は此大任を受くるに際し、公宣の言中廢する能はざる一大事あり。宇宙を司裁し、萬國の政治を臨監し人類の不能を憐みて之に能力を附與し給ふ萬能の神に對して、予は熱誠に祈願す。願くは國民の自由幸福を保全せんが爲めに建設せられたる合衆國政府に福祉を下し給へ、又我任務を首尾よく遂行して、我職分を適當に盡すことを得せしめ給へ』と。彼は己を空くして天に依賴するの人、其小心にして大膽なるジョージ・ウオシントンの性格は此信念の結晶に成りたるなり。

十四　遺物と遺言

ジョージの夫人マルサは、カスチス大佐の寡婦なるが、先夫の子女數人ありジョージ養ふて之を愛育せり、ジョージ子無きを以て其死後彼の遺產は親族に分與せられ　ヴアーノン山莊は數人に遞傳せられしが、後年所有主保存の力足らずして之を賣らんとせり。南カロライナ州のカニンガム夫人之を聞き、斯くて英雄の遺蹟終に荒廢に歸せんことを恐れ、國內の義人に訴えて義金を募集せしに　直ちに二十萬弗を得たりければ、之を以て山莊及び其附屬の地を購ひて婦人義團の有となして、永久保存の方法を立てたり。斯くてウオシントンに直接系統の後嗣なきも、米人は國父として彼を仰ぎ、山莊は個人の所有主なきも、萬人の遊覽地として世界の地誌に錄せらる。ジョージの遺物中數口の劍ありて、其從子に贈れる遺言狀と共に山莊館中に保存せらる。遺言の文に曰く、『自衞の外此劍を拔くこと勿れ、國家の扞衞と國權の擁護との外之を拔くこと勿れ、此目的の外には血を濺ぐの用に供すること勿れ、若し國防國權の爲めに一とたび之を拔くことあらば、死に至るまで之を室に藏むることなく、寧ろ死するも此劍を棄つること勿れ』。彼は此心を以て義務の爲めに此劍を揮ひたるなり。

十五　天の召命に應ぜしなり

ジョージの天性は閑適の人なりき。而して境遇は彼を劇忙の人となせり。彼は平和の人なりき。而して時勢は彼を軍務の人となせり。彼は山野を愛し農耕を好むの人なりき。而して必要は彼を顯職公館の人となせり。其獨立の戰終り軍服を脫して山莊に歸るや、ニユーヨーク州の知事クリントンに贈りし手翰中に書して曰く、『予は良友と交誼を厚くし、家內生活の私德を修め、以て餘生を送らんと欲す』と。彼の情願此に在り。彼をして其志願を遂ぐるの自由を有せしめなば、彼は退職の軍人鄉黨の紳士として最も滿足せしなるべし。彼が憲法議會の議長となり、更に進みて大統領となりたるは、彼に取りて意外の運命にして其本來の志願にあらず、斯くて彼が大名を成し之によつて世界偉人傳中最大の顯人となりしは、天の徵命に應じて職分に盡瘁したる結果に外ならざりき。

十六　彼に對する米人の評言

米人がウオシントンに對する尊崇の念は極めて厚し。政友は素より彼を敬愛し、政敵も亦彼の誠意を疑はず。ジエフアーソンは彼と意見合はずして其內閣を去れり。ジエー條約の議會に提出せらるゝや、公然政敵となりて彼の政策を痛擊したり。然れども彼に對するの信用は依然として、變せず、其讃辭は最高の尊崇を表示せり曰く『ジョージ・ウオシントンの誠意は至純なり。彼の正義は不撓なり、他に彼に比すべき誠

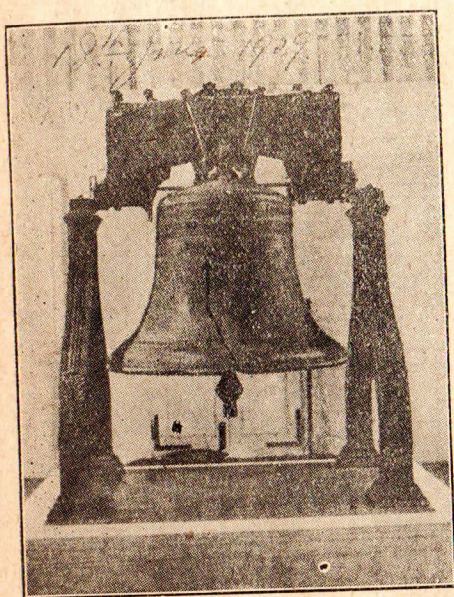
精の人を見ること能はず。事の利害、人の親疎、友敵の區別は、一も正義を標準とする彼の決意を動かすこと能はざるなり。彼は聰明なり、善良なり、偉大なり。彼を是等言辭の眞意義を表顯したる人格なり』と。其死するや、國會は滿場一致を以て追悼案を可決したり。リチヤード・ヘンリーの、贊成演說中、左の言あり曰く『戰時第一の人、平時第一の人、民望第一の人』と。此言は之を語り傳へて米國百年の定評となれり。後來も亦永く不變の適評たらん。

十七　諸國の評言

戰時平時人望皆國內の第一位を占め、仰がれて國父と稱せらるゝはジョージ・ウオシントンに對するの月旦なり。然れども米人が彼を嘆美するは、家人が家父を敬愛するの讃辭に類す。以て米國最大の偉人と稱すべきも、未だ以て世界の定評と爲すに足らず。此に於てか他國の評言を聽くの要あらん。

獨逸人ローマー曰く、

自ら幸福を享け、又他に福祉を與ふべき天性を具有すること、ウオシントン其人の如きは、古今史傳の偉人中稀に見る所なり。彼の言行を精査し來れば尊敬の念愈々加はること、之を譬ふるに絕好の美術作品を鑒査するが如し。鑒査愈々密なれば其妙技に感ずること益々深し。彼の精神は黨派心以外黨派心以上に立てり。偏頗自利卑陋の分子は毫も其間に存せざるなり。彼は良心の發動明晰の理性公平の監察によりて、活動したり。大事に臨みては其不撓の決心　溫和忍耐と相結びて働けり。被任の權力を法律以外に毫も濫用せざるの人なり。文明世界より彼が受くる至大の尊敬は永久にして、黃銅大理石の肖像が朽敗する如きものにあらず。其汚點なき記憶は永く後代に敬愛せられて盡期無かるべし。

佛人テオドール・フアバーも亦曰く、

ウオシントンは絕妙なる大作の記念像の如し。一見人を炫するの衒氣なきも、仔細に點檢するに、完全の體格を具備して、非難すべきの缺點なし。彼は偉人中の聖なる者なり

彼の劍に擊破せられたる英人も、亦彼が英民族中に產出せられたるを誇れり。アリソン曰く、

ウオシントンは英國の領地に生れず、また彼れを英領擴張の功臣傳中に列する能はずと雖ども、此の如き偉人が英民族中に出たるは、英國の誇るべき所なり。彼は無比の品性を發揮して、絕大の勝利を博し得たり。彼は其義憤勇氣を米洲の英民族に分與して、ルイ十四世の野心もナポレオン一世の威力も動かす能はざりし英國の各地を震憾したり　歐洲諸國が動亂革命相繼ぐの間に立ちて英人自由の精神を遺傳せる米人に眞正の自由を有せしめたり。是豈英民族の世界に誇るべきものにあらずや。

讀み來りてシーザー、ナポレオン其光彩を減ずるの感なきこと能はず。

自由の鐘
（合衆國獨立の第一聲を撞きたるもの・今ウオシントン府獨立館にあり）

ナポレオン大帝

―文學上に於ける―

貴族院議員　千頭清臣

一

由來、人が、何れかの事柄に就て、偉大なる名譽を博したる時は、其の外に立派に爲し遂げたる事がありとするも、そは、やゝもすれば世人から忘れられて顧みられざる傾向がある。予はナポレオン大帝に於ても又是を見るのである。ナポレオンは軍人として、政治家として、比類なき名聲を博したが、それらの方面に於ける名譽の、あまりに高き爲め、他の方面に於ける事業や事蹟は、兎角世人の注意外に逸して、光輝を失つてゐる傾向がある。ナポレオンと同種類の英雄豪傑といへば、アレキサンダー。ハンニバル。シーザー。シャーレマン。クロンウェル。ピーター。フレデリック。鐵木眞。秀吉。ワシントンといふ樣な偉人である。是等の人々は那翁と同樣、世界を蹂躙した大英傑であるが、多くは武骨一偏で、文武兩道を兼ねたる人は少ないけれども、那翁を加へ少くも三傑は、武道に熱心なりしが如く文事にも亦た心を傾けたのである。即ちシーザーは雄辯家として彼の時代に於いて第一流たりしのみならず、小著作の外にゴールに於ける自身の戰爭記を著してゐる。此の戰記は古文中の名文にして、今日も尚ほ世に傳はつてゐる。又、フレデリック大王は、當時の歐洲諸國に共通の言葉たりし佛語を學び、之を以て詩を作り、或はその時代に於ける文學界の明星ヴォルテアーを佛國より聘して、暫く宮廷内に住はせ、共に文學を語つたこともある。

若しそれ、ナポレオンに至つては、歷史家であり、小説家であり、又評論家であつたと、斯くいはゞ、讀者中には或は意外に感ずる者あるかも知らぬが、實際彼の起草せる史評、小説、論文を初め、命令書、檄文、演説、書簡等を集むれば、その容積且つその内容も亦た眞に驚くべきものあるを發見するのである。

二

先づ、彼の史評及書翰などの全集ともいふべきものが、ナポレオン三世の保護の下に出版せられた。此は二ツ折の大きさの書籍で總計卅八卷ある。史評はその中の六卷を占めてゐるが、ナポレオンがセントヘレーナ島に流罪の身たりし當時、重もにその從者をして筆記せしめたものである。その内容はアレキサンダー。ハンニバル。シーザー。ガスタバス・アドルファス。チューリーン。ユーヂン公及びフレデリック大王等各名將の戰記が重もである。ナポレオンの説によれば、是等名將の爲したる幾百千の戰爭の中、其最も有名且つ大切なるものは八十四を數へ、是等の戰記は、即ち兵法の基礎を爲せるものである云々と。然れどもナポレオンは八十四の戰記の中より多少省略する處ありて、其代に自身の爲したる戰爭の中、四十個の戰記を加えて居る。凡て是等の戰は、時と場所と手段を異にし、各一樣でないのであるが、能く是等を吟味せば、其中に同一の原則の存在する事を發見するのであるとは那翁の意見である。要するに一々適例を示し、明白に兵法及び兵術を説明してゐる。尚ほ戰史の外にナポレオンの政治上の意見をも多少窺ひ知る事が出來る。例へば佛國大革命の終に創設せられたる五人の命令官政治の批評、或はナポレオンが此の政府を轉覆したる當時の感想などを書いてものも含まれ、古代、今世の英雄に關する人物評などもあるのである。

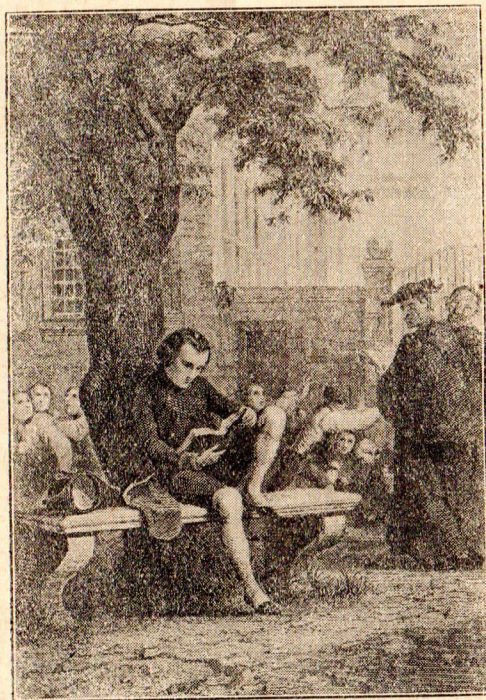
ナポレオン一世　―グロー筆―

他の卅二卷は、ナポレオンが軍隊に發したる命令書、所々で爲したる演説、或は檄文、或は公私の書翰などを以て充されて居る。卅二卷の中、廿八卷は書翰の部で、その數實に二萬三千以上に達し、それには那翁が兄のジョーゼフに宛てたるものや、女帝ジョーゼフィーンに送つたもの、其の他手の

届く限り、或は國務大臣又は軍人、友人等に送つた手紙を、出來得るだけ網羅してある。そして是等の書翰は　彼の最も活動したる時代即ち得意の境遇にありし時分のものが大多數である。

三

前記の史評及書翰等の外に、小説や論文を集めたる書類がある。それは『未知のナポレオン』といふ題目にて、一八九八年に出版された。メーソン及びビアギー兩氏の編輯せる處のものである。書中短いもの長いものを、合計して六十餘篇に亘り、ナポレオンが青年時代の作最も多きを占めてゐる。今その内容を語る以前に、永い間紛失してゐた此の本の原稿が、如何にして世に公にせらるるに至りしかを示そう。

ナポレオンがエルベーに流罪の身となつて一年經つか經たないに雄大なる再興を計り、再び帝位についた事が百日間である。隨て是の時分の事を歴史家は百日政治といつてゐる。その頃の事である。チユーレリーの王宮の書齋に一個の紙包があつた。その包みの表面に「君師フェシに托す」と云ふ樣な意味が書いてあつた。君牧師のフェシは那翁の叔父なる人であるが、此の人は、ナポレオンが帝位を退いた後も是を保管し、自身と共に羅馬に持つて行つた。そして一八三九年フェシが死去のその時まで、此の包みはフェシの手許に置かれてあつたが、彼の死と共にフェシの部下、リオネーなる僧侶が是をリオン市に送つた。そうこうする中にウイリアム・リブリーといふ書籍愛集家があつて、是の事を聞きつけ、是を三千圓で買ひ上げて、その後リブリー是を貴族のアシバーンハムの手に渡す事となつたが、一八八四年に、アシバーンハム卿の立派なる私設圖書館が賣り拂はれる事となつた際此の紙包みは伊太利政府の手に歸した。その後、今日に於ても、現にフローレンシアン圖書館に保管されてあると云ふ。處が最初、此の圖書館の館長たるビアギーが、色々取調べをして居る中に、偶然此の包を發見し、其結果茲處に佛人にしてナポレオン研究家の一人たるメーソンと計つて、共篇として世に出すに至つた次第である。

さて、『未知のナポレオン』の中には、如何なるものがあるかと見るに、

少年時代のナポレオン

(一)『コルシカに就て』。いふ迄もなくコルシカはナポレオンの故郷である。

(二)『自殺に就て』。此の記事は短いものである。青年時代にナポレオンは非常なる困窮に陷つて居た。その時は凡て世事を悲觀的に觀察したものと思はれる。即ち此世にあるもかかる艱難辛苦、何等の愉快もない以上はむしろ一刀の下に生命を絶つに如かず抔といふやうな事も書いてある。

(三)『基督教に就て』、ジエネーバの大使某が公にした論文に對し、攻擊を試たものである。

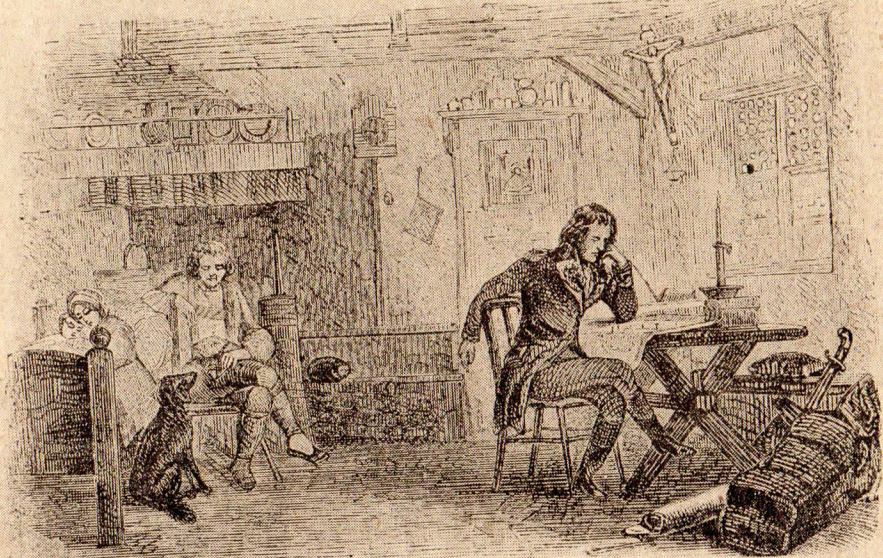
(四)少尉位の時代に、或夜パリー市を散歩しつゝあつたる所、折柄、一人の婦人に出會つて談話を試みた。その時の『感想記』

(五)『コルシカの歴史に對する緒論』

(六)『愛國心と愛光榮心の比較』

(七)『コルシカ王のシオドルと英國政治家ワルポール兩人の想像的對話』

先づ斯くの如き題目である。

而して(八)より(卅五)までは、ナポレオンが十八歳より廿歳迄の間に書いたもので、その中の六個は彼の專門たる軍事上特に砲兵に關する記事である。その他の者は、地理、歴史、政治等のもので、例令ば希臘の哲學者プラトーの『共和政體』についての批評、古代波斯の宗教と政體、希臘の地理及歴史、ハンニバル。フレデリツク大王等に對する評論、英國史に關する記錄等である。

ナポレオンの夜間勉强（オーグゾーン時代）

『未知のナポレオン』にある六十餘篇の中、卅餘篇は以上の如きものであるが、外に小説がある。その題目を擧げると『エツセツキス伯爵』『ボーケアーの夕食』などで、小説とはいへ、近來我國に見る如きものではなく、後者の如きは問答風にナポレオンの政治上の意見を記したものである。

ナポレオンは又その學生時代に、懸賞論文に應募した事がある。そは當時リオンの或專門學校にて提出したもので、『人類の幸福に關し、彼等の腦裡に印象せしむる最も肝要なる眞理及感情如何』といふ題目であつた。此の論文懸賞は、彼より六、七

歳年長の某の手に落ちて、彼は落第者の一人であつた。又那翁は詩をも作つた事がある、尤も此の種の文學は極めて少い。予は僅かにその二ツを見たのみである。

是等論文又小說の或物は、その當時一度は出版せられた。例へば『ボーケアーの夕食』の如き、是の小說は當時佛蘭西の政治狀態を批評したもので、世人より少からざる注意を引きたるものであつて、當時の政府すら、自ら費用を投じて是を印刷に附し、廣く世間に是を配布したのであつた。

以上述べた如くなるを以て、その分量より評せば、ナポレオンの文學上に於ける努力は、容易に常人の企て及ばざるものである。

四

然るに那翁の文體如何、またその內容如何。彼の文章について、彼の敎師の一人は此くいつて居る。

『ナポレオンの文體は、恰かも火山の燒け石の如し』と。また他の一人は、

『單刀直入、突貫的の筆力である』

とほめて居る。セント・ボーブといふ佛國文學界の大家は

『唐獅子の爪の如し』

と評した。蓋し何れも皆その筆の力のある事を形容したのである。セントヘレーナ島にて從者に口授したる史評につき、某學者は、次の樣に述べて居る。曰く、

『書中多々壯大なる文章を見る。殊にナポレオンがエルベー島を逃れて再興を計らんとし、佛國海岸より巴里に進行の道すがらを敍したる記事の如きは眞に歷史上の傑作といはざるを得ぬ。何れの歷史家が、斯く恰も演劇を見るかの如き感興に打たるる文章を草し得たるぞ』

と。而して又演說について見るに、彼は稀なる眞の雄辯家にして、兵士に與へたる感動は、電氣をかけたる如くであつたと云ふ。有名なる英國の歷史家マコーレーは、今日に在ても尙ほ英國文學界第一流の名文家である丈け、それ丈け他を評する事甚だ酷であつたが、而かも是の人にしてナポレオンの演說を傑作なりと評して居るのを見るのである。

又コンナード氏は、ナポレオンがセントヘレーナ島に於て從者に筆記せしめたる凡ての著作目錄を擧げた後に曰く、

那翁の著書は、單に頁數の多き點に於てのみならず、事實に付注意深く、精密にして秩序正しく、且つ優文なる點に於て、那翁の勉强を示すものなり。……ナポレオンは徒らに輝きたる且つ流暢なる文章よりも、寧ろ明瞭且つ世人を說明せしむる事を目的としたものである。即ち彼の文章に美なる處は、明確なる點、連絡の正しき點及び單純なる事に歸するのである。イタリア戰記中の或章節の如きは、名文の點よりして、最も高き地位を占むべきものである。尙議論を試みたる時には、常に論理明確にして自己の位置を、爭ふべからざる道理を以て防禦して居るのである。但し『岬よりの手紙』といふが如きは、一字一句快活なる語に充ち、何れの頁を開くも、大に讀者の注意を引き、單に優文と云ふに非ず、それ以上である。

是等の讚美たるや、ナポレオンに取つては、非常の名譽といはざるを得ぬ。如何となれば、彼や元來コルシカの小島に生れ佛語は彼の原語でないのである。尤もナポレオンの文體を仔細に檢すれば、青年時代と壯年時代とに大に相違を見るのである。青年時代の文章は、贅語多く且つ修飾が過[illegible]て居

る。然るに長ずるに及んでは、極めて簡單且つ明瞭、從つて文章に非常の力がある。

今その內容は如何と云ふに、先づ最初に述べなければならぬ事は、取題の多方面に亘れることである。彼の專門たる軍事は勿論の事、歷史あり、地理あり、政治、宗敎、加ふるに種々雜多の題目について、意見を持つて居る。而かも彼の意見は、極めて新らしく極めて深く、オリヂナリテー即ち原造的の思想に富んで居る。此の點につき、最近ナポレオンに關する一書を著したるワッツソン氏曰く、

ナポレオンほど、能く談話し能く文章を草した人は決して世に現はれないのである彼の曰はんとする處は明白に人に理解せしむるやうに能く述べ、能く書いた。彼は烏合の群集に對しても、時々設けられたる調査委員に對しても、政府の議員に對しても、軍人に對しても、諸國の國王に對しても、或は、老若男女を問はず、一般人民に對しても、その對手を見て、述べ方の最も適切なる方法を會得して居た。特に軍人に對する演說の如きは、彼の右に出でたるものなく、彼が兵士の前に立ちてその舌力を振ひたる演說を一讀せば、何人と雖も、今日も尙ほ電氣的の衝動を感ずるのである。議員や調査委員に對する演說は事理の整然として、明白なる事、模範的といつて可なるのである。彼の公文書の右に出づる者なく外交上の書翰は最も高尙にして威嚴を保つて居た。要するに、彼の言語、文章は、題目により又場合によりて、種々に變化して居る。若し彼にして必要を感じたる場合にはブルボン家の王の如くあくまで丁寧なる語を用ふる事も出來るが、鍬を鍬といはなければならぬ場合の生じたるに於ては、斷然として是を明言し、人の耳を充分響くやうに直言するのである。兎に角彼の談話も文章も常に特性あり個有性あり、偉大なる所がある。……當時外務大臣のタレラントは對談家として著名であつたが、是をナポレオンに比せんか、恰も路傍の瓦斯燈と煌々たる月光と比較する樣なものである。如何なる題目についてもナポレオンは、その題目に關し、いひ得らるべき最善、最妙の事をいひ得たのであつた。而して凡そ人事百般の事に付、彼の言の達せざるなく、又彼の一言は必らず題目の中心に直入して居るのである。云々

五

那翁起草の多大なるのみを見ても敬服の至なるが、元來ナポレオンは天才でありしが爲めに、斯くの如くなるを得たのであらうか。

ナポレオンの生涯は僅に五十二年であつた。依つて五十二年より、廿歲までの青年時代を差し引けば、三十二年を殘すのであるが、此の間、彼は戰爭に政治にその精力を注がなければならなかつた。或傳記學者の計算によれば、ナポレオン自身が兵を率ゐて戰ひたる小戰は六百の多きに上り、大戰八十五を數へ、合計六百八十五回といふ事になつて居る。此の一事を以てしても尙ほ彼が如何に多忙の身なりしやを想像し得らるるが、彼は帝王として在位凡そ十年、その十年間に、諸所の王宮にて送りたる日數は、戰場にて送りたる日數より、五十四日間丈け多いといふ事である。斯くの如き有樣なるに關らず、彼は前述の如き文學上の努力を爲し遂げて居る。その書翰數だけでも、二萬三千以上、是に未だ世に公にせられざるものを加ふれば凡そ三萬に達するかも計り難いのである。

勿論そは天才の致す處でもあらうが、又ナポレオンが如何に努力の人、勉强の人であつたかを察せねばならぬ。

ナポレオンは十歲の時、コルシカより佛國に出で、シャー

ドンと云ふ一僧侶の氣付けの下に置かれて、先づ佛蘭西語を第一とし、その他必修の學科を學んだのであるが、當時の那翁に付シャードンはかやうにいつて居る。

ナポレオンは三ケ月にして佛語を以て自由に談話し尚ほ簡單なる作文も作り得るに至つた。

と。又シャードンの記す處によれば、彼がナポレオンに何か物語つて聞かせると、ナポレオンは目を開き、耳を聳て脣を動かして熱心に聞く。後日再び同じ事を繰り返した時には、更らに注意をしない。『よくお聞きなさい』といへば、『その話は最う知つて居ります』といつて、少しも頓着しない。少年時代のナポレオンは、普通の小兒の如く、野外に出て遊ぶなどの事をせず、寧ろ内にあつて、沈默し、眞面目に物事を考へるといふ性質であつた。彼は屢々自己の室に籠り、室の戸をしめ、窓をとぢて、態々室内を暗くしてランプを點じては讀書に耽つた。かくの如きこと數日の久しきに渡る事もあつた。

ナポレオンその從者ラカセーをして筆記せしむ

學校に於けるナポレオンは勉强家と稱せられたが、特に數學、地理、歷史に長じて居た。卒業の後も勉强を續けた。彼が、オークゾーンに滯在して居た時には少尉位であつたが、兵營の側なる下宿屋の一小室を借りて住んで居たが、たゞ一ツ窓の薄暗い部屋であつて、室の中には寢臺と机と椅子とのみ、勿論何等の飾りもなき室の内に、彼は只一人默々として讀書して居た。或は健康を害する位讀書に餘念なかつたのである。一七八七年の七月、オークゾーンより家に送つた手紙には次ぎのやうに書いてある。

私儀此處にあつて、勉强するの外、何等の仕事も無御座候。私は軍服をつくる事、一週間に漸く一回に御座候。先日の病氣以來、眠ること少く、十時に寢臺に付き朝の四時には起き、一日に一回食するのみに御座候。

以て、當時の有樣を推測すべしである。ブラウニング氏評して曰く、

ナポレオンがオークゾーンに滯在したるは十五ケ月であつたが、その間捲まず勉强して居たといふ事については、吾人は充分なる證據を有する。一時ブリーの手中にありし原稿中には、其の當時書かれたものが廿七ほどある。而かも此の廿七はその當時に彼の起草した原稿の一部分である。廿七の原稿は是を三類に區別するを得るのである。一つは砲兵士官としての彼の職務に關する者。二は歷史、殊に各國の國體に關する者及び地理。三はコルシカに關する原稿。

云々と。その時分、青年ナポレオンは政治上の嫌疑を受けて、廿四時間牢獄に繫がれた事がある。素より獄中の事であるから、書籍抔はなく、不幸にして筆紙をも持たざりし故に、如何せんと室内を見廻す中、フト棚の上に蟲ばみたる一の古本を發見した。そはローマのヂヤスチニアン帝王時代に編輯せられたる法律書であつた。是れこそ幸なりと、彼は熱心に是を讀んだ。他日彼が帝王となつて、佛國の立法官となり、彼のナポレオン、コードを編輯するに當つて獄中の法律書は非常に彼を益したりといふ。

オークゾーンより暫時鄕里コルシカに歸りたるが、間もなく再びオークゾーンに戻つて來た。その時彼自ら曰く、『自分は常に弟のルイに數學を教へると同時に、日々約十五時間より十六時間位勉强した。』と、元來頗る記憶力に富んで居る彼は、讀書の都度書中より多く拔粹すると同時に所感を手帳にかき止めるといふやり方であつたから、二十二歲の比は、既に一角の學者であつた。當時兵術に關する著書丈けにても十二ケ月間に七十二卷を讀破したといふ。然らば一ケ月六冊の割合である。此の一事を以て見るも彼が如何に勉强家たりしかを知るのである。要するに是を一言せば、左のブラウニング氏の言最も適當である。氏の曰く

(セントヘレナ島時代)　〔オーチャードソン畫〕

世間に皇族に關する理想的教育につき、多々論ずるものあれども、ナポレオンが、オークゾーン滯在時代に自ら設けたる日課の如く、行政學について斯くまで强固且つ充分なる教育を、如何なる太子といへども、嘗て受けたることはないのである、吾人はその日課の題目の廣き事、材料の撰擇その卓越なること、又讀書して直ちに其の要點を會得したこと、而して彼の所感を述べたるその文章の强きこと、是等の諸點に付て、何れを最も賞讚すべきやを知らぬのである。而して玆處に趣味あることはその書籍の選擇が、軍人としてよりも政治家として學ぶべきもの多きを占めて居た一事である。則ちナポレオンは十九歲の頃既に人事の千變萬化たること、政治の變動極りなきことなどをば、火藥の爆發や大砲の彈丸の方向よりも一層の興味を感じたといふ一事である。

云々と。

六

那翁は單に青年時代のみならず、一生涯絕へず學問に注意を拂つたのである。エヂプト遠征の場合などは、多くの書籍を船に積み込み、佛國に於て有數の學者を招聘して從軍せし

め、埃及にて種々學術上の研究を爲さしめた。それゆゑ學術界に取つて、偉大なる發見もあつたのであつた。
埃及のみならず常に戰場に赴くに當て必ず若干の書籍を携へて行つた。馬車中に、ある工夫を設けてそれに書類を並べて居た。是をナポレオンの『旅行圖書庫』と云ふ。彼は讀み了れば忽ち是を馬車の窓より投げ棄てて去つた。それゆゑナポレオンの馬車の通行した後を見ると、書籍や文書、手紙など、多くの反古紙が落ちて居た。
世人、稍もすればナポレオンの立身の旭の登るが如くなりしを見て、僥倖かの樣に考ふるものあれども、彼が青年時代よりして如何に苦學したかについては、深く研究する者が少い樣である。彼や眞に力學の人、努力の人であつて、文武兩道の偉人である。良將又は政治家としての名聲及び技倆に比すれば、文學界に於けるナポレオンは小なるに相違なけれども、余は、米人インガーソルの言に贊成を表するのである。曰く。
「ナポレオンにして軍人にあらず、政治家にあらずして、著述なり或は雄辯なり、或は數學なり或は其他の學術に志したらんには、眞に世界有數の學者となつて居つたに相違ないのである。」云々と。（談話筆記校閲濟）

ヴィクトーリア女皇

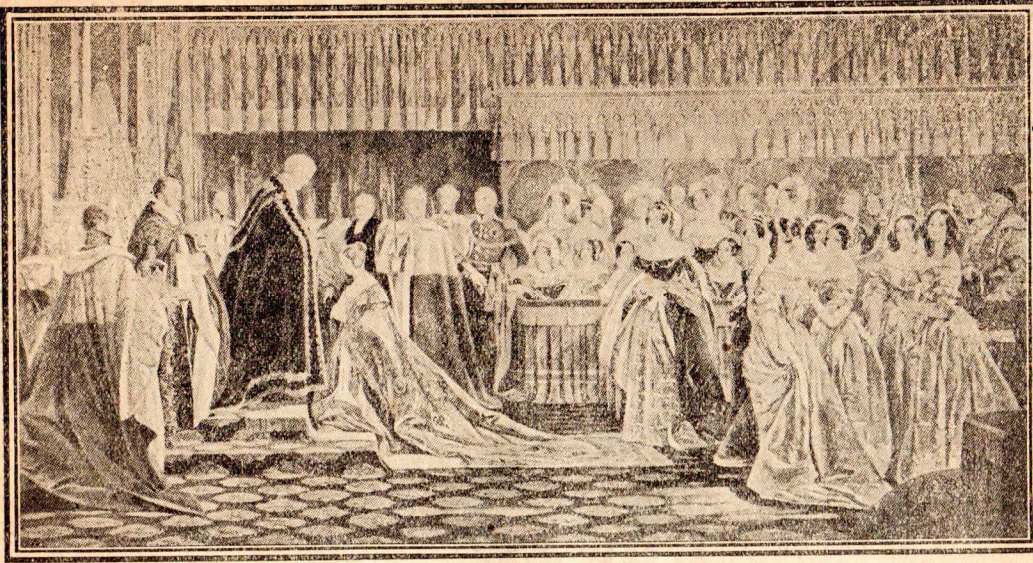
外國語學校長　村上直次郎

一　女皇の御一代

イギリスのヴィクトーリア女皇はジョージ三世の第四皇子ケント公エドワード親王と、妃ヴィクトーリア・メーリー・ルイーサとの間の唯一人の王女であつて、一八一九年五月二十四日ケンシントン宮に於て御誕生あらせられた。ロシア皇帝アレクサンドル二世が名親に立たれたのでその名と・母の妃殿下の御名とを取つて、アレキサンドリーナ・ヴィクトーリアと命名せられた。父親王の兄に當るジョージ四世、ウィリヤム四世共に繼嗣なく、父親王は一八二〇年一月に又その兄のヨーク公は一八二七年に薨去せられたので一八三〇年ウィリヤム四世の即位と共に女皇は皇嗣と定められ、一八三七年六月二十日ウィリヤム四世崩御の後を承けてウィンゾル宮に即位せられることとなつたのである。かくて即位の翌年、六月二十八日戴冠式を擧げ、一八三九年二月十日には女王の從兄で豫て婚約のあつたサクス・コーブルク公爵家のアルベルトと大婚の式を擧げさせられた。その後一八四〇年十一月にはヴィクトーリア内親王、翌年十一月にはアルベルト・エドワード親王、即ち先帝エドワード七世を生ませられ次いで七人の皇子を生ませられ、内庭の御生活は幸福を極めさせられたが一八六一年皇婿アルベルト親王薨去せられて後は女皇は憂愁の餘り引込勝にのみ暮らさせられた。然し乍ら御身體は事の外御壯健で、一八八七年六月二十日には御即位五十年祝賀の大典を擧げさせられ、次で一八九六年六月二十日には御即位六十年の祝典が盛んに擧行せられた。かくて國民は君の類稀れなる御長壽を祝し、なほ千萬年の御壽福を祈つたのであるが、一九〇四年の秋のころからとかく御健康勝れさせられず、遂に翌年一月十八日御病氣の旨公にせられ同月二十二日擧國哀悼の裡に崩御せられた。寶算八十二。在位六十四年、英國の歷史始まつて以來の長い御治世であつて、世界にもその類例は希れである。

若きヴィクトーリア女皇
デメーソン作自畫石版

女王は御誕生後僅に九ケ月にして父親王を亡はせられ、母の妃殿下の御監督の下にコーブルグのミス・レーツェンを主任として嚴重なる教育を受けさせられた。皇室の御不幸續から皇位を繼がせらるべきことが略明になつても萬一怠慢惰驕の心を生ぜさせられてはとの懸念から之を秘し親王家の王女として御教育に心を盡し一八三〇年彌々皇儲と定められた後、御教育主任より始めて皇室譜を御覽に入れ皇位御繼承の日あるべきことを言上したが女皇は責任の重大なることを思ひ、一層善良ならんことを務むべしと御答あらせられたといふことである。
御即位の時に女皇は御齡僅に十九歲で然も女性であらせら

ヴィクトーリア女皇の戴冠式（レスリー畫）

れたので國民一般に御治世の安泰ならんことを心懸け當時内閣の總理たりしメルボールン卿善く補導の任を盡くし、女皇も自ら熱心に政務を御覽あらせられたが、皇婿を迎へさせられた後はアルベルト親王が善く女皇を輔け然も漫りに政治に干渉せず、英國の政體に最も適したる方であつたので歐洲諸國に於て當時屢大變革あり、英國に於ても數代の惡政の爲め人心動もすれば王室を離れんとしたる時代なりしに拘はらず善く民心を收め内政を擧げ、外國關係に於ても女皇の御人格と親族的御關係とにより て外交家以上の好成績を擧げさせられた。而して御治世の末年に至つては内外擧つて神の如く尊崇愛敬したことは皆人の知つてゐる所である。

右の如くヴィクトーリア女皇の永い御治世の間に英國は内政外交共に大に擧り國運は空前の大發展を遂げた。女皇御一代の歷史はこれを飾る幾多の優れたる政治家、軍人、藝術家等の功業と共に、複雜變幻を極めて仲々一夕の談の盡すところではないが、こゝに特に述べたいのは第一に領土の膨張である。

二　領土の膨張

カナダは御即位の初年に叛亂があつたが、間もなく鎭定せられ先づ上下カナダを併せ、次いでノバスコチア、ニユー・ブランスウィッツまで英領に歸し、印度は多年東印度會社の管轄であつたが一八五八年以後女皇の治下に移され、一八七六年には女皇始めて印度女帝の稱號を取らせられた。印度と同時に海峽植民地も政府の領有に歸した。一八八二年にはエジプトに保護政治を敷き一八九八年には更にスダン地方まで北アフリカの英領を擴めた。南アフリカに於いては二回の戰役を經て、一九〇〇年トランスバール及びオレンヂ河植民地を併合した。なほ一八九五年にはマレー聯邦を保護の下に置き、濠洲もニユージーランドも亦その治世の間に植民地として異常の發達をなし、又支那に於ては、阿片戰爭以來一八四二年の南京條約、一八五八年の天津條約、一八六〇年の北京條約を經て英國の商權を確立し、香港の割讓を得て此所に通商の根據地を置いた。

かくの如くして、ヴィクトーリア女皇御一代の間に、英國は世界陸地の四分一、世界の人口の五分一をその領内に收むるに至つた。而して英本國及び海外の植民地が今日の如く帝國主義を採り一大帝國を構成するに至つたのは全く女皇の御代からの事である。これに伴つて國富の增加は實に空前であつて、御即位の始め貧苦に艱んだ英國民は世界の最富者の間に列するに至つたのである。

三　文明の進步

次に御一代に於て英國が世界の文明に貢獻したことの多いことを述べたいと思ふ。

蒸汽船の發明は一八一五年の事で以來歐米に於て沿岸航海には之を用ひたのであるが、大洋航海に蒸汽船を用ふるに至つたのは一八三八年イギリスが始めて大西洋を横つて汽船をニユーヨルクに航海せしめたのに始まるのである。

是より先帆前船に蒸汽を加へ用ひて大洋を航海したものはあるが蒸汽力のみを以てしたのは一八三八年にサイリアス號がアイルランドのコルクを發し十七日目にニユーヨルクに着いたのとグレート・ウェスターン號がイングランドのブリストルを發し十五日目にニユーヨルクに着いたのが最初であつて、船が十數日の航海に足る丈の燃料を貯藏し蒸汽力のみによつて大洋を航海し得ることを實證して疑なからしめたのである。これからキユーナルド會社を始めとし英米間の汽船航路を開くものが、續々出來、引いて今日の航海の便宜を得るに至つた。

晩年のヴィクトーリア女皇

鐵道の敷設は英米兩國に於て前代からの事であるが何れも短距離であつて女皇の御世に入つて始めてリバープールハバーミンガム、ロンドン。バーミンガム間の全線開通し漸く長區域の鐵道を見るに至つた。郵便物の輸送を鐵道によつてすることになつたのも一八三八年が最初であつた。又一八四八年六月女皇がウィンゾル宮からロンドンまでの御旅行に、汽

車に乘御あらせられたのが最初で大に安樂だとの勅語があり、て其後、各地の旅行に、汽車を用ひさせらるゝに至つた。これが一の動機となつて鐵道が次第に普及するやうになつた。

郵便制度に付いても女皇の御世に大改革が出來た、謂ゆるペニー・ポストの制で今日の郵便制度の基となつたのである。その頃英國に於ては郵書の重量と配達距離の遠近とによりて料金の多少を定めた計でなく一枚に認めた書狀と二枚に認めたものとは料金を異にしたので之を檢する爲め往々書狀を開封することがあつた。料金はロンドン市內に配達するものが一ペニーであると遠くなれば一シリング四ペニーにも上り頗る高いものであつた。そこで貧乏なものは容易に音信を通ずることが出來ず兄妹相約して異變なき間は白紙の書狀を送り宛名人は之を檢して白紙なりと認むれば貧窮をいひ立てゝ書狀を受取らず無料で音信を通ずる工夫をするものがあるに至つたといふことである。又商人其他書狀の開封を厭ふものは私に低價な配達機關を設け、政府の郵便に依ることを避ける工夫をした、一方政府關係者議員等は自分の書狀は勿論、何人のでも名を記したものは無料で配達して貰ふことが出來て時の郵便制度は甚だ不都合なものであつた。

ローランド・ヒルはこの制度を改善することに心を用ひ一八三七年始めて其意見を發表した、議會は委員を設けて之を調査し實行し得べきものと報告した、又世人殊に商業界から非常の贊成を得た。そこで政府は一八三九年七月に至つて郵書の一定重量に對し料金を均一に一ペニーと定め議員の免稅を廢し公用郵便は嚴重なる取締を設けて無料とする案を議會に提出した。郵便官吏は概して此案を以て收入を減ずるものとして之に反對し議院に於ても有力なる反對者が尠くなかつたが收入の缺損は國庫より補ふことゝして試に此制度を行ふことゝなつて一八四〇年一月より之を實施した。然るに其年の郵書の數は世間の豫期に反して前年の倍數を超過したので政府も收入の缺損を生ずることなしと認めて之を永久に行ふことゝした。郵稅を先拂にするには始めは封皮に印を押したるものを販賣したが間もなく印紙を貼附することゝなつた、この改良郵便制度は世界各國に用ひられ今日多大の便益を與へてゐることはいふまでもないことである。

電信機械が發明せられ英國に於てはフィートストーン米國に於てはモールスが特許を得たのは何れも女皇御即位の年の事であつた。それから愈々通信の用に供せられ英國內に電信

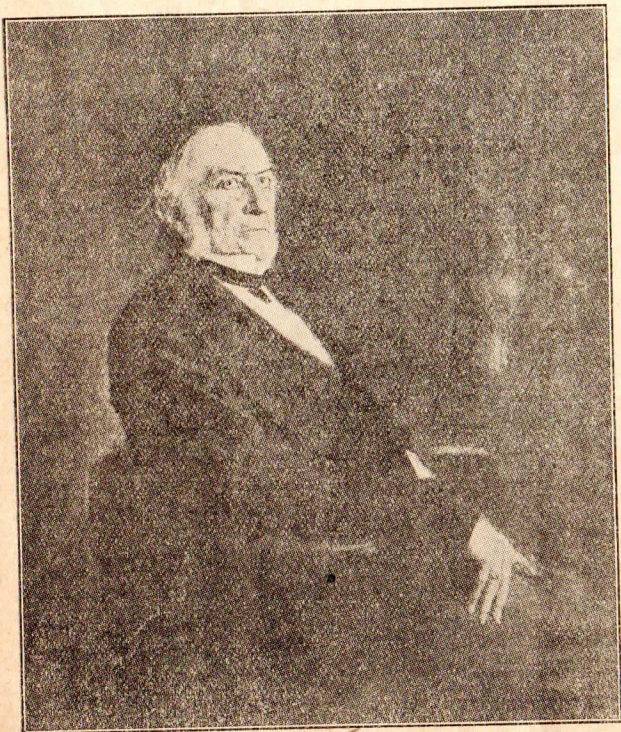
セシル　ローヅ
(南阿の開拓者)
ヴイクトーリア女皇朝の代表的海外植民家

が通じ一八五一年には英佛の間に海底電信が設けられ、一八五八年に大西洋海底電信が出來、兩國間の通信を速にした。此電線には間もなく故障が生じたが一八六六年七月に至つて終に完全なものが出來た。今日世界の各國を結び付けて一隅に起つた事を直に各地を知らしむることを得るに至らしめた電信も女皇の御代に英國に於て始めて出來たのである。

最後に特筆すべきことは第一回の萬國博覽會の開設である。萬國博覽會開設の趣意は、從來國と國との間に戰爭が絕えず人生の慘事之に過ぎなかつたが、これからは忌はしい戰爭は止めて、世界各國の人民相親和し專ら商業の競爭を試みようといふのであつた。これは皇婿アルベルト親王の發意であつて、自らその總裁とならせられ、當時紛々たりし世論を排し、一八五一年五月一日女皇親しくハイド・パークの會場に臨幸世界に始めての萬國大博覽會を開かせられた。會場の建築はジョゼフ・パクストンの創意に成つたもので溫室より思ひ付いた鐵骨硝子張であつた。今日クリスタル・パレースと稱しロンドンの郊外に在るものは即ち之を移したものであるが當時この新案の建築を觀、各地から出品せられた珍器の產物や、各國の奇異なる風俗を見んとして博覽會に集つたものは非常の數で、會期百三十八日間一日の平均觀覽人數四萬三千五百餘人、從つて收入も豫想外の多額に上り純益金十五萬ポンドを以てサウス・ケンシントン博物館を設立したといふことである。その後之に倣ひ各國に於て萬國博覽會を開くに至り最初の目的たりし萬國の平和を來すことは出來なかつたがこれにより世界の工業及美術の大なる進步を促したことは明である。

四　日英兩國の親善

德川幕府は米艦の渡來に促されて鎖國の政策を捨て、再び外國と交通を開くに至り安政五年に英國とも和親通商の條約を結んだ。これは女皇即位の第二十二年の事であつて爾來兩國の間は益親しくなり、終にエドワード七世の御代に同盟を結び東洋平和の保證をなすに立ち至つたが、その因は女皇の御治世の間に成つたことは忘れてはならぬ。

ヴイクトーリア女皇朝の代表的政治家グラツドストーン
(レンバツハ筆)

ウィルヘルム大帝

慶應義塾大學教授　田中萃一郎

明君賢主の輩出

『ホーヘンツォーレルン家ほど、眞に君主政治の精神を體し得た大帝王を輩出せる王室は、外にはあるまいと思ふ。質素にして豪奢を厭ひ、勤勉にして謙德に富み、正義を愛するも而も徒に高遠に馳せず、これ即ちプロイセンの國家に特徴を與へた大帝王の根本的性格で、フリードリヒ・ウィルヘルム第一世でも、フリードリヒ第二世でも、フリードリヒ・ウィルヘルム第三世でも、將た又ウィルヘルム第一世でも、その高德の永く後世子孫に記憶さるゝのは、全く國民赤子の爲にその名譽威嚴を保ちその勢力幸福を增さんとして宸襟を惱まさせられたが爲である』と、曾てパウルゼン教授も論じたことがあるが、プロイセン王の祿を食んで居つたものが、かく論ずるのは當然のことである。往古羅馬帝國にはマルクス・アウレリウス帝が出で、第十八世紀以來は各國の所謂聰明なる帝王が出でゝ君臨したが、公平に云ふても、プロイセンの如く、東洋流の明君賢主を數ば戴いた國家は、西歐に於ては外にはないのである。實にプロイセン程明かにその國家の發達の君主の力によれることを示し得るものはない、プロイセンは抑もその君主によりて創設せられたもので、且又歷代君主の偉大なる人格は深く國家組織に印象を與へて居る。偉大なる人格とは何であるかと云ふに、誠意誠心である。但し如何に熱烈であつても、社會と沒交涉な誠意誠心は、偶ま以て之が冷罵を買ひ反撥を招くのみである。國家組織に印象を與へんなどゝは思ひもよらぬことである。それは兎に角歷代の帝王が國家組織の上に歲月の容易に消磨し難き印象を與へたと云ふは、國民の名譽ではなくて王室のほこりであることは云ふ迄もない。而してこのプロイセンの歷代の帝王のうちで、最も偉大な人格はフリードリヒ第二世と、ウィルヘルム第一世とであるが、ウィルヘルム第一世は生理的生命に於て彼に長ずること十七年なるのみならず、歷史的事業に於ても遙かに前世紀の大王を凌いで居る。ハルツ山地の南キフホイザーの岡に於ける雄大なるウィルヘルム第一世の記念碑を仰視せば、何人もフリードリヒ・バルバロッサの神聖羅馬帝國は再興せられたり。太古の應神王は再現せりとの感を起さずんばやまないのである。

ウイルヘルム大帝と家系

優種學が世間の注意を惹くやうになつた今日、先づウィルヘルム第一世の家系から說き起さねばならぬ次第であるが、遠き昔は措いて問はず。フリードリヒ大王に嗣子なくフリードリヒ・ウィルヘルム第一世の孫で、大王の甥に當るフリードリヒ・ウィルヘルム第二世が大統を嗣いだが、第十八世紀の末、千七百九十七年にこの世を去られ、皇太子フリードリヒ・ウィルヘルム第三世がプロイセン王となられた。この第三世が即ちウルヘルム第一世の父君で、母君は獨逸聯邦のメクレンブルヒから來歸せられた皇后ルイゼである。トライチケがその傑作獨逸史に於て口を極めて讃辭を呈したのは過褒であるかも知れぬが、フリードリヒ・ウィルヘルム第三世は兎に角スタイン・シャルンホルスト等を信任してプロイセンの國家組織の上に一大改革を試みた明君であるルイゼ皇后に至りては三十四歲と云ふ人生の春去りやらぬ年を以てこの世を去つた爲でもあらうが、美にして且賢、國民の爲を思ふては尊貴の身を以てナポーレオンに哀訴歎願することをさへ辭せなんだので、蘇格蘭人のマリー女王に對するが如く今なほプロイセン人から追慕されて居る。ウィルヘルム第一世はこの良配偶の間に出來た二男であつて、その誕生したのは實に父君がプロイセン王となられた年の三月二十二日のことであつた。但し父君の踐祚はその年の十一月のことであつたから、ウィルヘルム第一世は伯林の東宮御所で誕生せられたのであつた。

ウイルヘルム一世（ウヰンテルハルテル筆）

その青年時代

當時恰かも偉大なるコルシカ島人が西歐の天地を震憾せしめつゝあつた際な

ので小王子ウイルヘルムは忽ちにして人生の辛酸を嘗め盡さることゝなつた。即ちエーナ幷にアウエルステットの一戰を以て、精鋭無比を以て人も許し親らも誇つて居つた、フリードリヒ大王遺愛の軍隊はナポーレオンの馬蹄の下に蹂躙せられ、千八百六年の十月には少王子ウイルヘルムは父君に從つてケーニヒスベルヒに出奔し、翌年一月には更に北の方メーメルの僻邑に奔竄し、八、九の兩年は再びケーニヒスベルヒに異郷の月を眺め、十三歳の時に漸く伯林の宮城に還御せられた。悲しいとか口惜しいとか云ふ印象は、何時までも殘るものであるが、當時プロイセンの名譽と存在とが危殆に瀕したことは、幼な心にも如何にも殘念に思はれたことであらう。況して少王子ウイルヘルムは千八百七年の一月一日に陸軍の軍籍に入り、三月二十二日にメーメルで親衛中隊附の見習士官となり、クリスマスに尉官となつたから、國事を雲煙過眼視することは出來なかつたらうと思はるゝ、尤もなは幼少のことゝて隊附勤務はケーニヒスベルヒに歸つてから始められた。かくてウイルヘルム王子は陸軍軍人としての生涯を開拓することゝなり、千八百十三年列國連合して佛國に向ふや、その十一月を以て大尉として從軍し、翌千八百十四年一月一日マンハイムに於てラインを渡江するに方りて、始めて實戰を目撃し、二十七日バールシユーローブに於て始めて兵火の洗禮を受けた。父君と肩を幷べて鐵丸雨下の地に立つたのでその日の幸福なりしことは之を筆紙に盡す能はずとは日記に記された感想である。時に年十七。

ナポーレオンが再擧を企てた時、王子ウイルヘルムは再び出征して、再び敵國の首府に乘り込んだが、爾來二十有五年間獨逸、就中プロイセンの政界は全く沈み果てて仕舞つた。一旦公約せられた憲法は容易に發布せられず、外交は勿論內治も亦メッテルニヒに左右せられ、人民の自由も制度の改革もすべて抑制せられて仕舞つた。當時政界に於て俄然としてその首を擡げたのは、所謂エルベ河以東の貴族で、當年の新思潮はこの貴族の主張に鞏固な基礎を與へたのである。この新思潮とは國家社會に關する有機的歷史的學說で、啓蒙主義に反抗して起り、革命思想に對抗して現はれ、新世紀の獨逸に特徵を與へた主想運動の餘瀝である。かくてプロイセンに於ては全國の議員を招集して議會を開設するの計畫を中止し、八州に於て各々中古の階級的會議を設けて以て一時を糊塗したのである。第三階級は痛く之に對して不滿を感ぜしも、奮起して頹勢を挽回するの實力なく、唯官僚の在るありて、能く反動の狂瀾を支へて、新國家を擁護し得たのである。スタイン、ハルデンベルヒの改革事業が能くその命脈を維持し得たのは全く官僚の功蹟で、フリードリヒ・ウイルヘルム第三世の晩年二十有五年間を以て舊プロイセン官僚の盛時となすのは實に之が爲である。而して軍隊は勿論官僚と共にプロイセンの統一實力の中心點であつて、國王も絕えず之を愛護して措かなんだのである。王子ウイルヘルムはこの軍隊に勤務して千八百二十五年には近衛第三軍團長に昇進し、その間或は騎兵操典編纂委員長となり、或は步兵操典改正委員長となり、軍事を以て生命とした。而しこの父君の晩年二十五年間に於て、王子ウイルヘルムの生涯は自から前後の二期に分れ、千八百二十年代の中葉を劃して、政治上の意見に於ても、一身上の性格に於ても、自から一大變化を認め得るのである。而して驚く勿れ、この一大變化には青春の血を湧かしむる戀愛關係が、一大楔子を爲して居るのである。

戀物語

王子ウイルヘルムの意中の人はホーヘンツオーレルン家のルイゼ、フリーデリケ公主と、アントン・ラーヂヴイル公との間に出來たエリザ姬であつた。アントン公は久しくポーゼン州の太守を勤めその伯林の邸は交際社會の中心で、ウイルヘルム王子は幼少の時からエリザ姬と往來して居つたが、此は千八百二十年王子二十三歳の時、姬は鬼も十七と云ふ妙齡に達したので、相思の情大に動き始めて煩悶を覺えたのである。併しラーヂヴイル公爵家は元來波蘭の名家なので、兎てもこの戀は遂げられぬものと斷念せんとすればする程、思ひは益々慕るので、物や思ふと父君の詰問を受くるに及んだ。かくて事遂に表面の沙汰となつた處、宮內省の審查の結果、自分が釣り合はぬからこの緣談は勅裁を仰ぐ譯に往かぬと決議せられた。ウイルヘルム王子の失望は如何計りであつたらうか、早速和蘭に旅行して見たが水郷の風物も懊惱を忘れしむるに足らず失戀の極元氣も全く銷沈して仕舞つた。處が千八百二十四年の秋に宮內大臣の肝煎で、露帝アレキサンデル第一世にエリザ姬を養女とせられ度しと懇願したが、露國帝室の事情あつて許されず、露帝からは墺國の皇帝に依賴られよとの口添えがあつたが、之れはホーヘンツオーレルン家の立場から到底實行が出來ず、かくて百計盡きて身體全く究まつた時に、ホーヘンツオーレルン家の公子アウグストが、然らばエリザ姬を養女とす可しと言ひ出され、ラーヂヴイル家も之に承諾を與へられた。そこでウイルヘルム王子は久し振でポーゼンに意中の人を訪ふたが一旦婚約に同意せられた父君の意向は忽ちにして手を飜すが如くに變り、千八百二十六年の二月にウイルヘルム王子は再び養女の件を嘆願せられたが、大臣の多數は養子緣組は以て血統を改むる能はずと主張し、この年六月二十二日フリードリヒ・ウイルヘルム第三世は斷然王子の要求を却下せられた。ウイルヘルムは深く尊貴の身分を思ふて、斷然その六年越の戀愛の絆を絕ち、千八百二十九年にザクセン・ロイマールのアウグスタ姬と結婚せられた。而して薄命の佳人エリザ姬は咯血が原因で間もなく果敢なき一生を終られた。プロイセンと波蘭との關係はかくて永久に疎隔することゝなつたのである。

失戀彼の性格を玉成す

併しウィルヘルム王子はこの苦き經驗によりてその性格を玉成せられたのである。全然東洋的なる個人の上に加へられたる家庭の壓迫は、能く感情的なる青年の奔放なる熱情を抑へ以て、王子ウィルヘルムをして他年一日、國家の第一の從僕たることを得しめたのである。而して性格も政見も之によりて全く一變し王子ウィルヘルムは遂に成年の域に達したのである。ウィルヘルムは居常干戈に訴へてプロイセンの國威を宣揚せんことをのみ、維れ心として居つたとは云ふものゝ、その千八百二十四年の三月に外交の不振を痛嘆して『プロイセンの國民にして若し果して千八百十三年の往時にありて、十一年後の今日に於て當時一旦獲得したりし名譽と威望とを併せて失ひ唯その記憶を留むるのみなることを知りしならんには、何人も當時身命を賭して奮闘せざりしならん』と評せしは多情多感なりし當年の面目を赤裸々に露はせるものである。然るに二十年代の中葉より、青年的反抗の精神は漸く衰へ、革新的奮闘の意氣も次第に昂らず、思想は老熟に近づき政治上に於ては著るしく露國の感化を受けて實際的となり、正統主義に傾くやうになつた。而してウィルヘルムはプロイセンをして獨立の地位を列强間に得しめ、列强の一たらしめんことを、居常心に誓つて居つた。然るに三十年代より中等社會の實力は漸く加はり、その反動政策攻擊の聲は年と共に激烈となつて來た。ウィルヘルムの政見は保守的に傾いて來たが、獨逸の輿論は益々急進主義に向つて動いて往つた。かくて千八百四十年フリードリヒ・ウィルヘルム第三世の崩御さるゝや、政治史家の所謂自由主義運動の時代に入つたのである。この時代に於て古プロイセン氣質のウィルヘルムが獨逸全國に漲れる新思潮を多少たりとも了解し得たのは、妃アウグスタの感化でウィルヘルムとアウグスタとの結婚は聊か東洋的ではあつたが決して無意味のものではなかつた。

皇太弟となる・自由主義の旺盛

千八百四十年にプロイセン王となられた王子ウィルヘルムの兄君なる、フリードリヒ・ウィルヘルム第四世には、世嗣がなかつたので、王子ウィルヘルムは當然皇太弟となられ、且內

閣會議、參事院の議長に任ぜられた。かくて新に政治の方面に携はることゝなつたけれど、皇太弟の軍人氣質は依然として舊の如く、親からベッケルのラインの歌を寫して、開戰の曉を夢むることを樂とした。當時の佛蘭西の挑戰的態度は切實に獨逸人をして國民的統一の必要を感ぜしめたが、この思想は漸く代議政體要求の運動と融合して來て、輿論は統一と自由とを併せて主張した。鐵道の敷設、關稅同盟の成立新工業の勃興等は相俟て、中產社會の地位を高め、自由主義は侮る可からざる一大勢力となつたのである。この新時局に對して彼獨逸中古の盛時に憧憬し主想的獨斷說を懷抱せる國王フリードリヒ・ウイルヘルム第四世は、中古の制度を模範とせる階級的議會を設置せんとした。自由主義の劃一にして統一せられたる議會はその欲せざる所にして、州會と門閥とを基礎とせる制度を制定せんとした。皇太弟は實際家で軍人であつたから、保守的思想を以て數ば改革に焦慮せる國王の計畫に反對し、國王が貴族法を發布して、英國の上院制度を輸入せんとせるを抑止し、大臣の更迭にさへ抗議を挿んだことがあつた。皇太弟は十年一日の如く、プロイセンの世界的地位を高上せんことを欲し、隨て王權の獨立を重んじ、一度王權に制限を加へんか、プロイセンは復た南方及び東方の隣强に對してその地步を保つこと能はざる可しと考へ、千八百四十六年三月新制度制定の議に參與するや、議長として常に少數の反對論者と行動を一にし、殊に聯合州會の上奏權を攻擊し、そのプロイセンの保守的政策を妨たげ、東方の强國との提携を妨げ、軍隊の基礎を傷けんことを痛論し、國王の提案は憲法制定を促す所以にして王權は玆に粉碎さる可しとさへ絕叫した。かくてその聯合州會召集の詔勅に副署することを拒み、千八百四十七年の二月一日に遂々國王の意旨を奉行することゝなつた。併しこの新法律の發布と共に舊プロイセンは葬られたりと痛嘆し、舊プロイセンの榮譽を博せるが如く新プロイセンも亦尊嚴を保たんことを矚望すとて、國家の前途に對して不安の念を抱いた、蓋し皇太弟は口舌の戰場を以て能くなすなしと認めて居つたのである。

佛國大革命の影響・皇太弟の亡命

かくの如、時代の新思想に對しては皇太弟ウィルヘルムは、全然反對の地位に立つて居つたが、時代は急轉直下して、千八百四十八年二月二十四日の巴里革命は遂に獨逸の天地に澎湃たる洪波を湧起せしめずんば止まなんだ。三月十七日にはプロイセン政府も遂に出版の自由を許し、翌日國王は詔勅を發布して議會を召集し憲法を制定せんことを公約し、皇太弟も亦之に副署した。然れども國王が次で新任の大臣等と諮りて、伯林駐屯の軍隊を撤し全然革命派に屈伏したことに付ては、皇太弟は毫も協議に與らず、廟議の定まれるを聞て帶劍を卓上に抛ち、自分は最早之を腰にするの名譽を保つ能はずと奮然として叫び、晩年に及んで當時を追懷して三月十九日は舊プロイセン埋葬の日であつたと評したことがある。國王の注意もあつたので皇太弟は革命派の銳鋒を避けて即日伯林

を出奔し數日の後妃殿下のみはポツダムのバーベルスベルヒ離宮に避難し、皇太弟は單身ハムブルヒを經て海外に走り、倫敦に亡命せられた。抑も四十八年の革命は獨逸に於ては佛蘭西とは異りて中等社會の革命で、爾來政治上に於ける有產階級の地位は動かし難きものとなつた、も一つこの革命の結果は國民的統一思想の成熟を促したことである。皇太弟の英國に赴かれたのは寔に好都合で、その既成の事實を承認す可しとの決心を起されたのは、實に英國に於てヴイクトーリア女王幷に皇婿アルバートに親炙せられたが爲で、自由主義に傾ける皇婿の感化は、皇太弟をして立憲政體を危險視するの迷想を脫却せしめた。獨逸統一問題に付てもプロイセンの割據を主眼とせる舊思想を脫却して、統一運動に贊成を表するやうになつた、即ちダールマン等がフランクフルトに於て、墺太利の非獨逸地方を除外して獨逸統一の事業を大成せんとするや、國王はハプスブルヒ家を崇敬して之に同意を表することを憚つたが、皇太弟はダールマンの計畫を推奬せられた。英國に滯留さるゝこと約二ヶ月にして、國王も大臣も歸國を望まれたので、皇太弟はブリュッセルから國王に公開狀を呈し、國王と人民との間に協定されたる憲法に同意す可しとの意見を發表せられた。然るにプロイセンの議會は徒に過激の言論を弄して成績の見る可きものなく、國王の左右にはゲルラハ將軍を中心としてユンカーの利益を擁護せんとせる朋黨起り、ブランデンブルヒの新內閣は議會を解散して欽定憲法を發布した。これ實に皇太弟の滿足せられた處であつた。而して獨逸問題に付てはプロイセンを中心として之を解決せんとの意見を定め。『獨逸兵制論』を起稿し　千八百四十九年一月匿名を以て之を世に問はれた。これ軍隊に與るにあらざれば國威を發揚する能はずとの確乎たる信念を有せられたが爲である。隨てフランクフルト議會の制定せる憲法を評して、これ共和政治の準備に外ならずとなし、當時人に書を寄せて獨逸を支配せんと欲するものは親から之を征服せざる可からず、ガーゲルンの流義にては到底之に當る能はず、統一の時機既に到來せるや否やは唯神のみぞ知る。而もプロイセンが獨逸の牛耳を握る可き宿命を有することは、我國の歷史の示せる所、但しその時機と方法との問題存するのみ』と、その胸中の秘密を洩されて居る。

攝政より親政

皇太弟は當時三軍に將として兵馬の巷に馳驅せんことを渴望せられて居つたが、千八百四十九年六月八日突然出征の命令に接した。是はフランクフルト議會の殘黨中共和主義を懷抱せる急進論者のバルツ、バーデン地方に於て叛亂を企てた爲で、皇太弟は軍司令官として忽ちに之を平定し、次でライン州幷にヴエストファーレンの都督としてコブレンツに駐營せられた。然るに曩にフランクフルト議會の捧呈した獨逸帝冠を却下されたるフリードリヒ・ウイルヘルム第四世が、翌年墺太利と妥協してプロイセンを盟主せる小獨逸主義の統一を實行せんと計畫し、その極秦楚し間に戰端を開かんとするや、

皇太弟も伯林の御前會議に列席し、國王と共に熱心動員令の發布を主張したが、首相ブランデルブルヒはゲルラハ將軍と之に反對し、遂にオルミッツの會見に於てプロイセンは徹頭徹尾墺國の要求に屈伏した。爾來皇太弟は自分は伯林向でないと唱へてコブレンツに英氣を養ひ、ゲルラハ將軍等の一派が着々として反動政策を執れるを見て、その迂愚を指笑して居つた。隨てコブレンツの御所は伯林に對して隱然一敵國の觀を爲し、伯林に於ては猜疑の眼を以て之を注意して居つた。但し五十一年より五十七年に及べる反動時代に於て皇太弟が直接に關係したのは陸軍問題であつて、千八百五十四年步兵統監に擧げられ、每年東西兩方面に於て軍隊を檢閱し、機會ある每に三年兵役制度の復舊を主張し、千八百五十六年に遂にその宿志を果すことが出來た。次で翌五十七年一月一日には陸軍入籍のヨーベル祝典を擧行した。然るにこの年の七月國王の精神に異狀を呈し、十月の初には到底本復の望が絕えたので、國政の責任は遂に皇太弟の双肩に懸つて來た。東洋流に云へば還曆の年になつてウイルヘルムは初めて大政を總攬せられることになつたのであるが、その前途には史上稀に見るの偉大なる功業が橫つて居つたのである。

ウイルヘルムは千八百五十七年十月二十三日には、三箇月間國王の代理を命せられたのみであつて當初は期限の來る每に更に三箇月宛之を延長し、翌年十月七日に至つて初めて攝政に任命せられた。但し爾來三十年間ウイルヘルムはプロイセンに君臨し而してその偉業は輔弼の大臣の獻替に俟つこと多かつたが、この大政總攬の初年に於ては、殆んど親政の實を行ふた。ヴイクトーリア女王も『曾てウイルヘルムは沈着で公明正大であるから兄君よりは斷乎たるの政治を行ふであらう』と評されたことがあるが、實にその通りであつた。プロイセンをして覇を稱せしむるが爲、憲法を擁護するの必要あることは疾に看破せられ、攝政となれる後間もなく反動時代の內閣を斥けて、自由主義者を擧げて新內閣を組織せしめた。而も全國を擧てこの自由主義の內閣を歡迎し、新時代は來れりと稱して政界の前途に一道の光明を認めんとしたが豈に圖らんや、攝政は外交と軍事とは親から之を裁決せんと欲し、五十八年十一月八日親から新內閣の政綱を起草して、王權の天佑に基けることを主張し、左翼の要求は今後一切之を排斥す可しと聲明した。その後千八百六十一年一月二日國王遂に崩御し、同年十月ウイルヘルムはケーニヒスベルヒに於て即位の大典を擧行されたが、その十七日召集せるプロイセン議會の議員に向て『プロイセンの君主は王冠を上帝より受く』と告げ、翌日親ら祭壇の上より王冠を取りて之を戴き以て王權の神授に由れるものなることを表示せんとした。かゝる思想は果して政界に波瀾を湧起せずして止むであらうか、是は下に解答せらるゝ通であるが、兎に角ウイルヘルムは攝政となりしその當時より親ら國家の針路を定めんとし、舵機を握て政海に乘り出したのである。

關稅同盟と兵制統一

處が千八百五十九年に大問題が攝政ウイルヘルムの前に提起せられた。これはサルヂニアがナポーレオン第三世の援兵を得て墺太利を破り、伊太利統一の事業に於て着々としてその地步を占め來れるが爲で、このアルプス山陽に於ける民族的運動の成功は、山陰の獨逸人を鼓舞し刺激し、プロイセンの內外に亘りて有力なる政治家は國民同盟を組織し、プロイセンを盟主と戴きて獨逸統一の目的を達せんと圖つた。當時攝政ウイルヘルムは未だ墺普の兩立不可能なりとの意見に贊同せず、獨逸各國の兵制を改革して悉くプロイセンに倣ひて三年服役の制を採用せしめ且銃器被服等の統一を圖り、一朝事ある時は墺普提携して統率の任に當る可しとの計畫を立てたが、この計畫は他の聯邦諸國の同意を得ることは出來なんだ。その後千八百六十一年夏既に國王となれるウイルヘルム第一世は、バーデンに舊知ビスマークと會見して、獨逸の統一は關稅同盟と兵制統一とを根柢となさねばならぬことを悟り、バーデンよりオステントに赴きてバーデン國の大臣ロツゲンバハは男より墺太利を排斥してプロイセンを中央政府となし議會を設けて獨逸を統一す可しとの案を聞きて心稍や動き、この提案を駁撃せるシユライニツを免職して、ベルンストルフ伯を外相に擧げた。次で墺太利が強てプロイセンの牛耳を執れる關稅同盟に加盟せんことを要求し來るに及び、ウイルヘルム第一世は次第に墺普兩國の到底兩立し難きことを看破し、同年十月ザアクセンの宰相ボイスト男が獨逸聯邦改革案を提出するや、ウイルヘルム第一世は前年聯邦兵制の改革を唱へたる時と全くその態度を異にし、聯邦の權限を擴張するも無益である、獨逸問題の解決は唯統一の一方法あるのみとの所信を敢て公表するに至つた。

ウヰルヘルム一世の即位
——メンツエル筆——
帝は祭壇の前に自ら王冠を頂き・右手に王笏左手に帝劍を振る・王の右手に立つは皇太子即ち現帝也

兵制改革問題

而も當時ウイルヘルム第一世は未だ外交の方面に於ては適所に適才を得ることが出來なんだが、ウイルヘルムの發見に係るモルトケは五十八年に既に參謀總長に擧げられ、ローンも兵制問題に關する意見書の起草を命せられ、軍事の方面に於ては稀覯の人才を羅致することを得た。而してウイルヘル

ムはこの人才の輔翼を得て是より先既に多年の宿志たる兵制改革を實行せんと試みたのである。抑も陸軍省が初めて兵制改革問題の調査を命ぜられたのは五十七年十月のことで、翌年二月陸軍省はその調査の結果を奉答した。この奉答文は有名なる兵學者クラウゼウィッの起草せるもので、要點は新兵徵募數は千八百二十年に定めた儘であるのに、その間人口は一千萬人より一千八百萬人に增加したから、軍備擴張をしやうと云ふのである。併しクラウゼウィッが二年兵役說を主張したので、而して陸相ボーニンが財政上より此說に贊成したので、幾多の折衝を經て遂にボーニンを免し三年兵役說を執れる將軍ローンを後任とした。蓋しウイルヘルムはボーニンに與へた宸翰に述べた如く軍事上の見地は財政上經濟上の見地により侵害さるゝを得ず、そは歐洲に於る我國家の位地は全く繫て兵力に存すれば也との意見を抱き、殊に三年兵役說はその持論であつたからである。要するに保守主義者たるローンの陸相任命はウイルヘルムの歷史中に於ける一大事件で以後改革の活劇は茲に兆すと云ふ可きである。

ローン

ローンは夙に審議を了せる陸軍編制法案を提て立ち、かくて千八百六十年一月十二日の議會開院式の詔勅は法案提出のことに言及し二月十日、遂に法案の發布を見た。然るに議會は平時定員を增加して三箇月訓練の後備兵を全廢するの計畫に反對し、且千八百三十五年以來一旦採用せられたりし二年兵役制度を復舊せんとして盛んに政府案を攻撃した。茲に於て

普佛戰爭パリーの防禦(メイソニエ筆寫意畫)

ローンは五月の初旬政府案を撤回し、千八百十四年の法律に原則として國民皆兵制度と三年服役制度とを明記しあれば、今更ら陸軍編制法案に對して議會の協贊を求むるの必要なしと主張し、藏相より假りに一年間の陸軍擴張費を要求して議會の贊成を得た。併し當時なほ貧弱なりしプロイセンが一年後に中止することある可き陸軍擴張費に向て、九百萬ターレル即ち千三百五十萬圓を支出したりとは、常識を以て說明することの出來ぬことで、この初年度の擴張費協贊は軈て尙武主義、專制主義の勝利を豫想せるものである。蓋し陸軍を以て議會の制令の下に立たしむるか、國王の直轄の儘に置く可きかと云ふのが、問題の要點であつて、プロイセンの穗積八束博士とも評す可きスタールが、プロイセンの國體の精華を說いて社會一部の贊成を博しつゝあつた當時のことゝて、陸軍擴張問題は忽ちに潛任せる憲法問題を驅て政爭の中心に現はれしめたのである。而して

ビスマーク肖像
――レンバハ筆――

ウイルヘルムはこの政爭の結果王權の獨立を確立し、政黨政派の上に超然たる地位を占め得たのである。但し千八百六十一年の議會も、僅かに一年間の陸軍擴張費に協贊を與へて、翌年度に於ては是非共自由主義者の主張に基き法律を以て兵制問題を解決せんと揚言し、翌六十二年の總選擧に於て新興の進步黨が大勝利を博するや、新代議院は二年兵役制の復舊成らざるを見て翌年度の陸軍擴張費を否決したので、前年來國王となれるウイルヘルム第一世は直ちに議會を解散し、且自由主義を懷抱せる大臣を免職して保守主義者を以て之に代へた。然るに五月總選擧の結果は依然として急進主義者たる進步黨の大勝利に歸したのである。

自由武斷兩主義の對抗愈々激烈
ビスマーク出づ

ウイルヘルム第一世は前にも述べた樣に王位の神聖にして侵す可からざることを確信しつゝ即位せられたのに、今や議會は過激なる意見を抱き國民も反抗の精神を示し、而して皇后も將た皇太子も共に國王の武斷的政策に反對せられたるを以て、國王は全く孤立の位置に立ちて人生の痛苦を一入感ぜられ、六十五歲の老眼に時に暗涙を浮べさせられたことも見受けられたと云ふ。大臣のうちに國王に深く同情して飽くまで民主主義の狂瀾を阻止せんとしたのは唯陸相ローンのあるのみであつた。而して國王は勿論議會に屈服することを好まなんだので、軍人氣質から任に堪えざるものは辭職す可しと自覺せられたものか、時に隱退の決心をさへ立てられたことがあつた。但し是は西洋は兎に角プロイセンの歷代に先例なきことなるが爲め、百計盡きて漸く一條の血路を覓め、ビスマークを召されたのである。ビスマークは内政の上に於ては王權を擁護しつゝ憲法を是認し、且獨逸全國に憲法を布かんと欲し、外交の上に於ては兵力に訴へて墺太利と輸贏を決せんと欲し、その大綱の上より見れば、さまで國王と意見の扞格があつたでもなく、千八百六十一年の夏國王にローンを介してビスマークに入閣の意なきや否を探つたことがあつたが、ビスマークの傍若無人の態度は國王の不快とせらるゝ處であつた。而して國王とビスマークとの間に立ちて意志の疏通を圖つたのは全くローンであつた。既にして千八百六十二年の八九月にはプロイセンの新代議院は豫算案を議し、千八百六十三年度の陸軍擴張費をも否決した。玆に於てローンも讓歩の止を得ざるを感じ九月十七日には二年兵役制の復舊に同意を表せんとしたが、御前會議に於て國王は斷然この讓歩に反對し、閣臣朕を棄てんか朕は王位を去らんのみと勵聲一番、以てローンの決心を飜さしめられた。是より先九月二十二日巴里駐劄の使臣たりしビスマークは外相幷にローンを通じて入閣の意志を發表し、二十日伯林に着し二十二日バーベルスベルヒの離宮に於て國王に拜謁し、飽くまで國王を輔翼し議會を無視して政治の局に當らんことを誓ひ、翌日內閣議長兼外相に任ぜられた。爾來國王は篤くビスマークを信任し、その獻策に從て議會との確執を繼續し遂に偉業を成し遂げられたのである。

政爭と皇后、皇太子

併し國王ウイルヘルム第一世はビスマークを股肱と恃むやうになつてから、斷乎として議會に當るの決心を定めたものゝ、心中の煩悶は益す募るばかりで、千八百六十二年の十一月頃は一夜も安眠せられたことはなかつたとのことである。故にジイベルの如きは評して、六十二年の九月十日に代議院が豫算案を否決してから、豫算なくして政治を行ふやうになつた當時、國王は深くその憲法擁護の誓約と矛盾せることを愁へられたやうであると云ふて居るけれども、同年の季に於ては、ビスマークの意見を嘉納せられて、憲法の條項に缺陷が存して居るから、憲法の三要素たる國王と第一、第二の兩院との間に所見の一致を得なんだ際と雖も、國家の政務は之を中止する譯にゆかぬが故に、行政權を以て憲法の缺陷を補充せねばならぬと信ぜらるゝに至つた。國王は萬事に付けて國内に紀律と訓練とを回復せねばならぬとの思想を抱かれ、在野政客の首領は之を瘋狂院に入院せしむ可しと激昂せられ、ローンの陸軍編制問題に關して再び多少の讓歩を爲さんとするや、豫算の一ターレルも服役期間の一時間も之を減ずること能はずとて敢て之を拒絶せられた。國王のかく强硬の態度を執れるに對し皇后は内閣の保守主義を厭はせられ、深く英國流の思想に支配せられ、皇太子も國内の政爭を見て慨嘆せられて居つた。彼の千八百六十三年の夏に政府が新聞紙條例を發布した時の如き、皇太子はダンチヒの演説に於て公然政府の政策を非難せられた。國王はかくの如く上は宮中より下は政黨に至る、あらゆる社會の攻擊を受けつゝ、ビスマークとローンとを左右に從へて衝突時代の舞臺に立て居られたのである。

普墺衝突の機會

然るに幸にも千八百六十三年十一月丁抹國王フリードリヒ第七世の崩御せられたるが爲、端なくもシュレスウィヒ・ホルスタイン問題は玆に再燃し、獨逸の難局を解決せしむるの關鍵とはなつた。但しこの問題に對して國王ウイルヘルム第一世はビスマークと共にシュレスウィヒ・ホルスタイン兩侯國をして丁抹の覊絆を脱せしむることに付ては、何等意見の衝突もなかつたけれど、國王は兩侯國をアウグステンブルヒ公に與へて獨逸の一聯邦たらしめんと欲せしに、ビスマークは之に反して兩侯國の地をプロイセンに兼併せんことを心に期して居つた。蓋しビスマークは正統論者ではあるが、プロイセンの正統論者であつて、アウグステンブルヒ公でも誰でも、他人の正統には毫も顧慮せなんだのである。然れども一度戰端の破裂して千八百六十四年の四月十八日にプロイセン兵がヂッペルの保壘を略取し、同六月二十九日にアルゼン島を征服してから、國王も亦一旦干戈に訴へて占領した土地は之を他人の手に委することが出來ぬと感ぜられ、遂に事實上この點に於てはビスマークの弟子となつて仕

モルトケ肖像
—メンツェル畫—

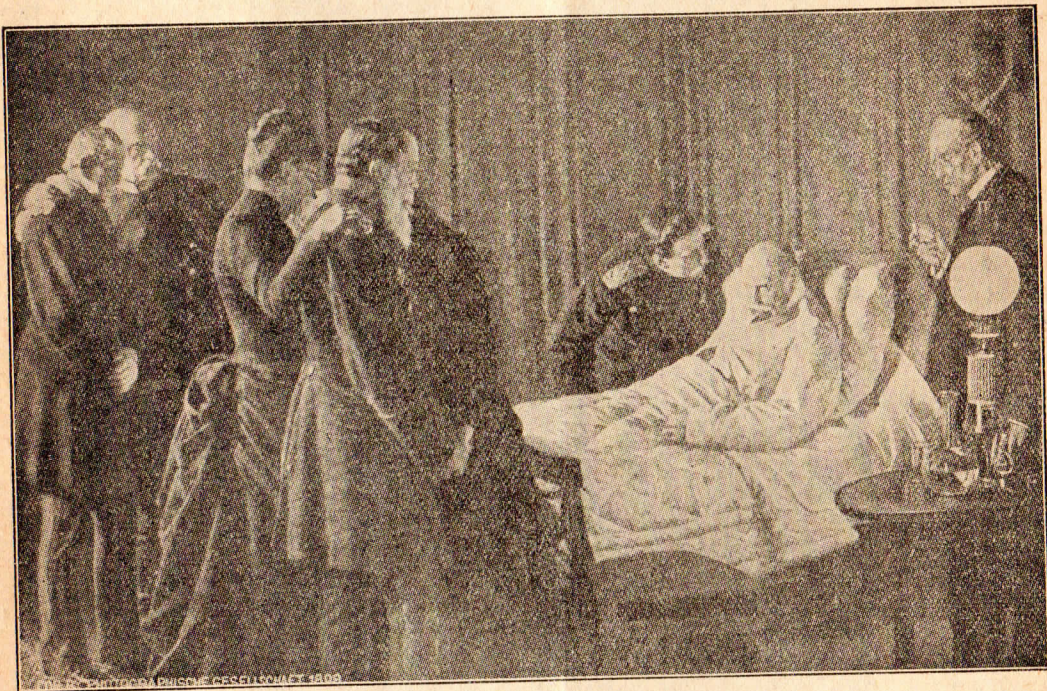
舞はれた。而してアウグステンブルヒ公がビスマークの提起せる條件の下に兩侯國を受くることを拒んだが爲、そのプロイセンに對して惡感情を抱けることが知れたが爲、國王は益すビスマークの意見に傾かるゝことゝなつた。抑も丁抹に對する戰爭は墺普兩國相同盟して戰はれたので、丁抹の一敗地に塗れて假媾和條約を結ぶや、兩國の元首は各その外相を從へて八月二十二日シェーンブルンに會見し將來の方針に關して協議したが、肝心の兩侯國問題に付ては一致を見ることが出來なんだ。墺國の側ではプロイセンが兩侯國を兼併するなら、その賠償としてプロイセンシュレージエンの元のグラーッ伯爵領を墺太利に割讓されたしと申出たけれど、國王は斷乎としてこの要求を拒絕せられた。次で墺國から關稅同盟加入のことを强て申込んで來たものだから、墺國に對する國王の感情も漸く一變することゝなつた。

モルトケは曾て千八百六十六年の普墺戰爭を評して、是は決して自國の存在を危うせられたるが爲正當防禦として戰はれたのではない。内閣が必要と認めて多年計畫し冷靜に準備した戰爭で、その目的は土地の占領、領域の擴張若くは有形上の利益にあらず、國威の擴張なる理想に存して居つたと云ふたことがあるが、その通である。而してこの戰爭を誘起した近因は勿論、丁抹より奪ひ取つたシュレスウイヒ・ホルスタイン兩侯國の處分問題であつた、一時兩侯國を以て墺普兩國の共有としたが、是で納りの着き樣はなく、アウグステンブルヒ公も未だにその要求も放棄せぬので、千八百八十五年

五月二十九日、七月二十一日の御前會議で、ビスマークとローンは直に兩侯國を兼併し且墺國と交戰す可しと主張し、皇太子、藏相とが反對せるのみであつた、國王ウイルヘルム第一世はそこで之をモルトケに諮つた所、モルトケも主戰論に賛成であつた。けれどもこの時は墺普兩國相互に讓步して八月のガスタイン協約で墺國はホルスタインをプロイセンはシュレスウィヒを假りに支配することにした。併しこの協約で墺國が全くアウグステンブルヒ公を見棄てて終ひ大體に於てはプロイセンの利益となつたので、國王は是れ血を流さざる勝利なりとて大に喜ばれ、ビスマークに伯爵を授けられた。併し翌年に入つてから墺太利は獨逸の中國を糾合してプロイセンに當らんとしたが爲、ビスマークも伊太利と提携して之に對抗し、普墺衝突の機會は漸く逼て來た。元來國王は衷心保守主義の本據たるウイーン政府の當局者と干戈相見ることを好まず、千八百六十六年の二月二十八日に御前會議を開いた時も皇太子と藏相との外はすべて開戰論であつたが、國王は躊躇せられて居つた。三月の下旬に某侯國の兼併は必要であるがその他には領土擴張の野心あるにあらず、唯墺國と對等の位地に立つことを望むのみであると、その意見を洩されたことがあつた。然るにウイーンのオーフブルヒに於ても、プロイセンを嫉視せる爲、開戰は遂に避く可からざることとなり、五月上旬にはプロイセンも動員に着手し、六月十四日聯邦議會が墺國の提議を容れて、プロイセンを以て聯邦の平和を破るものなりとし、之に對して動員の令を下した爲、國王の

決心も全く定まり、大纛を戰地に進めらるゝこととなつた。この開戰に先ちビスマークは國内在野の政客と妥協せんとしたが、國王はかゝる少刀細工にも毫も耳を假さなんだ、その自信のほど思ひ見る可きである。

普墺戰爭の結果

千八百六十六年の普墺戰爭は一に七週間の役と呼ばるるが、而もその決戰は七月三日にケーニヒスグレッツで戰はれたのである、而して國王ウイルヘルム第一世は大元帥としてこの攻擊戰を開始せられたのである。墺國はこの挫敗の後直ちに佛帝ナポーレオン第三世の調停を要めたから、ビスマークは遷延せば事面倒なりと見て取り、佛國との衝突を避くると同時に成る可く墺國の體面を傷けざるやう早く之と媾和す可しとの決心を定めた。是はビスマークの頭腦の最も銳く働いた時の事業でこの解決に付ては大分國王と意見の衝突があつた。國王は墺國は勿論その與國からすべて領土を割讓せしめんとし、墺國からはベーメンの一部をザアクセンからはライプチヒとバウチェンとを、バイエルンからはアンスバハとバイロイトとを、ハンノーフェルからは東フリースラントとブラウンシュワイヒに對する權利とを、ヘッセンからは中部並に西部のプロイセン領を連絡するの地帶を得んことを望まれた。而して軍人は又ウイーンの入城式を行はんことを要求したが、ビスマークはその徒に墺國の感情を害するのみに止りて、何等の利益なきを說いて之に反對し且國王の懲罰的領土割讓の主張にも

ウイルヘルム一世の崩御
――ウエルネル筆――

反對し、ナポーレオンが媾和の條件として墺國の獨逸を去ること、北獨逸同盟を組織すること、幷に南部諸國の獨立を保つことを基礎として、獨逸問題を解決す可しと提案し來るや、直ちに之に應じ、巴里駐劄の公使をして北獨逸に於て新に三四百萬人の地を兼併するの條件を容れしめた。かくて七月二十六日普墺間にニコルスブルヒの媾和假條約が成立したのである。國王は當時飽くまで墺國その他の諸國をして領土を割讓せしむ可しと唱へられ、軍中虎列拉の猖獗を極めしにも拘はらず、戰爭の繼續を主張せられたが、ビスマークは皇太子の援助によりて漸くにして所信を遂行することが出來た。國王の日記七月二十四日の條に墺國とザアクセンの領土保全に同意せしは不本意なりきとあるは、以てその煩悶を洩されたものである。ビスマークはこのニコルスブルヒの休戰條約に於て成功せるのみか、內に於ては八月五日伯林に召集せる代議院に於て六十二年以來第一院のみの協贊によりて支出し來りし政費の追認を求め、以て衝突時代に終を告ぐることが出來た。これ一は六十四年以來の軍事外交兩方面に於けて燦爛たる成功がプロイセンの輿論を一變せしめたが爲である。殊に普墺戰爭の結果プロイセンはシュレスウイヒ・ホルスタインの外にハンノーフェル、ヘッセン、ナッサウ、フランクフルトを兼併し普通選擧制を採用せる北獨逸聯邦憲法は千八百六十七年七月より實施せらるることとなつたので、ウイルヘルム第一世の軍備擴張計畫の徒爾ならざりしことは一般に認められ、進歩黨中の溫和派は國民同盟所屬の有志と相合して、新に國民自由黨なるものを起し、以て政府を謳歌するに至つた。而して聯邦の歷史的權利を擁護せる保守主義者が、ビスマルクの擧措に反對であつた結果、新に自由保守黨なるものが起つて國民自由黨と同じく御用黨となつた、是は後の帝國黨である。

普佛戰爭

千八百六十七年の春にウイルヘルム第一世が初めて、元のナッサウ領のウィースバーデンに入浴された時、歡迎を受けられて却て不快を感ぜられ、彼のフラーの聲は前の君主に對する不忠の念を示すものなり、加之、人民は未だ自分を知らざる筈なりとの給はせられたのは、明かに國王の感情の保守主義者の側に傾きしことを示せるもので、當時陪乘者から、この歡聲は陛下の權化さるる獨逸史に對するものなりとの說明を得て始めて顏色を和らげられたと語り傳へられて居る。眞に獨逸の統一は大事業であるから國王は之を皇太子の治世に留保せらるる叡慮であつたが、歐洲の政局は急轉直下の勢を以て統一の偉業を大成せしむることとなつた。是は佛國が獨逸の統一の始まつた爲に七十年の獨佛戰爭を誘致した結果で、殊にナポーレオン第三世がプロイセンが北獨逸聯邦の盟主となり且その領土を擴張したるに對し、所謂賠償として、リユキセンブルグを兼併せんとして得ざりしより、佛國の輿論は次第に變調を呈することとなり、遂にプロイセン王室の支流たるホーヘンツォーレルン家の西班牙國王に迎へられ

んとするの問題起り、佛國政府がヱムスに入浴中のウイルヘルム第一世より、將來決して一族のものを西班牙王位たらしめずとの誓約を得んとして拒絶せられ、ビスマークのヱムス電報の加筆となり、佛國をして遂に開戰の決心を立てしむるに至つた次第は歐洲近世史上の著名なる事實であるから、管々しく述べぬことにする。扨ウイルヘルム第一世が伯林に還御せられたのは千八百七十年の七月十五日で、ブランデンブルヒ驛で皇太子、ビスマーク、ローン、モルトケ相携へて鳳輦を迎へ車中でビスマークより委曲事局に就て奏上したが、國王は何共決答を與へられず、翌日午前會議を開くことにした。然るに伯林のポツツダマー驛に着さるゝや、巴里にて開戰に決せることが知れたので、遂に國王も開戰說に同意せられた。七月十九日は六十年前プロイセンがナポーレオンに壓逼された當時崩御された母后の命日なので、親しく展墓され同月三十一日遂に大纛を進められた。而して大元帥は八月十八日にはグラヴロットの戰を指揮され、九月二日にはセダンにナポーレオン第三世の降を容れられ、次で大本營をヴェルサイユに定めて巴里を包圍せらるゝこととなり、開戰後二箇月ならずして大勢は全く定まつたのである。

ナポレオン三世
——フランドラン畫——

普佛戰爭の結果と獨逸聯邦の統一

獨逸の戰勝は確められたものの、ナポーレオンの帝政がセダンの一戰に仆れたので、誰を對手として談判す可きか、如何なる要求を爲す可きやは未決の難問で、ウイルヘルム第一世も疾に八月にヱルサースとロートリンゲンとの割讓を要求せられたが、これらの外交上の案件は專らビスマークの辣腕によりて解決せられた。而して獨逸聯邦の統一も佛國との媾和條約成立以前に纒

まり獨逸帝國は茲に建設せられた。但し如何に獨逸を統一す可きやに就ては、國王と皇太子との間に自ら意見の背戻するものがあつた。國王は自分はプロイセン王であるとの自尊心を以て、皇帝と稱することを厭はれ、各聯邦の獨立的權利を尊重せられたが、王世子は寧ろ全然統一されたる新國家の成立を希望せられ、聯邦の君侯等を以て上院を構成し、責任を負ふの帝國宰相を置かん事を主張せられた。ビスマークはプロイセン氣質と獨逸氣質とを兼ね有し、能く國王と王世子との意見を調停し　實際的政治家の特色を發揮したのである。かくて十一月の初旬には國王も枉げて皇帝と稱することを承諾せられ、同二十三日バイエルンと北獨逸聯邦との合同を約する時にはビスマークは既にプロイセン國王の獨逸皇帝と稱することに就てその同意を得た。その結果バイエルンのルードウイヒ第二世はウイルヘルム第一世を皇帝に推戴するの議を聯邦各州の君主に諮り、更に北獨逸聯邦議會も之を決議した。但し議會の代表者のヴエルサイユの大本營に詣り、決議の精神に就て上奏せんとするや、國王は直ちに、之を引見することを拒まれ、聯邦君主の悉くバイエルン王の提議に同意せることを知るに及んで、初めて議會の上奏を嘉納せられた、時に十二月十八日であつた。かくて獨逸帝國の憲法は千八百七十一年の一月一日から實施され、同八十日ヴエルサイユの境の間に於て戴冠式を擧行せられ、次で巴里市の降伏するや獨逸皇帝ウイルヘルム第一世は三度軍隊と共に巴里に入都せられ、軈て凱旋の途に就かれた。獨逸國民は皇帝の武斷主義とビスマークの鐵血政策とによりて統一の宿志を果し、且之に自由の要求をも貫徹し得たので、これ實にその得意の時代である。

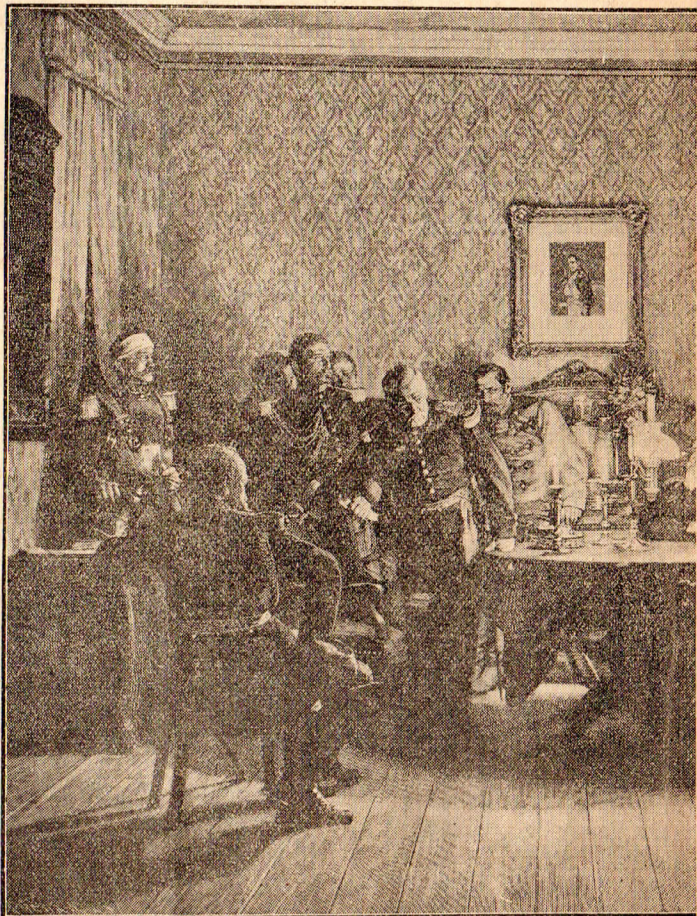
モルトケ　　ビスマルク　　ノスチス伯

中將ウイムペン　　大將オフユデル　　騎兵大尉ドルセ

大將ウイムペン男　　大將カステルノオ

ウエルネル筆セダン降伏の夜（一八七〇年九月一日・二日の夜）

戰爭後の政局

帝國建設の前後は獨逸自由主義の黄金時代で、國民自由黨は勿論進歩黨までもビスマークを助けて保守主義者に方り以て帝國統一の完成を圖つた。新に勃興し來つた舊教徒の團體たる中央黨との確執即ち所謂クルツーア・カムプに付ては、皇帝も新教徒としての信念が鞏固な爲、强ては反對されなんだが、議會が當初三年の期限を付けて軍事費を協賛し、七十四年に妥協の結果七年期法で七箇年を限て平時定員を決定したことには大に不快を感ぜられた。衷心保守的思想を愛重せらるゝ皇帝はビスマークが保守黨の反對を排して地方制度を改革せんとするを好ませられず、千八百七十二年十二月にローンがこの問題からビスマークと衝突して辭表を奉呈した際は、直ちに是を却下され、却てローンをプロイセンの內閣議長に任じてビスマークの兼職を解かれた程であつた。蓋し當時皇帝と思想を一にし感情を一にして居る大臣はローンのみであつたから、之を手離すことを欲せられなんだのである。

併し政治家の機略乏しきローンは遂に在野政客を操縱する能はず翌年の暮遂に致仕した。さりながらビスマークも七十五、六年頃から次第に保守主義者の生地を現はし來つた時も時、千八百七十八年五月十一日伯林の大通りウンター・デン・リンデンで兇徒が皇帝を暗殺せんとし、次で六月二日更に他の兇徒が寓所の三階から皇帝を狙撃し、玉體の到る處に散彈が命中したので、國民の激昂甚しきを見、議會を解散して社會黨鎭壓法を通過せしめた。

重い傷を負はせられたる、八十一歳の老帝は、不思議にも

ビスマルク影像

數箇月の靜養の後健康を快復せられ、翌七十九年は金婚式を目出度祝された。而してビスマークは前年全く自由主義者と相絶て保護關税政策を執り、この年には又墺國と同盟して外交政策の上に於ても新生面を開いたが、この外交政策の變化に付ては老帝と老宰相との間に大に意見の衝突があつた。ビスマークがウイーンに赴きて墺國の外相アンドラッシーと交渉しつゝある時に於て親露主義の老帝はツァールを訪問せらること云ふ始末で、一時ビスマークの計畫は全く頓挫を告げたが、十月に入つて漸く獨墺の同盟に勅裁を與へられた、この同盟は後に伊太利も加盟したのが今日なほ中歐の政局を支配しつゝある三國同盟である。

大帝が築きたる獨逸の大廈

老帝治世最後の十年はビスマークが保守黨と中央黨とを提げて新方針に從て施政の局に方つた時代で、老帝は一は老宰相の爲す儘に任せられた樣である。千八百八十一年十一月十七日の詔勅は國家社會政策の必要を極言され、疾病災害老癈等、保險制度は相次で成立を告げた。曩に七十八年に羅馬法皇レオ第十三世が即位してから、クルツーア・カムプ時代の法律も漸次變更せられて舊敎徒を懷柔することとなり、植民政策は新に開始せられて獨逸は先づ阿弗利加太洋洲方面に領土を獲得し、獨逸海軍の基礎は定められ、キール運河の開鑿は着手せられ、獨逸の國勢は日に増し隆運に赴くのみになつた、勿論在野政客の勢も全く消磨し盡せるにはあらで、八十二年には議會は政府の提出せる烟草官營法案を否決し、八十七年には軍隊編制法案の問題で議會を解散したこともあつたが、大體に於て政府はその志を行ふことが出來たのである。この間老帝は十年一日の如く伯林にありて萬機を總攬され、毎日時を定めて馬車を公園に驅られ、夕は觀劇聽曲の興を樂まれ、炎暑の候は或はバーベルスベルヒに、或はヱムス、バーデンバーデン等に遊ばれた。常に軍服を纏はれ、偶ま略装せらるゝこともあるも、決してその儘政務を視られたことはなかつた。又努めて新知識を求められ、ヴェルナー、ジーメンスを召しては電氣に關する講演を望まれ、ヘルムホルツ、クルチウス、等は數ば御前講演の光榮に浴した。かくて千八百八十六年一月には國王即位二十五年の祝典を、八十七年には陸軍入籍八十年の盛儀を、その三月には滿九十歳の賀筵を擧げられた、更に敬す可きは皇后陛下の玉體恙なきのみか老帝を翼賛して大業を遂げたる相將の内、ローンのみは七十九年にこの世を去つたが、モルトケもビスマークも共に矍鑠として居ることであつた。然るに晩年になつて皇太子が難治の病に罹られたので、痛く叡慮を惱まされ、八十八年の三月病の床に臥させられ、その九日遂に睡るが如く昇天された、春秋九十一。伯林の西シャーロッテンブルヒの靈廟に詣づるもの、瞑目一番、殆んど一世紀に垂んとせる老帝の生涯を追懷せば、大帝の尊稱の偶然にあらざることを感悟するであらう。殊に大帝の築かれたる基礎の上に英邁なるウイルヘルム第二世皇帝の建てられつゝある、獨逸帝國の大厦を目撃する時は、その感は更に深からざるを得ぬのである。

野の聲

青山霞村

わが詩

かつて世界の人であつた
われはいま村の人である。
世界が大きいか村が小さいか
星の世界が大きいか。
三千の宮女を蓄へてゐる
ソルタンの宮殿が大きいか、
一鉢の香飯衆會を飽かしめた
維摩の丈室が小さいか。
われはわが村でわが詩を作る。

名の改革

京の小さい呉服屋小大丸屋の
岸田おしゆんは俊子と呼びかへた。
そして山岡鐵舟の娘分となつて
九重深く宮仕した。
後に中島俊子夫人と世に仰がれた。
時疫は室扶斯と名をかへた、
お師匠さんは家政女學校長と名をかへた、
若中は青年會と名をかへた、
尼講さんは佛敎婦人會と名を呼びかへた。
さうして日本國民はおしゆんが
俊子になつたやうに變つて居るか。
噫國民の心に潜む
「舊來の陋習」をぶち破れ、
國民の思想と生活を
もつと豐富に、もつと新しく、
もつと大きく、もつと自由に、
もつと意味あるものとならしめよ。

牝鶏

牝鶏が十二の卵を抱いてゐた。
「國家」「國家」と善く謳ふ良い雛鳥が
産れるやうに廿年の間巣の中で
六字の名號や七字の題目のよな
難有い呪文を聽かせ居つた。
やがて卵が孵化つてみると嘴の平い
蹼のある思はぬ雛鳥が現はれた。
男も女もその雛鳥は「我」「我」「我」と
鳴立てゝ泥深い沼へ飛込んだ。

炬燵

世間の事は譬へてみたら
二人の友達が對ひ合うて
炬燵にあたつてゐるやうなもの、
我儘やつて一方へ蒲團を多く
引張れば片一方のものが堪らない。
おゝ軍刀吊つたわが友よ、
そんなに蒲團を引張つて呉れるな。

犧牲

勝利の悲哀を最深く感じた者は
乃木大將だ。二兒の戰死と三萬子弟の
白骨と、たゞに殉死と誰がいふか、
噫將軍は無意識に、大きな「人道」と
小さな「忠君愛國」の爭の
犧牲となつた人である。
大和のをのこを人らはこの大なる
犧牲を見て深く考へねばならぬ。
勝利の悲哀を叫んだ蘆花生にその實傳
を書かしめよ。彼と此とは敵でない、
深い心の底の相通うてる友だちである。

淡きこゝろ

岡稻里

わがそばに君ありと思ひ慰むる淡き心に松の風ふく
君と住む日の多くなり君と物云ふ日の愈少なくなるかな
親と云ふ心になれずわがそばに寢息小さき兒を覗き見る
しくしくと齒を病て泣く子の傍に親効もなくえも近寄ず
家の影樹の影暗きうしろより火事の如くに燃ゆる夕暮
すすけたる天井板を見つめつつ涙ぞながるる夜のねざめに
自らの淋しき影をいつまでもこの山河のうちに見るらむ
わが歌とこのともしびと相向ひ相向ひつつ冬の夜となる
おちつかぬ旅の心に廣き室の夜の隅々をまたも見まはす
白銀の針もてこころさし來る寒き夢みん夜の松風
寒林の根元にころぶ落栗の寂しき世をばなかば來にけり
もの忘れしたるが如きこの頃の落葉の日の便りなさ
たよりなう暮ゆく冬の軒の木にとばけ聲して鳴くは何鳥
木の葉ちる中に黃いろく顫へつつしづ心なき冬の日の色
人はみな我にそむきてゆく如く冬枯の中にたち盡しけり
茫々とゆき疲れたる旅人のおもひいだきて冬の野を見る
脣をふるれば寒うたちまちに草のごとくにかれん夕やけ
落葉樹はいと靜かにもわが家をわが冬の日の思を圍む
そこそこに話を切りて上下の京に別るる夜はしぐれきぬ
くらがりをいでしばかりの心もち仄かにうきぬ一月の空

毎月一回一日發行

新日本定價

●一册（紙數口繪共壹百八十四頁）正價金貳拾六錢郵稅二錢五厘 海外郵稅一册十四錢

册數	前金	郵稅	計
三册（三ヶ月）	七拾六錢五厘	七錢五厘	八拾四錢
六册（半ヶ年）	壹圓五拾錢	十五錢	壹圓六拾五錢
十二册（一ヶ年）	貳圓八拾八錢	參拾錢	參圓拾八錢

本號に限り定價金四拾錢、郵稅金三錢五厘

△廣告料は御照會次第詳細に御報知可申候
△廣告〆切は前月の十五日限の事

稟告

●弊社の圖書雜誌の御注文は總て前金の事●御注文の書名編數冊數御住所氏名は楷書にて明瞭に御認を乞ふ●振替貯金にて御送金は口座受入手數料金壹錢を御同送の事●郵券代用は必ず一割增の事●雜誌代前金相切れ候節は最終の雜誌帶封に「前金切」の印を捺し次の前金領收まで發送停止●前金は本誌到着を以て領收の事と御承知の事●御注文書狀宛名は「富山房小賣係」の事●郵便物未納不足稅は請取不申候

大正元年十二月二十三日印刷納本　第參卷第壹號

編輯兼發行人　楠山正雄

印刷人　渡邊八太郎

印刷所　東京市牛込區榎町七番地　日清印刷株式會社

發行所　東京市神田區裏神保町　合資會社冨山房

電話本局　長一〇三六番　四一三〇番　四四四二番
（振替貯金口座東京五〇一番）

大正二年一月改正

冨山房出版圖書總目錄

富山房の通信販賣

◎一本の手紙で遠方の物品を買ふには通信販賣に限ります
◎富山房へ通信販賣を託せらるる方は代金に送料を添へて願ます
◎御送金は爲替又は振替貯金の事郵券代用は必ず一割増
◎富山房出版圖書の外廣く內外圖書雜誌悉く御取扱致します
◎一時に五圓以上御注文の方には社友として特別割引致します
◎富山房は讀者が研究上の必要書を選擇御通知申上ます
◎御照會は郵券三錢封入又は往復はがきにて著者書名御明記の事
◎富山房は重なる良著の總目錄を實費郵税共十四錢にて送呈す
◎多數取纏めたる御注文に對しては破格の割引を致します

合資會社 富山房
東京市神田區裏神保町九番地
振替口座東京五〇一番
電話本局 一〇三六番 一三〇番 四四四二番

哲學・倫理・教育書類

記事凡例
□は四六判。■は菊判。▲は袖珍。△は四六倍判。◙は菊倍判。○は和本。◎は脊革。◉はクロース。◯は假製の事
定價郵税は一、〇〇は一圓、〇八は八錢

書名	著譯者	頁數	定價	郵税
◉孝道	東北大學總長 澤柳政太郎	■全三冊 一、七〇〇	五、〇〇	二四
◉西洋哲學史十回講義	文學博士 中島力造	■全一冊 四三〇	一、二〇	〇八
◉倫理學說十回講義	文學博士 中島力造	■全一冊 三〇〇	一、三〇	〇八
◉國民性と教育方針	文學士 三澤糾	□全一冊 五〇〇	一、一〇	〇八
◉教育百書	衆議院議員 三土忠造	□全一冊 二〇〇	七〇	〇六
◉社會百言	同	同上	八〇	〇六
◉新日本	男爵 菊池大麓	■全一冊 二〇〇	九〇	〇八
◉獨逸ニ於ケル現今之教育	文學博士 吉田熊次	近刊		
◉硬教育	文學博士 遠藤隆吉	■全一冊 三〇〇	一、二〇	〇八
◎教育學講義	文學士 溝淵進馬	■全一冊 五〇〇	一、九〇	一二
◉教育病理治療學（學齡異常兒病理及教育法）	醫學博士 榊保三郎	■全二冊 一、二〇〇	上四、五〇 下四、〇〇	
◉明治教育思想史	冷泉 藤原喜代藏	■全一冊 四〇〇	二、三〇	一二
◉プラトーン全集	木村鷹太郎	■全五冊 六、〇〇〇	各二、八〇	一六
◉國民道德十回講義	文學博士 井上哲次郎	近刊		
◉日本陽明學派之哲學	同	■全一冊 七〇〇	一、八〇	一二
◉日本古學派之哲學	同	■全一冊 七〇〇	一、八〇	一二
◉日本朱子學派之哲學	文學博士 井上哲次郎	■全一冊 八〇〇	二、〇〇	一二
◉日本折衷學派之哲學	同	近刊		
○巽軒論文集	同	■全二冊 (初)四五〇 (三)五〇	各四五	〇六
○倫理と宗教との關係	同	■全一冊 一六〇	四〇	〇六
◉列傳體西洋哲學小史	文學博士 中島力造	品切	三、〇〇	〇八
◉デカルト	文學博士 桑木嚴翼	■全一冊 三一〇	九〇	〇八
◉プラトーン	文學士 小林一郎	■全一冊 二〇〇	九〇	〇八
◉コムト	文學士 小林郁	■全一冊 三〇〇	九〇	〇八
◉國民性十論	文學博士 芳賀矢一	□全一冊 二六〇	七〇	〇六
◉通俗倫理談	文學博士 坪内雄藏	■全一冊 五〇〇	一、二〇	〇八
◉倫理と文學	同	■全一冊 五六〇	一、五〇	一二
○日本倫理要論	文學士 有馬祐政	■全一冊 一七〇	三五	〇六
◉日本國道論	同	■全一冊 二三〇	七五	〇八
◉倫理學	文學博士 元良勇次郎	■全一冊 五〇〇	一、二五	一二
◉ミュイアヘッド倫理學	文學博士 桑木嚴翼	■全一冊 三〇〇	八〇	〇八
◉倫理學講義	同	■全一冊 三〇〇	九五	〇八
◉生活の趣味	文學博士 遠藤隆吉	■全一冊 三一〇	一、二〇	〇八
◉西洋倫理學史講義	文學士 吉田靜致	■全一冊 九〇〇	二、五〇	一六
◉孔子教	文學士 宇野哲人	■全一冊 二二〇	九〇	〇八
◉支那思想發達史	文學博士 遠藤隆吉	■全一冊 七〇〇	一、六〇	一二
◉常識百話	同	■全一冊 三〇〇	一、二〇	〇八
○教育者の精神	澤柳政太郎	■全一冊 一〇〇	二〇	〇八
○普通教育の危機	文學博士 上田萬年	■全一冊 一六三	二〇	〇三

著者	書名	冊數	定價・送料
佐々博士　田中敬	◎孝道文學	■全一冊 五三〇	一、五〇　〇八
法學士　棟居喜久馬	◎新帝勅語と修養	■全一冊 四三〇	九五　〇八
文部省總務局藏版	○日本教育史資料	△全九冊 六四〇〇（品切）	一七、〇〇
富山房編輯部	○言文一致 教育學	全一冊 一四〇	二〇　〇四
文學博士　上田萬年	○作文教授法	全一冊 一〇〇	二五　〇四
笹倉新治	○修身教授法	全一冊 一〇〇	二〇　〇四
山本信孝	○倫理教科 論語抄	○全三冊	二六　〇四
文學博士　元良勇次郎	◎心理學十回講義	●全一冊 三四〇（品切）	六〇　〇八
元良博士閲　高橋學士譯	▲エビングハウス 心理學	●全一冊 四三五	一、三〇　一二
文學博士　中島力造	◎ラッド氏 認識論	■全一冊 二〇〇（品切）	七〇　〇八
故文學博士　西村茂樹	○自識錄	■全一冊 一三〇	三〇　〇六
文學博士　服部宇之吉	◎中等論理學	■全一冊 四〇〇 品切	一、〇〇　一二
同	◎論理學教科書	■全一冊 一九〇	六〇　〇六
同	○漢文 論理學講義	■全一冊	六〇　〇六
黒田定治	○漢文 單級教授法	■全一冊 一〇〇	五〇　〇四
笹倉新治	○興味論	■全一冊 一〇〇	二〇　〇四
後閑菊野　佐方鎭子	○女子修身書	■全四冊 一〇〇	一、三〇　一六
下田歌子	○女子の心得	■全一冊 二五〇	三〇　〇五
同	○良妻と賢母	■全一冊 二五〇	三〇　〇八
文學博士　服部宇之吉	◎安井息軒 四書	■全一冊 九一〇	二、五〇　一六
同	◎老子「老子翼」莊子「莊子翼」	■全一冊 八〇〇	二、五〇　一六
同	◎韓非子「太田全齋著 韓非子翼毳」	■全一冊 七八〇	二、五〇　一六
文學博士　服部宇之吉	◎列子・七書	■全一冊 八四四	二、五〇　一六
學習院教授　小柳司氣太	◎墨子 閒詁附戸埼允明著墨子考	■全一冊 八〇〇	二、五〇　一六
服部博士	◎荀子 集解附增注	■全一冊（近刊）	二、五〇　一六
文學博士　星野恒	◎易經 周易經翼通解附王注	同	同
服部博士	◎禮記 鄭注	同	同
島田教授　岡田教授	◎文章軌範古詩賞析	同	同
野村勝鄰	○論語分類	■全一冊 二〇〇	四五　〇四
話語研究會	○國定準據 話し方教本	■全三冊 尋常小學用 高等男子用 高等女子用 送料各	七　一五　八　〇四
糸永德松	○新讀本漢字研究	■全一冊	四五　〇六
文學博士　桑木嚴翼	○中等修身教科書	■全一冊	一、一〇　〇四
下川兵次郎	○師範教科 手工教授法	■全一冊	二七　〇四

音樂

著者	書名	冊數	定價・送料
石原重雄	○家庭教科 オルガンピアノ手ほどき	同全一冊	三〇　〇四
同	○オルガンピアノ教則本	同全一冊	四五　〇四
同	○新撰樂典大要	同	四〇　〇四
同	○家庭教科 ヴァイオリン手ほどき	■全二冊	各 七〇　〇六

文學書類

著者	書名	冊數	定價・送料
文學博士　芳賀矢一	○中等教科再訂 明治讀本	■全十冊（檢定濟）	各 二五　〇六
同	○訂正 新定國語讀本	■全十冊（檢定濟）	各 二五　〇六
同	○師範學校 明治讀本	■本科用全四冊	九〇　〇八
同	○同 豫科用	■全四冊	各 三〇　〇四
同	○現代文典	■全二冊	二三　〇四
文學博士　坪內雄藏　文學博士　芳賀矢一	○訂正 中學新讀本	■全十冊	各 二五　〇六
同	○聖代讀本	■全二冊	各 四五　〇六
同	○中等教科再訂 明治文典	■全三冊（檢定濟）	各 二三　〇四
同	○明治文典入門	■全一冊（檢定濟）	一五　〇四
同	○國文典初步	■全一冊	一二　〇四
同	○中等教科 中古文典	■全一冊（檢定濟）	二三　〇四
同	○新定女子讀本	■全八冊（檢定濟）	各 二五　〇四
同	○新訂 中等國文典	■全三冊（檢定濟）	各 二三　〇四
三土忠造	○女子國文典	■全三冊（檢定濟）	各 一六　〇三
同	○新國文典	■全三冊 最新刊	各 一八　〇四
同	○國文學史教科書	■全一冊（檢定濟）	四五　〇四
文學士　鈴木暢幸　文學博士　服部宇之吉	○服部 漢文新讀本	■全五冊（檢定濟）	各 一、二五　〇四
島田鈞一	○高等漢文新讀本	■全二冊	三五　〇四
故文學博士　重野安繹	○漢文 帝國史談	■全一冊（檢定濟）	五〇　〇六
文學博士　芳賀矢一	◎訂正改版 國文學史十講	■全一冊 一八〇	七五　〇八
同	◎日本大文典	■全一冊	近刊

著者	書名	冊數	定價・送料
文學士　鈴木暢幸	◎日本文學史論	■全一冊 三〇〇	九〇　〇八
文學博士　上田萬年	◎國語のため 第一 第二	■全二冊 五〇〇	第一 六五 第二 六〇 各 〇八
原田幹	一 國語字音 假名遣一覽表	全一枚	一四　〇三
文學博士　芳賀矢一	一 國語活用聯語一覽	全一枚	〇六　〇四
文學博士　金澤庄三郎	○ことばのいのち	■全一冊	二〇　〇四
文學士　藤井乙男	◎俗諺論	■全一冊 三〇〇	九〇　〇八
坪內博士	◎劇と文學	■全一冊 七二六	二、〇〇　一二
文學博士　芳賀矢一	◎世界文學者年表	■全一冊 二〇〇	八五　〇八
故　橘曙覽	○橘曙覽全集	■全一冊 四〇〇	七〇　〇八
故尾崎紅葉	○俳諧新潮	□全一冊 一〇〇	二八　〇四
下田歌子	○女子の文藝	■全一冊 三〇〇	五〇　〇八
富山房編輯部	○最新問答 國語	■全一冊 二〇〇	一五　〇四
文學士　保科孝一	◎言語發達論	■全一冊 三〇〇	六五　〇八
兒島獻吉郎	◎支那大文學史	■古代篇 一〇〇〇	二、八〇　一六
同	◎漢文典	■全一冊 二五〇	七〇　〇八
同	◎續漢文典	■全一冊 二二〇	六五　〇八
岡島安平	○中等漢文典	■全一冊 二〇〇	五〇　〇四
古城貞吉	◎增補 支那文學史	■全一冊 六〇〇	一、八〇　一二
故文學博士　重野安繹	○成齋文初集	美濃判三册 二〇〇丁	二、五〇　〇八
同	○成齋文二集	同上	二、〇〇　〇八
文學博士　遠藤隆吉	◎支那思想發達史	■全一冊 七〇〇	一、六〇　一二
芳賀博士　杉谷代水	◎作文講話及文範	■全二冊 一四〇〇	三、〇〇　二〇
糸永德松	○新讀本漢字研究	■全一冊	四五　〇六
藤井文學士　進藤纓	◎獨逸語獨修書	■全一冊 五〇〇	八〇　〇八
ウォールファールト　小田切文學士	◎最新和獨辭典	三六判 一六〇〇	二、〇〇　一三
文學士　鈴木暢幸	◎日華會話辭典	▲全一冊 三〇〇	一、二〇　〇八
佐村八郎	◎日語新辭林	■全一冊 六〇	六五　〇四
野口米次郎	○英詩集	全一冊 一四〇	三五　〇四
同	○英文 日本少女の米國日記	□全一冊 二四〇	七五　〇五
同	○英文 お小間使 朝顔孃の書簡	□全一冊 二〇〇	七〇　〇八
文學博士　坪內雄藏	◎ハムレット	□全一冊	一、三五　〇八
同	◎ロミオとジュリエット	同	同
同	◎オセロー	同	同
同	◎リヤ王	同	同
文學士　平田元吉	◎ハムレット劇研究	□全一冊 四七〇	一、三五　一二
杉谷代水	◎希臘神話	■全一冊 四三〇	一、五〇　一二
文學士　藤澤古雪	○悲劇脚本 オルレアンの少女	■全一冊 三〇〇	四五　〇八
故尾崎紅葉	○草もみぢ	□全一冊 二〇〇	五〇　〇八
故原抱一庵	○小說 巴黎の秘密	■全一冊 三〇〇	五〇　〇八
繁野天來	○ミルトン 失樂園物語	寫眞版入 ■全一冊	二〇　〇六
杉谷代水	○マクベス外二篇	同	同
正宗白鳥	○ホーマー イリアット物語	同	同
高須梅溪	○水滸傳物語	■全二冊 各	同
中島孤島	○ハムレット外一篇	■全一冊	同
正宗白鳥	○マアテルリンク物語	同	同
中村春雨	○舊約 バイブル物語	■全一冊 寫眞版入	二〇　〇六
德田秋江	○シルレル物語	同	同
繁野天來	○ダンテ 神曲物語	同	同
西村醉夢	○漢楚物語	同	同
文學博士　服部宇之吉	◎安井息軒 四書 大學說 中庸說 論語集說 孟子定本	全一冊 九一〇	二、五〇　一六
同	◎古文眞寶後集「箋解」 唐詩選「增注」 三體詩「箋注」	■全一冊 一〇〇〇	同
文學博士　三島毅	◎唐宋八家文	全二冊 各八〇〇	各 同
竹添進一郎	◎春秋左氏會箋	同 二、〇三〇	各 二、五〇　一六
文學博士　服部宇之吉	◎老子「老子翼」 焦竑著 莊子「莊子翼」	全一冊 八〇〇	二、五〇　一六
重野、星野　服部三博士	◎十八史略 小學 孝經 弟子職	■全一冊 九〇〇	同
文學博士　重野安繹	◎史記列傳「史記評林」	■全二冊 各八〇〇	各 同
文學博士　服部宇之吉	◎韓非子 太田全齋著「韓非子翼毳」	■全一冊 七八〇	同
星野博士　服部博士	◎詩經 毛傳鄭箋 附朱傳 書經 蔡傳 附孔傳	■全一冊 一、〇〇〇	同
文學博士　服部宇之吉	◎列子・七書	■全一冊 八四四	二、五〇　一六
學習院教授　小柳司氣太	◎墨子 閒詁附戸埼允明著墨子考	■全一冊 八〇〇	同
文學博士　服部宇之吉	◎荀子 集解 附增注	■全一冊 近刊	同
文學博士　星野恒	◎易經 周易經翼通解 附王注	■全一冊 近刊	同
文學博士　服部宇之吉	◎禮記 鄭注	■全一冊 近刊	同
島田教授　岡田教授	◎文章軌範古詩賞析	■全一冊 近刊	同
山本信孝	○論語抄	■全二冊	二六　〇四

著者	書名	冊數	定價・郵稅
結城蓄堂	◉和漢名詩鈔（讀方註釋 大意附）	▲全一冊 六〇〇	八五 〇六
芳賀矢一	◉月雪花	□全一冊 二〇〇	八〇 〇六
芳賀矢一	●文學地理東海道五十三次	■全一冊 二〇〇	六〇 〇六
大町桂月	◉筆のすさび	▲全一冊 三〇〇	四五 〇六
いしはらわさぶらう	○地理歷史朝鮮唱歌	▲全一冊	〇八 〇二
同	○公德唱歌	▲全一冊	〇六 〇二
同	○上野唱歌	同	〇六 〇二
桑田春風	○文部省檢定濟金言唱歌	同	〇六 〇一
正宗白鳥	○アラビアンナイト不思議の魚	■繪入 一〇〇	一三 〇四
中島孤島	○キップリング猿太郎	同	同
河井醉茗	○神代のはなし	同	同
同	○はちかづき姫	同	同
西村醉夢	○イソップの話	同	同
石原萬岳	○グリム六勇士	同	同
河井醉茗	○はまぐりの草紙	同	同
正宗白鳥	○梅王松王櫻丸	同	同
同	○葛の葉姫	同	同
高須梅溪	○アンデルセン七夜物語	同	同
中島孤島	○トルストイ百姓と惡魔	同	同
正宗白鳥	○五斗兵衛	同	同
大島居古城	○頼光四天王	同	同
平尾不孤	○新伏姫	同	同
中島孤島	○蝶の魔法	同	同

著者	書名	冊數	定價・郵稅
佐野天聲	○ロビンソン物語	■繪入 一〇〇	一三 〇四
ノルトンス 中島直吉	◉日米俗語會話篇	▲全一冊	六〇 〇六
尾崎英子	◉英文日本昔噺	新形全一冊	六五 〇六
金井保三	◉支那語自在	□全一冊 一〇〇	三五 〇四
幸田露伴	○芭蕉翁（繪詞傳附）句集	▲全一冊 二〇〇 上製 並製 各	三〇 二三 〇四
饗庭篁村	○近松淨瑠璃三種	同	同
芳賀矢一	○秋成雨月物語	同	同
故尾崎紅葉	○小三金五郎娘節用	同	同
故藤岡作太郎	○今昔物語選	同	同
關根正直	○近江縣物語	同	同
芳賀矢一	○狂言二十番	同	同
幸田露伴	○西行山家集	同	同
饗庭篁村	○風流志道軒傳（附風流佞名文選）	同	同
宮崎三昧	○並木五瓶春花五大力	同	同
故藤岡作太郎	○俳諧水滸傳	同	同
上田萬年	○よ心のあか	同	同
關根正直	○國性爺合戰	同	同
芳賀矢一	○謠曲二十番	同	同
故尾崎紅葉	○世間娘氣質	同	同
饗庭篁村	○日本永代藏	同	同
宮崎三昧	○日本新永代藏	同	同
同	○萬載集才藏集選	同	同
芳賀矢一	○花月草紙	同	同

著者	書名	冊數	定價・郵稅
上田萬年	○鳩翁道話	▲一冊 二〇〇 上製 並製	二〇 一三
饗庭篁村	○綠手摺昔木偶	同	同
幸田露伴	○夢想兵衛胡蝶物語	同二冊 上製 並製 各 郵稅	三〇 二三 〇四
宮崎三昧	○假名手本忠臣藏	▲全一冊 二〇〇	同
芳賀矢一	○慶長見聞集	同	同
關根正直	○源氏物語忍草	同	同
上田萬年	○松の葉	同	同
故藤岡作太郎	○秋成春雨物語	同	同
饗庭篁村	○世間用心記	同	同
幸田露伴	○をり〳〵草	同	同
芳賀矢一	○和漢朗詠集	同	同
宮崎三昧	○松浦佐用媛石魂錄	▲全二冊 四〇〇 各	同
饗庭篁村	○諸國奇談東遊記	▲全一冊	同
宮崎三昧	○落語選	同	同
上田萬年	○續々鳩翁道話	同	同
故藤岡作太郎	○英草紙	同	同
幸田露伴	○笑談五種	同	同
饗庭篁村	○他我身の上	同	同
芳賀矢一	○保元物語	同	同
同	○平治物語	同	同
宮崎三昧	○太平記忠臣講釋	同	同
幸田露伴	○芭蕉翁文集	同	同
饗庭篁村	○因果物語	同	同

著者	書名	冊數	定價・郵稅
關根正直	○神皇正統記	▲全一冊 二〇〇	上製三〇 並製二三 各〇四
芳賀矢一	○殉難前後草	同	同
幸田露伴	○海道記廻國雜記	同	同
饗庭篁村	○忠臣藏皮肉論（外二篇）	同	同
同	○近世畸人傳	同	同
芳賀矢一	○川柳選	同	同
兒島獻吉郎	◉支那文學史綱	■全一冊	一、三〇 〇八
朝倉敬之	○大礒の鶴	■全一冊 一〇〇	三〇 〇四
文學士 和田萬吉	◉謠曲物語 前編	■ 五〇〇	二、〇〇 一二

辭書類

著者	書名	冊數	定價・郵稅
諸士諸大家 壹百餘名	◉國民百科辭典	□全一冊 一七六〇	三、七〇 一六
芳賀博士 下田學士	◎改訂増補本 日本家庭百科事彙	△全二冊 一七六〇	特八、〇〇 三六
文學博士 吉田東伍	◉大日本地名辭書	△全四冊 五三〇〇	三三、〇〇 一、〇〇
同	◉同續篇（北海道、樺太、琉球、臺灣）	△全一冊 一〇〇〇	七、〇〇 二四
文學博士 芳賀矢一	◉日本文學辭典	全一冊	近刊
富山房編輯部	◉五十音引和漢名數	▲全一冊	三〇 〇四
文學博士 上田萬年	◉五十音引西洋名數	▲全一冊	四〇 〇六
上田萬年 上田敏	◉最新英和辭典	▲全一冊 一三〇〇	二五 〇四
文學博士 關根正直	◉日本歷史地名字引	■全一冊 一〇〇〇	九〇 〇八
文學士 鈴木暢幸	◉日華會話辭典	▲全一冊 三〇〇	一、〇〇 〇八
佐村八郎	◉日語新辭林	■全一冊 一二〇〇	六五 〇四
フォールファルト 小田切學士	◉最新和獨辭典	■全一冊 一六〇〇	二、〇〇 一二

外國語書類

著者	書名		定價	郵稅
野口米次郎	From the Eastern sea	○	.35	.04
同	The American Diary of a Japanese Girl	○	.75	.08
同	The American Letters of a Japanese Palor-maid	○	.70	.08
尾崎英子	The Japanese Fairy Book	◉	.65	.06
シクネー	Æsop Fables	○	.12	.02
ビーエスノルトン 中島直吉	A Bunch of Dailogues in current American Slang	◉	.60	.06
富山房編輯部	Choice Sketches from the Sketch Book	○	.20	.04
同	Smile's Self-help	○	.25	.04
プルターク	Alexander the Great	○	.12	.02
同	Cato the Younger	○	.12	.02
富山房編輯部	Lord Dundnald	○	.10	.02
同	George Stephenson	○	.06	.02
同	Lord Nelson	○	.10	.02
同	Louis Napoleon	○	.10	.02
同	Captain Cook	○	.10	.02
同	George Washington	○	.10	.02
同	Sir Walter Scott	○	.10	.02
同	Peter the Great	○	.10	.02
同	Christpher. Columb us	○	.10	.02
同	Willi am Penn	○	.10	.02
同	James Watt	○	.10	.02
矢島靜太郎	ナショナル補習讀本一	○	.20	.02
同	〃 二	○	.38	.02
リース	A Short Survey Universal History Vol I.	◉	1.00	.08
〃	Vol II.	◉	1.50	.08
文學士 島文次郎	ネスフィルド邦文英文典	◉	2.40	.12
キリアムハリス	English Fireside Reader	◉	.50	.04

歷史書類

著者	書名	冊數	定價・郵稅
瑞山會	◉維新土佐勤王史	■全一冊 一四四〇	五、〇〇 三〇
高橋健自	◉鏡と劒と玉	■全一冊	一、五〇 〇八
文學博士 內田銀藏	◉國史總論	■全一冊	近刊
文學博士 吉田東伍	◉維新史八講	■全一冊 三〇〇	一、〇〇 〇八
高師教授 林泰輔	◉朝鮮通史	■全一冊 六〇〇	二、二〇 一二
文學博士 內田銀藏	○日本近世史 第一卷の一	■一冊 一〇〇	四五 〇六
文學博士 原勝郎	○日本中世史 第一卷 鎌倉武家勃興時代	■同 一〇〇	六五 〇六
文學博士 萩野由之	◉訂正新制中學國史	■全三冊（檢定濟）	八七 〇八
文學博士 萩野由之	◉同五年級用	■全一冊（檢定濟）	三八 〇六
同	◉新制中學國史地圖	■全一冊	五〇 〇四
同	◉女學校用日本歷史	■全二冊	上 三四 下 五〇
文學士 大森金五郎	◉中等日本歷史	■全一冊（檢定濟）	一、〇〇 〇八
帝國大學史學會藏版	◉本朝通鑑	■全十七冊 約八〇〇〇	近刊
大森文學士 重田文學士	◉國史讀本	■全三冊 九〇〇	上中下各 [illegible]
故文學博士 重野安繹	○漢文帝國史談	■全二冊（檢定濟）	五〇 〇六
富山房編輯部	○言文一致日本歷史	■全二冊 四〇〇	各 二〇 〇六
同	○最新問答日本歷史	▲全一冊 二〇〇	一五 〇四
文學博士 吉田東伍	◉新編日本讀史地圖	△略説共全二冊	
同	◉日韓古史斷	■全一冊 七〇〇	二、二〇 一五
東京帝大學史料編纂係	◉大日本史料	逐次刊行	

著者	書名	冊數・定價	價格・郵税
帝國大學史料編纂係	◉大日本古文書	逐次刊行	
文學博士 幣原坦	◉南島沿革史論	■全一冊 二〇〇	四五 〇六
文學博士 星野恒	◉武內式部君事蹟考	■全一冊	四〇 〇四
文學博士 坪井九馬三	○三河物語	和本全三冊	一、八〇 〇八
日下寛	○晴右記	同	五〇 〇六
同	○晴豐記	同	八〇 〇六
同	◉史誌叢書	同全五冊	一、八五 〇三
平出鏗次郎	○東京風俗志	同全三冊	同
文學博士 關根正直	◉日本歴史地名字引	■全一冊 二〇〇	九〇 〇八
文學博士 吉田東伍	◉大日本地名辭書	△全四冊 五三〇〇	三、〇〇 一、〇〇
同	◉同續編 北海道、樺太、琉球、臺灣之部	△全一冊 一〇〇〇	七、〇〇 二四
同	○德川政教考	全二冊（品切）	
故指原安三	○明治政史	全三冊 一三〇〇（品切）	
文學博士 星野恒	◉史學叢說	■全二冊 一四〇〇 各	二、五〇 一三
帝國大學史學會	◉史學會論叢	第一輯 七〇〇	一、三〇 一三
史學研究會	○講演集 第一冊 第二冊	■美本各	八〇 〇八
同	○同第三冊	同	七五 〇八
同	○同第四冊	同	一、五〇 〇八
依田雄甫 河田羆	◉日俄戰記	△全一冊 三〇〇	二、〇〇 一三
池田晃淵	○大奧の女中	■全三冊 八〇〇 品切 各	三〇 〇六
慶大教授 田中萃一郎	◉ドーソン蒙古史	■全一冊 四五〇	一、七五 一三
文學博士 坪井九馬三	◉西洋史要	■全一冊 四六八	二、〇〇 一三

著者	書名	冊數・定價	價格・郵税
文學博士 原勝郎	◉昨年の歐米 一九一二年	□全一冊	七五 〇六
故文學博士 重野安繹	◉十八史略 小學 孝經 弟子職	■全一冊 九〇〇	二、五〇 一六
同	◉史記列傳 附年表	■全三冊 一六〇〇 各	二、五〇 一六
竹添進一郎	◉春秋左氏會箋	■全三冊 三三〇〇 各	二、五〇 一六
文學士 和田萬吉	◉プレツツ世界通史	■全一冊 九〇〇 品切	
文學士 高桑駒吉	◉袖珍世界史要	▲全一冊 二〇〇	三〇 〇四
長谷川武藤 牧山三學士	◉萬國讀史系譜	■全一冊 一〇〇	六〇 〇六
ドクトル リース	◉英文萬國歴史	□第一卷 三八〇	一、〇〇 〇八
同	◉同第二卷	□第二卷 五〇〇	一、五〇 〇八
文學博士 重野安繹	○漢文萬國史綱目	和全八冊 四九〇	二、八〇 一六
文學博士 白鳥庫吉	◉西洋歴史	■全一冊 五〇〇	品切
文學博士 瀬川秀雄	◉西洋全史	■全四冊 一七〇〇	二、〇〇 三〇
同	◉西洋全史附圖	石版著色 索引六〇	二、〇〇 一三
同	◉西洋通史	■全一冊 訂正中	
同	◉譯西洋通史	■全一冊 七〇〇	二、五〇 一六
同	◉新編西洋歴史	■全一冊	八〇 〇八
同	◉新編西洋歴史附圖	■全一冊 十八枚	六〇 〇四
富山房編輯部	○言文一致西洋歴史	■全一冊 一五〇	二〇 〇六
富山房編輯部	◉最新問答西洋歴史	▲全一冊 二〇〇	一五 〇四
文學士 浦井鐙一郎	○西洋歴史年表	□全三冊 三〇〇 各	三〇 〇四
陸軍教授 依田雄甫	◉世界讀史地圖	△二十九圖 署說共二冊	一、九〇 一三
同	◉漢譯世界讀史地圖	△全二冊 略說附	二、五〇 一三
重野博士 河田羆	◉支那疆域沿革圖	頗大判 廿一圖	二、五〇 一六

著者	書名	冊數・定價	價格・郵税
文學博士 芳賀矢一	◉世界文學者年表	■全一冊 二〇〇	八五 〇八
文學士 箭內亙	◉東洋讀史地圖	△全一冊	三、二〇 一二
富山房編輯部	○言文一致東洋歴史	■全一冊 二〇〇	二〇 〇六
富山房編輯部	○最新問答東洋歴史	▲全一冊 二〇〇	一五 〇四
文學士 箭內亙	○清及韓	■全一冊 三〇〇	五〇 〇八
文學士 葉山萬次郎	○露西亞	同	五〇 〇八
プルターク	○英文アレキサンダー大王	□全一冊 七〇	二〇 〇三
同	○英文少カート	□	二〇 〇三
富山房編輯部	○英文ロードダンドナルド	同	一〇 〇二
同	○英文ジヨルジ・スデブンソン		一〇 〇二
同	○英文ロード・子ルソン	同	一〇 〇二
同	○英文ルイ・ナポレオン	同	一〇 〇二
同	○英文カプテン・クツク	同	一〇 〇二
同	○英文ジヨルジ・ワシントン	同	一〇 〇二
同	○英文サー・ウオーター・スコツト	同	一〇 〇二
同	○英文ピーター・ゼ・グレート	同	一〇 〇二
同	○英文クリストフア・コロンブス	同	一〇 〇二
同	◉英ウイリアム・ペン	同	一〇 〇二
同	◉英文ジエムス・ワツト	同	一〇 〇二
博士名士四十八大家	◉ナポレオン	■全一冊 四三〇	一、〇〇 〇八
千頭清臣	◉世界十二傑	□全一冊 四〇〇	七〇 〇八
辻重忠 小關豐吉	◉野中兼山	■全一冊 三〇〇	一、〇〇 一三
堀內新泉	○明治の二宮尊德	■全一冊 三〇〇	九〇 〇八

地理・地圖書類

著者	書名	冊數・定價	價格・郵税
理學博士 小川琢治	◉地理學教科書	■全一冊 日本之部	六〇 〇六
同	◉日本新地圖	■全一冊	近刊
同	◉地理學教科書	■全三冊 外國之部	近刊
同	◉外國新地圖	■全一冊	近刊
志賀重昂	◉世界山水圖說	■全一冊 二五〇	一、〇〇 〇八
山縣初男	◉最近支那通志	■全一冊 六〇〇	二、〇〇 一三
文學博士 吉田東伍	◉大日本地名辭書	△全七冊 六三〇〇	三九、〇〇 一、二四
理學博士 小川琢治	◉地理學通論	■全三冊 一六〇〇	近刊
理學士 山上萬次郎	◉新撰大地誌	■全三冊 一三〇〇 各	一、三〇 一三
志賀重昂	◉地理學教科書外國編	全三冊（檢定濟）	一、三〇 一〇
同	○最新地圖世界之部	全一冊（檢定濟）	四六 〇五
同	◉地理學教科書本邦編	全一冊（檢定濟）	六五 〇八
同	○最新地圖本邦之部	■全一冊（檢定濟）	四〇 〇六
牧口常三郎	◉增訂人生地理學	■全一冊 一〇〇〇	二、七〇 一六
富山房編輯部	○言文一致日本地理	全一冊 一五〇	二〇 〇六
同	○最新問答日本地理	▲全一冊 二〇〇	一五 〇四
同	○言文一致萬國地理	■全一冊 一五〇	二〇 〇六
同	○最新問答世界地理	▲全一冊 二〇〇	一五 〇四
法學士 水野幸吉	◉漢口中央支那事情	■全一冊 八〇〇	二、二〇 一六
上海出品協會	◉揚子江富源江南事情	■全一冊 五一〇	一、八〇 一六
理學士 山上萬次郎	○新撰大地文學	■全六冊 七〇〇 各	五〇 〇六

著者	書名	冊數・定價	價格・郵税
理學士 山上萬次郎	◉訂正改版新撰地文學	■全一冊 三〇〇	一、〇〇 〇八
同	◉近世地文學教科書	■全一冊（檢定濟）	五〇 〇八
理學博士 横山又次郎	◉地文學教科書	全一冊	一、一〇 〇八
同	◉地文學簡易教科書	全一冊	四〇 〇六
同	◉地質學教科書	■全二冊 三〇〇	一、〇〇 〇八
同	◉古生物學	■全一冊 四〇〇	三、二〇 一三
同	一地質學掛圖	全八枚 各	五〇 〇八
山本良吉	○學生氣象日記	▲全一冊	一五 〇四
富山房編輯部	○最新日本地圖	大判全一冊 三十二枚	二、二〇 〇八
同	◉袖珍日本新地圖	▲全一冊 三十二枚	四五 〇五
同	◉袖珍世界新地圖	▲全一冊 二十六枚	四五 〇四
同	一大清帝國全地圖	■石版着色一枚	六〇 〇六
陸軍教授 依田雄甫	○中華民國分省精圖	石版着色 大判三十九枚	二、五〇 一六
同	一增訂改版最新世界全圖	軸製一圓 折本六十五錢	送實費 郵四
理學博士 小川琢治	○最近世界現勢指掌圖	漢譯掛圖 大判石版	二、五〇 三五
陸軍教授 依田雄甫	○最新萬國形勢指掌全圖	漢譯 二十三枚	二、五〇 三五
同	一地文人文全地球圖	（漢譯掛圖）石版着色	八〇 四〇
富山房編輯部	○最近萬國輿地全圖	（漢譯）石版着色	一、二〇 一〇
同	一日露戰役紀念大地圖	軸製特價一円 折本四十錢	運賃實費 郵税四錢
田中阿歌麿	一日本群島地文圖集覽	全一袋 六枚	二、五〇 〇八

博物・農藝書類

著者	書名	冊數・定價	價格・郵税
理學博士 飯塚啓	○最近動物學教科書	■全一冊（橫定濟）	六〇 〇四
同	○師範教科動物教科書	■全一冊（檢定濟）	八〇 〇八
同	○博物通論	■全一冊（檢定濟）	三〇 〇六
同	○女子動物教科書	■全一冊（檢定濟）	四三 〇四
理學博士 石川千代松	○石川大動物學	△一卷之一 一卷之二 各	九〇 〇六
同	○同一卷の三	△印刷中	
同	一動物學掛圖	既刊五枚各	五〇 〇八
同	○動物社會	■全一冊 一三〇	三五 〇六
同	○動物之共棲	同	同
同	○自然に於ける退化	同	同
理學博士 三好學	◎最新植物學講義	■三冊 上卷四、五〇 三〇〇 下六、〇〇	二五〇 〇八
同	◎新訂植物學講義	■全一冊 七〇〇	二、七五 一六
同	◉增訂改版實驗植物學	■全一冊 六〇〇	二、九〇 一六
同	◉印度馬來熱帶植物奇觀	■全一冊 三〇〇	二、〇〇 一三
同	◉增訂植物生態美觀	■全一冊 二九〇	一、八〇 一三
同	○植物之感覺	■全一冊 一三〇	三五 〇六
同	○植物社會	同 九〇	三五 〇六
理學博士 岡村金太郎	○水產一夕話	■全一冊 二〇〇	六五 〇八
理學博士 神保小虎	◉新撰鑛物學教科書	■全一冊 二〇〇	八〇 〇六
理學博士 飯塚啓	◉中等博物學	■全一冊（檢定濟）	三八 〇六
理學博士 小藤文次郎	◉鑛產工業材料	■全一冊	八〇 〇八

◉ 新撰日本農業書 □全三冊（檢定濟） 各 三五 〇六 — 農學士 森要太郎
◎ 言文一致農業一斑 同 ■全一冊 一七〇 二〇 〇六 — 富山房編輯部
◎ 言文一致作物の話 同 一七〇 二五 〇六 — 農學博士 横井時敬
◎ 言文一致穀物の話 同 二五 〇六 — 同
◎ 言文一致蔬菜の話 同 二五 〇六 — 同
◎ 言文一致果物の話 同 二五 〇六 — 同
◎ 言文一致工藝作物の話 同 二五 〇六 — 同
◉ 食用作物栽培要說 ■全一冊 三〇〇 五〇 〇八 — 農學士 原田友作
◉ 實驗蠶體解剖 ■全一冊 品切 — 外山博士 石渡博士
◉ 蠶體病理新論 ■全一冊 二〇〇 七〇 〇八 — 田路寅藏

生理・衛生・理化書類

◎ 最近生理衛生教科書 ■全一冊（檢定濟） 五五 〇四 — 理學博士 飯塚啓
◎ 大生理學 全二冊上卷 六〇〇 二、八〇 一三〇 — 醫學士 石川日出鶴丸
◉ 中等生理學 ■全一冊 六〇 〇八 — 服部捨太郎
◎ 言文一致衛生學 ■全一冊 一三〇 二〇 〇六 — 富山房編輯部
◉ 衛生一夕話 ■全一冊 一五〇 三五 〇六 — 橋本善次郎
◉ 漢譯衛生一夕話 ■全一冊 一二〇 四五 〇六 — 同
◉ ローレンツ氏物理學 ■全二冊 八〇〇 上下 三、八〇 一二〇 — 長岡博士 桑木學士
◉ 酒井物理學教科書 ■全三冊 一三〇 各 三、五〇 二〇 — 理學士 酒井佐保
◉ 同合本 ■全一冊 二〇 — 同
◉ ワールブルヒ實驗物理學 ■全一冊 八〇〇 二、三〇 一六 — 理學博士 中村清二

◉ 普通物理學講義 ■全一冊 近刊 九二 〇八 — 理學博士 中村清二
◉ 最近物理學教科書 全一冊（檢定濟） 六五 〇八 — 同
◉ 補習物理參考書 □全一冊 三〇〇 三〇 〇八 — 林鶴松
◎ 女子物理教科書 ■全一冊 三〇 〇四 — 高師教授 乙部孝吉
◎ 言文一致物理學 ■全一冊 一五〇 二〇 〇六 — 富山房編輯部
◉ 訂正改作物理化學講義 ■全二冊 六六一 三、三〇 一二 — 理學博士 大幸勇吉
◉ 近世化學講義參考書 ■ 一、一〇 〇八 — 同
◉ 理論化學十回講義 ■全一冊 三〇〇 八〇 〇八 — 同
◉ 新訂化學實驗教科書 ■全一冊（檢定濟） 一〇〇 四八 〇六 — 同
◉ 最近化學教科書 ■全一冊（檢定濟） 八〇 〇八 — 同
◉ 增補改版化學計算問題集 □全一冊 三五 〇四 — 理學博士 大幸勇吉
◉ オストワルド分析化學原理 ■全一冊 二四〇 品切 九五 〇八 — 理學博士 龜高德平
◎ 化學者の夢 ■全一冊 一五 〇四 — 理學博士 久原躬弦
◎ 近世理化示教 ■全一冊 三〇 〇四 — 和田猪三郎
◎ 定性分析 ■上卷 一三〇 五五 〇六 — 同
◉ 新編初等重學 ■全一冊 二〇〇 一、〇〇 〇八 — 刈屋 理學士 野原休一
◎ 空氣と呼吸 ■全一冊 二五 〇六 — 故理學士 歸山信順
◎ 無線電信 ■全一冊 二五 〇六 — 同
◎ X光線べつくれる線新元素らぢーゆむ ■全一冊 二五 〇六 — 同
◉ 最新物理學講義 全一冊 近刊 — 理學士 酒井佐保
◉ 生物界之狀態 ■全一冊 一三〇 八五 〇八 — 近森虎治
◉ 未來の人間 ■全一冊 一三〇 九〇 〇八 — 同
◉ 日本人種改造論 ■全一冊 〇八 — 海野幸德

數學

◉ 普通測地學 ■全三冊 六三〇 各一、五〇 〇八 — 陸地測量部 野坂喜代松
◉ 對數及圓函數表 □全一冊 二五 〇六 — 理學博士 寺尾壽
◉ 微分積分學綱要 □全一冊 三五 〇四 — 理學士 澤田吾一
◉ 解析幾何學大意 □全一冊 五〇 〇四 — 同
◉ 商業算術教科書 □全二冊（檢定濟） 六五 〇八 — 同
◉ 中等教科算術教科書 □全二冊（檢定濟） 五〇 〇六 — 同
◉ 增訂代數學教科書 □全三冊（檢定濟） 四〇 〇六 — 同
◉ 女子算術教科書 □全三冊（檢定濟） 各 一、一〇 〇六 — 同
◉ 中學教科算術 □全二冊（檢定濟） 三〇 〇八 — 寺尾博士 吉田理學士
◉ 中學教科代數 □同一冊 六〇 〇八 — 同
◉ 中學教科平面幾何 □全二冊（檢定濟） 上下 七〇 〇八 — 同
◉ 中學教科立體幾何 同上 四五 〇六 — 同
◉ 中學教科平面三角 同 四〇 〇六 — 同
◉ 平面三角法教科書 □全一冊 四二 〇六 — 理學士 倉數福太郎
◉ 補習用幾何學 同 六〇 〇八 — 吉田理學士 藤野了祐
◉ 實業學校算術代數教科書 同 五〇 〇八 — 理學士 吉田好九郎
◉ 實業學校幾何教科書 同 七〇 〇六 — 同
◉ 師範教科立體幾何附算術 □全一冊 三〇 〇六 — 同
◉ 師範教科平面幾何及算術 同 八〇 〇六 — 同
◉ 師範教科代數及算術 同全三冊 各 五五 〇八 — 同
◉ 解析幾何學 ■全一冊 五百餘頁 印刷中 — 理學博士 中川銓吉

◉ 平面三角法 ■全一冊 印刷中 — 吉田好九郎 藤野了祐
◎ 新案教育的練習帖 全一冊 一、二〇 一〇 — 中等教育研究會
◉ 日清對譯算術教科書 ■全一冊 二〇 — 藤森溫和
◎ 言文一致新算術 ■全一冊 二〇 〇六 — 富山房編輯部
◎ 言文一致新代數 ■全一冊 二〇 〇六 — 同

法制・經濟・實業書類

◉ 經世論 ■全一冊 四二〇 一、二〇 〇八 — 伯爵 大隈重信
◉ 臺灣殖民政策 ■全一冊 五九〇 一、八〇 一三 — 法學士 持地六三郎
◉ 官僚政治 ■全一冊 三〇〇 一、二〇 〇八 — 男爵 後藤新平
◎ 政黨と代議制 □全一冊 六〇 〇六 — 同
◉ 實踐商業教科書 ■全二冊 — 上田貞次郎 佐藤仁壽
◎ 實踐簿記教科書 ■全三冊 — 佐藤仁壽
◉ 財政問題百話 □全一冊 三〇〇 一、〇〇 〇八 — 本多精一
◉ 商法綱要 全一冊 近刊 — 法學博士 志田鉀太郎
◉ 清國貨幣論 ■全一冊 一、一〇 〇八 — 清水孫秉
◎ 法學通論 ■全一冊 五〇〇 二、〇〇 二五 — 法學博士 岡田朝太郎
◉ 漢譯法學通論 ■全一冊 三、三〇 二〇 — 同
◎ 法制一夕話 ■全一冊 三五 〇六 — 法學士 桐生政次

◎ 言文一致法制大意 ■全一冊 二〇 〇六 — 富山房編輯部
◎ 言文一致經濟大意 ■全一冊 二〇 〇六 — 同
◉ 經濟教科書 ■全一冊（檢定濟） 五〇 〇六 — 法學士 持地六三郎
◎ 經濟一夕話 ■全一冊 三五 〇六 — 同
◉ ミル原著フラリン高等經濟原論 ■全一冊 六〇〇 品切 — 法學博士 天野爲之
◉ 經濟原論 ■全一冊 五〇〇 品切 — 同
◎ 言文一致商業一斑 ■全一冊 二〇 〇六 — 富山房編輯部
◎ 言文一致簿記學 ■全一冊 二〇 〇六 — 同
◎ 言文一致農業一斑 ■全一冊 二〇 〇六 — 同
◉ 鑛產工業材料 ■全一冊 八〇 〇八 — 理學博士 小藤文治郎
◉ 英國石炭及煉炭事情 ■全一冊 一、三〇 〇八 — 君塚淺治郎
◎ 實業新讀本 ■全一冊 各 三〇 〇六 — 法學博士 天野爲之
◎ 最新商業教科書 ■全三冊 各 二五 〇四 — 上田貞次郎 佐藤仁壽
◎ 最新簿記教科書 同 各 一七 〇四 — 佐藤仁壽

早稻田大學敎授 『新日本』主筆 永井柳太郎先生著

（最新刊）

社會問題と植民問題

社會問題と植民問題とは世界の問題にして亦實に我日本の大問題なり、而して亦著者の專攻事項たり。本書が單に學究たるに止らず政治家、官吏、實業家其他苟も世を思ひ國を憂ふるの士の机上必備のものたるべきは言を俟たず。

◎菊判總布美本 ◎紙數四百六十二頁全一冊 ◎定價金壹圓五拾錢 ◎送料金拾二錢

東京●澁谷▲青山南町七ノ七 振替口座東京貳貳六二〇番 新興社
▲大賣捌所 東京堂・丸善・東海堂・北隆館・

諒闇中
年賀缺
禮仕候

大正二年元旦

伯爵 大隈重信

『新日本』編輯局
永井柳太郎
相馬由也
楠山正雄
安本重治
樋口秀雄

『學生』主筆
大町芳衛

『學生』編輯局
西村眞次
板橋卓一

編輯局
長谷川福平
飯島廣三郎
石原和三郎
原田幹
渡邊芳之助
山岸直次
酒井眞
杉谷虎藏

富山房販賣部
富山房出版部

合資會社富山房社長
坂本嘉治馬